

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(45)

竜郷—新奄美空港線の改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

下山田Ⅱ遺跡
和野トフル墓

1988年3月

鹿児島県教育委員会





序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が、県道竜郷・新奄美空港線改良工事に伴って昭和59年度実施した下山田Ⅱ遺跡・和野トフル墓の発掘調査の記録です。

下山田Ⅱ遺跡は、砂丘地内に広がった縄文時代後期を中心とした遺跡で、多数の貝製・骨角製の垂飾品等の他、石器・土器が出土しました。

また、和野トフル墓は、南西諸島特有の風葬墓で、納骨した壺・甕が整然と配列されていました。

本書は、南西諸島の先史時代や墓制の解明に貴重な手がかりを提供するものと考えます。地域の歴史研究や文化財の保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった県土木部道路建設課・大島支庁・笠利町教育委員会並びに地元の方々に心から感謝いたします。

昭和63年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 濱 里 忠 宣

例 言

1. 本書は、昭和59年度に実施した竜郷—新奄美空港線の改良工事に伴う「下山田Ⅱ遺跡・和野トフル墓」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、鹿児島県土木部の依頼を受けて鹿児島県教育委員会が行った。
3. 発掘調査にあたり、

鹿児島県文化財保護審議会委員	河口 貞徳
鹿児島大学歯学部教授	小片 丘彦
熊本大学文学部教授	白木原和美
日本民俗学会評議員	小野 重朗
鹿児島県立徳之島高等学校教諭	成尾 英仁

の5氏に指導助言を受けた。
4. 和野トフル墓の調査及び所見に関しては、小片丘彦氏に依頼し、その所見は本報告書にまとめられている。
5. 下山田Ⅱ遺跡の地層については、成尾英仁氏に依頼した。
6. 報告書作成のための整理作業の分担は下記の通りである。

実測・復元・拓影	長野真一，山畑泰子，後堂悦子，川畑恵子， 永野香代子
トレース	長野，山畑
写真撮影	長野，鶴田静彦，山畑，旭慶男，富田逸郎

なお、編集は長野・山畑が担当した。
7. 本書の執筆分担は下記の通りである。

第1章	山畑泰子
第2章・第3章・第6章	長野真一
第2章第4節	成尾英仁
第4章・第5章	小片丘彦
8. 遺物の番号取り扱いについては、土器，石器，貝製品，骨製品ごとに設けた。
9. 本書で用いたレベル数値は、すべて絶対海拔高である。
10. 出土遺物の管理・保管は、県教育庁文化課重富収蔵庫で一括して行っている。

本文目次

序文	
例言	
第1章 調査の経過	10
第1節 調査に至るまでの経過	10
第2節 調査の組織	10
第3節 調査の経過	12
第2章 遺跡の概要	
第1節 遺跡の位置と環境	16
第2節 遺跡の概要	19
第3節 層序	22
第4節 下山田Ⅱ遺跡の地層(成尾英仁)	24
第3章 下山田Ⅱ遺跡の調査	
第1節 第1地点	29
1) 土層	29
2) 遺物分布状況	29
3) 出土遺物	29
第2節 第2地点	32
1) 遺物分布状況	32
2) 遺構	33
3) 出土遺物—土器	37
第3節 第3地点	43
1) 遺構	43
2) 出土遺物—土器	52
3) 第3地点の遺物分布と接合関係	115
4) 出土遺物—石器	152
5) 出土遺物—貝製品・骨製品	172
6) 出土遺物—螺蓋製貝斧	188
第4章 鹿児島県奄美大島和野トフル墓出土の人骨(小片丘彦)	261
第5章 鹿児島県奄美大島下山田Ⅱ遺跡出土の縄文時代人骨(小片丘彦)	320
第6章 まとめ	329

挿 図 目 次

	ページ		
第1図	奄美大島の位置図	15	
第2図	下山田Ⅱ遺跡と周辺遺跡	17	
第3図	遺跡の概要図	20	
第4図	下山田Ⅱ遺跡のグリッド 配置図	20	
第5図	和野トフル墓の位置図	21	
第6図	A-25区北壁土層断面図	22	
第7図	下山田Ⅱ遺跡土層図	23	
第8図	笠利半島の地形区分図	24	
第9図	段丘断面図	25	
第10図	砂丘概念図	25	
第11図	笠利半島地質図	26	
第12図	遺跡の砂丘堆積物	27	
第13図	遺跡付近の砂丘	28	
第14図	土器(第1地点)-1	30	
第15図	第1地点出土遺物分布図	31	
第16図	土器(第1地点)-2	32	
第17図	石器(第1地点)-1	33	
第18図	第2地点出土遺物分布図	34	
第19図	第2地点遺構分布図	35	
第20図	第2地点1~6号集石遺構	36	
第21図	土器(第2地点)-1	38	
第22図	土器(第2地点)-2	39	
第23図	土器(第2地点)-3	40	
第24図	土器(第2地点)-4	41	
第25図	土器(第2地点)-5	42	
第26図	第3地点A-26~29区 遺物散布状況	44	
第27図	第3地点集石遺構配置図	45	
第28図	第3地点1・2号集石遺構	46	
第29図	第3地点3・4・5・6号 集石遺構	47	
第30図	第3地点7・8・9・10・11・ 13・14号集石遺構	48	
第31図	第3地点12号集石遺構	49	
第32図	第3地点6・10・14号集石 遺構と共伴遺物	50	
第33図	土器(第3地点)-1	53	
第34図	土器(第3地点)-2	54	
第35図	土器(第3地点)-3	55	
第36図	土器(第3地点)-4	56	
第37図	土器(第3地点)-5	57	
第38図	土器(第3地点)-6	58	
第39図	土器(第3地点)-7	59	
第40図	土器(第3地点)-8	61	
第41図	土器(第3地点)-9	62	
第42図	土器(第3地点)-10	63	
第43図	土器(第3地点)-11	64	
第44図	土器(第3地点)-12	65	
第45図	土器(第3地点)-13	66	
第46図	土器(第3地点)-14	67	
第47図	土器(第3地点)-15	68	
第48図	土器(第3地点)-16	69	
第49図	土器(第3地点)-17	70	
第50図	土器(第3地点)-18	71	
第51図	土器(第3地点)-19	72	
第52図	土器(第3地点)-20	73	
第53図	土器(第3地点)-21	74	
第54図	土器(第3地点)-22	76	
第55図	土器(第3地点)-23	77	
第56図	土器(第3地点)-24	78	
第57図	土器(第3地点)-25	79	
第58図	土器(第3地点)-26	80	
第59図	土器(第3地点)-27	81	
第60図	土器(第3地点)-28	82	
第61図	土器(第3地点)-29	83	
第62図	土器(第3地点)-30	85	
第63図	土器(第3地点)-31	86	

第64図	土器(第3地点)-32	87	第95図	第3地点出土遺物接合図	120
第65図	土器(第3地点)-33	88	第96図	石器-1(第1地点)	153
第66図	土器(第3地点)-34	89	第97図	石器-2(第1地点)	154
第67図	土器(第3地点)-35	90	第98図	石器-3(第1地点)	155
第68図	土器(第3地点)-36	91	第99図	石器-4(第3地点)	156
第69図	土器(第3地点)-37	92	第100図	石器-5(第3地点)	157
第70図	土器(第3地点)-38	93	第101図	石器-6(第3地点)	158
第71図	土器(第3地点)-39	94	第102図	石器-7(第3地点)	159
第72図	土器(第3地点)-40	95	第103図	石器-8(第3地点)	160
第73図	土器(第3地点)-41	96	第104図	石器-9(第3地点)	161
第74図	土器(第3地点)-42	97	第105図	石器-10(第3地点)	162
第75図	土器(第3地点)-43	98	第106図	石器-11(第3地点)	163
第76図	土器(第3地点)-44	99	第107図	石器-12(第3地点)	164
第77図	土器(第3地点)-45	100	第108図	石器-13(第2・3地点)	165
第78図	土器(第3地点)-46	101	第109図	石器-14(第3地点)	166
第79図	土器(第3地点)-47	102	第110図	石器-15(第3地点)	167
第80図	土器(第3地点)-48	103	第111図	貝・骨製品-1(第3地点)	171
第81図	土器(第3地点)-49	104	第112図	貝・骨製品-2(第3地点)	172
第82図	土器(第3地点)-50	105	第113図	貝・骨製品-3(第3地点)	173
第83図	土器(第3地点)-51	107	第114図	貝・骨製品-4(第3地点)	174
第84図	土器(第3地点)-52	108	第115図	貝・骨製品-5(第3地点)	175
第85図	土器(第3地点)-53	109	第116図	貝・骨製品-6(第3地点)	176
第86図	土器(第3地点)-54	110	第117図	貝・骨製品-7(第3地点)	177
第87図	土器(第3地点)-55	111	第118図	貝・骨製品-8(第3地点)	178
第88図	土器(第3地点)-56	112	第119図	貝・骨製品-9(第3地点)	179
第89図	土器(第3地点)-57	113	第120図	貝・骨製品-10(第3地点)	180
第90図	土器(第3地点)-58	114	第121図	貝・骨製品-11(第3地点)	181
第91図	第3地点出土遺物分布図 及び接合図(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類土器)	116	第122図	貝・骨製品-12(第3地点)	182
第92図	第3地点出土遺物分布図 及び接合図(Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ類土器)	117	第123図	螺蓋製貝斧-1(第2地点)	188
第93図	第3地点出土遺物分布図 及び接合図(Ⅸ・Ⅹ類土器)	118	第124図	螺蓋製貝斧-2(第3地点)	189
第94図	第3地点出土遺物分布図及び 接合図(Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ土器)	119	第125図	螺蓋製貝斧-3(第3地点)	190
			第126図	螺蓋製貝斧-4(第3地点)	191
			第127図	螺蓋製貝斧-5(第3地点)	192
			第128図	螺蓋製貝斧-6(第3地点)	193
			第129図	螺蓋製貝斧-7(第3地点)	194

表 目 次

ページ

表 1	下山田Ⅱ遺跡と周辺遺跡地名表	18
表 2	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表- 1	121
表 3	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表- 2	122
表 4	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表- 3	123
表 5	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表- 4	124
表 6	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表- 5	125
表 7	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表- 6	126
表 8	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表- 7	127
表 9	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表- 8	128
表10	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表- 9	129
表11	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-10	130
表12	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-11	131
表13	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-12	132
表14	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-13	133
表15	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-14	134
表16	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-15	135
表17	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-16	136
表18	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-17	137
表19	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-18	138
表20	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-19	139
表21	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-20	140
表22	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-21	141
表23	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-22	142
表34	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-23	143
表25	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-24	144
表26	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-25	145
表27	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-26	146
表28	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-27	147
表29	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-28	148
表30	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-29	149
表31	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-30	150
表32	下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-31	151
表33	下山田Ⅱ遺跡出土石器一覧表-1(20~24区)	152

表34	下山田Ⅱ遺跡出土石器一覧表-2(26~28区)	155
表35	下山田Ⅱ遺跡出土石器一覧表-3(29~33区)	167
表36	下山田Ⅱ遺跡出土石器一覧表-4(29~33区)	168
表37	下山田Ⅱ遺跡出土石器一覧表-5(29~33区)	169
表38	下山田Ⅱ遺跡出土石器一覧表-6(29~33区)	170
表39	下山田Ⅱ遺跡出土貝製品・骨製品観察表-1	183
表40	下山田Ⅱ遺跡出土貝製品・骨製品観察表-2	184
表41	下山田Ⅱ遺跡出土貝製品・骨製品観察表-3	185
表42	下山田Ⅱ遺跡出土貝製品・骨製品観察表-4	186
表43	下山田Ⅱ遺跡出土貝製品・骨製品観察表-5	187
表44	下山田Ⅱ遺跡出土貝製品・骨製品観察表-6	188
表45	下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧一覧表-1(20~24区)	195
表46	下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧一覧表-2(26~28区)	195
表47	下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧一覧表-3(29~33区)	195
表48	下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧一覧表-4(29~33区)	196
表49	下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧一覧表-5(29~33区)	196
表50	下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧一覧表-6(29~33区)	197
表51	下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧一覧表-7(29~33区)	197
表52	下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧一覧表-8(29~33区)	198
表53	下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧一覧表-9(採集品)	198

図 版 目 次

図版1	アマンデーの丘(高岳)からの遠景第1地点8区~11区調査風景	200
図版2	第1地点(南側)旧海岸線 第3地点26区~29区(北側より) 第3地点26区~29区(南側より)	201
図版3	第3地点31区南壁全体図・31区南壁部分図 第3地点25区北壁部分図	202
図版4	第3地点遺構出土状況(西側より) 第3地点遺構・遺物出土状況(東側より)	203

図版5	第1地点遺物出土状況	
	第3地点遺物出土状況	
	第3地点7号集石遺構(上面)・(側面)	
	第3地点12号集石遺構(検出時)	
	第3地点12号集石遺構(最終面)	
	第3地点3号集石遺構	
	第3地点3号集石遺構(最終面)	204
図版6	第3地点6号・7号集石遺構状況	
	第3地点貝溜り出土状況	205
図版7	遺物出土状況(貝溜り・貝殻・土器片・獣骨・鯨骨・猪骨)	
	西壁遺物出土状況	206
図版8	貝溜り出土状況	207
図版9	第3地点7号集石遺構(上面より)	
	第3地点7号集石遺構(東よりの側面)	208
図版10	第3地点14号集石遺構の共伴土器	
	第3地点14号集石遺構・土器取り上げ後	209
図版11	遺物出土状況(土器No.147・145・677・234・249・304・329)	210
図版12	遺物出土状況(土器No.645・571・429・488・108・514・732・345・534)	211
図版13	第1地点出土遺物	212
図版14	第1・2地点出土遺物(Ⅲ類土器)	213
図版15	第2地点出土遺物(Ⅳ類土器)	214
図版16	第2地点出土遺物(Ⅳ類土器)	215
図版17	第2地点出土遺物(XV・XVI・XVII類土器)	216
図版18	第2・3地点出土遺物(Ⅸ・Ⅹ・ⅩⅧ類土器)	217
図版19	第3地点出土遺物(Ⅸ・Ⅹ類土器)	218
図版20	第3地点出土遺物(Ⅲ・Ⅳ類土器)	219
図版21	第3地点出土遺物(Ⅳ類土器)	220
図版22	第3地点出土遺物(Ⅳ類土器)	221
図版23	第3地点出土遺物(Ⅳ・Ⅴ類土器)	222
図版24	第3地点出土遺物(Ⅳ類土器)	223
図版25	第3地点出土遺物(Ⅳ類土器)	224
図版26	第3地点出土遺物(Ⅵ・Ⅶ類土器)	225
図版27	第3地点出土遺物(Ⅷ・Ⅹ類土器)	226
図版28	第3地点出土遺物(Ⅷ類土器)	227
図版29	第3地点出土遺物(Ⅷ類土器)	228

図版30	第3地点出土遺物(Ⅷ類土器)	229
図版31	第3地点出土遺物(Ⅷ類土器)	230
図版32	第3地点出土遺物(Ⅷ・Ⅸ類土器)	231
図版33	第3地点出土遺物(Ⅸ類土器)	232
図版34	第3地点出土遺物(Ⅸ類土器)	233
図版35	第3地点出土遺物(Ⅸ類土器)	234
図版36	第3地点出土遺物(Ⅸ・Ⅹ類土器)	235
図版37	第3地点出土遺物(Ⅹ・Ⅺ類土器)	236
図版38	第3地点出土遺物(Ⅺ類土器)	237
図版39	第3地点出土遺物(Ⅺ類土器)	238
図版40	第3地点出土遺物(Ⅺ類土器)	239
図版41	第3地点出土遺物(Ⅺ類土器)	240
図版42	第3地点出土遺物(Ⅺ類土器)	241
図版43	第3地点出土遺物(Ⅺ・ⅩⅣ類土器)	242
図版44	第3地点出土遺物(Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ・ⅩⅣ類土器)	243
図版45	第3地点出土遺物(Ⅸ・Ⅺ類土器)	244
図版46	第3地点出土遺物(Ⅸ・Ⅷ類土器)	245
図版47	第3地点出土遺物	246
図版48	第3地点出土遺物(Ⅱ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・ⅩⅨ類土器)	247
図版49	遺物出土状況(貝・骨製品No.56・10・40・9・55・104・16・クモガイ)	248
図版50	遺物出土状況(螺貝製貝斧, 貝・骨製品No.57・4・7・72・130・82・89)	249
図版51	遺物出土状況(貝・骨製品No.66・95・128・132・獣骨・下顎骨)	250
図版52	下山田Ⅱ遺跡出土貝製品	251
図版53	下山田Ⅱ遺跡出土貝製品	252
図版54	下山田Ⅱ遺跡出土貝製品・利器	253
図版55	下山田Ⅱ遺跡出土骨製品	254
図版56	下山田Ⅱ遺跡出土骨製品・貝製品	255
図版57	下山田Ⅱ遺跡出土石器	256
図版58	下山田Ⅱ遺跡調査風景	257
図版59	出土遺物(石器No.106~109)	
	遺物出土状況(石器)	
	下山田Ⅱ遺跡調査後の風景	
	下山田Ⅱ遺跡作業員一同	258
図版60	和野トフル墓出土品	259
図版61	和野トフル墓出土品	260

第 1 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

鹿児島県は昭和63年度の完成を目ざし、新奄美空港の建設工事を実施している。建設予定地は、大島郡笠利町万屋から和野地区間の砂丘地及び東海岸である。

また、この空港の開設に伴い、竜郷—新奄美空港線の改良工事も計画された。それに基づき遺跡の確認調査をした結果、これらの建設地内に本遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）が含まれることが明らかとなった。県土木部と県教育委員会はその取り扱いについての協議を重ね、県土木部からの依頼により、県教育委員会文化課が全面発掘調査を行い、記録による保存を図ることとなり、今回の調査が実施された。

第 2 節 調査の組織

◇発掘調査（昭和59年度）

調査主体者	鹿児島県教育委員会教育長	山田克穂
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課 課長	桑原一廣
	〃 課長補佐	坂口肇
	〃 主幹	中村文夫
調査企画	〃 主任文化財研究員	向山勝貞
調査事務	〃 主幹兼管理係長	寺園晃
	〃 主査	濱松巖
	〃 主事	田中孝子
調査担当者	〃 主事	長野真一
	〃 文化財調査員	鶴田静彦
調査指導助言者	鹿児島県文化財保護審議会委員	河口貞徳(考古学)
	熊本大学文学部教授	白木原和美(考古学)
	鹿児島大学歯学部教授	小片丘彦(形質人類学)
	日本民俗学会評議員	小野重朗(民俗学)
	鹿児島県立徳之島高等学校教諭	成尾英仁(地質学)

◇報告書作成（昭和62年度）

調査主体者	鹿児島県教育委員会教育長	濱里忠宣
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課 課長	吉井浩一
	〃 課長補佐	川畑栄造
	〃 主幹	森田 齊
調査企画	〃 主任文化財研究員	
	兼埋蔵文化財係長	立園多賀生
調査事務	〃 企画助成係長	濱松 巖
	〃 主査	京田秀充
	〃 主事	川畑由紀子
調査担当者	〃 主査	長野真一
	〃 文化財調査員	山畑泰子
調査指導助言者	鹿児島県文化財保護審議会委員	河口貞徳(考古学)
	鹿児島大学歯学部教授	小片丘彦(形質人類学)

その他、鹿児島県大島支庁土木課、鹿児島県大島教育事務所、笠利町役場、笠利町教育委員会、笠利町立歴史民俗資料館、沖縄県教育庁文化課、有限会社山下建設の協力を得た。

〈発掘作業〉川畑忠美、東田輝美、泉忠洋、川畑チズ、川畑オサエ、川畑キミエ、川畑ヨシ子、坂下代千子、泉カズエ、東田ミネ子、清タエ子、山下ミナエ、当原カズエ、中ウエミ、重信チズ子、山下あや子、浜田ふじ子、川口ミカ、川畑テツ、元多あい子、川畑えい子

〈整理作業〉後堂悦子、川畑恵子、永野香代子、高瀬孝子、白井綾子

なお、報告書作成にあたり、多くの方々に指導・助言をいただいた。

河口貞徳(鹿児島県文化財保護審議会委員)・小片丘彦(鹿児島大学歯学部教授)

高宮廣衛(沖縄国際大学長)・安里嗣淳・岸本義彦・島袋 洋(沖縄県教育庁文化課)

中山清美(笠利町歴史民俗資料館)・中村 愿(沖縄県北谷町教育委員会)

雨宮瑞生(筑波大学歴史・人文学系大学院博士過程)

池田栄史(琉球大学文学部助手)・知念 勇(沖縄県立博物館)

島 弘(那覇市教育委員会)

第3節 調査の経過

当遺跡の現地発掘調査は、昭和59年11月1日から昭和60年3月26日まで行った。報告書作成は、昭和62年度に行い、その期間は昭和62年10月1日から昭和63年3月31日までである。なお現地調査の経過については、日誌より抜粋して示すこととする。

《日誌抄》

昭和59年

11月1日(木)～11月2日(金)

現地着。雑木の伐採、撤去。重機による表層の取去。試掘トレンチの調査開始。支庁土木課、町教委打合せ。

A地点表土削り取り。曾畑式土器1点出土。事務所、休憩用テント設営。

11月5日(月)～11月9日(金)

A地点表土削り取り。層位の観察により、文化層は3層(黒色腐植土)。4層(褐色腐植土)で、特に4層がその中心と思われる。また、4層中には角礫(安山岩)が多く集中している状況も認められる。主な出土品は、磨製石斧、チャート材の剥片石器。A地点南端部の低地の草刈り、試掘調査の準備。A地点検出作業。形式不明の破片1点出土。

今週より鶴田加わる。7日 電話設営。8日 支庁土木課と排土について話し合う。持ち出しは困難との結論。当真嗣一氏(沖縄県文化課主任専門員)来跡。

11月12日(月)～11月17日(土)

A地点第2文化層面の検出。低地のトレンチ調査、深掘り、検出。大型のシャコ、夜光貝が出土。夜光貝製貝スプーン1点有り。

14日 岸本義彦氏(沖縄県文化課)来跡。大島新聞記者取材。17日 安全対策のため、ガードレール50m設置。

11月19日(月)～11月22日(木)

低地部の拡張(表土の剝離、深掘りトレンチの掘り下げ)。汀線部の写真撮影。記録終了部の埋め戻し。低地部第2層面の整理(近世陶磁器片が少量出土)。

和野トフル墓入口の確認。天目茶碗、染付の徳利、皿出土。

11月26日(月)～12月1日(土)

低地部の深掘り。

トフル墓上部の草、根の除去作業。

12月3日(月)～12月8日(土)

低地部の深掘り。遺物の集中化は確認できず。A-20～24区の検出作業。

トフル墓、6日より鹿大歯学部 小片教授らによる記録調査開始。墓内の人骨(16～20体) 納骨壺・甕(11～14個)等の取り上げ。

6日 小野重朗氏(民俗学)指導のため来跡。

12月10日(月)～12月15日(土)

A-20～24区検出作業。第2層(黒色砂層)より面縄前庭式土器出土。A-20, 21区よりそれぞれ集石確認。A-20, 21, 23～25区の掘り下げ。類須恵器, 内黒土師器, 青磁片, 染付片等が混在。A-25～28区下層の白砂層より嘉徳系土器(I A式)出土。貝溜りの様相も認められる。

13日 松元助教授(国立民俗学博物館)来跡。14～15日 河口貞徳氏指導のため来跡。

12月17日(月)～12月21日(金)

トレンチ設定(24～33区・A, B, Z区)及び表土剥ぎ。26～29区は, 砂採取により破壊を受け, 上位の文化層は残存せず。下位に嘉徳式土器が一部残存。

本年これまで。

昭和60年

1月7日(月)～1月12日(土)

A・B-20～24区 大雨による流入砂の取り上げ。その後, 25区までの第1文化層(黒褐色砂層)検出。全体的に面縄前庭式土器が出土している。A-21より磨製石斧の半欠品1点出土(全磨製)。小型具, 壊された貝殻多数散布。集石周辺の仕上げ, 写真撮影。A・B・Z-29, 30区最上面の検出。

1月14日(月)～1月19日(土)

A・B・Z-29, 30区 第1文化層の検出。A地点より面縄前庭式文化層の検出。特殊な文様をもつ土器片あり。形式は不明。イソハマグリを中心とした貝溜り2ヶ所あり。

1月21日(月)～1月26日(土)

A・B・Z-23～25区, 29～33区の検出続行。A-23, 24区より黒曜石石片(3点)出土。A・Z-29～33区より集石遺構5基検出。嘉徳式土器伴出。夜光貝製の有孔貝製品(垂飾品)も出土。A-30区に貝溜り。A-21, 22区の集石, 貝溜り実測, 取り上げ。A-26, 27区出土品の実測。

1月28日(月)～2月2日(土)

A-20区 集石部検出, 実測。A-22区 北側壁面掘り下げ, 検出。A-23～25区 掘り下げ, 第1文化層の検出。A-26～28区 遺物取り上げ, レベル投入, 第2文化層の検出。A・Z-29～33区 掘り下げ, 検出, 実測。Z-21, 22区 表土剥ぎ。A-21～23区 検出
31日～2日 白木原教授(熊大考古学教室)指導のため来跡。

2月4日(月)～2月9日(土)

A-23～25区 第1文化層の検出。A・Z-29～33区 集石等の検出及び実測。遺物取り上げ後, 下位包含層の検出。主な出土品は, 嘉徳式土器, 水字貝の破片, 夜光貝製の垂飾(1点), 砂岩製の平扁礫(台石?)。

4日 向山, 寺園両係長来跡。8日 成尾教諭(地質学)指導のため来跡。

2月12日(火)～2月16日(土)

A・Z・Y-29, 30区の深掘り継続。

雨天の日多し。室内で記録図面の整理等。

2月18日(月)～2月23日(土)

A・Z・Y-29, 30区の深掘り続行。

今週も雨のため度々中断。

2月25日(月)～3月2日(土)

A・Z・Y-29, 30区の深掘り続行。硬砂層(クール)に掘り込まれた遺構出土。約1.0mの円形で、中にサングが積まれている。実測開始。

3月4日(月)～3月9日(土)

A・Z・Y-31, 32, 33区 深掘り。第4層(中間灰層)の検出。魚骨の上顎部で作った垂飾、動物骨に刻みを施した製品(目的不明)、松山系土器、水字貝製利器(釣針?)、骨針、骨(人骨?)等出土。A-20, 32区 集石実測。A-25 南側断面実測。

8日 日本歴史の基礎研究団一行来跡。

3月11日(月)～3月16日(土)

A・Z・Y-31, 32, 33区 検出続行。本土系と思われる松山式土器、タケノコ貝製垂飾、面縄東洞式(?)土器2個体分、獣面把手土器等出土。A-26, 27, 28区 第2回目の遺物取り上げ。その後、検出続行。最終面に近いと思われ、文化層は切断される。特殊土器出土。A-28区より集石遺構出土 実測。

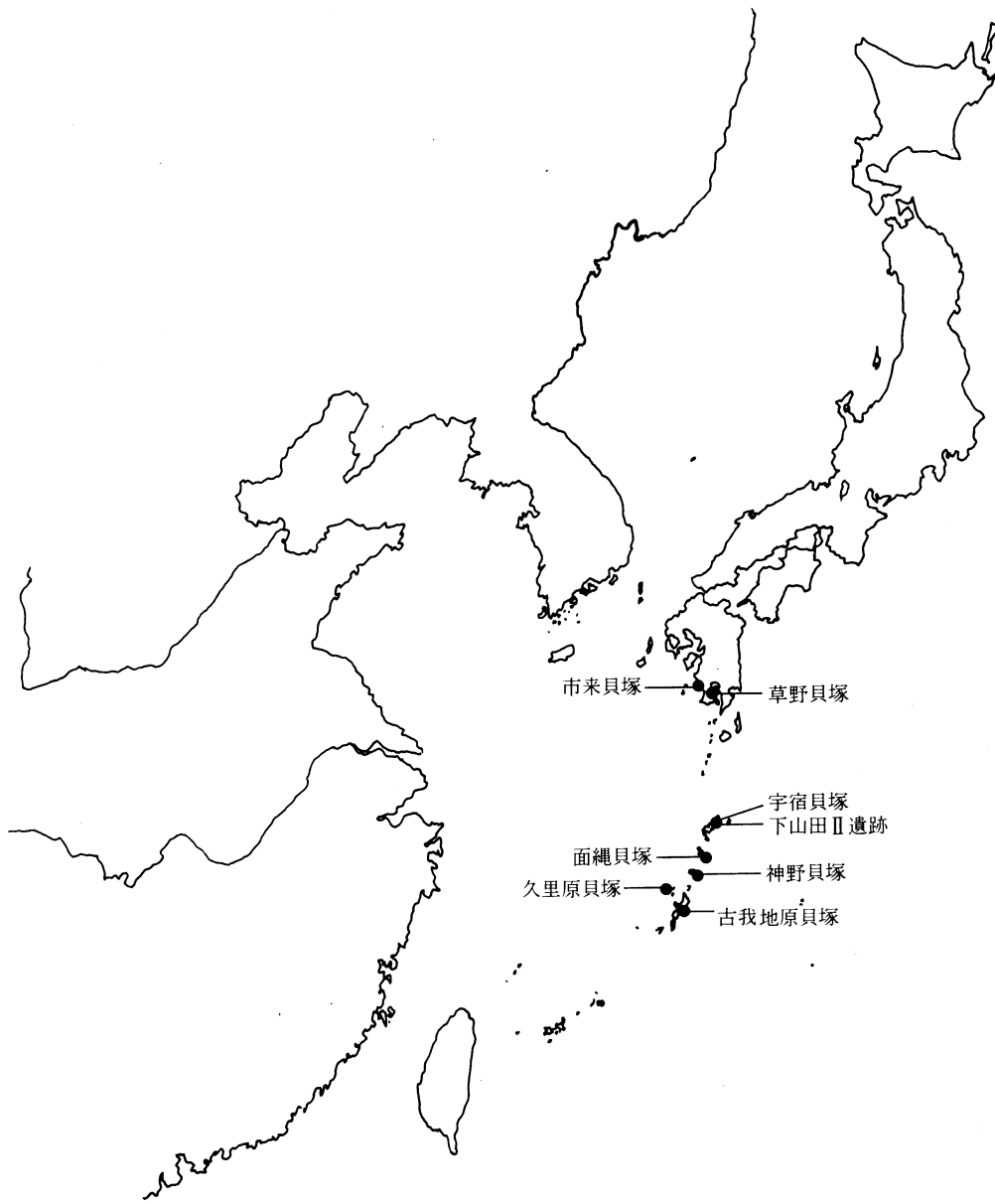
11日 上村教授(鹿大考古学)来跡。14～15日 知念勇氏(沖縄県立博物館)来跡。

3月18日(月)～3月23日(土)

A-31, 32区 下位砂層(白砂)検出。面縄東洞式土器1個体出土。その下位より人骨(下顎骨)出土。A-23区 セクションベルトの掘り下げ。本土よりの移入と思われる弥生後期相当の土器底部出土。30区北側壁面検出。第4層より嘉徳系土器出土。第5・6層より加熱された貝、骨が多数出土。

3月24日(日)～3月26日(火)

30区北側壁面第7～10層の検出。7～8層は主として嘉徳系土器、8層の下位に面縄東洞類似土器出土。A-20, 21区面縄前庭式土器出土地域の検出。水字貝製利器2点出土。出土品の箱詰め、埋め戻し、事務所の整理等。26日 現地発掘調査、本日午前中をもって全て終了。



第1図 奄美大島の位置図

第 2 章 遺跡の概要

第 1 節 遺跡の位置と環境

下山田Ⅱ遺跡は、大島郡笠利町万屋字下山田に所在する。また、和野トフル墓は、同じく笠利町和野長浜金久に所在する。

本遺跡のある笠利町は、奄美大島の最北端に位置し、南北約15km、東西約 4.5kmの細長い半島にある。この半島の中央部には、高岳・大刈山・淀山等が南北に連なり、この中の、最高峰高岳は「アマンデーの丘」と呼ばれ、天孫降臨の地として伝承されている。なお、このアマンデーの丘は、笠利町を東西に分断する形で連なっている。その結果、本遺跡のある東海岸一帯は、冬期の冷い季節風がさえぎられるために、直接吹きこむことがなくなり、生活上格好の場として生活の舞台となってきた。そのため、この東海岸一帯は、古くより多くの先史・古代遺跡の存在することが知られていた。

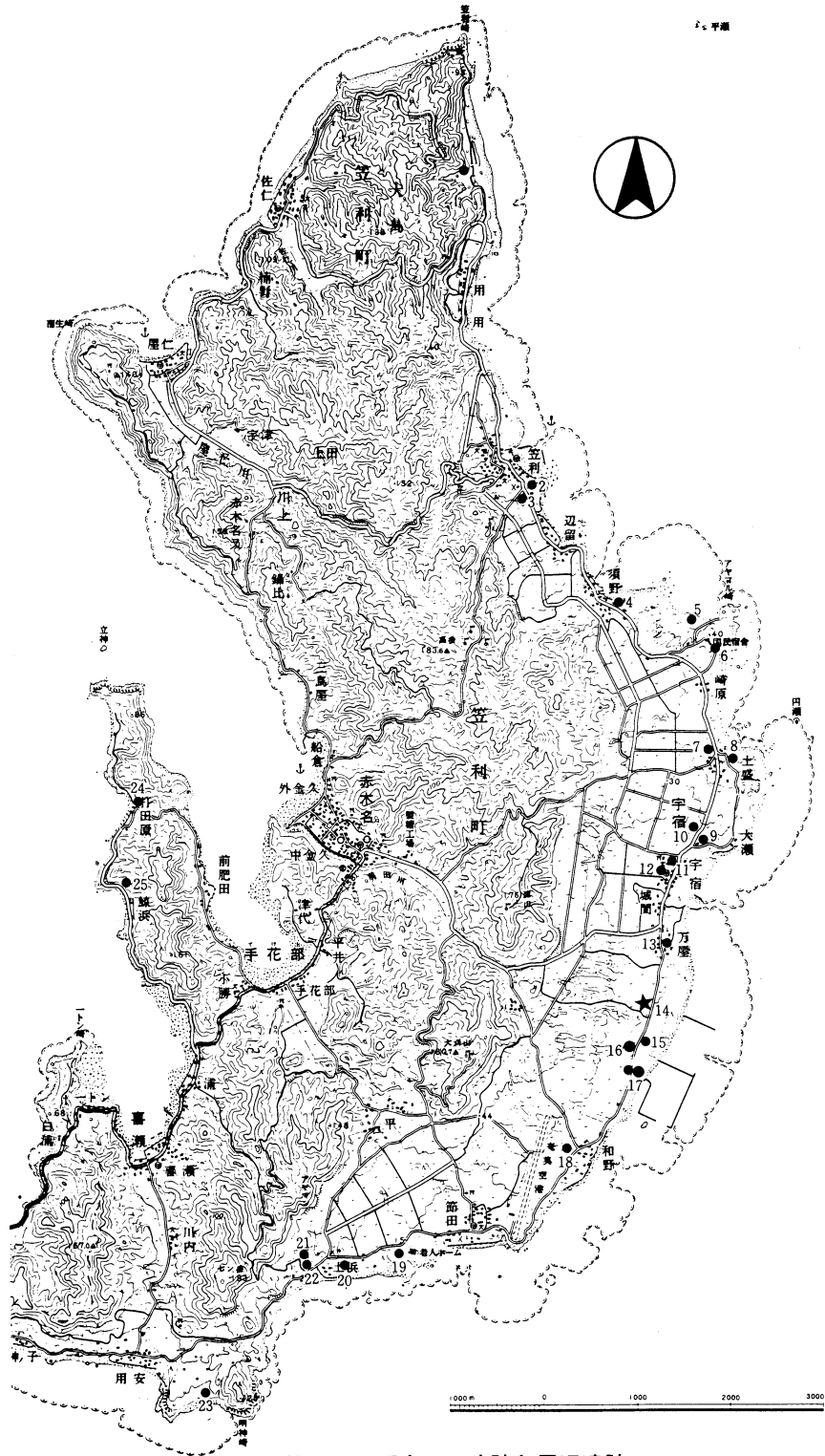
また、奄美大島を中心とする「南島」は、黒潮軸流と平行して連なり、そのため、「道の島」とも呼ばれ、日本文化の源流及び伝播を知るうえで貴重な位置にあり、多くの研究者が研究に取りくんできている。

本遺跡の所在するこの一帯は洪積台地の裾部に形成された旧期砂丘（後氷期海進に形成）と、旧期砂丘と接触しながら海岸へと伸びる新期砂丘が見られる。これまでの調査の結果、旧期砂丘上には、縄文時代前期から弥生時代前半の遺物が包含される遺跡の多いことが知られてきている。また、旧期砂丘と新期砂丘の接触部分では、弥生時代中期から弥生時代後期の遺跡が存在していることが明らかとなり、さらに、最も海岸線に近づく新期砂丘の上には、その後の古代の遺跡が数多く包含されている。

また、最近では、旧期砂丘の下位に堆積している火山灰層（アカホヤ火山灰層）の下に、石器及び剥片の存在することが明らかとなり、南島文化が少なくとも縄文時代早期にまでさかのぼれることが明らかとなりつつある。

南島先史学の開拓者であった、三宅宗悦は、昭和8年に南島の各島々を探索し、「宇宿貝塚」を訪ずれ、試掘調査を行ない、その結果は、「南島の先史時代」というタイトルで人類学先史講座に、その成果を発表し、貝塚や獣骨・魚骨等の存在することを記している。その後、昭和29年に結成された「奄美大島学術調査団」に加わった河口貞徳により、宇宿貝塚の本格調査が行われ、南島先史時代研究の幕が切っておとされた。この発掘調査で、南島先史時代研究の骨格となる「宇宿下層式土器」、「宇宿上層式土器」が確認されている。

その翌年の昭和30年には、九学会連合奄美大島共同調査委員会が再度調査を行ない、石組住居社の発見、さらに、宇宿下層式土器と本土からの移入と思われる市来式土器の共伴が確認され、ますます研究が大きく進み、今日に引き継がれている。



第2図 下山田Ⅱ遺跡と周辺遺跡

表1 下山田Ⅱ遺跡と周辺遺跡地名表

No	遺跡名	所在地	時期	出土遺物	文献
1	用長浜遺跡	笠利町用字長浜	古墳	兼久式土器・石器・貝殻	②
2	辺留城遺跡	〃 辺留城	中世	青磁・類須恵器	②
3	辺留窪遺跡	〃 辺留窪	古墳～	兼久式土器・青磁・石器	②⑫
4	コピロ遺跡	〃 須野コピロ	近世	埋葬人骨	②⑫
5	あやまる第2貝塚	〃 〃 字大道	縄文～古墳	面縄前庭式・弥生土器・土師器・兼久式土器	③
6	あやまる第1貝塚	〃 〃 須原	古墳～	類須恵器	①
7	喜子川遺跡	〃 喜子川	縄文	爪形文土器	⑳
8	土盛遺跡	〃 土盛	古墳～	兼久式土器・骨角器	②
9	宇宿港遺跡	〃 宇宿字港	弥生～	弥生土器・貝殻・人骨	④
10	宇宿貝塚	〃 〃 大道	縄文～弥生	住居跡・人骨・市来式土器・面縄東洞式土器・石器他	①⑤⑥⑦⑧
11	宇宿高又遺跡	〃 〃 高又	縄文	条痕文土器・管畑式土器・面縄前庭式土器 他	⑨
12	宇宿小学校遺跡	〃 〃	縄文	宇宿下層式土器	⑦
13	万屋遺跡	〃 万屋	古墳～	兼久式土器・貝殻	②
14	下山田Ⅱ遺跡	〃 〃 字下山田	縄文	面縄前庭式土器・嘉徳式土器・石器・貝製品・骨角器	⑩ 本文
15	泉川遺跡	〃 〃 長浜	奈良・平安	兼久式土器・貝殻	⑪
16	ケジ遺跡	〃 〃 ケジ	縄文	管畑系土器・面縄前庭式土器 他	⑫⑬
17	長浜金久遺跡群	〃 和野字長浜	縄文～平安	嘉徳系土器・兼久式土器・住居址・貝製品・骨角器	⑭⑮⑯
18	ナピロ川遺跡	〃 〃 ナピロ川	古墳～	兼久式土器・石器	⑦
19	立神遺跡	〃 節田	古墳～	兼久式土器・石器・貝殻・人骨	②
20	土浜遺跡	〃 土浜	古墳～	兼久式土器・石器・貝殻・人骨	⑳
21	ヤーヤ洞穴	〃 〃	縄文～弥生	爪形文土器・弥生土器・貝符・石器・貝輪	⑤⑰
22	土浜ヤーヤ遺跡	〃 〃	旧石器・縄文	石器（磨製石器・石斧・石鏃）	⑱
23	明神崎遺跡	〃 用安字入瀬	弥生	弥生系土器・貝殻	②
24	サウチ遺跡	〃 喜瀬字サウチ	縄文・弥生	住居跡・人骨・面縄西洞式土器・弥生土器・貝符	②
25	鯨浜遺跡	〃 〃 鯨浜	古墳～	類須恵器	①⑲

(地名表作成文献)

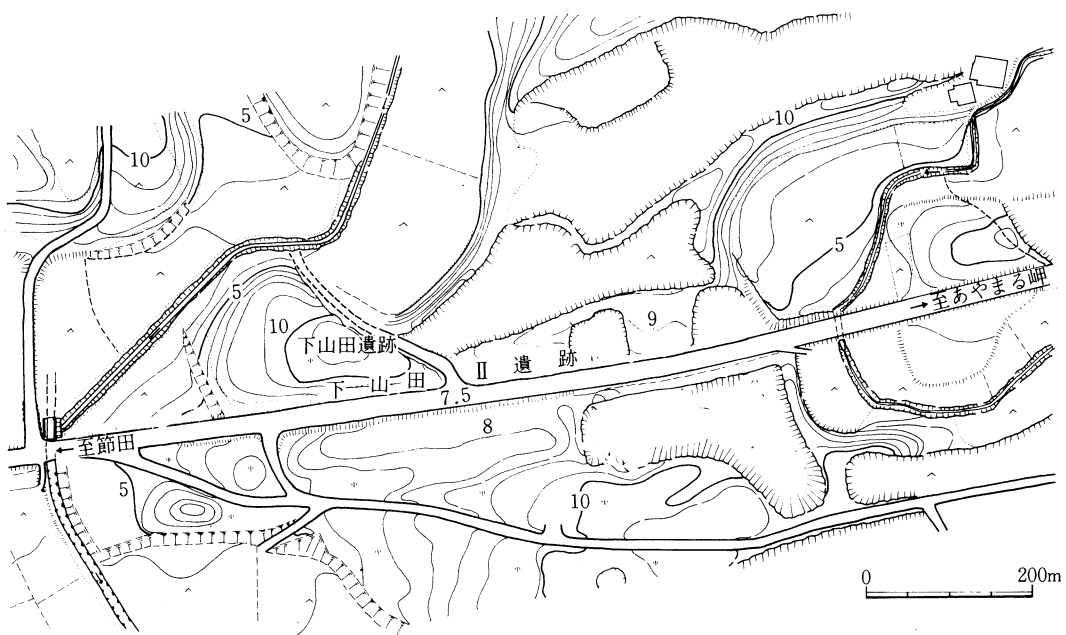
- ① 『笠利町郷土誌』 笠利町 1973
- ② 中山清美「奄美大島の先史遺跡」『南島史学 17・18』
- ③ 笠利町教育委員会「あやまる第2貝塚」『笠利町文化財調査報告 7』1984
- ④ 笠利町教育委員会「宇宿港遺跡」『笠利町文化財調査報告 4』1981
- ⑤ 三宅宗悦「南島の先史時代」『人類学先史学講座 16』 雄山閣 1941
- ⑥ 河口貞徳「南島先史時代」『南方産業科学研究所報告 第1巻2号』1956
- ⑦ 国分直一・河口貞徳。曾野寿彦・野口義磨「奄美大島笠利村宇宿貝塚発掘報告」
『美—自然と文化』 九学会連合奄美大島共同調査委員会 1959
- ⑧ 笠利町教育委員会「宇宿貝塚」『笠利町文化財調査報告』1979
- ⑨ 笠利町教育委員会「笠利町高又遺跡」『笠利町文化財調査報告 2』1978
- ⑩ 笠利町教育委員会「城遺跡・下山田遺跡・ケジⅢ遺跡」『笠利町文化財調査報告 8』1986
- ⑪ 鹿児島県教育委員会「泉川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 39』1986
- ⑫ 笠利町教育委員会「ケジ遺跡・コビロ遺跡・辺留窪遺跡」『笠利町文化財調査報告 5』1983
- ⑬ 鹿児島県教育委員会「ケジⅠ・Ⅲ遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 38』1986
- ⑭ 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 32』1985
- ⑮ 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡(第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡)」
『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 42』1987
- ⑯ 鹿児島県教育委員会「長浜金久遺跡(第Ⅱ遺跡)」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 46』1988
- ⑰ 永井昌文・三島格「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」『考古学雑誌 50巻2号』1964
- ⑱ 鹿児島県教育委員会「土浜ヤーヤ遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書 47』1988
- ⑲ 笠利町教育委員会「サウチ遺跡」『笠利町文化財調査報告』1978
- ⑳ 中山清美氏(笠利町歴史資料館) 教示

第2節 遺跡の概要

発掘調査前の遺跡の最高位は、9～10m程で、遺物包含層の最深部は6.5m程であった。調査対象区域は、県道に平行した山手側で約200mの距離がある。対象区域内には未買収の民有地や、すでに破壊された場所もあり、便宜上、3地区に区分して調査を実施した。南側部分を第1地点、未買収地区から砂取工事により破壊された地区までA-20区、A-24区、Z20～Z-24区までを第2地点、その北側A-25区～33区、Z-29区～33区、Y-29区～33区を第3地点とした。

第1地点

わずかな地域(8区～11区)に遺物が分布し、下層に曾畑式土器、上層に面縄前庭様式(神野C式土器か)が出土した。なお、この遺物出土地域は昭和60年度笠利町が実施した国庫補助事業の下山田遺跡の一部である。遺跡の主体部分は笠利町の実施した丘陵の平坦面の部分であり、今回の調査区は丘陵の末端に相当し、急角度で東側(現道方向)へ落ち込んだ場所である。



第3図 遺跡の概要図

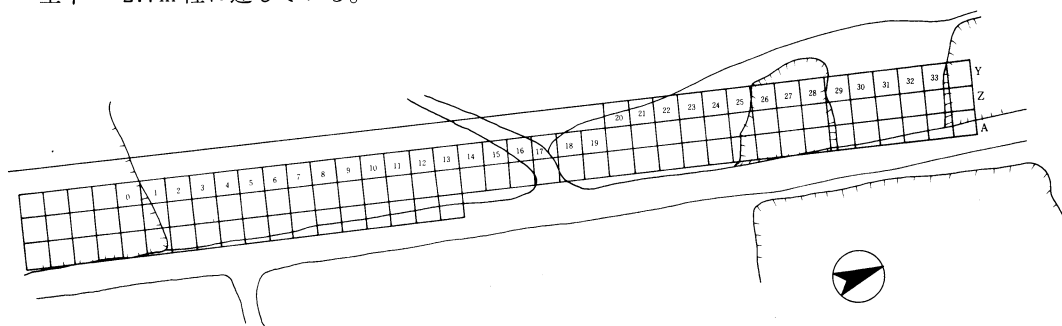
第2地点

主に白砂層中に面縄前庭式土器とその前後の土器が出土した。面縄前庭式土器は、散在的ではあるが集石遺構を伴っている。

第3地点

25区～28区は、発掘調査の前に砂採取のために破壊された所であり、遺物包含層の中心部はすでに運び去られていた。その為、かろうじて道路側の一部で最下層面が検出できた状況であった。残された部分は、これ以上、砂採取を続行すると道路の崩壊が起こる可能性が高い場所である。自然遺物では、マガキガイを中心に、シャコガイ、チョウセンサザエ、クモガイ、ホラガイ等が散在し、それらの中に土器片、石器等が含まれている状況であった。29区から33区での出土量が最も多く、今回の中心的場所である。

Y区（山側）よりA区（海側）にかけて遺物包含層が深く潜み込んでいた。遺物包含層も厚く、表土直下より最下部の第9層まで、連続して多量の遺物が検出された。最も深い所では表土下 2.7m程に達している。



第4図 下山田II遺跡のグリッド配置図

出土遺物は、人工遺物では嘉徳ⅠA式・面縄東洞式・面縄前庭式土器等が主で、その他、叩石を中心とした石器類、貝製品、骨製品等である。自然遺物では、貝殻が最も多く、魚骨、獣骨等も出土している。

遺構は、集石遺構が14基、特異な遺構としてサンゴを敷きつめてそのサンゴを加熱したものもある。最下層では、人の下顎骨も2例出土し注目される。

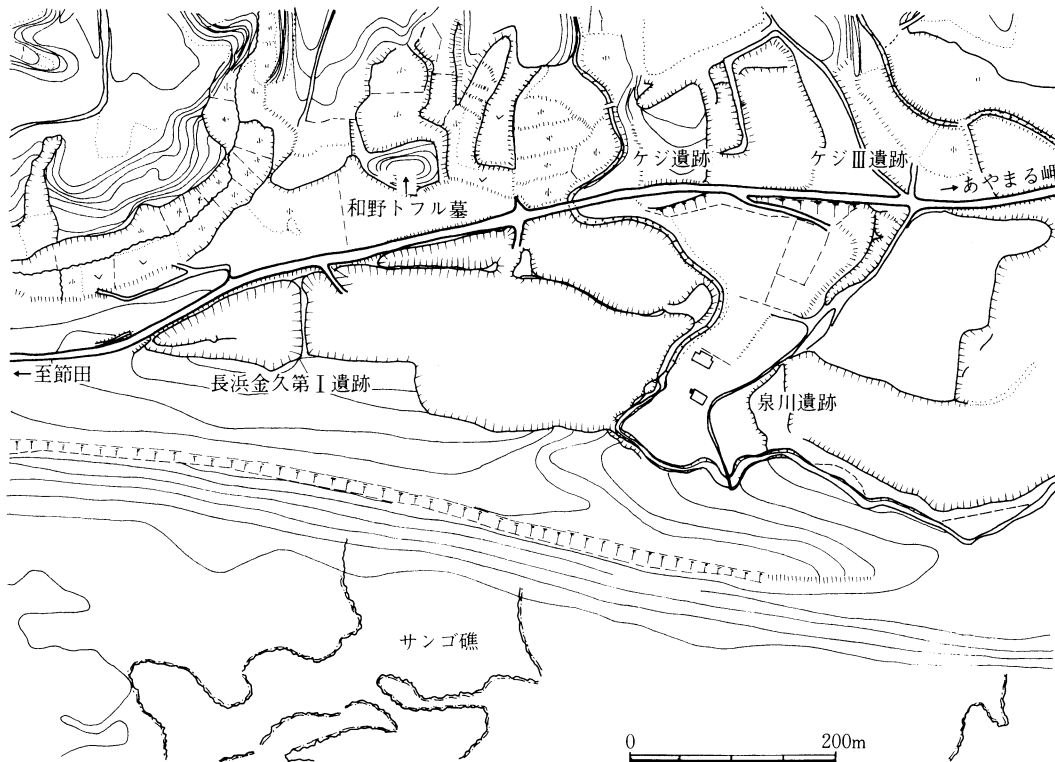
和野トフル墓

南島特有の墓制であり、本遺構の所在する奄美大島北部では、トフル、トフル墓、と呼称されている。

この墓制の特徴は、洗骨して改葬することにある。それらの工程は、先ず遺体を風葬又は土葬することに始まり、埋葬後およそ3年から13年経過すると再度掘りだし、その掘り出した骨を海水で洗浄し、壺や甕に納め、それをトフル墓と呼ばれる集団墓に祀る。

本例は、地元で「クール」と呼ばれる露出した小丘陵を形成する固結砂丘に、横穴を穿ち納骨している。横穴は、幅80cm程の入口が設けられ、最深部が最も広く290cmで、三味線の胴張り状を呈している。床面より天井までは100~130cmで、天井はドーム状を呈している。納骨した壺や甕は右壁、奥壁、左壁に「コ」の字状に並んでおり、部屋の壁に添うように並んでいたと思われる。

副葬品は、寛永通宝3枚、染付の徳利、薩摩焼の白磁碗、天目様の碗等が出土している。

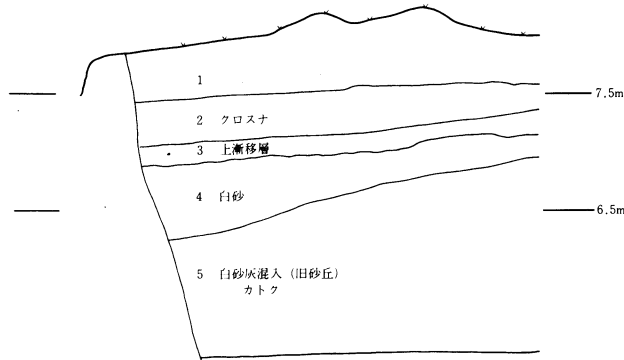


第5図 和野トフル墓の位置図

第3節 層序

A-25区 北壁

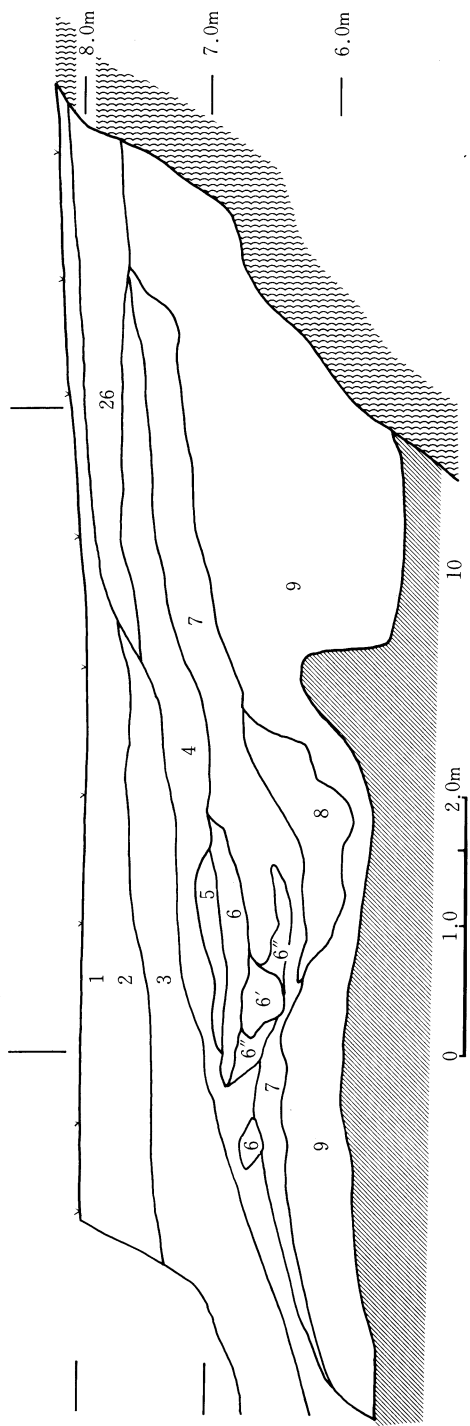
- 1a 表層, 蘇鉄や雑木等の腐植物等による褐色の砂質層
- 1b 表層からの掘り込みによる攪乱層
- 2 茶色の濃い褐色の砂層で, 有機物を多く含む。
- 3 黄褐色の砂層で, 上位の2層の漸移層の様相が濃い。
- 4 白色砂層。純白の砂層で, 遺物などは含まない。
- 5 白色砂層であるが, 4層よりも汚染は進行し, 灰や多くの遺物を含んでいる。(包含層)



第6図 A-25区北壁土層断面図

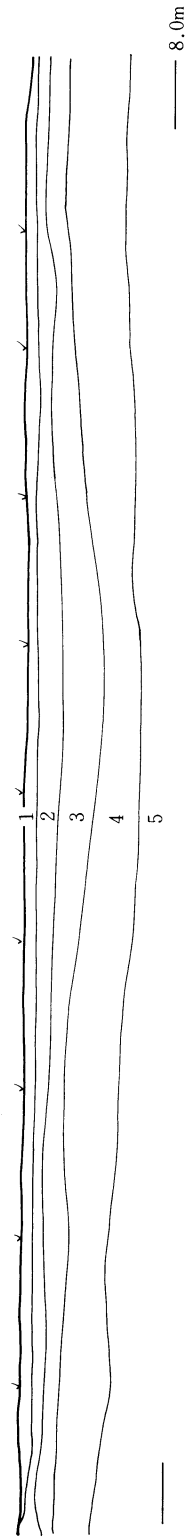
A・Z・Y-31区南壁

- 1 種々の汚染のみられる表層である。調査前の洗掃作業もあり部分的にしが残存しない。
- 2 茶褐色の砂層で, クロスナ期に相当し, 腐植質の有機物を多く含む。(包含層)
- 2b Y-31~X-31区のみ堆積し, 基盤の頁岩の腐植礫と風化土が砂層と混り合った層。
- 3 白色砂層で, カーボン等の不純物はほとんど含まない純白の砂層で遺物は含まない。
- 4 全域に堆積し, 灰混りの砂層で多くの遺物を含んでいる。層質は軟質である。(包含層)
- 5 Z-31区に部分的に堆積し, 灰を主体とした層で, 灰色で軟質の砂層である。(包含層)
- 6 灰が固結した層で極めて硬質の層である。(包含層)
- 6a 黒色の灰層でやや軟質。(包含層)
- 6b 灰黒色の灰層でやや軟質。(包含層)
- 7 4層が堆積する直前の層で, 4層と類似している。多くの遺物を含んでおり, 4層と比べるとやや灰の汚染が少なく白色が強くなる。(包含層)
- 8 多くの炭化物を含む黒色の灰混り砂層であり, 層質は軟かい。カーボンの他貝殻等も多く含んでいる。(包含層)
- 9 白色の砂層で, カーボンや灰はほとんど含まれない。(包含層)
- 10 ミクール、と呼ばれる固結砂層で, 白色である。
- 11 頁岩の基盤(岩盤)で, 名瀬層と呼ばれる。



31区南壁土層断面

第7图 下山田Ⅱ遺跡土層图



A-9・10区西壁断面图

第4節 下山田Ⅱ遺跡の地層

鹿児島市立玉龍高等学校教諭 成尾英仁

1) 地形

① 遺跡周辺の地形

下山田Ⅱ遺跡のある笠利町は、奄美群島中最大の島である奄美大島の最北端に位置しており、東側は太平洋に西側は東シナ海に面している。奄美大島は全体として中～南部は険しい山岳地帯であるが、北部の笠利町付近は海岸部に平坦な地形が多く、ここに奄美大島の遺跡の大部分が集中している。

笠利町の地形は第8図にあるように、東側は平坦で緩やかに海側に傾斜する段丘が広がっているが、西側は山脚がそのまま海に沈んでおり、比較的険しい地形となっている。最高所は笠利町の中央にある高岳で、標高 180m のやや開析の進んだ山である。笠利町では北の笠利崎から町境の神子にかけて、標高 150m 前後の山が背骨のように南北に並んでいる。

笠利町では一般に山が低く土地が狭いため河川の発達が悪く、平野は河口付近にごくわずかしみられない。笠利町で大きな河川は北部にある屋仁川と、中央部にある前田川である。いずれも東シナ海に流れており、長さは約4km内外と短い。しかし標高 150m 前後の山から流下するため、流れは比較的急である。

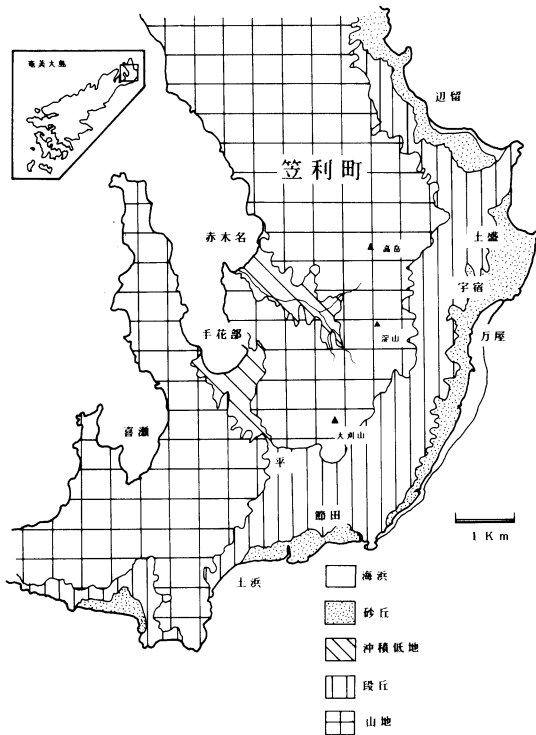
笠利町の西側は、河川により形成されたごくわずかの平地を除いて、山地が広がっているが、東側では平坦な段丘地形が見られる。

一般に奄美群島では段丘の発達が著しいが、奄美大島では北部の笠利町の東側にわずかに見られるにすぎない。

この段丘は数段に分かれており、大きく高位段丘・中位段丘・低位段丘の3段に区分することができる。

笠利町では標高10m～20mの中位段丘がよく発達しており、その内部はいくつかの小さな段丘に区分することができる。この段丘は節田から崎原にかけて発達する。

段丘が最も良く発達する宇宿付近では、

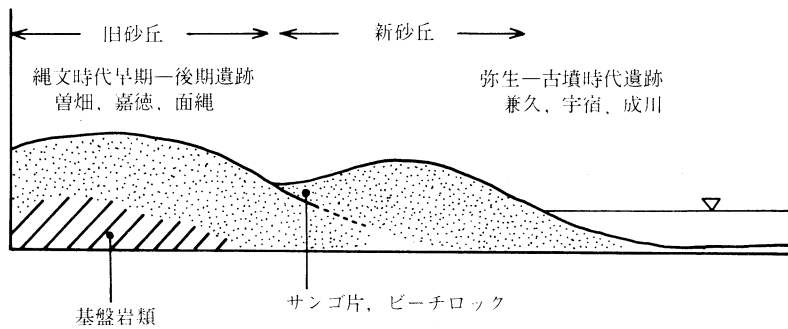


第8図 笠利半島の地形区分図

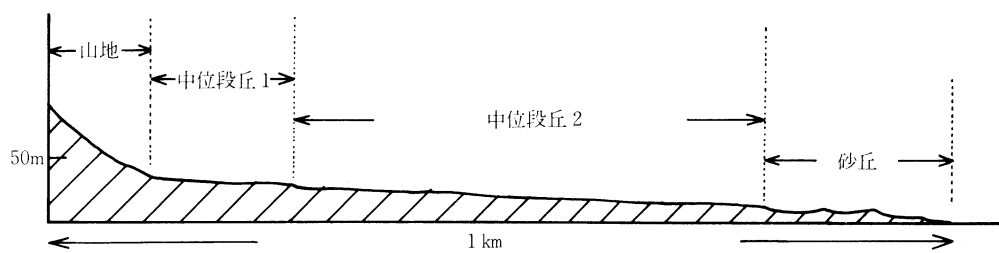
段丘の幅約 1.5km 高低差約 40m で東側に緩く傾斜している。

段丘が海に接している部分では砂丘が見られる。段丘同様に砂丘も笠利町の東側に発達しており、西側海岸ではほとんど見る事ができず、日本の大半の砂丘が西側の日本海側に発達していることと、著しい相違をみせている。

砂丘は遺跡のある和野から土盛にかけて発達しており、そこでは海岸に平行に最大幅約 500m 高さ約 20m である。砂丘は新旧二つに区分することができるが、古いものはやや幅が狭く高さも低い。海岸部においては現在も砂丘が形成されつつある。



第9図 段丘断面図



第10図 砂丘概念図

② 遺跡の地形

第9・10図にあるように遺跡周辺の地形は、段丘末端の小砂丘になっている。ここでは段丘の高さは約 15m であり、それを覆うような形で砂丘堆積物が乗っている。段丘を構成する堆積物は、基盤の和野層・名瀬層と砂礫層である。

遺跡周辺では風化した頁岩の上に直接砂丘堆積物が乗る場合と、数枚の古土壌を挟んで乗る場合とがあるが、いずれの場合も下部の砂丘堆積物は、硬く固結したサンゴ片・有孔虫片・サンゴ藻などからできており、ところどころにルーズな砂が薄く挟まっている。

一方海岸により近い所にある砂丘は、この硬い砂丘堆積物を覆って堆積しており、サンゴ片・有孔虫片・サンゴ藻などからなるが、ルーズでサラサラしている。

またこの砂丘はまだ開析が進んでいず、連続性が良好であるのに対し、山側にある固結した

砂丘の方は開析され、小谷により細かく分断されている。

固結砂からなる砂丘と、未固結砂からなる砂丘との間は6～8mで少し低くなっており、ここはいわゆる後背湿地に相当するが、現在は埋め立てられ道路となっている。

2) 遺跡と周辺の地質

① 遺跡周辺の地質

遺跡周辺に分布する地層は、四万十帯に属する名瀬層と古第三系の和野層、およびそれらを不整合に覆って堆積している第四系の平層・砂丘堆積物である。名瀬層は遺跡の直接の基盤岩となっており、風化しボロボロになった黒色の頁岩が主体である。遺跡西側の山地もこの名瀬層によってつくられており、大部分の地域で激しくかく乱を受けている。このため走向・傾斜は場所により著しく異なっているが、概ね北東-南西で西に傾斜している。和野層は主に黄色の中～粗粒の砂岩から構成され、名瀬層ほどはかく乱は受けていない。しかし遺跡西の台地では、短い周期の褶曲がみられる。走向・傾斜は概ね名瀬層と同じである。

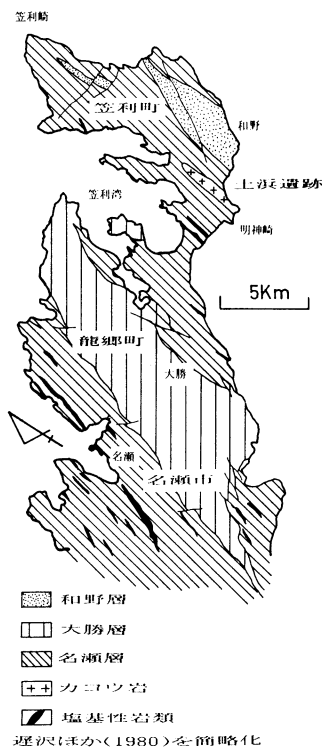
平層は段丘をつくっている堆積物であるが、宇宿から和野・平にかけて名瀬層と和野層を薄く覆って堆積している。宇宿・和野地区では主に親指大の円礫を含む砂礫層から構成されている。海岸からやや離れた段丘面では、この上に茶褐色の古土壌を挟んで火山灰様土や黒茶色土が堆積し、さらに厚さ数十cmで砂層が薄く堆積している。

この薄い砂の層は海岸部から約1km内陸部まで見られる。

遺跡の周囲で見られる砂丘は、固結した砂からなる砂丘であり、厚さ約15mで堆積している。この砂丘が下部の風化赤黄色土と接している部分では、砂は特に硬く板状となっており、一見するとビーチ・ロックのようである。

遺跡南側の断面ではこの砂丘内部が露出しており、そこでは全体として海側に緩く傾斜しながら堆積し、小規模のクロス・ラミナが発達している。

この固結砂層の中間に、厚さ約15cmのルーズな中粒砂があり、さらにその中部に赤色粘土が挟まっている。

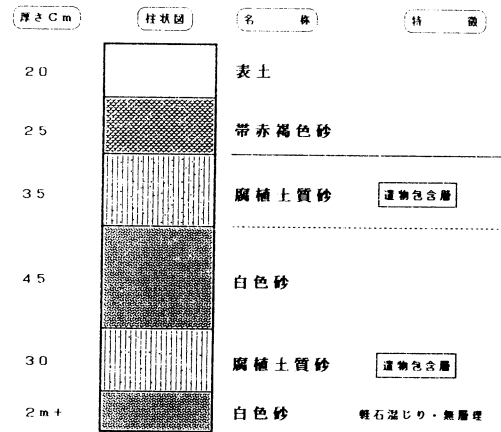


第11図 笠利半島地質図

② 遺跡の地層

遺跡の堆積物は場所により若干の相違があるが、基本的には基盤の風化した頁岩層の上に乗る固結した砂層と、それを覆っている未固結の砂層からなる。そして上位の砂層の中には黒色を帯びたクロスナ層が挟まれている。

遺跡の最南端のトレンチでは河川堆積物のみが見られ、大小のサンゴ片・固結砂層の破片などが雑然と堆積し、さらに親指大の砂岩・頁岩礫の混じった砂礫層や、青灰色をしたグライ土様の粘土などがレンズ状に挟まっている。標準的なトレンチでは、貝やサンゴ片を含んだ粗粒の固結砂層があり、その上に貝殻などを含むルーズな未固結砂層がある。この層の上部に近い部分にはやや薄い黄色をした砂層があり、この中に風化し若干粘土化したスコリアが挟まれている。海岸から少し内側にはいったトレンチでは、ルーズな未固結砂層の上部に二枚のクロスナ層が挟まれている。



実線より上は新砂丘堆積物、下は旧砂丘堆積物
遺物包含層は黒色をおびたクロスナ層である。

第12図 遺跡の砂丘堆積物

③ 砂丘の形成時期

奄美諸島には一般に砂丘が発達しているが、その規模や立地する場所は島毎に異なっている。しかし砂丘の在り方は琉球列島の中～部を通じておおそ同じで、外海側にリーフがありその内側に礁湖がひろがり、海岸線に沿ってビーチ・ロックがあつて、そこから砂丘となっている。

ところで前述のように遺跡周辺には、固結した「クール」とよばれる砂からなる砂丘と、未固結の砂からなる砂丘とがある。

周辺遺跡の調査によれば、固結した砂丘からなる砂層の上部からは、縄文時代前期の曾畑式土器が出土し、さらに上からは面縄前庭式土器が出土している。⁽¹⁾ また遺跡のすぐ南側にあるケジⅠ・Ⅱ遺跡では、曾畑系土器を含む層の炭素14法による年代で5080±50 Y.B.P.が得られている。

このようなことからこの砂丘層の形成時期は、少なくとも縄文時代前期まではさかのぼることになるが、その開始時期が何時であったかは、考古学的遺物からだけでははっきりしない。

奄美大島の東側にある喜界島での炭素14法による年代測定値から、三位・木越は新期砂丘は縄文海進以後に形成され、新砂丘Ⅰと新砂丘Ⅱに区分されることがわかった。そして新砂丘Ⅰ

は、表面に10cm前後の土壌が発達している。⁽²⁾

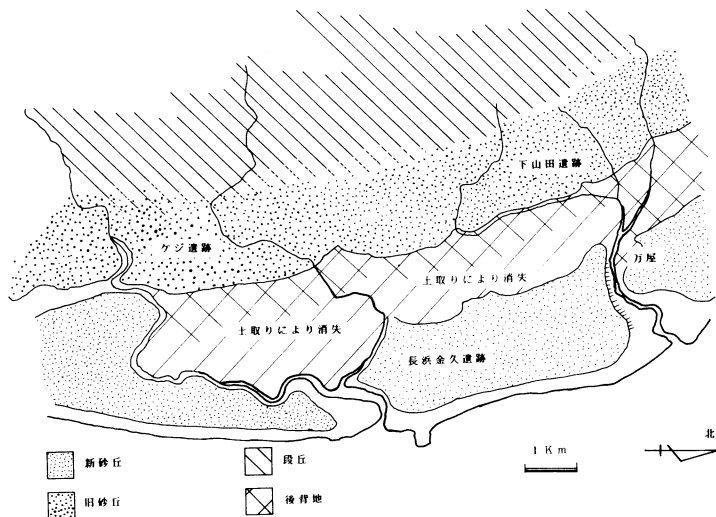
奄美大島の砂丘の堆積物や堆積構造は、喜界島の砂丘で見られるものとほとんど同じであり、形成の時期も同じと考えられる。喜界島では27,200±1,200 Y.B.Pの湾層の上に、固結して岩石化した砂丘堆積物が不整合に堆積しており、立川期の風成砂層とされている。

奄美大島北部では固結砂丘の直下に火山灰質土壌があり、さらにその下に基盤の頁岩層などが見られる。この火山灰質土壌の中からは、鬼界カルデラ起源のK-Ah火山灰が検出されており、砂丘の形成時期は、少なくとも縄文時代早期までさかのぼるとされる。⁽³⁾

この砂丘の上に不整合で堆積し、海岸側に近いところにあるルーズな砂丘には、遺跡周辺では宇宿式土器や兼久式土器・山ノ口式土器・成川式土器が出土しているが、縄文時代の遺物は出土していない。⁽⁴⁾

このようなことから下位の固結した砂丘は、井関による縄文海進期に形成された旧期砂丘に対比され、これを不整合に覆っているルーズな未固結砂丘は、弥生時代以降形成された新期砂丘に対比されると考えられる。

遺跡内におけるルーズな砂丘堆積物は固結砂丘から連続しており、この中に縄文時代後期の遺物が含まれていることから、旧期砂丘の堆積は縄文時代後期まで続いたと思われる。



第13図 遺跡付近の砂丘

文 献

- ① 鹿児島県教育委員会(1986):ケジⅠ・Ⅱ遺跡 鹿児島県教育委員会
町田 広・新井房夫(1983):広域テフラと考古学 第四紀研究 22.133~148
- ② 井関弘太郎(1975):砂丘形成期分類のためのインデックス 第四紀研究 14.183~188
遅沢壮一ほか(1979):奄美大島の地質(第1報) 琉球列島の地質学研究 4 p. 95~105
- ③ 鹿児島県教育委員会(1988):土浜ヤーヤー遺跡発掘報告書
- ④ 笠利町教育委員会(1983):ケジ遺跡・コピロ遺跡・辺留窪遺跡 笠利町教育委員会

第 3 章 下山田Ⅱ遺跡の調査

第1節 第1地点

第1地点は、最も南側の低地部分と、1区～16区へかけての小丘陵の先端部に相当する部分とに分けられる。

今回の調査区域の南側の位置は、標高4～5m程の低地である。

すでに、砂採集や耕地開墾のために削平され、大きく地形が変えられており、予想された包含層はすでに消失していた。そのため、重機（バックホー）による確認調査を実施したが、人工遺物等の検出は認められていない。また、小河川に近い一部で、旧海岸線（汀線）と思われる状況を検出したが、冠水のため、それ以上の検出、確認は困難となり断念した。

1区から16区は、独立した小丘陵の南側部分で、丘陵の先端部に相当する。また、丘陵には、砂丘が覆いかぶさる状況である。独立した丘陵の西側は湿地帯で、丘陵と湿地帯の間は小河川により分断される状況である。元来、この小丘陵は、西側後方に広がる畑地帯（洪積台地）の先端部であったと思われるが、旧期砂丘形成時や、その後の河川の運動や、人為的開墾のために現況を呈することとなったと思われる。

調査の結果、出土遺物は、A-8区から9・10・11区にかけて出土し、特に10区を中心に分布していた。出土状況も、丘陵の地勢に必ずや孤状に認められ、遺跡の中心部が後方（地区外）の平坦地であることがわかる。

1) 土層（第7図）

I層 表層……蘇鉄、雑木等による腐植質層

II層 黒褐色砂層……I層との区分が困難な場所もある。（腐植質の砂質）クロスナ期か。

III層 黒灰色砂層……腐植質の強い砂層で、遺物包含層

IV層 褐色砂層……III層程の腐植化はみられない、砂質はザラザラしている。遺物包含層。

V層 白砂層……汚染の少ない白砂層

2) 遺物分布状況（第15図）

図に示したのが第1地点（Z、A-8・9・10・11区）の遺物出土状況である。

約70点程の出土があり、9区から10区へかけて孤状に広がっていることが分かる。

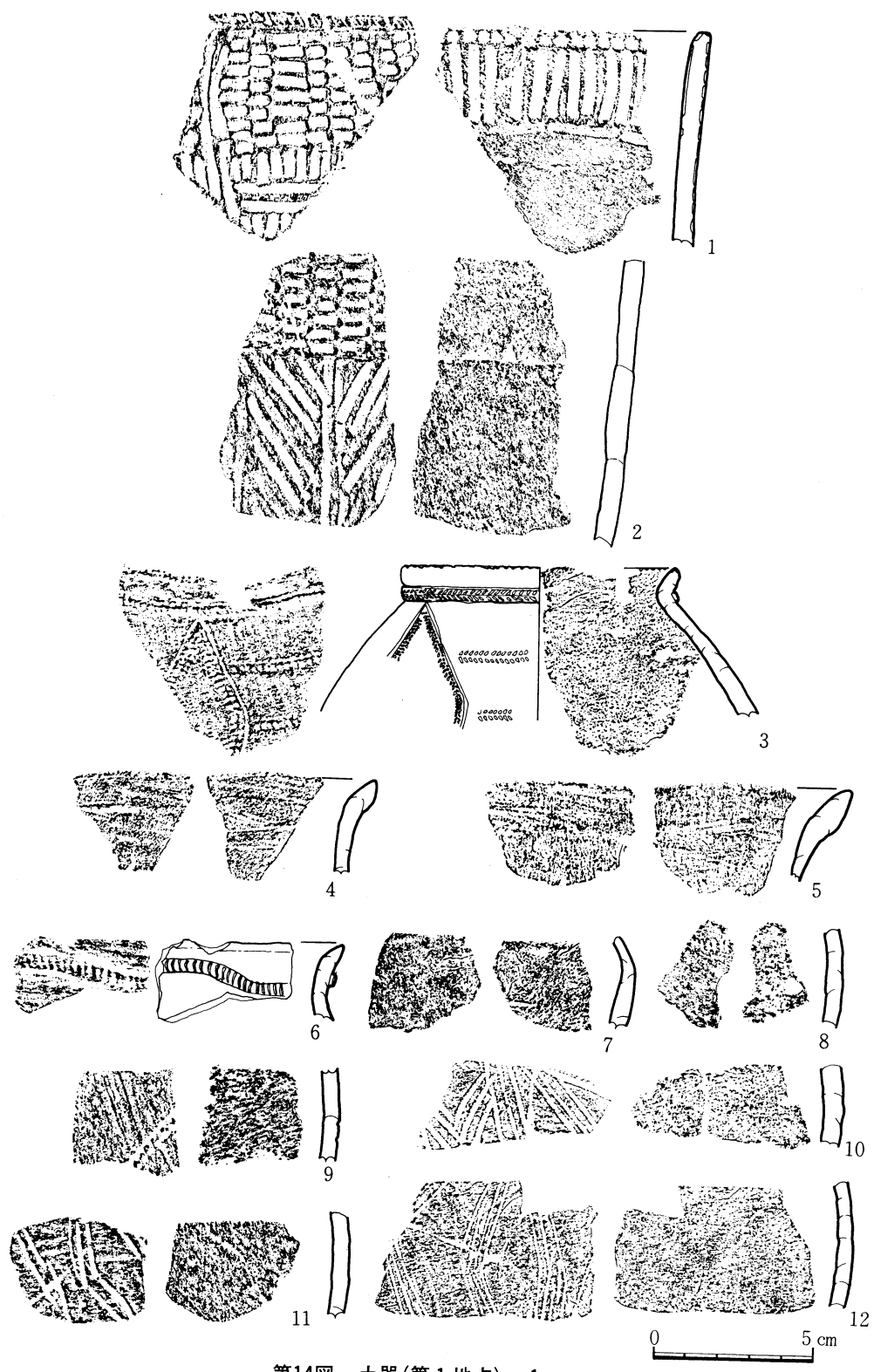
3) 出土遺物（第14, 16, 17図）

60点程検出し、それらの内、土器片22点、石器4点を図示している。

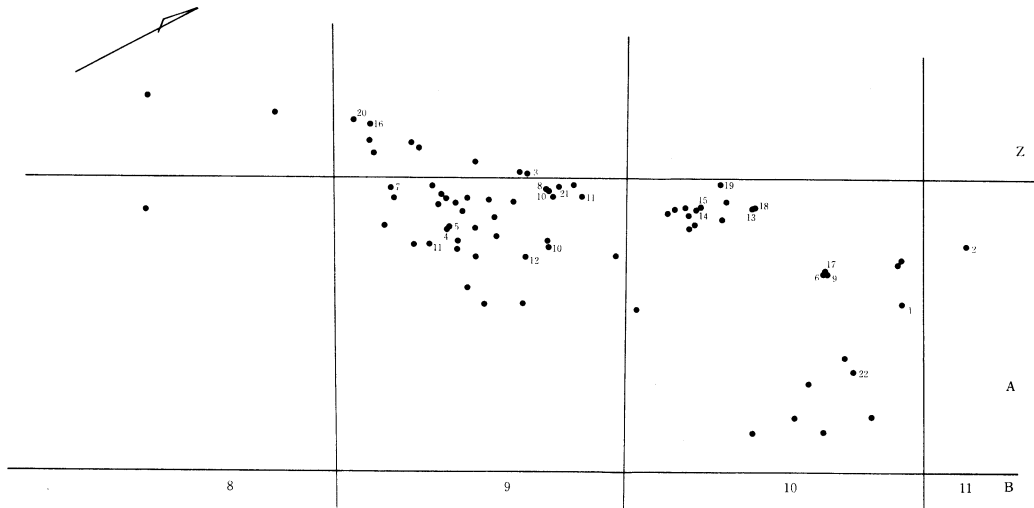
I類（1・2）I類土器は、aとb類に細分し、ここ第1地点ではI-a類土器だけが出土している。

薄手で硬質のもので、ヘラによる短沈線を施文の基本としている。

1と2は同一個体と思われ、口唇部外面と連続にヘラ刻目、内面にヘラの連続押圧が施される。



第14图 土器(第1地点) - 1



第15図 第1地点出土遺物分布図

また、内面には、縦位の短沈線が区画文の後に施されている。外面は、器体のかなりの部分まで施文がなされたと思われ施文のため区画がなされた可能性もある。

Ⅲ類 (3~22) Ⅲ類は a, b に細分し、a は、沈線と刺突文により文様を構成したものの。b は、頸部は原則として無文であり、また刻目突帯を持つものである。胴部は明確ではないが、10, 11 の様な複合鋸歯文等も描かれている。

a 類 (3, 8, 9) 又状工具や半截竹管、ヘラ状工具で連続刺突を施し、文様を描いたもので、出土量は図示しただけの3点である。

3 では、頸部はかなり絞り胴部が大きく膨む器形を示している。3 の整形は細い粘土紐を積み重ねていたことが内面の状態から判断できる。

b 類 (4~6, 10~21)

4 と 5 は同一個体の可能性が強いもので、口縁部は舌状に膨み施文は認められない。6 では頸部(屈曲部)に蛇行する隆帯を貼り付け、又状工具で刻み目を施している。なお、この間は、施文は認められない。他の21までの胴部片および底部片は、その色調等から見て、この類のいずれかに属するものである。

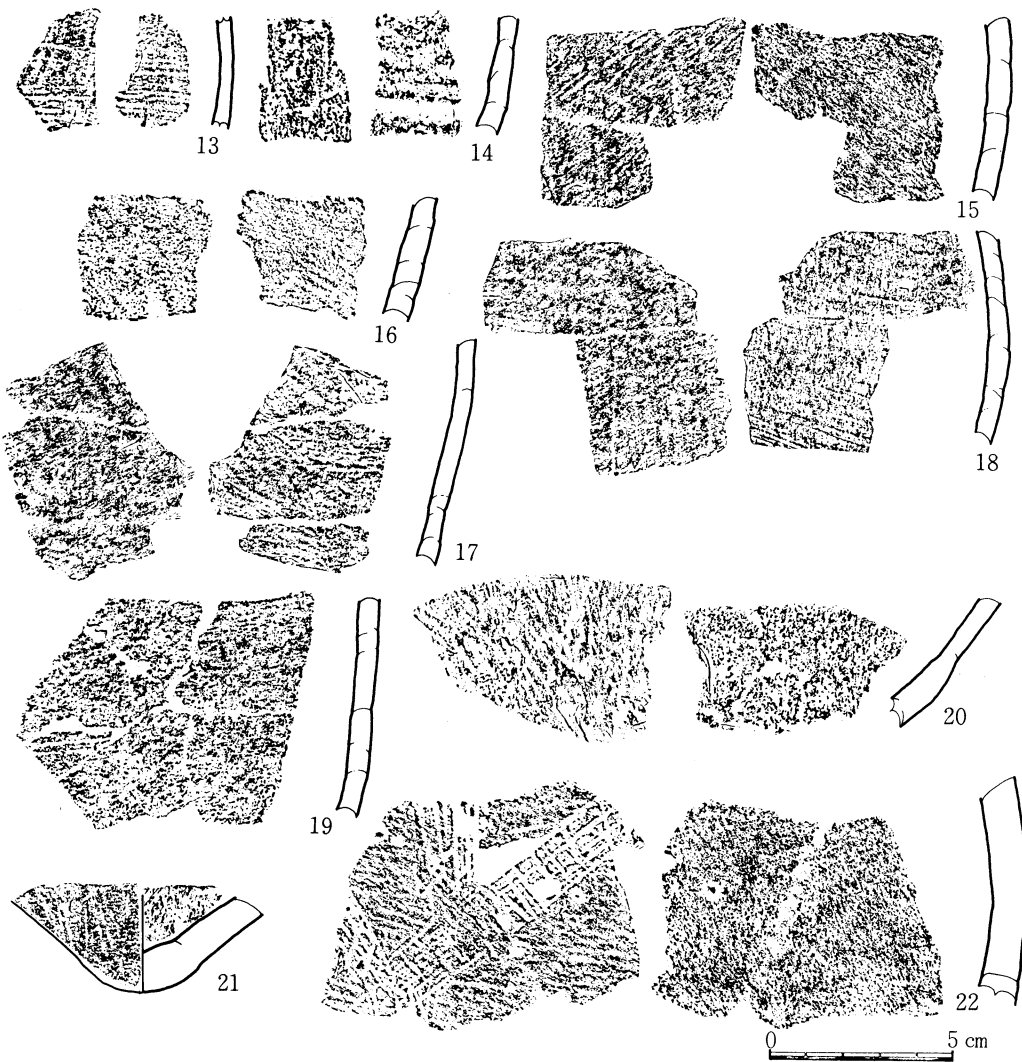
石器 (23~26)

23, チャート製で、使用痕のある剥片である。使用方法は左側縁と先端部を削器的用途に用いたと思われる。

24, 頁岩製の石核で、打面は平坦面を呈している。打点が、次々と移行する多面体石核である。

25, 頁岩製の削器で、厚手の不定形剥片の打点部は切断している。刃部は先端部だけに設けられる。

26, チャート製で、尖頭器状石器の可能性はある。先端部と尾部は欠落したものと思われ、表、裏の調整剥離は全て側縁部から体部に向けて施している。



第16図 土器(第1地点) - 2

第2節 第2地点

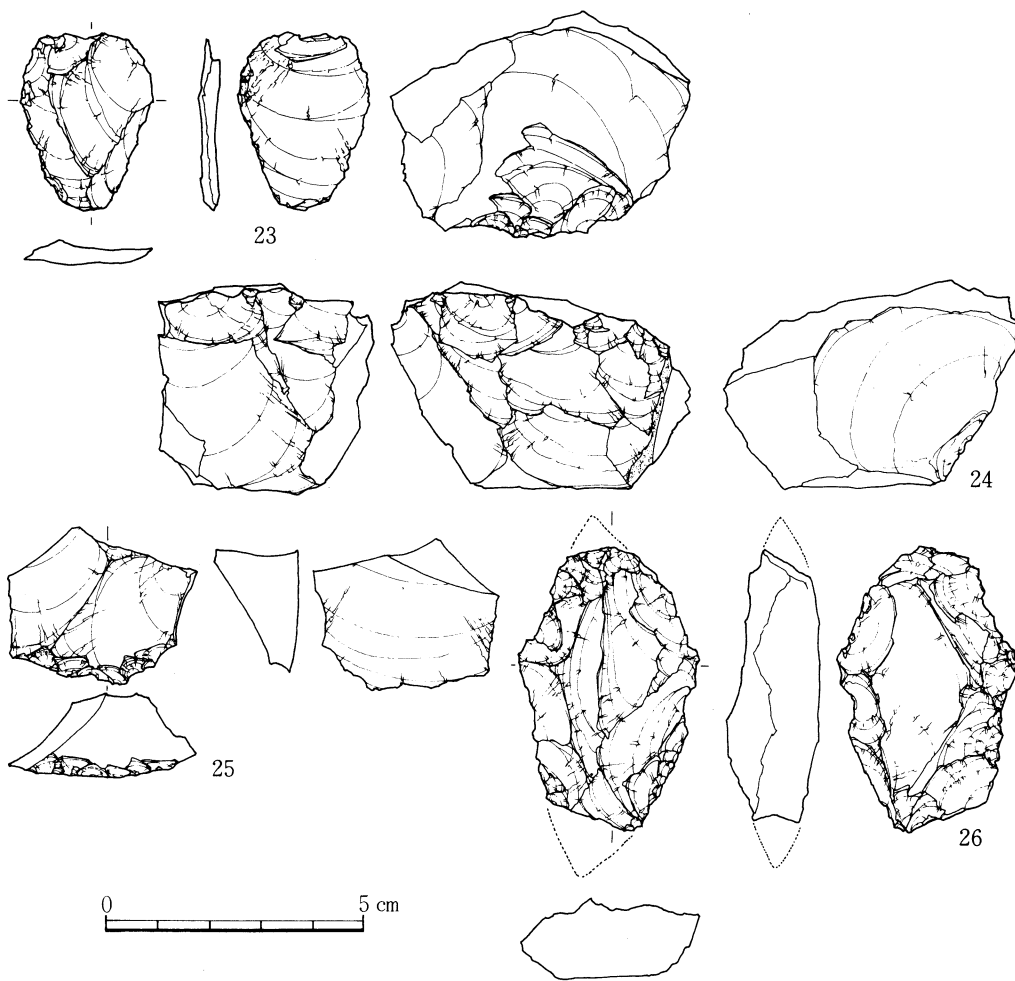
18区の一部と19区は未買収地で、発掘調査が実施できず20区から25区を実施した。

調査時点では、蘇鉄や雑木の繁る荒地となっていたが、以前は砂地を利用した耕作が行われており、そのためか上位層の攪乱が著しかった。また、A-24区には電柱が埋設されており、埋設時点での攪乱もあり、良好な保存状況ではなかった。

1) 遺物分布状況

第2地点での掲載遺物の分布状況は第18図に示すとうりである。

A-21区から24区へかけては、平均的な出土がみられ、Z区では、Z-21区と22区の一部に見られるだけである。Ⅳ類・Ⅴ類はやや西側に出土の片寄りが看取される。また、ⅩⅤ類、ⅩⅦ類等の土器片は、Z区には見られず、A区のみ分布している。



第17図 石器(第1地点)一1

2) 遺構

遺構としては、集石遺構のみであり、A・B-20区とA-21区で6基を確認した。

遺構は全て、V層に相当する白砂層中に、その設置面が認められる。

〈1号集石遺構〉 A-20区、75cm×75cm、水糸高7.20m

A-20区にあり、角礫、円礫の40個程で構成し、拳大から最大30cm程の礫を用いている。

遺構は、第V層の白砂層に位置し標高6.80mから6.90m程に底面がある。大きめの礫が、主に西側に置かれることから、その方向を奥壁とする炉的構成も想定できるが、確認し得ない。

〈2号集石遺構〉 A-20区、B-20区、140cm×140cm、水糸高7.20m

A-20区とB-20区に広範囲に散在するため、B-20区の礫の集中個所(70cm×40cm)をその中心部と判断される。中心部では24~25個の円礫、角礫が用いられている。

〈3号集石遺構〉 A-20・21区, B-20区, 100cm×50cm, 水糸高7.20m

A-20・21区, B-20区に広がるもので、もともとは別々の集石遺構であった可能性もあるが、今回は、1基として捉えている。23個の円礫, 角礫で構成し、礫間に極端なレベル差は認められない。

〈4号集石遺構〉 A-21区, 80cm×70cm 水糸高7.20m

2個づつ3ヶ所に配された角礫と、集中した9個の小円礫で構成されている。

〈5号集石遺構〉 A-21区, 60cm×75cm 水糸高7.20m

第2地点で確認した6基の集石遺構では、最も礫がまとまっているものである。

用いた礫は、角礫が多く10cmから20cm程のものを24~26個で構成されている。6.70mから6.80mのレベル位置に置かれている。

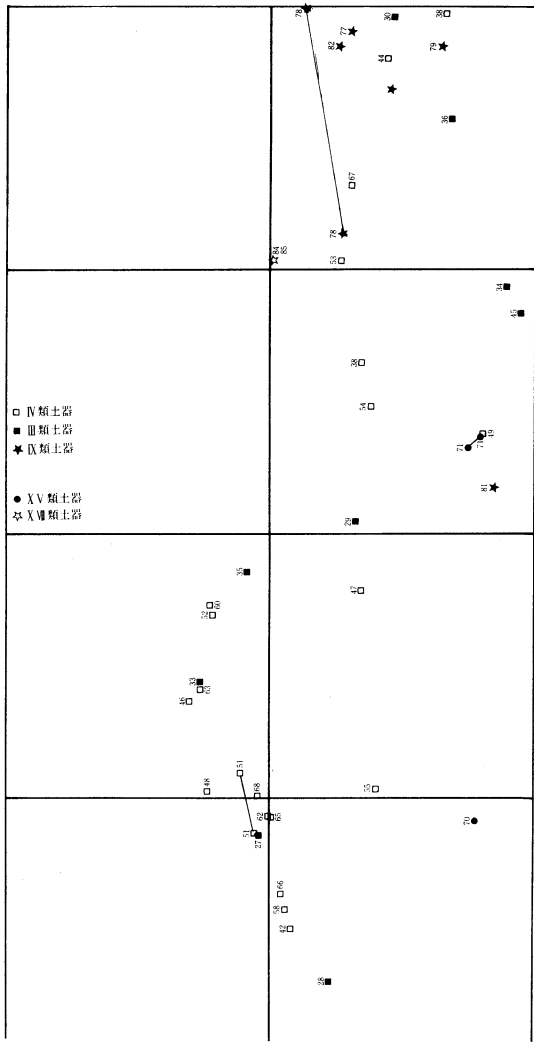
〈6号集石遺構〉 A-21区, 80cm×140cm 水糸高7.20m

20個の角礫が、80cm×140cmの範囲に散在し、白砂層に置かれている。

第2地点での集石遺構は、A-20区, A-21区にのみ認められ、その範囲は調査区の東側にベルト状に配置されている。

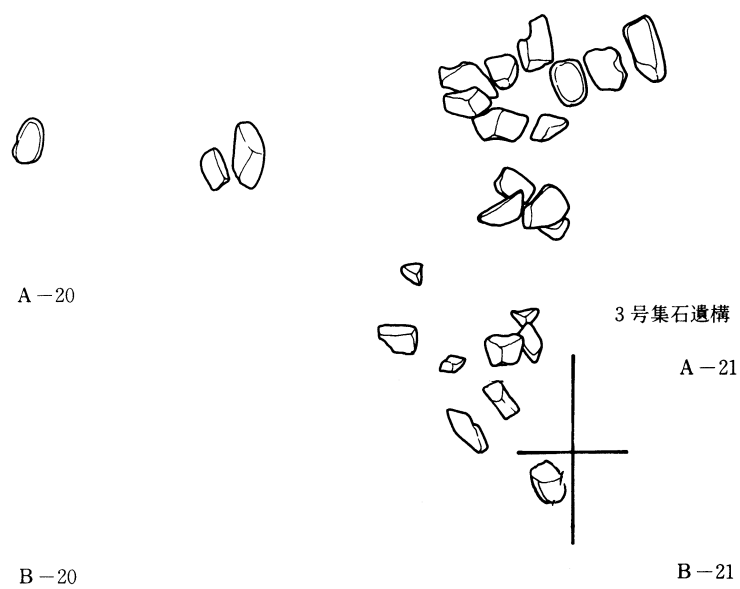
また、西側方向のZ区からA・B区にかけて傾斜した関係上、全ての集石遺構もその傾斜に添っていることがうかがえる。

集石遺構の造営時期については、明確な共伴遺物が無く確証は得られていないが、集石が白砂層中に包含されること、また、この白砂層の主体となす土器がⅢ類及びⅣ類土器であることを考慮すると、これらのいずれかに属するものと判断される。

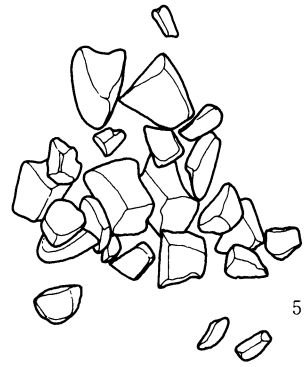


第18図 第2地点出土遺物分布図





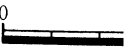
第19図 第2地点遺構分布図

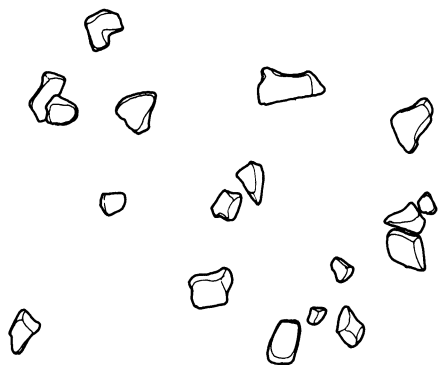


5号集石遺構

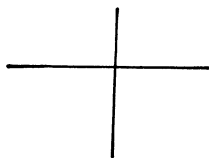


4号集石遺構



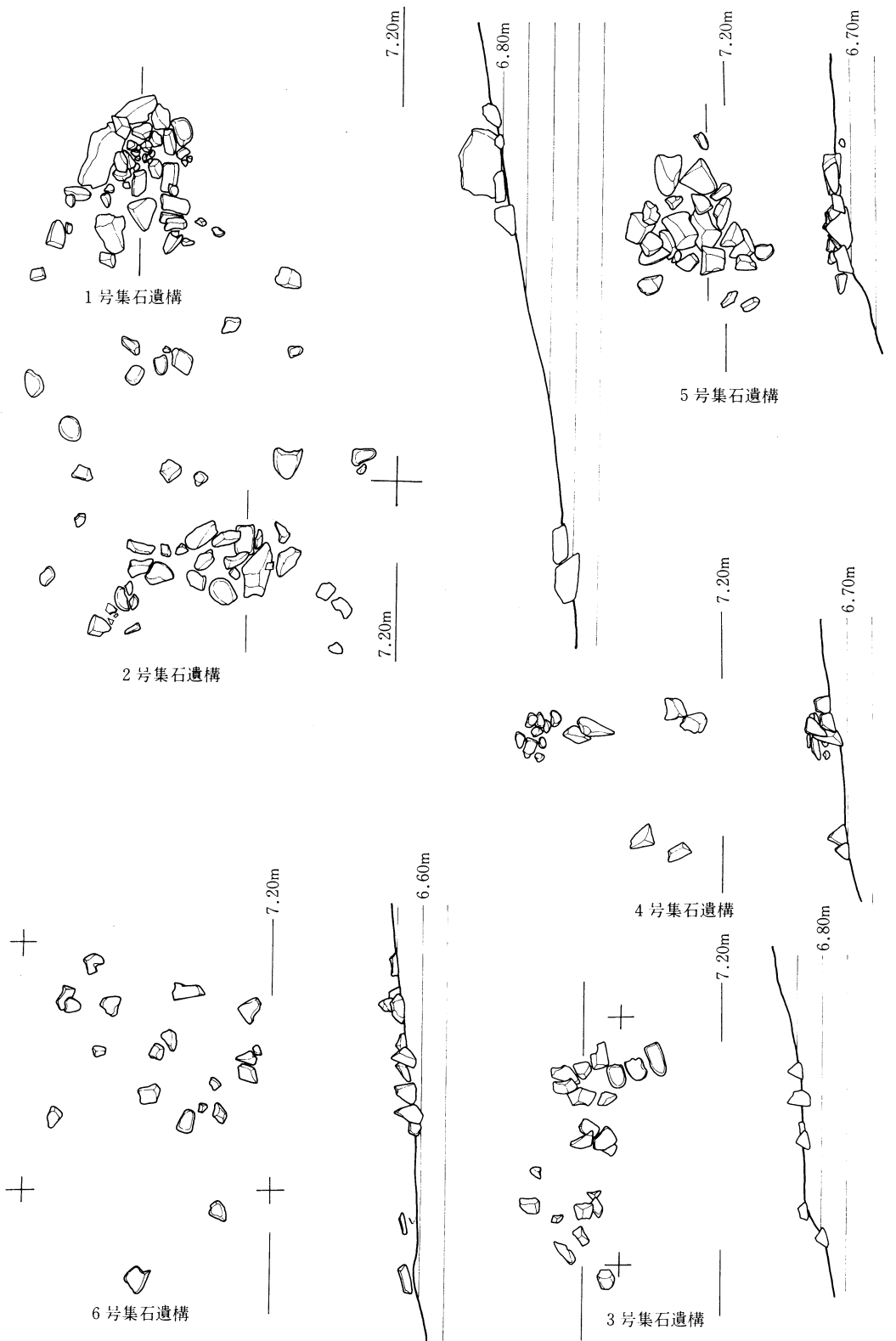


6号集石遺構



100cm





第20図 第2地点1～6号集石遺構

3) 出土遺物—土器

Ⅲ類 Ⅲ類は a (刺突文) と b (口縁部から頸部までの屈曲部が無文のもの、貼り付け突帯が施され、かつ無文のもの) に分けたが、第 2 地点では a 類は認められず、全て b 類である。

27～29 は、貼り付け突帯等の貼付は全く行わず、口唇部に直接又状工具等で連続した刺突文を施している。また、口縁部も他に比らべると立ち上りが強い感じがする。

35、36 では、口縁端部に貼り付け突帯を巡らし、又状工具、及び半截竹管工具で連続した刺突で刻み目を施している。また、直下の屈曲部への施文は認められない。

31、32、34 では、屈曲部に貼り付け突帯を巡らし、口唇部と同様に刻み目を施し、また、その間は他の施文は行われていない。45 では、蛇行する突帯が施されている。

33 の 1 点は、屈曲部に 1 条の刻み目突帯を巡らし、突帯の下位に連続刺突を施し、a 類の特長が認められる。

Ⅳ類

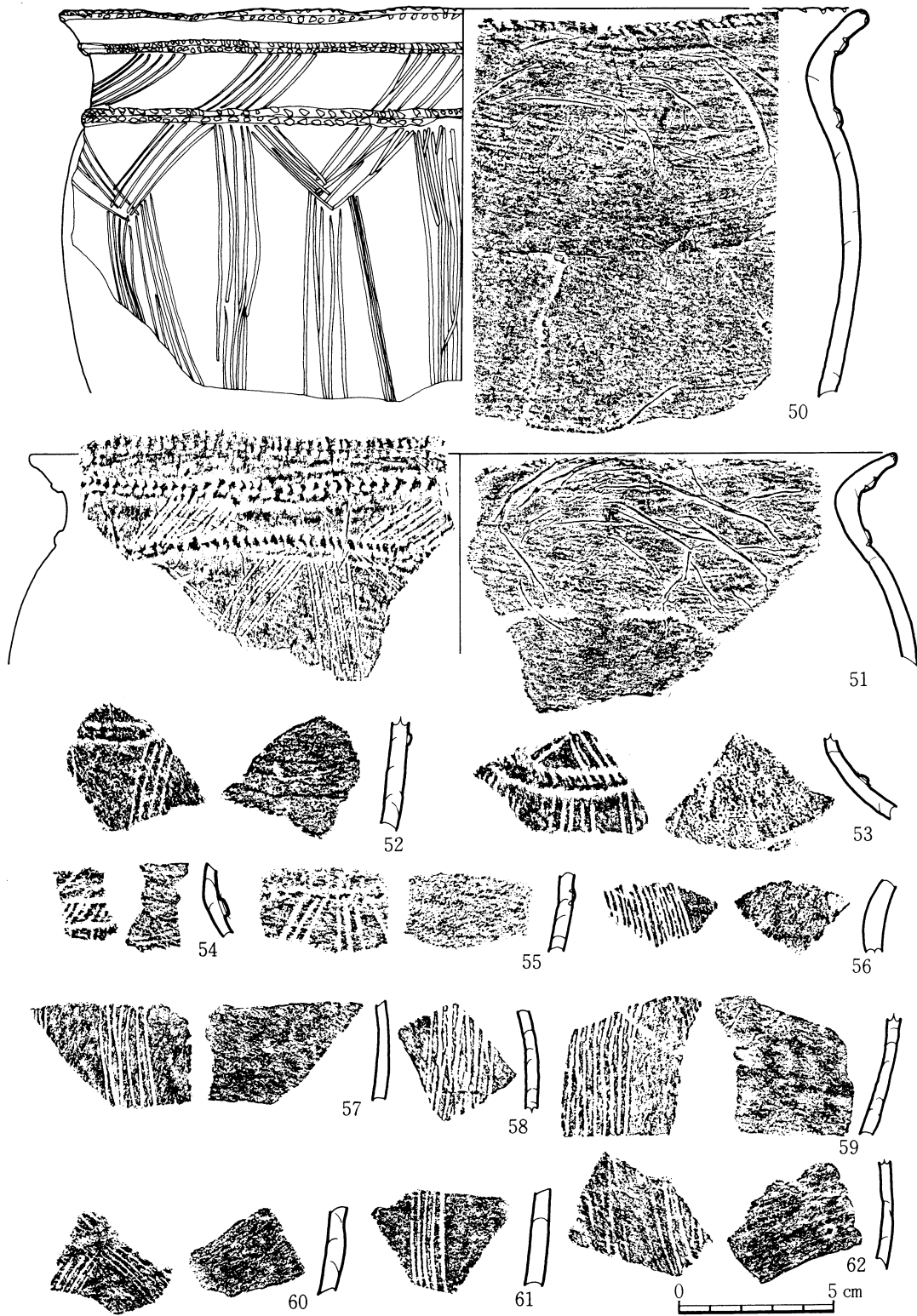
Ⅳ類は、a と b に細分している。a は口縁端部及びその直下に突帯を貼り付け、さらに頸部 (屈曲部上位) にも貼り付け突帯を持つものである。また、この突帯は、その全てが、又状工具及び半截竹管具により連続した刺突が施されている。さらに、突帯と突帯間は屈曲した形状を呈し、その部分に細沈線文による縦位ないしは斜位の平行線文が例外なく描かれている。胴部にも屈曲部に施文したものと同様、同種の工具で細沈線文を描いている。描かれた文様は、細沈線を複数組み合わせた平行線文で、構図は、平行直線文、Y 字状平行線文、人字状平行線文、くの字状平行線文等である。これらは、総じて薄手であり、かつ硬質の出来上りとなっている。

b 類は、第 2 地点では出土していないが、基本的に a 類と同様の特長を示すが、口縁部と頸部の突帯間を連結する縦位の突帯を施すもので、同様に突帯上に刺突を施している。

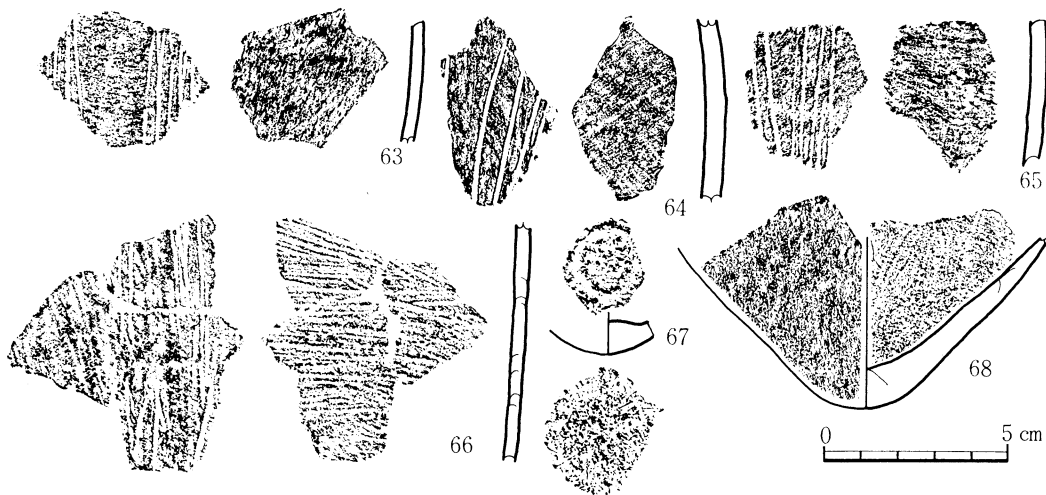
Ⅳ a 類 42 は復元口径 124mm 程で、小型土器の部類と思われる。頸部の突帯は小さく、口縁部に最大径が求められる。屈曲部・胴部の沈線は、深く明瞭に描き出されている。50 は 260mm・51 では 278mm の復元口径が出ているが、色調、文様構成等類似点が多く、同一個体の可能性が極めて高いと思われる。口唇部に又状工具による連続刺突を施し、2 本の突帯上にも同じ工具で連続して刺突している。口縁部の突帯はかなり下がった位置に設けられ、胴部は Y 字状と直行する沈線が描かれている。焼成は良く、薄手で硬質の仕上りを持つ。49 は、A-24 区と第 3 地点の Y-32 区出土の 2 片と接合した資料で、その間の距離は 40m 程になる。暗褐色の特長のある色調を呈し、施された細沈線も多く、また、深く刻まれシャープな文様である。53 は、頸部の突帯を基準に復元した結果、他と比べて胴の張りが強い形状を呈している。55 の胴部の沈線は、3 本で構成され、今回の資料中最も少ない例である。66 の内面は、横位の条痕整形で行なっている。67・68 は底部片であり尖底に近い丸底を呈し、これら a 類に相当するものである。67 では、接地面の円盤を貼りつける手法が行なわれている。



第21图 土器(第2地点) - 1



第22图 土器(第2地点) - 2



第23図 土器(第2地点) — 3

a類でも、貼りつける突帯の位置が一定せず種々のバリエーションがみられる。37・42のように縁端部に貼り付ける例、50のように口縁部よりかなり下った位置に貼り付けるものなどがある。また、刺突に用いる工具にも各種あるようで、叉状工具・半截竹管等が使用されている。

XI類

文様帯に沈線文を横走するのを基本とし、直行あるいは斜行する沈線により区画文を描き出している。その後、これらの区画文間に、間のびした押し引きないしは連続刺突を施し、区画文間を充填していく手法(文様構成)を基本とした一群である。

86と88があり、86では先端部の鋭利な工具で、88では半截竹管状の工具を用いて施文している。

XV類

口唇部内面の上端に、断面三角形の粘土紐を1条貼り付けた一群の土器である。

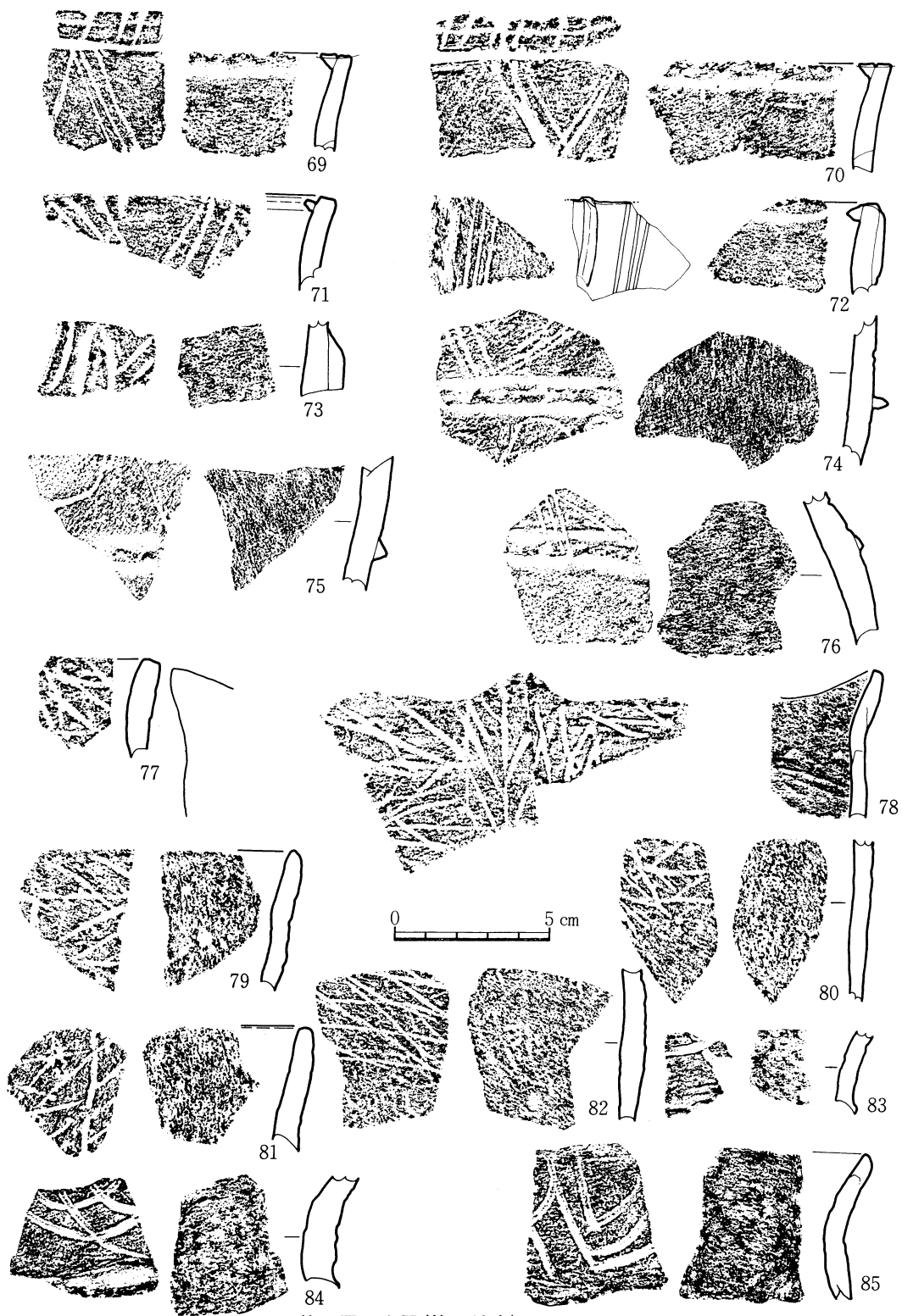
69～73、は同一個体と思われる資料で、全く同一の特長を備えている。また、72、73のように、口縁部と直行する縦位の突帯も備えている。口唇部は、ヘラ状工具で浅く刻まれ、内面の貼り付け突帯も同時に刻まれている。外面は、三本の平行沈線で口縁端まで達する鋸歯文が描かれている。

XVI類

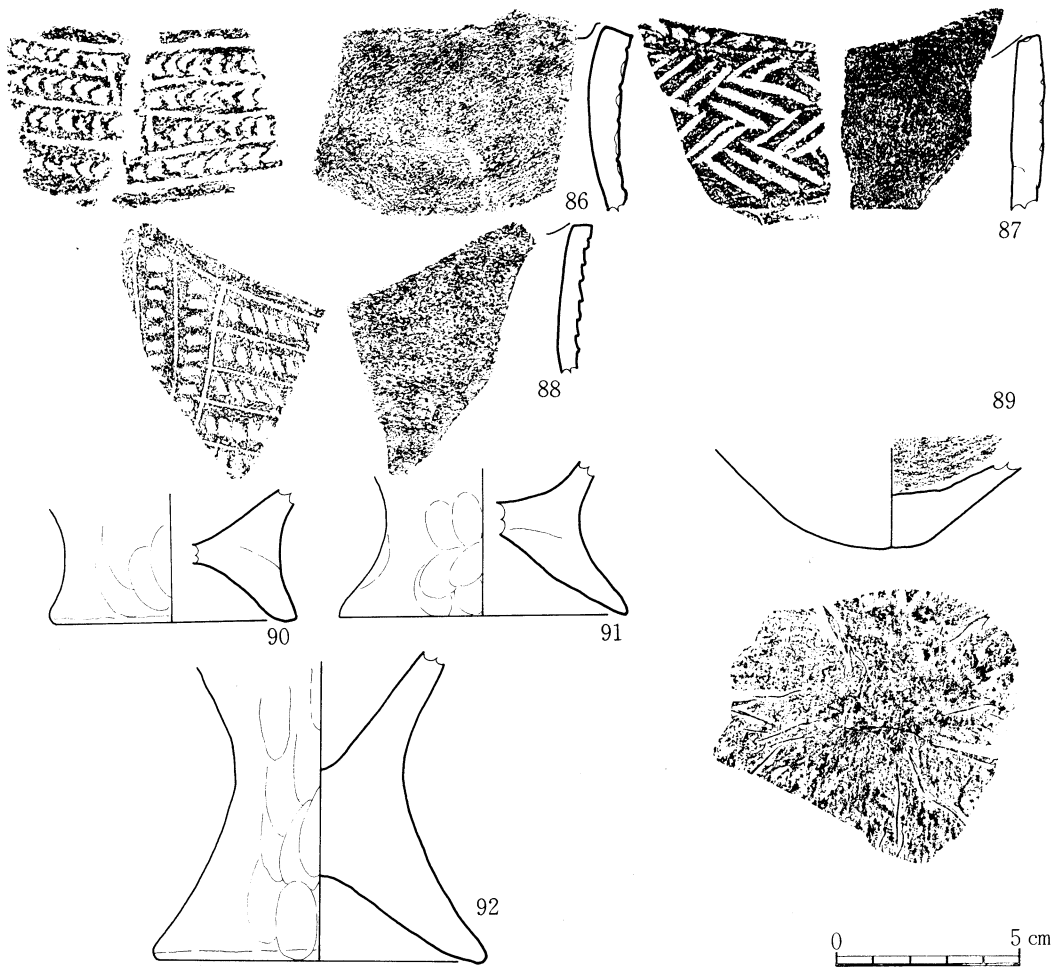
器形等は全く不明で、一部に横走する三角突帯を貼りつけ、上下に沈線で施文したもので、焼成は良く硬質である。74～76の3点であり、いずれも同一の特長を備えており、同一個体と思われる。

IX類

沈線及び細沈線で文様を構成したものである。



第24图 土器(第2地点)-4



第25図 土器(第2地点)―5

78は、山形口縁を持つ鉢形土器で、山形頂部を中心とした文様を描いているが、規則性はない。また、意図的な文様帯の肥厚は認められない。79も同様であり、同一個体の可能性がある。80～82も同様の特長を示し、77～82までが同一個体の可能性がある。

XVII類

外反する口縁形を持つもので、繊維状の条痕を残す浅い沈線文で弧状に近い文様を描いている。時期、形式等の位置づけは明確でないが、類似したものが長浜金久第Ⅲ遺跡にみられる。

83～85は色調、胎土、文様構成が同一であり同一個体の可能性が極めて高い。

XVIII類

脚台付の上げ底を呈する3点を一群として取り扱っている。同一区から出土であり、同種の範中に納まるものと思われる。この種の形状を持つ底部は、近くでは、長浜金久第Ⅲ遺跡、サウチ遺跡、スセン當貝塚等で散見される。

第3節 第3地点

A-26からA-28区・A・Z・Y-29区からA・Z・Y-33区が第3地点に相当する。

A-26区～A-28区の全域とA-29区の一部は、砂採集による遺跡破壊の行われた場所に相当し、発掘調査の結果、包含層の最下面がかろうじて残されている状況であった。

29区から33区の範囲が、本遺跡の中心をなす地域で、多くの遺物や遺構が検出された。調査前の最高標高は、8.30m程で、Y区方向（西側）からA区方向（東側）の道路側へ緩かな傾斜をなしていた。また、この範囲は、旧期砂丘に相当する。

1) 遺構(第26～31図)

A-26からA-29区では、最下面で貝殻の散在状況を捉えている(第26図)。

貝の種類では、マキガイが最も多く、シャコガイ・ホラガイ・クモガイ・水字貝・チョウセンサザエ・ヤコウガイ等がある。それらに混り、礫や叩石、土器片等がわずかに散在していた。

29区から33区で検出した遺構は、集石遺構14基であり、その内、サンゴを集積した遺構2基、集石遺構に土器が投げ込まれたもの(?)1基がある。また、集石遺構の中には、炉の様相を持つものもある。したがって、集石遺構11基、サンゴ集積遺構2基、土器溜り1ヶ所である。

〈1号集石遺構〉 Z-30区, 100cm×80cm, 水糸高7.5m

Z-30区にあり、20個程の角礫で構成し、最大30cm程の角礫が用いられる。遺構中央部の平扁な角礫には、灰が多量附着していた。大型の角礫や灰等の付着物等が認められることにより、炉的機能も考えられる遺構である。

尚、本遺構の約100cm東側には、モチズキギラだけが集中して検出され、一時の投棄を示すものと思われる。個体にして75個前後が想定できる。

〈2号集石遺構〉 Z-30区, 70cm×150cm, 水糸高7.35m

Z-30区にあり、最大40cm程の角礫を西端に置き、北側に10～15cm程の角礫が孤状に置かれている。また、東側には、6個の角礫とマガキガイ・オニコブシが集中していた。

遺構内には、150cm程の炭化物を伴っており、その機能を知るうえで興味深い検出状況といえる。

〈3号集石遺構〉 A-30区, 120cm×120cm, 水糸高6.75m

A-30区の第10層（固結砂丘・クール）に掘り込みを持つ遺構で、掘り方は2段掘りである。最深部で-45cm、浅部で-35cm程で、すり鉢状に造られている。

遺構に用いられた素材はサンゴ塊で、確認面から床面までギッシリ敷き詰め、床面より5cm程上位には、焼土面がみられ明燈色や黒色の加熱された痕跡かが確認された。サンゴ塊は、大小混入しているが、加熱の為に崩壊したと思われる小片や細粉も多く見られた。用途については、不明である。

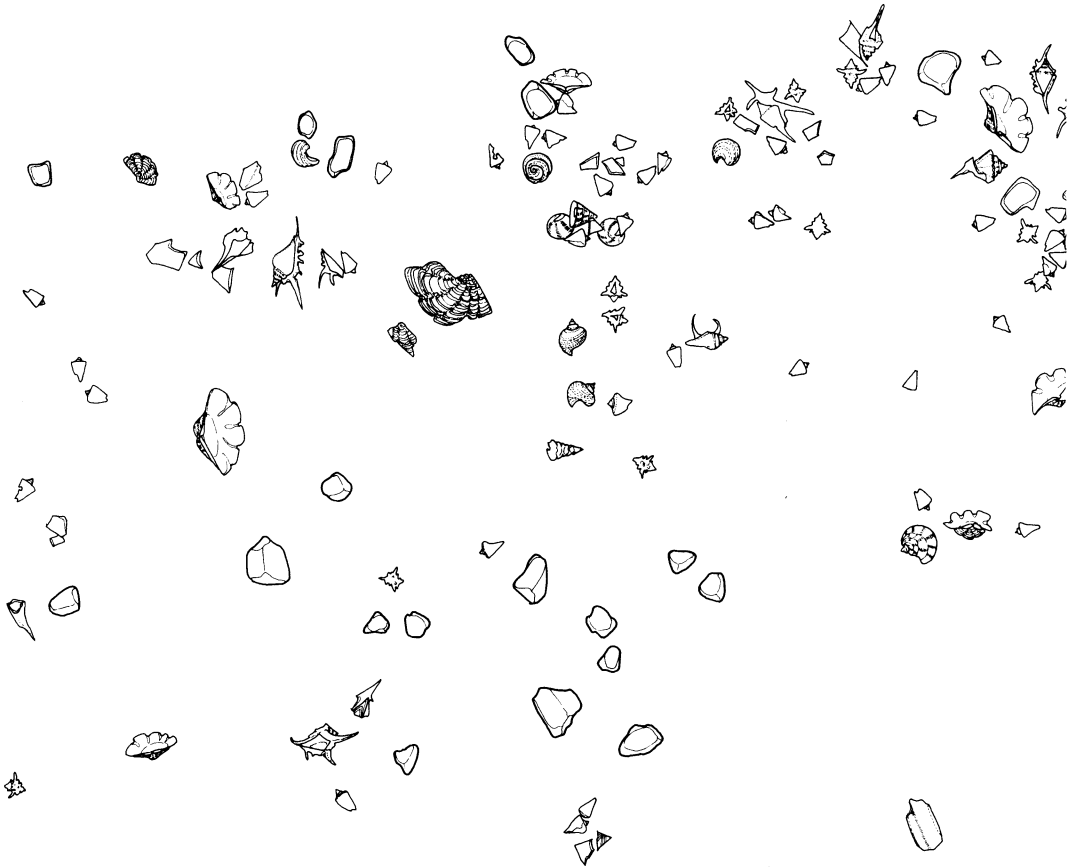
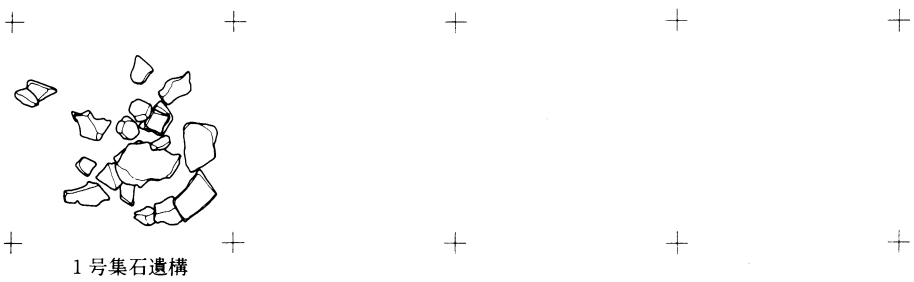


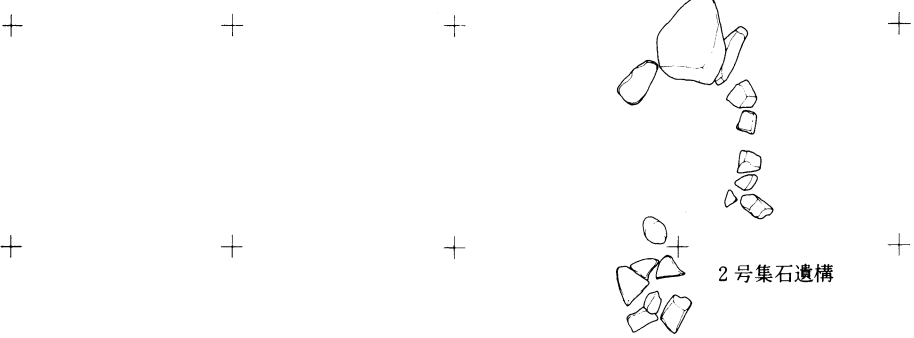


图 第3地点A-26~29区遺物散布状況



1号集石遺構

1

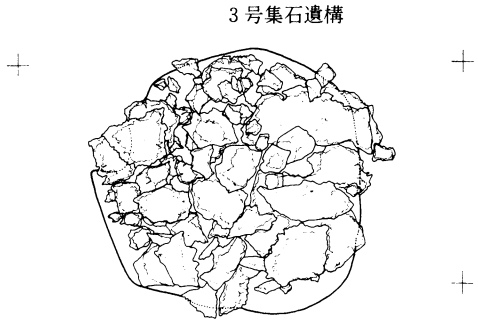


2号集石遺構

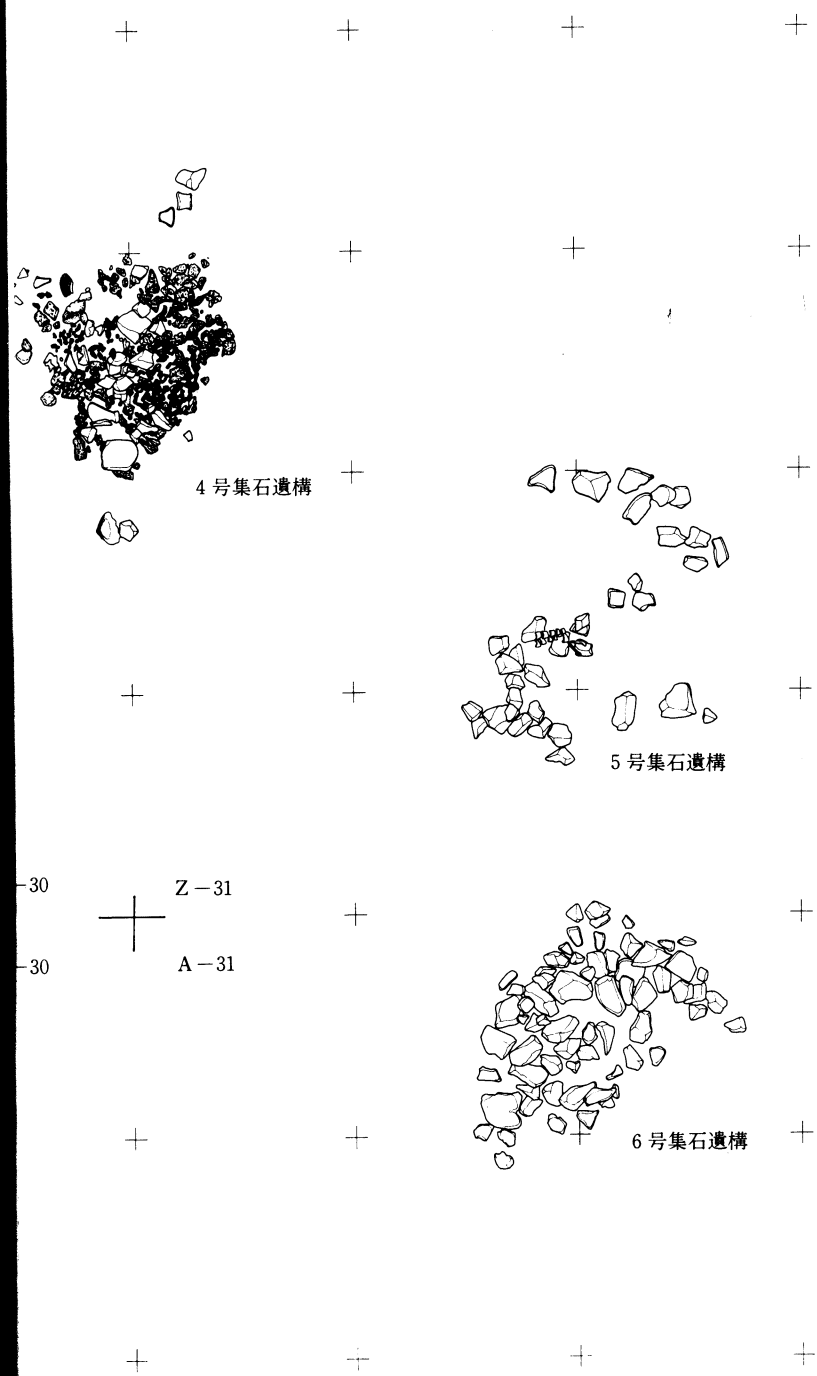


Z-

A-



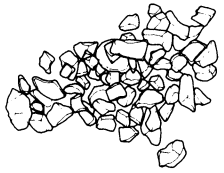
3号集石遺構



第27図 第3地点集石遺



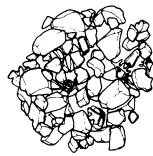
14号集石遺構



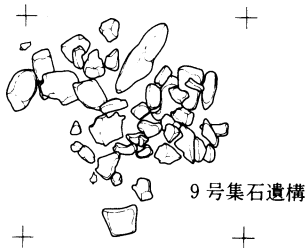
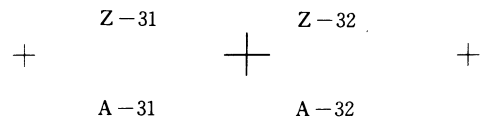
7号集石遺構



8号集石遺構



12号集



9号集石遺構

構配置図

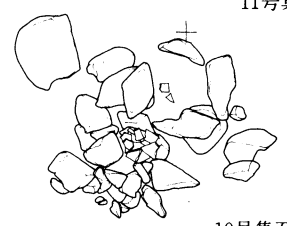


13号集石遺構

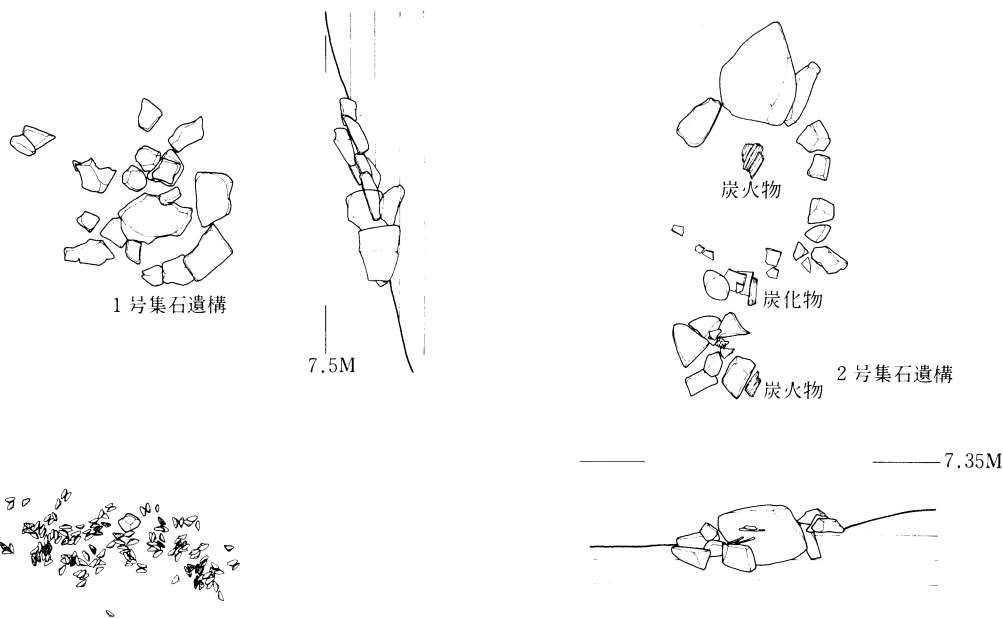
石遺構



11号集石遺構



10号集石遺構



第28図 第3地点 1・2号集石遺構

〈4号集石遺構〉 Z-30・31区, 110cm×150cm, 水糸高7.0m

第9層の白砂層に遺構の底面が置かれ、特に掘り込み等の作業痕は確認できない。

遺構に用いられた素材はサンゴ塊、礫（5～20cm程の角礫）で、貝殻片が少量含まれ、特にサンゴは加熱され黒色に変色しバラバラに破碎している。

〈5号集石遺構〉 Z-31区, 120cm×130cm, 水糸高7.0m

Z-31区にあり、第9層の白砂層に遺構の底面が位置する。遺構は、第8層の多量のカーボンを含んだ灰黒色砂層によって覆われている。

遺構は、35個程の角礫で構成され、中程に動物骨（脊椎骨）が伴っていた。

〈6号集石遺構〉 A-31区, 120cm×120cm, 水糸高7.0m

A-31区にあり、第7層下部から第9層の白砂層に遺構の底面が位置する。この位置では、第8層が存在しない地域で、第7層が直接遺構を埋設した状況にある。

遺構は、60数個の礫で構成され、IX-c類のNo.406の一部が相伴している。

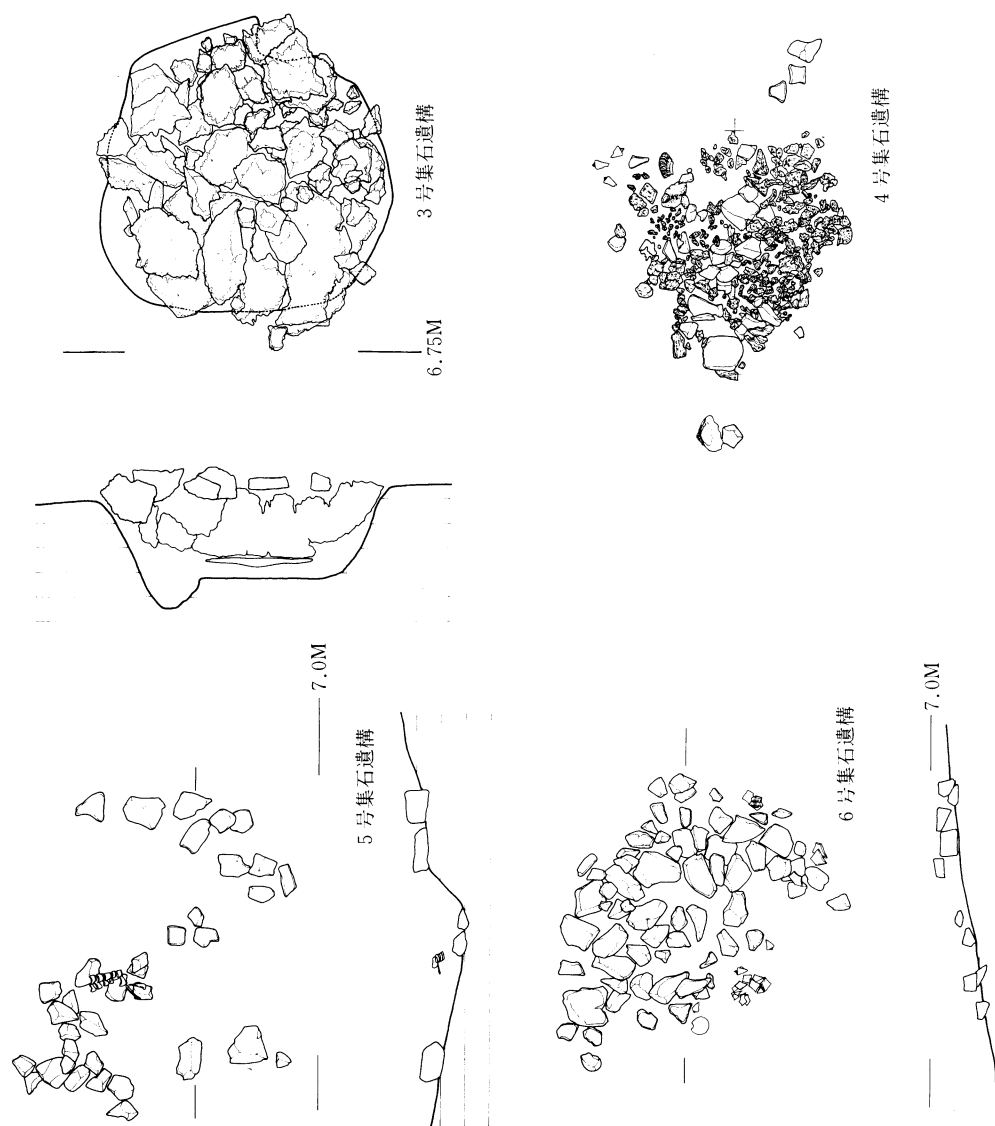
〈7号集石遺構〉 Z-31区, 90cm×80cm, 水糸高6.9m

8号集石の西側にあり、70個以上の角礫で構成する。

礫主体で構成し、礫以外はシャコガイ1点、ラクダガイ1点が含まれるだけである。また、西から東側へかけて大きく傾斜し、底面は約30度程の角度を持つ。

〈8号集石遺構〉 Z-31・32区, 120cm×110cm, 水糸高8.20m

礫が集中する部分と、散在的部分を含めて取り扱っている。礫集中部の東側に35cm×40cm程の大石が残されているが、本遺構との関係は不明であり、上記の分布範囲には含めていない。



第29図 第3地点, 3・4・5・6号集石遺構

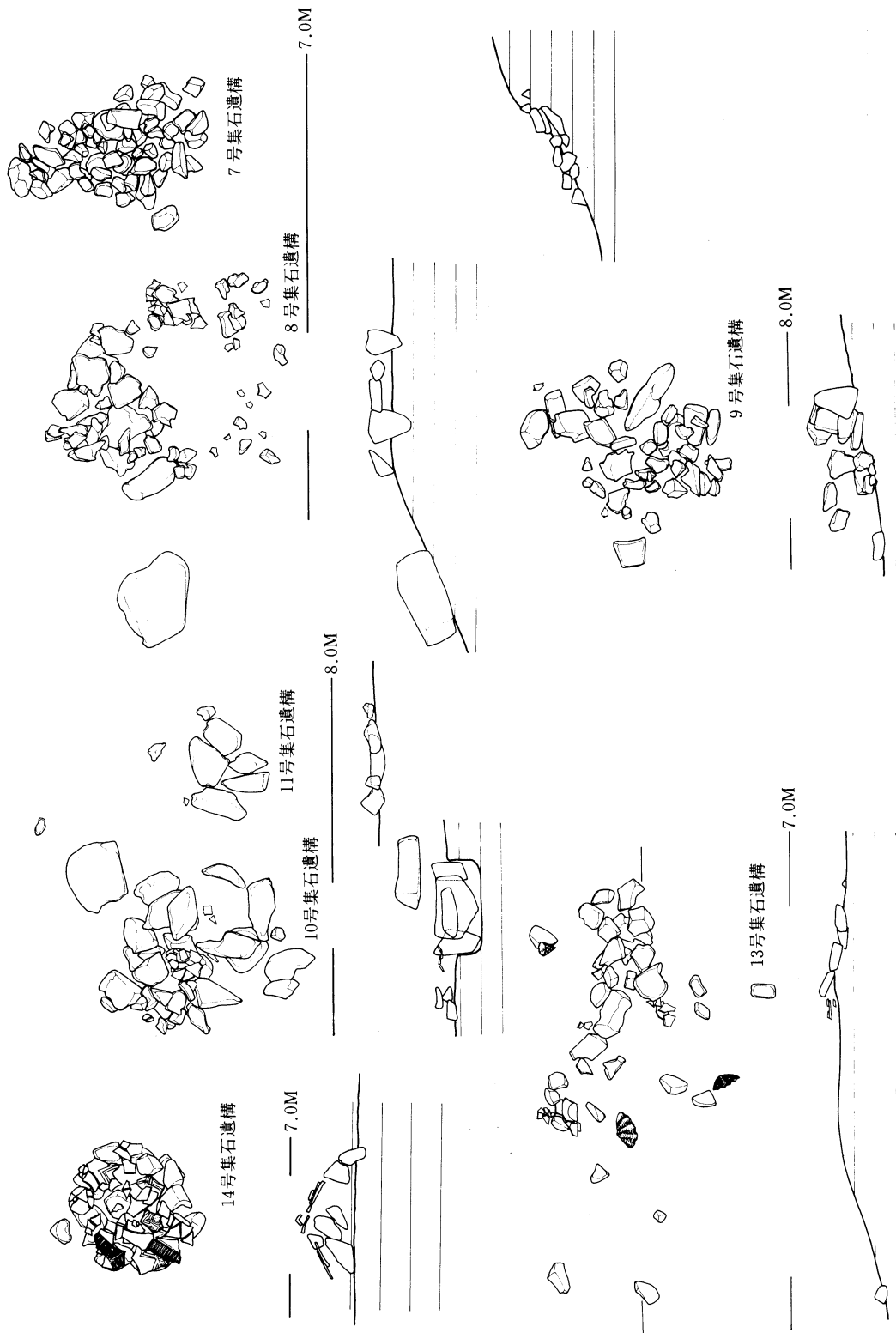
集中部の底面は、安定した状態で検出され、実測等の完了した後、凝固剤で固定し、笠利町立歴史資料館で保存するための移設作業を行ない、現在公開展示している。

なお、遺構に伴って、Ⅺ類の512が一括して出土している。

〈9号集石遺構〉 A-31, 100cm×100cm, 水糸高8.0m

第4層に掘り込まれた可能性の高い遺構で、レベル位置は高くなっている。拳大のものから最大40cm程の角礫を用い、40個程で構成している。遺構は安定した状態で置かれ、底面は水平に近い状況である。

なお、共伴遺物等は出土していない。



第30図 第3地点7・8・9・10・11・13・14号集石遺構

〈10号集石遺構〉 A-32区, 120cm×90cm, 水糸高8.0m

30個程の角礫を素材とし, 20cm以上の角礫が15個程用いられている。

炉としての構築が行われた可能性があり, No.2が炉の北側の奥壁に, No.1・No.3が側石, No.4が床石に相当するものと思われる。

共伴遺物は, 集石に接触した状態で, XI類の572が1個体出土している。

〈11号集石遺構〉 A-32区, 40cm×50cm, 水糸高8.0m

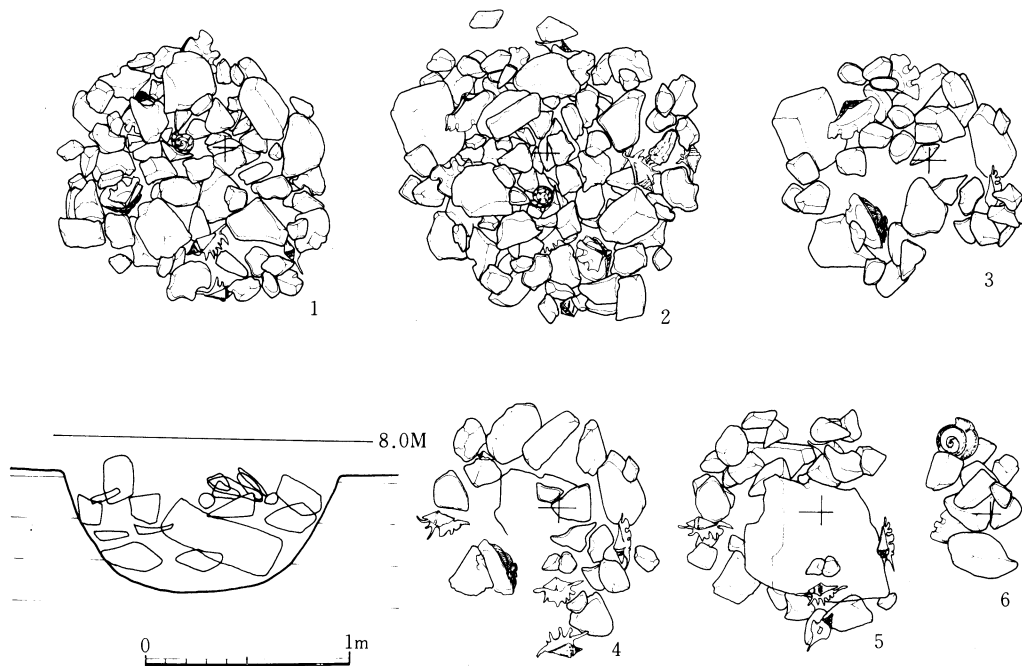
10号集石の西側に位置し, 25cm程のレベル差がある。

明確な掘り込みラインは確認できていないが, 礫面を皿状に中央部が窪んだ状態に配置されている。このことより, 敷石炉的機能を持っていたと考えられる。

〈12号集石遺構〉 A・Z-32区, 60cm×60cm, 水糸高8.0m

遺構確認面より, -30cm程土壌状に掘り込み, 土壌の中に多量の礫と貝殻を混入している。底面近くには30cm程の平坦な角礫が置かれ, 混在する貝殻は, シャコガイ・サラサバテイ・クモガイ・ヤコウ貝等である。

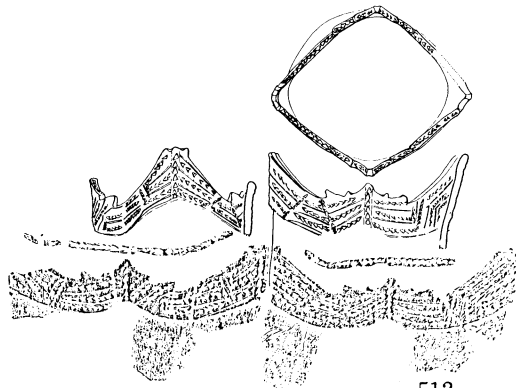
上面図は, 6枚に分けて示してある。



第31図 第3地点, 12号集石遺構



6号集石遺構

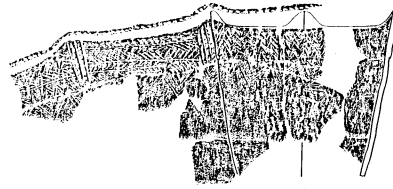


6号共伴遺物

512

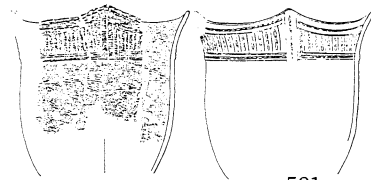


10号集石遺構



10号共伴遺物

572



521



14号集石遺構



518

14号共伴遺物



570

第32図 第3地点6・10・14号集石遺構と共伴遺物

〈13号集石遺構〉 Z-33区, 120cm×200cm, 水糸高7.0m

東西200cmに広がっているが, 中心は60cm×90cm程の範囲と思われる。

30個程の角礫で構成され, 周辺には, シャコガイ・ウズラガイ・ヤコウガイ・サラサバタイ等が散在しているが, 集石遺構との関係については明らかでない。

共伴遺物は, 底部の708があり, その他, 細沈線による鋸歯文を持つ胴部片が数点出土している。おそらく, XI類に相当するものと思われる。

〈14号集石遺構〉 Z-32区, 50cm×50cm, 水糸高7.0m

20個の角礫を集め, その上位に土器片を配している。

土器片は3個体分あり, いずれも完形復元ができないことより, 破損品を破棄したものと思われる。3個体の内訳は, XI類の518・521・570である。

第31図は, 6・10・14号集石遺構にそれぞれ共伴した遺物を示している。

6号と10号の集石遺構に伴った土器に共通していることは, 各個体の胴部上半部だけが残され, 下半部が全く残されていなかったことである。今回の整理作業での土器復元は, 小破片や細片が圧倒的に多く, 極めて難しくほとんど成功していない。そのようななかで, 比較的復元の進行した個体が, 両遺構に伴ったものであった。

中でも, 10号集石遺構は, 先にも記したように, 石床炉として構築した可能性のある石の配置が残されており, 遺構の果たした機能を推察するうえで, 注目される。

14号集石遺構では, 20個程の角礫を集め, その上に土器が覆さる状態が確認できた。土器片は, 3個体分混在して出土しているが, 復元がかなり進んだ521以外の2点は, いずれも破片である。したがって, 6号, 10号集石遺構とは性格を異にし, 土器捨て場の様相が強く, いわゆる破棄の一形態を示すと思われる。また, 一括した一時の破棄であることより, 3個の土器が同時期の所産である可能性を示しており, 土器編年の貴重な手がかりを与えてくれそうである。

2) 出土遺物—土器

Ⅲ類 基本的に第2地点の分類に準じている。

Ⅲ a類 120の1点だけである。口唇部に叉状工具による連続刺突を施し、頸部から口縁部へかけての屈曲部には、同一の施文具によって連続刺突を巡している。

Ⅲ b類 第3地点では、全く無文のb類は確認されていない。

121は、口唇部に連続刺突、122・126は口唇部に連続刺突を施し、無文のままの屈曲部には蛇行突帯、128では、口縁直下の横走る突帯と下部の無文帯には蛇行した突帯が設けられ、突帯のあり方に多様化している様相がうかがえる。130は無刻目の突帯が2条貼り付けられる。これらは、いずれも口縁部から頸部へかけての屈曲部へは、沈線文等の文様は施されていない。

Ⅳ類 頸部から、口縁部へかけて、形状・整形等の違いが認められ、いくらかのバリエーションが見られる。

Ⅳ a類 132は全体的に器肉は厚く舌状の口唇部を呈し、139は頸部から口縁部へかけて、外反が小さく直線的な立ち上がりを見せ、製作時の粘土ひもの接合面も明瞭に残される。また、139・142の屈曲部に描かれた沈線は、他と比べてやや広目の施文具が使用されている。このⅣ類土器の器形は、145や148のように最大径は胴部に位置するのが一般的であるが、147の場合、若干様相を異にし、広口の鉢形の形状を呈している。145の屈曲部の細沈線は、途中で方向を変え屈曲をつけている。153・154の口縁直下の貼りつけ突帯は、他と比べて小型であり、また、153の器肉は、特に薄い。173は器肉も厚く、頸部での屈曲も強く、異質で大型の器形である。

胴部の文様は、垂直方向の平行線文が主であるが、177・201のように交差するものも含まれている。227は、平行する曲線文を描いているが、単独したヘラで施文している。1点だけの出土で、他に類例は認められない。

Ⅳ b類 143は、復元口径80mm程で、他と比べて極端に口縁部が小さく壺形土器的様相が強く感じられる。また、口縁端部の突帯上には、叉状工具による2条の連続刺突が並走する。

144は、口唇部に円盤状の粘土板を貼り付け、円盤の上面の周辺に連続刺突を施す特異なもので、他に類例は認められない。148は、口縁部と頸部に直結する2本の突帯を貼り付け、155・156は蛇行する突帯が施されている。

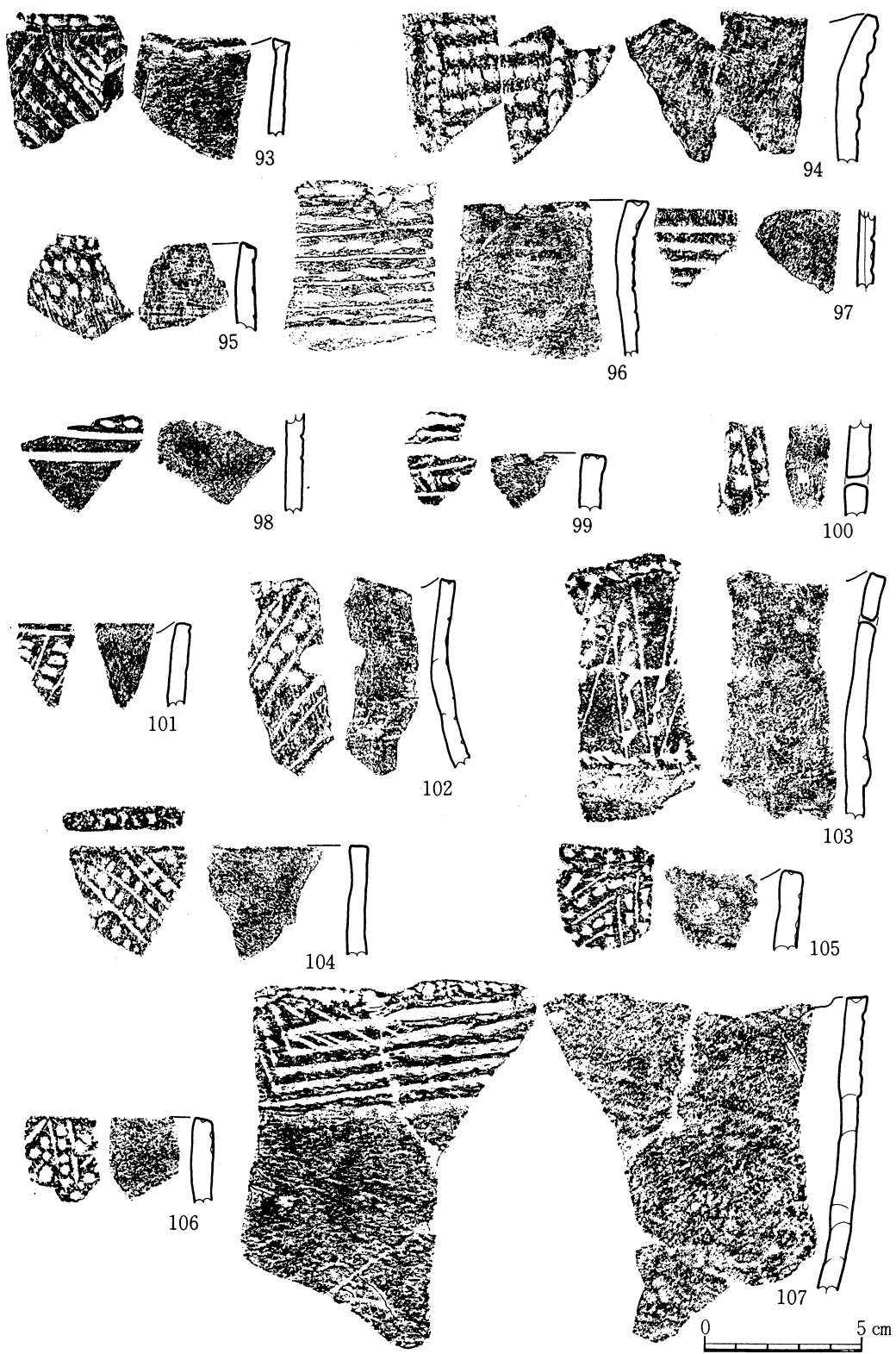
胴部や底部については、a類との区別は困難で、おそらく類似した形状・施文手法を用いたと思われる。

V類

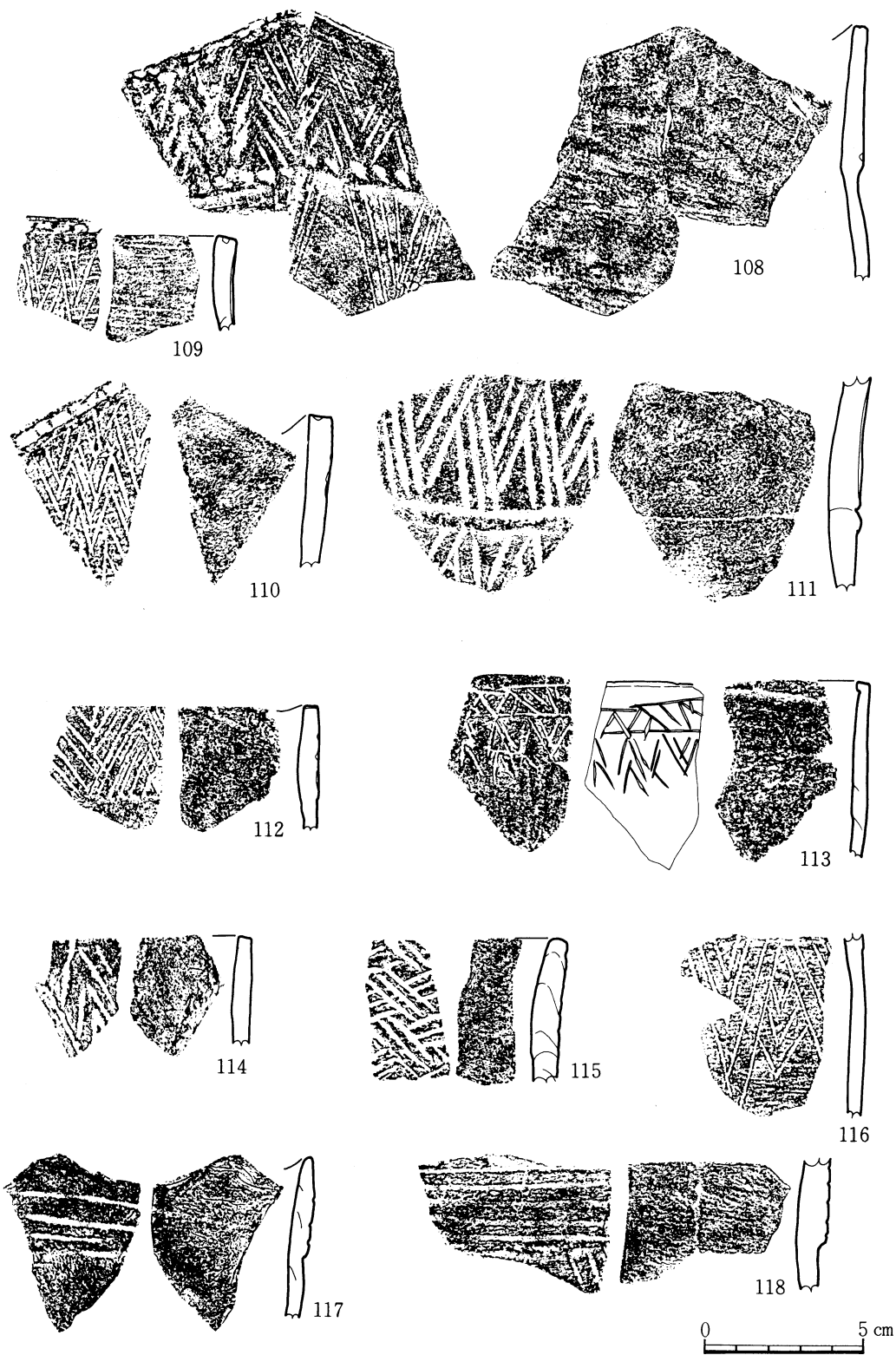
Ⅳ類土器と比べて、貼り付ける突帯の幅がより広くかつ平坦面を呈している一群である。

164～168の口縁部への貼りつけは、いずれも幅広で平坦面をなし、押し引きや連続刺突で刻まれる。166は口唇部に角状の突起をつけ、167の直交する突帯は内面にまで達している。いずれも、平坦で幅広の突帯が貼りつけられる。

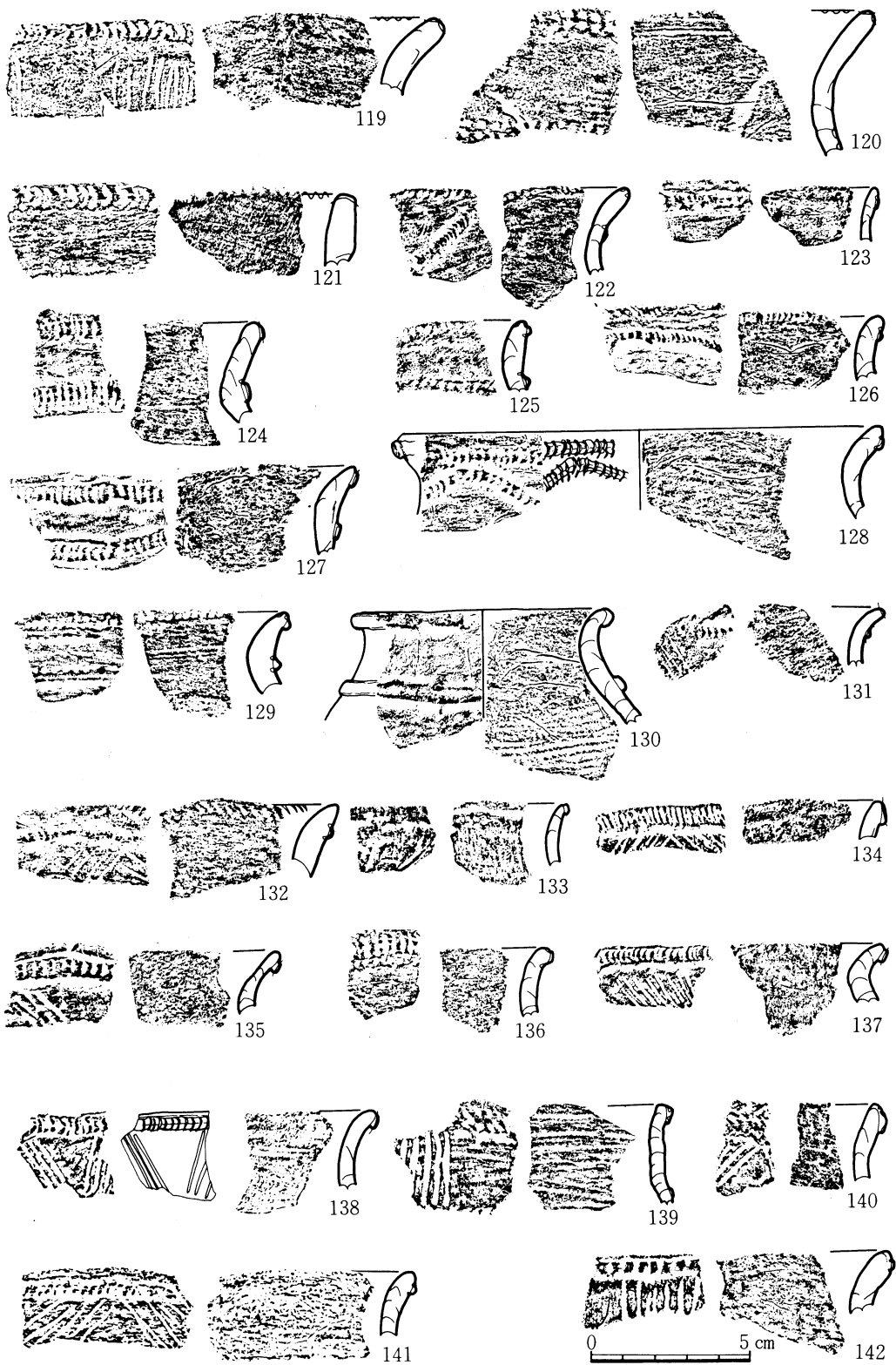
171と172は復元口径は異なるが、同一の個性を持つもので、その点同一個体の可能性がある。やはり幅広の突帯を持ち、屈曲部では口縁部と頸部の突帯を連結する突帯がつけられる。2点



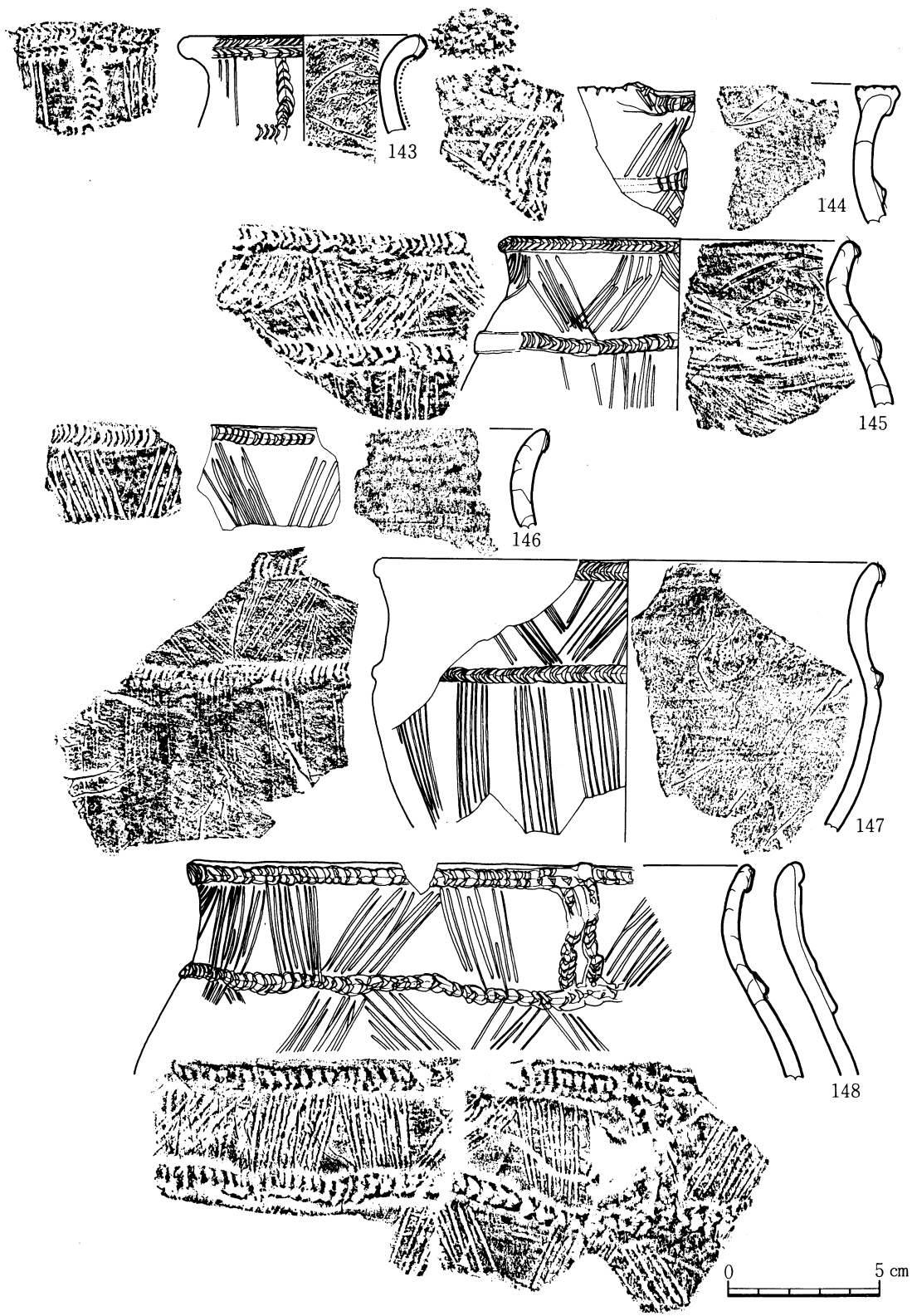
第33图 土器(第3地点) - 1



第34图 土器(第3地点) - 2



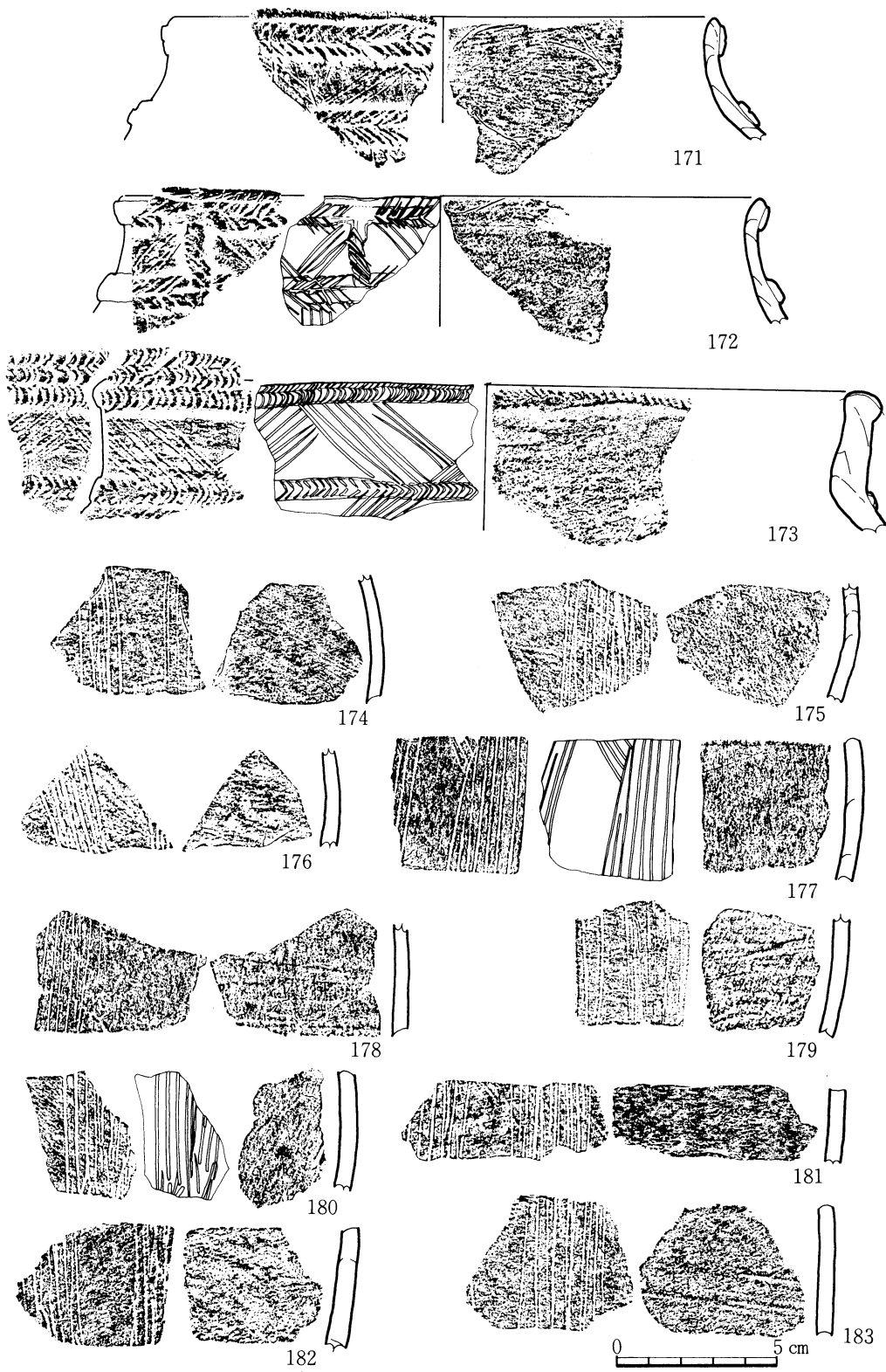
第35图 土器(第3地点) - 3



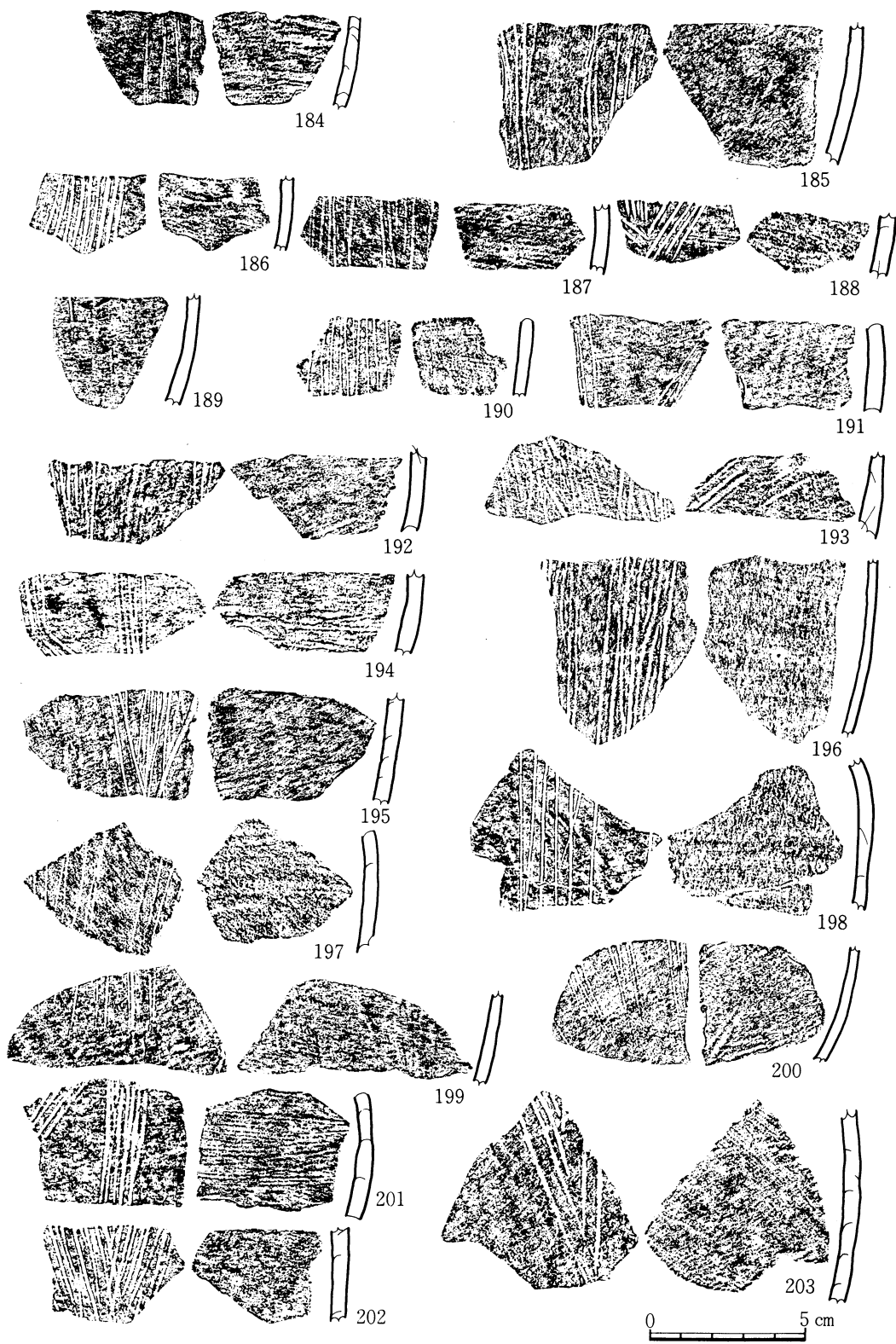
第36图 土器(第3地点) - 4



第37图 土器(第3地点) - 5



第38图 土器(第3地点) - 6



第39图 土器(第3地点) - 7

共に同一のヘラ状工具によりシャープに刻まれている。

678～680も同様な特長を持つもので、681はそれらの胴部片と思われる。平坦で背の低い幅広突帯は鋭利な工具で斜位に刻まれ、屈曲部や胴部の細沈線もシャープに描かれている。

VI類

口唇部が意図的に肥厚されている一群である。口唇部が外に傾き断面が三角形状を呈し、なおかつ、口唇部に刻み目を施したもの（VI a類）。VI類の特徴を持つもので、口唇部に細沈線、内面に刺突文等を加えたもの（VI b類）。肥厚した口唇部の傾きが弱く、平坦面に近くなり、口唇部の刻み目も明瞭さを失い、刺突や細沈線が施されるもの（VI c類）。平坦な口唇部に貝殻腹縁部を刺突したもの（VI d類）に分類される。

VI a類 231～235は共通して横方向の条痕整形がなされ、口唇部はナデ消された後に棒状工具で深い刻み目が施される。刻みの方向は、外から内へ向いている。色調は明赤褐色で明るく、他の土器類とはやや趣を異にしている。器形は口縁部片だけで明らかでないが、ゆるやかに外に開き丸味を呈し、胴部に最大径があるものと思われる。

VI b類 239・240をその典型とするもので、239は、刻目間の平坦面に斜行する細沈線を施し、屈曲部にも細沈線文が描かれる。240では、刻目は斜めに施され、刻みの方向は内側から行われている。また、屈曲部にも沈線文が描かれ、内面は不規則な刺突が施されている。

VI c類 241～245は、口唇部の傾きが弱まり平坦に近くなる。241は細沈線、242は細沈線と連続刺突、245では、3条の連続刺突文等が施されている。

VI d類 253の1点だけの出土である。内外面共に斜位の条痕調整がなされ、平坦な口唇部には、貝殻腹縁部による刺突が施される。やや内湾する形状を呈した鉢形土器で、他には類はないようである。

VII類

口縁端部に幅広の突帯を貼り付けるもの（VII a類）、突帯が小型化し、頸部に貼り付けられるもの（VII b類）とに細分される。

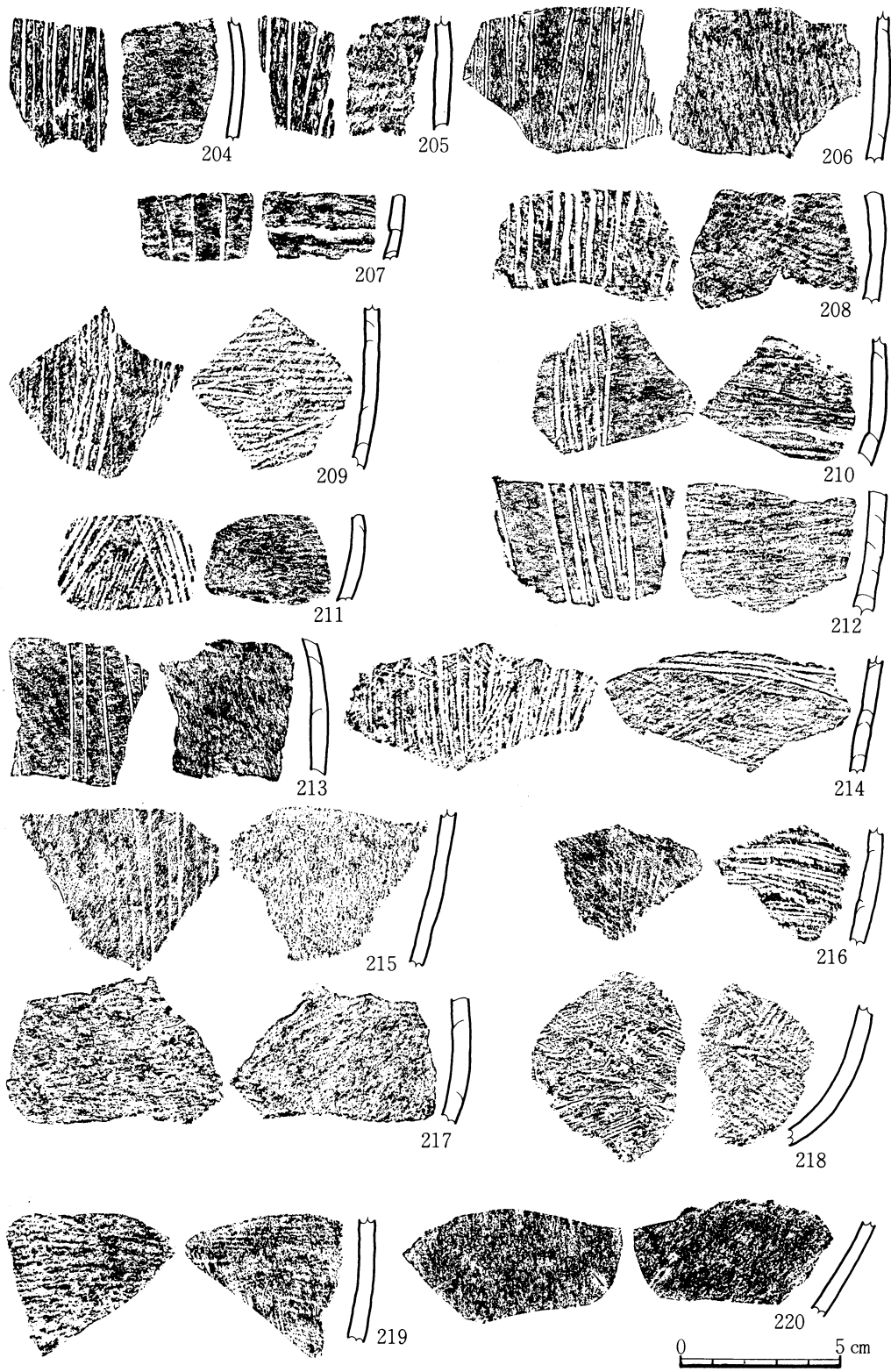
VII a類 248～249が代表的なもので、20mm幅の粘土帯の貼り付けがなされる。突帯上は、貝工具により掻き取る様に押圧（248）。249では、口唇部の両端に押圧により連続刺突、中央部に貝工具による押圧、口縁部も同じように押圧している。

VII b類 257・260の頸部の突帯上の刺突は、249の口唇部の両端に施された押圧手法と同一である。

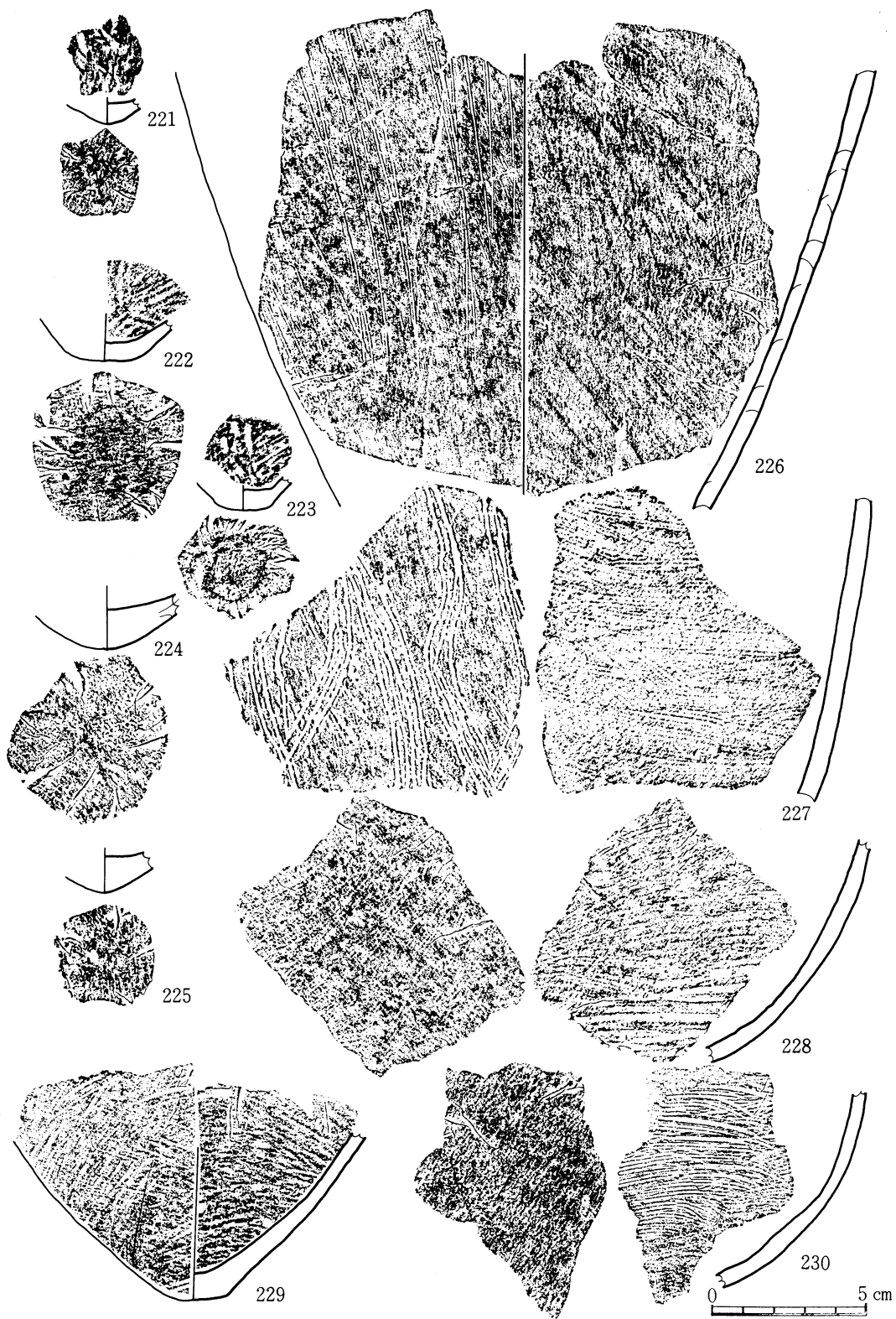
VIII類

口縁部及び文様体が肥厚したもので施文の違いにより、押し引き（VIII a類）、押し引きの間隔が遠くなり間のびした感じの押し引き、あるいは一方向への連続刺突（VIII b類）に大別している。密な押し引きを施したものは少なく、間のびした押し引きによる施文が圧倒的に多いのも特徴である。

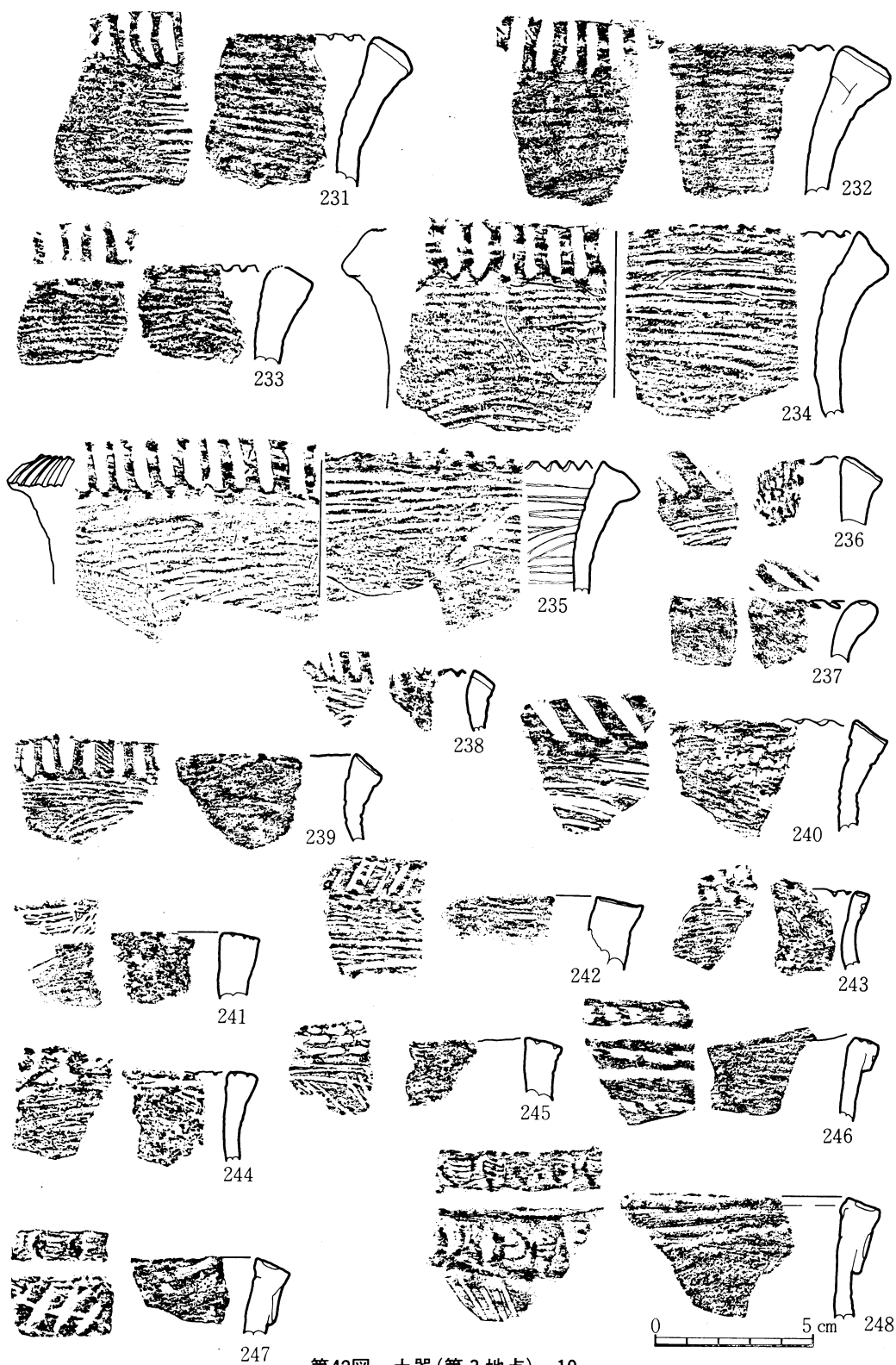
VIII a類 262がその典型的なもので、内外面を入念にナデ仕上げた後に、先端部が三角形に



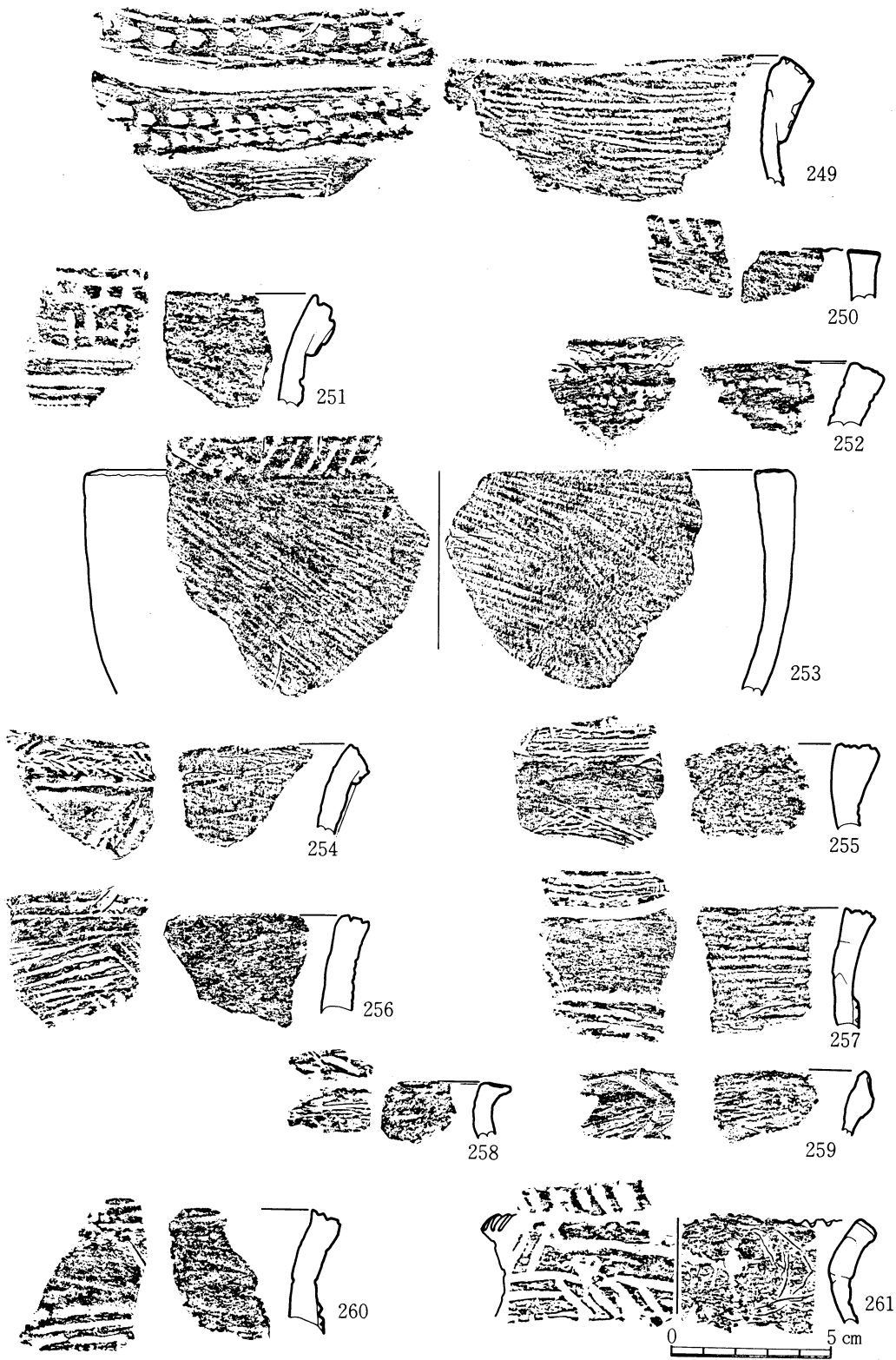
第40图 土器(第3地点) - 8



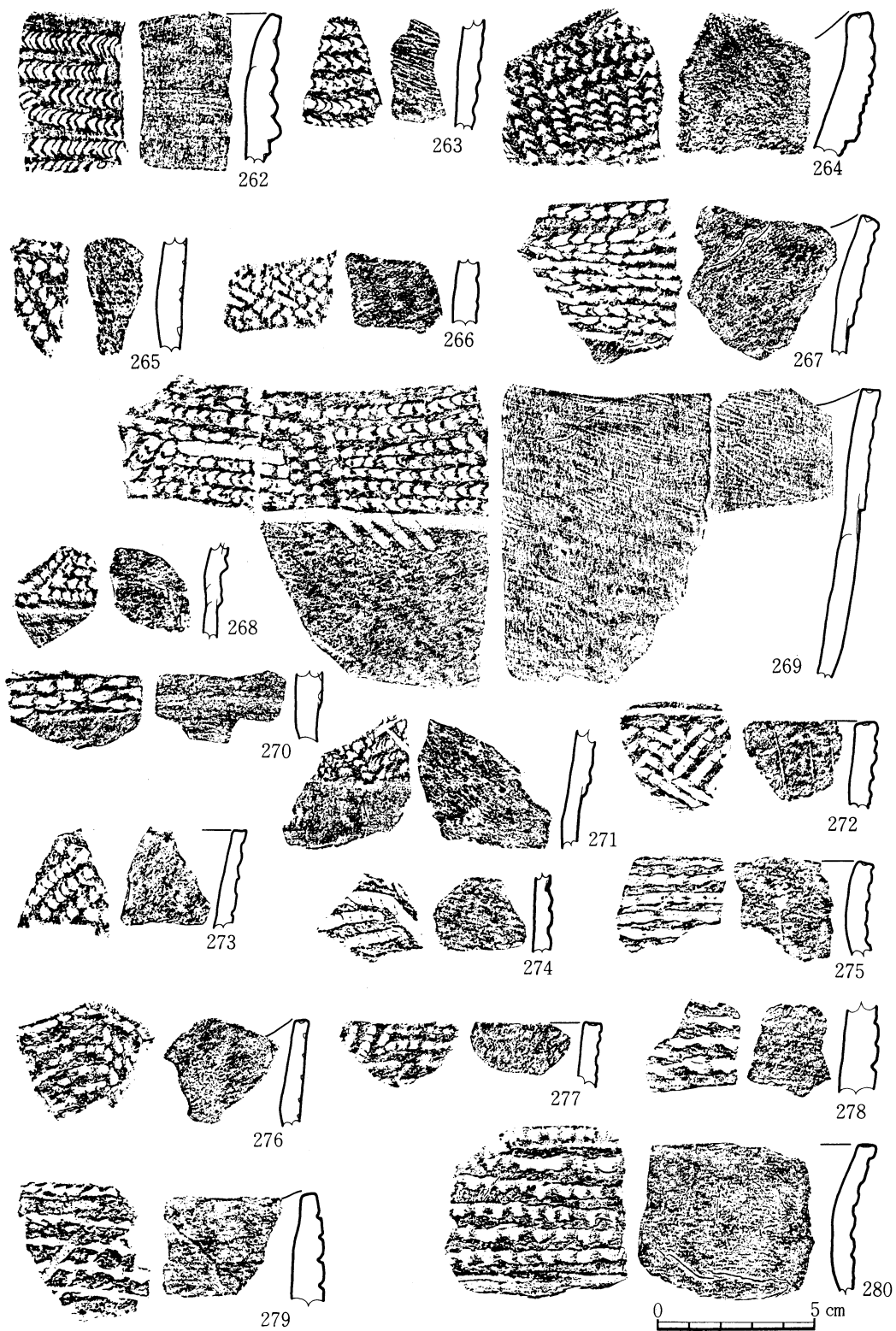
第41图 土器(第3地点) - 9



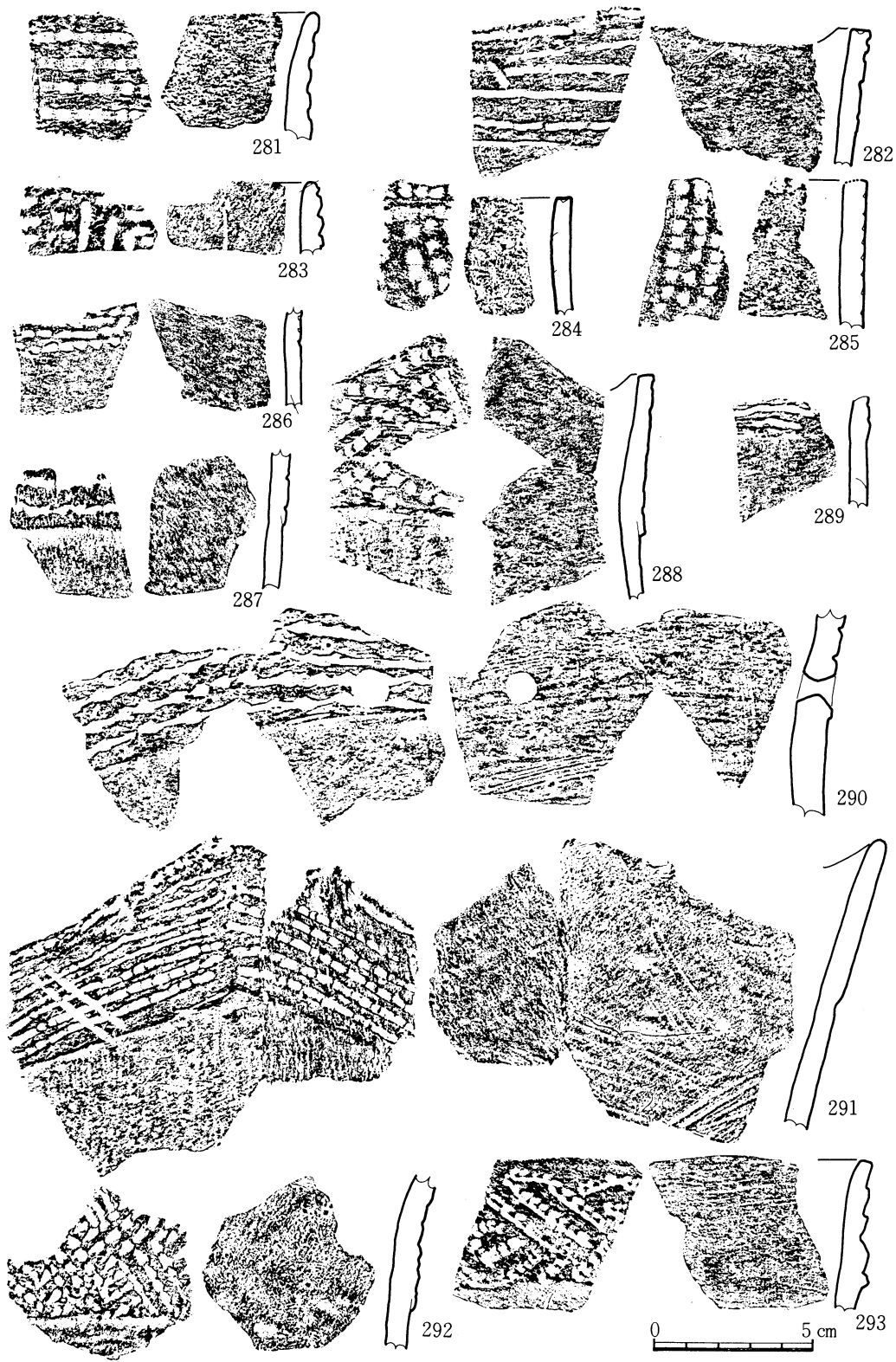
第42图 土器(第3地点)-10



第43图 土器(第3地点)-11



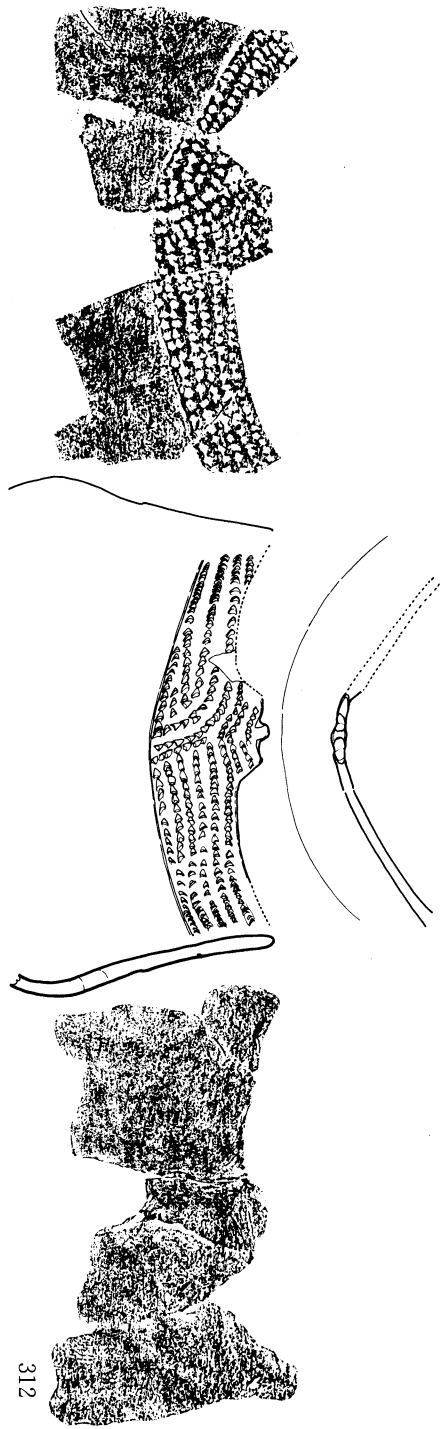
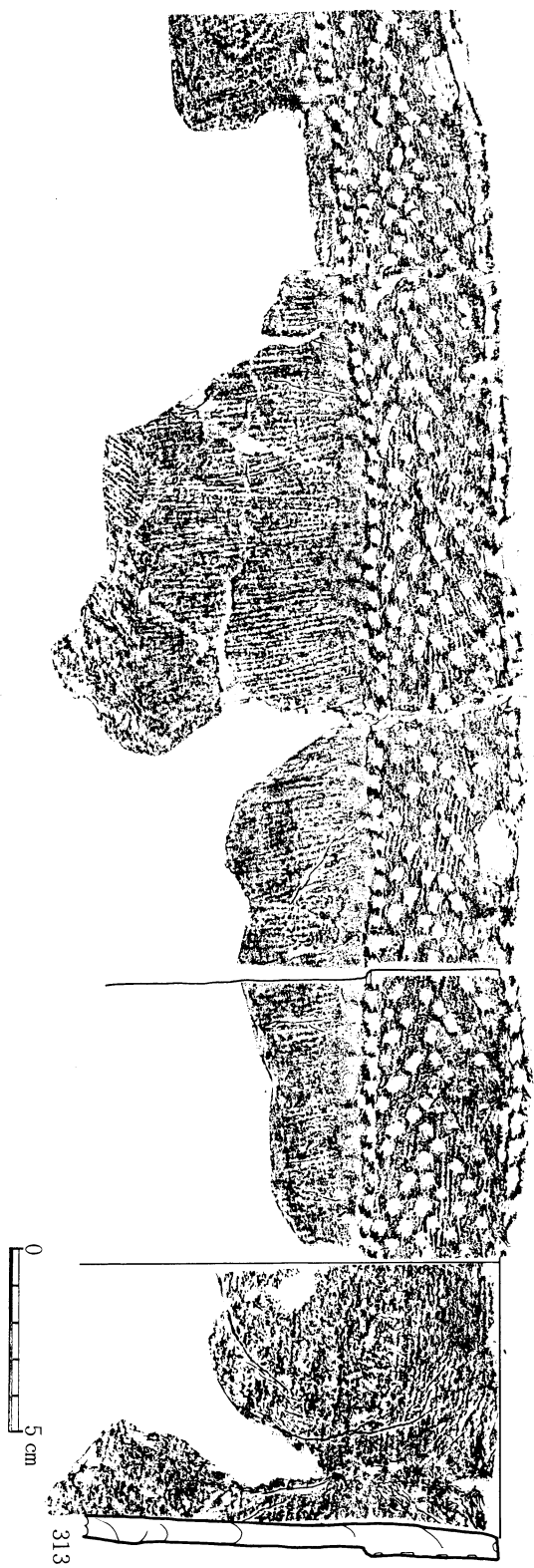
第44图 土器(第3地点)-12



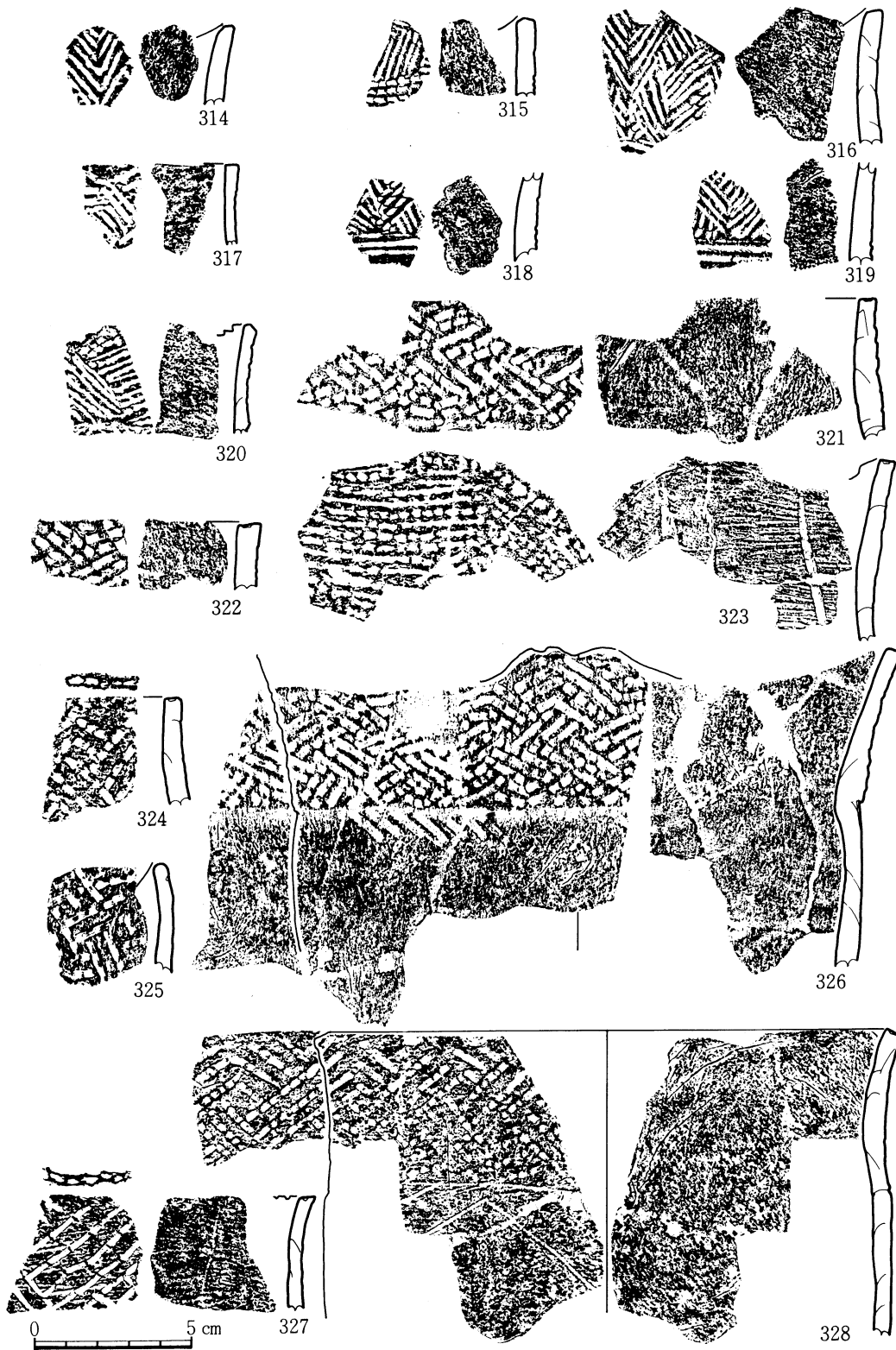
第45图 土器(第3地点)-13



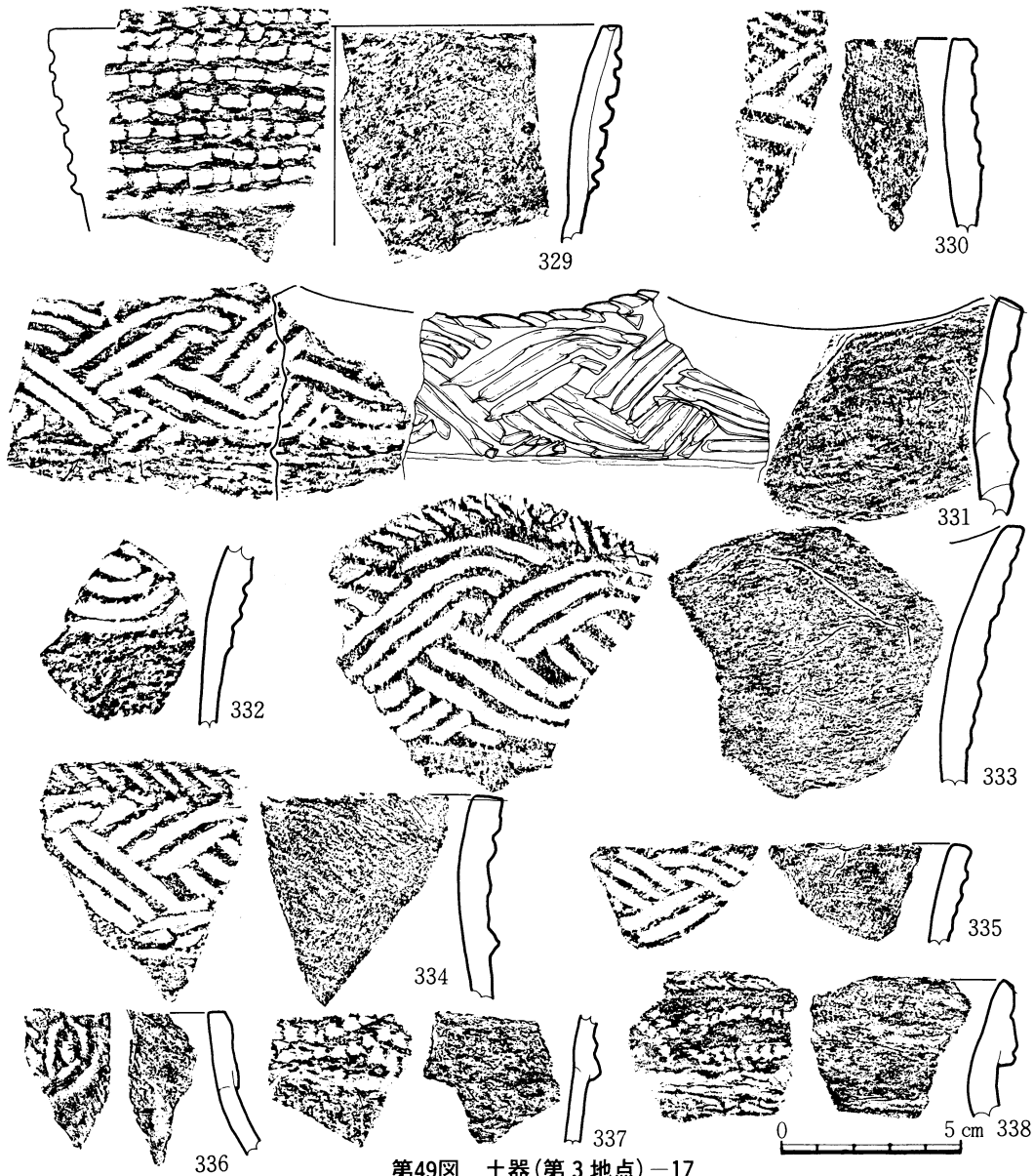
第46图 土器(第3地点)-14



第47图 土器(第3地点) - 15



第48图 土器(第3地点)-16

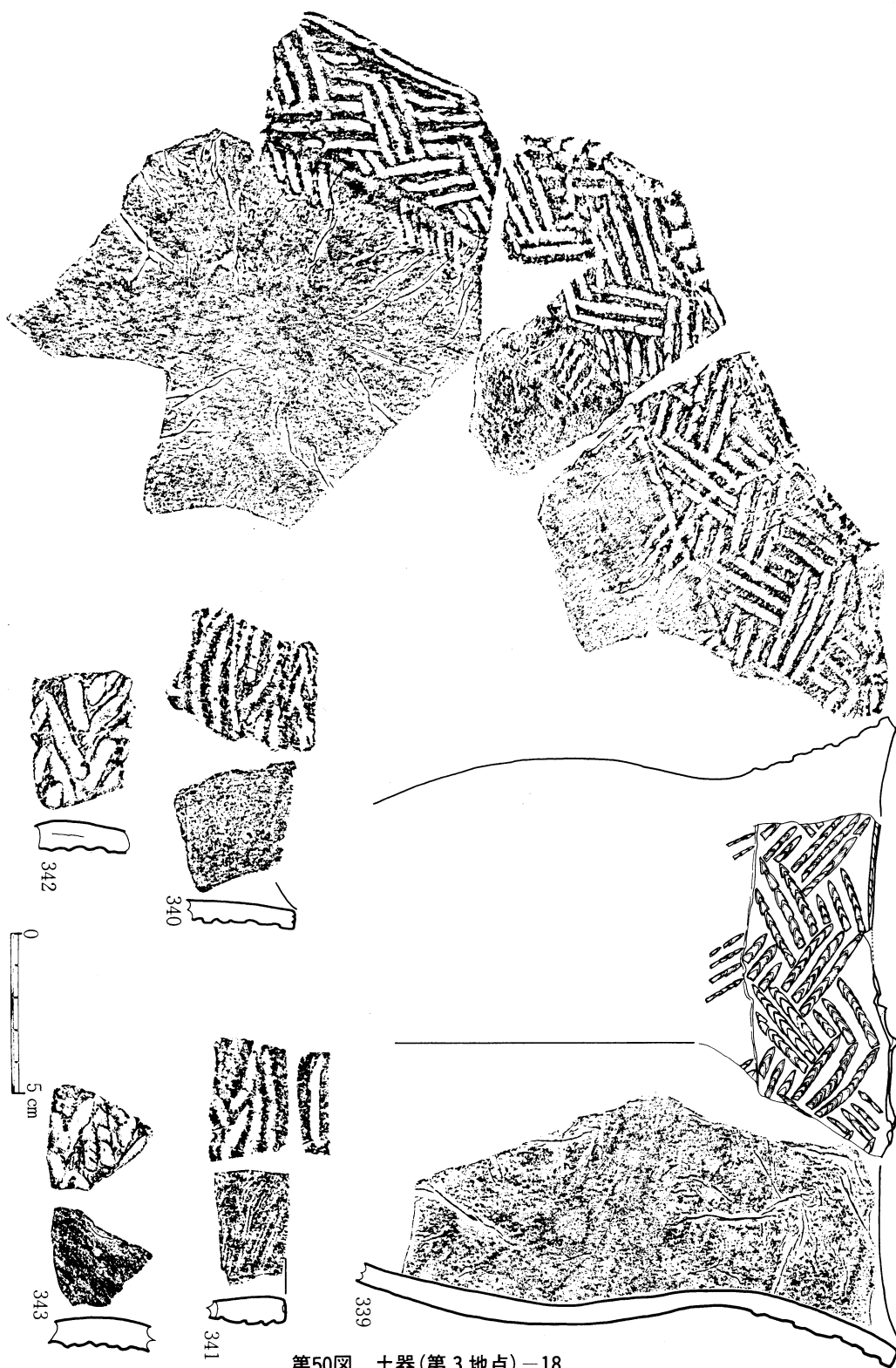


第49図 土器(第3地点) - 17

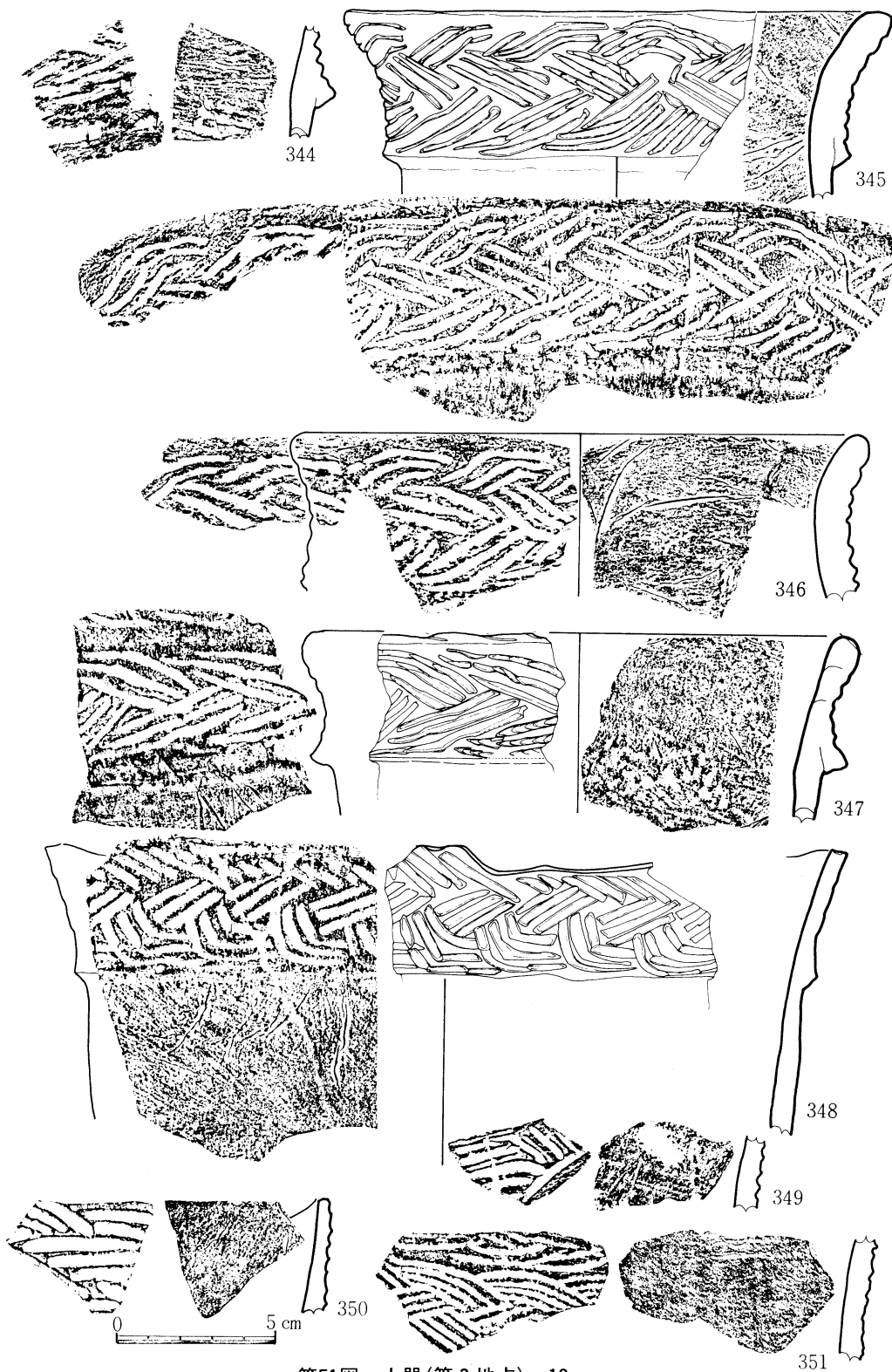
整形された工具で密に押し引いて入組文を描いている。269では、押し引きの間隔がやや粗となったもので、肥厚帯の下位にも同様に施している。全体としては数は少ない。

Ⅷ b類 Ⅷ類の中では、圧倒的に多い。b類の施文パターンは、291・304のように横位に一定方向へ施すもの、295や301のように器形のアクセント部で方向を変化させるもの、326・328・339のように3本が1組の単位でそれらを組み合わせて文様を構成(編籠文)するもの、313のように異なる方向のものを組み合わせて構成するもの等が存在している。

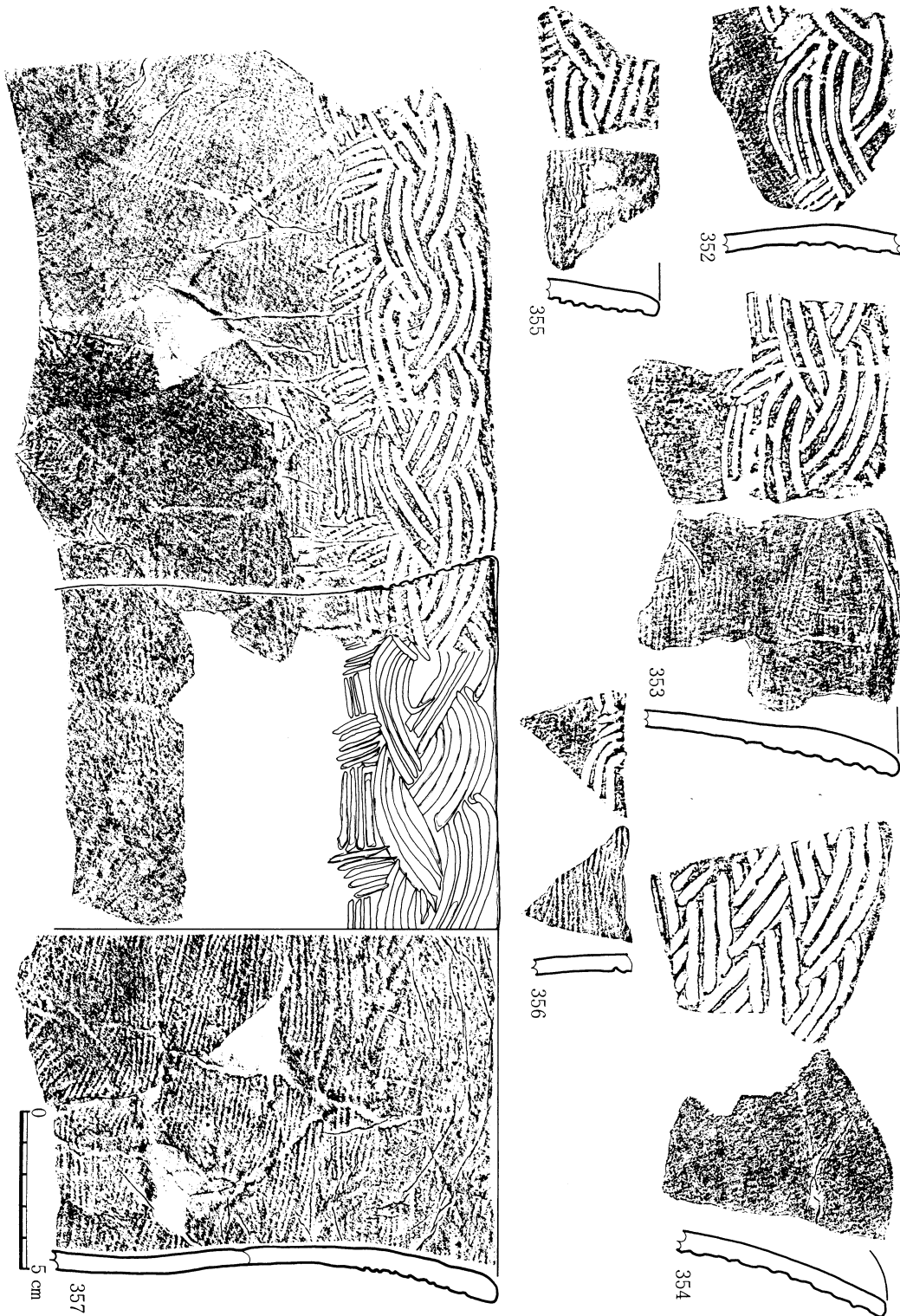
280は間のびした押し引きで、その押さえも浅く、281も同様である。283では深く押さえ込まれているが間のびが大きく、拓影では沈線状にしか見えない。293の工具は半截竹管。300~301は同一個体と思われるもので、先端部の鋭い工具で連続刺突状に施文している。306は内外面



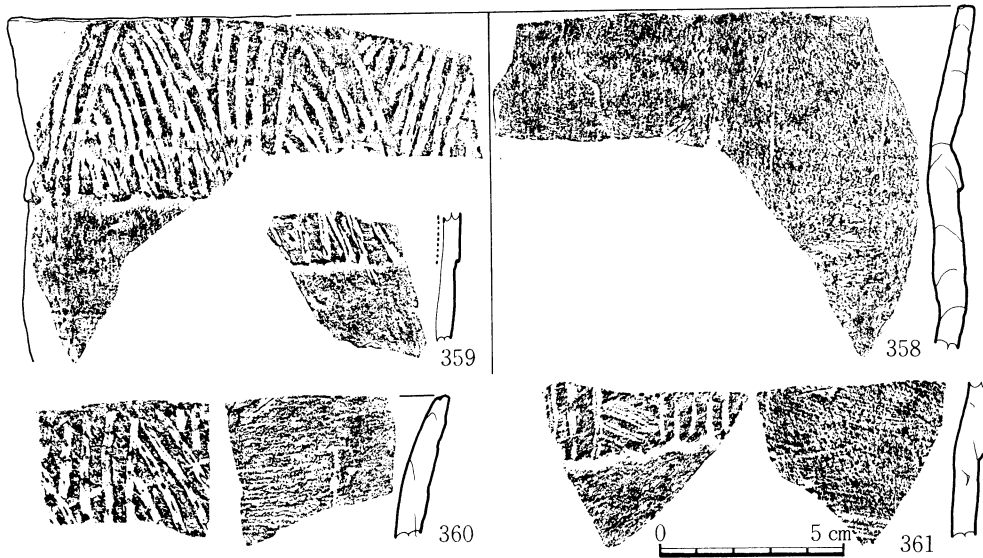
第50图 土器(第3地点)-18



第51图 土器(第3地点)-19



第52图 土器(第3地点)-20



第53図 土器(第3地点)一21

共に施文した特殊な例である。310・311は連続刺突、313も同様に先端部が方形の工具を深く刺突している。器形は円筒形を呈し、胴部では縦位の条痕が著しい。312は薄手で硬質の精製土器である。特殊な器形を呈し、口縁部上面観は方形で最大径は胴部にある。山形口縁の頂部の左右に削りを加え、中心部だけ乳頭状に突起している。なお、相対する山形部は同一の形状をなし、左右の山形部の形状は異なる可能性が高い。314～316、318・319は同一個体の可能性が高い資料で、細い工具で浅い間のび押し引きを施す。326の山形口縁は2ヶ所で抉られ、321、322と同一個体の可能性が高い。328では文様帯の肥厚は見られず、押し引きも極めて浅く、間のびしている。また、内面にも縦位の浅い細沈線が描かれ、324と同一個体の可能性が高い。329は1点だけの出土で、深く押し引かれている。336、338は壺形土器の可能性もあるもので、口縁部文様帯が意図的に肥厚されている。339、上面観は方形、五段の階段状の山形口縁を呈し、肥厚した文様帯に編籠文状に間のび押し引きを施す。拓影では沈線文に写る。358～361は同一個体で、叉状工具を縦位に押し引いている。

Ⅸ類

沈線により規則性のある文様構成をなす一連の土器群で、やや幅の広い工具から細い工具まで用い、編籠文を文様構成の基本とし種々展開されている。

弧状の曲線を施文の主体とするもので、総じて幅広の工具を用い、一部には押し引きの痕跡を留めるものも含む(Ⅸa類)。直線化した短沈線でa類同様の文様を構成するもの(Ⅸb類)。直線化した短沈線の組み合わせにより「く」の字状の文様構成を持つもので、編籠文とはやや距離が感じられる(Ⅸc類)。横走る沈線間に「く」の字状の短沈線を組み合わせたもの(Ⅸd類)に細分する。

Ⅸa類 331～334は同一個体と思われるもので、332と334は掲載後接合している。口唇部はいずれも斜めに刻まれ、3本1単位で弧状に描き331の一部には押し引きの痕跡が残される。

345と346は復元口径に差があるが、同一個体の可能性が高い。347まで一部に押し引きの痕跡が

残されている。348は、凹線が方向転換し屈曲する位置に押し引きの痕跡が残される。また、348の胎土には多量の金雲母が含まれている。350と354は、薄手で硬質の焼成で規則性のある文様を描き、同一個体の可能性が高い。351では4本1単位で描かれる。357は口縁部が外反する形状をなすもので、3～5本の弧状の凹線で文様を構成している。385～387も同一個体で、上面観は方形を呈す。3本1単位でヘラ状工具をやや寝かせて描いている。

Ⅸb類 362, 363はいずれも焼成前に穿孔し、極めて類似した個性を持っている。沈線はやや細くなり、直線化した文様を呈している。371では明確な規格化が見られる。376は一部に押し引きの痕跡を残している。379や381の内面の沈線は明瞭である。383は山形口縁。384の口縁は特徴的である。388, 389は同一個体と思われるもので、3本と4本の単位である。422の穿孔も焼成前に施され、同個体には4個認められる。421や422等では、編籠文が完全に直線化し固定化していることがうかがえる。433は4段のステップを持つ山形口縁で、3～4本単位の構成は見られず、形骸化している様相を示している。571は、31区南壁（断面ベルト）の第4層から出土した小型の深鉢形土器の完形品であり、本遺跡唯一の完形土器でもある。上面観は方形を呈し、胴部では楕円形、底部ではほぼ円形をなしている。山形口縁で、頂部は挟られ凹面を呈し、口唇部はヘラ状工具で斜めに刻まれる。文様帯は、若干肥厚し、縦、横方向の沈線で文様を構成している。

Ⅸc類 406は肥厚した文様帯に沈線で「く」の字状に施文したもので、大型の土器である。412, 416も同様の文様構成を持つもので、いずれも大型の土器である。420の外面の文様はc類と同一であるが、類を異にした方が良いかも知れない。440～443は同一個体と思われるもので、上面観は方形の筒形土器である。繊維質の施文具を用いたと思われ、線条痕が残される。444～446では先端部の鋭い工具で、細沈線が施されている。

このc類でも、b類と同様、施文具に多様化が認められる。

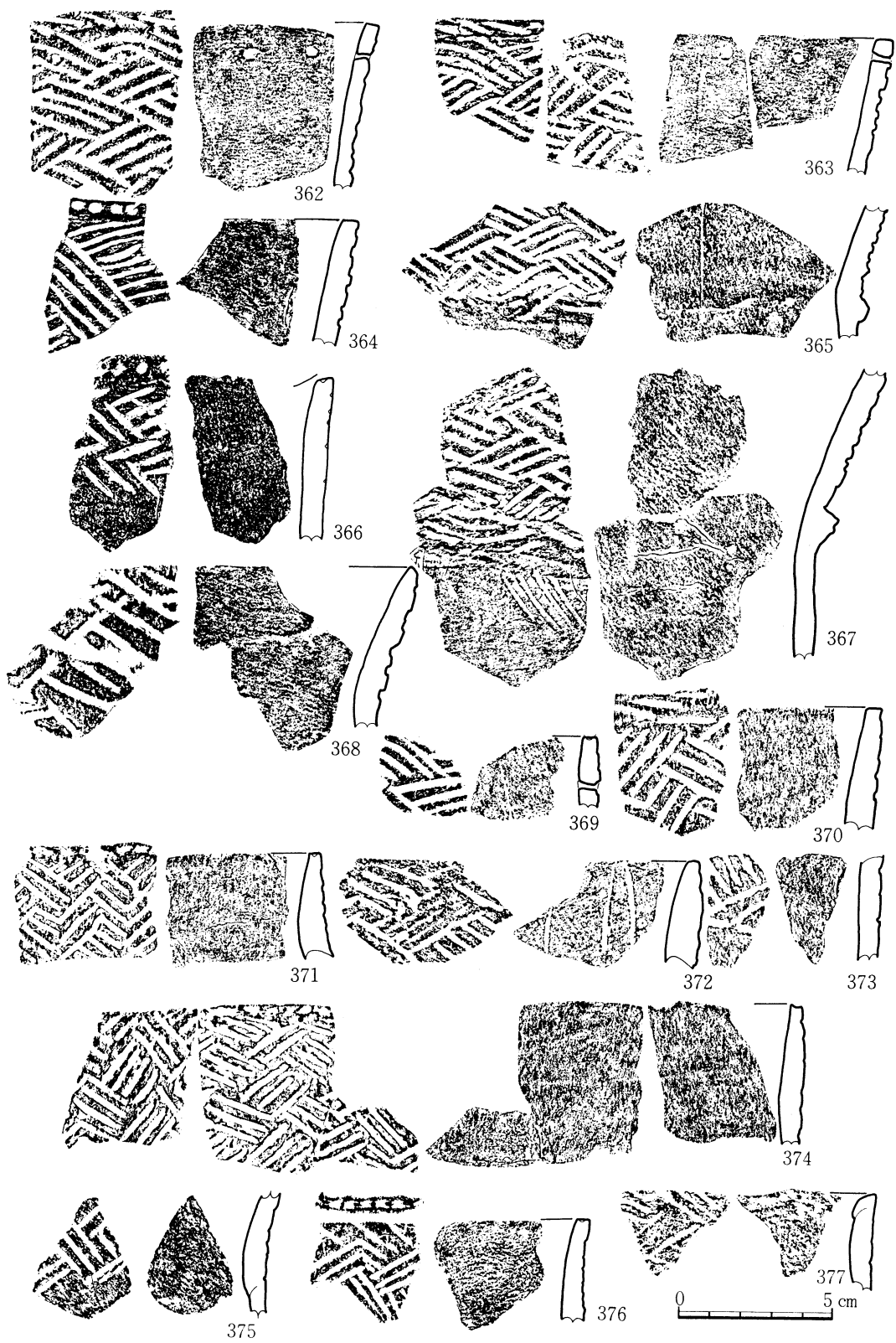
Ⅸd類 458～464の資料であり、羽状文様の規則性のある構成が見られ、いずれも、器肉は薄く硬質で、直行する器状を呈している。

X類

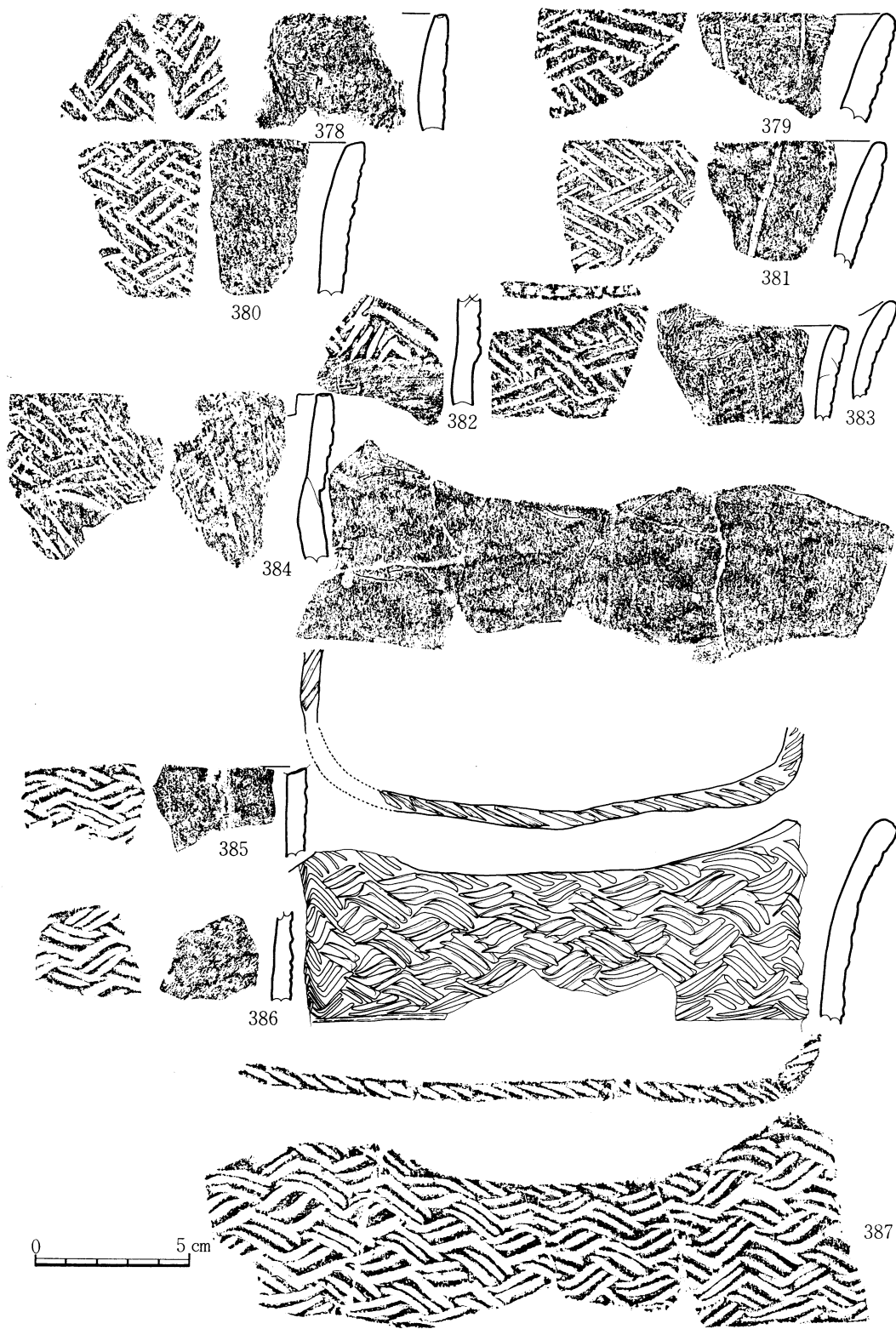
平行する沈線文で文様を構成するもので、肥厚した文様帯に斜行する平行沈線を施すもの（Xa類）。横位に平行沈線を施すもの（Xb類）。縦位の平行沈線を施すもの（Xc類）に細分される。

Xa類 467と469, 472の3点で前2点はおそらく同一個体と思われる。口唇部は深い連続刺突が施され、口縁部の文様帯は若干肥厚し、ヘラ状工具で鋭い沈線が描かれる。また、口唇部の一部には瘤状の小突起がつけられる。472は入念にナデ消された後に、施文し、胎土には多量の金雲母が含まれる。

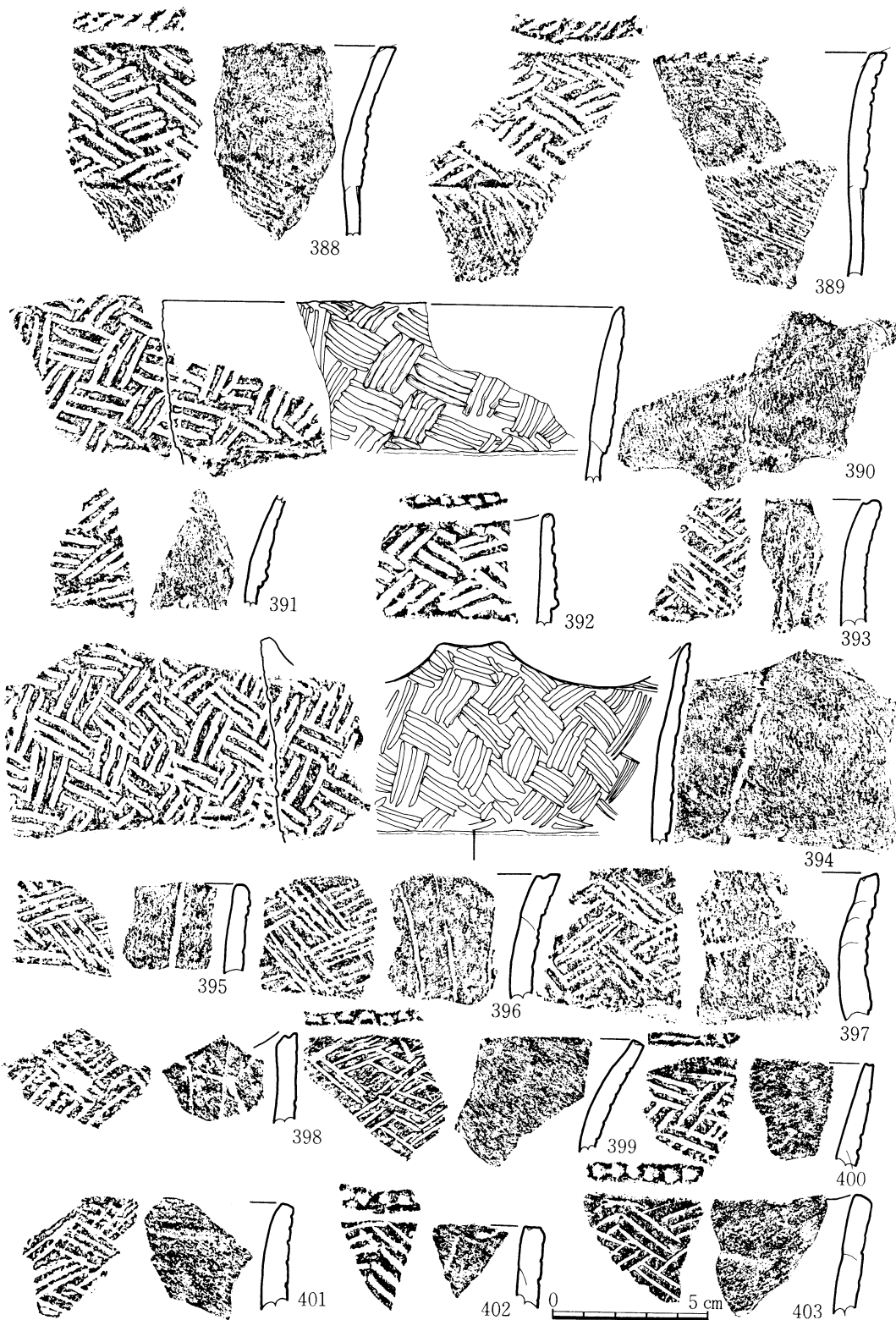
Xb類 466は繊維質の施文具を用いたと思われ、線条痕が残されている。470の文様帯は肥厚し、477もその可能性があり、さらに穿孔は焼成前になされている。471, 476は薄手で476は軟質の焼成である。



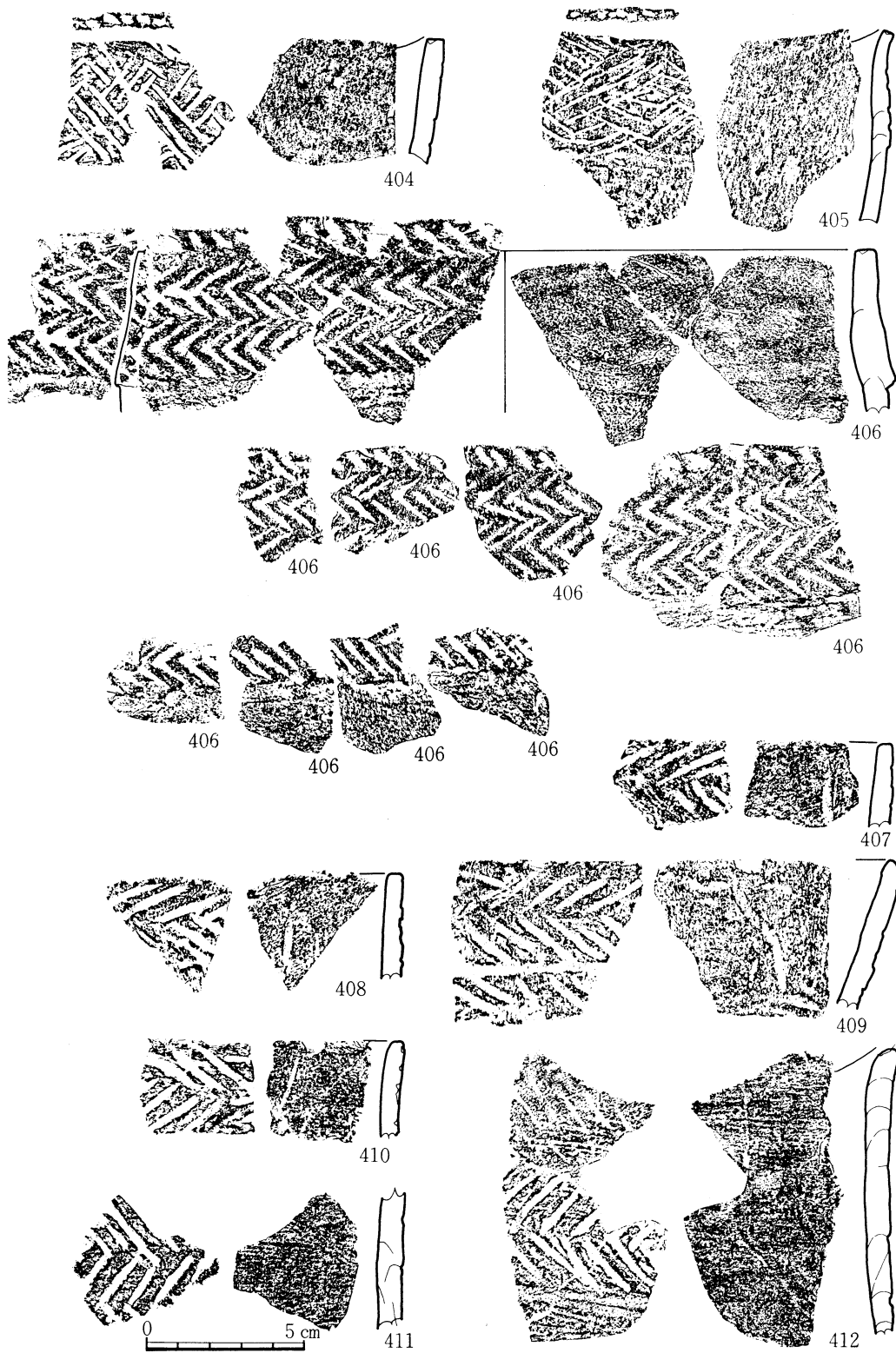
第54图 土器(第3地点)-22



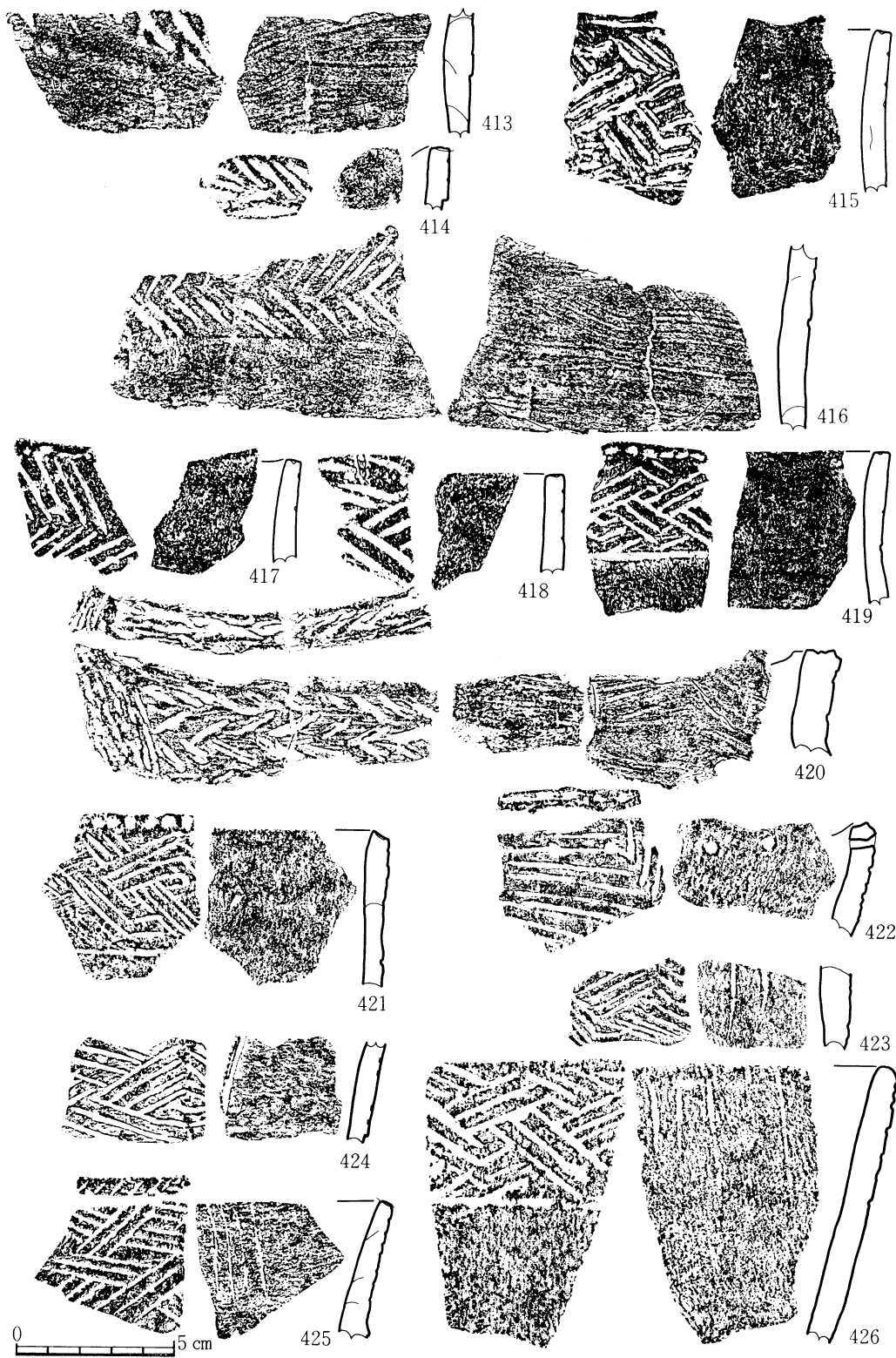
第55图 土器(第3地点)-23



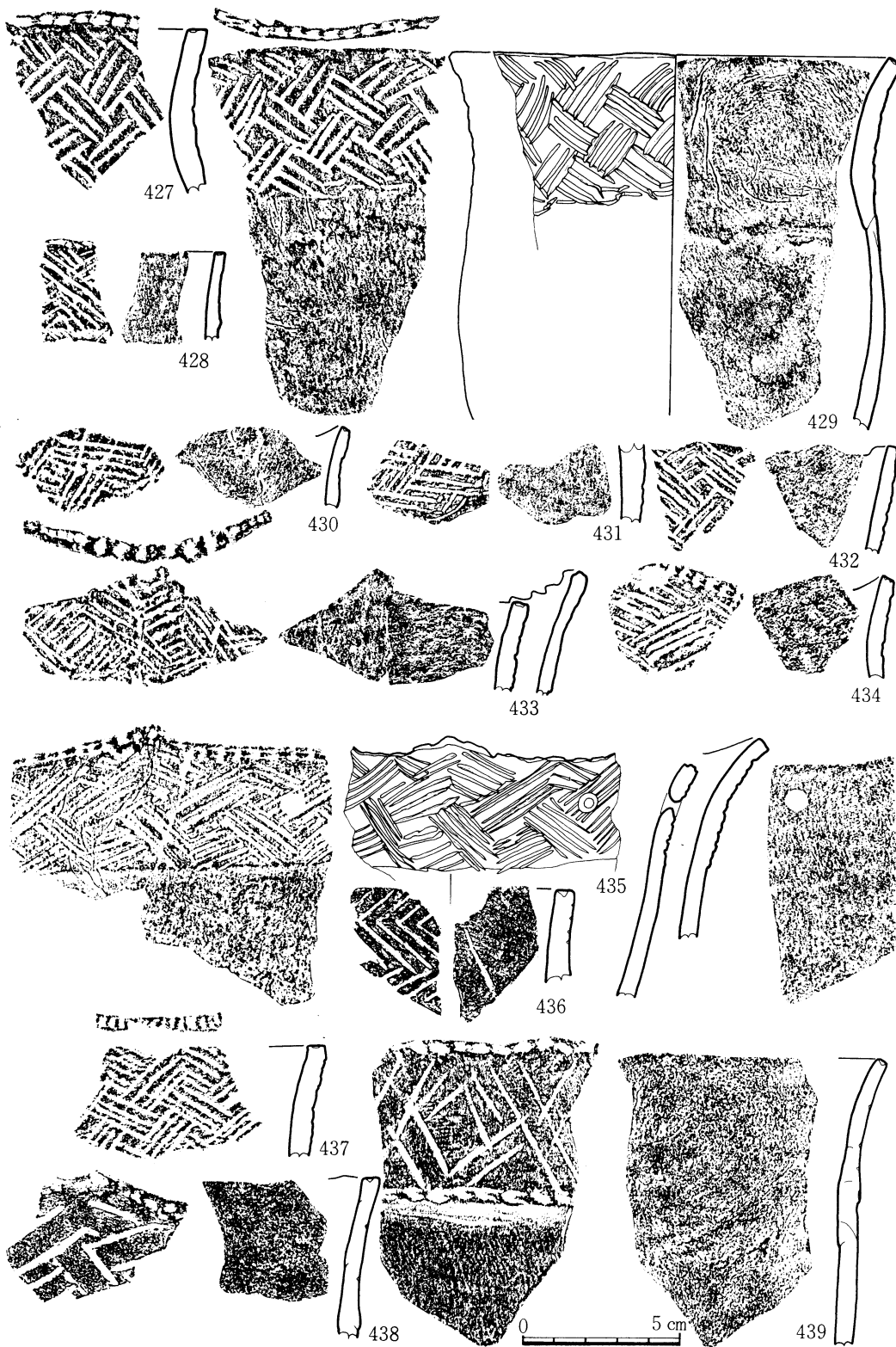
第56图 土器(第3地点)-24



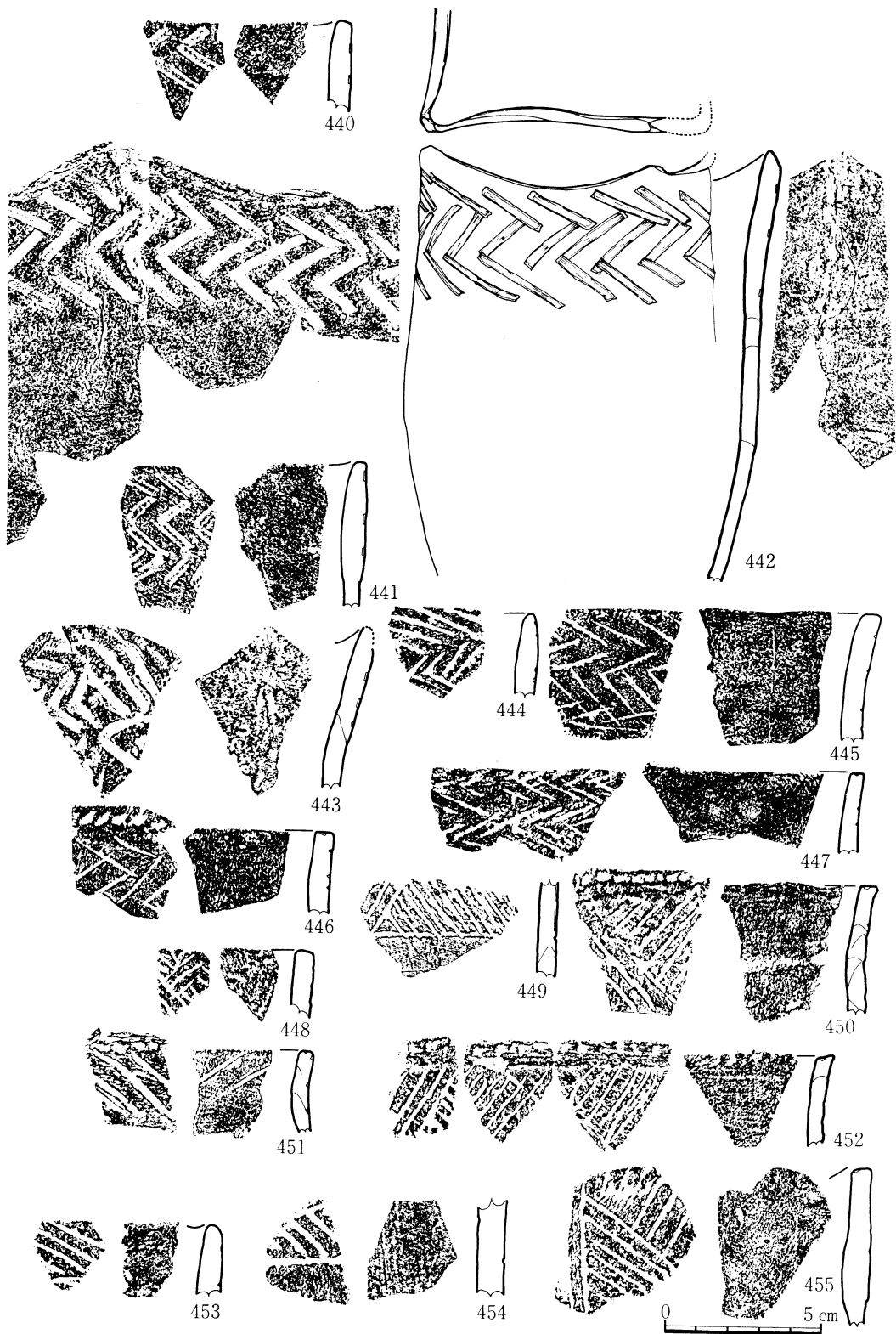
第57图 土器(第3地点)-25



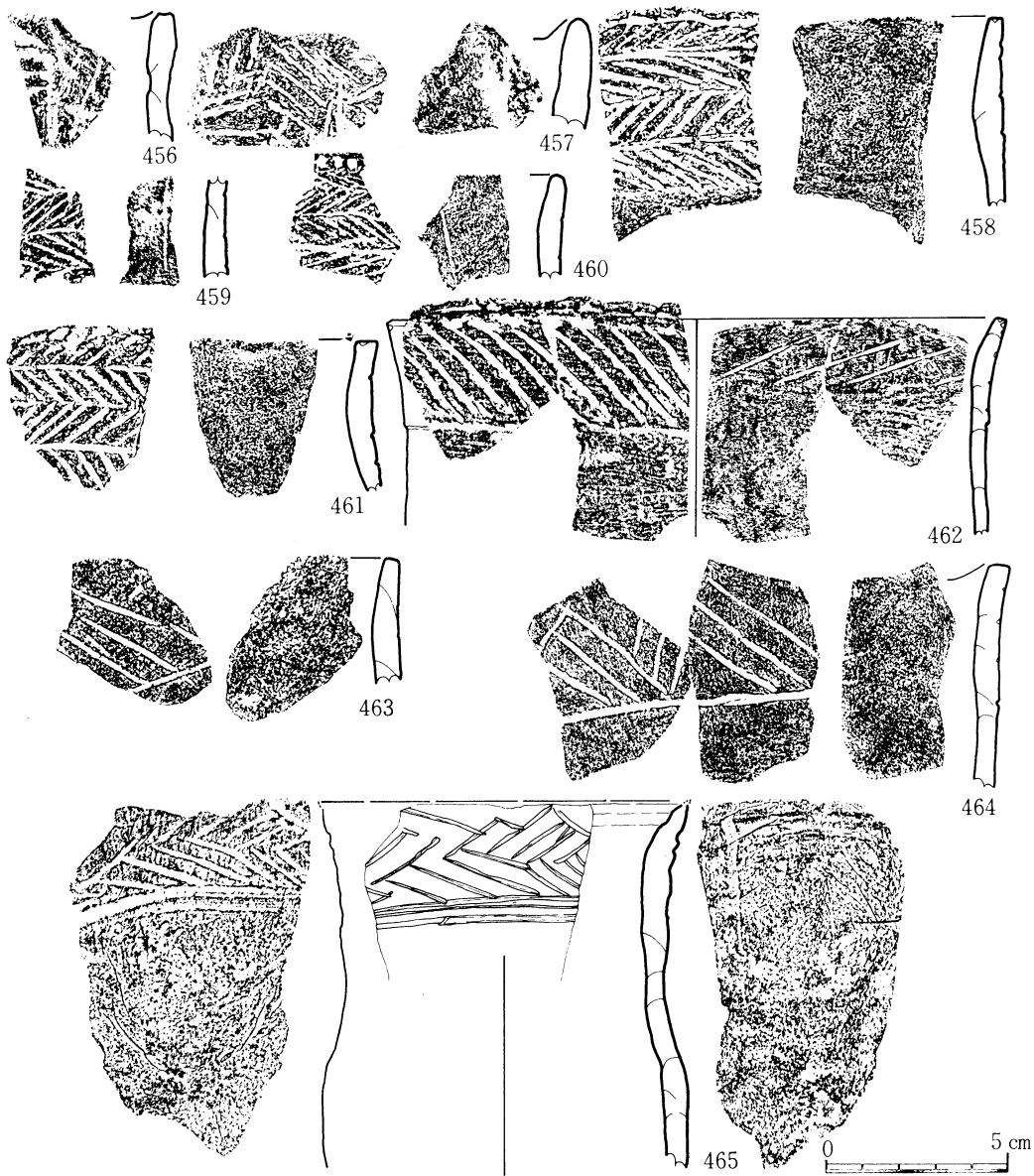
第58图 土器(第3地点)-26



第59图 土器(第3地点)-27



第60图 土器(第3地点)-28



第61図 土器(第3地点)-29

Xc類 478, 479の2点で、同一個体と思われる。476同様、軟質である。器形等は不明で、口縁部は波状を呈するようである。また、口唇部も舌状を呈している。

XII類

口縁部文様帯を上段と下段に区分し、口縁端と文様帯下端に同一の施文具により、間のび押し引き及び連続刺突を施したものである。上段と下段を細沈線で結んだものを(XIIa類)、連続刺突で結んだもの(XIIb類)と二分している。

XIIa類 480~482の3点だけである。480と481は同一個体と思われるもので、やや軟質の焼成であるが、薄手の良質な資料である。文様帯ははいねいにナデ消され、口唇部にも連続刺突

を施し、山形口縁を呈している。

XII b 類 483と485は同一個体と思われ、器肉は厚く硬質の土器で、口縁部は山形をなしている。文様帯は肥厚し、先端部が三角形の工具で押し引き、連続刺突を施している。施文部は、口唇部、文様带上段と下段、肥厚部の接合部で、さらに、上段と下段を3条1組の押し引きで連結している。486も前記と同一の文様構成を持つもので、やや小ぶりの土器片である。施文は、押し引きが消失し連続刺突で行なわれる。やや軟質の焼成であるが、多量の金雲母を胎土に含み、外面には多量のススが付着している。

XIII類

口縁部が山形を呈す鉢形土器で、山形口縁部の直下に縦位の粘土紐を貼りつけ、瘤状の隆起帯を持つものである。

XIII類 487・488の2点だけである。口唇部に連続刺突、隆起帯と器面に縦方向の連続刺突が施され、刺突は上から下へ斜めに深く押されている。文様帯と胴部を区分するための1.5cm程の短沈線が間隔を置いて描かれている。

XI類

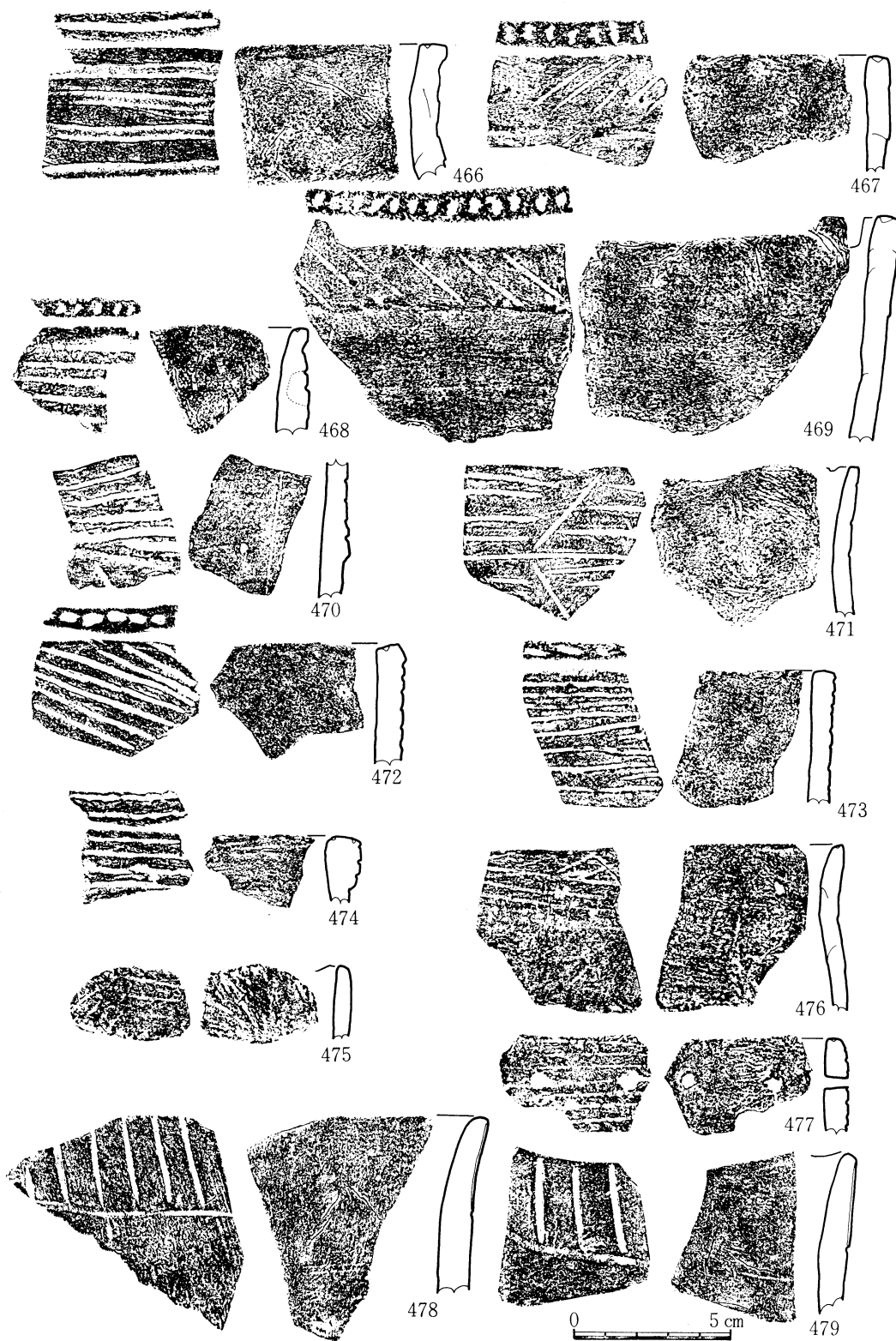
口縁部は、平口縁と山形口縁をなすものがあり、口縁部がゆるやかに外反する鉢形土器が基本となる。施文は口唇部、口縁下位（文様帯は肥厚するのが一般的で、若干は肥厚しないものもある）が圧倒的で、胴部に鋸歯文様の沈線文を施すものも存在する。文様は沈線文と間のび押し引き文、連続刺突文の組み合わせで構成される。横、縦、斜め方向に沈線を引き、その間に間のびした押し引きや連続刺突を充填しており、沈線が区画文の役を果たしている。

また、内面にも縦位の浅い沈線が描かれているものもある。

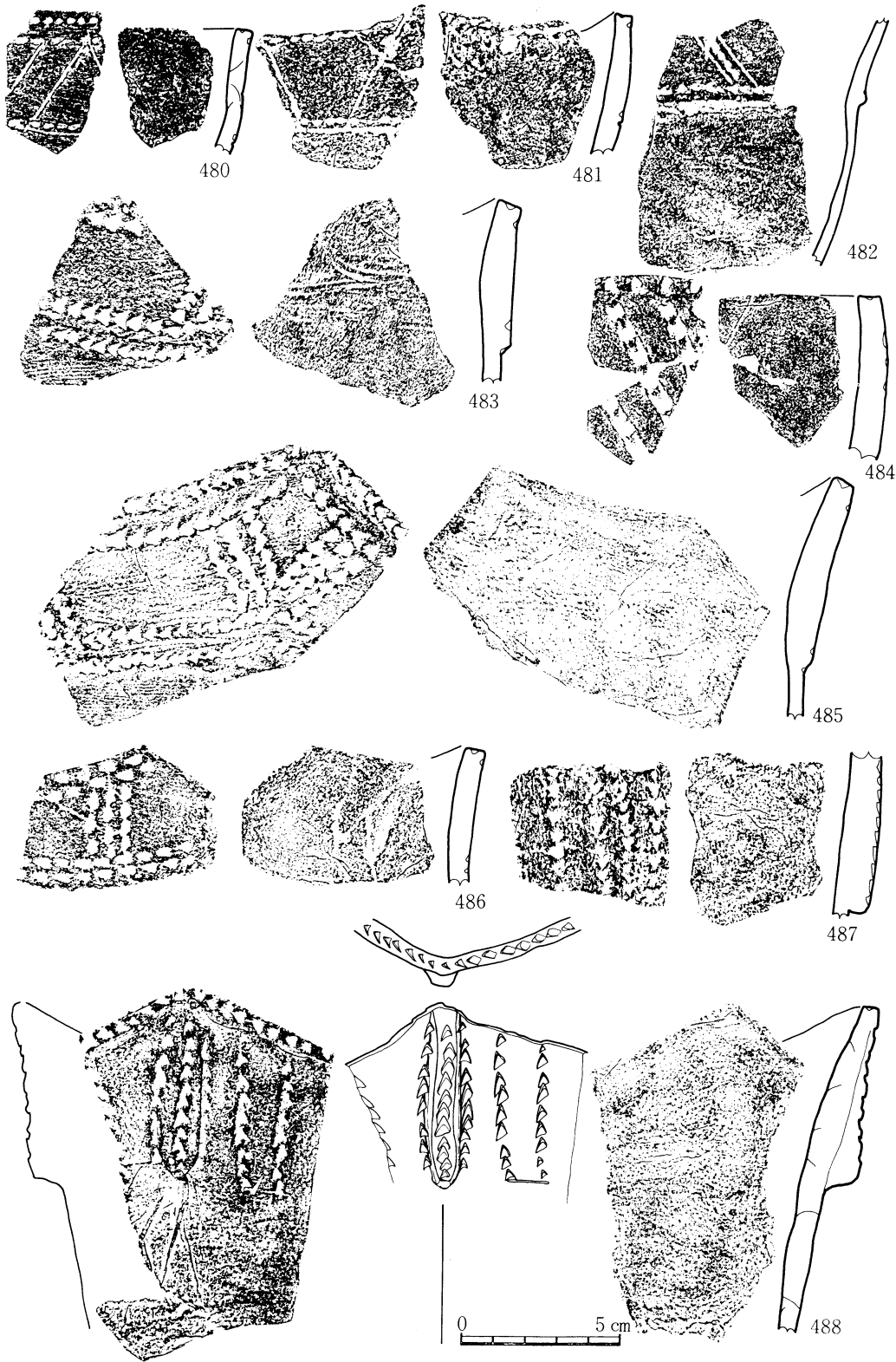
押し引きと刺突の施文具は、先端部が鋭く磨かれた三角形・丸形・方形等であり、総じてシャープな文様が見られる。そのため、専用の工具が用意されていた可能性が高い。

489 山形口縁は段差がつけられる。文様帯のほぼ中央部に横走る細沈線がつけられ、その他部分的（不規則）に短沈線を描き、その間を連続して斜めの刺突で埋めている。内面は、山形頂部で2列、その他に1列刺突を巡らしている。尚、補修孔は、外から内へ向けて穿っている。490では、口唇部の頂部、内面端、外面端に3列刺突を施している。491は口縁部がラップ状に開くもので、他には例はないようである。497はやや幅広の沈線が入組み文を構成。

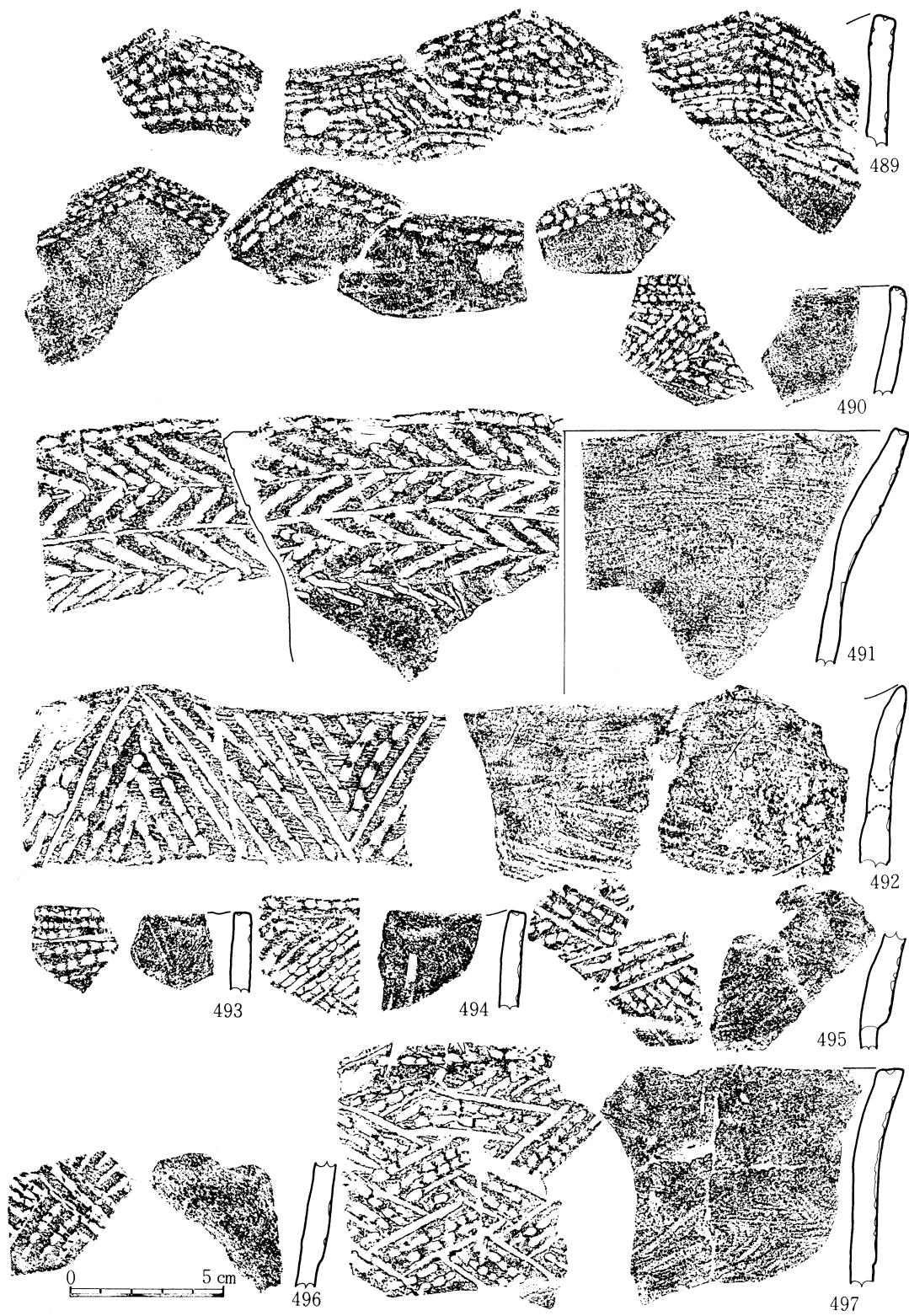
498の施文具は、叉状工具。501の山形口縁頂部は削りにより抉る。504の口唇部の瘤状突起にも刺突がつけられ、薄手で硬質な仕上がりである。505は細沈線により複合鋸歯文が描かれ、その後間のび押し引きがつけられる。510の口唇部は平坦。512は8号集石遺構内に出土し、胴部下半は失なわれていた。口縁部は、相對するものどうしが同一の形状を持ち、頂部は削り出しによりアクセントをつける。514は大型土器で、ステップのある山形口縁を持ち、先端部の鋭い工具で施文している。515は焼成前に穿孔を行なっている。518はZ-32区の14号集石遺構に伴った大型土器である。山形口縁を持ち、頂部直下の胴部にも同構成の施文を行なっている。文様帯は、わずかに肥厚するだけである。517は刺突の部位により工具を変えている。



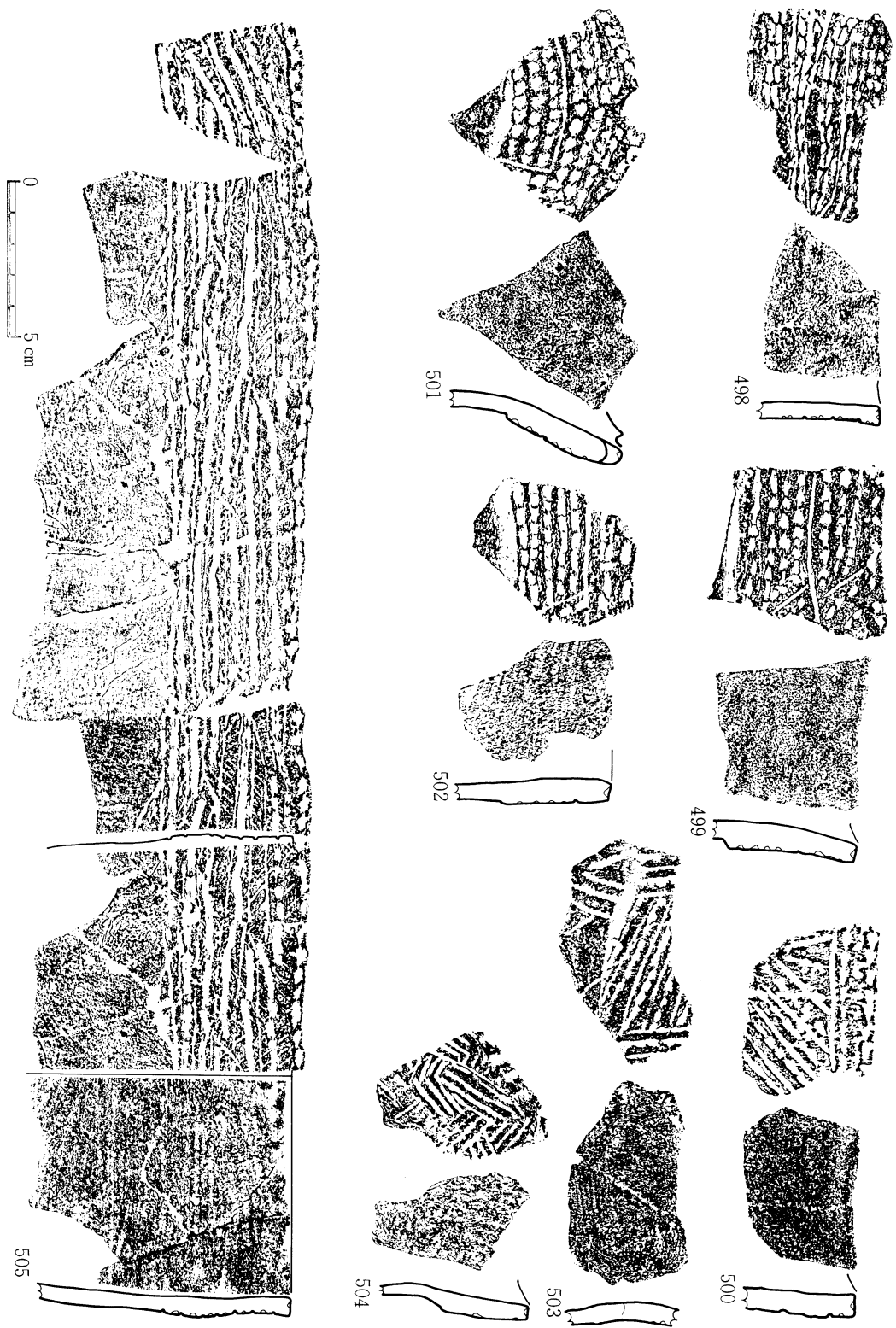
第62图 土器(第3地点)-30



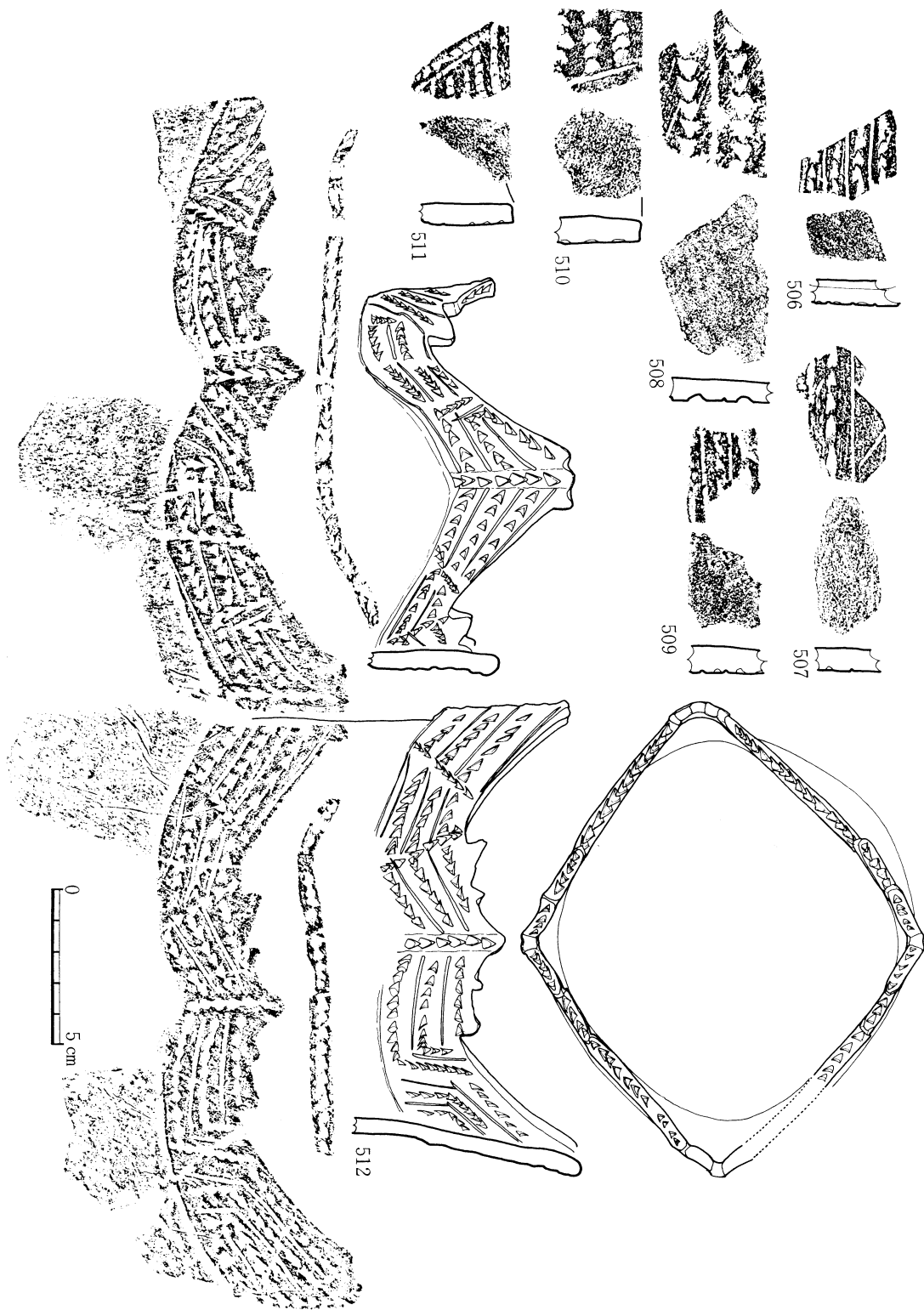
第63图 土器(第3地点)-31



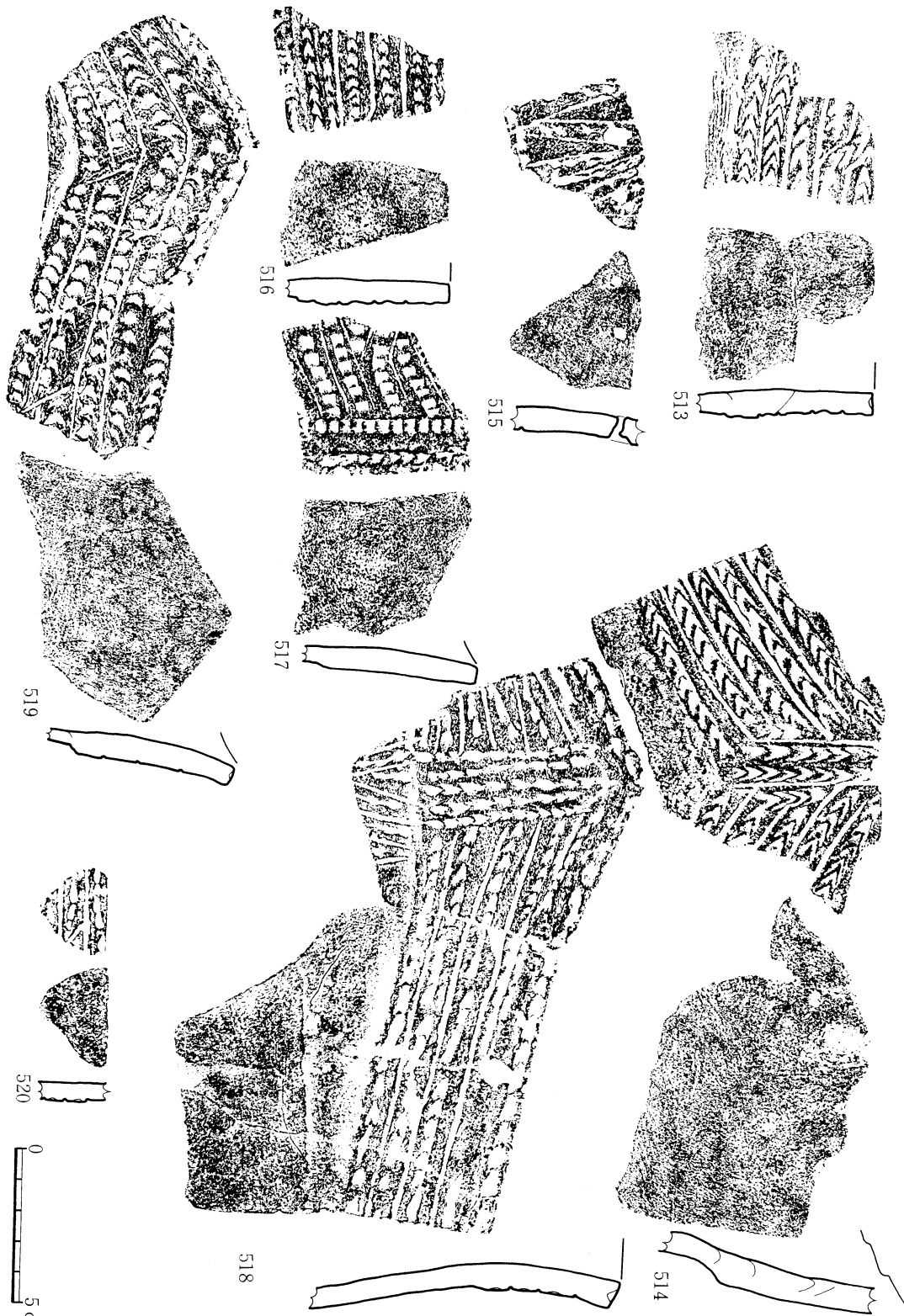
第64图 土器(第3地点)-32



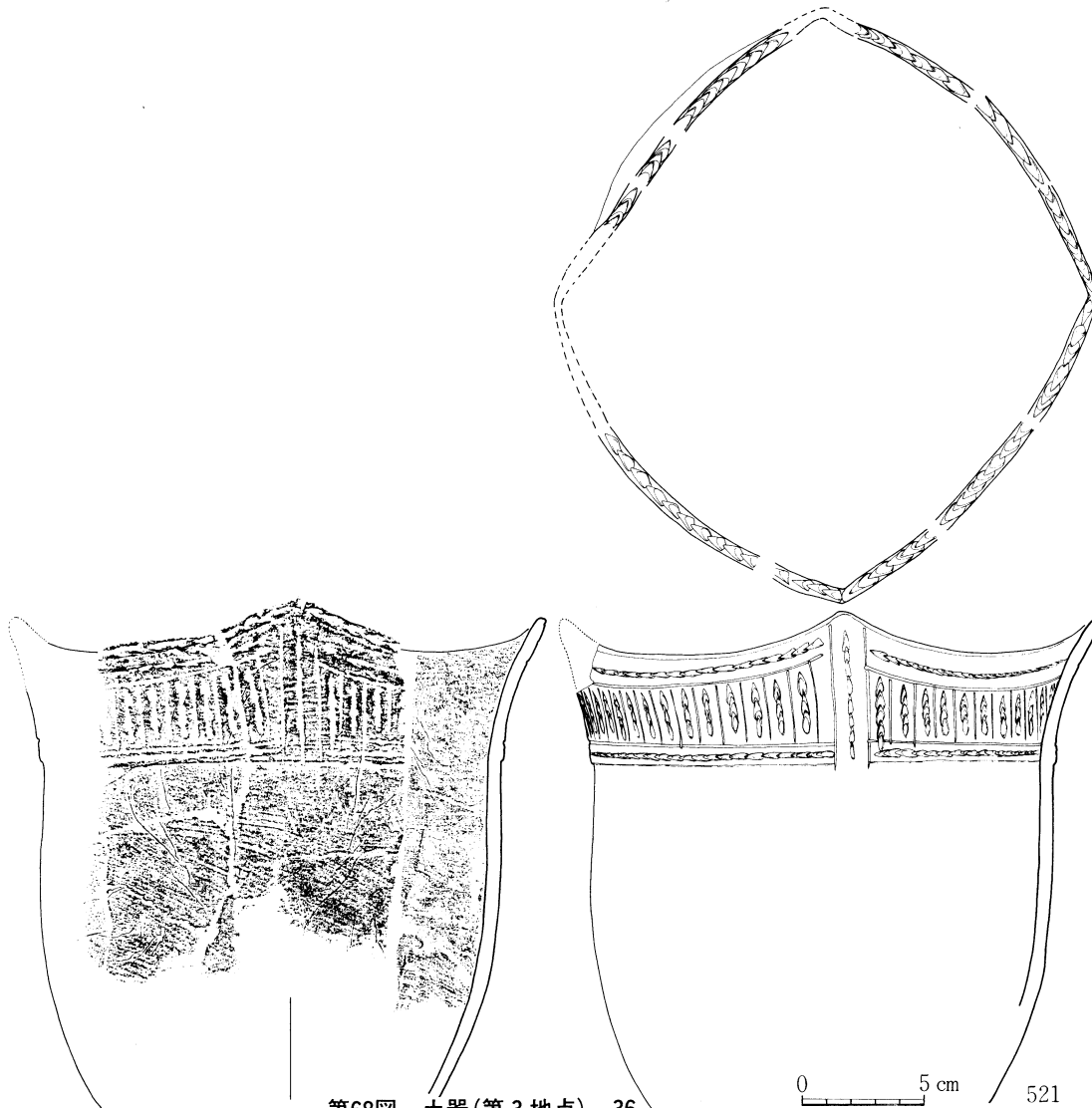
第65图 土器(第3地点) - 33



第66图 土器(第3地点)-34

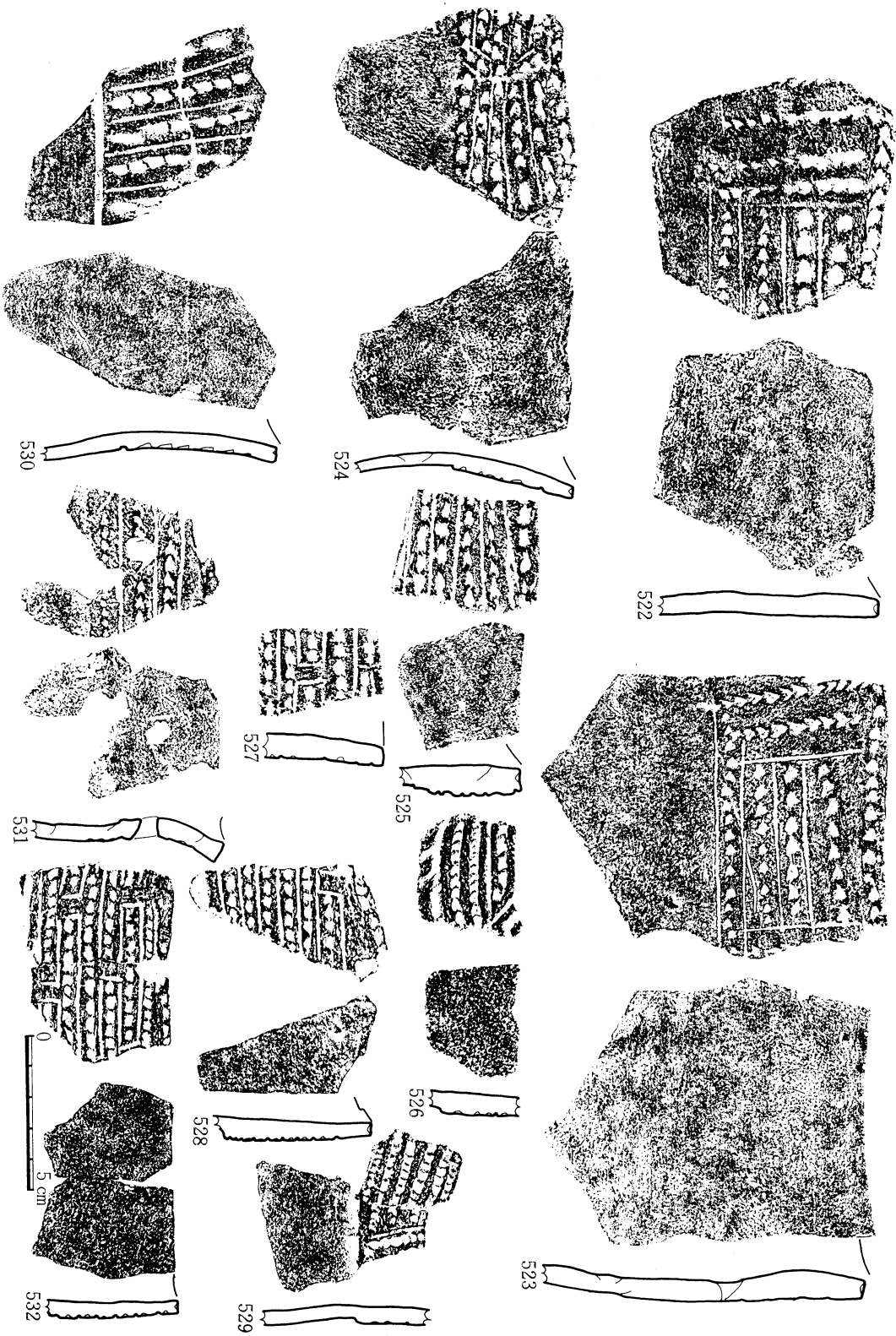


第67图 土器(第3地点)-35

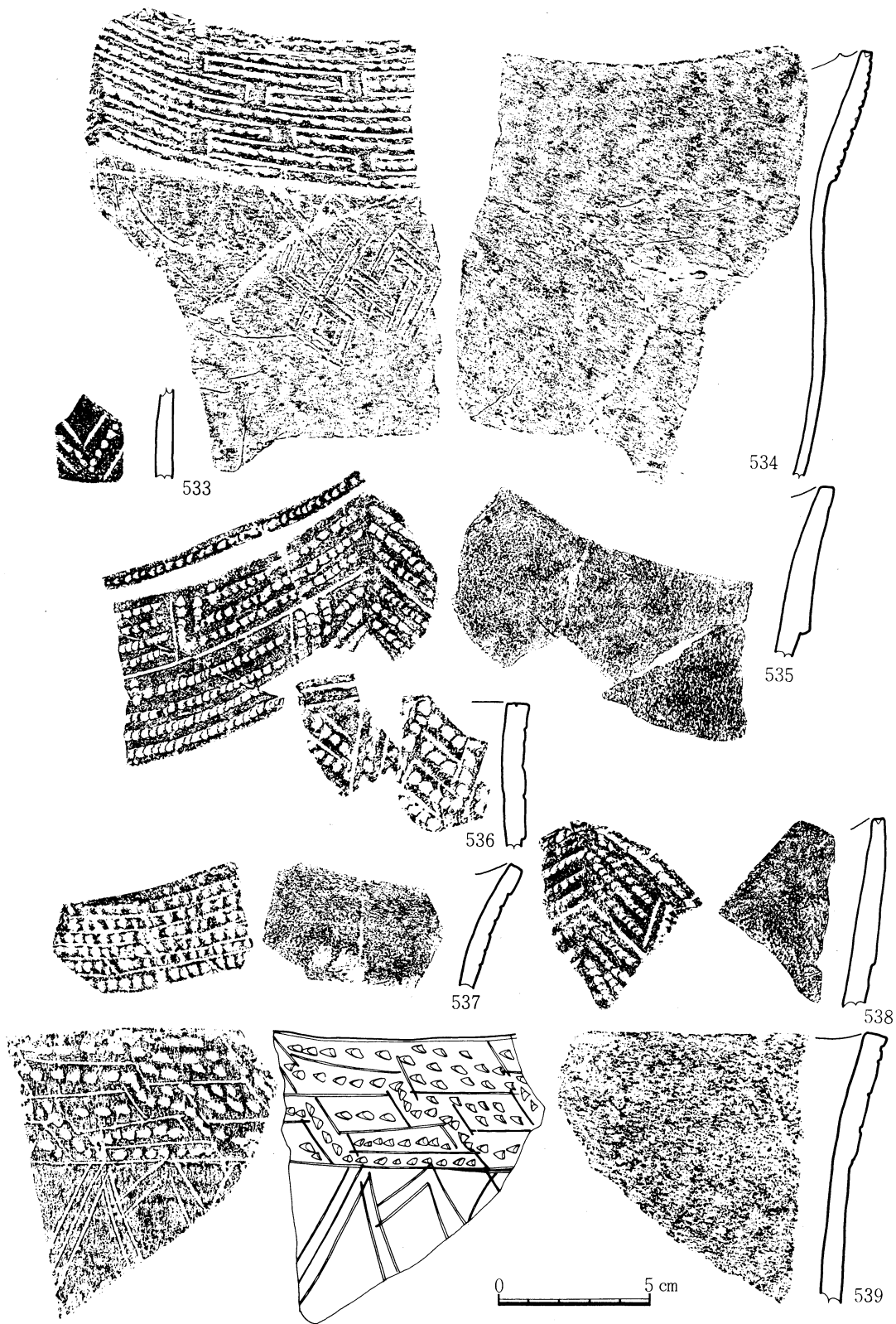


第68図 土器(第3地点)-36

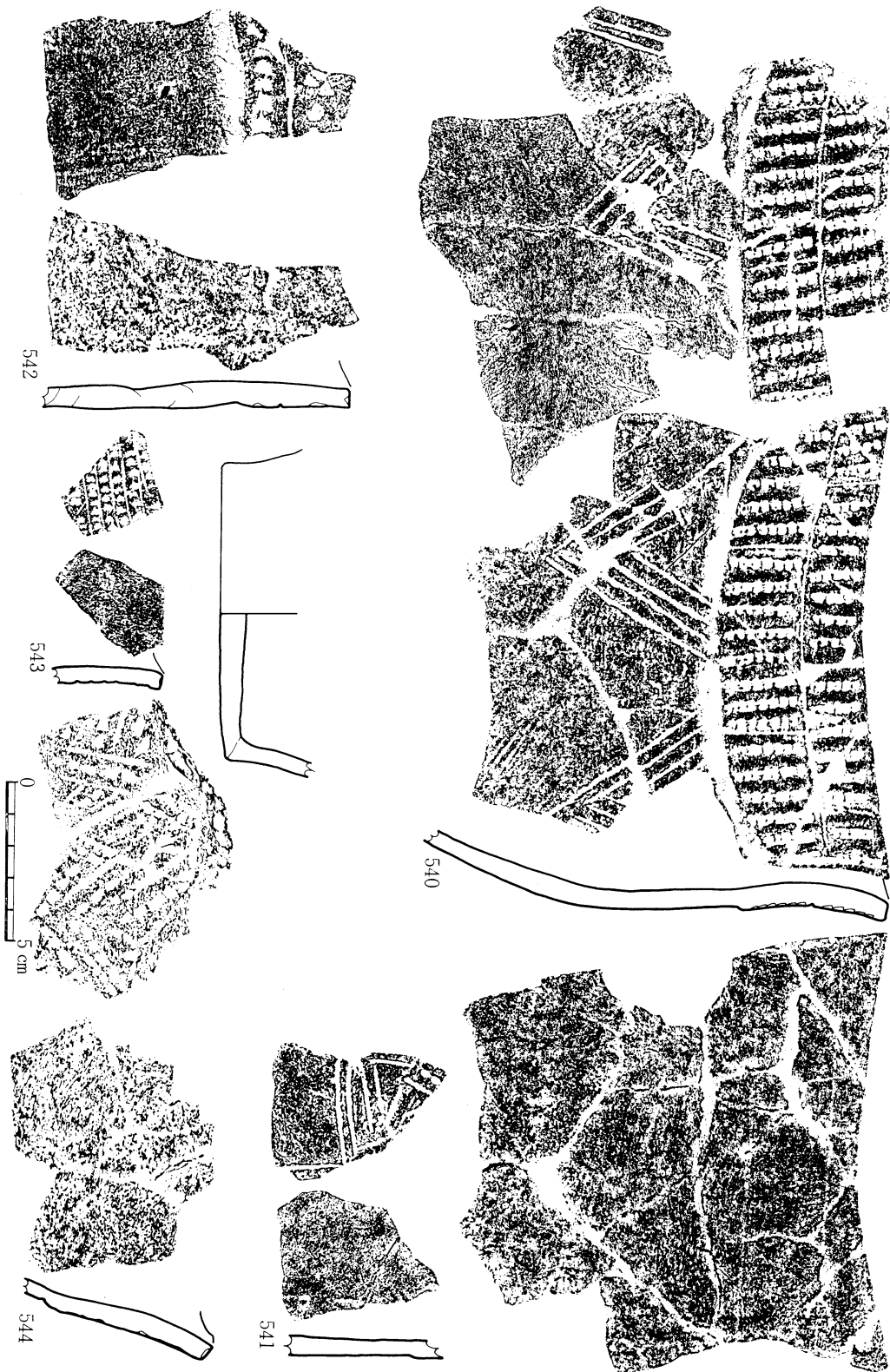
521 も14号集石遺構に伴ったもので、文様は縦位の構成である。522・523は文様帯は肥厚しない。530も縦位に文様構成し、口唇部は沈線を巡らす。534の胴部施文は、下描きした後に描き出している。砂粒が多く含まれ、硬質でザラザラした器面をなしている。540、山形口縁を持ち、先端部方形の工具で縦位に間のび押し引きを施す。胴部は4本の平行線文で釣手状文を描く。542は壺形土器の可能性のある形状を呈している。548は、横走する沈線間に間のび押し引きを浅く施すが、途中で方向を変えている。この方向転換は、編籠文との関わりが区画文との関わりか不明であるが注目される。557の連続刺突は一定方向に行わず、動作の変化が見られる。560の工具は先端部が方形で、線条痕が明瞭に残る。また、押し引きも間のびが大きく、若干異質の様相を呈している。570は、14号集石遺構に共併したもので、山形口縁を持ち、上面観は方形を呈す鉢形土器である。他に、同一個体を示す資料は無く、破棄された資料の感が強い。口縁直下に、間のび押し引きが1条横走し、下位はやや太め沈線で区画を行ない、その間を細沈線で充填している。コーナー部は、特に肥厚させる。572、10号集石遺構に



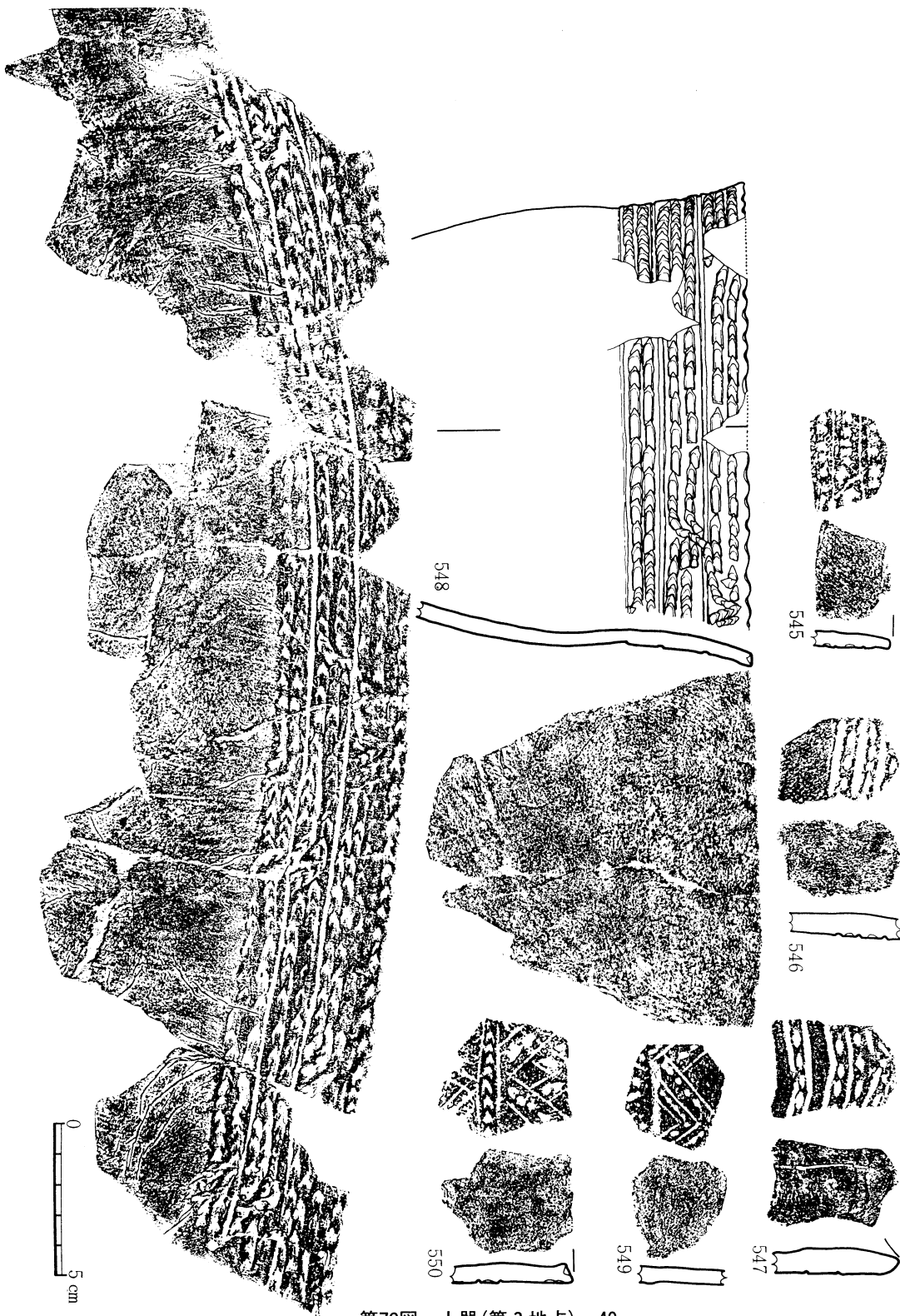
第69图 土器(第3地点)-37



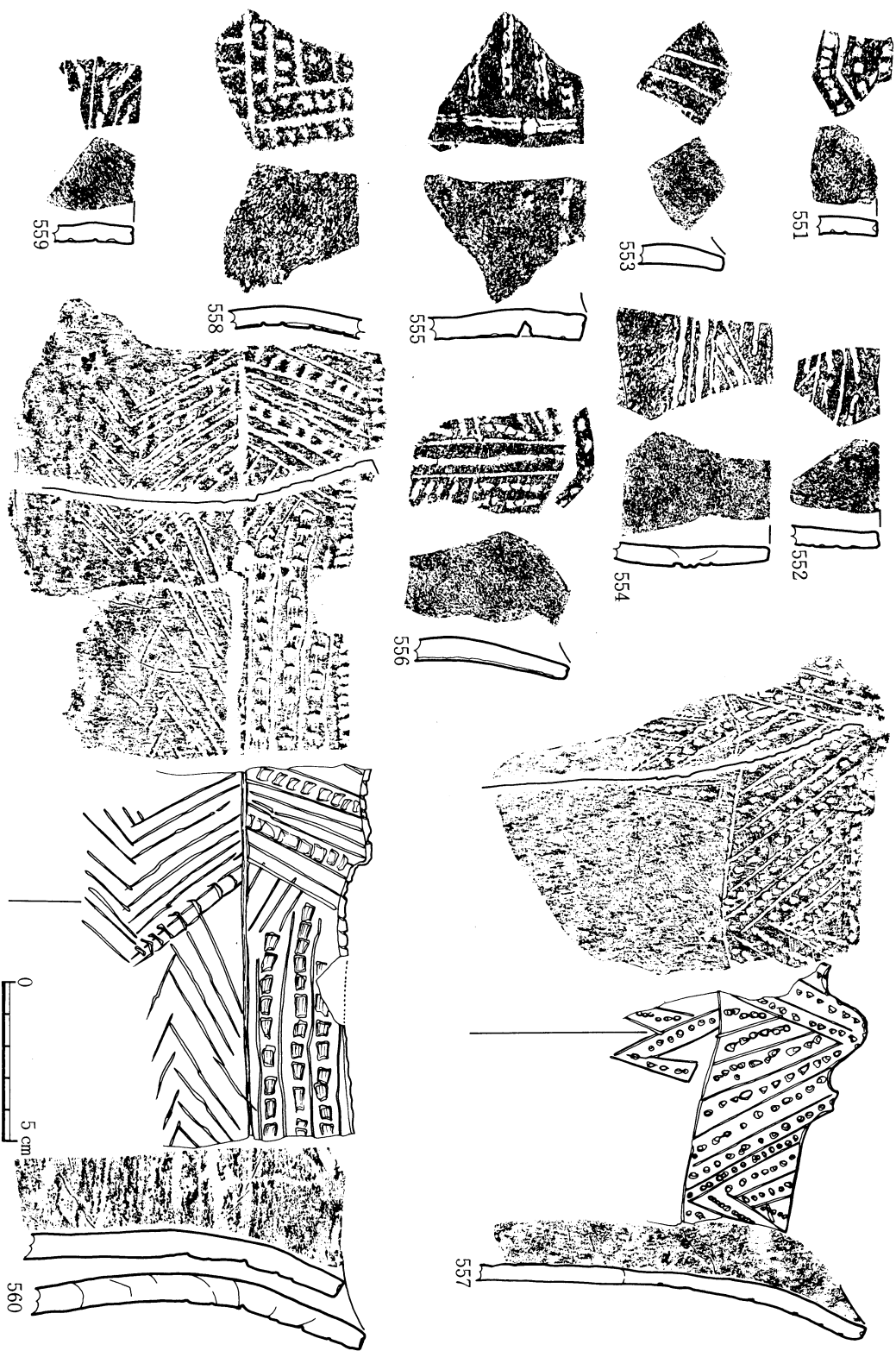
第70图 土器(第3地点) - 38



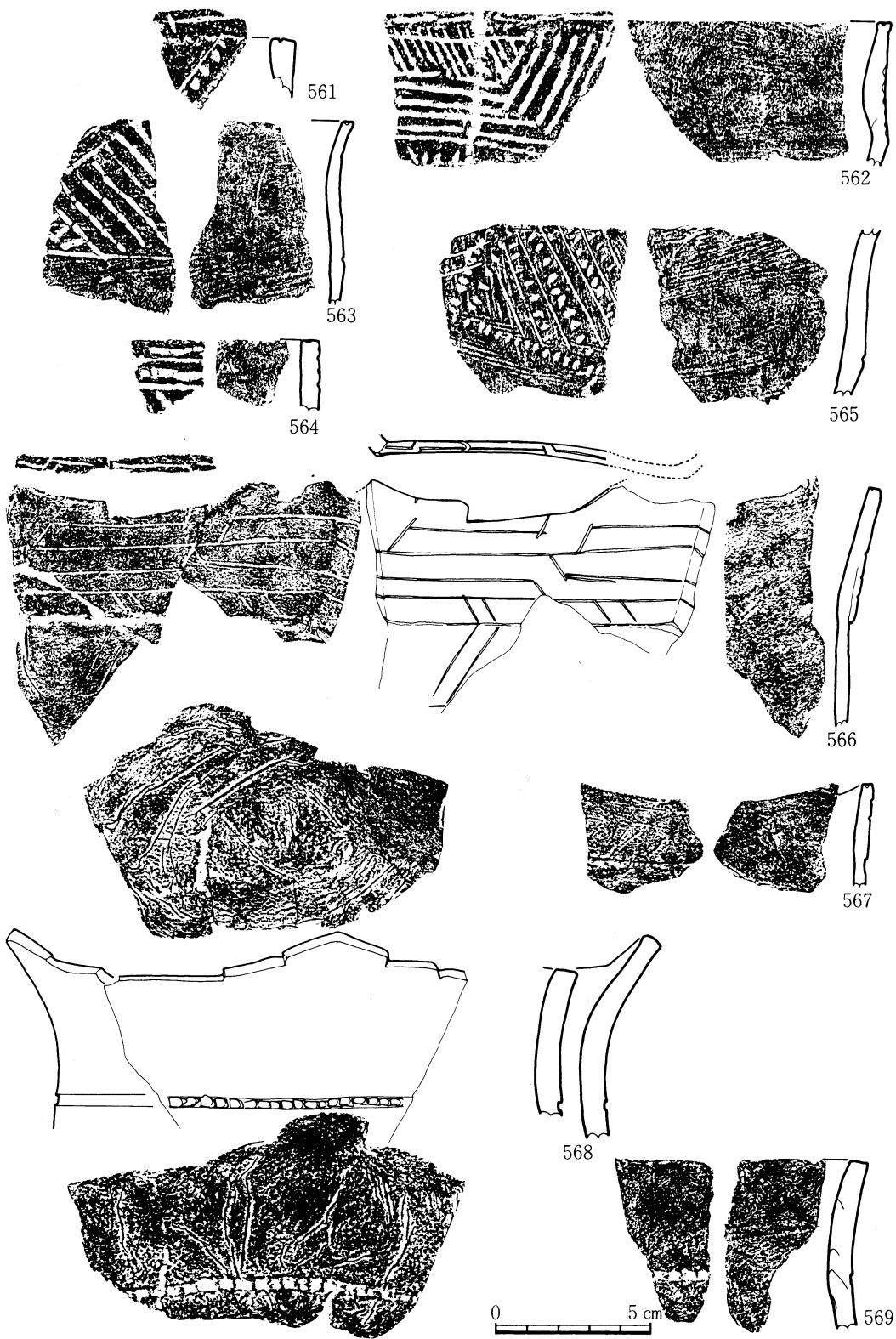
第71图 土器(第3地点)-39



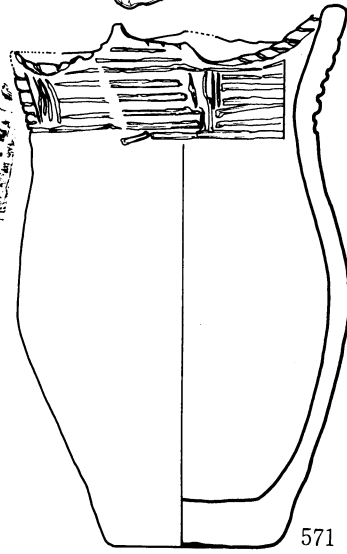
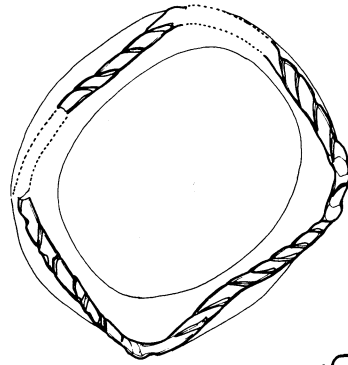
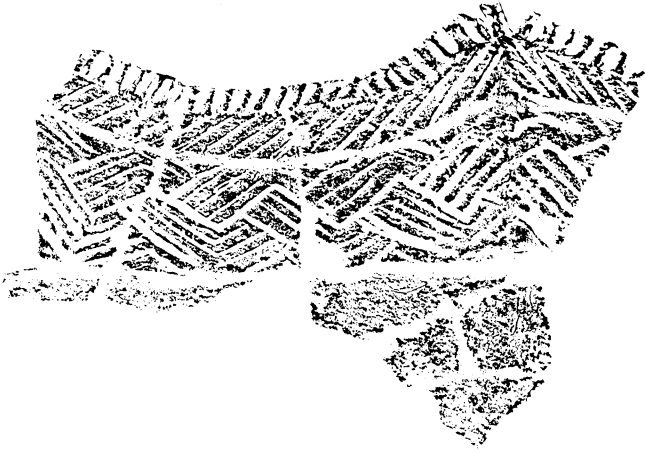
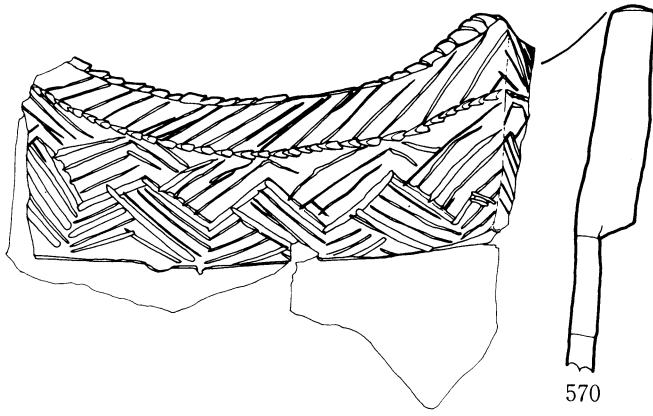
第72图 土器(第3地点) -40



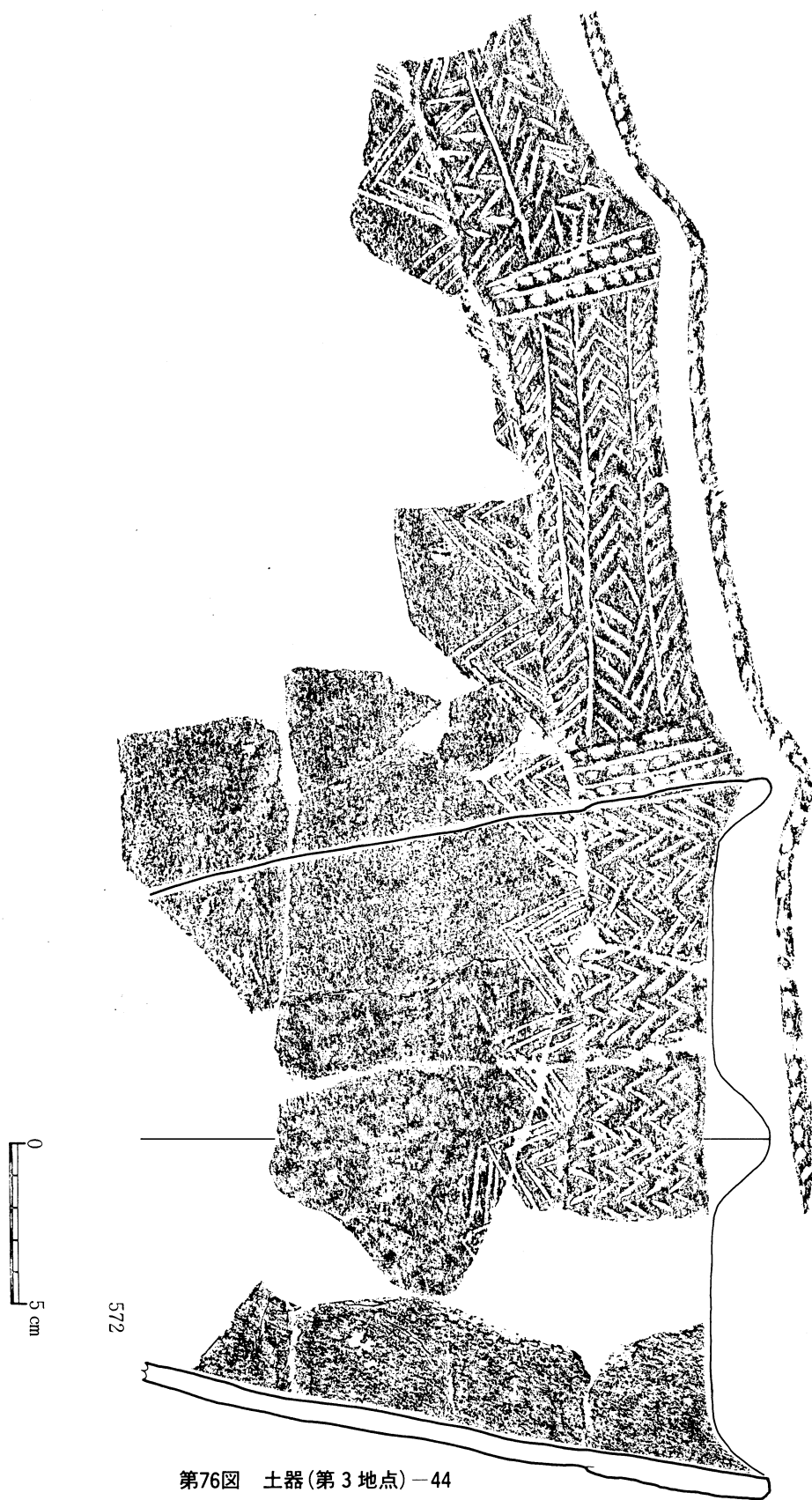
第73图 土器(第3地点)-41



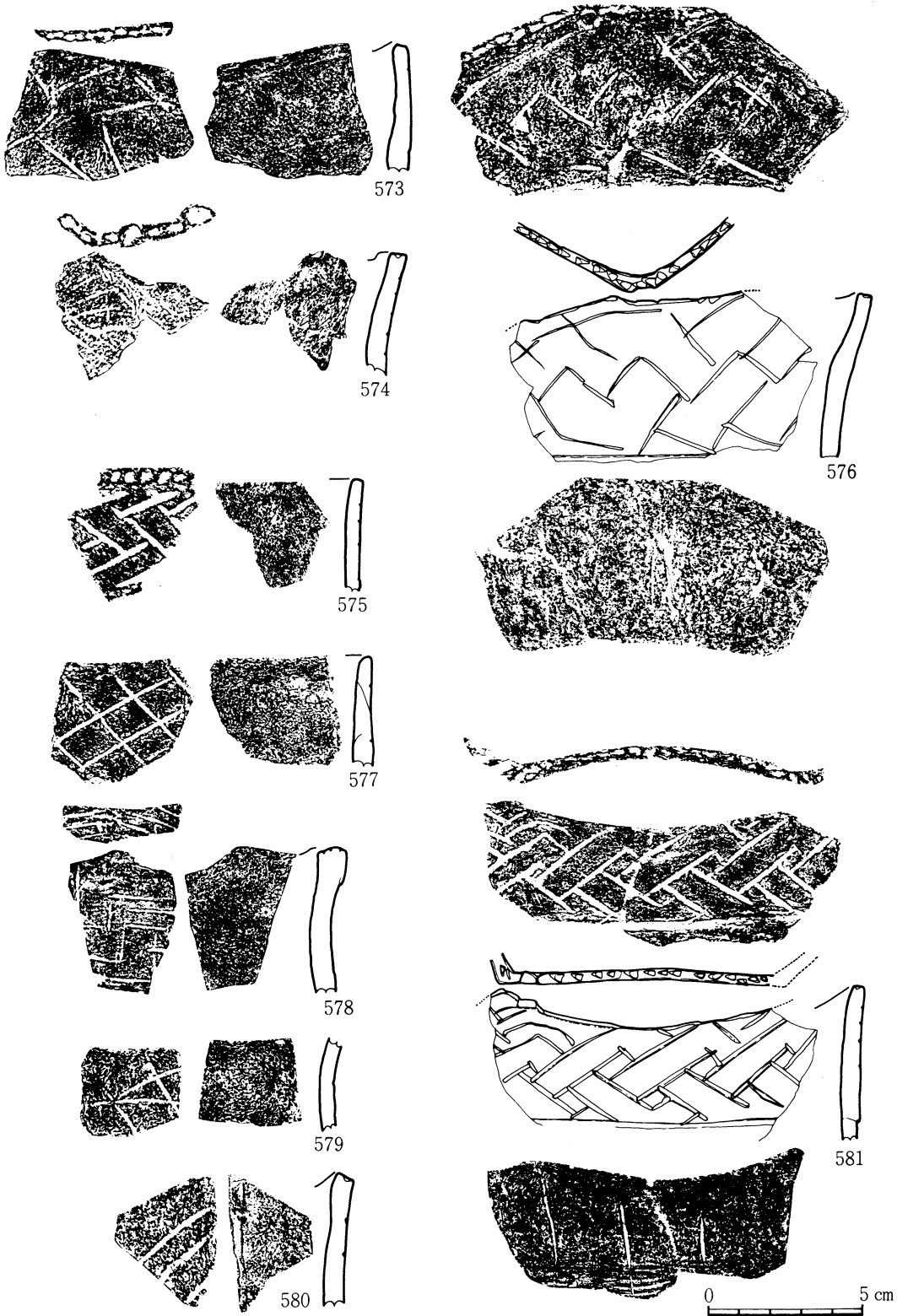
第74图 土器(第3地点)-42



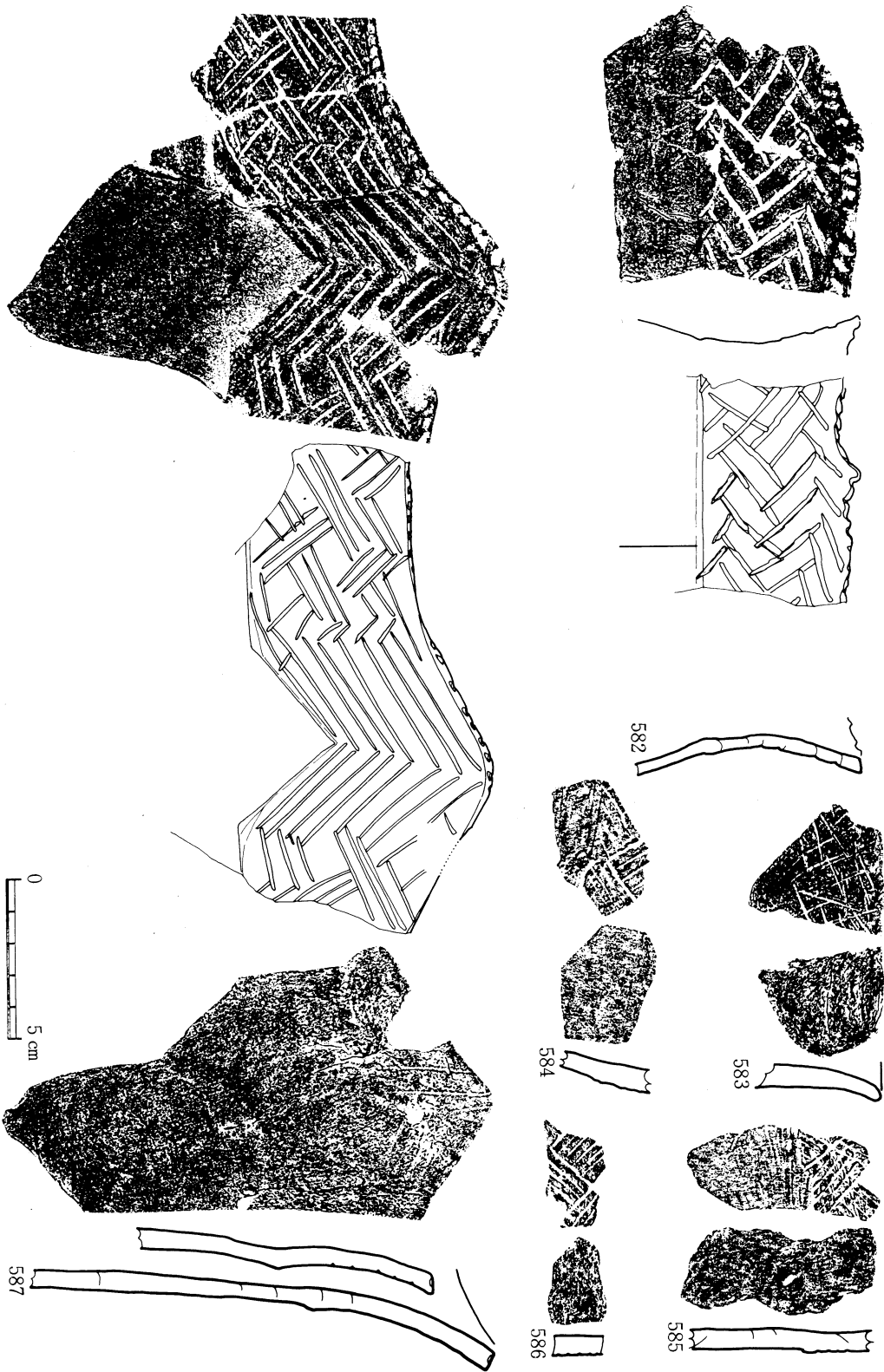
第75图 土器(第3地点)-43



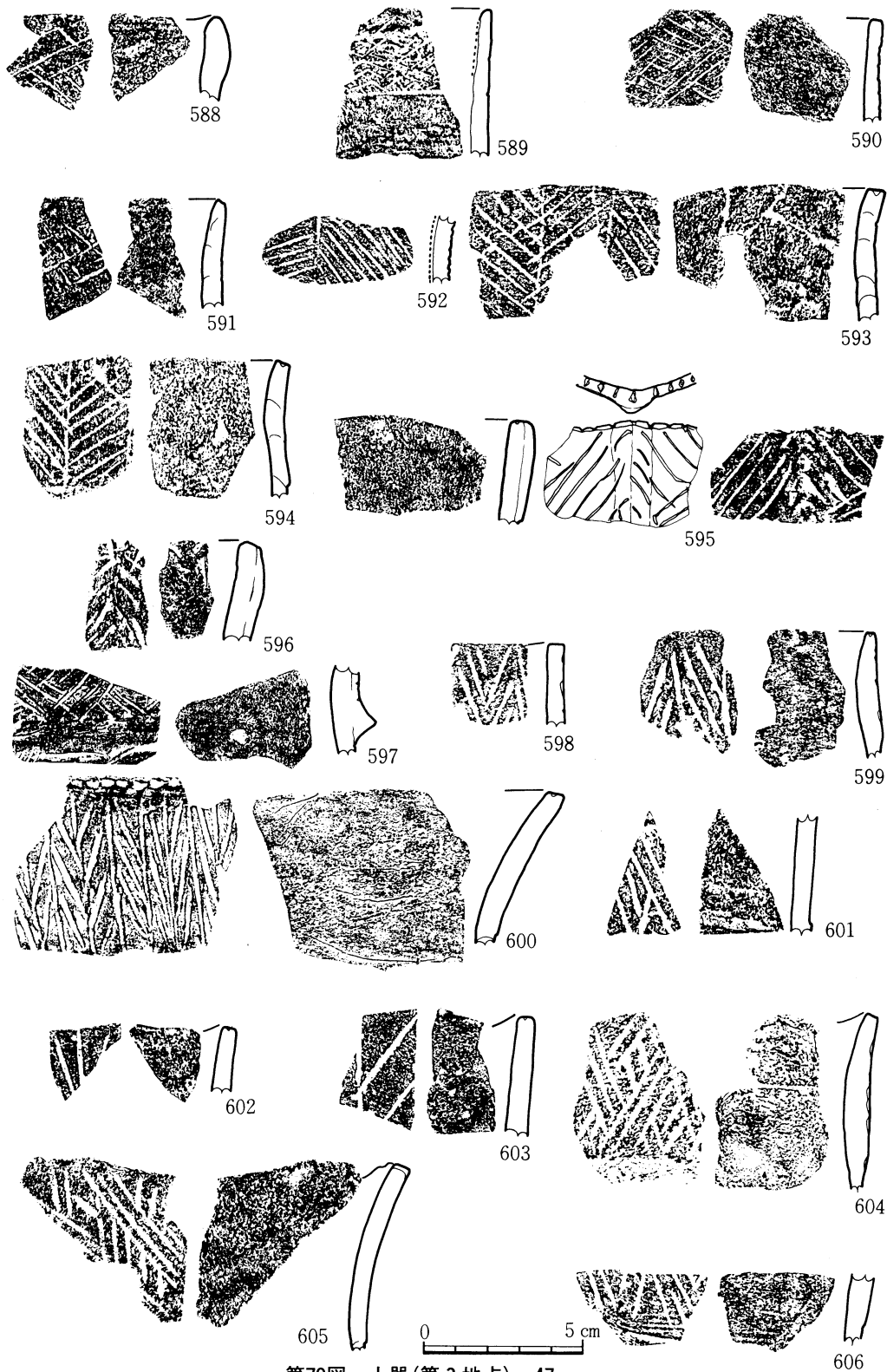
第76图 土器(第3地点)-44



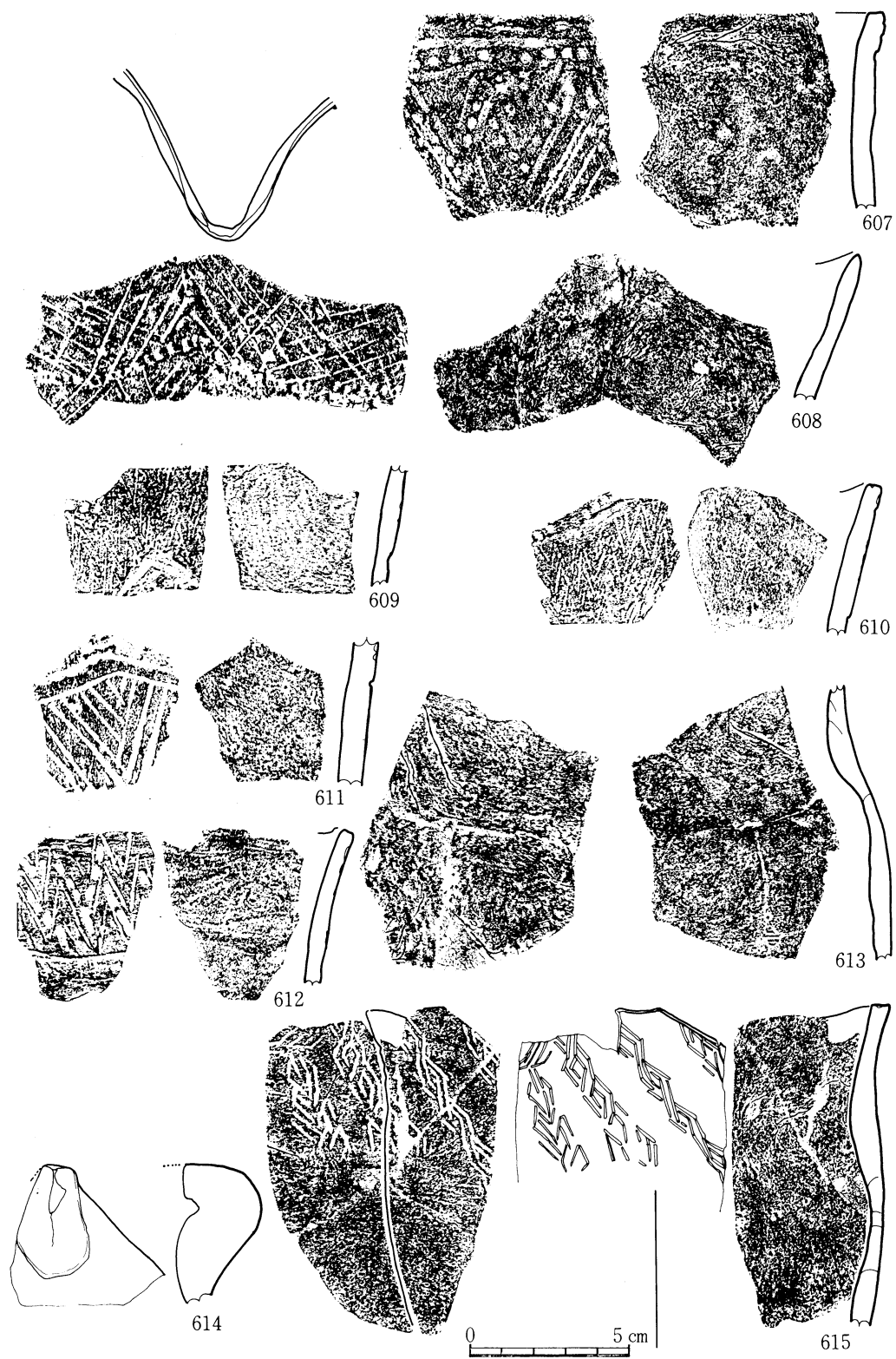
第77图 土器(第3地点)-45



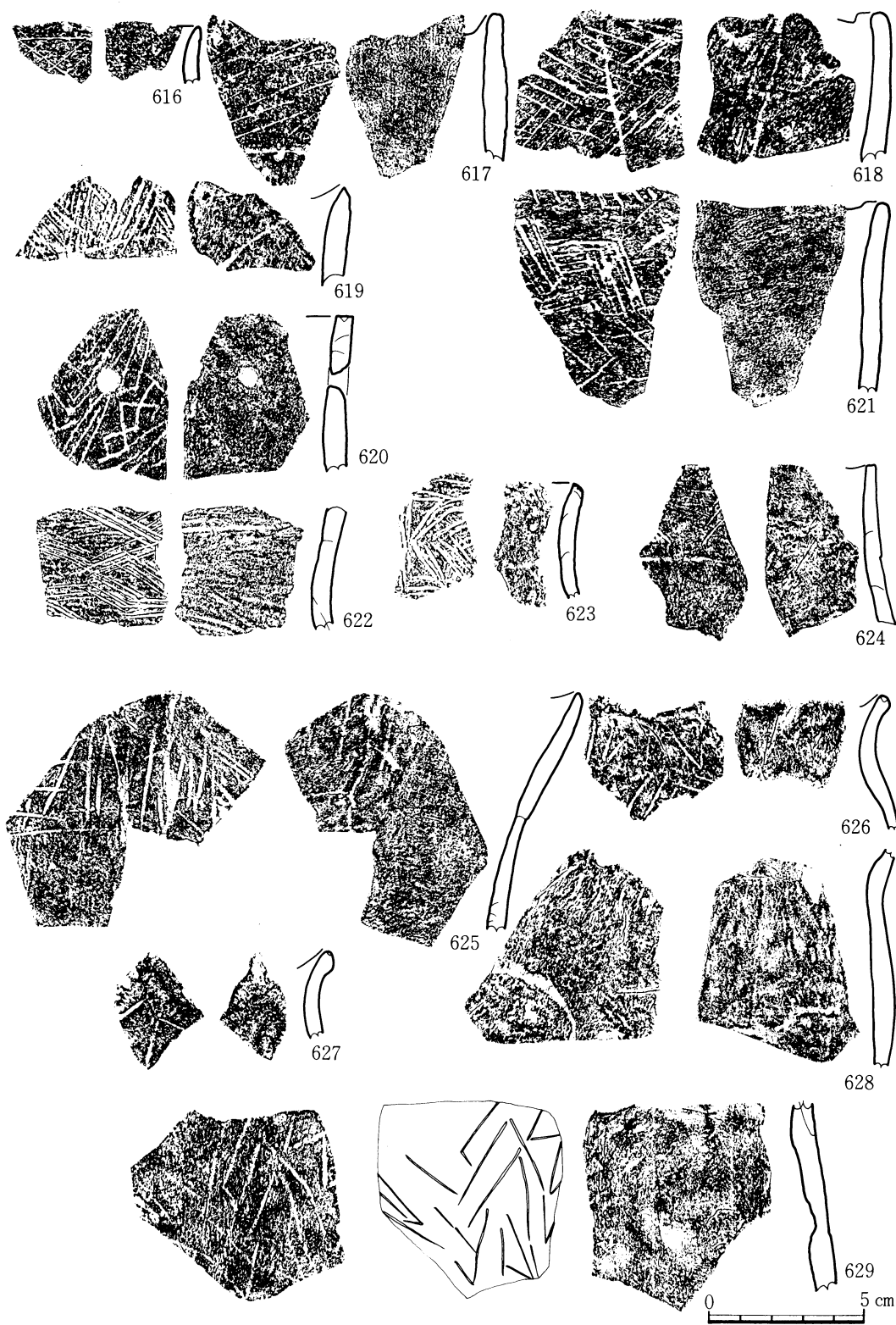
第78图 土器(第3地点)-46



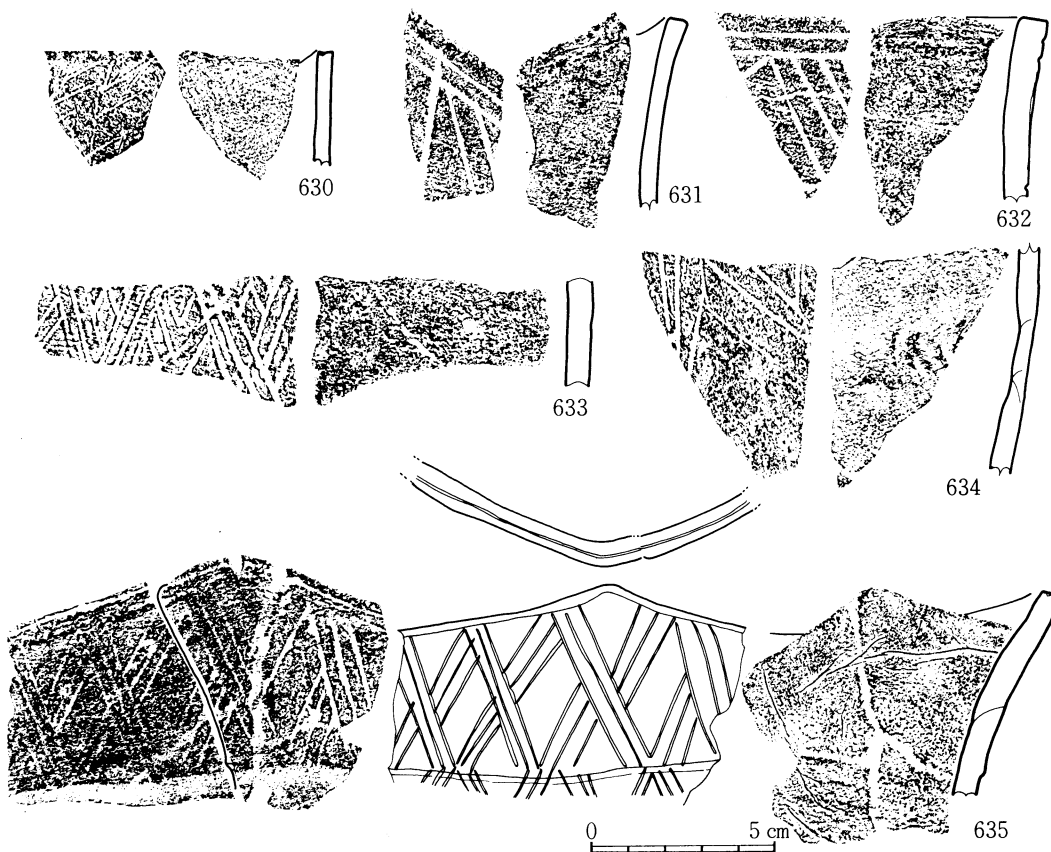
第79图 土器(第3地点)-47



第80图 土器(第3地点)-48



第81图 土器(第3地点)-49



第82図 土器(第3地点) - 50

貼りついた状態で、内面を上位に出土している。文様帯が若干肥厚し、突起した状態の山形口縁を呈し、口唇部には連続刺突が全周に施される。文様帯に描かれる連続刺突文は、山形口縁の直下にだけ見られ、縦位の沈線間に施されている。山形口縁部を境に文様帯は4区分され、その内の3つが残されているが、各々が独立し、別々の文様を構成する。

XIV類

文様帯がシンプルに強調された一群の土器で、細沈線、間のび押し引き、連続刺突などが独立して文様を構成している。沈線で区画文を描くもの(XIV a類)と文様帯は形成されるが施文しないもの(XIV b類)に分ける。

XIV a類 566, 文様帯は肥厚し、ステップのある山形口縁を持つ。文様帯は、入念にナデ消され、細沈線で鋭く区画文が描かれている。器肉は薄く、硬質の土器である。567の口唇部は連続刺突が施され、文様帯は、鋭い細沈線が描かれる。566同様、薄手の硬質の仕上がりである。573と576は、編集後接合している。薄手で硬質の土器であるが、砂粒を多く含み器面は粗くザラザラしている。口唇部は、間のび押し引きが施され、内面には、縦位の浅い沈線が描かれている。575の口唇部は、ヘラ状工具で斜めに刻まれる。581は、566と同様ステップのある山形口縁を持ち、口唇部は連続刺突を施し、内面には縦位の沈線が描かれる。

XIV b類 568と569の2点で、文様帯は意図的につくり出しているが、施文は行なわれず無

文のままである。口唇部も施文されず、ヘラによる削り出しで作出している。

X IX類

734・735の2点は、厚手の甕形土器で、口縁部は大きく外反し「く」の字状を呈したもので、内面にはヘラ削りがなされている。733は、この類に含めているが、上記2点とは若干異なり、再考を要すると思われる。

X X類

内面が黒色に研磨された、いわゆる内黒土師で2点だけの検出である。2点とも、良質できめの細かい粘土を用い、内面はヘラ研磨により光沢のある黒色を呈している。移入土器の可能性が高いと思われる。

X XI類

類須恵器で、カムイヤキ窯系のもと思われる。

738～740等の内面は格子目タタキの後ナデられ、742では大き目の平行タタキが認められる。外面では、小さめの平行タタキが施された後、ナデによる仕上げが施されている。739の内外面は、ロクロによるていねいにナデで仕上げられている。

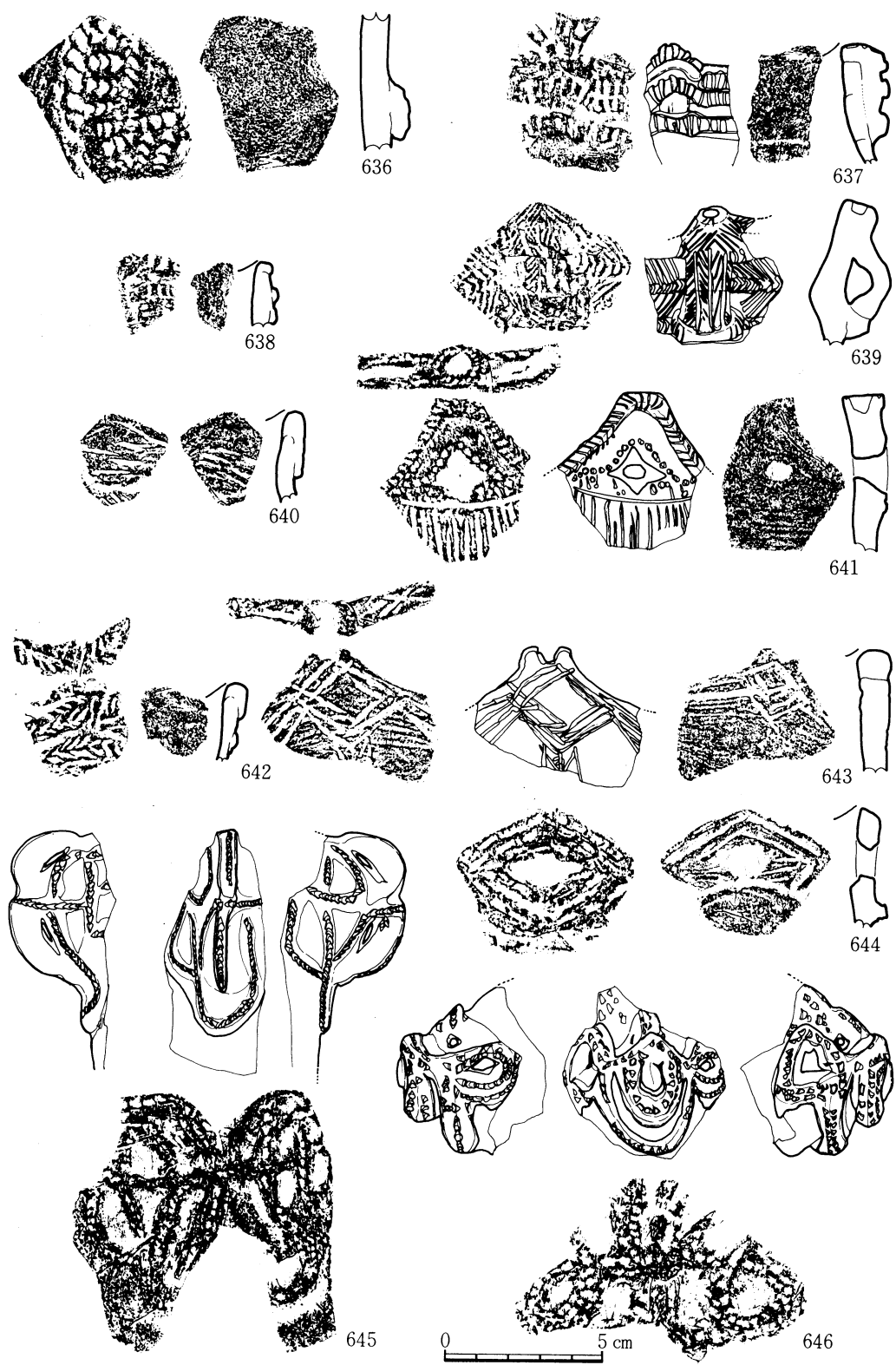
X IX類土器は、長浜金久第I遺跡や泉川遺跡で、兼久式土器との共伴関係が認められ、また、X X類土器の黒色研磨（内黒土師器）も、長浜金久第I遺跡で同様に出土しており、兼久式土器の下限を知るうえで重要視されている。

その他（特殊把手状）

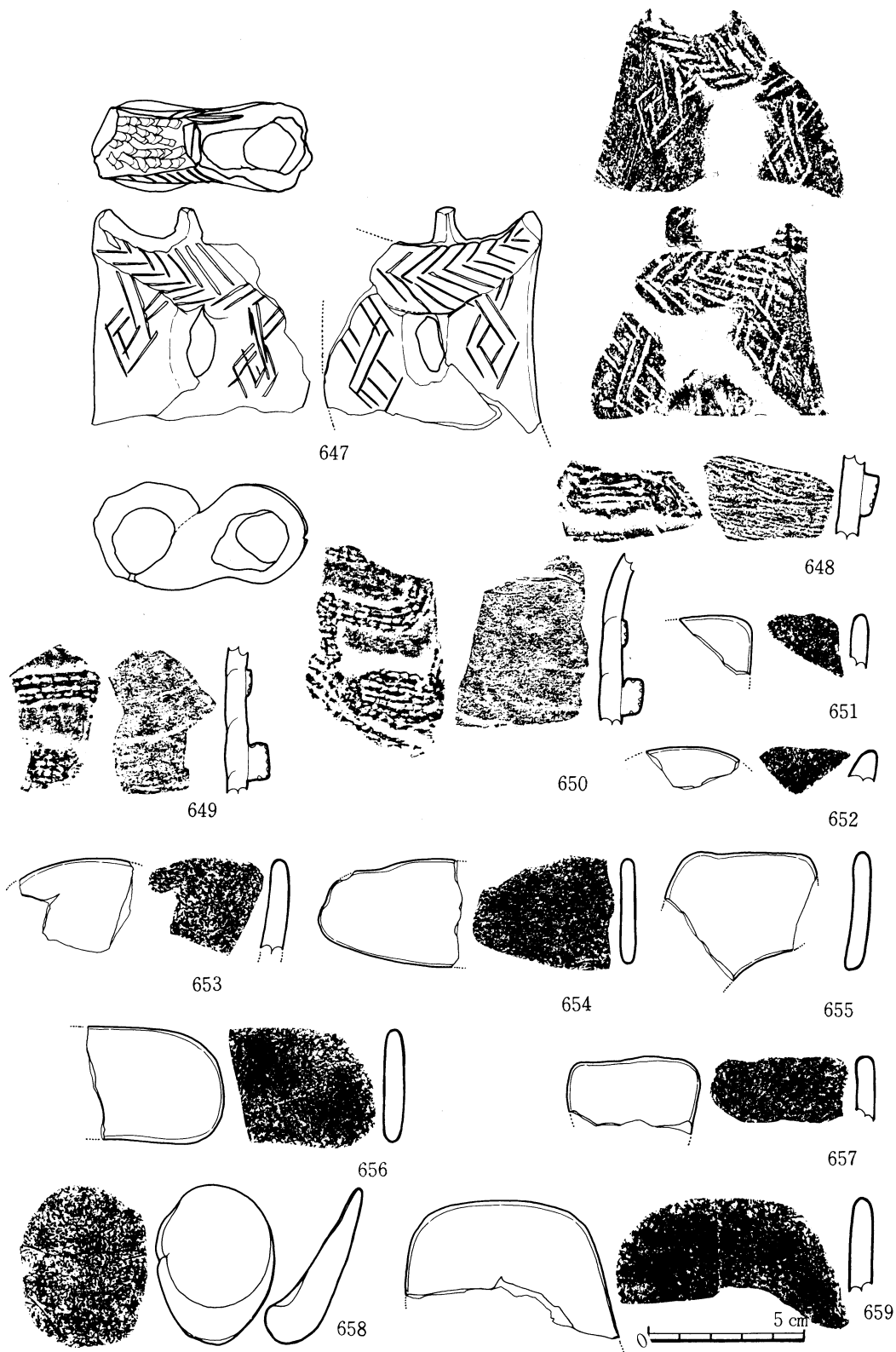
639は、橋状把手を持つもので、把手上に3本の縦位の沈線と綾杉状の沈線が施される。また、屈曲部と胴部最上位には、半截竹管による刻み目を持つ突帯が巡らされている。これらの特徴から判断するとIV類土器に近いと言える。

645は、人面を模した把手と思われるもので、器種は壺形土器の可能性が高い。目、と思われる部分は、斜めに細長く穿ち、押し引きにより区画文を描いている。

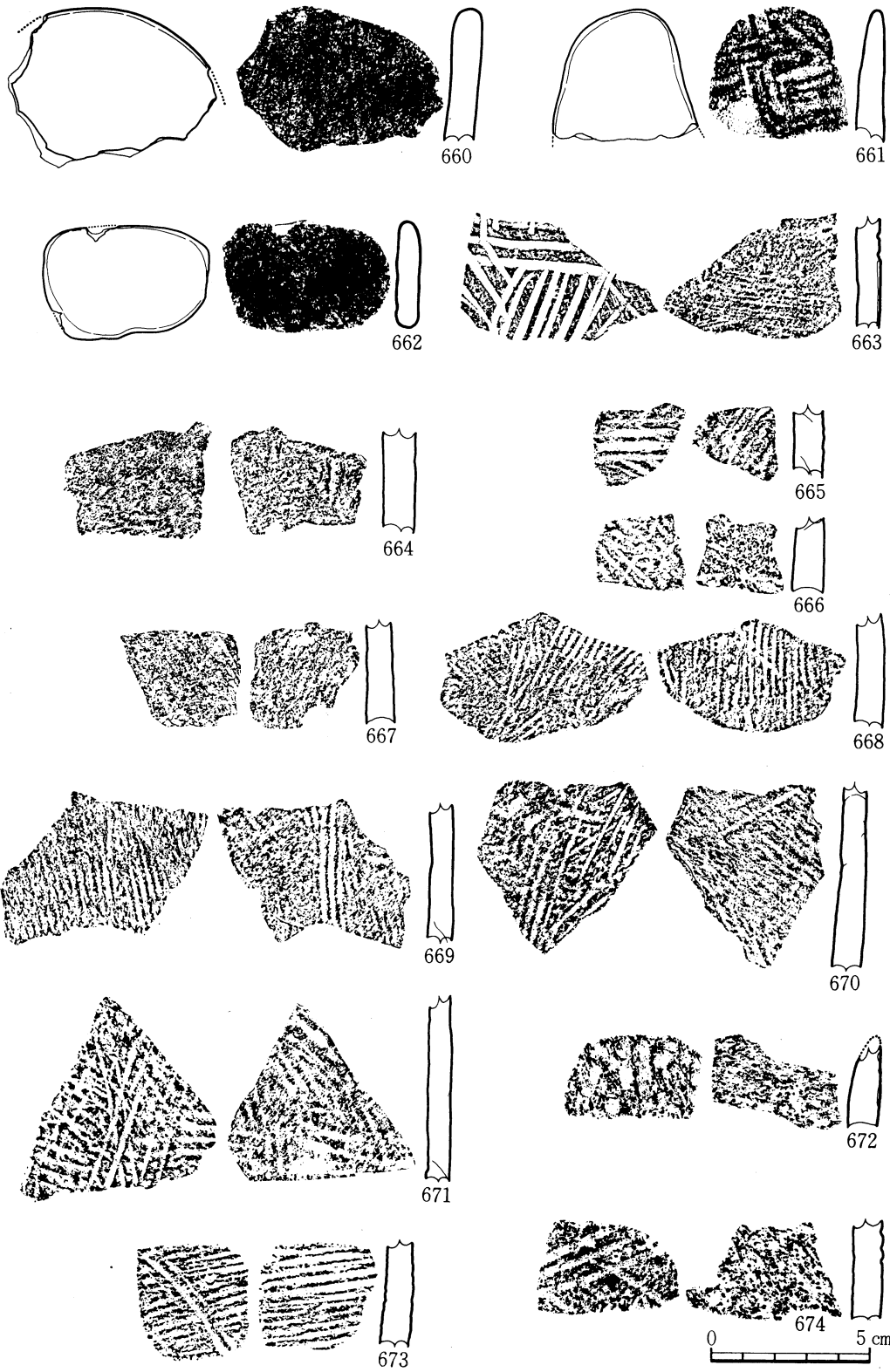
646は、獣面の把手で、対象は猪かと思われる。粘土ひもを貼りつけ、連続刺突により施文している。目と思われる部分は、焼成前に穿っている。



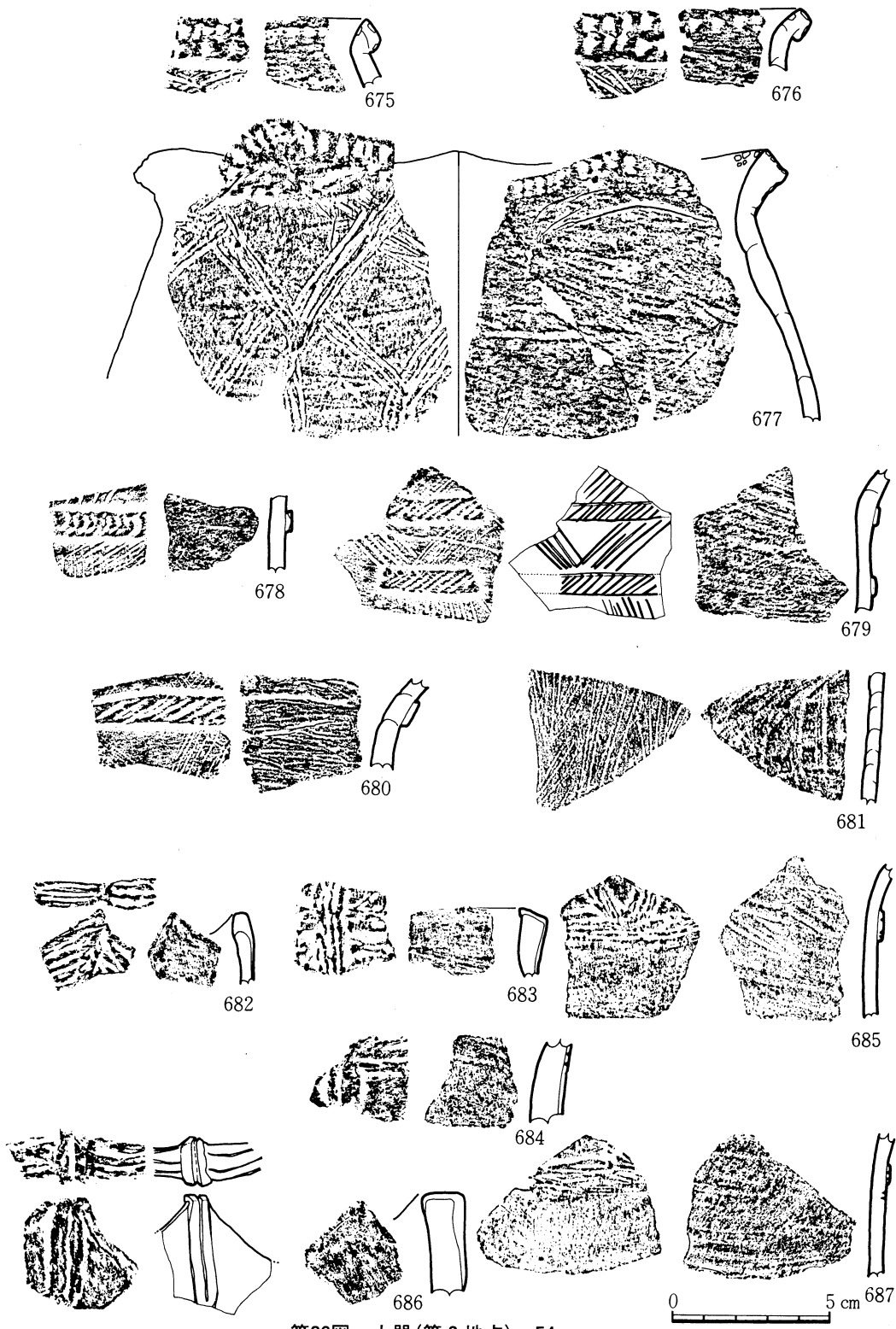
第83图 土器(第3地点)-51



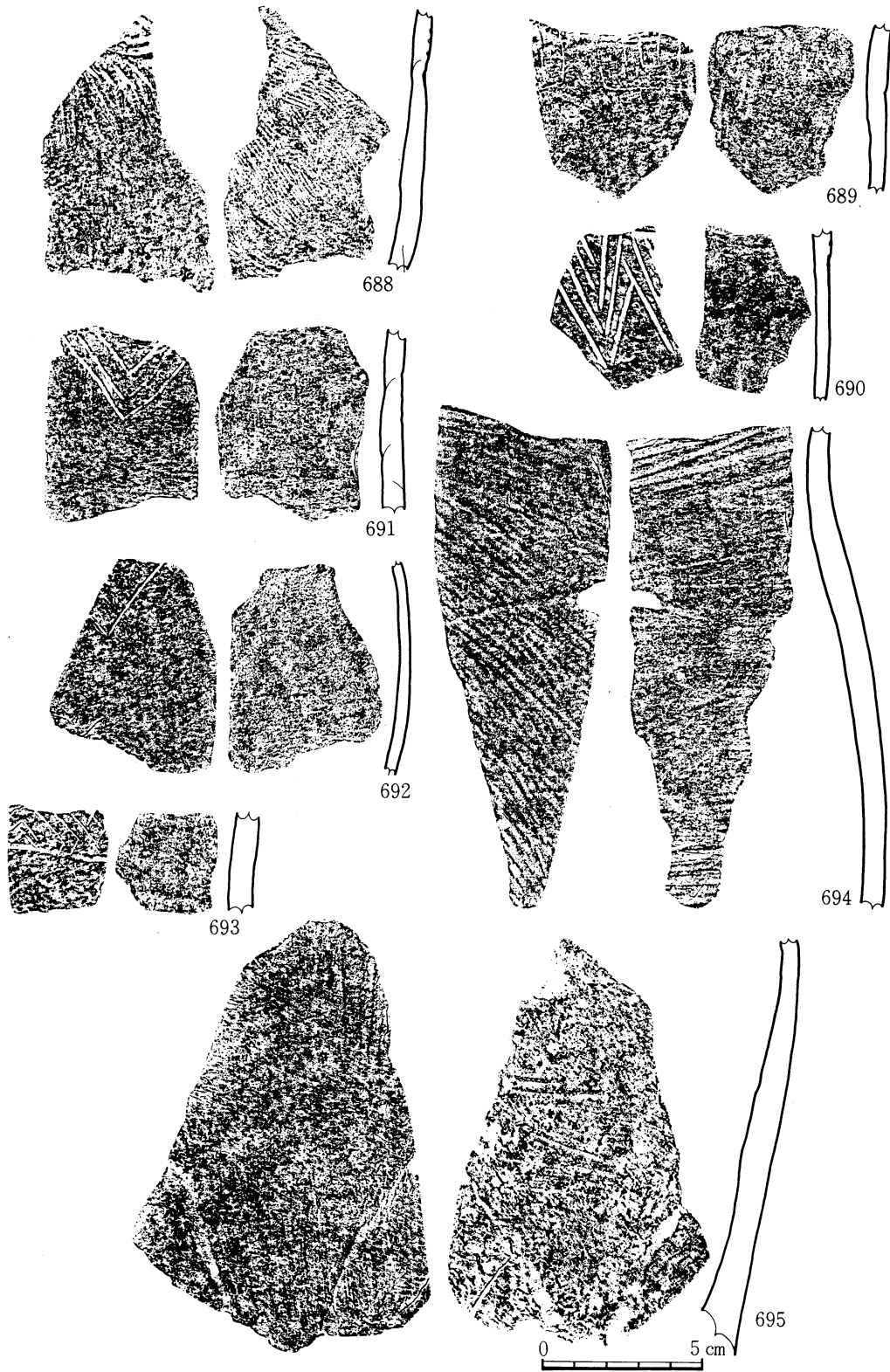
第84图 土器(第3地点)-52



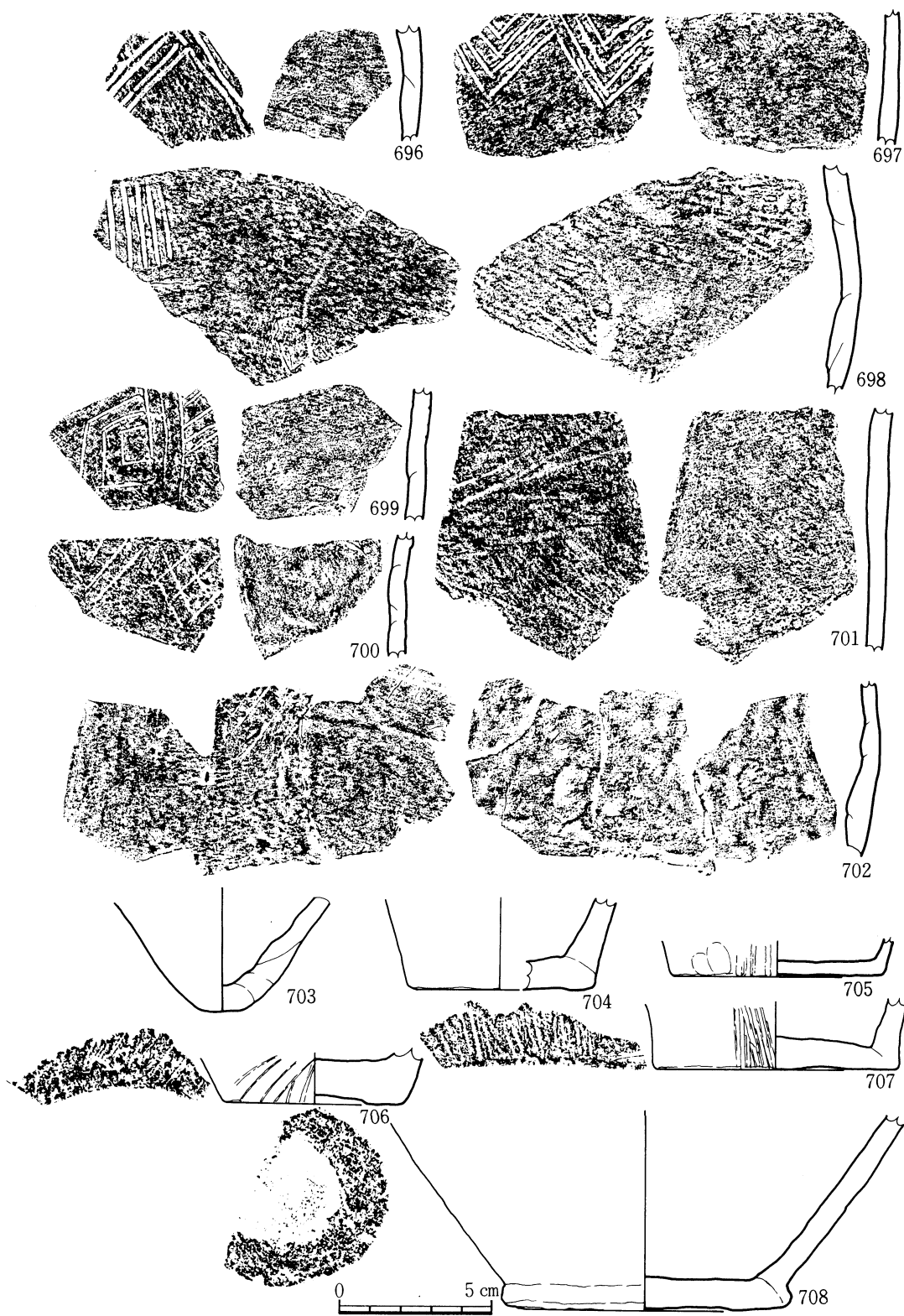
第85图 土器(第3地点)-53



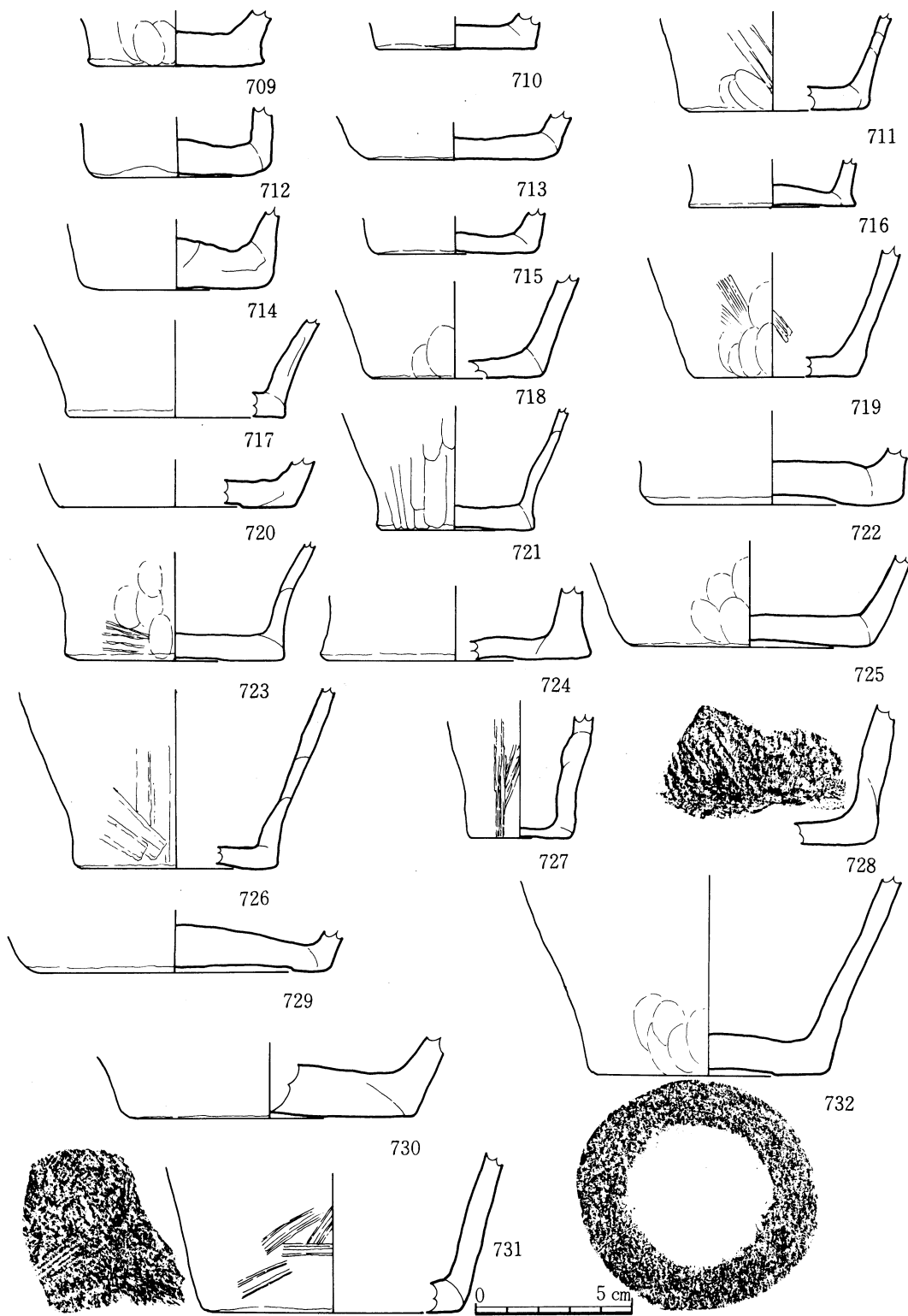
第86图 土器(第3地点)-54



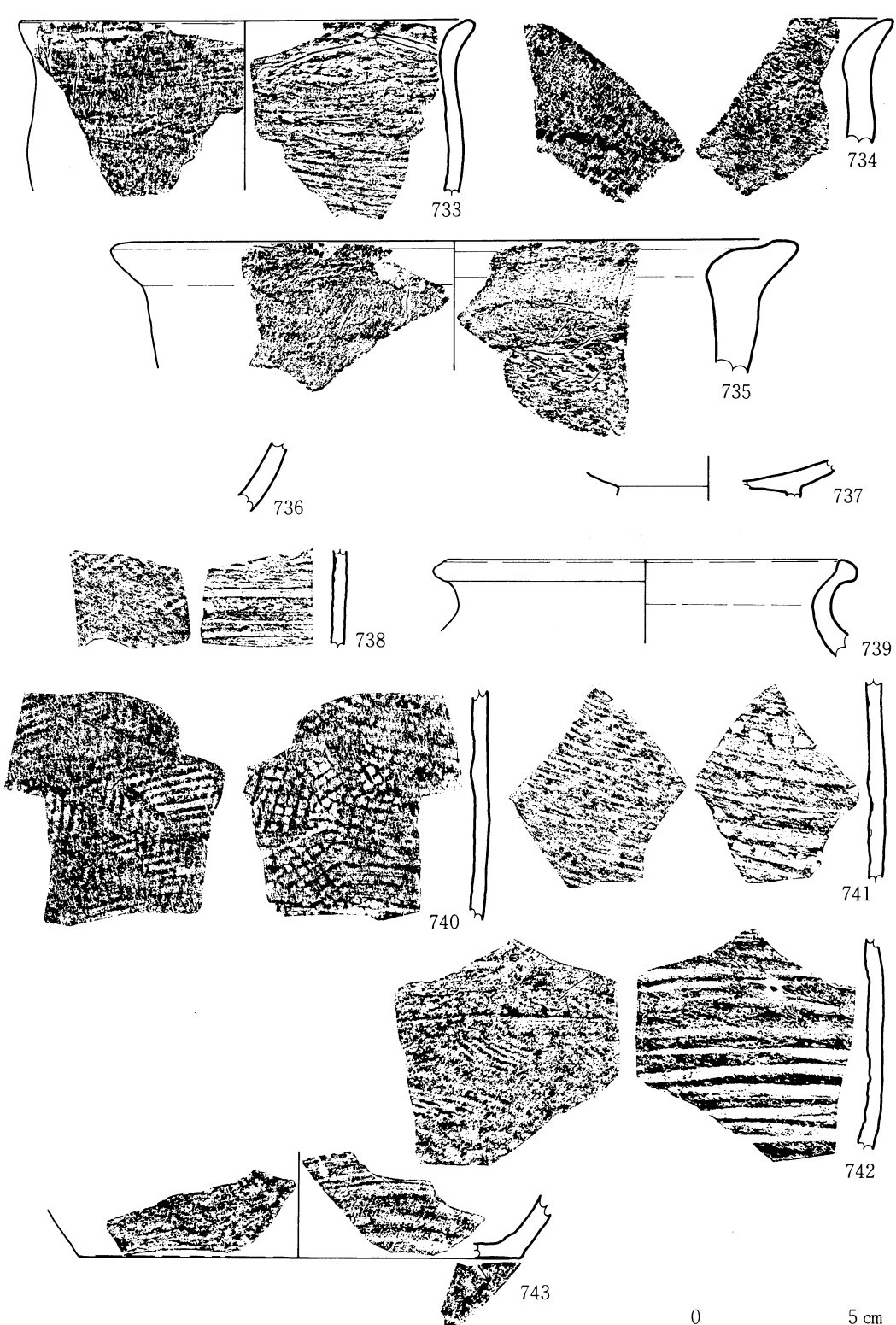
第87图 土器(第3地点)-55



第88图 土器(第3地点)-56



第89图 土器(第3地点)-57



第90図 土器(第3地点)-58

3) 第3地点の遺物分布と接合関係

① Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類土器 (第91・95図)

第3地点における、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類土器の出土分布状況及び接合関係は、第90図と第94図に示した。

Ⅲ～Ⅴ類土器は、総じて類似した分布状況を呈している。すなわち、最も出土量の多いⅣ類土器の分布域内に、Ⅲ・Ⅴ類土器が混在している状況と見えようである。また、Z-31区を中心に分布し、A区にはほとんど分布しないことは注目される。

② Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ類土器 (第92・95図)

第3地点における、Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ類土器の出土分布状況及び接合関係は、第91図・第94図に示した。

Ⅵ類土器は、Z・Y-32区を中心に分布し、Ⅷ類土器は少数であるが極少的なまとまりはなく、全域に散在している。また、Ⅷ類土器は、全域に分布し、特にA区にまで分布していることは、注目される。

③ Ⅸ・Ⅹ類土器 (第93・95図)

第3地点における、Ⅸ・Ⅹ類土器の出土分布状況及び接合関係は、第92・94図に示した。

Ⅸ類土器は、全域にほぼ均等に分布し、Ⅹ類土器も少量の出土であるが、同様の傾向が認められる。接合関係は、南北で最大7.0m、東西で6.0mのものが見られた。

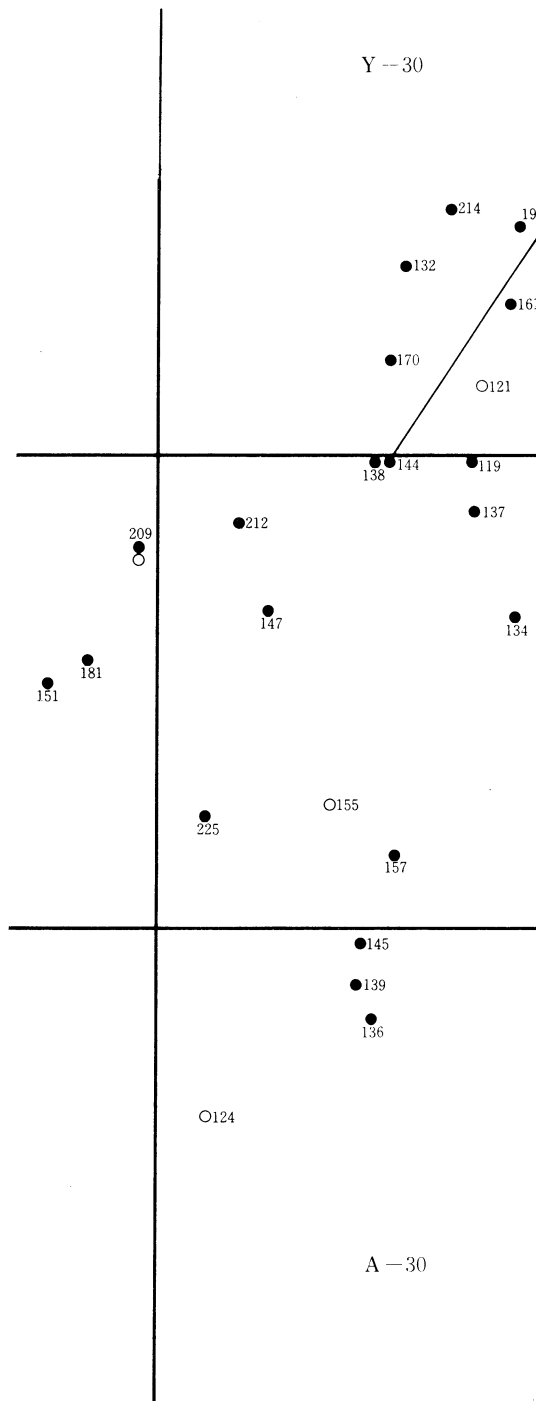
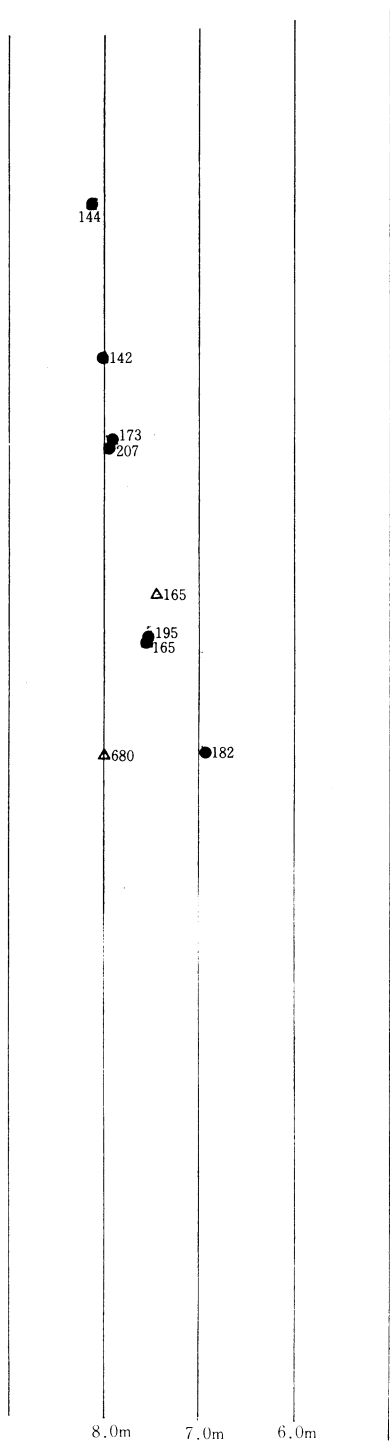
④ Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ類土器 (第94・95図)

第3地点における、Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅢ・ⅩⅣ類土器の出土分布状況及び接合関係は、第93・94図に示した。

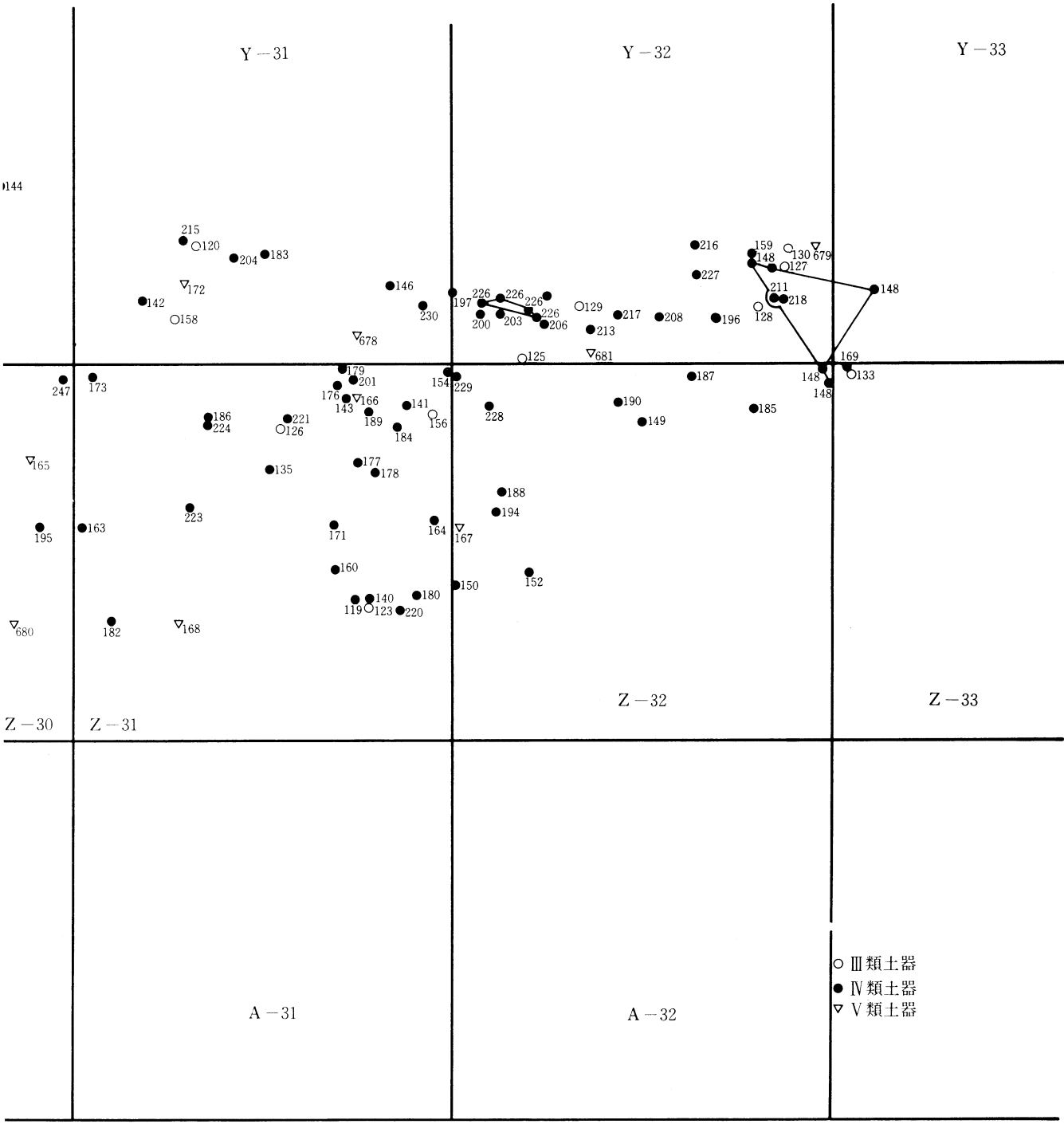
Ⅺ類土器を中心に、全域に分布している。接合関係は、Ⅺ類で最大12.5m、ⅩⅣ類で最大13.0mのものが認められる。また、その他の接合資料も分布の広がり認められ、個体の分散化が認められようである。

Ⅲ類からⅩⅣ類までの分布状況を概観すると、Ⅲ～Ⅴ類土器は、Y区とZ区を分布の領域とし、A区にはほとんど分布を示していない。一方、Ⅵ～ⅩⅣ類土器は、Z区を分布の中心とし、A区まで、ほぼ均等に分布していることを示している。

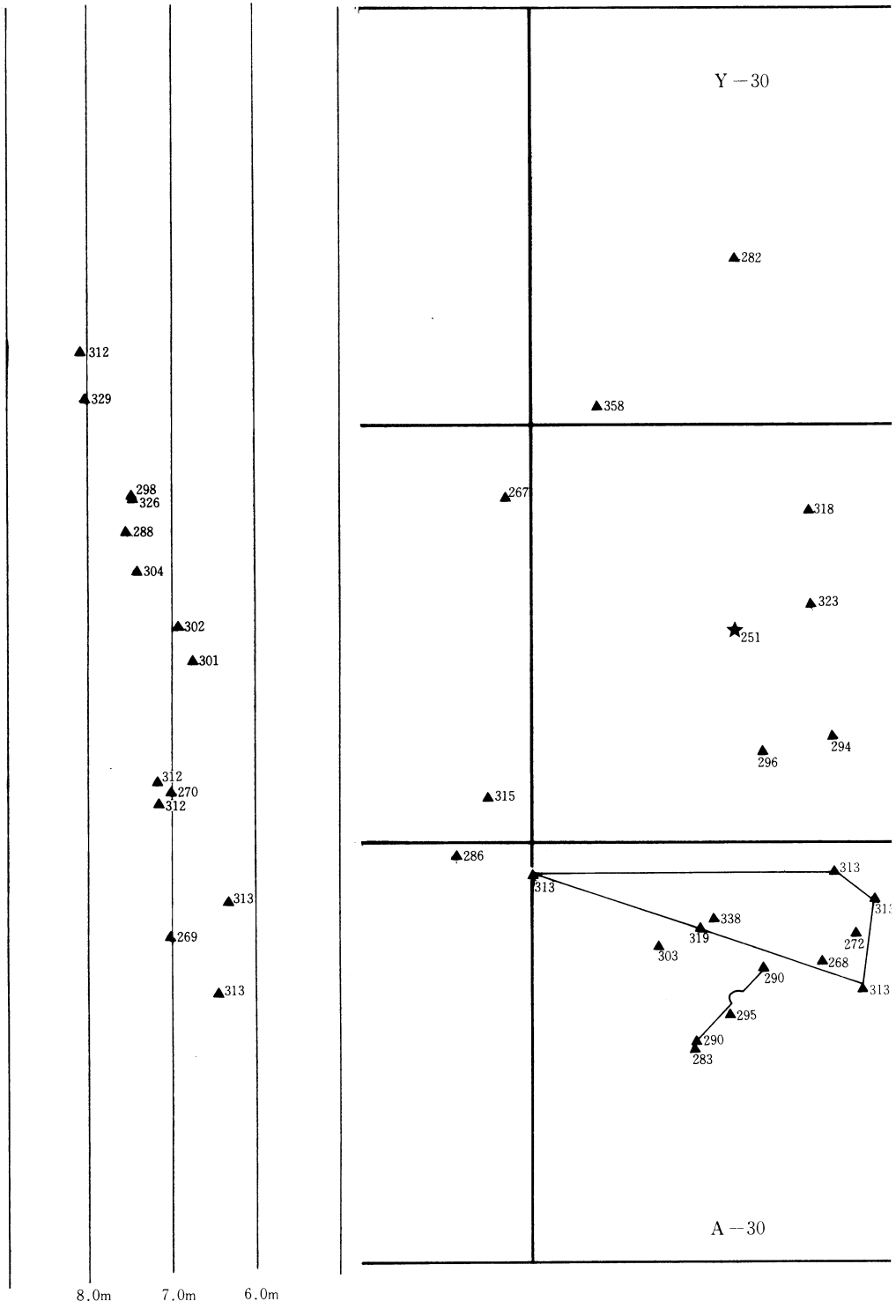
このことは、接合関係でも認められ、Ⅳ類土器は、Y区を中心に一部Z区との接合を示し、Ⅵ～ⅩⅣ類土器は、Z区を中心に、接合を示している。また、広範囲での接合をなすのも、Ⅵ～ⅩⅣ類土器と見ることができる。なかでも、特にⅪ類、ⅩⅣ類土器の接合関係は、類似した状況を示しており、興味深い。



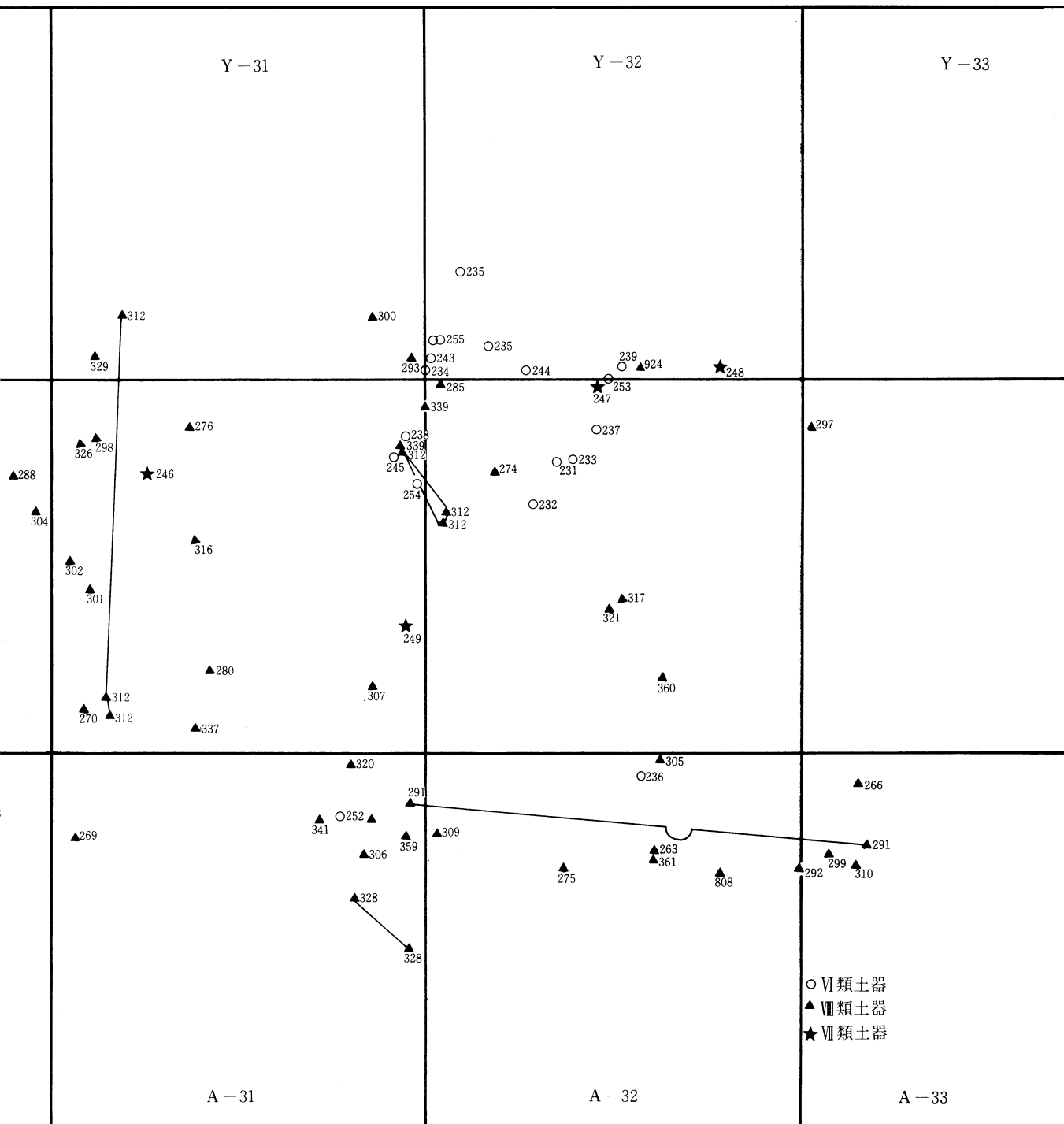
第91图 第3地点



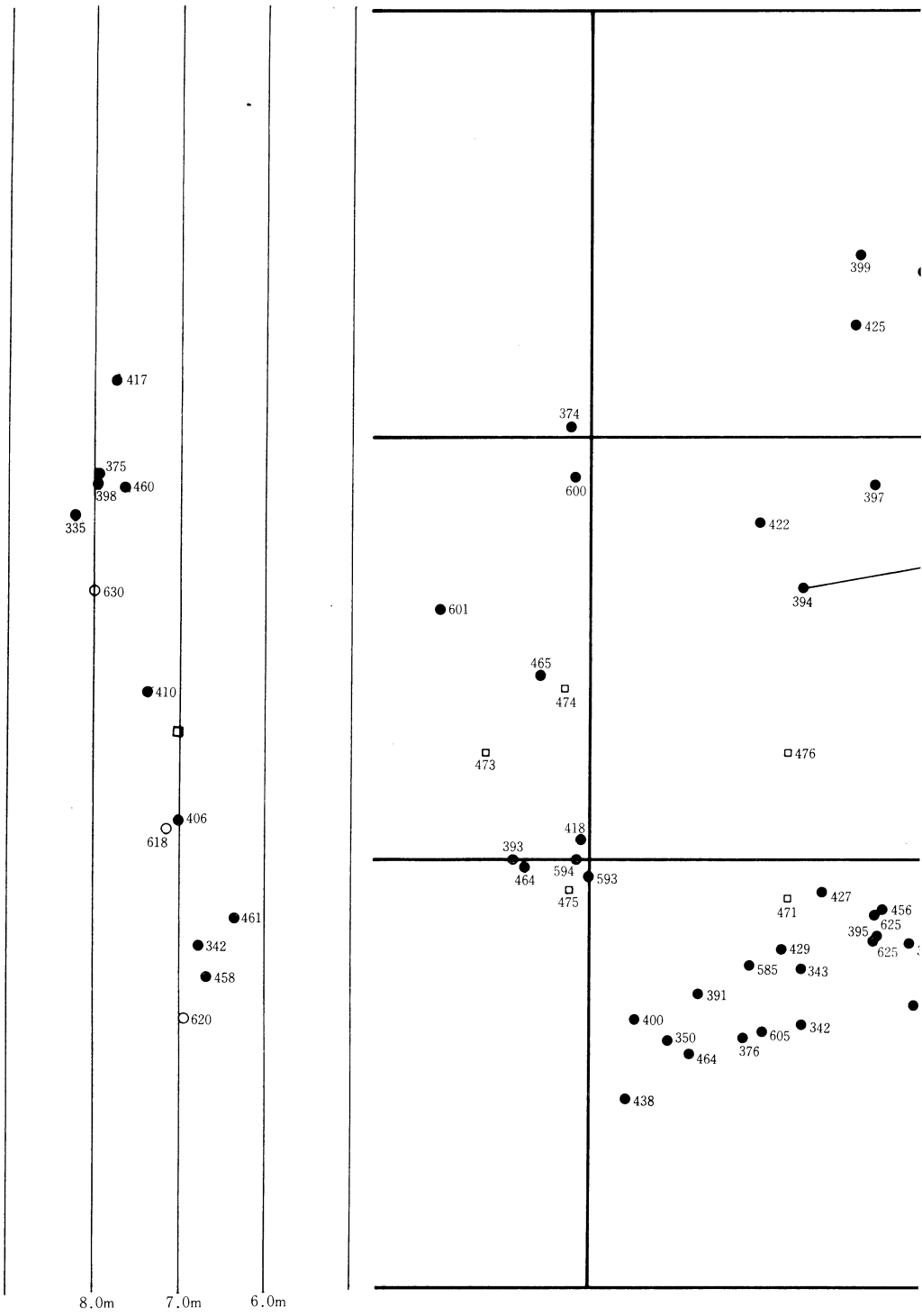
出土遺物分布図及び接合図(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類土器)



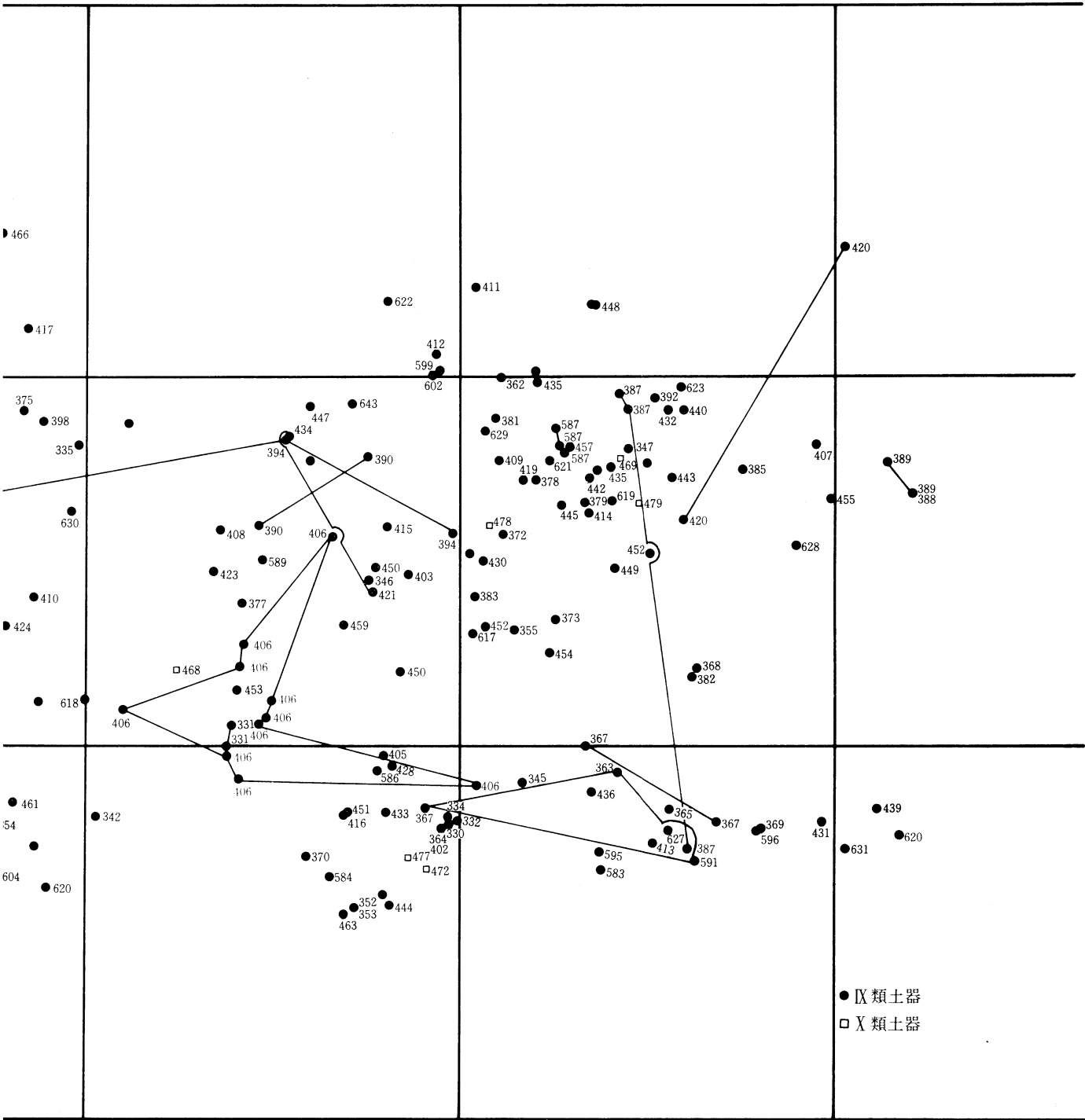
第92図 第



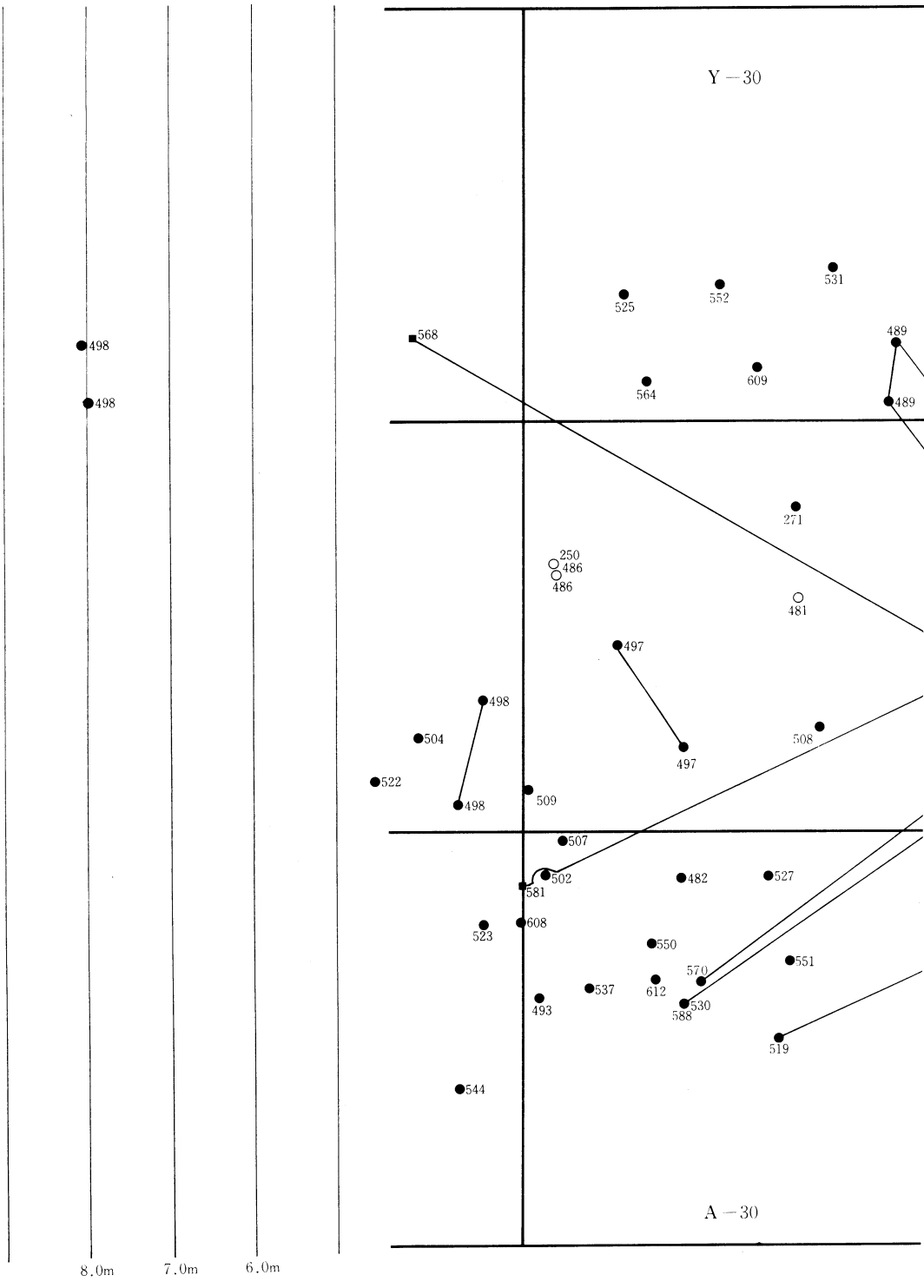
3 地点出土遺物分布図及び接合図 (VI・VII・VIII類土器)



第93图 第3:



地点出土遺物分布図及び接合図 (IX・X類土器)



第94图 第3地

Y-31

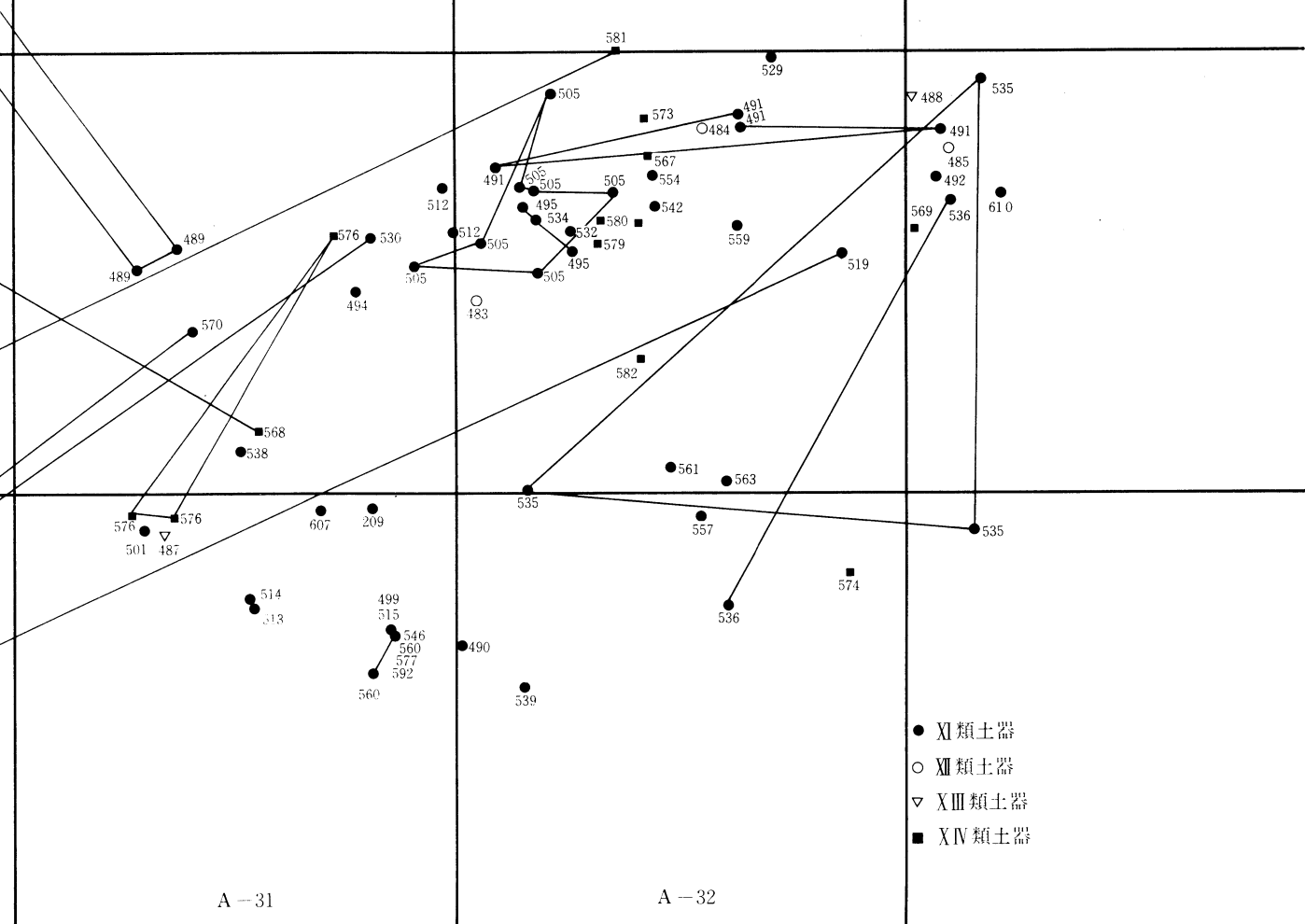
Y-32

Y-33

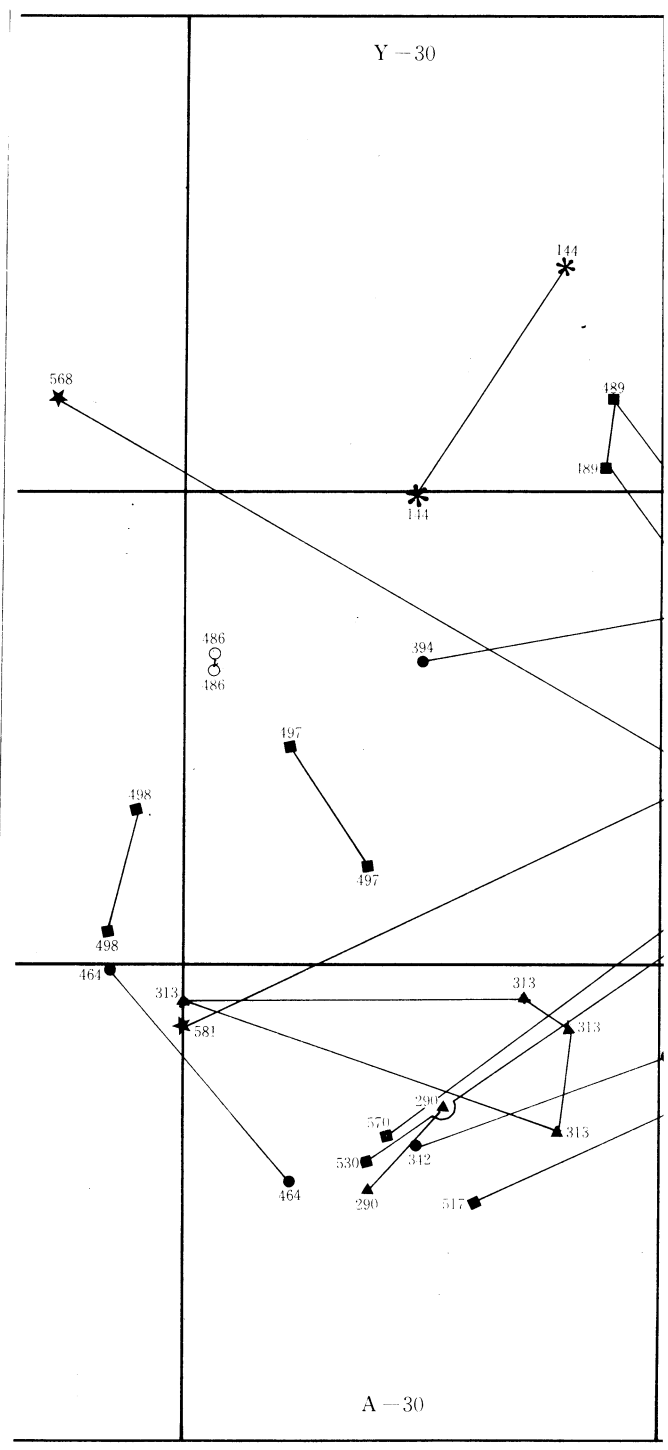
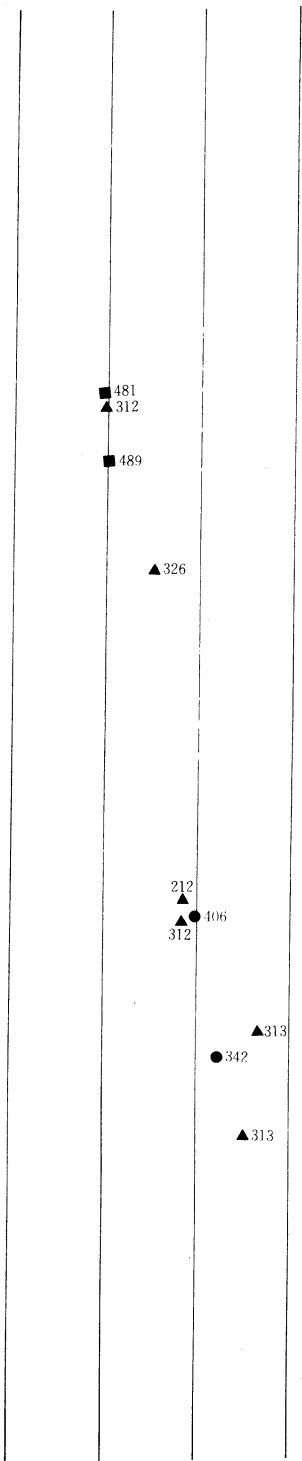
A-31

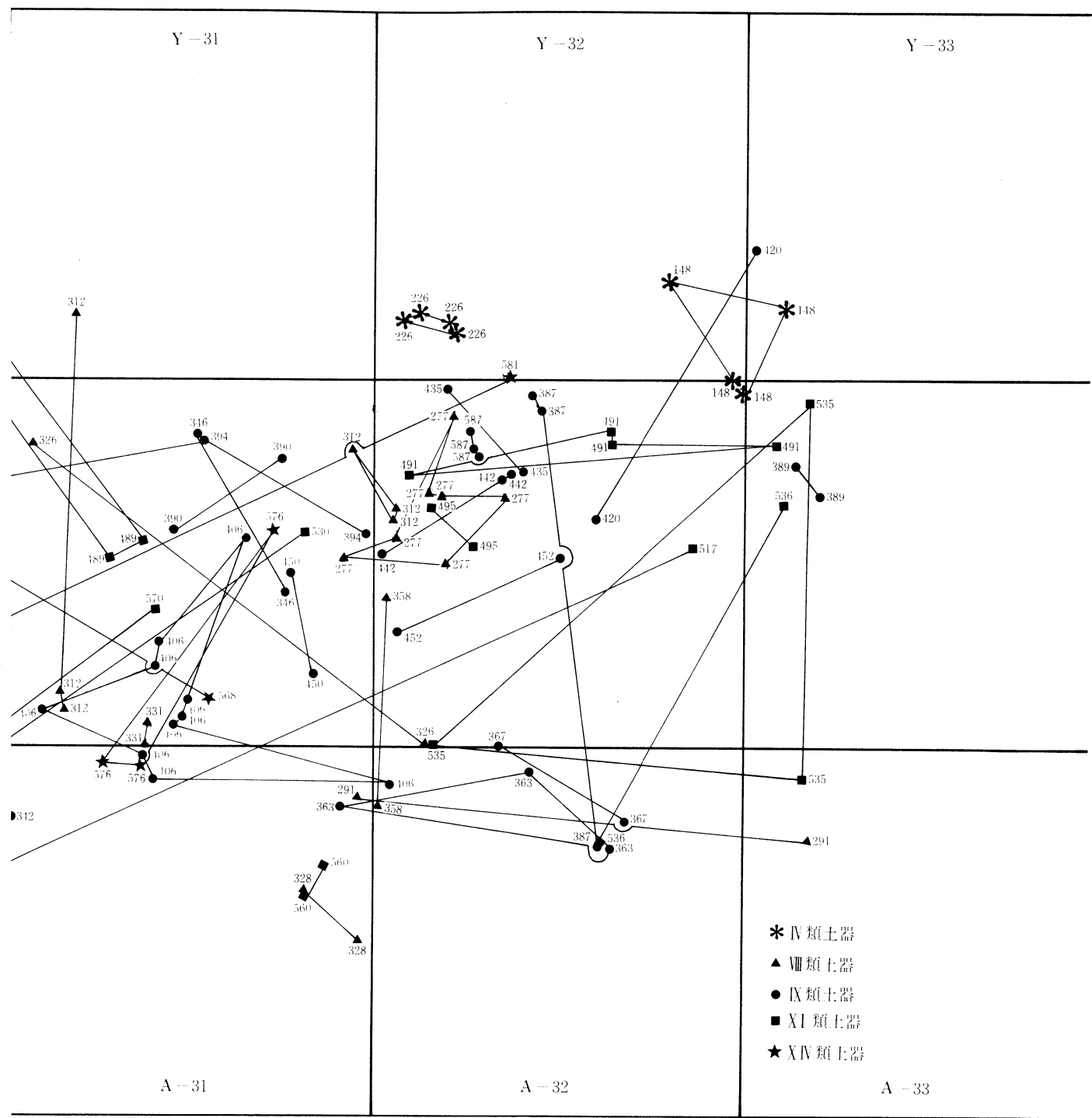
A-32

- XI類土器
- XII類土器
- ▽ XIII類土器
- XIV類土器



点出土遺物分布図及び接合図 (XI・XII・XIII・XIV類土器)





第95図 第3地点出土遺物接合図

表2 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-1

No	取上No	出土区	レベル(m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
1	42	1地点	-	7.5YR 3/3 暗褐	深鉢 円	I	外:入念なナデ 内:ナデ	器内約5mm。口唇部はヘラによる斜位の刻目。横・縦位の短沈線 縦位の文様区画。内面も縦位の沈線文。
2	41	〃	-	5YR 3/3 暗赤褐	深鉢 円	I	外:ナデ 内:条痕後ナデ	1と同一個体の可能性が高い。胴部は斜位のヘラ沈線文。焼成は 良で硬質。
3	9080	〃	8.44	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅲ-a	外:ナデ 内:ナデ	口唇部に又状工具による連続刺突。頸部に隆帯、上位に連続刺突 胴部は、横位の連続刺突と沈線文にそった連続刺突。
4	10	〃	7.74	7.5YR 4/3 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:条痕 内:条痕後ナデ	無文。5と同一個体。口縁部は肥厚(製作段階で意図的に実施)。
5	10	〃	7.74	7.5YR 4/3 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	無文。4と同一個体。長石粒を多く含み、角閃石も含む。
6	9036	〃	8.68	7.5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:入念なナデ 内:ナデ	蛇行する隆帯を貼り付け、又状工具で深い刻目を施す。沈線によ る文様は認められず。長石粒・角閃石を含む。
7	1	〃	7.88	7.5YR 4/3 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:ナデ 内:ナデ	口縁部の可能性もある。無文。焼成は良で硬質。長石粒を多く含 む。
8	9071	〃	8.42	7.5YR 6/3 にぶい褐	鉢 円	Ⅲ-a	外:入念なナデ 内: -	胴部片。ヘラによる縦位の刺突。4~5mm程の砂粒を含む。硬質。
9	9035	〃	8.68	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅲ-a	外:ヘラ後ナデ 内: -	胴部片。又状工具による浅い連続刺突。4mm程の砂粒・長石粒を 含む。
10	9025 9071	〃	8.40 8.42	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:入念なナデ 内:条痕後ナデ	接合資料。ヘラによる鋸歯状の組み合わせ文。細砂を多く含み焼 成は良で硬質。
11	9019	〃	8.48	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅲ-b	外:条痕後ナデ 内:ナデ	胴部片。ヘラによる鋸歯状の組み合わせ文。長石粒を多く含み硬 質。
12	9011 9029	〃	8.55 8.56	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:入念なナデ 内:入念なナデ	接合資料。ヘラの先端部による鋸歯状の組み合わせ細沈線文。長 石粒、角閃石を多く含み、焼成は良で硬質。
13	35	〃	7.79	7.5YR 3/3 暗 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:条痕 内:ナデ	胴部片。5mm程の砂粒・長石粒・角閃石を含む。硬質。
14	9067	〃	8.68	7.5YR 3/4 暗 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:ナデ 内: -	胴部片。上下位共に粘土紐の接合面で剥脱。6~8mm程の粘土紐 が観察できる。砂粒を多く含む。無文。
15	9033	〃	8.54	7.5YR 4/3 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:条痕 内:ナデ	胴部片。接合面で剥脱。長石粒・角閃石を多く含み硬質。無文。
16	9005	〃	8.68	7.5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:ナデ 内:条痕	接合面で剥脱。無文。長石粒・角閃石を多く含み硬質。
17	9035	〃	8.68	5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:条痕 内:条痕	下位の胴部片。無文。砂粒を多く含む。硬質。
18	34	〃	7.79	5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:横位条痕 内:横位条痕	胴部片。無文。内面では粘土紐の接合面が部分的に残される。砂 粒多く焼成は良。硬質。
19	9098	〃	8.53	5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。無文。長石粒を多く含み、金雲母も含まれる。
20	9004	〃	8.73	7.5YR 4/3 褐	鉢 円	Ⅲ-a b	外:条痕 内:ナデ	底部片。乳房状突起の感あり。砂粒を多く含む。
21	9072	〃	8.42	7.5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅲ-a b	外:縦位の条痕 内:ナデ	底部片。乳房状突起の尖底。微砂粒を含む。
22	9044	〃	8.68	7.5YR 4/3 褐	鉢 円		外:横位の条痕 内:ナデ	器内厚く9~10mm程で重い。ヘラの先端による沈線の直行する組 み合わせ文。砂粒、8mm程の小礫を含む。

表3 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—2

No	取上No	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
27	8210	Z-21	7.65	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外: 条痕 内: 条痕	口唇部に刺突。無文。細砂粒を多く含む。硬質。
28	8222	A-21	7.46	5 YR 6/3 にぶい橙	鉢 円	Ⅲ-b	外: 条痕 内: ナデ	口唇部に又状工具による深い連続刺突。無文。細砂粒を含み角閃石も含まれる。硬質。
29	8186	A-23	7.38	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外: ナデ 内: ナデ	口唇部に又状工具による浅い連続刺突。多量の長石粒を含む。
30	8133	A-24	7.01	7.5 YR 4/3 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外: ナデ 内: ナデ	口唇部に又状工具による連続刺突。多量の長石粒を含む。小型土器で器肉も薄い。
31	-	A-23	-	5 YR 3/3 暗赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外: ナデ 内: ナデ	口唇部内面寄りに又状工具による浅い連続刺突。口縁下に刻目刺突。長石粒多し。
32	-	A-21	-	5 YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外: 条痕 内: 条痕	口唇部に又状工具による連続刺突。口縁部直下に深い刻目突帯。
33	8274	Z-22	7.82	5 YR 6/6 橙	鉢 円	Ⅲ-a	外: ナデ 内: ナデ	口唇部に又状工具による連続刺突。口縁部直下にも同工具による刻目突帯。突帯より頸部にかけて縦位の連続刺突。砂粒多く軟質。
34	8071	Z-22	7.21	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外: ナデ 内: 条痕	口唇部に又状工具による連続刺突。頸部に同工具による刻目突帯を1条巡らす。
35	8245	Z-22	7.77	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外: 条痕 内: ナデ	口唇部に又状工具による連続刺突。口縁部直下にも同工具による刻目突帯。長石粒を多く含む。
36	174	A-24	7.42	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外: ナデ 内: 条痕	口唇部内面に連続刺突。口唇端部に連続刺突。口縁端部に又状工具による連続刺突。長石粒>角閃石>石英粒。硬質。
37	-	A-23	-	5 YR 5/8 明暗褐	鉢 円	Ⅳ	外: 工具ナデ 内: 工具ナデ	口縁端部に貼付突帯。突帯上に又状工具による連続刺突刻目。屈曲部に刺突。斜位の細沈線。長石粒多し。硬質。
38	144	A-23	7.71	5 YR 4/6 赤褐	鉢 円	Ⅳ	外: 横位条痕 内: ナデ	口唇部・口縁端部に又状工具による連続刺突。屈曲部に縦位の沈線。砂粒多し。硬質。
39	8127	A-24	7.04	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ	外: ナデ 内: ナデ	口縁端部に貼付突帯。突帯上に刺突。屈曲部に斜位の沈線。砂粒及び長石粒多し。硬質。
40	-	A-21	-	5 YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ	外: ナデ 内: ナデ	口縁端部に連続刺突の貼付突帯。屈曲部に縦位のヘラ描き沈線。長石粒を多量に含む。
41	-	A-21	-	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅳ	外: 入念なナデ 内: ナデ	口縁部に幅広い貼付突帯。突帯上に又状工具による連続刺突を2条巡らす。屈曲部に鋸歯状の沈線。焼成良好。硬質。
42	358	A-21	7.64	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ	外: ナデ 内: ナデ	口縁端部に又状工具の連続刺突をもつ貼付突帯。肩部も同様。屈曲部に縦位のヘラ沈線。胴部は斜位の沈線。硬質。
43	8287	Z-22	7.54	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅲ-a	外: ナデ 内: ナデ	口縁端部に貼付突帯。口唇部と突帯上に又状工具の連続刺突。屈曲部に直行する突帯を施し同様に刺突。焼成良好で硬質。分量大。
44	8138	A-24	7.17	7.5 YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅳ-a	外: ナデ 内: ナデ	貼付突帯が屈曲し、又状工具による連続刺突が付く。接合面で剝脱。長石粒多し。
45	153	A-23	7.33	7.5 YR 5/6 明褐	鉢 円	Ⅲ-b	外: ナデ 内: ナデ	蛇行する貼付突帯。突帯上に又状工具による連続刺突。長石粒多し。やや軟質。
46	8259	Z-22	7.84	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外: 条痕 内: 条痕	肩部に連続刺突を持つ貼付突帯。ヘラ沈線。
47	83	A-21	6.76	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外: 条痕 内: ナデ	肩部に幅広い貼付突帯。又状工具による連続刺突。ヘラ沈線による鋸歯文。接合面が観察される。長石粒多し。
48	8207	Z-22	7.76	5 YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外: ナデ 内: ナデ	屈曲部にヘラ描き沈線。屈曲する貼付突帯の痕跡あり。焼成良好硬質。砂粒多し。
49	8003 4419 2318	A-24 Y-32 Y-32	7.30 7.89 7.89	7.5 YR 3/3 暗褐	鉢 円	Ⅳ-a	外: ナデ 内: ナデ	接合資料。肩部に細い隆帯。突帯より大きめの又状工具の連続刺突。斜位の細沈線。焼成良好。硬質。
50	-	A-21	-	5 YR 3/4 暗赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外: 工具ナデ 内: 条痕	口径 260mm。口唇部と2条の突帯上に又状工具による連続刺突、屈曲部に斜位のヘラ沈線。肩部より胴部へY字状の細沈線。
51	8281 8287	Z-22 Z-22	7.37	5 YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外: 工具ナデ 内: 条痕	50と同一個体の可能性が高い。頸部の屈曲が大きい。焼成良好。硬質。

表4 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-3

No	取上No	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
52	8249	Z-22	7.62	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:工具ナデ	突帯上に又状工具による連続刺突。斜位の細沈線文。硬質。
53	8166	A-24	7.34	10YR 6/3 にぶい黄橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	肩部にやや幅広の突帯。又状工具による連続刺突。屈曲部に鋸歯状ヘラ沈線。胴部は礙位。砂粒多し。
54	8066	A-23	7.17	10YR 6/4 にぶい黄橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	肩部幅広の突帯に斜位の刻目。接合面で剥脱。砂粒多し。
55	73	A-21	6.61	5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	微隆線上に又状工具による連続刺突。細砂粒多し。やや軟質。
56	180	A-24	7.53	5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	49と同種の細沈線。同一個体の可能性あり。
57	-	A-21	-	2.5YR 6/2 灰 赤	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。接合面で剥脱。器内薄し。硬質。
58	8300	A-21	7.55	2.5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕	胴部片。沈線の接触部。硬質。薄手。
59	8210	Z-21	7.65	2.5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。接合位置明瞭。硬質。薄手。
60	8248	Z-22	7.54	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:入念なナデ 内:入念なナデ	胴部片。細沈線。
61	-	A-21	-	2.5YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。やや硬質。
62	8284	Z-21	7.46	2.5YR 5/2 灰 赤	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。硬質。薄手。
63	8264	Z-22	7.79	2.5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。硬質。薄手。長石粒多し。
64	8235	A-20	7.52	5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕	胴部片。ヘラ沈線。やや厚手。硬質。
65	8282	A-21	7.76	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。硬質。薄手
66	361	A-21	7.60	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:横位の条痕	胴部片。硬質。薄手。
67	8164	A-24	7.59	10YR 5/3 にぶい黄褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	底部片(尖底)。砂粒多し。硬質。
68	8304	Z-22	7.28	5YR 3/3 暗赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	底部片(尖底)。砂粒多し。硬質。
69	43	A-21	6.70	5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	XV	外:ナデ 内:ナデ	口唇内端に隆帯貼付。刻目を施す。外面は刻目と同一工具による鋸歯文。長石粒を主体とした砂粒を多く含む。硬質。
70	57	A-21	6.41	5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	XV	外:ナデ 内:ナデ	69と同一個体。砂粒を多く含む器面はザラザラしている。
71	8003 8004	A-23 A-23	7.30 7.27	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	XV	外:ナデ 内:ナデ	69と同一の個性を示す。口唇内端の隆帯がやや下がる。硬質。
72	-	A-23	-	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	XV	外:ナデ 内:ナデ	69と同一の個性を示す。外面に口縁端部より直行する三角突帯。
73	-	A-22	-	5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	XV	外:ナデ 内:ナデ	直行する三角突帯。砂粒多し。
74	90	A-21	6.58	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	XVI	外:ナデ 内:一部条痕	屈曲部に横走する1条の三角突帯。上位は鋸歯文、下位は不規則な沈線。砂粒多し。
75	363	A-21	7.25	5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	XVI	外:ナデ 内:ナデ	74と同一の個性を示す。図は上下逆転の可能性が高い。砂粒多し
76	182	A-24	7.26	5YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 円	XVI	外:ナデ 内:ナデ	74と同一の個性を示す。横走する三角突帯はやや低め。鋭いヘラで鋸歯文を描く。

表5 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—4

No	取上No	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
77	8155	A-24	7.26	5 Y R 5/4 にぶい赤褐		IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部は平坦。山形口縁の可能性大。ヘラによる沈線文。細砂粒多し。やや軟質。
78	8055 8062	A-24 A-24	7.33 7.32	5 Y R 5/6 明赤褐	鉢 円	IX-b	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	接合資料。口径228mm。山形口縁。規則性のない沈線文。細砂粒。器面はザラザラ。
79	8154	A-24	7.18	5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	IX-b	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	78と同一の個性を示す。
80	8160	A-24	7.19	5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。砂粒多く器面はザラザラ。硬質。
81	8176	A-23	7.19	5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	丸味をもつ口唇部。砂粒多く器面はザラザラ。縦・横位の沈線間を斜位の短沈線で埋める。
82	8139	A-24	7.24	2.5 Y R 5/6 明赤褐	鉢 円	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。81と同じ特徴を持つ。細砂粒を含む。やや軟質。
83	8103	A-23	7.31	7.5 Y R 6/4 にぶい橙	鉢 円	XVI	外:入念なナデ 内:—	部位不明。浅い沈線(繊維質工具)。微砂粒。
84	802	A-23	7.34	7.5 Y R 6/6 橙	鉢 円	XVI	外:入念なナデ 内:—	83と同一個体の可能性あり。部位不明。
85	8021	A-23	7.34	7.5 Y R 6/4 にぶい橙	鉢 円	XVI	外:入念なナデ 内:—	83と同一個体の可能性あり。口縁部と思われるが不確実。
86	8050	A-24	7.49	5 Y R 5/6 明赤褐	鉢 円	XI	外:ナデ 内:ナデ	波状口縁。区画文間に連続刺突。文様帯肥厚。5mm程の砂粒と少量の金雲母を含む。薄手でやや軟質。
87	8189	Z-22	7.87	5 Y R 3/3 暗赤褐	鉢 円	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。文様帯肥厚。沈線による3本1組の編み籠文。口唇部に連続刺突。多量の砂粒を含む。
88	—	A-27	—	5 Y R 5/3 にぶい赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。区画文間に連続刺突(半截竹管)。薄手、硬質。
89	9081	A-21	8.34	2.5 Y R 4/6 赤褐	鉢 円	IV	外:条痕 内:条痕	底部(接地面)。整形は雑。
90	8182 8177	A-23 A-23	7.44 7.30	5 Y R 5/6 明赤褐	甕 円	XVII	外:縦位のナデ 内:ナデ	底部。上げ底。
91	8001	A-23	7.21	7.5 Y R 5/4 にぶい褐	甕 円	XVII	外:不明 内:不明	底部。脚台。上げ底。
92	—	A-23	—	7.5 Y R 6/6 橙	甕 円	XVII	外:縦位ハケナデ 内:ハケナデ	底部。脚台付き上げ底。長石粒を主体とし、砂粒多く、器面ザラザラ。重量感あり。
93	—	A-27	—	5 Y R 4/5 にぶい赤褐	鉢 角	VII-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部平坦と文様帯に間のびした押し引き。薄手、硬質。角閃石多し。
94	—	A-27	—	5 Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢 角	VII-b	外:ナデ 内:ナデ	浅く間のびした押し引き。硬質。砂粒多くザラザラ。
95	7030	A-26	6.60	5 Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	VII-b	外:ナデ 内:条痕	口唇部と文様帯に斜位の連続刺突。半截竹管。外面にスス付着。細砂粒多し。
96	7055	A-27	7.04	10 R 4/4 赤褐	鉢 円	XI	外:工具ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。細沈線文。斜位の連続刺突。薄手。硬質。長石粒多し。
97	—	A-26	—	2.5 Y R 6/5 明赤褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	96と同一の個性を示す。多量の金雲母を含む。
98	—	A-26	—	2.5 Y R 6/5 明赤褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	96と同一の個性を示す。多量の金雲母を含む。
99	—	A-27	—	7.5 Y R 3/6 にぶい褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部に方向の異なる2条の連続刺突。区画沈線文間に斜位の連続刺突。103と同一個体の可能性大。
100	—	A-27	—	7.5 Y R 3/6 にぶい褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	縦位の区画沈線。焼成前の穿孔。103と同一個体の可能性大。
101	—	A-26	—	5 Y R 3/4 にぶい赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	区画線文間に連続刺突(半截竹管)。外面にスス付着。薄手、硬質。

表6 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—5

No.	取上No.	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
102	—	A-26	—	2.5Y R 4/6 赤 褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:条痕	区画線文間に連続刺突(半截竹管)。補修孔1個。薄手、やや軟質
103	7047	A-27	—	7.5Y R 6/3 にぶい褐	鉢 円	XI	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。区画線文間に連続刺突。文様帯肥厚。焼成前の穿孔。薄手、やや軟質。
104	—	A-26	—	2.5Y R 5/4 にぶい褐	鉢 円	XI	外:ナデ 内:ナデ	区画線文間に連続刺突(半截竹管)。口唇部にも施す。薄手、やや軟質。
105	—	A-27	—	2.5Y R 5/6 明赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	区画線文間に連続刺突(半截竹管)。薄手、やや軟質。
106	—	A-27	—	7.5Y R 6/6 橙	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	区画線文間に連続刺突(半截竹管)。薄手、やや軟質。
107	—	A-25 A-26	—	2.5Y R 5/6 明赤褐	鉢 円	XI	外:工具ナデ 内:工具ナデ	波状口縁。文様帯肥厚。間のびした押し引き文で構成。細沈線も施す。砂粒多し。
108	—	A-26 A-27	—	2.5Y R 4/6 赤 褐	鉢 角	XI	外:条痕 内:工具ナデ	口縁部文様帯肥厚。口唇部は連続刺突と沈線。下位にも刺突。細線による鋸歯文。外面にスス付着。金雲母。
109	—	A-26	—	2.5Y R 5/6 明赤褐	鉢 角	XI	外:条痕 内:条痕後ナデ	108と同一の個性を示す。薄手、硬質。
110	130	A-26	7.02	2.5Y R 5/6 明赤褐	鉢 角	XI	外:条痕 内:ナデ	108と同一の個性を示す。
111	122	A-27	7.00	2.5Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。構成は108に類似。下位の沈線は連続刺突の可能性もある。
112	—	A-27	—	2.5Y R 6/3 にぶい橙	鉢 円	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯若干肥厚。山形口縁の可能性あり。薄手、硬質。
113	—	A-27	—	2.5Y R 4/6 赤 褐	鉢 円	IX-b	外:入念なナデ 内:ナデ	やや外傾する口唇部。沈線による区画文間に短沈線を施す。外面にスス付着。
114	7063	A-27	6.98	2.5Y R 4/2 灰 赤	鉢	IX-b	外:入念なナデ 内:ナデ	口唇部平坦。沈線(深い)による鋸歯文。
115	7011	A-26	6.88	2.5Y R 3/3 暗赤褐	鉢 円	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部平坦。沈線による3本1組の編み籠文。外面にスス付着。少量の金雲母。
116	—	A-27	—	5 Y R 6/3 にぶい橙	鉢	—	外:工具ナデ 内:—	胴部片。沈線による鋸歯文。硬質。
117	—	A-27	—	2.5Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢 角	IX	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。文様帯肥厚。沈線横走。
118	—	A-27	—	2.5Y R 6/6 橙	鉢	IX	外:ナデ 内:ナデ	117と同一の個性を示す。肥厚帯及び下位に平行沈線文。少量の金雲母を含む。
119	1308 2096	Z-30 Z-31	7.94 7.22	5 Y R 3/3 暗赤褐	鉢 円	IV	外:— 内:—	口唇部に又状工具による連続刺突。屈曲部に縦位の細沈線。器肉は厚く重量感あり。長石粒多し。焼成良好。硬質。
120	4405	Y-31	7.83	5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	III-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	口唇部に又状工具による連続刺突。屈曲部に同工具による横位の連続刺突。硬質。
121	1326	Y-30	7.90	5 Y R 6/6 橙	鉢 円	III-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部に又状工具による連続刺突。無文。スス付着。細砂粒多く硬質。
122	—	Z-30	—	5 Y R 5/6 明赤褐	鉢 円	III-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部に又状工具による連続刺突。屈曲部に斜位(蛇行)の隆帯。隆帯上に又状工具による連続刺突。
123	2008	Z-31	7.40	2.5Y R 4/6 赤 褐	鉢 円	III-b	外:条痕後ナデ 内:条痕	口縁直下に小突帯。突帯上に又状工具による連続刺突。微砂粒。
124	931	A-30	7.19	5 Y R 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	III-b	外:入念なナデ 内:条痕後ナデ	口唇端部と屈曲部に突帯。突帯上に同一の又状工具による連続刺突。長石粒多し。硬質。
125	3462	Y-32	7.74	2.5Y R 5/6 明赤褐	鉢 円	III-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇端部と屈曲部に突帯。突帯上に同一の又状工具による連続刺突。やや軟質。
126	2128	Z-31	7.79	2.5Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	III-b	外:条痕後ナデ 内:ナデ	口縁直下に蛇行する突帯。口唇内端と突帯上に又状工具による連続刺突。硬質

表7 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-6

№	取上№	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
127	2857	Y-32	7.94	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:横ナデ 内:ナデ	口縁部直下と屈曲部に突帯。同一の又状工具で連続刺突。金雲母を含む。
128	2845	Y-32	7.82	5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:横位条痕 内:ナデ	口縁部直下と屈曲部(蛇行)に突帯。同一の又状工具で連続刺突。金雲母少量。
129	4424	Y-32	7.00	5YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:横ナデ 内:条痕後ナデ	口縁部直下と屈曲部に突帯。突帯の上下位に連続刺突。やや軟質
130	2681	Y-32	8.09	2.5YR 3/6 暗赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:横ナデ 内:条痕後ナデ	口唇端部と屈曲部に突帯。砂粒多し。硬質。
131	9082	-	7.48	7.5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:ナデ 内:条痕	口唇内端に刺突。屈曲部に突帯。又状工具による連続刺突。小型土器。
132	793	Y-30	7.94	5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	突帯はやや下がる。口唇部と突帯に連続刺突。刺突具は異なる。やや軟質。
133	3707	Z-33	7.45	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:粗のナデ 内:人念なナデ	口縁端部に突帯。焼成良く硬質。金雲母を含む。
134	1152	Z-30	7.75	- /	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	
135	548	Z-30	7.89	7.5YR 4/3 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	連続刺突具は貝腹縁。屈曲部は深いヘラ沈線。金雲母を含む。硬質。
136	965	A-30	6.90	- /	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:ナデ	
137	1335	Z-30	7.70	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	連続刺突具は貝腹縁部か?少量の金雲母を含む。硬質で光沢あり
138	1260	Z-30	7.70	5YR 3/3 暗赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	連続刺突具は貝腹縁部か?屈曲部の沈線はヘラ。硬質で光沢あり
139	864	A-30	7.00	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:横位条痕 内:横位条痕	連続刺突は又状工具。接合面明瞭。薄手、硬質。
140	2008	Z-31	7.40	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	口唇部はヘラ刻み。突帯上は又状工具の連続刺突。金雲母を多量に含む。薄手、硬質。
141	605	Z-30	8.00	5YR 4/6 赤 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:条痕	連続刺突は半截竹管か?砂粒多し。ガラガラしている。
142	4567	Y-31	8.00	2.5YR 4/6 赤 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕後ナデ	連続刺突は半截竹管か?硬質で光沢あり。
143	2437	Z-31	7.50	5YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-b	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	突帯上に2条の連続刺突。肩部に横走る突帯と直行する突帯にも連続刺突。
144	612 630	Y-30 Y-30	7.96 8.10	5YR 4/6 赤 褐	鉢 円	Ⅳ-b	外:条痕 内:条痕	接合資料。口唇部に円盤状の貼付。又状工具で連続刺突。口縁部と肩部に幅広の突帯。
145	-	Z-30	-	7.5YR 2/2 黒 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:横位条痕 内:条痕	連続刺突は半截竹管。復元口径 166mm。肩部の突帯は幅広。頸部の屈曲強し。硬質。
146	3255	Y-31	7.70	5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	連続刺突は半截竹管。角閃石多し。硬質。
147	1449	Y-30	7.00	5YR 2/2 黒 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕後ナデ	連続刺突は又状工具。細沈線。砂粒多し。硬質で光沢あり。
148	2903 3679 3704 2895 2729	Y-30 Z-33 Z-32 Y-33 -	7.30 7.40 7.70 7.80 7.90	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-b	外:条痕 内:条痕	接合資料。幅広突帯。連続刺突は貝腹縁部か?金雲母多し。軽量焼成良好。
149	2876	Z-32	7.60	2.5YR 3/3 暗赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	連続刺突は半截竹管。接合面明瞭。金雲母少量。ガラガラ。
150	2791	Z-31	7.10	5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:条痕	連続刺突は又状工具か?細砂粒。

表8 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-7

No	取上No	出土区	レベル(m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
151	883	Z-29	7.60	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	連続刺突は又状工具か? 砂粒多く器面ザラザラ。硬質。
152	2214	Z-32	7.30	2.5YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	接合面明瞭。連続刺突は半截竹管。砂粒多く器面ザラザラ。硬質
153	4777	Y-32	7.13	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:条痕	復元口径106mm。屈曲部に細沈線。角閃石。薄手、硬質。
154	3397	Y-32	7.61	2.5YR 5/2 灰 赤	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:ナデ	接合面明瞭。連続刺突は半截竹管。砂粒多く金雲母を含む。硬質 ザラザラ。
155	1662	Z-30	6.74	2.5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-b	外:ナデ 内:ナデ	蛇行突帯。連続刺突は又状工具。少量の金雲母を含む。硬質。
156	3508	Z-31	7.22	2.5YR 4/6 赤 褐	鉢 円	Ⅳ-b	外:入念なナデ 内:条痕	蛇行突帯。連続刺突は貝工具か? 長石粒多し。焼成は良く硬質で 光沢あり。
157	1038	Z-30	6.94	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	連続刺突は又状工具。口唇部の刺突は又状工具を寝かせて施す。 やや厚手、硬質。
158	3088	Y-31	7.97	2.5YR 4/6 赤 褐	鉢 円	Ⅳ-b	外:ナデ 内:条痕	連続刺突は又状工具か?
159	3143	Y-32	7.64	7.5YR 3/1 黒 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	屈曲部細沈線。角閃石多し。スス付着。硬質。
160	2452	Z-31	7.32	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕後ナデ	肩部の細沈線。薄手。金雲母多し。硬質。
161	614	Y-30	7.94	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕後ナデ	肩部片。連続刺突は又状工具。接合面で剥脱。砂粒多し。硬質。
162	1280	Z-29	7.37	2.5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅲ-b	外:入念なナデ 内:条痕	突帯上はヘラ刻目。ヘラによる短沈線の連続文。やや厚手、硬質 スス付着。
163	4528	Z-30	7.54	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	V	外:条痕 内:粗の条痕	幅広の隆帯。連続刺突は又状工具を寝かせて施す。多量の金雲母 を含む。
164	3433	Z-31	7.16	7.5YR 2/2 黒 褐	鉢 円	V	外:ナデ 内:条痕後ナデ	口唇部と幅広の隆帯の上位と下位に斜位の刺突(押し引き状)。薄 手、硬質。
165	1340	Z-30	7.72	10YR 2/2 黒 褐	鉢 円	V	外:条痕後ナデ 内:ナデ	口唇部は沈線を巡らす。連続刺突はヘラ。金雲母多し。薄手、硬 質。
166	2358	Z-31	7.89	5YR 4/6 赤 褐	鉢 円	V	外:ナデ 内:工具ナデ	口唇部突起には刺突。連続刺突は半截竹管。薄手、硬質。
167	2724	Z-32	7.62	2.5YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	V	外:ナデ 内:条痕後ナデ	突帯は口唇部内面まで達す。連続刺突は又状工具。砂粒多くザラ ザラ。
168	4295	Z-31	7.01	2.5YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	V	外:ナデ 内:ナデ	ヘラによる刻目。口唇内側は内傾。微砂粒多く硬質。
169	3705	Z-33	7.38	5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	連続刺突は貝工具。長石粒、角閃石多し。薄手、硬質。
170	616	Y-30	8.10	10YR 5/3 にぶい黄褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:粗の条痕 内:条痕	連続刺突は又状工具。砂粒多くザラザラ。薄手、硬質。
171	4709	Y-32	6.93	10YR 5/2 灰黄褐	鉢 円	V	外:ナデ 内:ナデ	幅広突帯。172と同一の個性を示す。復元口径170mm。
172	3237	Y-31	7.55	10YR 4/2 灰黄褐	鉢 円	V	外:ナデ 内:ナデ	幅広突帯。刻目はヘラの先端。復元口径200mm。長石粒、金雲母 を含む。薄手、硬質。
173	4533	Z-31	7.92	5YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:入念なナデ 内:ナデ	口唇部、口縁部に3条の連続刺突(又状工具)。肩部も同様。厚手 硬質。復元口径230mm。
174	-	A-30	-	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。スス付着。薄手、硬質。長石粒多し。
175	-	Z-30	-	5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。 長石粒>石英粒>角閃石

表9 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-8

No.	取上No.	出土区	レベル(m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
176	2223	Z-31	7.87	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:条痕後ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。金雲母少量。
177	2547	Z-31	7.49	5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。接合面で剥脱。内外面共にスス付着。角閃石多し。
178	3294	Z-31	7.24	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕?	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。金雲母多し。
179	2256	Y-31	7.81	7.5YR 4/3 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:工具ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。
180	2626	Z-31	7.07	5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:人念なナデ 内:ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。少量の金雲母・角閃石を含む。
181	1257	Z-29	7.08	5YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:工具ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。 長石粒>石英粒>角閃石>金雲母
182	4613	Z-31	6.93	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:工具ナデ	胴部片。細沈線文。やや厚手、硬質。砂粒多くザラザラ。角閃石多し。
183	3189	Y-31	7.89	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:人念なナデ 内:工具ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。砂粒多し。接合面で剥脱。
184	3359	Z-31	7.33	7.5YR 4/3 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。砂粒多し。接合面で剥脱。スス付着。
185	4239	Z-32	5.98	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:人念なナデ 内:人念なナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。長石粒多く角閃石少量
186	2161	Z-31	7.76	5YR 5/2 灰 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。
187	2777	Y-32	7.49	5YR 4/6 赤 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。 長石粒>石英粒>角閃石>金雲母
188	3039	Z-32	7.49	5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。
189	2208	Z-31	7.91	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:縦位条痕 内:ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。内面にスス付着。長石粒多し。
190	3690	Z-32	7.35	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:人念なナデ 内:工具ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。接合面で剥離。微砂粒。
191	1965	Z-31	7.65	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:人念なナデ 内:ヘラナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。光沢あり。微砂粒。
192	1366	Y-30	7.91	2.5YR 6/6 橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:工具ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。接合面で剥離。微砂粒。
193	-	Z-30	-	5YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。微砂粒。
194	2943	Z-32	7.51	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。接合面明瞭。微砂粒。
195	1322	Z-30	7.57	10YR 6/2 灰黄褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:工具ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。接合面で剥脱。長石粒>角閃石
196	2865	-	7.74	5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:工具ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。内面にスス付着。微砂粒。
197	773	Y-32	8.02	2.5YR 5/2 灰 赤	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:工具ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。長石粒、石英粒多し。器面ザラザラ。
198	4825 4817	Y-32 Y-32	6.51 6.99	5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:工具ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。多量の金雲母を含む。外面にスス付着。
199	4806	-	7.07	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:工具ナデ 内:縦位条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。少量の金雲母を含む。外面にスス付着。
200	4796	Y-32	6.93	10YR 5/3 にぶい黄褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:工具ナデ 内:ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。少量の長石粒。

表10 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—9

No.	取上No.	出土区	レベル(m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
201	2479	Z-31	7.64	10YR 6/3 にぶい黄橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。内外面にスス付着。接合面明瞭
202	-	Y-30	-	5YR 4/8 赤 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。長石粒>角閃石
203	4020	Y-32	7.27	5YR 4/6 赤 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。接合面明瞭。 長石粒>石英粒>金雲母
204	3181	Y-31	-	10YR 6/3 にぶい黄橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:ヘラナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。 長石粒>石英粒>金雲母
205	-	Z-30	-	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。 長石粒>角閃石>金雲母
206	4788	Y-32	6.97	10YR 5/2 灰黄褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:工具ナデ 内:ヘラナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。外面にスス付着。多量の金雲母を含む。
207	4531	Z-30	7.96	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。粘土紐の接合面が明瞭に残る。多量の金雲母を含む。
208	2949	Y-32	7.68	5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。接合面で剥脱。微砂粒使用。
209	1280	Z-29	7.37	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。砂粒多くザラザラ。
210	-	Y-32	-	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:工具ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。粘土紐の接合面が明瞭に残る。多量の金雲母を含む。
211	3077	Y-32	7.53	5YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。接合面で剥脱。金雲母を含む。
212	1448	Y-30	7.10	5YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。多量の金雲母を含む。接合面明瞭。
213	4797	Y-32	6.86	5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。多量の金雲母を含む。
214	1376	Y-30	7.92	5YR 3/3 暗赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:縦线条痕 内:粗の条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。底部に近い部分と思われる。角閃石少量。
215	4403	Y-31	7.98	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。 長石粒>石英粒>金雲母>角閃石
216	3174	Y-32	7.82	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。やや軟質。内面の整形が難で接合面が凹みをなす。
217	3338	Y-32	7.71	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	胴部片。薄手、硬質。外面にスス付着。
218	4040	Y-32	7.04	2.5YR 4/3 暗赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:条痕	底部近く。薄手、やや軟質。石英粒多し。
219	-	Y-32	-	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:条痕	底部近く。薄手、やや軟質。石英粒多し。
220	1882	Z-31	7.54	5YR 5/2 灰 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	底部近く。薄手、硬質。
221	420	Z-31	7.95	5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:条痕	底部(接地面)。小型土器の可能性あり
222	4808	-	7.00	10YR 6/3 にぶい黄橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕	底部(接地面)。砂粒を多量に含む。金雲母少量。
223	2062	Z-31	7.90	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕後ナデ 内:ナデ	底部(接地面)。内面に接合時の爪痕が残る
224	-	Z-32	-	10YR 5/2 灰黄褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:ナデ	底部(接地面)。細砂粒多し
225	1508	Z-30	6.83	10YR 5/2 灰黄褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:-	底部(接地面)。長石粒多し

表11 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-10

№	取上№	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
226	4776	Y-32	7.27	10YR 5/2 灰黄褐	鉢	Ⅳ-a	外:工具ナデ 内:条痕	接合資料。胴部片。細沈線文。薄手、硬質。外面にスス付着。多量の金雲母を含む。
	4787		6.53					
	4808		7.00					
	4798		7.21					
	4819		6.95					
4795	7.23							
227	4050	Y-32	7.62	2.5YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:工具ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。沈線は波状。多量の砂粒を含む
228	3578	Z-32	7.59	2.5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕 内:粗の条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。外面に二次焼成の痕跡あり。
229	3554	Z-32	7.46	2.5YR 4/6 赤 褐	鉢 円	Ⅳ-a	外:条痕一部ナデ 内:条痕	底部(接地面)。薄手、硬質。内面の条痕整形は底面より回転しながら上位へ進む。
230	3369	Y-31	7.62	5 YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅳ-a	外:ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線文。薄手、硬質。
231	2879	Z-32	7.69	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅵ-a	外:横位条痕 内:横位条痕	文様帯肥厚。棒状工具による縦位の刻目。硬質。砂粒多し。
232	2993	Z-32	7.45	5 YR 5/8 明赤褐	鉢 円	Ⅵ-a	外:条痕後ナデ 内:横位条痕	文様帯肥厚。棒状工具による縦位の刻目。口唇部はナデの後に刻目を施す。少量の金雲母を含む。
233	3206	Z-32	7.53	5 YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅵ-a	外:横位条痕 内:横位条痕	文様帯肥厚。棒状工具による縦位の刻目。口唇部はナデの後に刻目を施す。砂粒多し。
234	3352	Y-31	7.52	5 YR 5/8 明赤褐	鉢 円	Ⅵ-a	外:横位条痕 内:横位条痕	文様帯肥厚。棒状工具による縦位の刻目。砂粒多く器面はザラザラ。復元口径154mm。
235	3464	Y-32	7.71	5 YR 3/3 暗赤褐	鉢 円	Ⅵ-a	外:横位条痕 内:横位条痕	文様帯肥厚。棒状工具による縦位の刻目。口唇部はナデの後に刻目を施す。外面にスス付着。復元口径180mm。
	3387	Y-32	7.72					
236	3622	A-32	7.01	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅵ-b	外:横位条痕 内:横位条痕	文様帯肥厚。棒状工具による斜位の刻目。口唇部はナデの後に刻目を施す。内面に刺突。
237	3836	Z-32	7.18	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅵ-a	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。棒状工具による斜位(内側へ)の刻目。口唇部はナデの後に刻目を施す。外面にスス付着。
238	3333	Z-31	7.51	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅵ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。へら状工具による刻目。不規則な沈線文。外面にスス付着。
239	726	Y-32	7.82	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅵ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。棒状工具による縦位の刻目。口唇部はナデの後に刻目を施す。細沈線を施す。
240	3505	Z-31	7.13	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅵ-b	外:条痕 内:条痕	文様帯肥厚。棒状工具による斜位の刻目。内面に刺突。口唇部はナデの後に刻目を施す。外面にスス付着。
241	3643	Y-31	7.15	2.5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅵ-c	外:条痕 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部に沈線と連続刺突。工具不明。外面にスス付着。
242	777	Y-32	7.98	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅵ-c	外:横位条痕 内:条痕	文様帯肥厚。口唇部に沈線と連続刺突。工具不明。外面にスス付着。
243	3283	Y-32	7.69	5 YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅵ-c	外:条痕 内:条痕後ナデ	口唇部と口縁部に又状工具による連続刺突。薄手。やや軟質。微砂粒を含む。
244	3408	Y-32	7.77	2.5YR 6/3 にぶい橙	鉢 円	Ⅵ-c	外:横位条痕 内:条痕	文様帯肥厚。又状工具による連続刺突。薄手。硬質。
245	3509	Z-31	7.07	2.5YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅵ-c	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。へらによる3条の連続刺突。沈線文。
246	3640	Z-32	7.41	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅵ-a	外:ナデ 内:ナデ	幅広突帯。口唇部、突帯上、頸部に連続刺突。薄手、硬質。
247	727	Z-32	7.92	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅵ-a	外:ナデ 内:ナデ	幅広突帯。口唇部は連続刺突。端部は斜位の刻目。
248	2740	Y-32	7.44	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅵ-a	外:ナデ 内:条痕	幅広突帯。口唇部は連続刺突。端部も刺突。
249	2518	Z-31	7.04	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅵ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	幅広突帯。口唇部に3条の連続刺突。端部に2条の連続刺突。刺突具はへら。下位に組み合わせ文。硬質。

表12 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-11

No.	取上No.	出土区	レベル(m)	色調(表)	器種類	類別	調整	備考
250	1439	Z-30	7.23	5 Y R 5/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅵ-b	外:条痕 内:横条痕	文様帯肥厚。貝殻腹縁の刺突。
251	885	Z-30	-	2.5 Y R 5/8 明赤褐	鉢 円	Ⅶ	外:条痕 内:ナデ	幅広突帯。口唇部と端部に又状工具による連続刺突。文様帯肥厚連続刺突(刺突具不明)。
252	2985	Y-32	7.44	2.5 Y R 4/6 赤褐	鉢 円	Ⅵ-c	外:ナデ 内:ナデ	外面スス付着。
253	2968	Z-32	7.57	2.5 Y R 3/4 暗赤褐	鉢 円	Ⅵ-d	外:条痕 内:条痕	文様帯肥厚。貝殻腹縁(?)の連続刺突。外面スス付着。復元口径220mm。
254	2180	Z-31	7.56	5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:条痕	口唇部は沈線文と綾杉文。斜行突帯。
255	3303	Y-32	7.67	5 Y R 3/4 暗赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:-	口唇部文様は254と類似。屈曲部に沈線の組み合わせ文。外面にスス付着。
256	-	Z-32	-	5 Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部に横走する2条沈線。
257	3690	Z-32	-	5 Y R 3/4 暗赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:条痕	口唇部に横走する3条沈線。屈曲部に幅広の突帯。260と同一個体の可能性高い。
258	3302	Y-32	7.91	2.5 Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:条痕 内:条痕	外傾する幅広の口唇部に斜位のヘラ刻目。
259	3465	Y-32	7.75	2.5 Y R 5/6 明赤褐	鉢	Ⅵ-c	外:条痕 内:条痕	肥厚した口唇部に間のびした押し引き。砂粒多し。
260	3115	Y-32	7.73	5 Y R 3/4 暗赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:条痕	257と同一個体。
261	4082	Y-32	7.06	2.5 Y R 5/6 明赤褐	鉢	Ⅵ-c	外:ナデ 内:ナデ	口唇部へ棒状工具による刻目。口縁端より屈曲部へかけ沈線文。復元口径120mm。
262	-	Z-30	-	2.5 Y R 6/6 橙	壺 円	Ⅷ-a	外:入念なナデ 内:条痕後ナデ	文様帯肥厚。6mm幅の刺突具で編み籠風の押し引き。細砂粒、少量の金雲母を含む。焼成良く硬質。
263	3893	A-32	6.62	5 Y R 5/2 灰褐	鉢?	Ⅶ-a	外:ナデ 内:条痕後ナデ	内面の屈曲角度より壺形土器の可能性ある。微砂粒を多く含む硬質。
264	4333	A-31	6.26	7.5 Y R 4/2 灰褐	鉢	Ⅶ-a	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。山形口縁。直線的文様構成。口唇部へも押し引き。スス付着。厚手、やや軟質。
265	-	Z-30	-	5 Y R 5/6 明赤褐	鉢	Ⅷ-a	外:条痕後ナデ 内:ナデ	押し引きがやや間のびし、連続刺突状を呈す。
266	3185	A-33	7.44	5 Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	肥厚口縁の可能性大。連続刺突(?)で編み籠文。長石粒>角閃石>。やや軟質。
267	585	Z-29	7.58	5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:入念なナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。間のび押し引き。部分的に方向転換。口縁部施文。薄手、硬質。
268	1624	A-30	6.74	2.5 Y R 4/3 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	文様帯肥厚。間のび押し引き。部分的に方向転換。内面に縦沈線。薄手、硬質。
269	4539	A-31	7.07	5 Y R 4/3 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅷ-a	外:ナデ 内:条痕	文様帯肥厚。山形口縁。押し引きにやや間のびした感がある。薄手、硬質。外面にスス付着。
270	4593	Z-31	7.07	2.5 Y R 5/6 明赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。間のび押し引き。硬質。
271	1238	Z-30	7.73	5 Y R 4/6 赤褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。間のび押し引き。沈線による区画文。
272	1781	A-30	6.61	2.5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。間のび押し引き。口唇部施文。内面縦位の細沈線。砂粒多く含む。
273	4389	A-31	-	5 Y R 4/2 灰褐	鉢	Ⅶ-b	外:条痕 内:ナデ	間のび押し引き。薄手、硬質。スス付着。
274	2355	Z-32	-	2.5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅷ-a	外:条痕後ナデ 内:ナデ	やや間のびした編み籠風の押し引き。薄手、硬質。間のび押し引き。口唇部施文。

表13 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—12

No	取上No	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
275	4225	A-32	6.31	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	スス付着。間のび押し引き。口唇部施文。山形口縁。
276	382	Z-31	8.00	5 Y R 2/2 黒 褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	スス付着。薄手、硬質。
277	4672	Z-31	7.55	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。口唇部施文。山形口縁。施文が直線的に規格性を示す。薄手、長石粒多し。
278	1322	Z-30	7.57	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:工具ナデ	間のび押し引き。厚手、硬質。
279	-	Z-32	-	7.5YR 6/3 にぶい褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:工具ナデ	間のび押し引き。口唇部施文。山形口縁。厚手、硬質。
280	1954	Z-31	7.65	5 Y R 5/6 明赤褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。口唇部施文。山形口縁。口縁部若干肥厚。薄手硬質。砂粒多し。
281	4848	Z-32	6.65	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。砂粒多く器面ザラザラ。薄手、軟質。
282	622	Y-30	8.11	10YR 2/2 黒 褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。口唇部施文。山形口縁で突起がつく。口縁部若干肥厚。薄手、硬質。
283	1067	A-30	6.77	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。口唇部斜位の刻目。内面に縦位の沈線。やや軟質。
284	-	Z-30	-	5 Y R 5/8 明赤褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。口唇部施文。微砂粒多し。外面にスス付着。やや軟質。
285	2320	Z-32	7.92	5 Y R 5/6 明赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。連続刺突風。微砂粒多し。外面にスス付着。やや軟質。
286	1151	A-29	7.15	5 Y R 4/3 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。連続刺突風。内外面共にスス付着。薄手、硬質
287	-	-	-	10YR 4/2 灰黄褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。間のび押し引き。連続刺突風。外面にスス付着。薄手、硬質。
288	1389 4388	Z-30 A-31	-	2.5YR 3/2 暗赤褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:条痕 内:条痕後ナデ	接合資料。文様帯肥厚。間のび押し引き。連続刺突風。山形口縁スス付着。
289	-	A-31	-	2.5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内: -	文様帯肥厚。間のび押し引き。連続刺突風。
290	1862 1779	A-30 A-30	6.03 6.34	10YR 5/2 灰黄褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:条痕	接合資料。文様帯肥厚。間のび押し引き。円形の補修孔、外面にスス付着。内面に浅い沈線。
291	3242 3873	A-33 A-31	7.13 6.65	5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:条痕後ナデ	接合資料。文様帯肥厚。間のび押し引き。山形口縁、突起。スス付着。
292	4232	A-32	6.75	7.5YR 4/3 褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。間のび押し引き。3mm程の砂粒多し。器面ザラザラ
293	3643	Y-31	7.15	5 Y R 4/2 灰 褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:条痕	文様帯肥厚。口唇部平坦。硬質。長石粒多し。
294	1423	Z-30	7.01	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:条痕 内:ナデ	ヘラ状工具による間のび押し引き。内面に浅い沈線。
295	1715	A-30	7.23	5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。口唇部刻目。内面に浅い沈線。外面にスス付着やや軟質。
296	569	Z-30	7.41	5 Y R 5/3 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。口唇部施文。内面施文。外面にスス付着。やや軟質。
297	2605	Z-32	7.82	5 Y R 5/6 明赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。間のび押し引き。やや軟質。長石粒多し。
298	4669	Z-31	7.53	5 Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。間のび押し引き。口唇部短沈線。
299	2690	A-33	7.23	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯若干肥厚。間のび押し引き。薄手、やや軟質。

表14 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—13

No.	取上No.	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
300	3368	Y-31	7.48	5 YR 7/4 にぶい橙	鉢	Ⅶ-b	外:工具ナデ 内:工具ナデ	口縁部下段肥厚。口唇部平坦。間のびし連続刺突様の押し引き。 301~304同一個体。
301	4664	Z-31	6.78	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢角	Ⅶ-b	外:工具ナデ 内:工具ナデ	山形口縁。口縁部下段肥厚。口唇部平坦。間のびし連続刺突様の 押し引き。スス付着。
302	4624	Z-31	6.96	5 YR 6/6 橙	鉢	Ⅶ-b	外:工具ナデ 内:工具ナデ	口縁部下段肥厚。口唇部平坦。間のびし連続刺突様の押し引き。
303	1746	A-30	6.33	5 YR 5/6 明赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:工具ナデ 内:工具ナデ	口縁部下段肥厚。口唇部平坦。間のびし連続刺突様の押し引き。
304	4628	Z-30	7.41	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢角	Ⅶ-b	外:工具ナデ 内:工具ナデ	口縁部下段肥厚。口唇部平坦。間のびし連続刺突様の押し引き。 スス付着。厚手、硬質。
305	2964	A-32	7.21	5 YR 4/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。口唇部施文。スス付着。
306	4304	A-31	6.24	2.5 YR 5/6 明赤褐	鉢角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。口唇部突起。内面施文。砂粒多し。
307	2522	Z-31	7.02	2.5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	連続刺突。口唇部施文。内面施文。やや軟質。
308	4230	A-32	6.70	2.5 YR 3/2 暗赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	連続刺突。口唇部施文。スス付着、薄手、やや軟質。
309	3797	A-32	6.70	2.5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。押し引き。口唇部施文。スス付着。長石粒多し。
310	2578	A-33	7.31	2.5 YR 5/6 明赤褐	鉢角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	連続刺突。口唇部施文。内面浅い細沈線。少量の金雲母を含む。
311	-	-	-	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	連続刺突。内面浅い細沈線。スス付着
312	4567 4576 4577	Y-31 Z-31 Z-31	8.02 7.18 7.22	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢角	Ⅶ-b	外:入念なナデ 内:ナデ	接合資料。復元口径110mm。上面は方形で胴部に最大径あり。口 縁部若干肥厚。山形口縁。間のび押し引き。薄手、硬質。外面に スス付着。微砂粒含む。
313	1765 1804 3276 3729 3938	A-30 A-30 Z-31 Z-32 Z-32	6.32 6.52 7.50 7.13 7.10	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅶ-b	外:条痕 内:条痕	接合資料。復元口径160mm。文様帯肥厚。連続刺突。口唇部施文。 やや軟質。砂粒多くザラザラしている。金雲母含む。
314	-	Z-30	-	5 YR 6/2 灰褐	鉢角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	押し引きの間のびが著しく、沈線の状態。口唇部施文。外面にス ス付着。山形口縁。315、316、318、319と同一個体?
315	1129	Z-29	7.23	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	押し引きの間のびが著しく、沈線の状態。口唇部施文。山形口縁
316	2038	Z-31	7.80	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	押し引きの間のびが著しく、沈線の状態。口唇部施文。外面にス ス付着。山形口縁。
317	2390	Z-32	7.29	5 YR 5/4 にぶい褐	鉢角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	押し引きの間のびが著しく、沈線の状態。薄手、硬質。
318	1238	Z-30	7.73	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	押し引きの間のびが著しく、沈線の状態。
319	504	A-30	7.23	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	押し引きの間のびが著しく、沈線の状態。314、315、316、318と 同一個体の可能性が高い。
320	3947	A-31	6.64	7.5 YR 5/4 にぶい褐	鉢角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	波状口縁。区画線文間に間のびした押し引き。薄手、やや軟質。 微砂粒含む。
321	3480	Z-32	7.00	2.5 YR 3/3 暗赤褐	鉢 円	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。口唇部施文。文様帯肥厚。厚手、やや軟質。長 石粒多し。外面スス付着。322、326と同一個体の可能性高い。
322	4827	Z-31	6.57	2.5 YR 4/2 灰赤	鉢 円	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	321、326と同一個体の可能性がある。
323	1108	Z-30	7.55	2.5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:条痕	間のび押し引き。口唇部施文。薄手、やや軟質。内面に浅い縦沈 線。波状口縁。

表15 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-14

No	取上No	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
324	2549	Y-32	7.78	5 YR 5/2 灰 褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。口唇部施文。薄手、やや軟質。砂粒多く器面がラザラ。328と同一個体の可能性高い。
325	-	A-31	-	2.5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	間のび押し引き。山形口縁。薄手、硬質。少量の金雲母含む。
326	4670 4745	Z-31 Z-32	7.49 6.94	2.5 YR 4/2 灰 赤	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:条痕後ナデ	接合資料。間のび押し引き。山形口縁。厚手、やや軟質。復元口径200mm。外面スス附着。
327	-	Y-30	-	5 YR 4/1 褐 灰	鉢	Ⅶ-b	外:横位条痕 内:条痕	間のび押し引き。口唇部施文。薄手、硬質。内面に浅い縦沈線。
328	4141 1949	A-31 A-31	7.93 6.88	7.5 YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。間のび押し引き。口唇部施文。内面に浅い縦沈線。薄手、やや軟質。復元口径184mm。砂粒多し。324と同一個体か?
329	4512	Y-31	8.01	2.5 YR 2/1 赤 黒	鉢 円	Ⅶ-b	外:条痕 内:条痕	間のび押し引き。口唇部施文。文様帯肥厚。薄手、硬質。
330	4786	A-31	6.71	7.5 YR 5/3 にぶい褐	鉢 円	Ⅸ-a	外:ナデ 内:ナデ	幅5mm程の工具で3本1組の編み籠文。口唇部斜位の刻目
331	4288 4275	Z-31 Z-31	6.86 7.00	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢 角	Ⅸ-a	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。3本1組の編み籠文。口唇部斜位の刻目。山形口縁。部分的に間のび押し引きがみられる。文様帯肥厚。
332	4785	A-32	6.73	7.5 YR 6/3 にぶい褐	鉢	Ⅸ-a	外:ナデ 内:ナデ	3本1組の編み籠文。部分的に間のび押し引きがみられる。文様帯肥厚。334と接合。
333	-	-	-	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅸ-a	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。文様帯肥厚。口唇部斜位の刻目。部分的に間のび押し引きが残る。331、332、334と同一個体の可能性高い。
334	4784	A-31	6.66	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢	Ⅸ-a	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部斜位の刻目。部分的に間のび押し引き残る。厚手、やや軟質。332と接合。
335	4462	Z-30	8.21	5 YR 6/4 にぶい橙	壺 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:条痕	文様帯肥厚。部分的に間のび押し引き残る。薄手、やや軟質。
336	4381	A-31	-	2.5 YR 6/4 にぶい橙	?	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部平坦。肥厚部に間のび押し引き。硬質。
337	4288	Z-31	6.86	2.5 YR 4/3 にぶい赤褐	壺	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。薄手、硬質。
338	1723	A-30	6.34	2.5 YR 6/4 にぶい橙	壺 ?	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部施文。胴部は条痕。長石粒>石英粒>角閃石
339	3439 3459	Z-32 Z-31	7.81 7.23	2.5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。間のび押し引き。3本1組の編み籠文。文様帯肥厚。口唇部施文。胴部は条痕。山形口縁。外面にスス附着。
340	-	Z-31	-	2.5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部施文。間のび押し引き。
341	4353	A-31	6.15	2.5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅶ-b	外:ナデ 内:条痕	口唇部施文。間のび押し引き。
342	1714 4538	A-30 A-31	6.40 6.85	2.5 YR 5/6 明赤褐	鉢	Ⅸ-a	外:ナデ 内:ナデ	部分的に間のび押し引き。長石粒多し。
343	1771	A-30	6.30	2.5 YR 5/6 明赤褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:ナデ	部分的に間のび押し引き。内面にスス附着。長石粒多し。
344	-	-	-	2.5 YR 4/6 赤 褐	鉢	Ⅶ-b	外:ナデ 内:条痕	文様帯肥厚。間のび押し引き。厚手、やや軟質。外面にスス附着
345	3867 4382 4384 4387 3130	A-32 A-31 A-31 A-31 Z-31	6.60 7.04	10R 3/3 暗赤褐	鉢 円	Ⅸ-a	外:ナデ 内:条痕後ナデ	接合資料。文様帯肥厚。部分的に間のび押し引き。厚手、やや軟質。復元口径172mm。外面にスス附着。346と同一個体の可能性高い。
346	2481 2571	Z-31 Z-31	7.53 7.15	2.5 R 4/2 灰 赤	鉢 円	Ⅸ-a	外:ナデ 内:条痕後ナデ	接合資料。文様帯肥厚。部分的に間のび押し引き。厚手、やや軟質。復元口径178mm。外面にスス附着。
347	4002	Z-32	7.04	2.5 YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅸ-a	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。部分的に間のび押し引き。厚手、やや軟質。口唇部施文。復元口径168mm。外面にスス附着。

表16 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—15

No.	取上No	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
348	4832	—	6.60	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ-a	外:ナデ 内:条痕	文様帯肥厚。口唇部施文。波状口縁。厚手、やや軟質。金雲母多し。内外面にスス付着。
349	4379	A-31	8.21	5 YR 4/6 赤褐	鉢	Ⅸ-a	外:ナデ 内:条痕	部分的に押し引き。薄手、やや軟質。長石粒多し。
350	1827	A-30	6.25	2.5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢角	Ⅸ-a	外:ナデ 内:入念なナデ	部分的に押し引き、薄手硬質。長石粒>石英粒>角閃石。354と同一個体の可能性高い。
351	—	A-30	—	2.5 YR 3/2 暗赤褐	鉢	Ⅸ-a	外:ナデ 内:条痕	押し引きの痕跡なし。厚手、やや軟質。内外面にスス付着。長石粒>石英粒>角閃石
352	4379	A-31	6.41	5 YR 6/6 橙	鉢	Ⅸ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	5mm程の工具使用。内面に浅い縦位沈線。外面にスス付着。長石粒多し。薄手、やや軟質。
353	4379	A-31	6.41	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	5mm程の工具使用。内面に浅い縦位沈線。長石粒多し。薄手、やや軟質。352、357と同一個体の可能性あり。
354	1757	A-30	6.16	5 YR 6/3 にぶい橙	鉢角	Ⅸ-a	外:ナデ 内:条痕後ナデ	山形口縁。薄手、硬質。外面にスス付着。長石粒多し。350と同一個体の可能性高い。
355	4706	Z-32	6.50	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	薄手、やや軟質。長石粒多し。357と同一個体の可能性あり。
356	4827	ベルト	9.00 ?	7.5 YR 5/3 にぶい褐	鉢	Ⅸ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	薄手、やや軟質。長石粒多し。357と同一個体の可能性あり。
357	4381 4385	A-31 A-31	— —	7.5 YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅸ-a	外:条痕後ナデ 内:条痕	接合資料。薄手、やや軟質。長石粒多し。軽量。外面にスス付着。復元口径234mm。
358	2233 3808	Z-32 A-32	7.37 6.71	10 YR 6/3 にぶい黄橙	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。文様帯肥厚。口唇部施文。又状工具で間のび押し引き。内面縦位の沈線。外面にスス付着。
359	3364	Z-32	6.87	7.5 YR 5/4 にぶい褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内: —	文様帯肥厚。又状工具で間のび押し引き。外面にスス付着。358と同一個体の可能性。
360	2807	A-33	7.30	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。又状工具で間のび押し引き。外面にスス付着。358と同一個体の可能性。
361	482	A-31	7.15	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。又状工具で間のび押し引き。外面にスス付着。358と同一個体の可能性。
362	3605	Z-32	7.56	7.5 YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	直線化した編み籠文。口唇部施文。焼成前の穿孔。内面に浅い細沈線。薄手、硬質。
363	3620 4090 3950	A-32 A-31 A-32	6.90 6.57 6.67	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	直線化した編み籠文。口唇部施文。焼成前の穿孔。内面的に浅い細沈線。薄手、硬質。362と同一個体の可能性高い。
364	4783	A-31	6.64	2.5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	直線化した編み籠文。口唇部施文。金雲母含む。
365	3733	A-32	6.75	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	直線化した編み籠文。口唇部施文。焼成前の穿孔。内面に浅い細沈線。薄手、硬質。362と同一個体の可能性高い。
366	1949	A-31	6.88	2.5 YR 4/6 赤褐	鉢角	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。外面にスス付着。長石粒多し。
367	3118 3798	A-32 A-32	6.96 6.91	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。文様直線化。内面縦位の細沈線。薄手、硬質。
368	3559	Z-32	7.19	5 YR 5/6 明赤褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部尖り気味。文様直線化。厚手、硬質。
369	4073	A-32	6.90	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	362と同一個体の可能性高い。焼成前の穿孔。
370	1952	A-31	7.00	7.5 YR 6/6 橙	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	直線化。3本1組。口唇部施文。硬質。長石粒多し。
371	3035	Z-32	6.87	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。硬質。内外面にスス付着。
372	697	Z-32	7.70	5 YR 5/6 明赤褐	鉢角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。山形口縁。施文後ナデ。硬質。内面に縦位の浅い沈線。

表17 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—16

No	取上No	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
373	2115	Z-32	7.24	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。硬質。長石粒多し。内面にスス附着。
374	879 1656	Y-29 Z-30	7.80 6.89	5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。文様直線化。口唇部施文。硬質。内面に縦位の浅い沈線。長石粒多し。
375	1285	Z-30	7.95	5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。やや外反する口縁形。硬質。外面にスス附着。
376	1833	A-30	6.21	5YR 3/3 暗赤褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。外面にスス附着。
377	1938	Z-31	7.66	7.5YR 4/4 褐	鉢 円	Ⅸ-c	外:ナデ 内:条痕	鋭い施文具による細沈線。口唇部指頭押圧。金雲母多し。外面にスス附着。
378	3943	Z-32	7.00	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。外面にスス附着。軽量。
379	759	Z-32	7.63	7.5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:条痕	文様直線化。丸味の口唇部。内面に縦位の浅い沈線。硬質。砂粒多し。
380	2177	Z-31	7.56	7.5YR 3/3 暗 褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。丸味の口唇部。外面にスス附着。硬質。砂粒多し。
381	3578	Z-32	7.59	5YR 3/2 暗赤褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。丸味の口唇部。外面にスス附着。内面に縦位の浅い沈線。
382	3709	Z-32	6.95	5YR 4/6 赤 褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。文様帯肥厚。長石粒多し。
383	2434	Z-31	7.34	7.5YR 3/3 暗 褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。山形口縁。内面縦位の浅い沈線。
384	-	-	-	5YR 3/3 暗赤褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。文様直線化。口唇部施文。山形口縁、内面縦位の浅い沈線。外面にスス附着。
385	4236	Z-32	7.37	7.5YR 2/2 黒 褐	鉢 角	Ⅸ-a	外:ナデ 内:入念なナデ	幅広の短沈線を波状に描く。口唇部施文。スス附着。387と同一個体の可能性高い。
386	-	Z-33	-	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ-a	外:ナデ 内:入念なナデ	幅広の短沈線を波状に描く。387と同一個体の可能性高い。
387	3893 3910 3912	A-32 Z-32 Z-32	6.62 7.28 7.23	7.5YR 3/3 暗 褐	鉢 角	Ⅸ-a	外:ナデ 内:入念なナデ	接合資料。幅広の短沈線を波状に描く。口唇部施文。スス附着。山形口縁。
388	4020	Z-33	7.01	2.5YR 4/2 灰 赤	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:条痕	口縁部外反。文様直線化。口唇部斜位刻目。薄手、硬質。外面にスス附着。
389	3998 4020	Z-33 Z-33	7.06 7.01	2.5YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:条痕	接合資料。口縁部外反。文様直線化。口唇部斜位刻目。薄手、硬質。外面にスス附着。388と同一個体の可能性高い。
390	1921 2297	Z-31 Z-31	7.23	2.5YR 3/3 暗赤褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:条痕後ナデ	接合資料。口唇部尖り気味。薄手、硬質。外面にスス附着。復元口径144mm。
391	1497	A-30	6.43	2.5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。長石粒多し。
392	2969	Z-32	7.49	2.5YR 2/2 極暗赤褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内: -	文様直線化。口唇部施文。砂粒多し。外面にスス附着。
393	1246	A-29	7.13	5YR 2/2 黒 褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。内面に縦位の浅い細沈線。外面にスス附着。
394	421 913 3073	Z-31 Z-30 Z-31	7.93 7.10 7.20	2.5YR 2/2 極暗赤褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。口縁部外反。文様直線化。口唇部斜位刻目。薄手、硬質。外面にスス附着。388と同一個体の可能性高い。
395	1142	A-30	7.08	5YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。内面に縦位の浅い細沈線。口唇部丸味を呈す。
396	-	-	-	5YR 4/6 赤 褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。内面に縦位の浅い細沈線。外面にスス附着。356と同一個体の可能性高い。

表18 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-17

No.	取上No.	出土器	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
397	1150	Z-30	7.95	5 Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。内面に縦位の浅い細沈線。外面にスス附着。356と同一個体の可能性高い。
398	606	Z-30	7.99	5 Y R 4/2 灰 褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。内面に縦位の浅い細沈線。外面にスス附着。
399	617	Y-30	8.03	7.5 Y R 4/2 灰 褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。硬質。
400	936	Z-30	7.16	10 Y R 6/3 にぶい黄橙	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。やや軟質。
401	-	A-30	-	5 Y R 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部丸味を呈す。やや軟質。
402	4783	A-31	6.64	5 Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。やや軟質。外面にスス附着。
403	2810	Z-31	7.17	5 Y R 4/3 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。硬質。
404	-	Y-30	-	5 Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。硬質。外面にスス附着。山形口縁。
405	4070	A-31	6.62	5 Y R 4/2 灰 褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:条痕後ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。硬質。外面にスス附着。山形口縁。砂粒多く器面ザラザラ。
406	4258 4207 4754 4277 4253 2647 4261 4279 4249 4603	Z-31 Z-31 A-31 Z-31 Z-31 Z-31 Z-31 Z-31 Z-31 Z-31	7.00 7.06 6.86 6.98 7.02 7.35 7.01 6.98 6.95 7.04	2.5 Y R 3/3 暗赤褐	鉢 円	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。文様帯肥厚。口唇部施文、深い沈線。文様直線化。綾杉文。やや軟質。金雲母多し。外面にスス附着。復元口径230mm。
407	3908	Z-32	7.02	5 Y R 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。内面に縦位の浅い沈線。滑石(?)混入。軽量。408、409と同一個体の可能性高い。
408	2584	Z-31	7.38	7.5 Y R 5/3 にぶい褐	鉢 円	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。内面に縦位の浅い沈線。滑石(?)混入。軽量。407、409と同一個体の可能性高い。
409	3956	Z-32	7.09	7.5 Y R 5/4 にぶい褐	鉢 円	Ⅸ-d	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。内面に縦位の浅い沈線。滑石(?)混入。軽量。407、408と同一個体の可能性高い。
410	996	Z-30	7.49	5 Y R 5/2 灰 褐	鉢 円	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	409と同一の個性を示す。施文が逆。外面にスス附着。軽量。
411	3202	Y-32	7.62	5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。綾杉文。長石粒、貝殻片混入。軽量。
412	778	Y-31	8.02	7.5 Y R 6/3 にぶい褐	鉢 角	Ⅸ-c	外:条痕 内:条痕	口唇部施文。山形口縁。軽量。
413	4098	A-32	6.44	7.5 Y R 5/4 にぶい褐	鉢	Ⅸ-c	外:条痕後ナデ 内:工具ナデ	文様直線化。綾杉文。長石粒、貝殻片混入。軽量。内面黒灰色。
414	3812	A-32	7.08	7.5 Y R 6/4 にぶい橙	鉢 角	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部施文。山形口縁。硬質。
415	2773	Z-31	7.38	7.5 Y R 5/4 にぶい褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:条痕後ナデ 内:ナデ	口唇部施文。幅広の工具使用。長石粒、貝殻片混入。軽量。外面にスス附着。
416	3707	Z-33	7.45	5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ-c	外:ナデ 内:工具ナデ	文様直線化。綾杉文。長石粒、貝殻片混入。軽量。内面にスス附着。
417	1472	Y-30	7.81	10 Y R 6/4 にぶい黄橙	鉢 角	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。綾杉文。口唇部施文。
418	1050	A-30	7.37	7.5 Y R 6/6 橙	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。長石粒多し。

表19 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—18

No	取上No	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
419	2330	Z-30	7.72	10YR 3/4 暗 褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。やや外反する口縁形。内外面に多量のスス付着。
420	3248 2838	Z-32 Y-33	7.20 8.04	5 Y R 4/4 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅸ-c	外:条痕 内:条痕	接合資料。山形口縁、突起。幅広の工具使用。口唇部施文。厚手硬質。長石粒多し。
421	2495	Z-31	7.30	5 Y R 5/3 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。薄手、硬質。外面に多量のスス付着。砂粒多く器面ザラザラ。
422	929	Z-30	7.67	5 Y R 4/3 にぶい赤褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。焼成前の穿孔(4個)あり。口唇部施文。厚手、硬質。外面にスス付着。
423	2050	Z-31	6.65	5 Y R 4/3 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ-b	外:条痕後ナデ 内:ナデ	文様直線化。文様幅がかなり狭くなる。内面に縦位の浅い沈線。砂粒多し。
424	567	Z-30	7.64	2.5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ-b	外:入念なナデ 内:ナデ	文様直線化。内面に縦位の浅い沈線。硬質。
425	1334	Y-30	7.57	2.5YR 5/3 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ-b	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	文様直線化。文様幅がかなり狭くなる。内面に縦位の浅い沈線。口唇部施文。
426	-	A-31	-	7.5YR 4/2 灰 褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。内面に縦位の浅い沈線。砂粒多く器面ザラザラ。厚手、やや軟質。重量あり。
427	1742	A-30	6.25	5 Y R 3/3 暗赤褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:入念なナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。やや外反する口縁形。外面にスス付着砂粒多く器面ザラザラ。硬質。
428	3947	A-31	6.64	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。文様帯肥厚。外面にスス付着。貝殻片混入。軽量。
429	1795	A-30	6.20	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	Ⅸ-b	外:ナデ 内:入念なナデ	文様直線化。口唇部施文。やや外反する口縁形。内面接合面明瞭427と同一個体の可能性高い。外面にスス付着。
430	3634	Z-32	7.06	7.5YR 6/6 橙	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。文様帯肥厚。貝殻片混入。軽量。428、433と同一個体の可能性高い。
431	4234	A-32	6.72	2.5YR 4/2 灰 赤	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。硬質。外面にスス付着。
432	3057	Z-32	7.31	5 Y R 2/2 黒 褐	鉢	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。外面にスス付着。
433	4323	A-31	6.46	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。文様直線化。口唇部施文。文様帯肥厚。外面にスス付着。428、430と同一個体の可能性高い。
434	421	Z-31	7.93	7.5YR 2/2 黒 褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:条痕後ナデ 内:ナデ	山形口縁。文様直線化。口唇部施文。薄手、硬質。砂粒多く器面ザラザラ。
435	2848 3230	Z-32	7.44	10YR 5/3 にぶい黄褐	鉢 角	Ⅸ-b	外:入念なナデ 内:入念なナデ	山形口縁。文様直線化。口唇部施文。薄手、硬質。円形補修孔。434と同一個体の可能性高い。
436	3814	A-32	6.73	7.5YR 2/2 黒 褐	鉢	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。内面縦位の浅い沈線。外面に多量のスス付着。
437	2847	Y-32	7.90	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。厚手、やや軟質。
438	1169	A-30	6.52	5 Y R 4/4 暗赤褐	鉢 角	Ⅸ-c	外:入念なナデ 内:ナデ	山形口縁。区画文描く。口唇部施文。薄手、硬質。少量の金雲母含む。外面にスス付着。
439	3164	A-33	7.20	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 円	Ⅸ-d	外:条痕 内:ナデ	沈線間が広がり、区画文様を呈す。口唇部施文。文様帯の最下位に連続刺突。やや軟質。外面にスス付着。
440	3992	Z-32	7.02	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 角	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	幅広の浅い沈線。薄手、硬質。砂粒多く器面ザラザラ。
441	4162	Z-32	7.88	10YR 3/3 暗 褐	鉢 角	Ⅸ-c	外:ナデ 内:ナデ	440と同一の個性を示す。
442	3973 3986 2958	Z-32	6.98 7.02 7.21	10YR 2/3 黒 褐	鉢 角	Ⅸ-c	外:ナデ 内:多痕後ナデ	接合資料。山形口縁。幅広の浅い沈線。440、441、443と同一個体の可能性高い。
443	4019	Z-32	6.89	5 Y R 5/6 明赤褐	鉢 角	Ⅸ-c	外:ナデ 内:条痕後ナデ	山形口縁。外面にスス付着。他は440と同一の個性を示す。

表20 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—19

No.	取上No.	出土区	レベル(m)	色調(表)	器種類	類別	調整	備考
444	4139	A-31	7.90	5 YR 5/6 明赤褐	鉢 角	IX-c	外:条痕後ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。薄手、硬質。
445	3654	Z-32	7.27	5 YR 4/2 灰 褐	鉢 円	IX-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部平坦。内面に縦位の浅い沈線。硬質。砂粒多く器面ザラザラ。外面にスス付着。
446	-	Z-30	-	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	IX-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。硬質。
447	2283	Z-31	7.84	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢	IX-c	外:条痕後ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。内面に縦位の浅い沈線。薄手、硬質。
448	738	Y-32	7.99	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢	IX-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部平坦。硬質。
449	2435	Z-32	7.31	2.5YR 2/2 極暗赤褐	鉢	IX-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。薄手、硬質。砂粒多く器面ザラザラ。
450	2560 2522	Z-31	7.17 7.01	10YR 2/2 極暗赤褐	鉢	IX-c	外:ナデ 内:工具ナデ	接合資料。文様直線化。口唇部施文。薄手、硬質。
451	4369	A-31	6.14	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 円	IX-c	外:工具ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。内面に縦位の浅い沈線。薄手、硬質。外面にスス付着。
452	2385 2601	Z-32 A-30	7.22 7.17	5 YR 3/3 暗赤褐	鉢 円	IX-c	外:ナデ 内:工具ナデ	文様直線化。口唇部施文。薄手、やや軟質。外面にスス付着。
453	2154	Z-31	7.37	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢	IX-c	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。貝殻片を含む。外面にスス付着。
454	2516	Z-32	7.11	5 YR 4/4 にぶい赤褐	鉢	IX-c	外:ナデ 内:条痕後ナデ	文様直線化。厚手、やや軟質。長石粒多し。
455	2536	Z-32	7.50	5 YR 2/2 黒 褐	鉢 角	IX-c	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。文様帯肥厚。文様直線化。口唇部施文。外面にスス付着。
456	1787	A-30	6.25	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢 角	IX-b	外:粗のナデ 内:条痕後ナデ	山形口縁。文様帯肥厚。文様直線化。口唇部施文。外面にスス付着。
457	3576	Z-32	7.49	10YR 2/2 黒 褐	鉢 角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。文様帯肥厚。文様直線化。口唇部施文。外面にスス付着。
458	1800	A-30	6.67	2.5YR 3/3 暗赤褐	鉢 角	IX-d	外:ナデ 内:条痕後ナデ	文様直線化。口唇部施文。口縁部若干肥厚。薄手、硬質。外面にスス付着。
459	2353	Z-31	7.20	2.5YR 4/2 灰 赤	鉢	IX-d	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。内面に縦位の浅い沈線。薄手、硬質。外面にスス付着。
460	4641	Z-31	7.60	2.5YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	IX-d	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。内面に縦位の浅い沈線。薄手、硬質。外面にスス付着。
461	1814	Z-31	6.33	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	IX-d	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部施文。薄手、硬質。外面にスス付着。
462	-	Z-31	-	5 YR 5/2 灰 褐	鉢 円	IX-d	外:条痕 内:条痕後ナデ	文様直線化及び単純化。口唇部施文。内面に縦位の浅い沈線。薄手、硬質。外面にスス付着。復元口径166mm。
463	2088	A-31	6.67	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 角	IX-d	外:条痕 内:ナデ	文様直線化。薄手、硬質。砂粒多し。
464	594 1046	Z-29 A-30	7.55 7.59	2.5YR 4/2 灰 赤	鉢 角	IX-d	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化及び単純化。薄手、硬質。外面にスス付着。
465	1462	Z-29	6.83	2.5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	IX-c	外:条痕 内:粗のナデ	文様直線化及び単純化。内面に縦位の浅い沈線。薄手、硬質。金雲母含む。復元口径100mm。
466	1332	Y-30	7.99	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部施文。横位の平行沈線文。硬質。長石粒多し。外面にスス付着。
467	1875	Z-31	7.83	5 YR 6/4 にぶい橙	鉢 角	IX-a	外:粗のナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部施文。斜位の平行沈線文。硬質。
468	432	Z-31	7.87	2.5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 円	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部施文。横位の平行沈線文。内面に縦位の浅い沈線。補修孔が途中で止まる。

表21 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-20

No.	取上No.	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
469	717	Z-32	7.77	2.5YR 4/6 赤 褐	鉢 角	X-a	外:粗のナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部施文。斜位の平行沈線文。硬質。467と同一 個体の可能性高い。
470	-	-	-	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢	X-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。横位の平行線文。内面に縦位の浅い沈線。硬質。外 面にスス付着。
471	1567	A-30	6.57	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	X-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部平坦。器肉は極めて薄い。文様は単純化。外面にスス付着
472	1886	A-31	7.04	5YR 5/6 明赤褐	鉢	X-a	外:入念なナデ 内:ナデ	口唇部施文。斜位の平行線文。微細な粘土を使用し、多量の金雲 母を含む。
473	901	Z-29	7.43	5YR 4/2 灰 褐	鉢 円	X-b	外:ナデ 内:ナデ	横位の平行線文。口唇部平坦。長石粒多し。
474	949	Z-29	7.24	2.5YR 4/2 灰 赤	鉢 円	Ⅳ	外:ナデ 内:条痕	文様帯肥厚。口唇部と口縁部に間のび押し引き。4mm程の砂粒を 含む。やや軟質。
475	901	Z-29	7.43	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢	X-b	外:ナデ 内: -	平行沈線文。薄手、軟質。軽量。外面にスス付着。
476	1637	Z-30	6.91	7.5YR 6/6 橙	鉢 円	X-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部施文(刺突)。胴部に施文(平行沈線文)。薄手、硬質。
477	482	A-31	7.15	10YR 6/3 にぶい黄橙	鉢 円	X-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部施文。平行沈線文。焼成前の穿孔。多量のサンゴ片を混入
478	2770	Z-31	7.44	7.5YR 6/6 橙	鉢	X-c	外:ナデ 内:ナデ	縦位の平行沈線。良質な微細粘土を使用。軟質。479と同一個 体の可能性高い。
479	3926	Z-32	6.90	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢	X-c	外:ナデ 内:ナデ	縦位の平行沈線。良質な微細粘土を使用。軟質。内面にスス付着
480	-	-	-	5YR 5/6 明赤褐	鉢 角	Ⅳ	外:ナデ 内:ナデ	口唇部、口縁部、口縁下端に連続刺突。その間を細沈線で繋ぐ 薄手、やや軟質。外面にスス付着。
481	570	Z-30	7.77	5YR 5/6 明赤褐	鉢 角	Ⅳ	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。480と同一個体の可能性高い。
482	523	Z-30	7.66	5YR 3/2 暗赤褐	鉢	Ⅳ	外:工具ナデ 内:ナデ	沈線間に連続刺突。基本的には480と同一と思われる。
483	2231	Z-32	7.40	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 角	Ⅳ	外:条痕後ナデ 内:条痕	押し引きと連続刺突による文様構成。厚手、硬質。485と同一 個体の可能性高い。
484	713	Z-32	7.73	5YR 6/3 にぶい橙	鉢 角	Ⅳ	外:ナデ 内:ナデ	口唇部施文。斜位の連続刺突。内面に縦位の浅い細沈線。
485	3601	Z-33	7.49	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 角	Ⅳ	外:条痕後ナデ 内:条痕	山形口縁。押し引きと連続刺突による文様構成。厚手、硬質。 483と同一個体の可能性高い。
486	230 229	Z-30	8.10 8.01	7.5YR 3/1 黒 褐	鉢 角	Ⅳ	外:ナデ 内:ナデ	連続刺突での文様構成。厚手、やや軟質。角閃石多し。
487	374	A-31	7.83	2.5YR 6/6 橙	鉢 角	XⅢ	外:ナデ 内:ナデ	縦位のコブ状突起。縦方向の連続刺突。砂粒多し。器面ザラザラ
488	3919	Z-33	7.22	5YR 2/2 黒 褐	鉢 角	XⅢ	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。縦位のコブ状突起。口唇部施文。縦方向の連続刺突。 外面に多量のスス付着。
489	647 597 2038 2040	Y-30 Y-30 Z-31 Z-31	7.99 8.09 7.80 7.80	5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 角	XⅠ	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。山形口縁。口唇部施文。細沈線による区画文間を連続 刺突で充填。補修孔。内面にも口縁部と平行して施文。外面に多 量のスス付着。同一個体と思われる資料も示す。
490	687	A-31	7.34	5YR 3/3 暗赤褐	鉢 角	XⅠ	外:ナデ 内:ナデ	区画文間を間のび押し引きで充填。口唇部の刺突は3列。薄手、 硬質。
491	3879 3927 4176 4177	Z-33 Z-32 Z-32 Z-32	7.23 7.20 7.84 7.81	10YR 5/3 にぶい黄褐	鉢 円	XⅠ	外:ナデ 内:条痕	接合資料。口縁形ラップ状。口唇部施文。横走る沈線間に緩杉 状に施文。間のび押し引き。頸部は浅い短沈線。外面にスス付着 硬質。復元口径220mm。
492	3681 1874	Z-33 Z-31	7.42 7.81	5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 角	XⅠ	外:条痕 内:条痕後ナデ	接合資料。文様帯肥厚。斜行する沈線間に施文。間のび押し引き 補修孔。硬質。内外面にスス付着。

表22 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-21

No	取上No	出土区	レベル(m)	色調(色)	器種	類別	調整	備考
493	1172	A-30	6.57	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	内面に縦位の浅い沈線。口唇部施文。間のび押し引き。薄手、硬質。
494	2560	Z-31	7.17	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部施文。間のび押し引き。少量の金雲母含む。薄手、硬質。微砂粒多し。
495	3994 4006	Z-32	7.11 6.99	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢	XI	外:入念なナデ 内:条痕後ナデ	文様帯肥厚。区画文間を充填。497と同一個体の可能性が高い。軽量。長石粒多し。
496	-	A-23	-	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢	X	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。
497	-	-	-	5 YR 5/2 灰 褐	鉢角	XI	外:入念なナデ 内:条痕後ナデ	大型土器。文様帯肥厚。口唇部施文。間のび押し引き。内面に沈線。外面にスス付着。軽量。長石粒多し。495と同一個体。
498	1134	Z-29	7.11	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。叉状工具で連続刺突。口唇部も同工具で施文。山形口縁。薄手、硬質。長石粒多し。
499	482	A-31	7.15	5 YR 3/3 暗赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部施文。間のび押し引き。山形口縁。硬質。長石粒>石英粒
500	-	A-32	-	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部施文。間のび押し引き。山形口縁。角閃石を多く含む。
501	2124	A-31	7.30	7.5YR 4/2 灰 褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部施文。間のび押し引き。山形口縁。頂部は挟り入り。薄手。硬質。器面ザラザラ。
502	1040	A-30	7.25	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢	XI	外:条痕後ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部施文。間のび押し引き。薄手、硬質。長石粒多し。少量の金雲母含む。
503	-	A-29	-	5 YR 5/6 明赤褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	胴部に複合鋸歯文施文。間のび押し引き。角閃石多し。器面ザラザラ。
504	901	Z-29	7.43	7.5YR 4/2 灰 褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。鋭利な工具で施文。間のび押し引き。山形口縁。コブ状突起。薄手、硬質。内外面にスス付着。
505	758 2225 752 760 2184 2077	Z-32 Z-32 Z-32 Z-32 Z-32 Z-31	7.66 7.46 7.87 7.65 7.65 7.59	5 YR 4/2 灰 褐	鉢円	XI	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。細沈線による区画文。間のび押し引き。胴部、口唇部施文。外面にスス付着。復元口径155mm。長石粒>角閃石。文様帯は肥厚せず。
506	-	Z-32	-	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	XI	外:入念なナデ 内:ナデ	接合面明瞭。鋭利な工具で施文。硬質。長石粒>角閃石。
507	860	A-30	7.09	2.5YR 3/4 暗赤褐	鉢	XI	外:入念なナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。鋭利な工具で施文。連続刺突。硬質。外面にスス付着。
508	596	Z-30	7.49	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢	XI	外:ナデ 内:入念なナデ	大型土器? 鋭利な工具で施文。間のび押し引き。やや軟質。軽量。
509	1061	Z-30	7.11	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	文様帯若干肥厚。鋭利な工具で施文。間のび押し引き。やや軟質。長石粒>石英粒
510	-	-	-	2.5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部平坦。間のび押し引き。やや軟質。砂粒多し。
511	-	A-32	-	10R 3/3 暗赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部平坦。鋭利な工具で施文。間のび押し引き。硬質。光沢あり。
512	473 465	Z-31 Z-32	7.92 7.84	10R 4/4 赤 褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。文様帯肥厚。山形口縁。左右比対称。口唇部施文。鋭利な工具で施文。薄手、硬質。光沢あり。8号集石遺構に共伴。
513	484	A-31	7.41	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部施文。鋭利な工具で施文。間のび押し引き。薄手、硬質。光沢あり。514と同一個体の可能性高い
514	486	A-31	7.43	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。山形口縁。口唇部施文。鋭利な工具で施文。薄手。硬質。光沢あり。513と同一個体の可能性高い。
515	482	A-31	7.15	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	焼成前の穿孔(5個)。縦方向の区画文。連続刺突。やや軟質。
516	239	Z-29	8.14	5 YR 4/4 にぶい赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部平坦。鋭利な工具で施文。間のび押し引き。

表23 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—22

No	取上No	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
517	1712 3523	A-30 Z-32	6.52 6.96	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。口唇部平坦。先端部は四角形と三角形の工具で施文。間のび押し引き。胴部施文。薄手、硬質。
518	—	Z-32 ドキダマリ	6.93	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	大型土器。山形口縁。文様帯若干肥厚。口唇部、胴部施文。間のび押し引き。長石粒多し。14号集石遺構に共伴。
519	3347	A-32	6.82	5 YR 5/6 明赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。山形口縁。文様帯肥厚。口唇部施文。間のび押し引き内面にスス付着。厚手、硬質。
520	—	A・Z	—	5 YR 2/2 黒 褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	鋭利な工具で施文。間のび押し引き。外面にスス付着。薄手、硬質。長石粒多し。
521	—	Z-32 ドキダマリ	6.95	2.5YR 3/4 暗赤褐	鉢 角	XI	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	山形口縁。文様帯肥厚。口唇部施文。外面にスス付着。薄手、硬質。金雲母多く含む。14号集石遺構に共伴。復元口径235+αmm。
522	595	Z-29	7.67	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:条痕後ナデ	山形口縁。口唇部施文。間のび押し引きと連続刺突。文様帯の肥厚認められず。薄手。やや軟質。
523	971	A-29	7.33	2.5YR 6/8 橙	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部施文。間のび押し引きと連続刺突。文様帯の肥厚認められず。薄手、やや軟質。外面にスス付着。
524	—	A-26・ 27採集	—	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。文様帯肥厚。口唇部施文。連続刺突。薄手、硬質。外面にスス付着。長石粒>石英粒。
525	644	Y-30	8.03	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。文様帯肥厚。口唇部施文。間のび押し引き。やや軟質。
526	—	A・Z	—	2.5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。鋭利な工具で施文。押し引き。胴部施文。薄手、硬質。
527	202	A-29	7.98	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	鋭利な工具で施文。連続刺突。外面にスス付着。砂粒多く器面ザラザラ。薄手、硬質。
528	—	—	—	2.5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:入念なナデ	山形口縁。口唇部にコブ状突起。口唇部連続刺突。文様帯肥厚。密な区画文間に連続刺突充填。薄手、硬質。
529	—	—	—	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 角	XI	外:入念なナデ 内:入念なナデ	文様帯肥厚。先端部の丸い工具で連続刺突充填。薄手、硬質。外面にスス付着。金雲母を含む。
530	1024 2773	A-30 Z-31	6.79 7.37	2.5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 角	XI	外:工具ナデ 内:ナデ	接合資料。山形口縁。口唇部に1条の沈線。文様帯肥厚せず。間のび押し引き。薄手、硬質。外面にスス付着。
531	308	Y-30	8.19	5 YR 4/2 灰 褐	鉢 円	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部と胴部に連続刺突。補修孔。内面に縦位の浅い沈線。外面にスス付着。
532	— 2279	A-32 Z-32	—	5 YR 3/3 暗赤褐	鉢 角	XI	外:入念なナデ 内:入念なナデ	文様帯肥厚。口唇部施文。連続刺突。薄手、硬質。528、534と同一個体の可能性高い。
533	667	Z-31	7.63	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	区画文間に連続刺突。薄手、硬質。
534	701	Z-32	7.73	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 角	XI	外:入念なナデ 内:入念なナデ	528と接合。532とも同一個体の可能性高い。口唇部、胴部施文。コブ状小突起。薄手、硬質。砂粒多し。長石粒>石英粒。
535	3061 3185 2645	Z-32 A-33 Z-33	6.88 7.44 7.88	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 角	XI	外:入念なナデ 内:入念なナデ	接合資料。山形口縁。文様帯肥厚。口唇部、及び外面押し引き。内外面共に入念にナデ消され、光沢のある器面を呈す。金雲母多く含む。硬質。内外面にスス付着。
536	2699 3715	Z-33 A-32	7.51 6.96	2.5YR 4/6 赤 褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	接合資料。文様帯肥厚。連続刺突。施文具の先端部は方形。口唇部沈線。光沢あり。硬質。長石粒多し。
537	515	A-31	7.26	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。文様帯肥厚。口唇部押し引き。区画沈線が接近。連続刺突で充填。砂粒多し。
538	3431	Z-31	7.23	7.5YR 3/2 黒	鉢 角	XI	外:入念なナデ 内:入念なナデ	山形口縁。口唇部施文。間のび押し引き。内外面にスス付着。長石粒多し。535と同一個体の可能性高い。
539	391	A-32	7.68	5 YR 3/3 暗赤褐	鉢 角	XI	外:入念なナデ 内:ナデ	文様帯若干肥厚。口唇部平坦。区画文間に連続刺突充填。胴部施文。金雲母多量に含む。砂粒多く器面ザラザラ。
540	—	—	—	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 角	XI	外:ナデ 内:ナデ	一括資料。文様帯肥厚。口唇部平坦。区画文間に間のび押し引き充填。胴部施文。薄手、砂粒多し。底部径57mm。
541	752	A-32	7.35	5 YR 4/4 にぶい赤褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	文様帯若干肥厚。胴部施文。内面にスス付着。薄手、硬質。

表24 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—23

No.	取上No.	出土区	レベル(m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
542	709	Z-32	7.67	7.5YR 6/3 にぶい褐	?	XI	外:ナデ 内:ナデ	直行する器形で山形口縁を呈す。接合面明瞭。間のび押し引きと連続刺突。少量の金雲母含む。やや軟質。
543	937	A-30	7.24	7.5YR 6/3 にぶい褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	537と同一個体の可能性高い。外面にスス付着。
544	332	A-29	7.70	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢角	XI	外: - 内:ナデ	山形口縁。文様帯肥厚。口唇部に連続刺突施文。間のび押し引き長石粒多し。風化が著しい。
545	-	-	-	7.5YR 4/3 褐	鉢	XI	外:工具ナデ 内:ナデ	薄手、硬質。外面にスス付着。砂粒多く器面ザラザラ。
546	482	A-31	7.15	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	やや幅広の沈線間に斜位の連続刺突。長石粒多し。547と同一個体の可能性高い。
547	-	A26・27 採集	-	5 YR 5/8 明赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部は指頭押圧による波状の可能性高い。内面に縦位の浅い沈線。546と同一個体の可能性高い。
548	473	Z-31	7.92	2.5YR 6/4 にぶい橙	鉢円	XI	外:条痕後ナデ 内:ナデ	文様帯若干肥厚。口唇部連続刺突。沈線間は間のび押し引き。方向転換あり。薄手、やや軟質。外面にスス付着。復元口径158mm
549	-	A-32	-	5 YR 2/1 黒褐	鉢	XI	外:工具ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。胴部沈線間に連続刺突。間のび押し引き。薄手、硬質。
550	520	A-31	7.36	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部連続刺突。文様帯肥厚せず。間のび押し引き。薄手、硬質。砂粒多く器面ザラザラ。
551	509	A-30	7.18	7.5YR 4/2 灰褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部連続刺突。先端方形の工具使用。薄手、硬質。砂粒多く器面ザラザラ。
552	839	Y-30	7.90	10YR 3/1 黒褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部平坦。間のび押し引きと連続刺突。薄手、硬質。外面にスス付着。長石粒>金雲母
553	-	A29・30	-	5 YR 3/3 暗赤褐	鉢角	IX	外:ナデ 内:ナデ	口唇部④平坦、⑤沈線。薄手、硬質。外面にスス付着。長石粒多し。
554	715	Z-32	7.71	7.5YR 4/2 灰褐	鉢角	XI	外: - 内: -	口唇部平坦。間のび押し引き。薄手、硬質。外面にスス付着。長石粒>金雲母。552と同一個体。
555	760	Z-32	7.76	2.5YR 5/3 にぶい赤褐	鉢	Ⅷ-b	外:ナデ 内:ナデ	口縁部、口唇部、内面に叉状工具で間のび押し引き。焼成前の刺突貫通せず。やや軟質。
556	-	Z-30 下	-	2.5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢角	XI	外:工具ナデ 内:ナデ	山形口縁。口唇部施文。間のび押し引き。やや軟質。長石粒多し
557	2075	A-32	7.27	5 YR 4/4 にぶい赤褐	鉢角	XI	外:条痕後ナデ 内:条痕	山形口縁。口唇部コブ状突起。文様帯肥厚せず。口唇部、胴部施文。沈線間は連続刺突。薄手、硬質。
558	8159	A-24	7.22	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	連続刺突。風化が著しい。長石粒多し。
559	4135	Z-32	7.96	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部連続刺突、間のび押し引き。鋭利な工具使用。薄手、硬質。長石粒多し。
560	1949 482	A-31 A-31	6.88 7.15	5 YR 6/6 橙	鉢円	XI	外:ナデ 内:条痕	接合資料。接合面明瞭。大型土器。文様帯若干肥厚。口唇部間のび押し引き。胴部施文。やや軟質。
561	1907	Z-32	7.23	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部連続刺突、沈線施文。硬質。長石粒多し。
562	7059	A-27	6.93	5 YR 4/4 にぶい赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	山形口縁。口唇部間のび押し引き。やや軟質。長石粒多し。
563	3582	Z-32	7.04	7.5YR 4/2 灰褐	鉢	XI	外:条痕 内:条痕後ナデ	外開きの口縁形。間のび押し引き。口唇部も同工具使用。内面に縦位の浅い沈線。薄手、硬質。
564	625	Y-30	8.08	7.5YR 6/3 にぶい褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部間のび押し引き。薄手、硬質。長石粒多し。
565	-	A-27	-	5 YR 4/2 灰褐	鉢	XI	外:条痕後ナデ 内:条痕	沈線間は連続刺突。薄手、やや軟質。長石粒>角閃石
566	1519 1593 653	Z-29 Z-29 Z-31	6.87 6.50 7.66	2.5YR 4/2 灰赤	鉢角	XIV	外:入念なナデ 内:入念なナデ	接合資料。文様帯肥厚。口唇部、胴部施文。薄手、硬質。外面にスス付着。

表25 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—24

No	取上No	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
567	2245	Z-32	7.58	5 YR 5/2 灰褐	鉢 角	XIV	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部連続刺突。薄手、硬質。外面にスス付着。 566と同一の個性を示す。
568	1979 257	Z-31 Y-29	7.43 8.18	5 YR 5/2 灰褐	鉢 角	XIV	外:ナデ 内:ナデ	口唇部平坦。間のび押し引きで胴部区分。硬質。砂粒多く器面ザラザラ。外面にスス付着。
569	2742	Z-33	7.31	5 YR 4/2 灰褐	鉢 角	XIV	外:ナデ 内:ナデ	568と同一個体の可能性高い。
570	1883 1011	Z-31 A-30	7.69 6.88	7.5 YR 7/4 にぶい橙	鉢 角	XI	外:ナデ 内:入念なナデ	接合資料。文様帯肥厚。口唇部工具による刻目。太目の沈線による区画。口縁端部押し引き。厚手、やや軟質。14号集石遺構共伴。
571	4340	Z-31 土手	6.78	7.5 YR 6/3 にぶい褐	鉢 角	X-b	外:ナデ 内:工具ナデ	完形土器。沈線による規格文。口唇部工具による刻目。長石粒多く、魚骨、貝殻片混入。やや軟質。外面にスス付着。
572	352	A-32	7.35	2.5 YR 3/3 暗赤褐	鉢 角	XI	外:入念なナデ 内:入念なナデ	接合資料。文様帯若干肥厚。山形口縁で文様帯が4分される。頂部直下は連続刺突。薄手、硬質。10号集石遺構に共伴。
573	3916	Z-32	7.16	7.5 YR 2/2 黒褐	鉢 角	XIV	外:ナデ 内:ナデ	口唇部間のび押し引き施文。内面に縦位の浅い沈線。薄手、硬質砂粒多く器面ザラザラ。
574	2514	A-32	7.32	2.5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 角	XIV	外:ナデ 内:ナデ	口唇部連続刺突。やや軟質。金雲母含む。
575	3701	Z-32	7.14	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	XIV	外:ナデ 内:ナデ	口唇部斜位の刻目。薄手、やや軟質。外面にスス付着。 長石粒>石英粒>角閃石>金雲母
576	2409 4278 4390	Z-31 Z-31 A-31	6.56 7.81 7.55	7.5 YR 3/1 黒褐	鉢 角	XIV	外:ナデ 内:ナデ	573と同一個体(接合)。
577	482	A-31	7.15	7.5 YR 5/3 にぶい褐	鉢	XIV	外:ナデ 内:ナデ	直行する斜沈線で格子文を描く。薄手、硬質。砂粒多く器面ザラザラ。
578	352	A-32	7.35	2.5 YR 5/6 明赤褐	鉢	XIV	外:ナデ 内:入念なナデ	口唇部の頂部を中心に斜行する平行細沈線。硬質。
579	2415	Z-32	7.46	7.5 YR 5/3 にぶい褐	鉢	XIV	外:ナデ 内:ナデ	577と同一個体(接合)。
580	3842	Z-32	7.05	7.5 YR 5/4 にぶい褐	鉢	XIV	外:ナデ 内:ナデ	口唇部連続刺突。内面に縦位の浅い沈線。薄手、硬質。
581	1802 2860	A-30 Z-31	6.56 7.81	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢 角	XIV	外:入念なナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。口唇部連続刺突。内面に縦位の浅い沈線。薄手、硬質。外面にスス付着。
582	2430	Z-32	7.16	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	XIV	外:入念なナデ 内:入念なナデ	口唇部斜位の刻目。文様帯若干肥厚。内外面にスス付着。薄手、硬質。復元口径142mm
583	1960	A-32	7.16	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢 円	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	浅い細沈線。外面にスス付着。薄手、硬質。
584	2086	A-31	5.64	5 YR 4/1 褐灰	鉢	IX-b	外:条痕後ナデ 内:ナデ	文様直線化。深い細沈線。外面にスス付着。硬質。
585	966	A-30	6.94	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢	IX-b	外:条痕後ナデ 内:ナデ	文様直線化。深い細沈線。外面にスス付着。硬質。微砂粒。 584と同一の個性を示す。
586	2091	A-31	6.73	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。深い細沈線。硬質。585と同一の個性を示す。
587	3322 3142 3207	Z-32 Z-32 Z-32	7.74 7.70 7.74	2.5 YR 5/6 明赤褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯若干肥厚。口唇部斜位の連続刺突。内面に3本の縦位の浅い細沈線。内面にスス付着。薄手、硬質。
588	1024	A-30	6.79	5 YR 5/6 明赤褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:工具ナデ	口唇部尖り気味。硬質。長石粒多し。
589	2081	Z-31	7.38	5 YR 4/2 灰褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内: -	文様直線化。細沈線。硬質。長石粒>石英粒
590	-	-	-	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。細沈線。薄手、硬質。砂粒多く器面ザラザラ。

表26 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-25

№	取上№	出土区	レベル(m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
591	3539	A-32	7.10	5 YR 4/2 灰褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。細沈線。口唇部丸味を呈す。薄手、硬質。外面にスス附着。
592	482	A-31	7.15	5 YR 4/6 赤褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	深い細沈線。やや軟質。
593	1514	A-30	6.96	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯若干肥厚。口唇部押し引き。砂粒多く器面ザラザラ。
594	1479	Z-29	6.91	5 YR 5/6 明赤褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯若干肥厚。口唇部押し引き。砂粒多く器面ザラザラ。593と同一個体の可能性高い。
595	1964	A-32	7.17	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	縦位に突帯。口唇部連続刺突。外面にスス附着。砂粒多く器面ザラザラ。
596	3793	A-32	7.14	5 YR 4/2 灰褐	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	縦位に突帯。口唇部連続刺突。外面にスス附着。砂粒多く器面ザラザラ。595と同一個体の可能性高い。
597	1733	A-30	6.49	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	横位に突帯を巡らす。上下位に細沈線。厚手、硬質。突帯にスス附着。
598	—	A-29	—	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。複合鋸歯文。薄手、硬質。砂粒多し。
599	780	Y-31	8.00	7.5 YR 5/4 にぶい褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。複合鋸歯文。口唇部間のび押し引き。薄手、やや軟質。
600	881	Z-29	7.87	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢円	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。複合鋸歯文。口唇部間のび押し引き。薄手、やや軟質。599と同一個体の可能性高い。
601	243	Z-29	7.99	7.5 YR 5/3 にぶい褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。複合鋸歯文。薄手、硬質。金雲母多く含む。砂粒多く器面ザラザラ。
602	2271	Y-31	7.87	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部連続刺突。薄手、硬質。
603	—	A-31	—	7.5 YR 5/3 にぶい褐	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部平坦。薄手、硬質。外面にスス附着。
604	205	A-29	7.80	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部平坦。文様帯若干肥厚。砂粒多く器面ザラザラ。
605	200	A-29	7.85	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様直線化。口唇部平坦。文様帯若干肥厚。砂粒多く器面ザラザラ。604と同一個体の可能性高い。
606	—	—	—	5 YR 5/6 明赤褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯肥厚。文様直線化。複合鋸歯文。薄手、硬質。
607	388	A-31	8.01	5 YR 5/3 にぶい赤褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部平坦。幅広の沈線間に連続刺突。砂粒多く器面ザラザラ。
608	—	—	—	5 YR 5/8 明赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	器形不明。間のび押し引きで文様帯区分。細沈線文。金雲母少量含む。薄手、やや軟質。
609	277	Y-30	8.16	5 YR 4/2 灰褐	鉢	XI	外:ナデ 内:ナデ	幅広の沈線で文様帯区分。細沈線。薄手、硬質。砂粒多く含む。外面にスス附着。
610	4020	Y-33	7.01	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢角	XI	外:ナデ 内:ナデ	口唇部に1条の沈線。口縁端部は連続刺突。幅広の沈線で文様帯区分。薄手、硬質。609と同一個体の可能性高い。外面スス附着
611	588	Z-31	8.03	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	口縁端部は間のび押し引き。硬質。外面にスス附着。
612	517	A-31	7.22	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	XI	外:条痕 内:条痕	文様帯若干肥厚。口唇部平坦。沈線間間のび押し引き。薄手、硬質。砂粒多く器面ザラザラ。
613	939	Z-29	7.15	5 YR 7/6 橙	壺?		外:ナデ 内:ナデ	壺形土器の可能性ある。内面の接合面明瞭。軟質。
614	1132	Z-30	7.74	7.5 YR 6/8 橙	?		外:ナデ 内:ナデ	外耳? 軟質。
615	3457	A-33	7.03	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部連続刺突。短沈線の複合文。内面の接合面明瞭。外面にスス附着。砂粒多く器面ザラザラ。

表27 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—26

No	取上No	出土区	レベル(m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
616	738	Y-32	7.99	5 Y R 4/3 にぶい赤褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	小型土器。口唇部尖り気味。細沈線。
617	2447	Z-32	7.18	5 Y R 5/6 明赤褐	鉢	IX-b	外:工具ナデ 内:ナデ	口唇部平坦。細沈線。硬質。
618	4571	Z-31	7.28	5 Y R 4/6 赤褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部平坦。細沈線。硬質。
619	2262	Z-32	7.52	7.5 Y R 5/4 にぶい褐	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部尖り気味。細沈線。軟質。接合面で剥脱。外面にスス附着
620	1158	A-30	6.73	7.5 Y R 5/3 にぶい褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部連続刺突。補修孔1個。焼成前の穿孔2個。硬質。
621	3800	A-32	7.40	7.5 Y R 3/3 暗褐	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部斜位の刻目。細沈線。外面に多量のスス附着。砂粒を多く含む。
622	1158	A-30	6.96	7.5 Y R 4/2 灰褐	鉢	IX-b	外:条痕 内:条痕	細沈線。外面に多量のスス附着。薄手、硬質。
623	3693	Z-32	7.36	2.5 Y R 5/6 明赤褐	壺	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	壺形土器の可能性あり。口唇部尖り気味。細沈線。口唇部沈線。硬質。魚骨を含む。
624	1611	Z-30	6.70	5 Y R 5/6 明赤褐	鉢	IX-b	外:工具ナデ 内:ナデ	文様帯若干肥厚。口唇部平坦。細沈線。薄手、やや軟質。
625	1142 1145	A-30 A-30	7.08 7.10	5 Y R 5/8 明赤褐	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部短沈線。薄手、やや軟質。外面にスス附着。
626	—	A-31	—	7.5 Y R 6/6 橙	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部刺突。最大径は胴部。薄手、やや軟質。
627	3587	A-32	6.94	7.5 Y R 6/4 にぶい橙	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部刺突。最大径は胴部。薄手、やや軟質。626と同一個体の可能性が高い。
628	3524	Z-32	7.16	7.5 Y R 5/4 にぶい褐	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	内面の接合面明瞭。薄手、軟質。軽量。
629	762	Z-32	7.82	7.5 Y R 7/4 にぶい橙	鉢	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	内面の接合面明瞭。薄手、軟質。軽量。628と同一の個性を示す。
630	4460	Z-30	8.02	7.5 Y R 5/2 灰褐	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部間のび押し引き。薄手、硬質。
631	2928	A-33	7.12	5 Y R 5/4 にぶい赤褐	鉢角	IX-b	外:工具ナデ 内:ナデ	山形口縁。口唇部平坦。左端に焼成前の穿孔。薄手、硬質。
632	133	Z-29	7.90	5 Y R 6/3 にぶい橙	鉢角	IX-b	外:工具ナデ 内:ナデ	口唇部平坦。薄手、硬質。631と同一個体の可能性高い。
633	—	—	—	2.5 Y R 4/3 にぶい赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	薄手、やや軟質。
634	232	Z-30	8.08	5 Y R 3/4 暗赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	胴部片。薄手、やや軟質。
635	2645	Z-33	7.88	5 Y R 3/4 暗赤褐	鉢角	IX-b	外:ナデ 内:ナデ	文様帯若干肥厚。口唇部沈線。
636	4266	Z-31	7.00	5 Y R 4/3 にぶい赤褐			外:ナデ 内:ナデ	V字状の突帯。突帯上と接合部に押し引き。
637	641	Y-30	8.10	5 Y R 6/6 橙	壺		外:ナデ 内:ナデ	壺形土器の可能性あり。刻目突帯。
638	4529	Z-30	7.51	5 Y R 6/4 にぶい橙		?	外:ナデ 内:ナデ	刻目突帯。
639	1328	Y-30	7.90	5 Y R 4/6 赤褐	鉢 円		外:ナデ 内:ナデ	橋状把手。
640	—	Z-30	—	2.5 Y R 5/6 明赤褐	鉢		外:ナデ 内:条痕後ナデ	口唇部に突帯貼り付け。突帯上に短沈線を横位に施す。薄手、硬質。

表28 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—27

No	取上No	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調 整	備 考
641	381	Z-31	7.99	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	焼成前の穿孔。口縁端は又状工具による連続刺突。金雲母を少量含む。硬質。
642	2320	Z-32	7.92	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢	IX	外:条痕 内:条痕	頂部が抉りの山形口縁。口唇部施文。
643	2437	Z-31	7.64	5 YR 3/4 明赤褐	鉢	IX	外:条痕 内:条痕	口唇部。内外面施文。硬質。
644	2939	Y-32	7.89	7.5YR 6/6 橙	鉢		外:ナデ 内:ナデ	把手。先端部方形の施文具。内外面施文。
645	4841	—	6.83	2.5YR 6/6 橙	壺	Ⅶ	外:ナデ 内:ナデ	壺形土器の人面把手の可能性ある。施文はすべて押し引き。
646	4268	Z-31	6.97	2.5YR 7/6 橙		Ⅶ	外:ナデ 内:ナデ	獣面把手(猪か?)の可能性ある。鼻、目、耳。連続刺突。砂粒多くザラザラ
647	7027	A-26	6.63	5 YR 6/6 橙	壺	IX	外:ナデ 内:ナデ	器種不明。穴は貫通。軟質。貫通した穴を持つことより、壺形土器の口縁部の可能性ある。
648	832	Y-30	7.89	2.5YR 5/6 明赤褐		?	外:ナデ 内:条痕	突帯上に短沈線。硬質。
649	2710	Z-32	7.83	2.5YR 5/6 明赤褐		?	外:ナデ 内:ナデ	突帯上に間のび押し引き。接合面明瞭
650	4426	Y-32	7.39	2.5YR 5/8 明赤褐		?	外:ナデ 内:ナデ	突帯上に間のび押し引き。接合面明瞭。649と同一個体の可能性高い。
651	1259	Z-30	7.57	5 YR 6/6 橙			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。多量の角閃石を含む。
652	2468	Z-32	7.33	5 YR 5/8 明赤褐			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。長石粒を多く含む。
653	2463	Z-32	7.33	5 YR 5/8 明赤褐			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。長石粒を多く含む。
654	1871	A-31	7.17	7.5YR 4/2 灰褐			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。金雲母を多く含む。
655	1425	Y-30	7.74	5 YR 5/3 にぶい赤褐			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。砂粒を多く含む。
656	562	Z-30	7.94	5 YR 6/4 にぶい橙			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。長石粒を多く含む。
657	4848	—	6.65	5 YR 5/6 明赤褐			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。長石粒を多く含む。
658	4764	Y-31	7.51	5 YR 6/4 にぶい橙			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。Ⅳ類の底部を再利用。完形品。
659	2241 3495	Z-31 Z-32	7.34 7.54	5 YR 6/6 橙			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。接合資料。長石粒を多く含む。
660	2290	Z-31	7.38	10R 5/6 赤			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。長石粒>金雲母。
661	—	Z-30	—	2.5YR 6/6 橙			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。Ⅸ類の再利用。砂粒を多く含む。
662	2050	Z-31	6.88	2.5YR 3/1 暗赤灰			表:研磨 裏:研磨	メンコ型土製品。ほぼ完形品。
663	4498	Z-31	7.55	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢 円	I-b	外:条痕後ナデ 内:条痕	胴部片。横走る沈線の施文後、斜位の短沈線を施文。硬質。多量の角閃石混入。
664	—	A-21	—	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	I-b	外:ナデ 内:条痕後ナデ	胴部片。硬質。多量の角閃石混入。
665	9093	—	8.36	5 YR 2/1 黒褐	鉢 円	I-b	外:条痕後ナデ 内:条痕	胴部片。硬質。多量の角閃石混入。

表29 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表-28

No	取上No	出土区	レベル(m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
666	-	A-21	-	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	I-b	外:条痕 内:条痕後ナデ	胴部片。接合面で剥脱。硬質。多量の角閃石混入。
667	-	A-21	-	5 YR 4/8 赤 褐	鉢 円	I-b	外:ヘラナデ 内:ヘラ	胴部片。接合面で剥脱。硬質。多量の角閃石混入。
668	-	A-21	-	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	I-b	外:条痕 内:条痕	胴部片。硬質。多量の角閃石混入。
669	8261	Z-22	7.60	5 YR 5/8 明赤褐	鉢 円	I-b	外:条痕 内:条痕	胴部片。硬質。砂粒を多く含む。
670	8292	Z-22	7.33	7.5YR 3/1 黒 褐	鉢 円	I-b	外:条痕 内:条痕	胴部片。硬質。多量の角閃石混入。
671	8293	Z-22	7.55	2.5YR 3/1 暗赤灰	鉢 円	I-b	外:条痕 内:条痕	胴部片。硬質。多量の角閃石混入。
672	171	A-24	7.31	10YR 3/3 暗 褐	鉢 円	I-b	外:条痕 内:条痕	ヘラ状工具による施文。やや軟質。長石粒多し。少量の金雲母を含む。
673	8272	Z-22	7.72	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢 円	I-b	外:条痕 内:条痕	ヘラ状工具による施文。硬質。
674	8150	A-25	7.08	5 YR 5/6 明赤褐	鉢 円	I-b	外:条痕 内:条痕	硬質。細礫を多く含む。
675	2133	Z-31	7.55	5 YR 4/2 灰 褐	鉢	II	外:ナデ 内:条痕後ナデ	口縁部は貼り付け突帯により肥厚。貝の腹縁で施文? 硬質。波状口縁の可能性あり。677と同一個体と思われる。
676	3077	Y-33	7.53	5 YR 3/2 暗赤褐	鉢	II	外:ナデ 内:条痕	口縁部は貼り付け突帯により肥厚。貝の腹縁で施文? 硬質。波状口縁の可能性あり。677と同一個体と思われる。
677	3434	Y-32	7.68	2.5YR 3/3 暗赤褐	鉢	II	外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	波状口縁。口縁部外反。口縁は貼り付け突帯により肥厚。工具は貝の腹縁部か? 硬質。
678	2877	Z-32	7.15	5 YR 5/6 明赤褐	鉢 円	V	外:ナデ 内:ナデ	幅広で平坦な突帯。突帯は半截竹管で連続刺突。薄手、硬質。砂粒を多く含む。
679	4427	Y-33	7.39	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	V	外:ナデ 内:工具ナデ	2条の幅広突帯。突帯は斜位の細沈線を刻む。薄手、硬質。長石粒、金雲母多し。
680	1503	Z-30	7.05	5 YR 5/6 明赤褐	鉢 円	V	外:ナデ 内:条痕	屈曲部に幅広突帯。突帯は斜位の刻目。内面の接合面明瞭。薄手硬質。長石粒>金雲母
681	2859	Y-32	7.82	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢 円	V	外:ナデ 内:条痕	胴部片。細沈線で施文。薄手、硬質。接合面で剥脱。内面の接合面明瞭。外面にスス付着。
682	4014	Y-33	7.45	2.5YR 6/6 橙	鉢 角	VI-b	外:入念なナデ 内:ナデ	口唇部に3条の沈線と連続刺突。外面の突帯には「八」の字状の押圧。薄手、硬質。光沢あり。
683	-	Z-30	-	5 YR 2/2 黒 褐	鉢 円	VI-b	外:ナデ 内:条痕	口縁部三角肥厚。口唇内端より縦位の貼り付け突帯。施文は連続刺突。薄手、硬質。
684	3100	Z-31	7.26	2.5YR 4/6 赤 褐	鉢	VI-b	外:ナデ 内:ナデ	686と同一の個性を示す。
685	3254	Y-31	7.42	2.5YR 4/6 赤 褐	鉢	VI-b	外:ナデ 内:条痕	屈曲部に低い幅広突帯。突帯上に連続の短沈線。薄手、硬質。外面にスス付着。
686	4204	Z-31	7.15	2.5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢 角	VI-b	外:ナデ 内:ナデ	口唇部に3条の細沈線。内面から口縁部まで縦位の貼り付け突帯。中央に1条の沈線。硬質。
687	3616	Y-31	7.20	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢	VI-b	外:ナデ 内:条痕	屈曲部に低い幅広突帯。突帯上に連続の短沈線。薄手、硬質。外面にスス付着。685と同一個体の可能性高い。
688	4065	Z-33	6.95	7.5YR 5/3 にぶい褐	鉢	IX	外:条痕 内:条痕	胴部片。やや軟質。外面にスス付着。
689	2112	Z-31	7.35	7.5YR 4/2 灰 褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	胴部片。外面にスス付着。
690	233	Z-30	8.13	7.5YR 3/1 黒 褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	胴部片。沈線による複合鋸歯文。薄手、硬質。

表30 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—29

No.	取上No.	出土区	レベル (m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
691	—	—	—	5 YR 3/3 暗赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	胴部片。複合鋸歯文。薄手、硬質。少量の金雲母を含む。
692	2184	Z-32	7.65	5 YR 4/1 褐 灰	鉢		外:ナデ 内:ナデ	胴部片。鋸歯文。薄手、硬質。内外面にスス付着。
693	2748	Z-32	7.54	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ	外:ナデ 内:ナデ	胴部片。硬質。長石粒多し。
694	3050 3076	Z-32 Z-32	7.28 7.38	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢	Ⅸ	外:条痕 内:条痕	胴部片。条痕調整の状態からⅨ類土器の可能性が高い。少量の金雲母を含む。
695	2930	A-33	7.2	5 YR 6/6 橙	鉢		外:条痕 内:条痕	胴部片で底部に近い。薄手、硬質。金雲母を多く含む。外面にスス付着。
696	4770	Y-32	7.51	5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	胴部片。複合鋸歯文。硬質。
697	467	Z-32	7.84	5 YR 5/2 灰 褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	胴部片。複合鋸歯文。薄手、硬質。金雲母を多く含む。
698	2580	Y-32	7.86	5 YR 4/3 にぶい赤褐	鉢		外:条痕後ナデ 内:条痕後ナデ	胴部片。縦位の平行沈線。薄手、硬質。長石粒>金雲母
699	1383	Y-30	7.81	5 YR 4/4 にぶい赤褐	鉢		外:工具ナデ 内:ナデ	胴部片。入組み文。薄手、硬質。外面にスス付着。
700	526	A-30	7.59	5 YR 6/6 橙	鉢		外:ナデ 内:ナデ	胴部片。複合鋸歯文。薄手、硬質。長石粒>金雲母
701	589	Z-29	8.0	5 YR 5/6 明赤褐	鉢		外:条痕後ナデ 内:ナデ	胴部片。平行線文。薄手、硬質。金雲母を多く含む。
702	504	A-30	7.23	7.5 YR 6/6 橙	鉢		外:ナデ 内:ナデ	胴部片。接合面明瞭。やや軟質。
703	7057	—	—	5 YR 5/6 明赤褐	鉢 円	Ⅳ	外:縦位条痕 内:条痕	尖底に近い丸底。接合面で剝脱。硬質。
704	7055	A-27	7.04	2.5 YR 5/6 明赤褐	鉢		外:ナデ? 内: —	長石粒多く器面ザラザラ。接地面の外周部約10mm幅か?比高し、上げ底状を呈す。貼り付けか?
705	94	A-26	6.76	5 YR 5/6 明赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底。薄手、硬質。砂粒多く器面ザラザラ。
706	482	A-31	7.15	7.5 YR 6/4 にぶい橙	鉢		外:条痕 内:ナデ	上げ底状。中央部は削り取り。やや軟質。サンゴ粒、貝殻片を混入。
707	7077	A-27	6.77	2.5 YR 4/6 赤 褐	底		外:条痕 内:ナデ	平底。焼台様の圧痕あり。硬質。
708	2541 2603 2645	Z-33 Z-33 Z-33	7.88	2.5 YR 5/6 明赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	張り出し。上げ底状で中央部は削り出し。硬質。
709	2597	Z-31	7.42	5 YR 5/6 明赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	やや張り出し気味。硬質。砂粒多し。少量の金雲母を含む。
710	2280	Z-30	7.55	7.5 YR 5/2 灰 褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底。やや軟質。
711	842	A-30	7.19	7.5 YR 5/4 にぶい赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底。薄手、硬質。内外面にスス付着。
712	2828	—	7.38	5 YR 5/2 灰 褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底(中央部僅かに凹面)。砂粒多く器面ザラザラ。
713	2306	Z-31	7.92	2.5 YR 4/1 赤 灰	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底。砂粒多く内面ザラザラ。
714	2691	—	7.22	7.5 YR 6/8 橙	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底。軟質。
715	2991	Z-31	7.39	5 YR 5/2 灰 褐	鉢		外:ナデ 内:条痕	平底(中央部僅かに凹面)。

表31 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—30

No.	取上No.	出土区	レベル(m)	色調(表)	器種	類別	調整	備考
716	1704	A-30	6.61	7.5YR 6/4 にぶい橙	鉢		外:ナデ 内:ナデ	薄手、やや軟質。軽量。
717	2126	Z-31	7.27	2.5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底。薄手、硬質。外面にスス付着。
718	2610	Z-30	7.88	5YR 6/6 橙	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底。硬質。外面にスス付着。
719	1140	Z-30	7.83	5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢		外:ナデ 内:条痕後ナデ	平底。硬質。
720	1968	Z-31	7.63	5YR 5/6 明赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底(中央部僅かに凹面)。
721	2678	Z-33	7.39	2.5YR 5/4 にぶい赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底(中央部僅かに凹面)。薄手、硬質。外面にスス付着。
722	755	Z-31	7.82	2.5YR 4/4 にぶい赤褐	鉢		外:条痕 内:ナデ	上げ底状。硬質。
723	1515	Z-30	6.36	5YR 3/2 暗赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底。外面に多量のスス付着。
724	1637	Z-30	6.91	7.5YR 5/4 にぶい褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底(中央部僅かに凹面)。やや軟質。軽量。
725	846	Z-29	7.40	5YR 5/3 にぶい赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	上げ底状。やや軟質。角閃石を含む。
726	759	Z-32	7.63	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	上げ底状。内面の接合面明瞭。薄手、硬質。長石粒多し。
727	519	A-30	7.41	7.5YR 7/4 にぶい橙	鉢		外:条痕 内:ナデ	平底。砂粒多く器面ザラザラ。
728	1410	A-30	6.88	2.5YR 5/6 明赤褐	鉢		外:条痕 内:条痕	平底。薄手、硬質。
729	546	Z-31	7.94	2.5YR 4/3 にぶい赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	上げ底状。砂粒多し。
730	1881	Z-31	7.39	5YR 5/3 にぶい赤褐	鉢		外:ナデ 内:ナデ	平底(中央部僅かに凹面)。砂粒多し。内外面にスス付着
731	2848	Z-31	7.88	2.5YR 5/8 明赤褐	鉢		外:条痕 内:ナデ	平底。薄手、硬質。 長石粒>金雲母
732	3210	Z-31	7.74	2.5YR 6/6 橙	鉢		外:ナデ 内:ナデ	上げ底状(外周に幅17mmの比高帯)。内外面にスス付着。
733	4087	Y-32	6.87	2.5YR 5/6 明赤褐	甕	XIX	外:ハケナデ 内:粗のハケナデ	胴張りの甕形土器。薄手、硬質。砂粒多し。外面にスス付着。
734	8050	A-25	7.49	7.5YR 6/6 橙	甕	XIX	外:ハケ目 内:ヘラケズリ	やや厚手。砂粒多し。
735	217	A-30	7.82	5YR 5/3 にぶい赤褐	甕	XIX	外:ハケ目 内:ヘラケズリ	口唇内面に段がつく。厚手、硬質。長石粒多し。
736	4266	Z-31	7.01	10YR 7/4 にぶい黄橙	碗	XX	外:ハケ目 内:研磨	内面黒色土器。良質の粘土使用。
737	4266	Z-31	7.01	10YR 6/4 にぶい黄橙	碗	XX	外:ハケ目 内:研磨	内面黒色土器。碗の底部片。良質の粘土使用。
738	-	-	-	10YR 4/1 褐 灰		XI	外:タタキ 内:タタキ	類須恵器。
739	-	A-23	-	5YR 5/2 灰 褐	壺	XI	外:ナデ 内:ナデ	類須恵器。口縁部。
740	-	-	-	N 5/0 灰	壺	XI	外:タタキ 内:タタキ	類須恵器。内面は格子目タタキの後ナデ

表32 下山田Ⅱ遺跡出土土器観察表—31

No.	取上No.	出土区	レベル	色調(表)	器種	類別	調整	備考
741	—	—	—	N 4/0 灰		X XI	外：タタキ 内：タタキ	類須恵器。
742	—	—	—	10YR 褐灰		X XI	外：タタキ 内：タタキ	類須恵器。
743	—	—	—	10YR 褐灰		X XI	外：タタキ 内：タタキ	類須恵器底部。

【註】

- 1) No. () は、本文、実測図及び図版に示した番号であり、それらと一致している。
- 2) 取り上げNoは、発掘調査時点で記録した番号である。
- 3) 出土区の「1地点」は、第1地点(0区～17区)を示す。
- 4) 色調は、『新版 標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局 監修 によった。
財団法人 日本色彩研究所 色票監修
土器の表(外面)のみを対象とし、白色蛍光灯下における対応である。色調サンプルの中間色にある場合は主観に基づいて所属させた。
- 5) 器種の、「鉢」＝(鉢形土器)に記した「円」と「角」については上面観を示したもので上面が丸いものについては「円」、方形のものについては「角」で表示している。なお、山形口縁をもつものは一括して「角」の範疇で示した。
- 6) 調整については、条痕(貝殻条痕も含む)のままの場合「条痕」、条痕整形の後、特に撫でて仕上げた場合「条痕後ナデ」と記載した。また、規則的な平行線の調整痕の残る場合には「工具ナデ」と表記している。
- 7) 備考では上記の情報の他、実測段階において認められた特筆すべき点(文様、胎土、焼成等)を記入した。胎土の混和材の大小・多少は主観に基づく観察であるが、基本的に大小は、砂粒>細砂粒>微砂粒の3段階に、多少は、多量>多く含む>含む>若干含むの4段階に分けた。鋳物については明らかなものだけを記してある。また、「多量のスス付着」の記載があるものは、吹きこぼれ、焦げつきの可能性が考えられる。

4) 出土遺物—石器

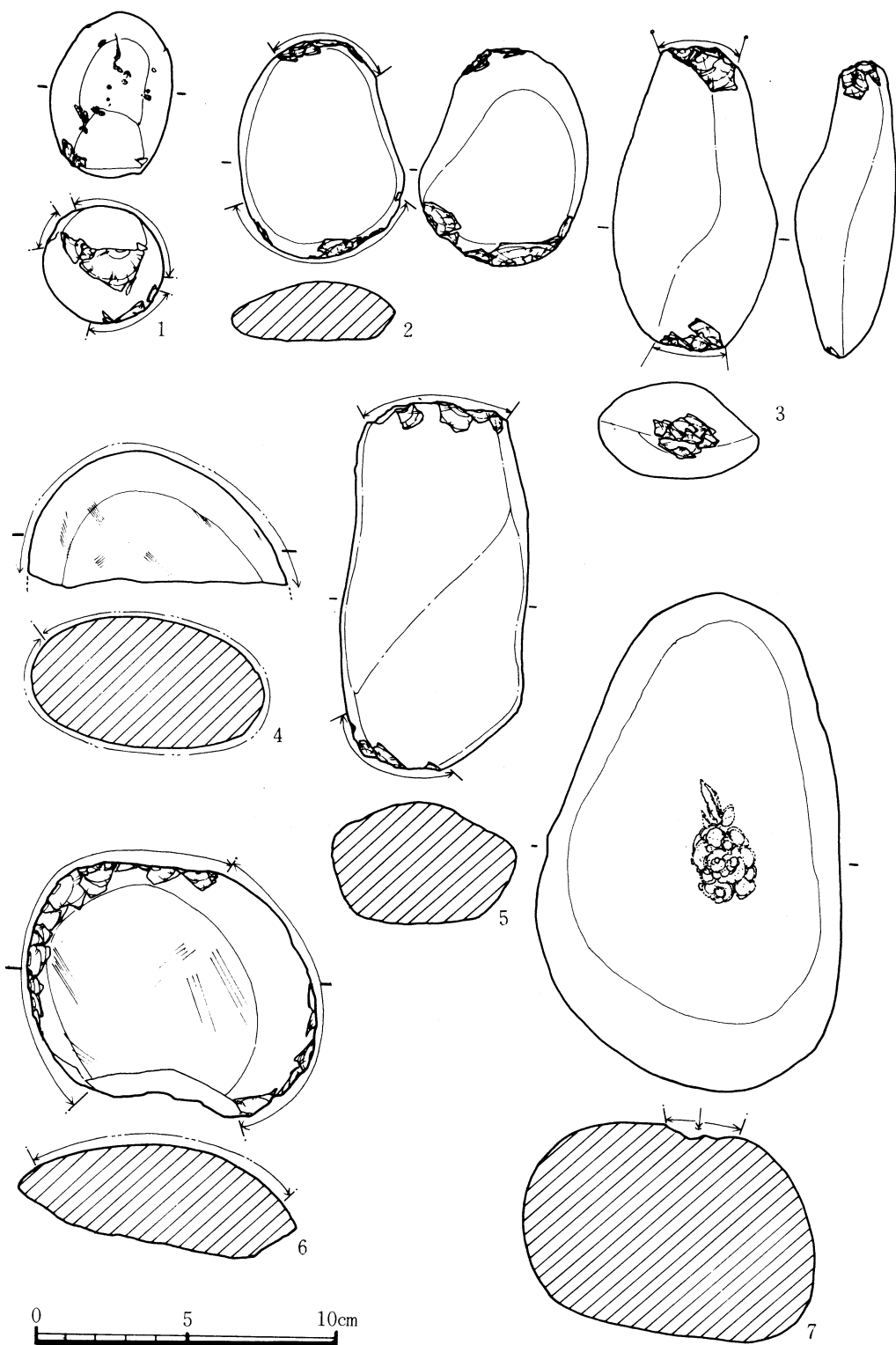
第2地点、第3地点から出土した石器は、叩石（ハンマー）・磨石・凹石・局部磨製石斧・磨製石斧・打製石斧・台石・石皿・クガニ石・砥石・搔器・削器・両面石器・擦切石器・楔形石器（ピーエスエス・キーク）・石核それに剥片である。これは、予想を上まわる器種の組み合わせの豊さであった。

素材となった石材は、砂岩・頁岩・ホルンフェルス・輝緑岩・ヒン岩・粘板岩・千枚岩・チャート・黒曜石である。なかでも、最も多く用いられたのは砂岩であり、輝緑岩がそれに次いでいる。それらは、叩石、磨石、凹石等に多く利用されている。

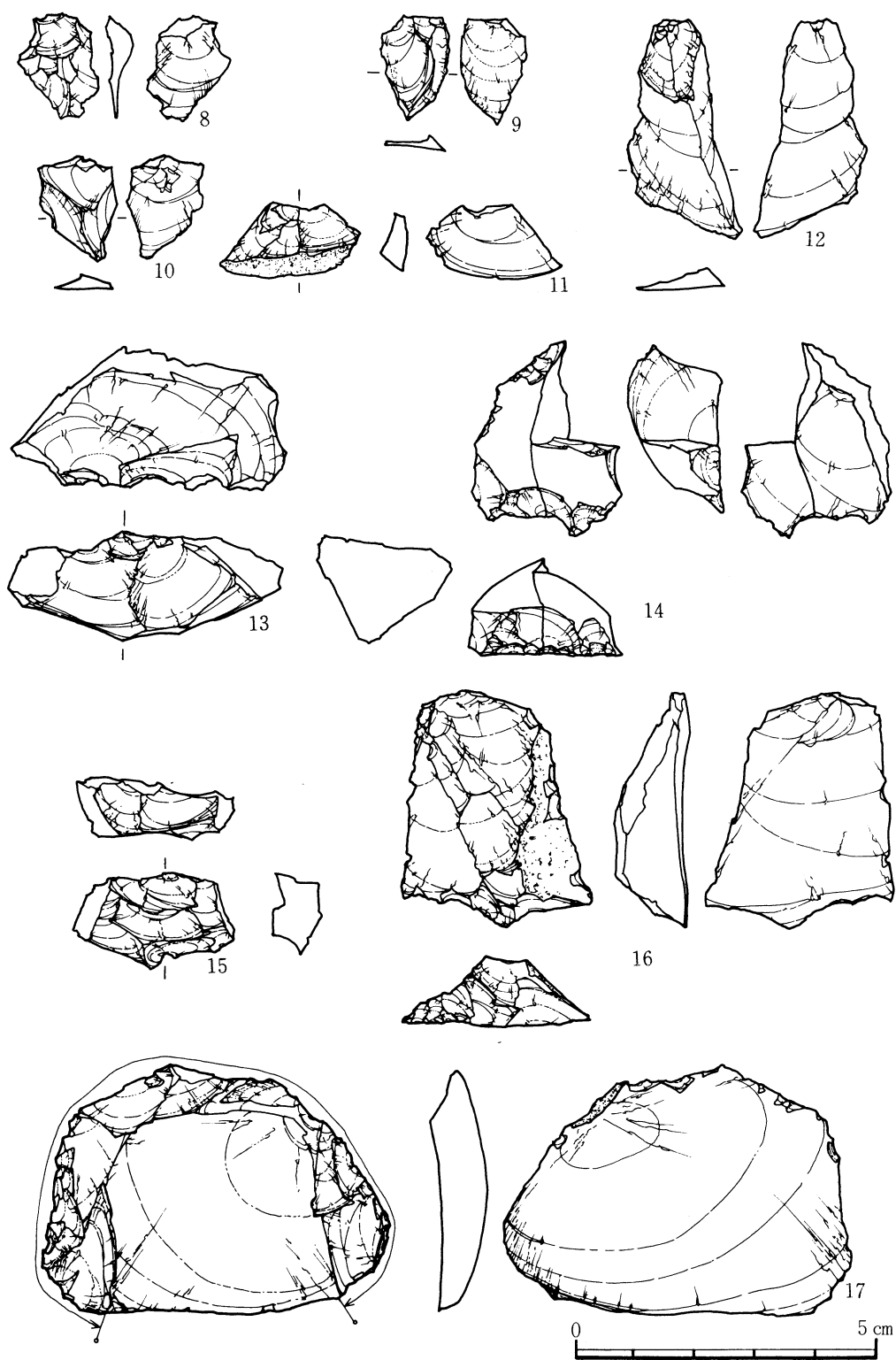
石 器

表33 下山田Ⅱ遺跡出土石器一覧表—1 (20~24区)

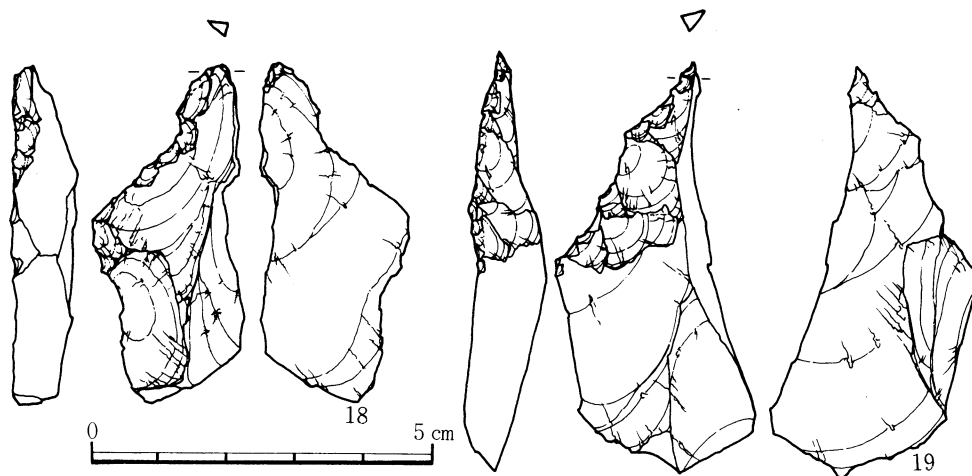
報告書No	取り上げNo	出土区	レベル(m)	重さ(g)	石 材	名 称
1	—	A-21	—	113	砂岩	叩石
2	8124	A-23	7.28	115	頁岩	叩石
3	359	A-21	7.59	200	砂岩	叩石
4	8032	A-24	7.15	210	砂岩	磨石
5	160	A-24	7.72	430	砂岩	叩石
6	8137	A-24	7.19	369	粗粒砂岩(石英粒多い)	叩石・磨石
7	8270	Z-22	7.78	1614	砂岩	凹石
8	8101	A-24	7.18	0.8	黒曜石	剥片
9	8100	A-24	7.14	0.5	黒曜石	剥片
10	8078	A-24	7.20	0.8	黒曜石	剥片
11	8077	A-24	7.08	1.0	黒曜石	剥片
12	47	A-20	6.40	2.8	石英質	剥片
13	140	A-23	7.56	17.5	チャート	石核
14	71	A-22	6.12	10.5	チャート	搔器
15	8123	—	7.17	3.6	黒曜石	石核
16	155	A-24	7.58	14.2	チャート	搔器
17	—	—	—	25.2	ホルンフェルス	削器
18	—	—	—	8.7	石英質	石錐
19	—	—	—	17.0	チャート	石錐
94	176	A-24	7.38	65	輝緑岩?	石斧?(磨製)
97	362	A-21	7.23	50	頁岩(粘板岩に近い)	石斧(磨製)



第96图 石器-1(第1地点)



第97图 石器-2(第1地点)



第98図 石器-3(第1地点)

第34 下山田Ⅱ遺跡出土石器一覧表-2(26~28区)

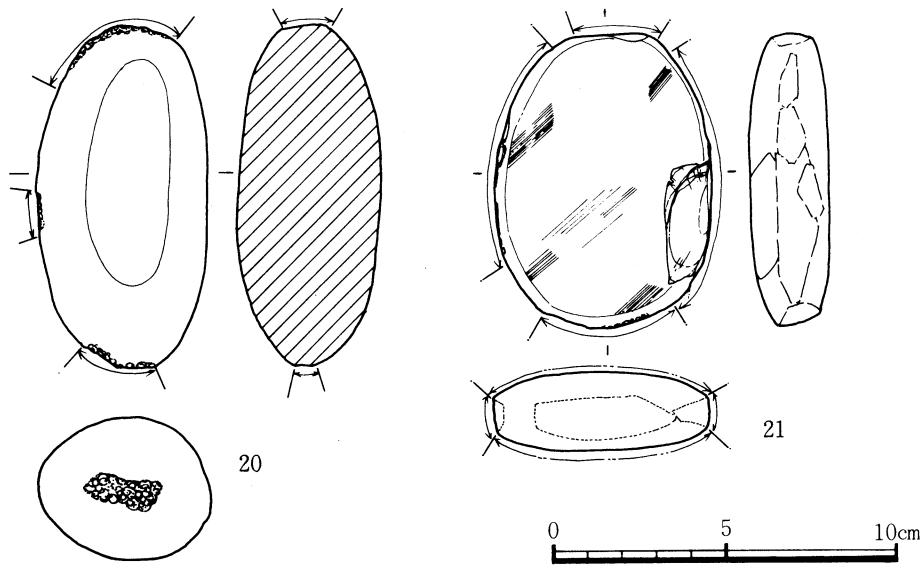
報告書No.	取り上げNo.	出土区	レベル(m)	重さ(g)	石 材	名 称
20	—	A-27	下部	284	砂岩	叩石
21	7051	A-27	7.00	195	砂岩	叩石・磨石
108	7040	A-26	6.99	42	砂岩	擦切石器

利用石材で注目されるのは、黒曜石である。島内での黒曜石の産出の確認はなく、おそらく島外からの持ち込んだものと思われる。その他の石材は、島内で産することが確認されておりそこを基点に供給されたものと判断できる。

石核石器では、叩石が最も多く、小円礫を素材とし長軸方向の下端を中心に利用し、また、上端も利用したものが多く見られる。したがって、素材の選択に十分な注意が注がれたことがうかがえる。それらは、3・5・40等に代表される。また、叩石・磨石、叩石・磨石・凹石等の複数の機能を備えたものも認められる。特に、叩石・磨石・凹石の3つの機能を持つ石器は一定の特長的形状が認められる。それらは、52・55に代表され、石ケン、状の形状を呈し、側縁部が叩石・表裏の平坦面が磨石面、両磨石面のほぼ中央部に凹部を備えている。

いずれにしても、叩石の占める率は大きく、ハンマーを多く必要とした本遺跡のあり方が注目される。

黒曜石を素材としたものは、剥片4点、石核が1点である。特に、15で示した石核の存在は注目される。石核は、小型で、残核に近い状況であり、最終剥離面はフィンジクラフチャーを



第99図 石器-4(第3地点)

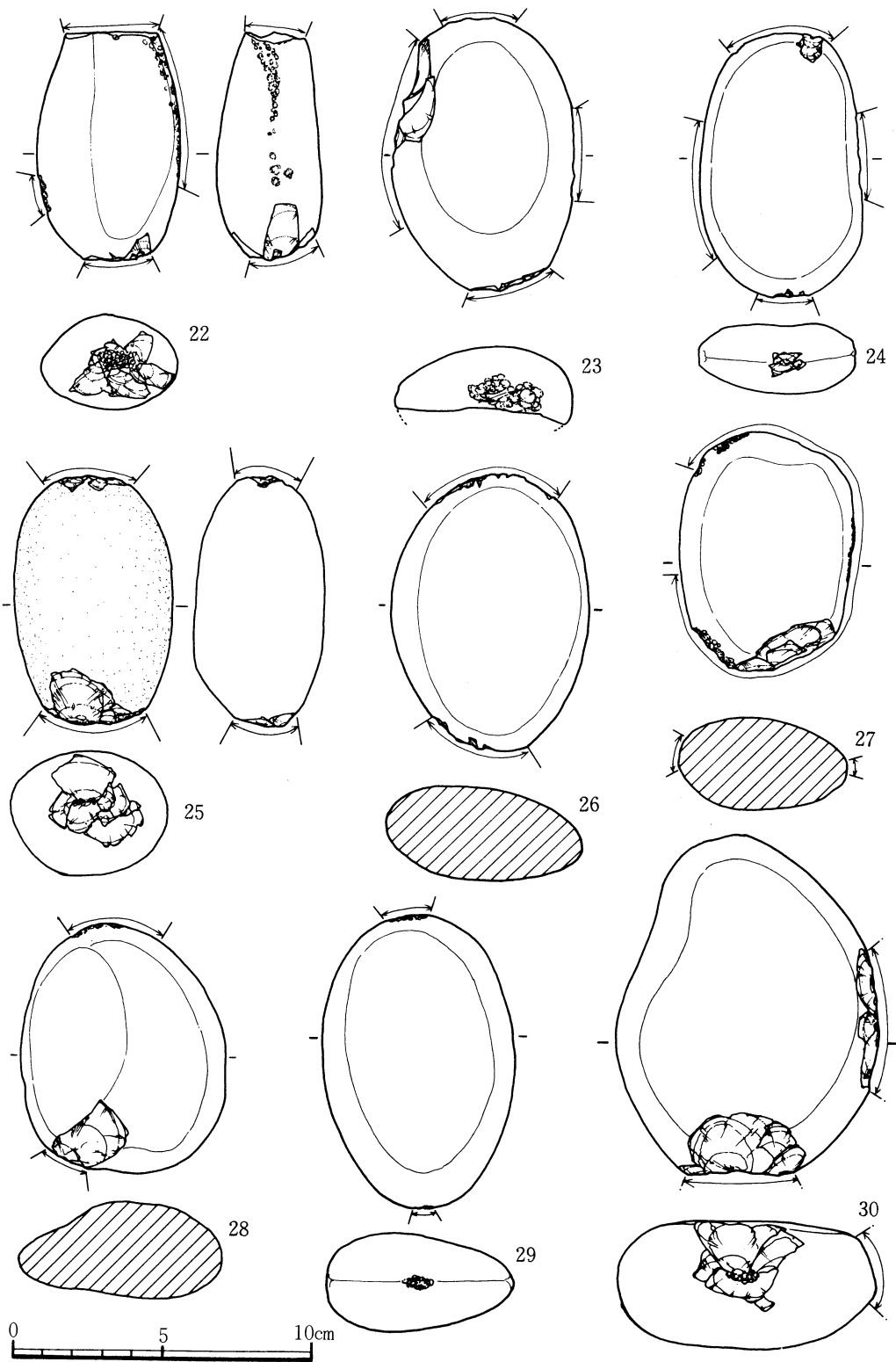
生じ、その時点で放棄された可能性が高い。フィンジクラフチャーを生じた剝離面を最終作業面と考へて、図示しているが、その考へに基づいて判断すると、打面は転位する多面体石核の形態が想定される。また、黒曜石の剝片 8～11 の背面に残される剝離方向も一定方向ではなく、各方向からの切り合いが認められ、打面転位をする石核より剝出されている作業工程のあったことを裏づけている。

13の石核は、島内産のチャートを使用したもので、打面は平坦である。

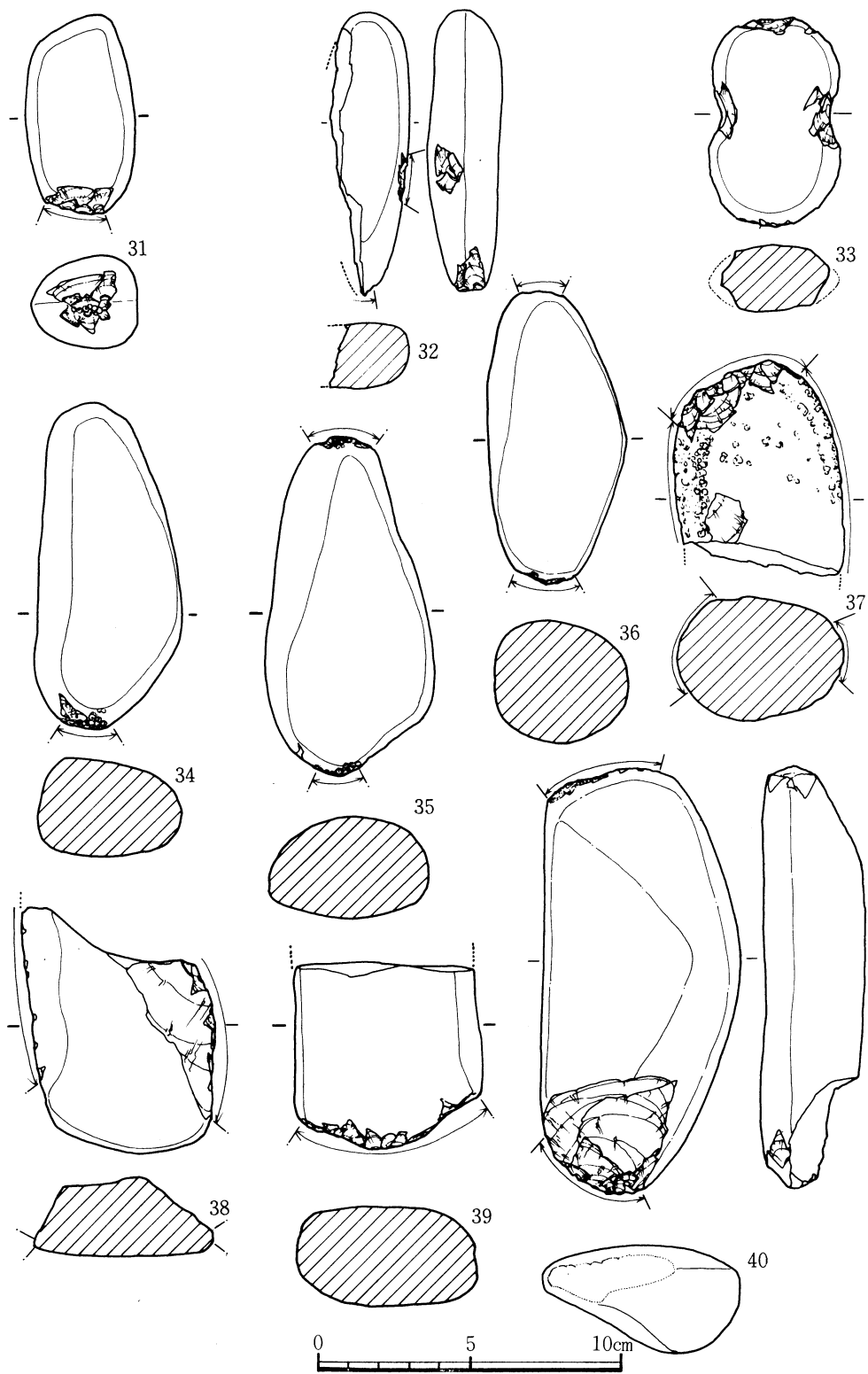
14・16は、厚手の剝片を用い、主要剝離面方向から刃部調整剝離を行った搔器で、共通した製作工程で作出されたことを裏づけている。

17は、ナチュラル・プラットホームの石核より剝出した剝片を素材とし、剝片の頭部側を中心に削器に加工したものである。

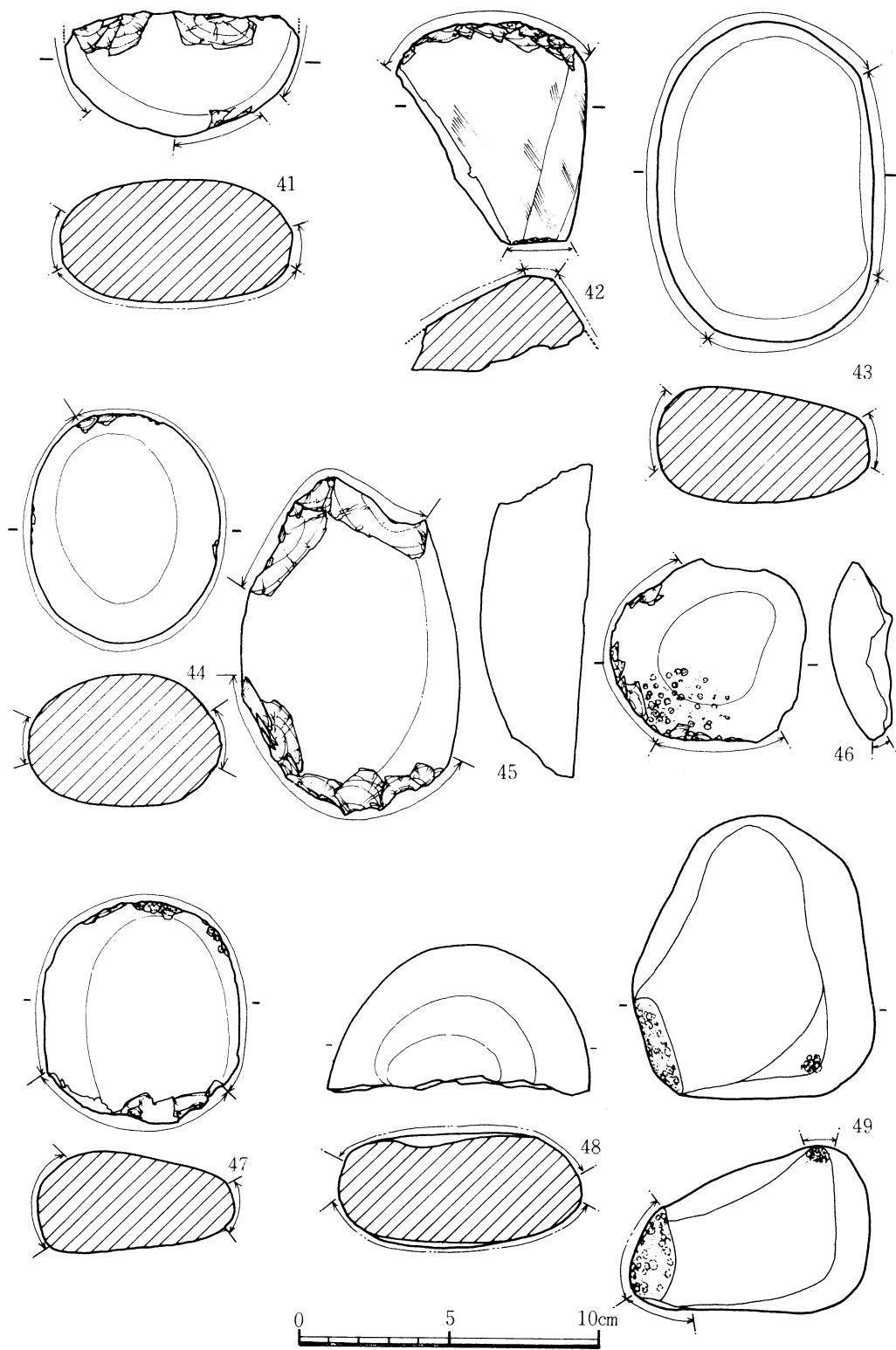
18・19については、石錐として認定している。厚手の不定形剝片を用い、打点側は切斷により取り去り、背面の左側縁から先端部へかけて急角度の整形加工を施し（主要剝離面より背面方向へ）、鋭利な作業面の作出を行っている。2点共に、前記の作業工程を経て作出されている。



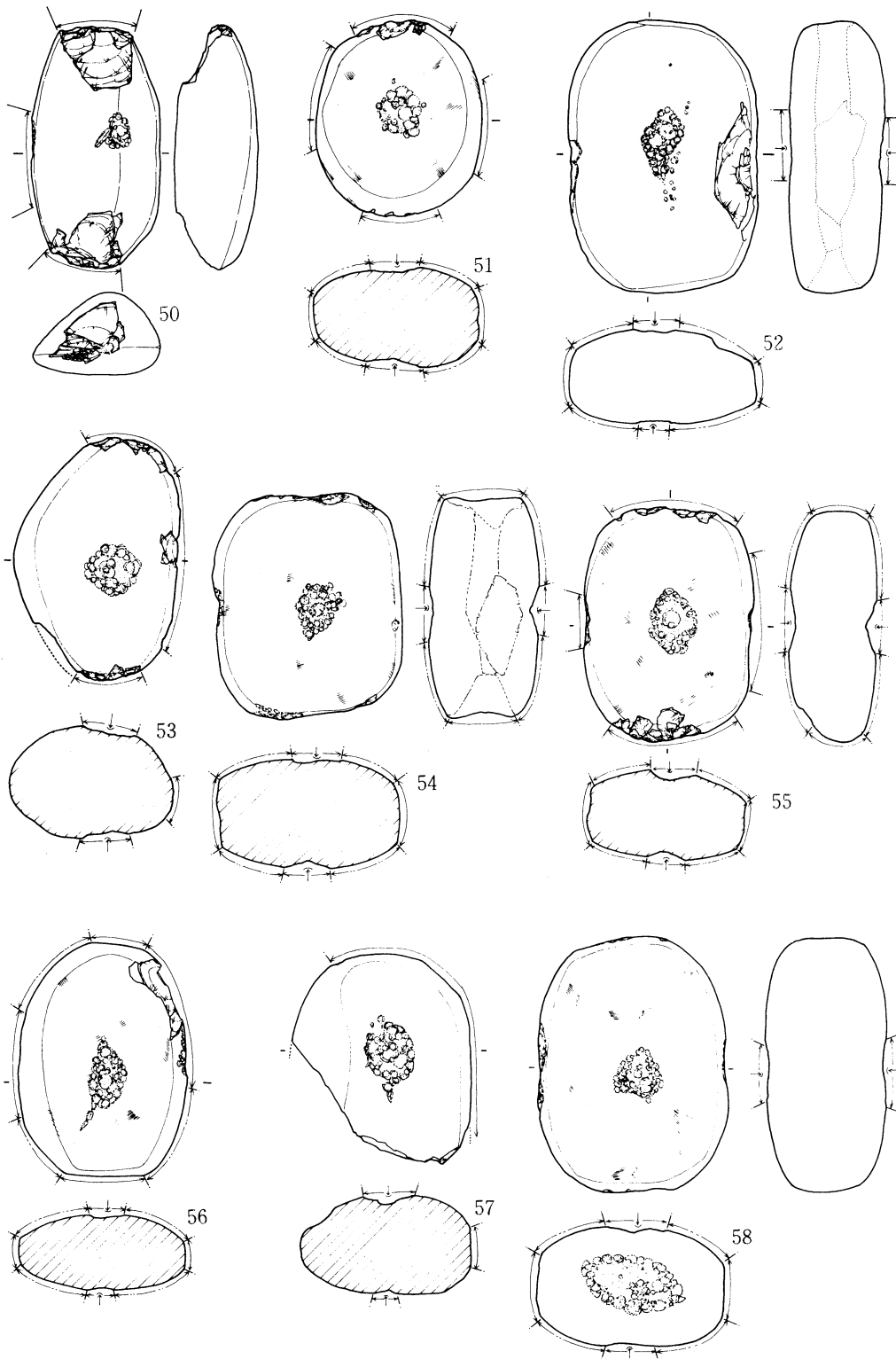
第100图 石器- 5(第3地点)



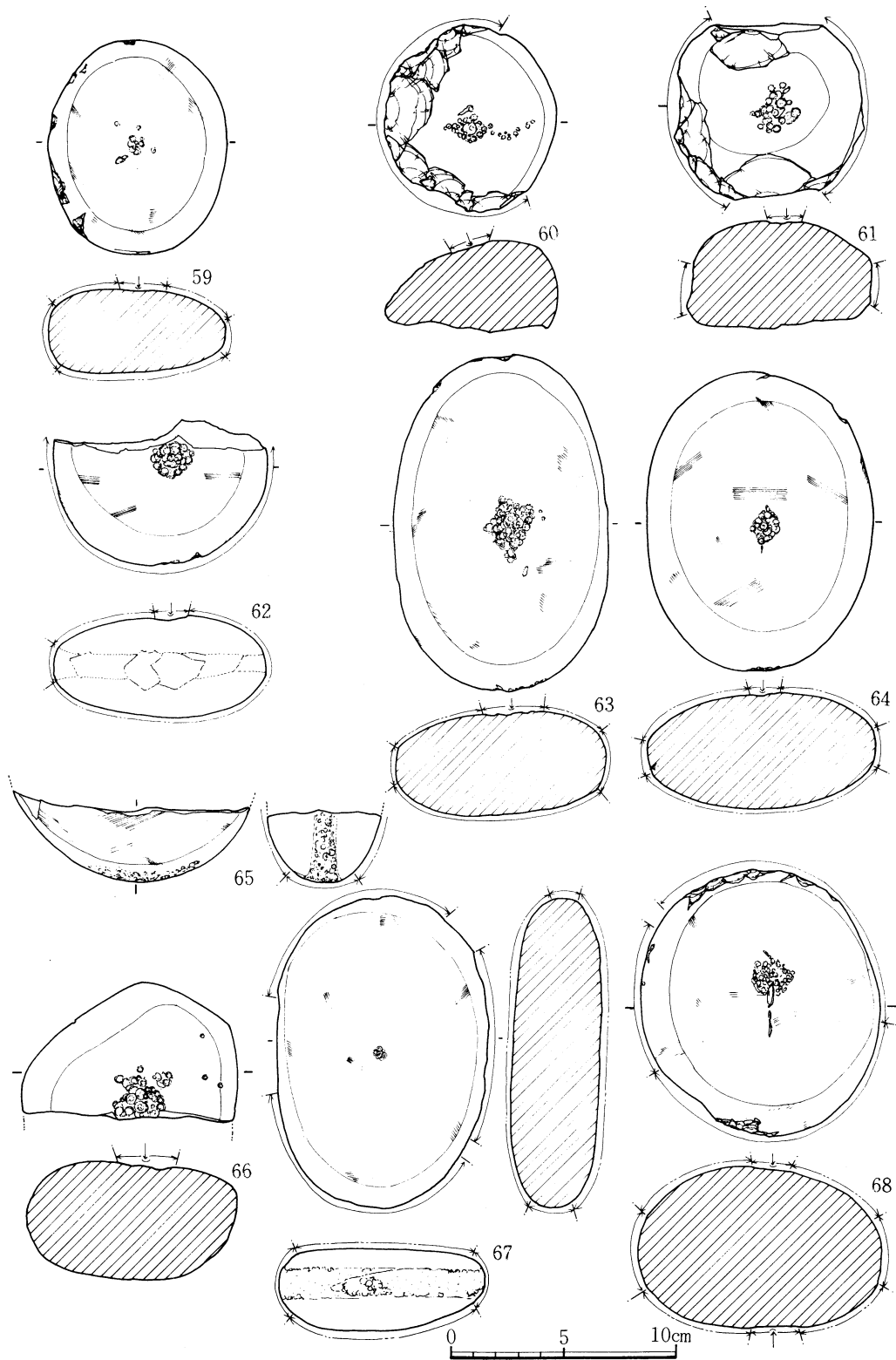
第101图 石器- 6(第3地点)



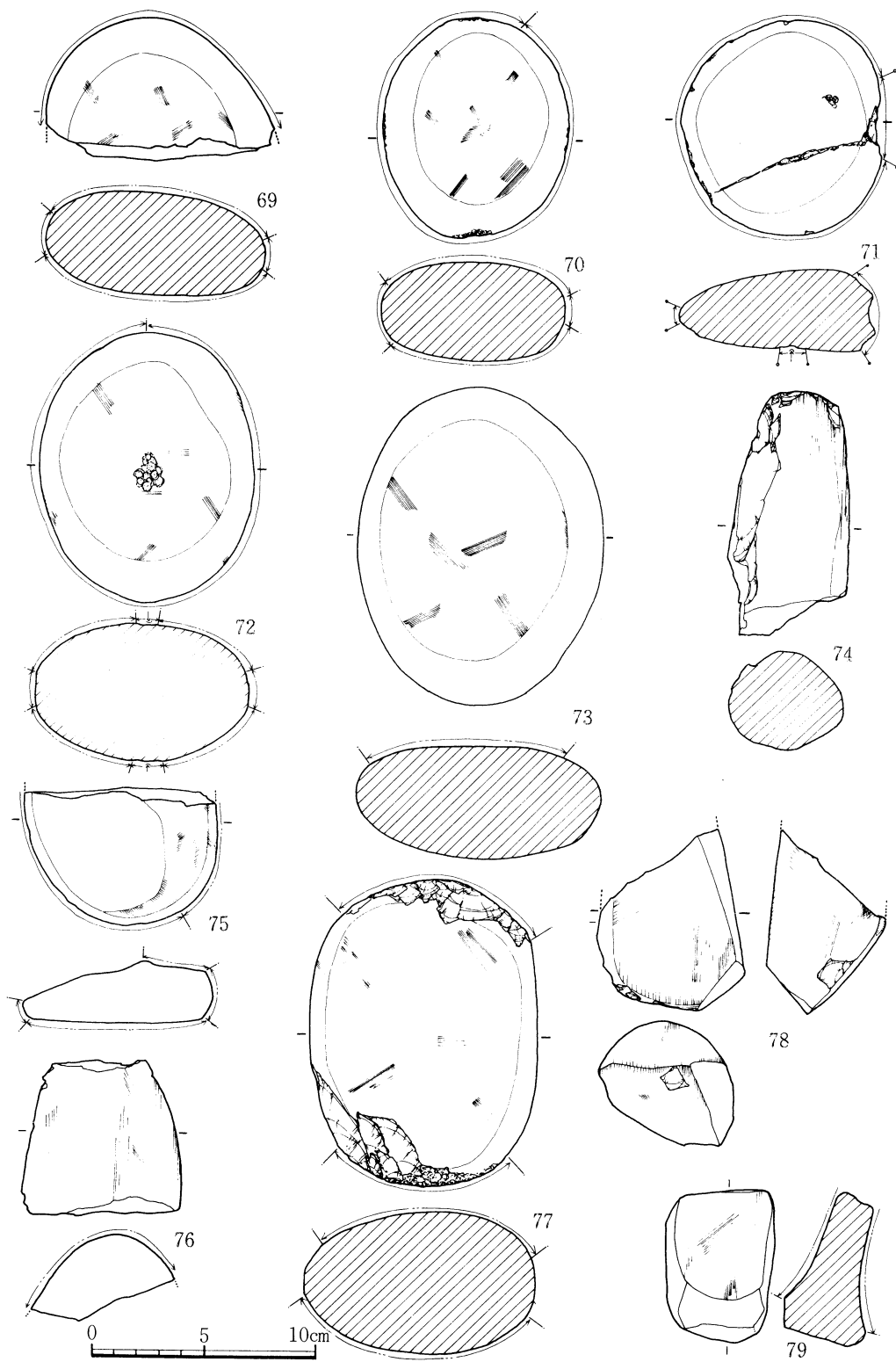
第102图 石器-7(第3地点)



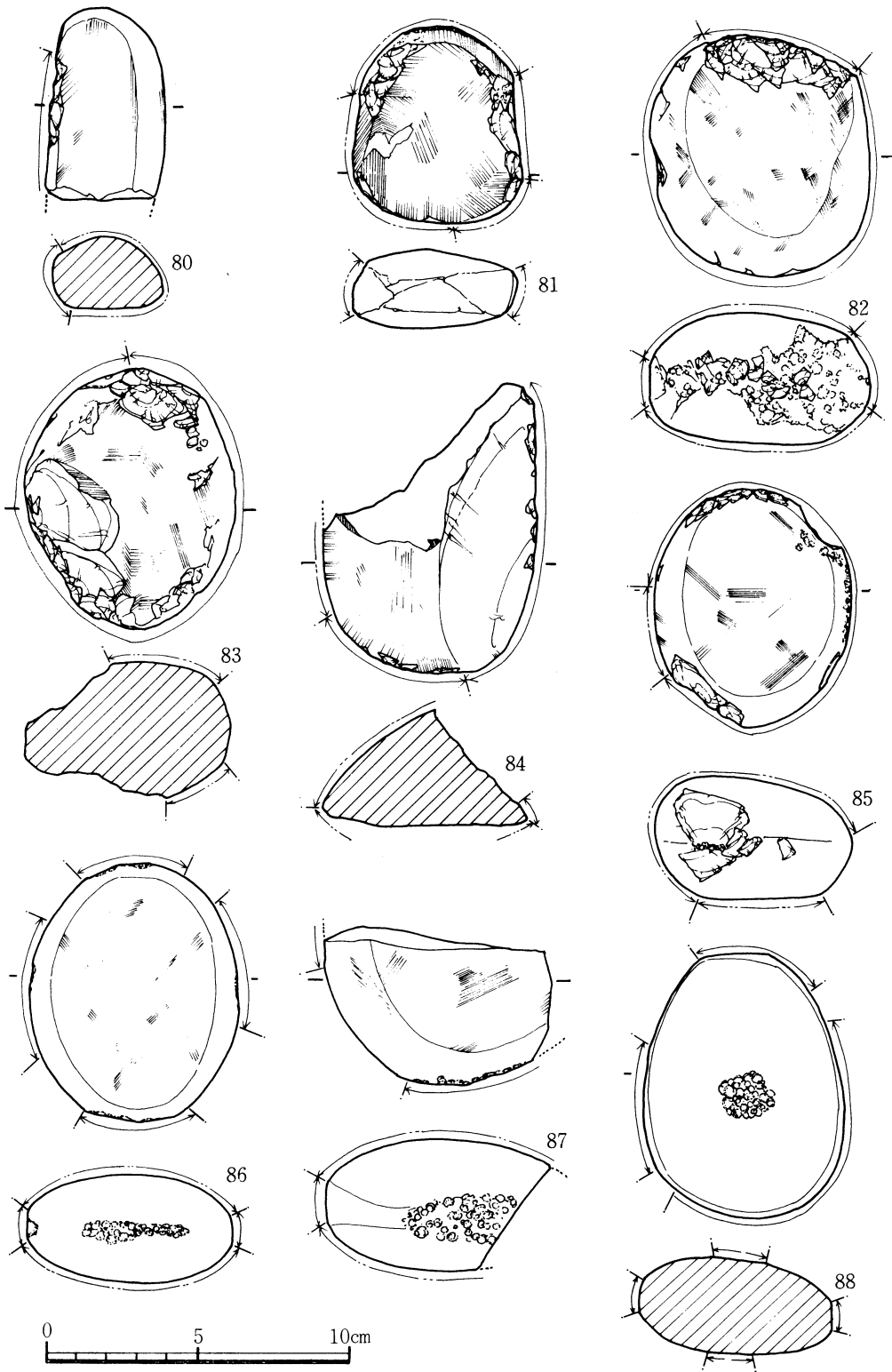
第103图 石器- 8(第3地点)



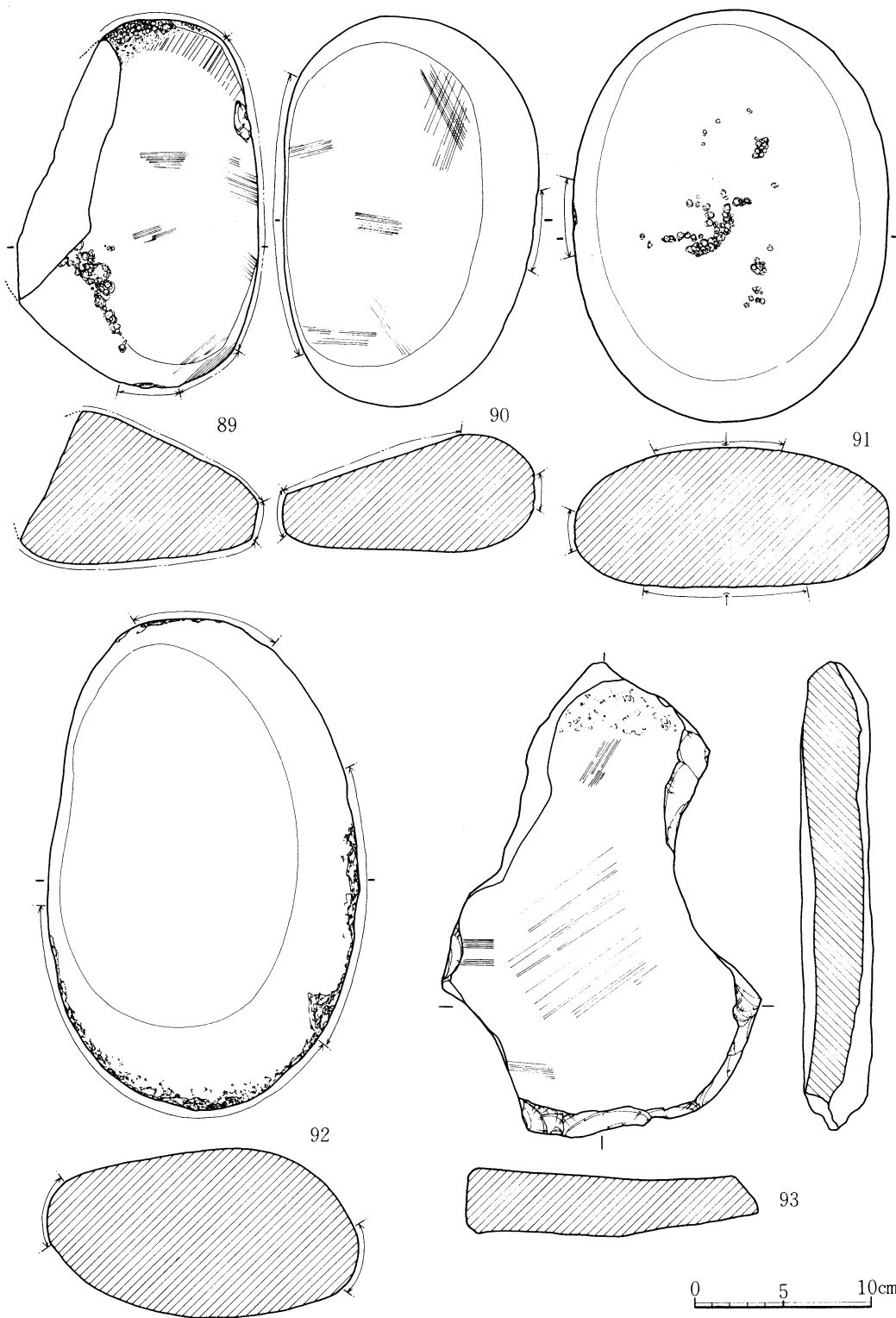
第104图 石器- 9(第3地点)



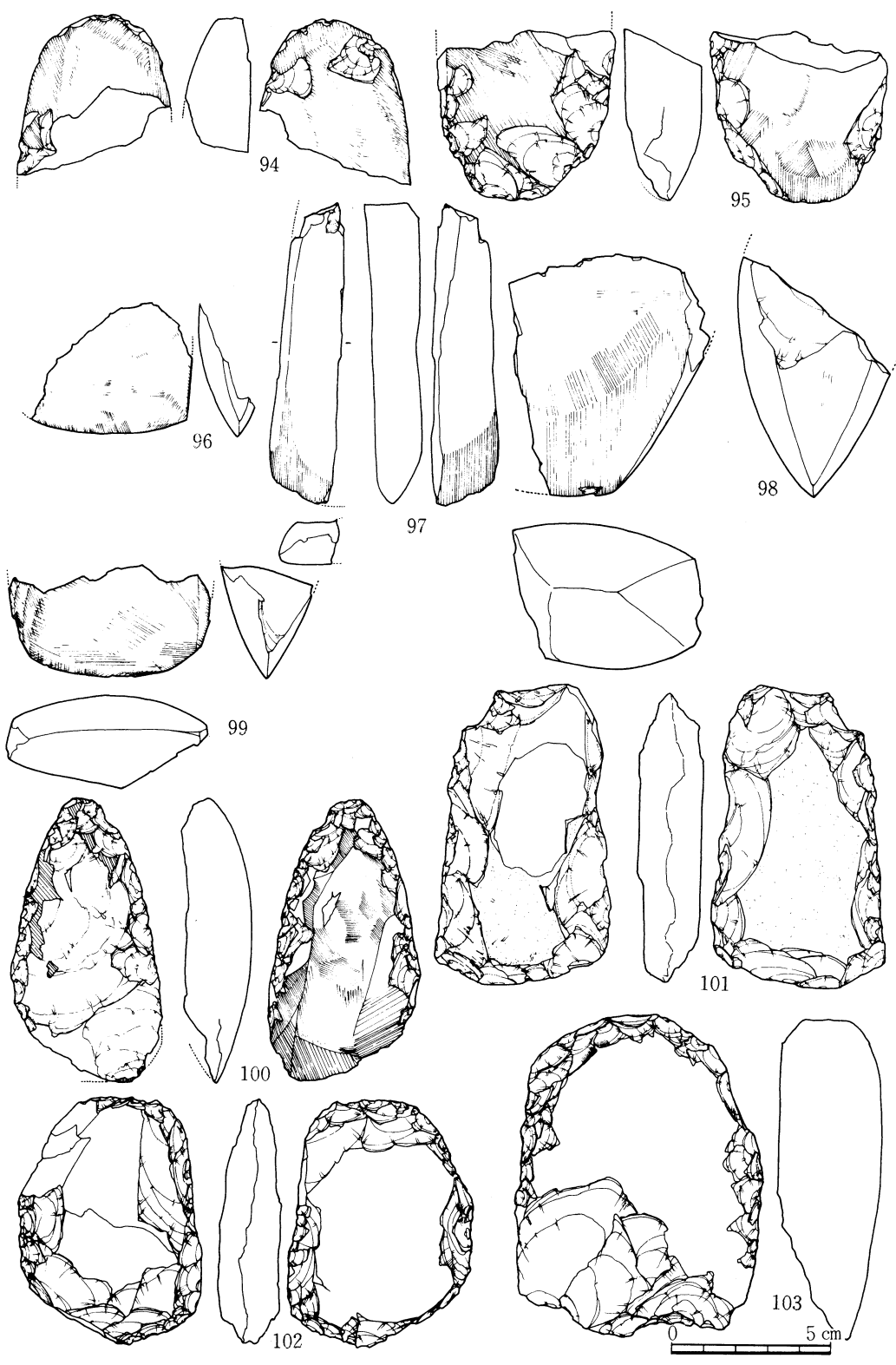
第105图 石器-11(第3地点)



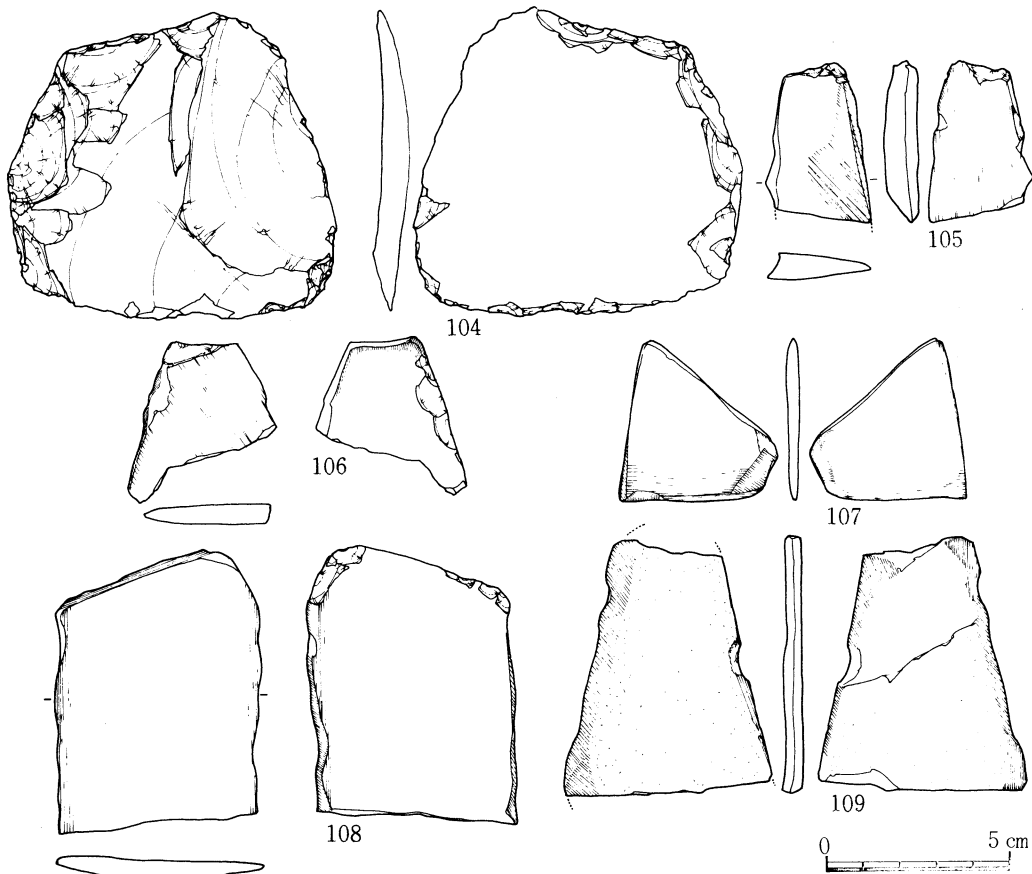
第106图 石器-11(第3地点)



第107图 石器-12(第3地点)



第108図 石器-13(第2・3地点)

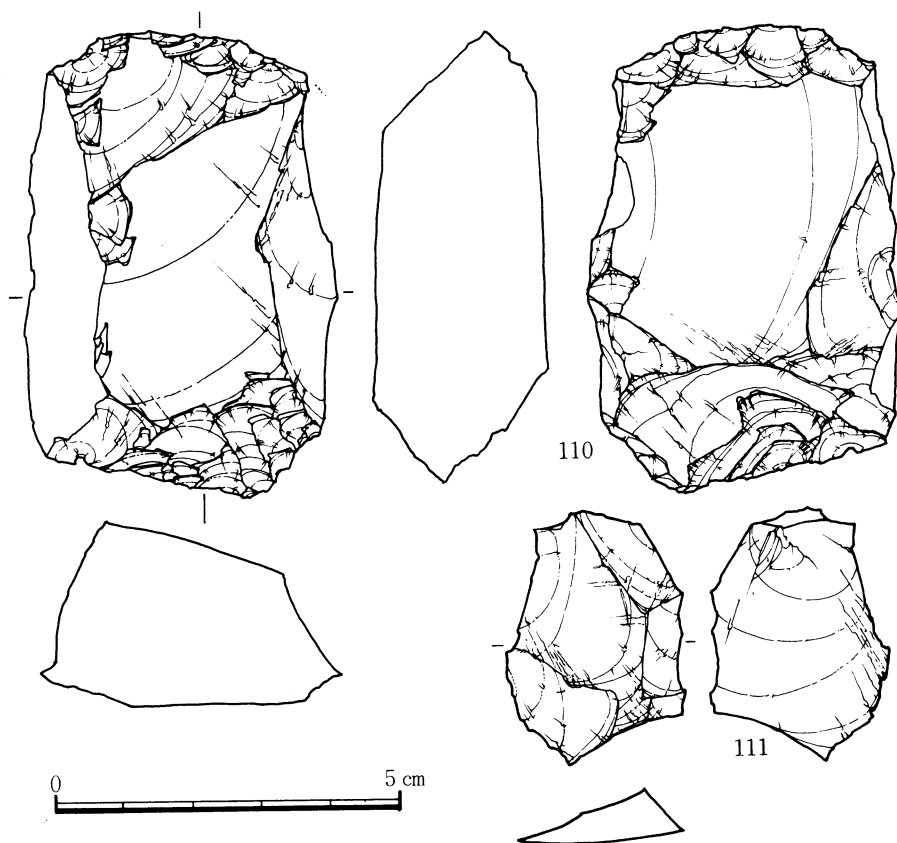


第109図 石器-14(第3地点)

96~99の磨製石斧のうちの、97を除く3点の刃部は鋭く、入念な研磨により作出している。また、両側縁部も入念に研磨され、体部とは明瞭な稜で区切られる。

105~109は、板状の扁平な砂岩を素材としたもので、擦切石器として取扱った。全てに共通し、側縁に平行ないしは斜行する研磨痕が残されている。また、研磨痕を残す側縁の端部は直線状をなし、断面形はV字ないしはU字状を呈している。したがって、この研磨痕を残す面が作業面と判断し、作業の運動方向を復元想定した結果、擦切のために使用された石器と判断している。

110の左右の剝離面は、明らかに裁断された面であり、大型の楔形石器（ピーエスエス・キーユ）と考えられる。



第110図 石器-15(第3地点)

表35 下山田遺跡出土石器一覧表- 3(29~33区)

報告書No.	取り上げNo.	出土区	レベル(m)	重さ(g)	石 材	名 称
22	3292	Z-32	7.72	186	砂岩	叩石
23	383	Z-31	8.08	205	粗粒砂岩(石英粒多い)	叩石
24	3667	Z-32	7.12	213	輝緑岩	叩石
25	3886	Y-32	6.98	255	砂岩	叩石
26	741	Y-32	8.09	258	砂岩	叩石
27	2361	Z-31	7.60	202	砂岩	叩石
28	—	Z-31	—	253	アルコース質砂岩?石英質硬い	叩石・磨石?
29	4349	A-31	6.65	267	砂岩	叩石
30	4134	Z-32	7.99	598	砂岩	叩石
31	3594	Z-32	7.57	103	砂岩	叩石
32	602	Y-30	8.13	88	頁岩	叩石
33	—	Z-29	—	86	砂岩	叩石?石錘?

表36 下山田Ⅱ遺跡出土石器一覧表-4 (29~33区)

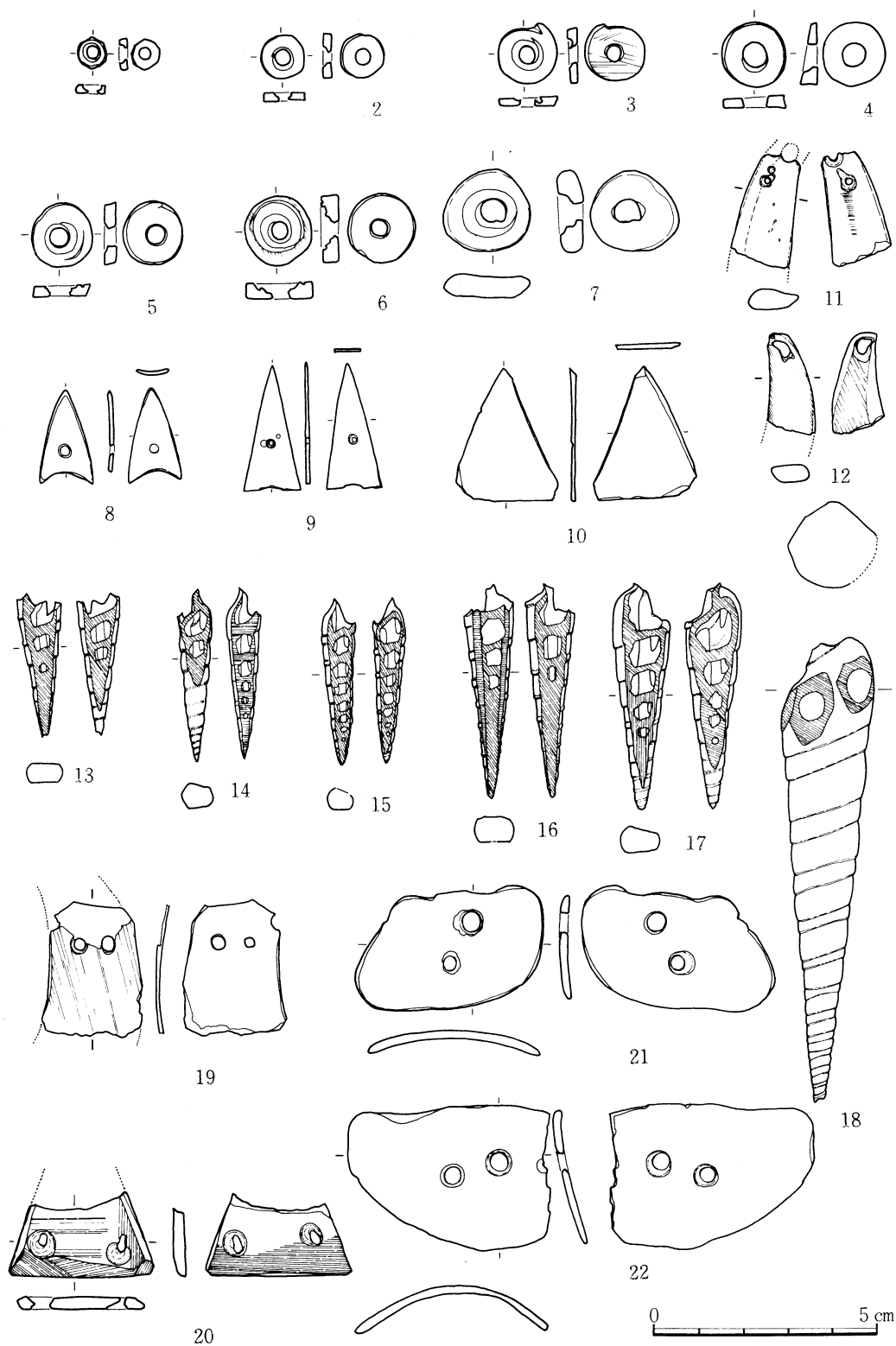
報告書No.	取り上げNo.	出土区	レベル(m)	重さ(g)	石 材	名 称
34	1797	A-30	6.68	237	砂岩	叩石
35	1064	A-29	7.22	271	砂岩	叩石
36	2152	Z-31	7.91	246	砂岩	叩石
37	2885	Z-31	7.44	237	輝緑岩	叩石?石斧状
38	1668	Z-30	6.69	143	砂岩	叩石
39	384	Z-31	7.89	183	砂岩	叩石?石斧状
40	1276	Z-29	6.62	463	輝緑岩	叩石
41	593	Z-29	8.11	202	粗粒砂岩(石英粒大きい)	叩石・磨石
42	377	Z-31	7.95	184	砂岩	叩石・磨石
43	3489	Z-33	7.60	448	砂岩	叩石
44	631	Y-30	7.98	311	砂岩	叩石
45	618	Y-30	8.07	331	砂岩	叩石
46	348	A-29	7.70	104	砂岩	叩石
47	4238	Z-32	6.37	238	砂岩	叩石
48	4746	A-32	6.98	226	砂岩	叩石・磨石・凹石
49	4245	Y-32	6.71	681	輝緑岩	叩石・磨石
50	—	A-32	—	283	砂岩	叩石 (クガニイシ?)
51	1673	Z-30	6.69	401	砂岩	叩石・磨石・凹石
52	1457	Z-30	6.99	828	ヒン岩	叩石・磨石・凹石
53	1330	Y-30	7.92	484	砂岩	叩石・凹石
54	2850	Z-32	7.12	697	砂岩	叩石・磨石・凹石
55	1576	Z-29	6.73	443	砂岩	叩石・磨石・凹石
56	3212	Z-32	7.47	409	砂岩(石英質)	叩石・磨石・凹石
57	4747	A-32	6.79	402	砂岩	叩石・凹石
58	2061	Z-31	7.71	861	砂岩(わりあいに粗粒)	叩石・磨石・凹石
59	784	Z-31	8.11	472	砂岩	叩石・磨石・凹石
60	3725	Z-32	7.25	303	砂岩(石英質,硬い,石英脈 付着)	叩石・凹石
61	3557	A-32	6.91	473	砂岩	叩石・凹石
62	3819	Y-33	—	365	砂岩	叩石・磨石・凹石

表37 下山田Ⅱ遺跡出土石器一覧表—5 (29~33区)

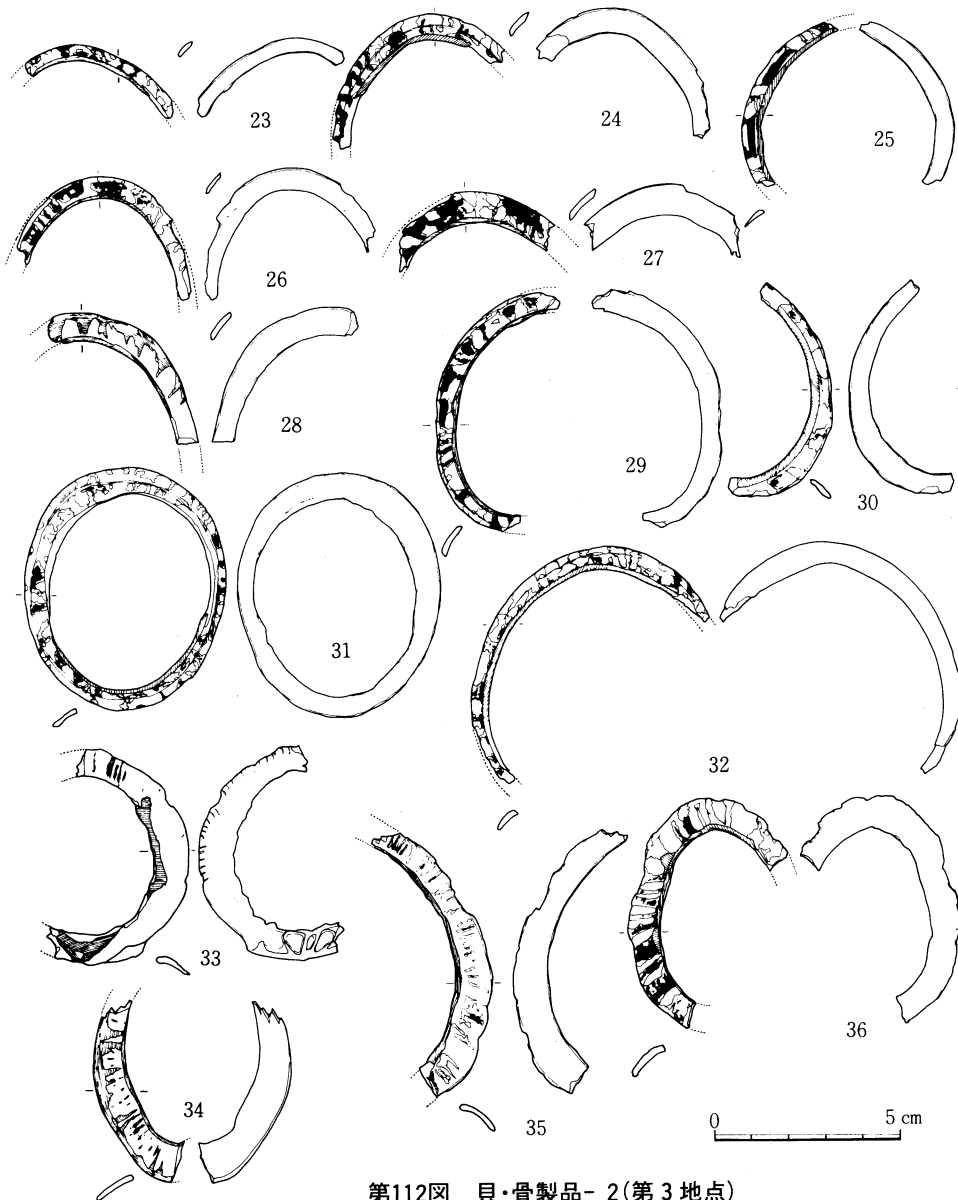
報告書No.	取り上げNo.	出土区	レベル(m)	重さ(g)	石 材	名 称
63	2798	Y-33	7.73	1078	砂岩(硬い)	叩石・磨石・凹石
64	3032	Z-32	7.11	1050	砂岩(硬い)	叩石・磨石・凹石
65	4244	Y-32	6.85	189	砂岩(硬い,雲母も含む)	磨石・叩石
66	4126	Z-32	8.08	388	砂岩	凹石
67	3274	Z-32	7.05	844	砂岩	叩石・磨石
68	1426	Y-30	7.32	1257	砂岩	叩石・磨石・凹石
69	1804	A-30	6.52	399	砂岩	叩石・磨石
70	3671	Z-32	7.15	523	砂岩(硬質,石英脈付着)	叩石・磨石
71	1919	A-32	7.28	413	砂岩	叩石・凹石
72	1427	Y-30	7.35	1065	火成岩?	叩石・磨石・凹石
73	1347	Y-30	7.61	1234	砂岩	磨石
74	—	11集石	—	356	輝緑岩(風化している)	叩石?石斧状
75	4021	A-32	6.57	194	砂岩	叩石・磨石
76	723	Y-32	8.02	223	砂岩(粗粒,石英粒大きい)	磨石
77	3488	Z-32	7.38	1345	砂岩	叩石・磨石
78	1311	Z-30	7.08	280	砂岩	叩石?石斧状
79	2206	Z-32	7.61	114	砂岩	砥石
80	1068	Z-29	7.28	112	輝緑岩?	叩石・磨石
81	691	A-31	7.19	157	輝緑岩	叩石・磨石
82	3930	Z-33	7.15	448	輝緑岩	叩石・磨石
83	763	Z-32	7.77	390	ホルンフェルス化した砂岩	叩石・磨石
84	1753	A-30	6.83	203	粗粒砂岩(石英質,硬い)	叩石・磨石・石斧状
85	424	Z-31	8.04	269	砂岩	叩石・磨石
86	4434	Z-31	6.45	296	砂岩	叩石・磨石
87	4721	Z-31	7.56	227	砂岩	叩石・磨石
88	4320	A-31	—	288	砂岩(石英質,硬い)	叩石・磨石・凹石
89	4397	31	—	2975	砂岩(石英脈付着)	クガニイシ
90	3501	Z-32	7.83	3261	砂岩(石英質)	石皿?
91	1856	A-30	5.93	5489	ヒン岩	台石

表38 下山田Ⅱ遺跡出土石器一覧表—6 (29~33区)

報告書No.	取り上げNo.	出土区	レベル(m)	重さ(g)	石 材	名 称
92	4396	Z-31	—	7245	ヒン岩	台石
93	4448	A-31	6.22	2300	砂岩	石皿
95	—	—	—	102	輝緑岩	石斧? (局部磨製)
96	4823	—	6.85	29	輝緑岩	石斧 (磨製)
98	2797	Y-33	7.72	202	ヒン岩	石斧 (磨製)
99	692	A-31	7.10	56	輝緑岩	石斧 (磨製)
100	4673	Z-31	7.56	119	輝緑岩	石斧 (局部磨製)
101	—	—	—	146	粘板岩	石斧 (打製)
102	817	Z-30	7.64	123	千枚岩	円盤状石器
103	1345	Y-30	7.24	412	輝緑岩	石斧 (打製)
104	878	A-30	6.93	105	粘板岩	剥片石器
105	1051	Z-29	7.17	16	砂岩	擦切石器?
106	1815	A-30	6.35	14	砂岩	擦切石器?
107	918	Y-30	7.99	11	砂岩	擦切石器?
109	4582	Z-30	7.19	34	砂岩	擦切石器?
110	1325	A-29	6.56	107	チャート	楔形石器
111	—	—	—	10	チャート	剥片



第111图 貝・骨製品-1(第3地点)



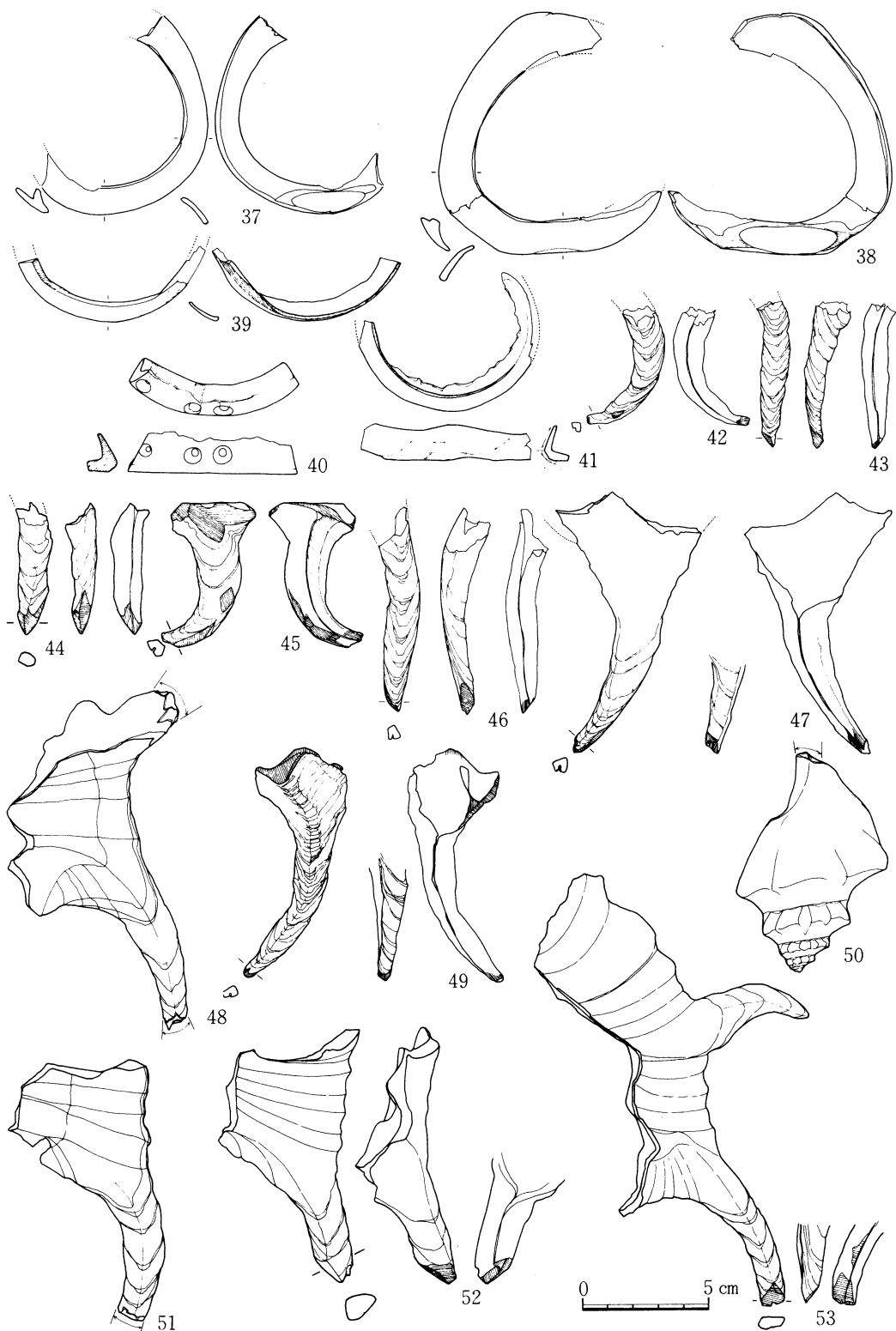
第112図 貝・骨製品- 2(第3地点)

5) 出土遺物 —— 貝製品・骨製品

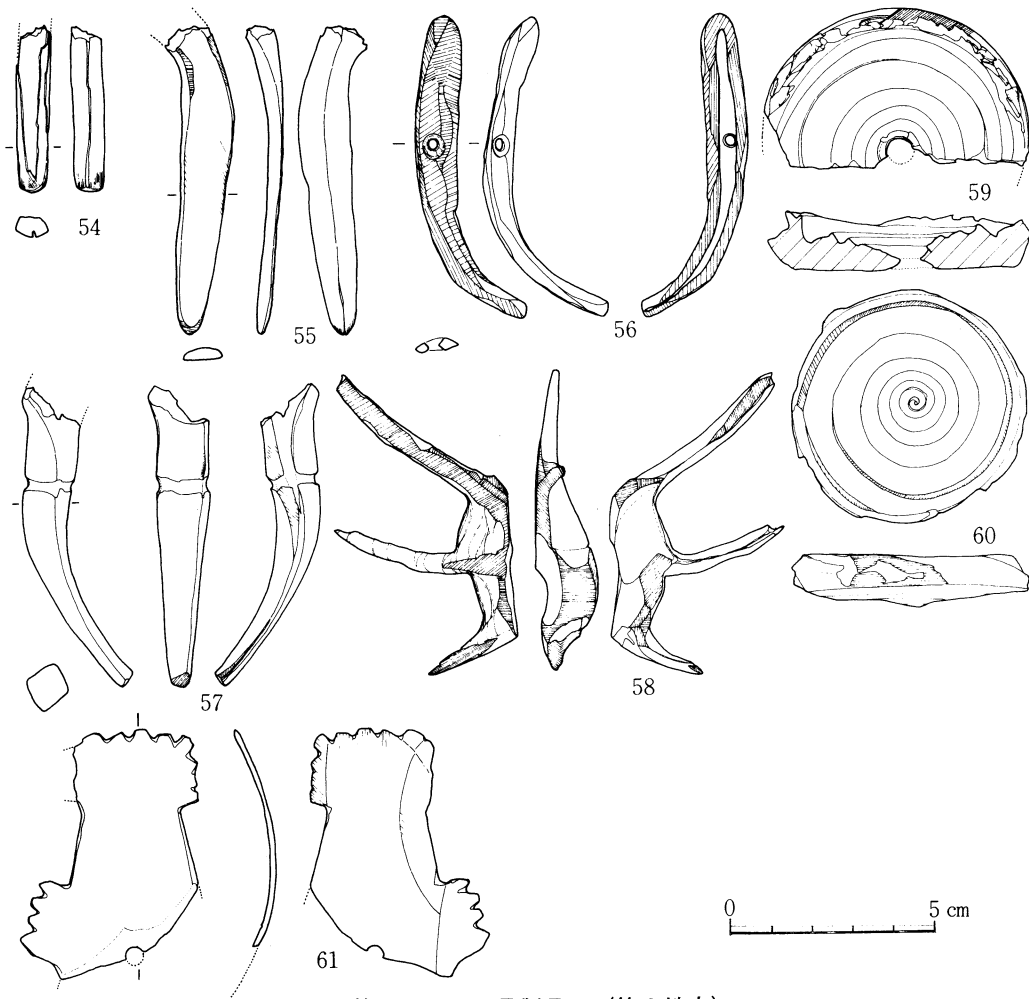
第3地点を中心に、各種多様の貝製品（貝製利器も含む）・骨製品（骨角器も含む）が出土している。

尚、出土品の中には、名称、用途及び素材の明らかにしえないものもあり、分類の都合上、便宜的に記した部分もかなりある。貝製品の場合、垂飾品と利器（容器も含む）に大別でき、骨製品も同様である。

貝製垂飾品は、イモガイの螺塔部に孔を有したビード状（貝小玉）製品・二枚貝を素材とし入念な研磨を加えて製品化した三角形有孔（無孔）垂飾品、タケノコガイの二面を研磨した。



第113图 貝·骨製品- 3(第3地点)



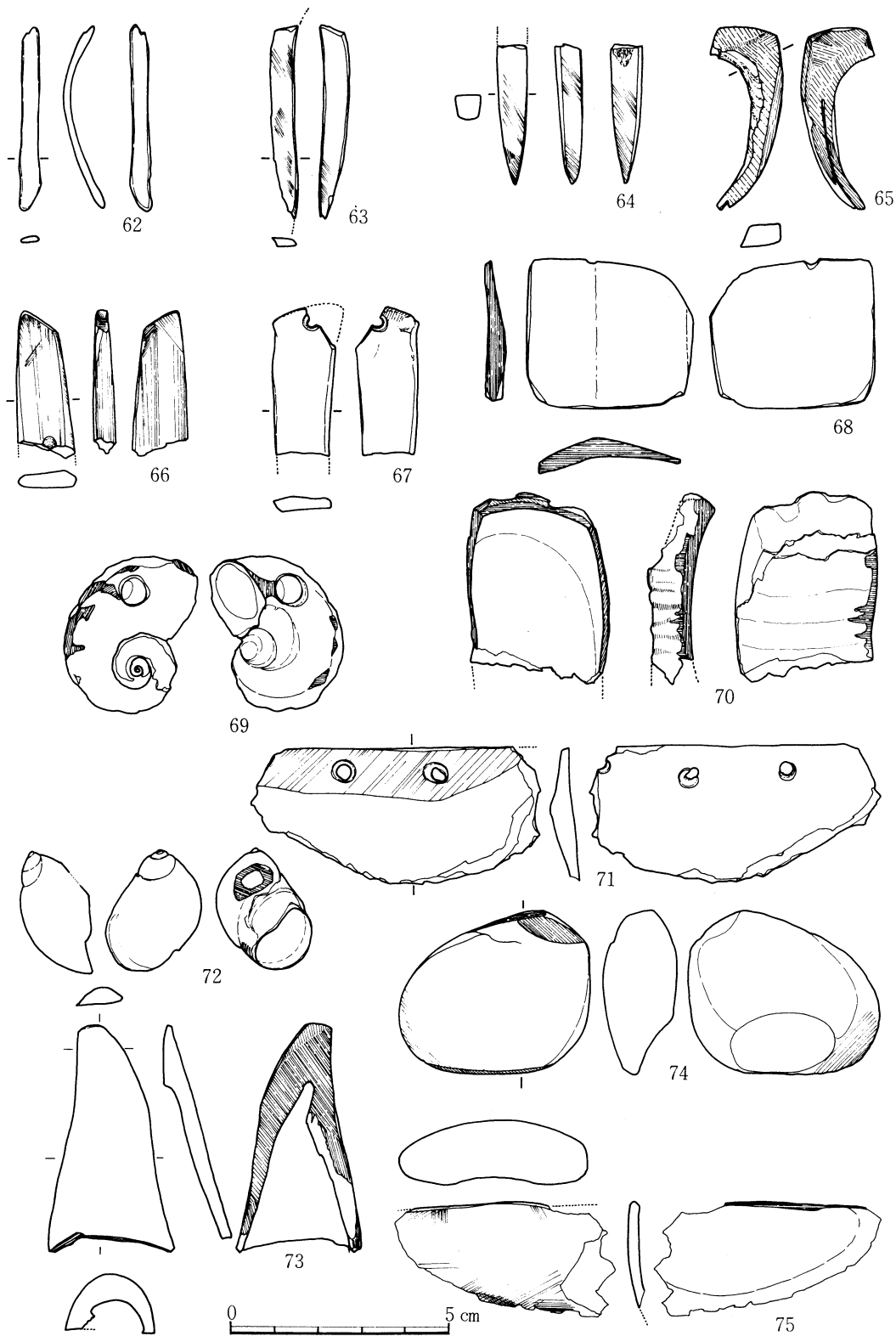
第114図 貝・骨製品- 4(第3地点)

巻貝製垂飾品、ヤコウガイ等の真珠層やメンガイを利用した有孔垂飾品。また、ダイミヨウイモガイやヒラサザエ・トミガイ等を研磨したものや、孔を穿った垂飾品等、オオツタノハ・ゴホウラ等の貝輪が見られる。

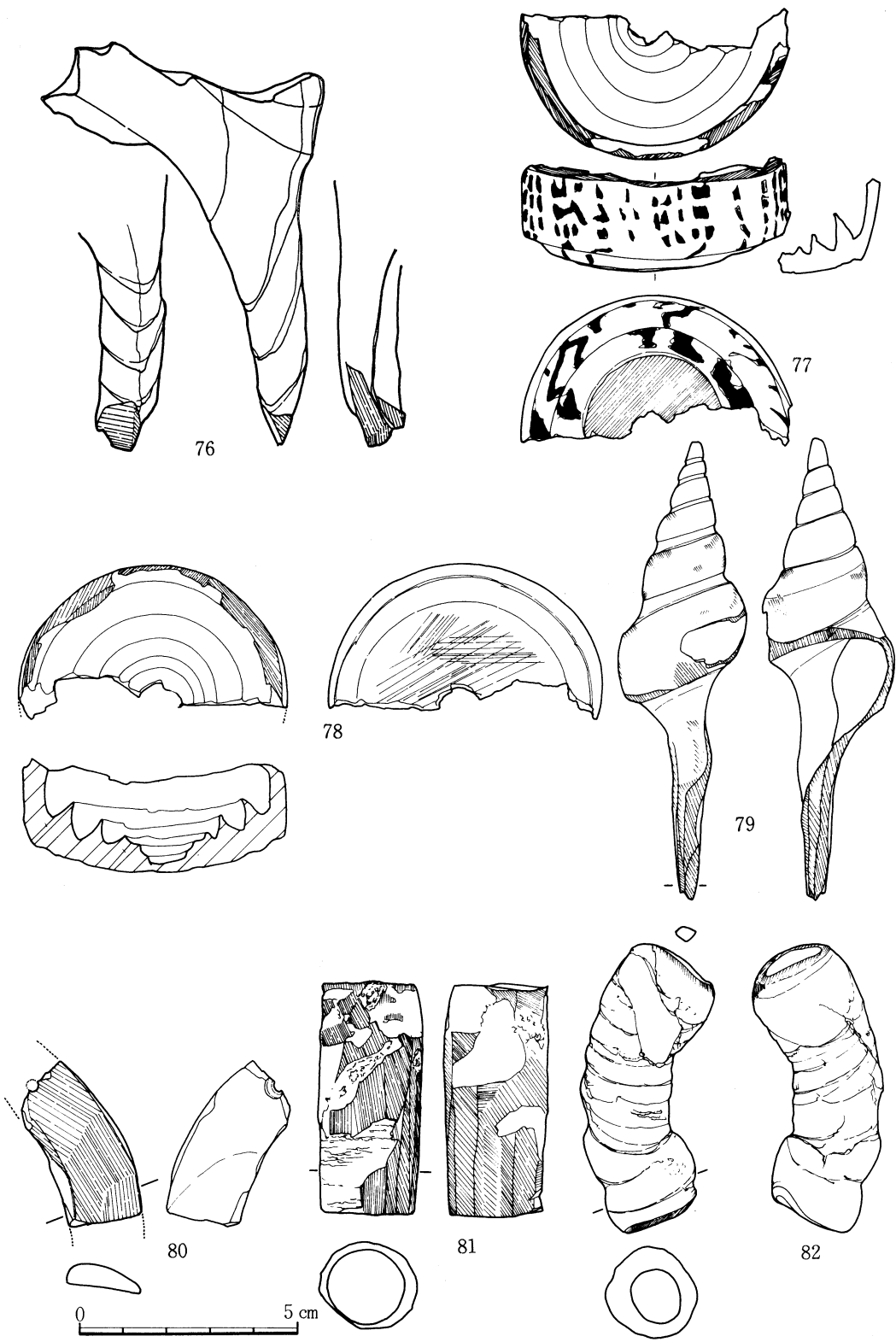
貝製利器では、水字貝の突起部の先端を加工し、刺突貝やノミ状製品としたもの、ヤコウガイの体層部を皿状に打割した後、研磨で仕上げた皿状容器や柄を取りつけたヒシヤク状容器・クモガイやアンボクロザメガイ等の殻軸を利用した匙状容器がみられる

その他、図示はしなかったが、ヤコウガイの体層部を皿状に打割り、周辺部を敲打製形しただけの粗製の容器が相当数出土している。

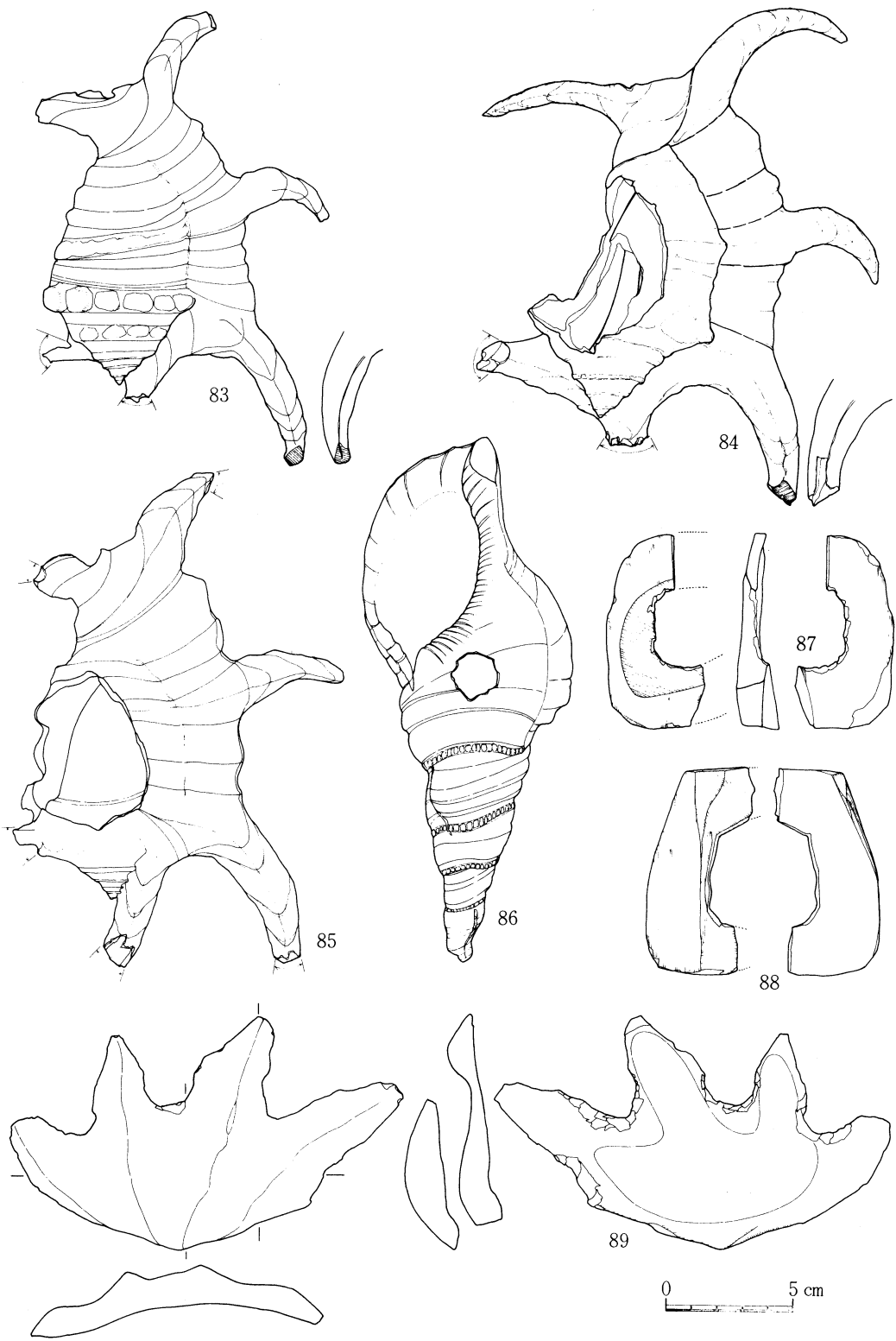
また、体層部に孔を穿った貝殻等も多く出土しているが、意図的に製品化するための作業痕跡が認められないとの判断に立ち、取り上げていない。86として図示したホラガイ製容器も内層近くに孔を1つ穿っているが、加熱や貫入等の痕跡は認められず、製品から除去するのがよいのかもしれない。同じように、図示したオオベッコウガサガイの貝輪の中にも、人為的なもの



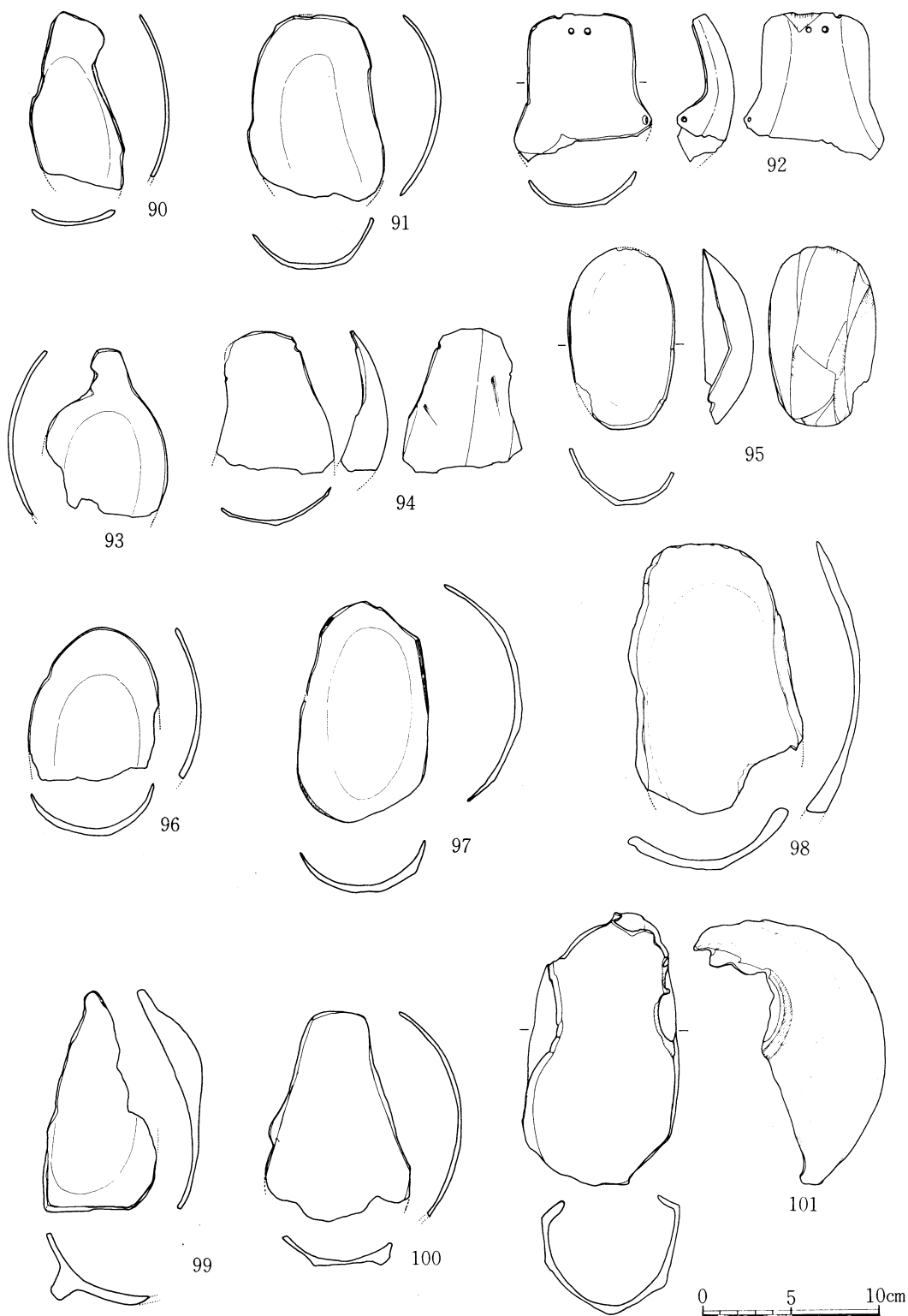
第115図 貝・骨製品- 5(第3地点)



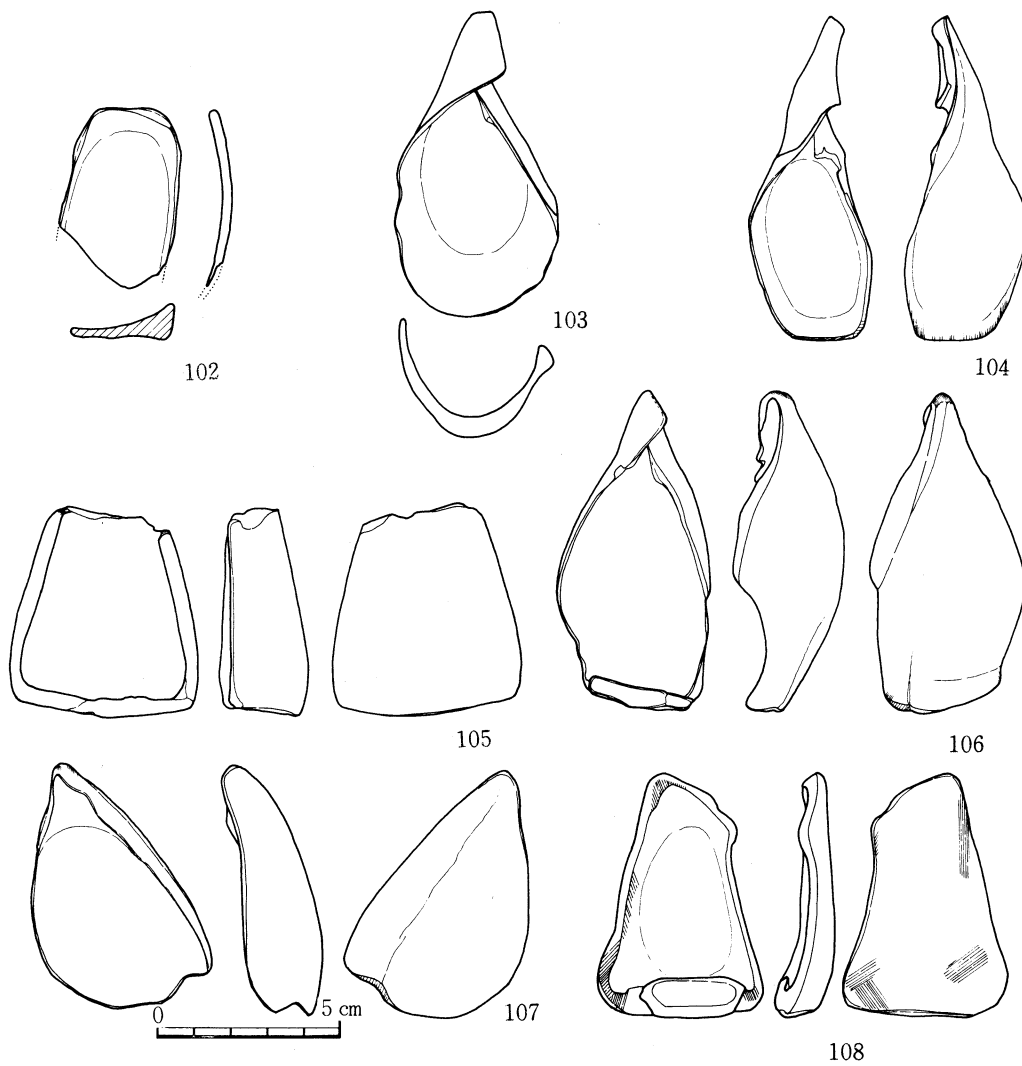
第116図 貝・骨製品- 6(第3地点)



第117図 貝・骨製品- 7(第3地点)



第118図 貝・骨製品- 8(第3地点)

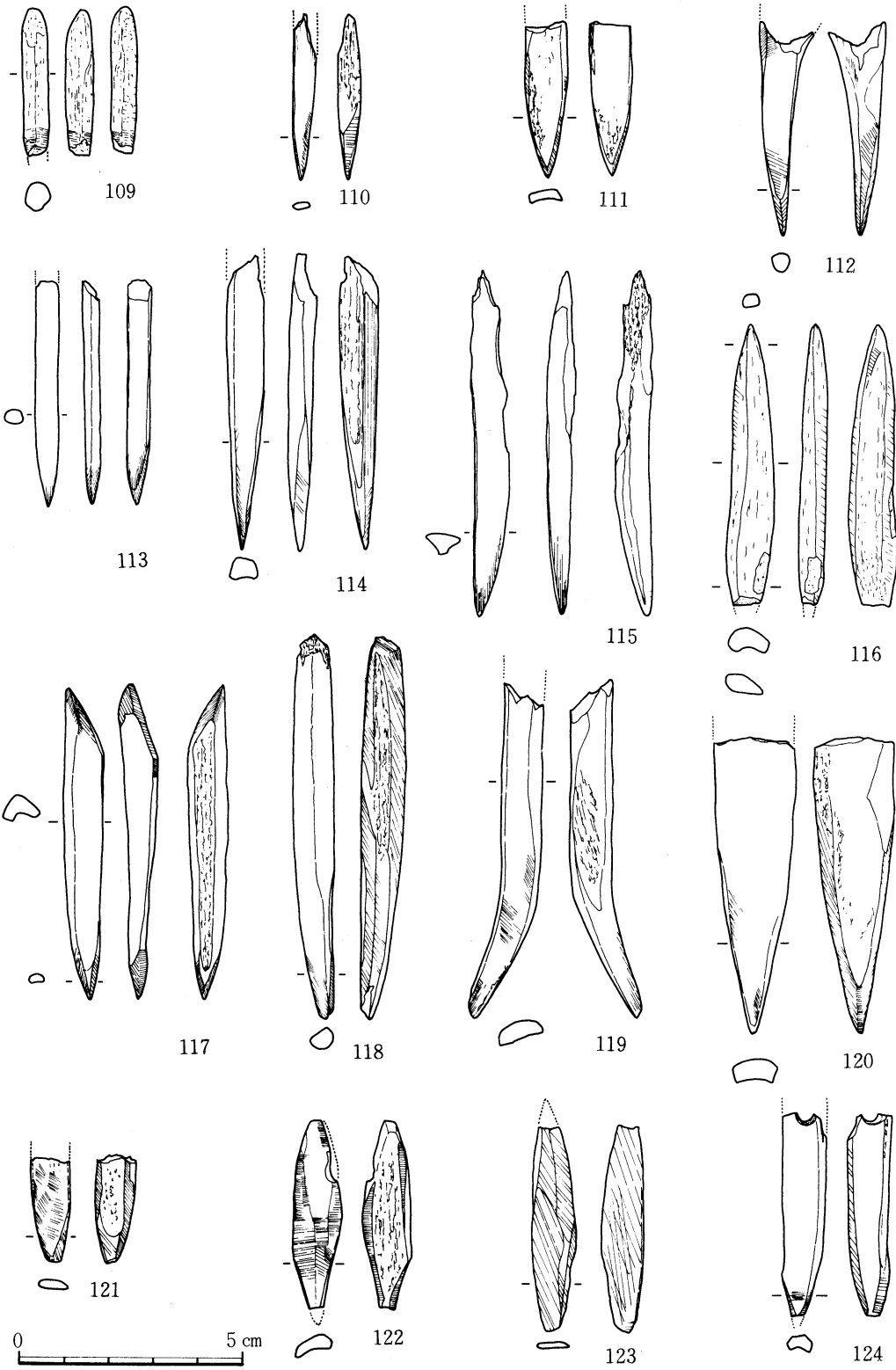


第119図 貝・骨製品- 9(第3地点)

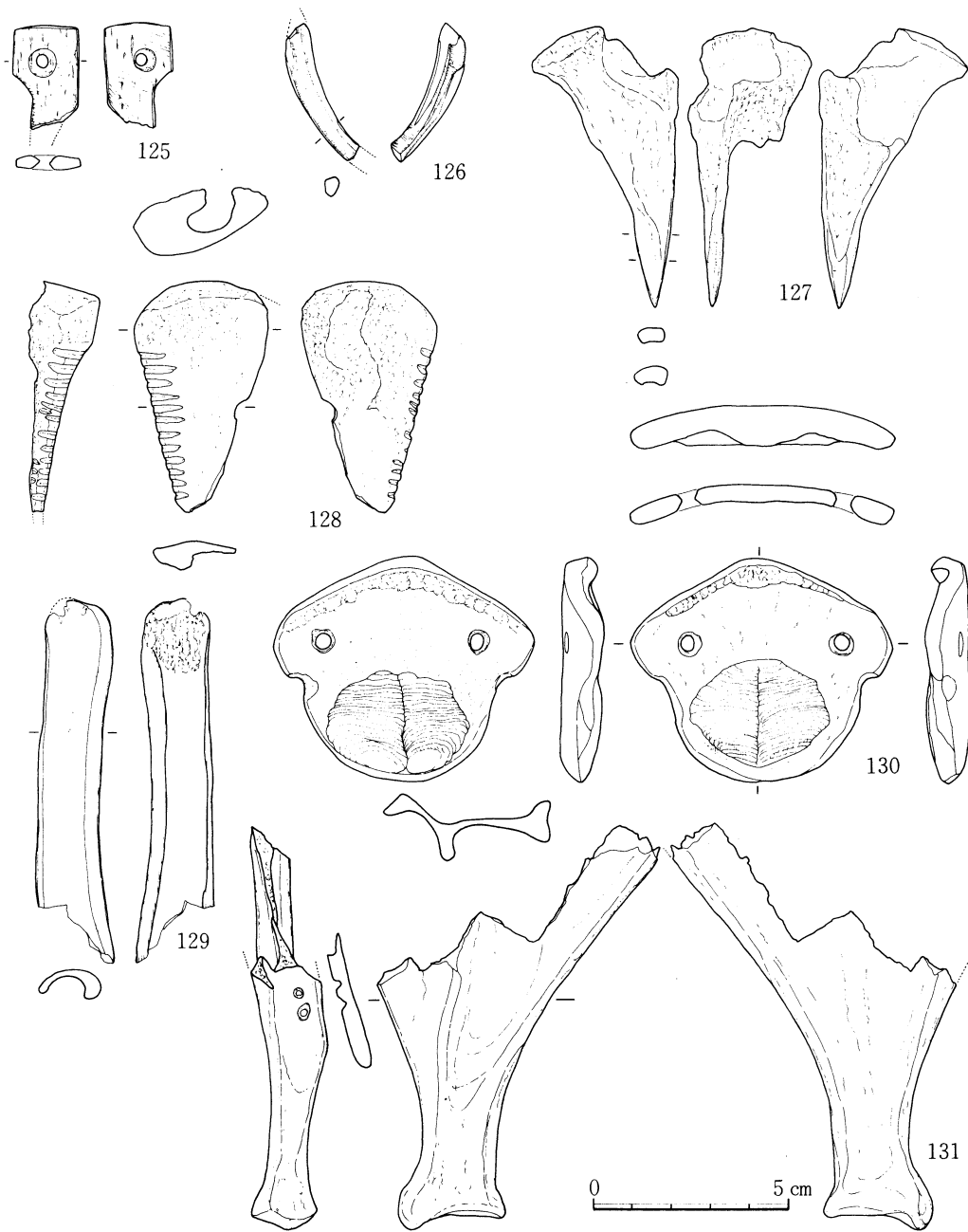
のでなく、自然に剥脱し、貝輪の形状を呈しているものもいくらかは含まれている可能性がある。

水字貝製利器の中で、突起だけを取りはずし、刺突具やメミ状刃部を持つものがある。これらに用いられた突起は、1番突起が3点、2番突起3点、3番突起0点、4番突起0点、5番突起1点、6番突起1点である。ここで、注目されることに2番突起を用いた3点の資料は、全て刺突具の形状を呈し、1番突起を用いたものは、刃部が直線的でノミ状の形状に仕上げられていることである。もともと、1番突起部は器内の厚い部分で、2番突起部は鋭く直線的な形状を持っており、それらを使用目的に応じて有効に利用したことも考えられる。

検出した水字具の中に、各突起が破損した資料がかなりの量含まれている。詳細なデータは出ていないが、破損状態を観察すると、突起部をハンマー様に使用した痕跡があり、再考の必要のある資料である。85は、その1例である。



第120图 貝・骨製品-10(第3地点)

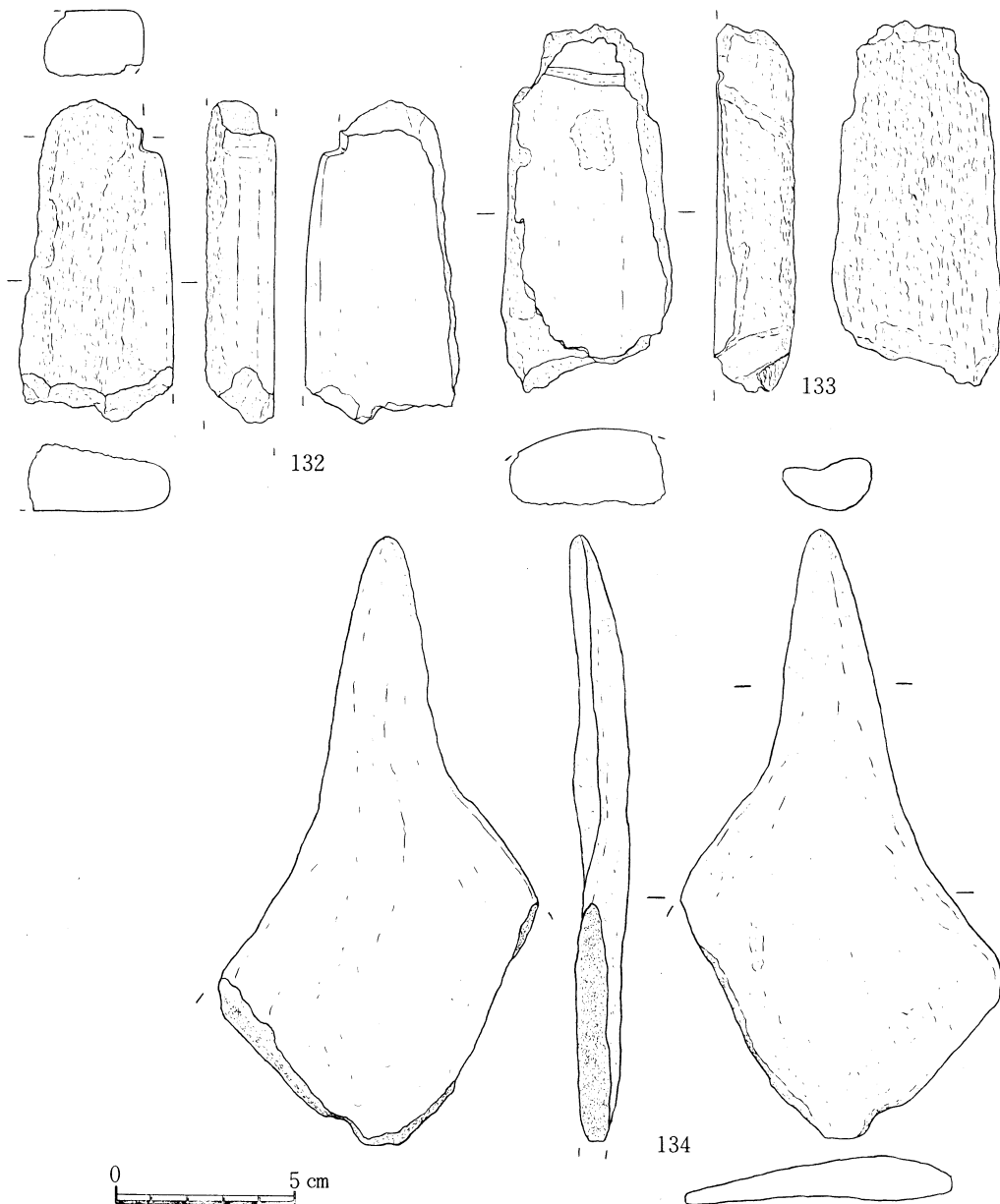


第121図 貝・骨製品-11(第3地点)

81・82の使用目的は、明らかでないが、オオヘビガイ(?)の外殻部をていねいに研磨し筒状に仕上げている。

87・88のゴホウラ製の貝輪の内側部分は、手持ちの砥石で磨いたと思われる研磨痕を残している。

21・22のメンガイは、未だに色を保ち、燈色が目立つ。



第122図 貝・骨製品-12(第3地点)

骨製品では、垂飾品、装飾品よりも、いわゆる利器の方を多く検出した。

109は、下半部に横位の線状痕が観察されるもので、骨鏃の可能性が高い資料で、南島では貴重な資料である。その他、骨針・骨錐・骨製尖頭器・ヘラ状製品等があり、中でも116の骨製尖頭器は、厚みのある器体で先端部は尖り、下部は扁平をなすもので、鏃・刺突具的機能を備えたものである。132・133は、海獣の肋骨を利用したと思われるもので、抉り加工や線刻が施された刀形を呈した刀形骨製品であり貴重な資料と言える。垂飾品及び装飾品では、側縁部に連続した刻みをもち、さらに、中央部に孔を穿ったもの、魚の顎骨に加工を加え、2ヶ所に孔を穿ったものなど特殊とも言える製品を検出した。

表-39 下山田Ⅱ遺跡出土貝製品・骨製品観察表—1 (No.1)

No.	取上No.	出土区	レベル (m)	名称	素材	備考
1	—	—	—	貝製垂飾品	イモガイ	イモガイの螺塔部に1孔を穿つもので、ビード状を呈す。上・下面研磨。周縁部に研磨による面加工。 (高さ)1.5mm×(幅)7.0mm
2	1542	Z-30	7.82	貝製垂飾品	イモガイ	イモガイの螺塔部に1孔を穿つもので、ビード状を呈す。上・下面研磨。周縁部に研磨。 (高さ)2.0mm×(幅)10.5mm
3	2861	Y-32	7.79	貝製垂飾品	イモガイ	イモガイの螺塔部に1孔を穿つもので、ビード状を呈す。上・下面研磨。周縁部に研磨。 (高さ)2.0mm×(幅)13.0mm
4	3263	Y-31	7.48	貝製垂飾品	イモガイ	イモガイの螺塔部に1孔を穿つもので、ビード状を呈す。上・下面研磨。周縁部に研磨。 (高さ)2.5mm×(幅)14.5mm
5	—	—	—	貝製垂飾品	イモガイ	イモガイの螺塔部に1孔を穿つもので、ビード状を呈す。上・下面研磨。周縁部に研磨。 (高さ)2.5mm×(幅)14.5mm
6	4820	—	6.44	貝製垂飾品	イモガイ	イモガイの螺塔部に1孔を穿つもので、ビード状を呈す。上・下面研磨。周縁部に研磨、加熱で黒灰色に変化 (高さ)3.5mm×(幅)15.5mm
7	3046	Z-32	7.21	貝製垂飾品	イモガイ	イモガイの螺塔部に1孔を穿つもので、ビード状を呈す。上・下面研磨(?)。周縁部に研磨(?)。 (高さ)5.5mm×(幅)19.5mm
8	2678	Z-33	7.39	貝製垂飾品	二枚貝?	底辺はゆるやかな凹形。両側縁は内側より研磨。三角形有孔垂飾品。 (長さ)18.5mm×(幅)11.5mm
9	2523	A-32	7.32	貝製垂飾品	二枚貝	底辺は中央部が凹形。両側縁は平坦研磨。穿孔は3ヶ所に試み1ヶ所貫通。三角形有孔垂飾品。 (長さ)26.5mm×(幅)13.0mm
10	2352	Y-31	7.84	貝製垂飾品?	二枚貝	略三角形。各側縁は平坦研磨。 (長さ)29.0mm×(幅)23.5mm
11	445	Z-31	7.75	貝製垂飾品	?	有孔垂飾状。穿孔は2個以上。猪牙状垂飾品の模造か?
12	1964	A-32	7.17	貝製垂飾品	?	有孔垂飾状。穿孔は1個。猪牙状垂飾品の模造か?
13	3107	A-32	7.03	巻貝製垂飾品	タケノコガイ	螺塔部の長軸に沿って表裏から研磨し、平坦面を形成。
14	3811	A-31	6.68	巻貝製垂飾品	タケノコガイ	螺塔部の長軸に沿って表裏から研磨し、平坦面を形成。前溝部を残す 39.0mm
15	705	Z-32	7.49	巻貝製垂飾品	タケノコガイ	螺塔部の長軸に沿って表裏から研磨し、平坦面を形成。前溝部を残す 36.5mm
16	3475	Z-32	7.02	巻貝製垂飾品	タケノコガイ	螺塔部の長軸に沿って表裏から研磨し、平坦面を形成。前溝部を残す 49.5mm
17	3794	A-32	6.73	巻貝製垂飾品	タケノコガイ	螺塔部の長軸に沿って表裏から研磨し、平坦面を形成。前溝部を残す 103.0mm
18	4850	—	6.22	巻貝製垂飾品	タケノコガイ	体層部の内唇側に円形の穿孔2個。研磨による穿孔。
19	355	A-32	7.66	有孔垂飾品	ヤコウガイ?	上・下端は欠落。2個の穿孔。真珠層を持つもので光沢あり。弯曲。
20	590	Z-29	7.98	有孔垂飾品	?	頂部欠落。2個の穿孔。穿孔は両面より実施し、くいちがいを生じている。入念な研磨。側縁部では面取り。
21	—	Z-31	—	有孔垂飾品	メンガイ	穿孔は両面より実施。側縁部は研磨整形。 (長さ)43.0mm×(幅)27.0mm
22	—	Z-31	—	有孔垂飾品	メンガイ	穿孔は両面より実施。側縁部は研磨整形。右側欠落。 (長さ)46.0mm×(幅)33.5mm
23	904	A-30	6.83	貝輪?	オオベッコウ ガサガイ	自然剝脱の可能性もある。
24	638	Y-30	7.93	貝輪	オオベッコウ ガサガイ	上面を研磨面と判断。
25	1489	Z-30	6.93	貝輪	オオベッコウ ガサガイ	上面を研磨面と判断。

表-40 下山田Ⅱ遺跡出土貝製品・骨製品観察表—2 (No.2)

No	取上No	出土区	レベル (m)	名称	素材	備考
26	3491	Z-32	7.61	貝輪?	オオベッコウ ガサガイ	自然剥脱の可能性もある。
27	3934	Z-32	7.18	貝輪	オオベッコウ ガサガイ	上面を研磨面と判断。
28	2017	A-32	7.04	貝輪	オオツタノハ	入念な研磨により放射筋を取り去りツルツル。
29	3724	Z-32	7.17	貝輪	オオツタノハ	上面を研磨面と判断。
30	2650	Z-31	7.48	貝輪?	オオツタノハ	自然剥脱の可能性あり。
31	484	A-31	7.41	貝輪?	オオツタノハ?	自然剥脱の可能性あり。
32	350	Y-30	8.25	貝輪	オオツタノハ	上面を研磨面と判断。
33	1467	Z-30	6.91	貝輪	メンガイ	鋭歯(ちょうつがい)はそのまま残される。殻頂まで加工される。敲打整形した後に研磨。 高さ55.0mm
34	2058	Z-31	7.57	貝輪	オオツタノハ	入念な研磨により放射筋を取り去りツルツル。
35	3583	A-32	6.77	貝輪	オオツタノハ	入念な研磨により放射筋を取り去りツルツル。
36	1394	A-30	7.02	貝輪	オオツタノハ	研磨により放射筋の一部を取り去る。
37	—	Z-30	—	貝輪	ゴホウラ	
38	—	Z-30	—	貝輪	ゴホウラ	
39	632	Y-30	7.98	貝輪	サラサバテイラ	外殻は全面に研磨。殻底は敲打整形がみられる。殻底側のコーナー部の研磨は顕著で丸味をもつ。
40	3493	Z-32	7.00	垂飾品	サラサバテイラ	殻底部を使用し側縁は切断。外殻、切断面、底の内側は入念に研磨。 3個の孔はすべて両面より穿つ。 64mm
41	2501	Z-32	7.55	貝輪	サラサバテイラ	外殻は全面に研磨。殻底とコーナー部は特に入念に施す。
42	8209	Z-21	7.58	水字貝製利器	スイジガイ	5番突起? 刺突具と思われ、裏面と側縁に磨耗痕が認められる。
43	3403	A-32	6.81	水字貝製利器	スイジガイ	2番突起。裏面と左側縁に研磨面があり、片刃を呈す。
44	1295	Y-30	8.01	水字貝製利器	スイジガイ	2番突起? 全周より研磨。ポイント状の先端部を呈す。刺突具?
45	—	A-26	—	水字貝製利器	スイジガイ	6番突起? 切断面は入念に研磨。側縁部も入念。
46	—	Z-30	—	水字貝製利器	スイジガイ	2番突起? 43と同様の加工を施す。片刃。片刃の先端部に欠損(剥離痕)がみられる。
47	4590	A-30	6.67	水字貝製利器	スイジガイ	1番突起。敲打による破損痕。やや磨耗。
48	—	—	—	水字貝製利器	スイジガイ	1番突起。敲打による破損痕。
49	2776	Y-33	7.81	水字貝製利器	スイジガイ	1番突起。切断面に研磨。先端部は破損痕。
50	4433	Z-31	—		ミガキボラ	殻軸を敲打具(ハンマー)として使用したと思われる。敲打による破損がみられる。

表-41 下山田Ⅱ遺跡出土具製品・骨製品観察表-3 (No.3)

No.	取上No.	出土区	レベル (m)	名 称	素 材	備 考
51	—	—	—	水字貝製利器	スイジガイ	1番突起。先端部が破損。その他加工なし。
52	—	—	—	水字貝製利器	スイジガイ	1番突起。裏面と左側縁に研磨面。右側縁部は破損。刺突具か？
53	4592	A-31	6.63	水字貝製利器	スイジガイ	1番突起。縦刃タイプ。表・裏よりノミ状に加工。研磨は両面とも横位。使用痕が残る。
54	698	Z-32	7.71	水字貝製利器	スイジガイ	突起部を取り外し、外殻部を全面研磨。先端部は平坦面をなしている加熱のため灰色に変化。
55	2301	Z-31	7.63	水字貝製利器	スイジガイ	突起部を取り外し、全面研磨。裏面は平坦面に仕上げる。ヘラ状の形状に造り出す。
56	2302	Z-31	7.91	水字貝製利器？	スイジガイ	突起部を取り外し、全面研磨。裏面は溝を残して研磨加工。表面は研磨による面取り加工。穿孔は表より。
57	3389	—	—	水字貝製利器	スイジガイ	突起部を取り外し、全面研磨。外殻は残らない。先端部は平坦面。結束状の挟入加工。
58	4037	Y-32	7.09	利 器	サソリガイ	3ヶ所の突起部を利用している。切断面研磨。突起部の裏面は先端部のみ研磨。表面は研磨により平坦面形成。
59	4419	Y-32	7.88	垂 飾 品？	ダイミョウイモガイ	螺塔部を取り外し、殻底部を使用したもの。研磨加工。中央部は穿孔したと思われる。
60	537	Z-29	7.60	垂 飾 品	ダイミョウイモガイ	螺塔部を取り外し、殻底部を使用したもの。研磨加工。
61	2500	Y-31	7.79	ヒシヤク状容器	ヤコウガイ	真珠層を加工。研磨による挟入加工。全面研磨。
62	3722	Z-32	7.16	？	ヤコウガイ？	全面研磨仕上げ。 41.5mm
63	—	Z-31	—	？	ヤコウガイ？	半損品、研磨仕上げ。
64	729	Z-32	7.92	利 器	ヤコウガイ	全面研磨。研磨による4面の面取り加工。先端部は四角。錐の頂部に相当する。刺突具か？
65	9084	—	8.51	利 器	サソリガイ	突起部の一部を利用。全面研磨。研磨による面取り加工。 41.0mm
66	3538	A-32	7.06	利 器	サソリガイ？	全面研磨。ヘラ状の形状を呈す。穿孔の痕跡があるが貫通せず。
67	—	Y-32	—	垂 飾 品	サソリガイ？	全面研磨。穿孔は両面から。
68	3336	Z-31	7.51	垂 飾 品	二枚貝？	完形品。全面加工。真珠層で整形。
69	—	Z-30	—	垂 飾 品	ヒラサザエ	殻頂部を取り外し_____に孔を穿つ。_____も研磨。
70	4375	Z-31	6.58	皿状容器	ヒラサザエ	全周加工。外殻部も研磨。小型の皿状に仕上げる。
71	—	—	—	垂 飾 品	カ キ	外殻部研磨。2個の孔は両面より穿つ。
72	2249	Y-31	7.47	垂 飾 品	トミガイ	腹部に研磨による孔を穿つ。
73	—	Y-31	7 層	利 器	イモガイ	半截した後、裁断面を研磨。全面研磨。 50mm
74	2335	Z-31	7.34	？	シャコガイ？	全面研磨。
75	2449	Z-31	7.70	利 器？	ヤコウガイ	上位に稜を設け、研磨。目的不明。

表-42 下山田Ⅱ遺跡出土具製品・骨製品観察表—4 (No.4)

No	取上No	出土区	レベル (m)	名 称	素 材	備 考
76	—	A-21	—	利 器	イトマキボラ	殻口を取り外し、螺軸は縦位の研磨。先端部欠損。 104.0mm
77	7007	A-26	6.50	垂 飾 品	ダイミョウ イモガイ	螺塔部を取り外し、殻底部を利用。底部、切断面研磨。
78	—	—	—	垂 飾 品	ダイミョウ イモガイ	螺塔部を取り外し、殻底部を利用。底部、切断面研磨。
79	8217	Z-21	7.66	水字貝製利器	スイジガイ	1番突起。縦刃に仕上げる。
80	—	Z-31	—	垂 飾 品	スイジガイ	表面研磨。穿孔は裏面から。
81	8057	A-23	7.22	垂 飾 品	ヘビガイ	切断面研磨。表面は研磨による面取り加工。 (長さ)52.0mm×(径)21.5mm
82	8057	A-23	7.22	垂 飾 品	ヘビガイ	切断面研磨。 (長さ)64.5mm×(径)23.0mm
83	1249	Z-29	7.08	水字貝製利器	スイジガイ	1番突起研磨。2、3番突起敲打による欠損。
84	457	Z-31	—	水字貝製利器	スイジガイ	1番突起研磨。2、3番突起敲打による欠損。
85	—	—	—	水字貝製利器	スイジガイ	1、2、3、4、5番突起敲打による欠損。
86	3724	Z-32	7.17	ホラガイ容器?	ホラガイ	内唇近くに1孔を穿つ。加熱痕跡は認めず。
87	—	Z-30	—	貝 輪	ゴホウラ	全面研磨。内側縁部は敲打加工。
88	—	Z-31	—	貝 輪	ゴホウラ	全面研磨。内側縁部は敲打による一次加工の後、研磨。
89	4489	A-31	7.84	利 器	シャコ	ヒレを全て取り去り、その後研磨。凹部は剝離加工。
90	3878	Z-33	7.35	ヒシヤク状容器	ヤコウガイ	精製 (小)
91	4826	—	6.46	ヒシヤク状容器	ヤコウガイ	精製 (大)
92	2838	—	—	ヒシヤク状容器	ヤコウガイ	精製 (大) 有孔
93	3653	Z-32	7.44	ヒシヤク状容器	ヤコウガイ	精製 (大)
94	4470	Z-31	7.90	ヒシヤク状容器	ヤコウガイ	精製 (大)
95	4553	A-31	6.79	皿状容器	ヤコウガイ	精製 (大)
96	493	A-30	7.14	皿状容器	ヤコウガイ	精製 (大)
97	3543	Z-32	7.60	皿状容器	ヤコウガイ	粗製 (大)
98	—	Z-32	—	皿状容器	ヤコウガイ	粗製 (大)
99	496	A-30	7.15	ヒシヤク状容器	ヤコウガイ	粗製 (大)
100	3436	Y-32	7.76	ヒシヤク状容器	ヤコウガイ	粗製 (大)

表-43 下山田Ⅱ遺跡出土具製品・骨製品観察表— 5 (No. 5)

No	取上No	出土区	レベル (m)	名 称	素 材	備 考
101	2778	Z-32	7.39	皿状容器	ヤコウガイ	精製 (大)
102	835	Z-30	7.64	皿状容器	ヤコウガイ	粗製 (小)
103	4733	Z-32	6.50	匙状容器	クモガイ	殻軸利用。
104	1434	Z-30	7.34	匙状容器	クモガイ	殻軸利用。
105	—	—	—	匙状容器	アンボンク ロザメガイ	殻軸利用。
106	—	—	—	匙状容器	?	殻軸利用。
107	919	Z-29	7.78	匙状容器	?	殻軸利用。
108	577	A-29	7.25	匙状容器	イモガイ	
109	1908	A-32	7.36	骨 鏃		寸づまりの棒状を呈し、先端が尖る。下位に線状痕をもつ。この下位を基部に見立てるなら、骨鏃として捉えることができる。
110	1791	A-30	6.32	骨 錐 骨 針?		先端が尖る。骨の内面をのぞかせ、全形はかなり細い。
111	3704	Z-32	7.37	へら状製品 骨製尖頭器?		先端が尖り板状を呈す。刺突具あるいはへら状道具の先端部分他が考えられる。
112	946	A-30	7.13	骨 錐 骨 針		先端が尖り、他端がふくらむ。針、錐といった工具であろう。上位破損面に穿孔を思わせる部分を見るものの判然としない。
113	1167	A-30	6.47	骨 針 骨製尖頭器?		先端が尖る。細長い棒状の形態が特徴的である。針、錐といった工具か?
114	1969	Z-31	7.38	骨製尖頭器		先端が尖り、厚みももたせてある。裏面に髓空部をみせる。
115	2882	Y-32	7.11	骨製尖頭器?		先端が尖る。細長くやや弯曲する。針、錐といった工具か? 髪針の軸部の形態にも似るが、本遺跡に髪針完形品はない。
116	4607	Z-31	6.78	骨製尖頭器		先端が尖り、厚みのある器体。裏面には髓空部のくぼみをみせる。下位は扁平。形態からヤス・鏃といった狩猟、漁撈用の刺突具も想起される。その場合、下位の形状は柄との装着に適切なものといえよう。
117	4338	Z-31	6.86	骨製尖頭器 骨 錐?		先端尖り、厚みももたせてある。後端太い。裏面に髓空部をみせる。
118	4659	Z-31	6.71	骨 錐		
119	1470	Z-29	6.83	弯曲刺具		
120	1400	Y-30	7.80	骨 錐		
121	4578	Z-30	7.60	へら状製品 骨 鏃?		下位がしまり、小型の葉形を呈す。板状の骨鏃も思わせるが判然としない。あるいは工具か?
122	680	A-31	7.10	へら状製品		下位がしまり、小型の葉形を呈す。板状の骨鏃も思わせるが判然としない。あるいは工具か?
123	4733	Z-32	6.50	へら状製品		下位がしまり、小型の葉形を呈す。板状の骨鏃も思わせるが判然としない。あるいは工具か?
124	1541	Z-30	6.86	針状骨製品		先端に向けて絞込まれ、尖る様である。他端に穿孔もみられる。縫い針、編み針のような道具を想起させる。
125	3204	Z-31	7.46	装飾品?		骨素材を板状に仕上げ、さらに穿孔を施す。髪針の頭部の可能性もあるが、判然としない。

表-44 下山田Ⅱ遺跡出土貝製品・骨製品観察表—6 (No.6)

No	取上No	出土区	レベル (m)	名称	素材	備考
126	803	Z-30	7.60	不明品		表面にエナメル質を残す。獣歯か？ 一部、加工痕をみせる
127	4709	Z-32	6.53	骨 錐		上位に関節部分を残し、下位は半截され、さらに丁寧な整形により尖る。
128	3162	Z-31	7.13	装飾品？		獣骨製で板状をなす。側縁に刻み、中央に穿孔をもつ。髪針の頭部の可能性もあるが判然としない。
129	2030	Z-31	7.03	骨 篋？		獣骨を半截したもので、半截部分もよく磨かれている。ヘラ状の道具か？
130	2910	Z-31	7.28	垂飾状製品		魚類顎骨(ハリセンボン?)に2ヶ所の穿孔を持つものである。表裏に加工痕も残す。
131	1274	—	—	刺突痕をもつ 肩甲骨		獣骨の肩甲骨に貫通しない2点の孔が観察される。狩猟時、あるいは呪術的行為の痕跡か？
132	2787	Y-33	7.72	骨 刀 (刀形骨製品)		多孔質の海獣骨を素材とする。 132は片側が鈍い稜状をなし、刀形を呈する。133は類品か？共に表面が黒く焼けている。また、132は片側に挟りが、133は横位線刻がみられる。
133	3331	Y-32	7.84	骨 刀 (刀形骨製品)		
134	—	A-26	—	骨 篋？		幅広の骨素材から作り出され、先端が鈍く尖る。ヘラ状の道具か？

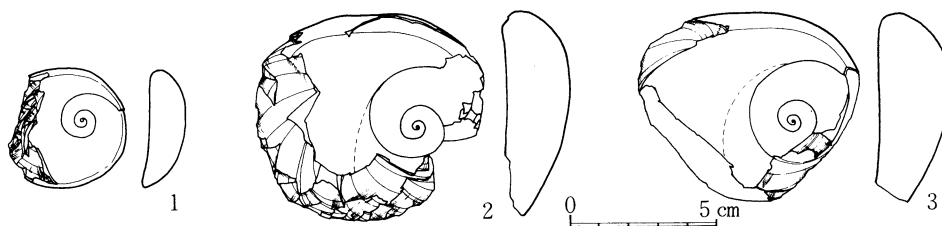
6) 出土遺物—螺蓋製貝斧 (第123~129図)

総数 180点程出土し、115点について図示している。

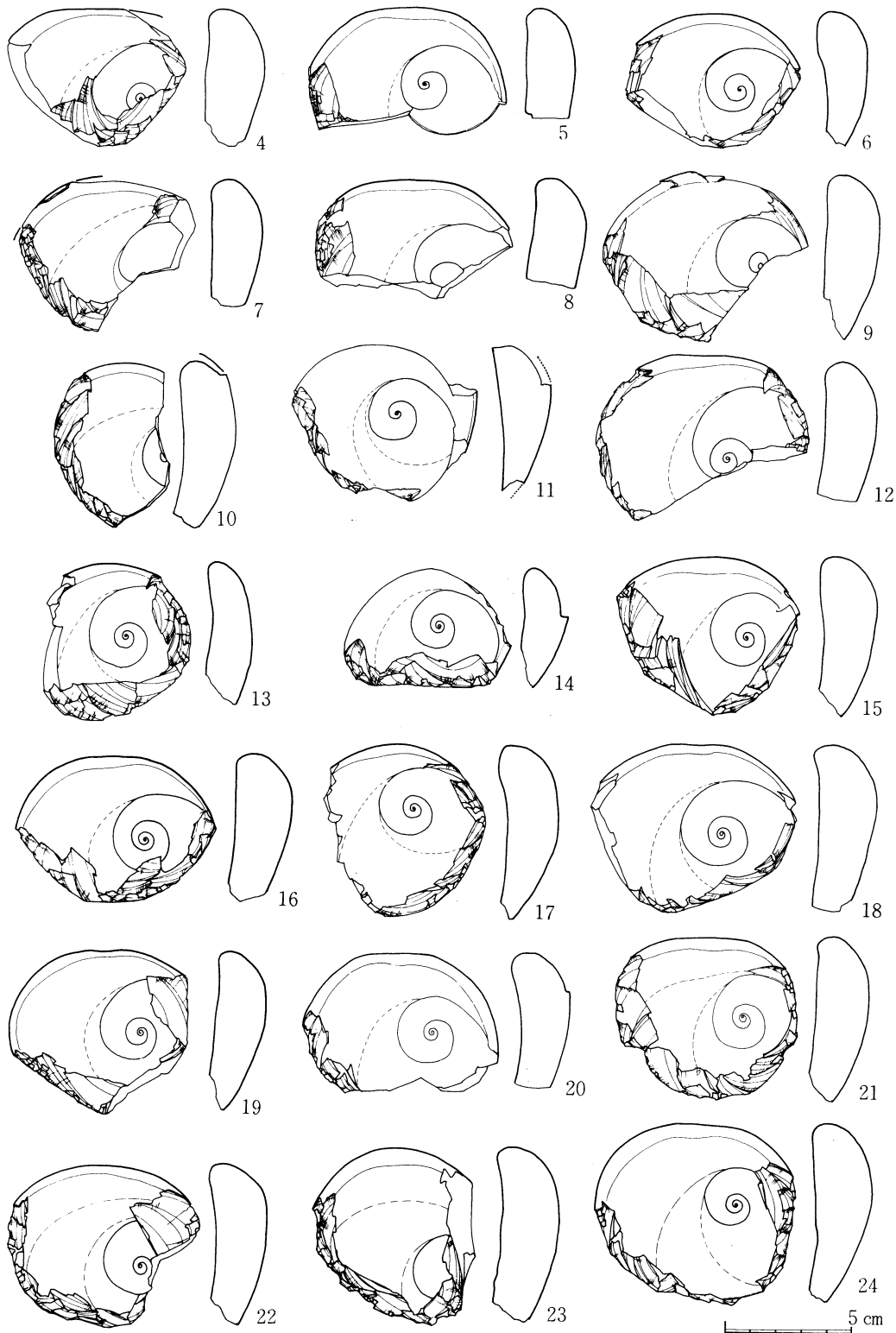
この製品(利器)は、螺蓋を何らかの目的で用いたことにより、螺蓋自体が破損したものであり、それらを対象として取り扱っている。

この製品については、貝刃・貝斧・螺蓋製貝斧・螺蓋利器・ヤコウ貝製スクレイパーと各種の名称で呼ばれ、また、その用途についても名称と応じた区別が行われている。しかし、各種名称で呼ばれてはいるが、刃部ないしは目的部を意図的に造作・作出したと思われるものはほとんど認められず、用いた結果の残存物であることには違いない。言いかえると、使用したことにより、対象物との間に生じた力の反発により螺蓋が潰れ、剥落し、破砕した姿であると言える。

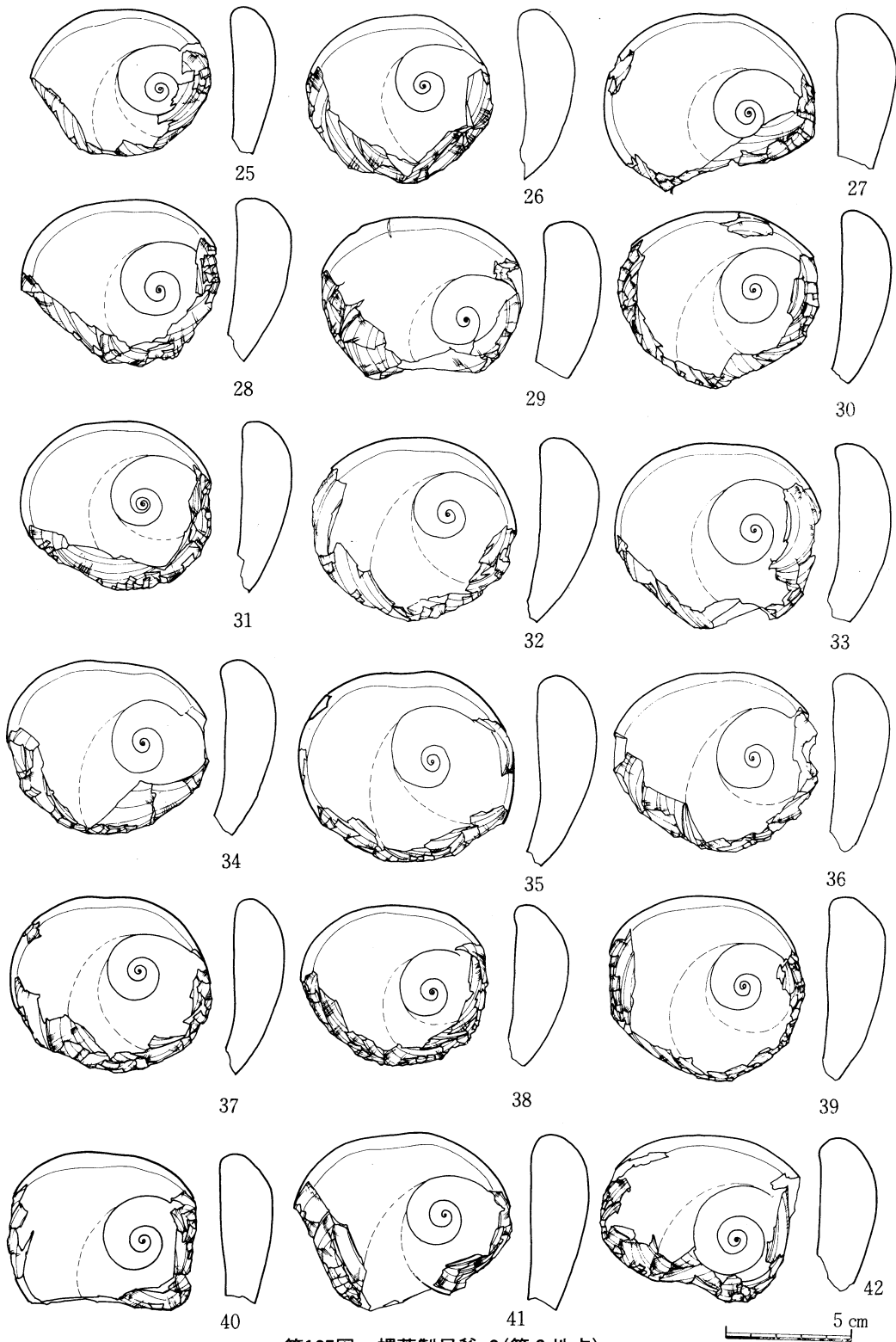
そこで、破損状況から察せられる用途は、敲く、割る・切り取る・剥ぐ・調整する等の多目的に、用いられていたことがうかがえる。



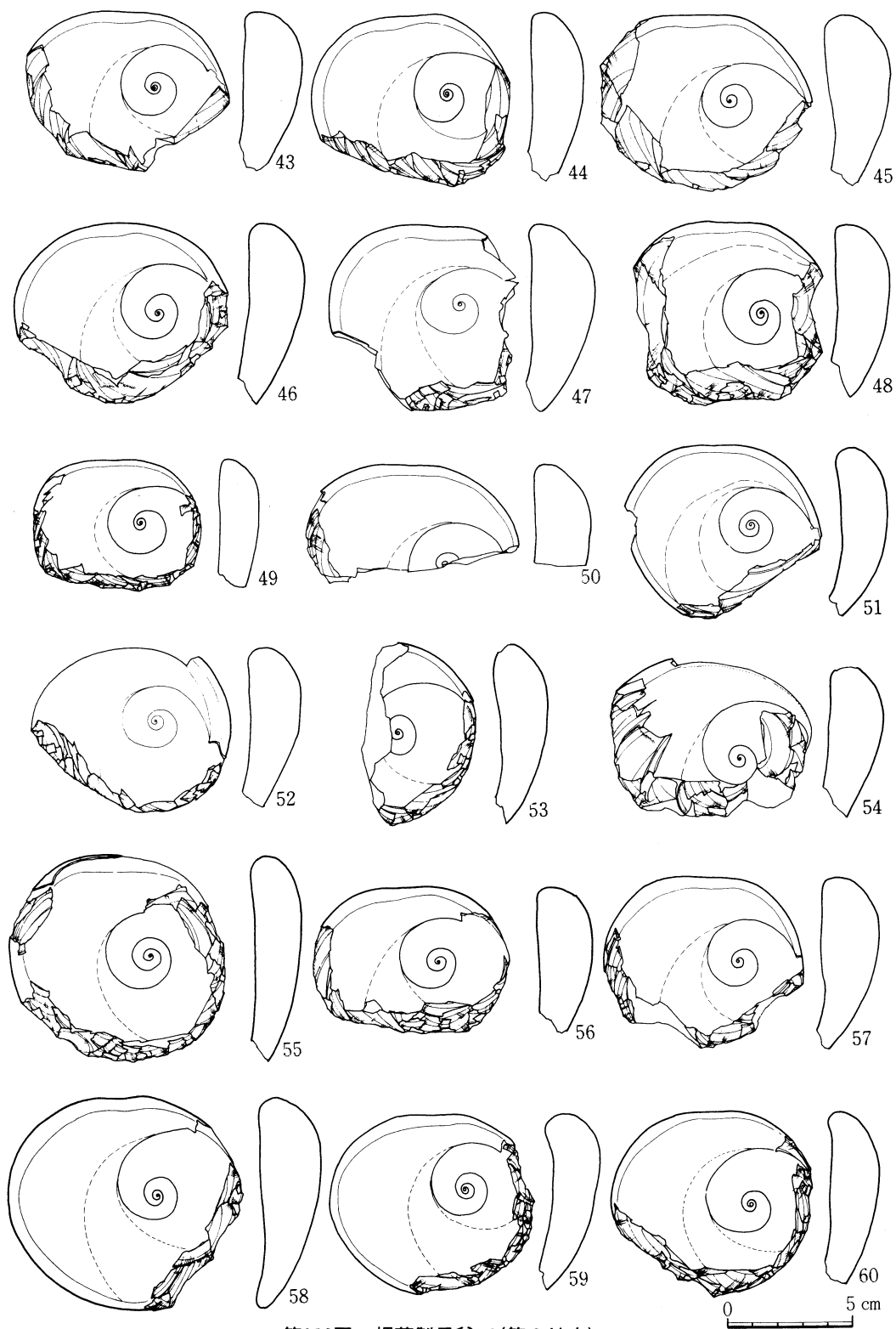
第123図 螺蓋製貝斧-1(第3地点)



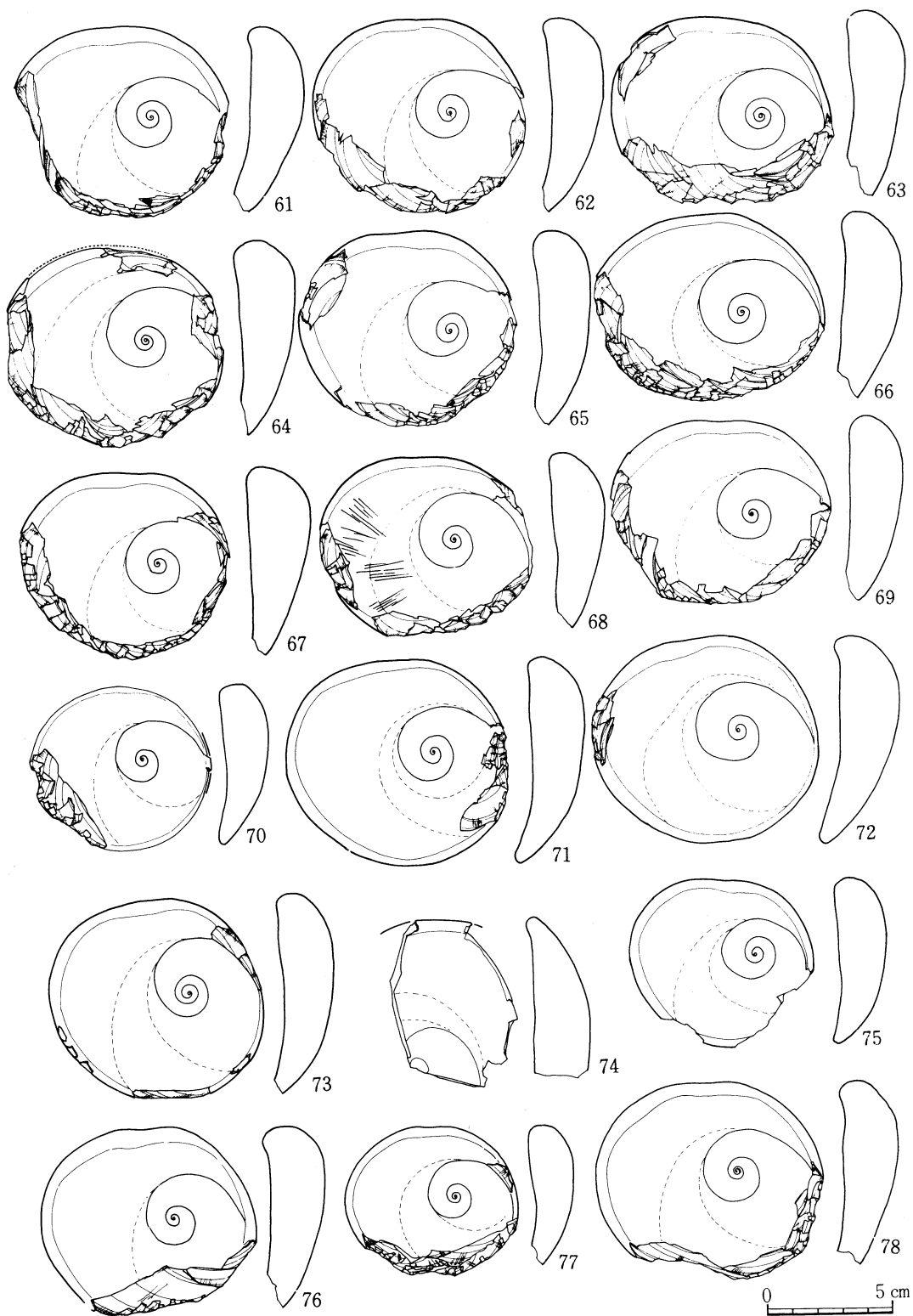
第124图 螺盖製貝斧-2(第3地点)



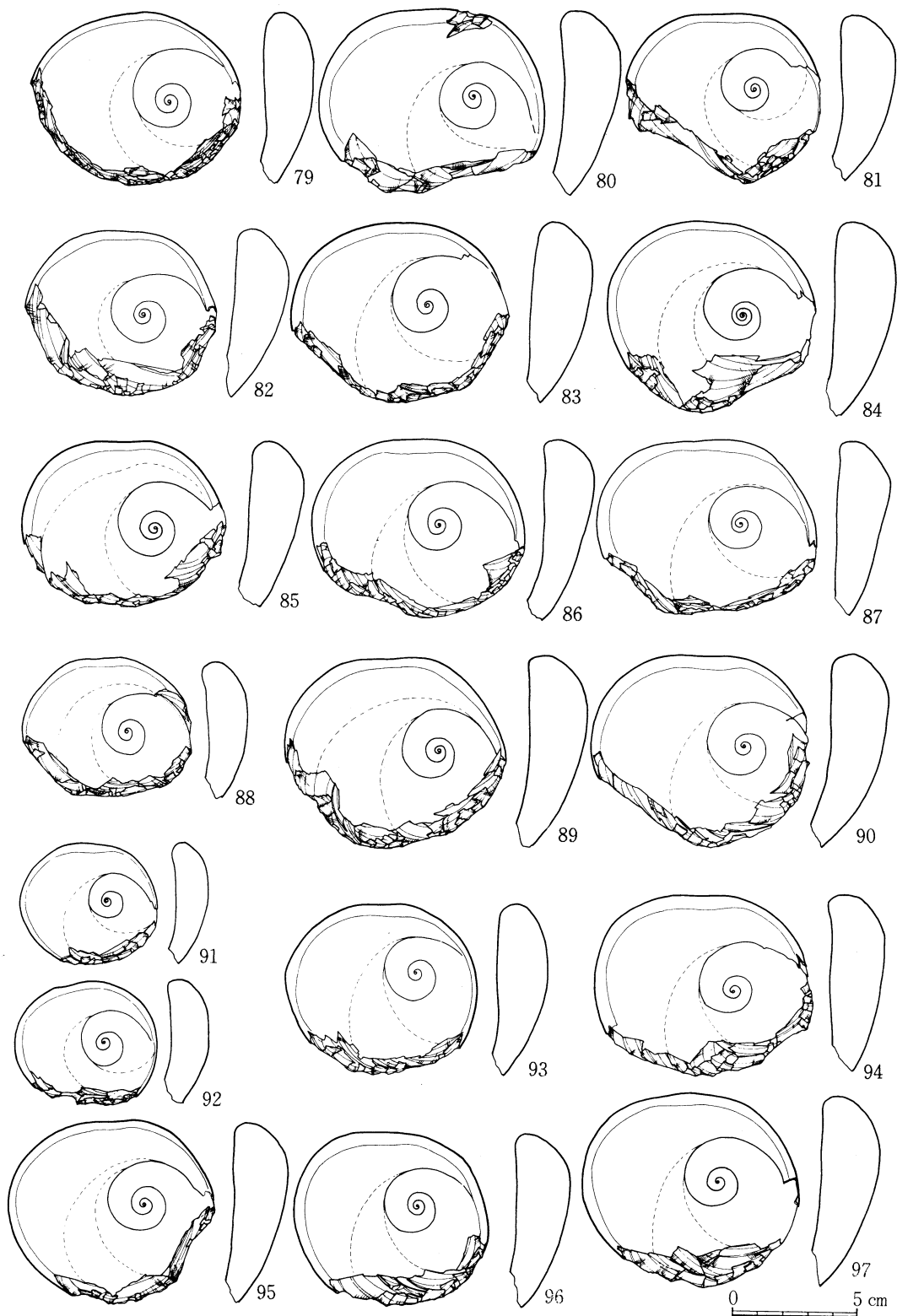
第125图 螺盖製貝斧-3(第3地点)



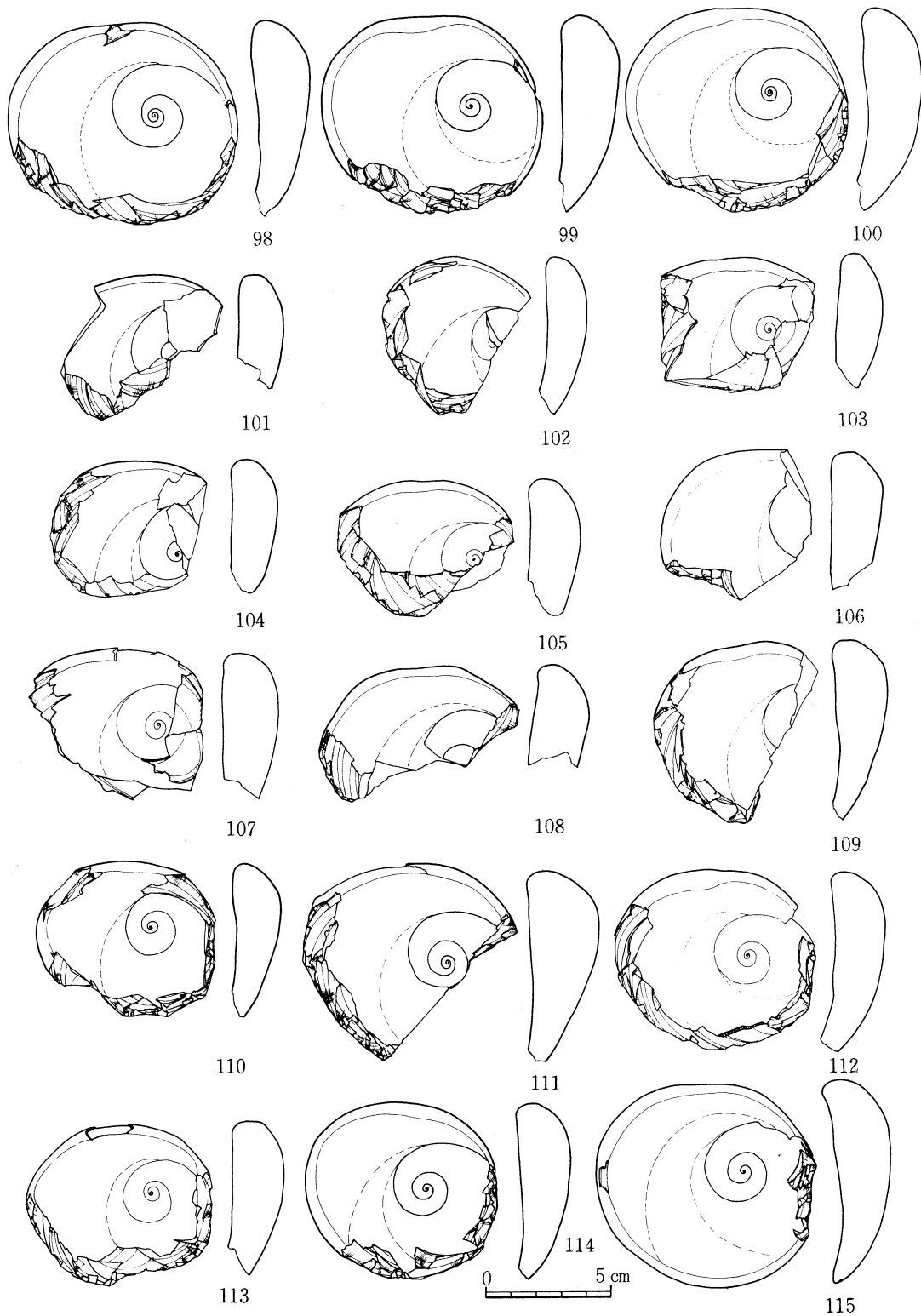
第126图 螺盖製貝斧-4(第3地点)



第127图 螺盖製貝斧-5(第3地点)



第128图 螺盖製貝斧-6(第3地点)



第129图 螺盖製貝斧-7(第3地点)

表45 下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧
一覧表-1 (20~24区)

報告書No	取り上げNo	出土区	レベル(m)	重さ(g)
1	8230	A-21	7.53	29.0
2	8221	A-21	7.59	160.0
3	8238	A-20	7.66	166.0

表46 下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧
一覧表-2 (26~28区)

報告書No	取り上げNo	出土区	レベル(m)	重さ(g)
—	7031	A-26	6.78	212.0
—	100	A-26	6.93	180.0
—	7024	A-26	6.51	146.0

表47 下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧
一覧表-3 (29~33区)

報告書No	取り上げNo	出土区	レベル(m)	重さ(g)
4	3194	Y-32	7.18	139.0
5	1627	Z-30	6.43	115.0
6	649	Y-30	7.90	96.0
7	3604	Z-32	7.37	100.0
8	3610	Z-31	7.27	116.0
9	2913	Z-32	7.11	126.0
10	2538	Z-32	7.08	81.0
11	1512	Z-30	6.90	110.0
12	1357	Z-30	7.17	139.0
13	3599	Z-32	7.22	116.0
14	3078	Y-32	7.48	74.0
15	369	A-31	7.70	129.0
16	4409	Y-31	7.82	152.0
17	4328	A-31	6.28	121.0
18	3668	Z-32	7.18	174.0
19	2793	Z-31	7.11	126.0
20	—	Z-30	—	134.0
21	346	A-30	7.76	145.0
22	—	Y-33	—	136.0
23	3442	Y-32	7.70	141.0
24	4119	Z-30	—	162.0
25	1582	Z-30	6.69	106.0
26	1166	A-30	6.63	136.0
27	3150	Z-31	7.28	166.0
28	4241	Z-31	7.09	150.0
29	347	A-29	7.73	180.0
30	2799	Z-32	7.31	145.0
31	1098	Z-29	7.25	131.0
32	—	Z-30	—	164.0
33	4228	A-32	6.50	166.0

表48 下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧
一覧表-4 (29~33区)

報告書No.	取り上げNo.	出土区	レベル(m)	重さ(g)
34	1175	A-30	6.59	160.0
35	4367	Z-31	6.62	200.0
36	241	Z-29	8.15	181.0
37	4335	A-31	6.31	161.0
38	3862	A-32	6.58	141.0
39	1138	A-30	6.98	169.0
40	4615	Z-31	6.98	145.0
41	4551	Y-31	8.03	193.0
42	3096	Y-32	7.56	176.0
43	—	Y-30	—	162.0
44	4684	Z-32	6.54	163.0
45	1917	Z-31	7.14	199.0
46	1486	Z-30	6.75	184.0
47	1563	Z-30	6.74	189.0
48	3737	Z-32	6.86	169.0
49	1269	A-30	6.58	89.0
50	4543	Z-31	7.27	120.0
51	—	Z-31	—	135.0
52	3337	Y-32	7.72	146.0
53	4583	Z-30	7.22	70.0
54	3329	Y-32	7.87	151.0
55	1799	A-30	6.16	223.0
56	4731	Z-32	6.69	146.0
57	4090	A-31	6.57	164.0
58	2789	Y-32	7.81	232.0
59	4348	Z-31	6.71	151.0
60	2831	Z-31	7.23	156.0
61	1402	Y-30	7.66	180.0
62	4158	Z-32	7.86	190.0
63	4443	A-31	6.22	210.0

表49 下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧
一覧表-5 (29~33区)

報告書No.	取り上げNo.	出土区	レベル(m)	重さ(g)
64	3113	Y-32	7.70	204.0
65	2149	Z-31	7.42	196.0
66	1516	Z-30	6.81	226.0
67	—	Z-30	—	204.0
68	558	Z-30	7.80	166.0
69	3192	Y-32	8.55	201.0
70	1748	A-30	6.26	111.0
71	3659	Z-32	7.05	246.0
72	3841	Z-32	7.24	254.0
73	2739	Z-32	7.45	223.0
64	4459	Y-32	8.31	109.0
75	4717	A-32	6.63	134.0
76	1165	A-30	6.47	196.0
77	2414	Z-31	7.47	96.0
78	955	Z-30	7.63	225.0
79	1248	Z-29	7.07	169.0
80	1823	A-30	6.25	214.0
81	—	Z-30	—	256.0
82	3224	Z-32	7.67	141.0
83	2084	A-31	6.56	194.0
84	3575	Z-32	7.55	204.0
85	2002	Z-31	7.62	169.0
86	1628	A-30	6.72	180.0
87	2864	Z-32	7.31	202.0
88	2350	Z-31	7.72	89.0
89	1307	Y-30	7.72	210.0
90	—	Z-30	—	209.0
91	1806	A-30	6.37	56.0
92	3940	Z-32	7.28	69.0
93	2094	Z-31	7.11	146.0

表50 下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧
一覧表-6 (29~33区)

報告書No.	取り上げNo.	出土区	レベル(m)	重さ(g)
94	—	Z-32	7.00	192.0
95	739	Y-32	8.00	160.0
96	3563	Z-31	7.04	160.0
97	4562	Z-31	7.34	211.0
98	2046	A-31	6.93	230.0
99	2076	Z-31	7.62	216.0
100	—	Z-32	—	240.0
—	4614	Z-31	7.00	176.0
—	4716	A-31	6.58	207.0
—	—	—	—	179.0
—	2156	Z-31	7.37	56.0
—	2833	Y-33	7.86	169.0
—	2501	Z-32	7.55	131.0
—	962	A-30	6.63	194.0
—	2344	Z-32	7.24	196.0
—	3792	Z-33	7.47	170.0
—	4107	Y-32	6.67	189.0
—	4518	A-31	7.29	141.0
—	—	—	—	90.0
—	4337	A-32	6.05	149.0
—	389	A-31	7.82	126.0
—	3498	A-32	6.89	202.0
—	—	—	—	124.0
—	—	—	—	80.0
—	4059	Z-32	6.93	145.0
—	4412	Y-31	7.62	166.0
—	428	Y-31	8.14	114.0
—	3734	A-32	6.87	154.0
—	—	Z-30	—	149.0
—	364	A-31	7.64	136.0

表51 下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧
一覧表-7 (29~33区)

報告書No.	取り上げNo.	出土区	レベル(m)	重さ(g)
—	—	—	—	73.0
—	103	Z-30	7.88	131.0
—	4226	A-32	6.47	134.0
—	2633	Z-32	7.74	69.0
—	2634	Y-32	7.69	71.0
—	36	—	—	46.0
—	4210	A-31	7.09	212.0
—	1910	A-31	7.02	144.0
—	1945	A-31	6.90	176.0
—	—	A-30	—	170.0
—	2630	Z-31	7.10	166.0
—	1444	Y-30	7.64	206.0
—	1459	Z-30	6.94	166.0
—	—	Z-30	—	136.0
—	4558	A-31	6.82	165.0
—	2401	Z-32	7.31	194.0
—	4055	Z-32	7.03	104.0
—	903	A-30	6.91	170.0
—	4366	Z-31	6.71	176.0
—	310	Y-30	8.15	134.0
—	3399	Y-32	7.74	154.0
—	2715	Z-31	7.39	224.0
—	—	Z-31	—	144.0
—	—	A-30	—	180.0
—	1442	Y-30	7.74	179.0
—	3726	Z-32	7.14	204.0
—	1953	A-31	6.94	171.0
—	1974	A-31	6.77	159.0
—	3848	Z-32	7.46	176.0
—	771	Y-32	8.00	150.0

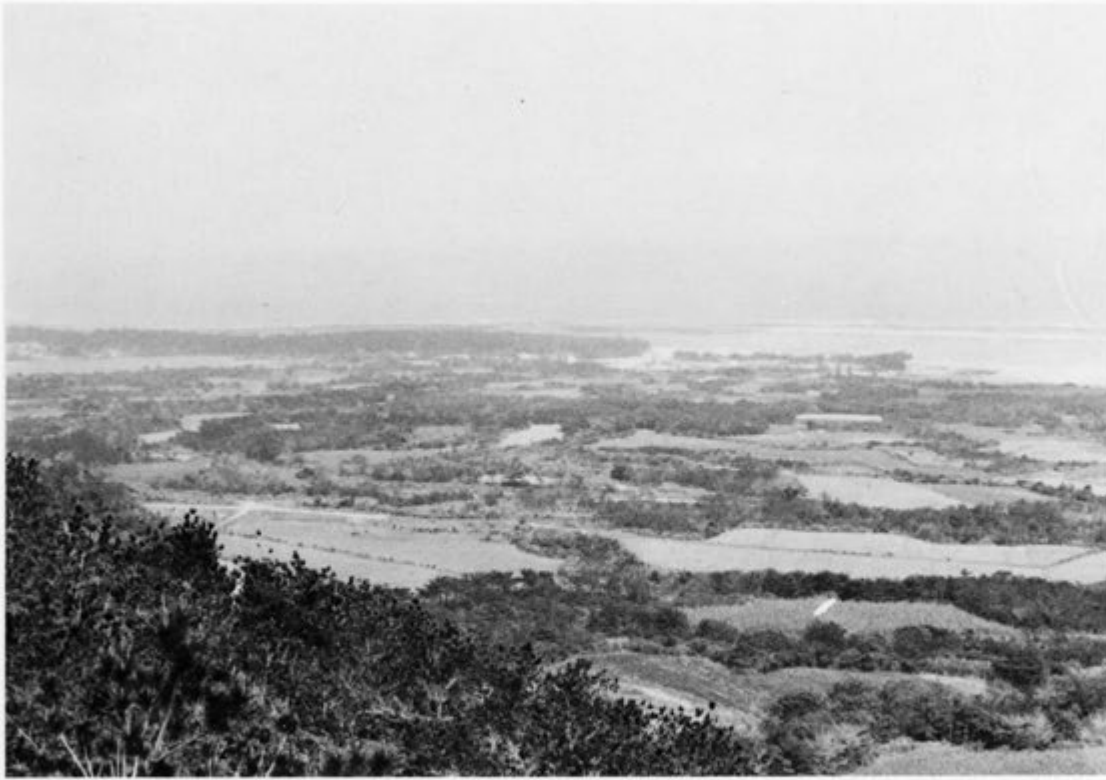
表52 下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧
一覧表-8 (29~33区)

報告書No.	取り上げNo.	出土区	レベル(m)	重さ(g)
-	2029	Z-31	7.29	139.0
-	-	A-32	-	149.0
-	3030	Z-32	7.09	176.0
-	-	A-32	-	138.0
-	2594	Z-31	7.43	94.0
-	4044	Y-32	7.05	149.0
-	2660	Z-31	7.62	44.0
-	2694	Z-31	7.31	50.0
-	4241	Z-31	7.09	41.0
-	40	--	-	109.0
-	2714	Z-31	7.45	70.0
-	4351	A-31	6.17	24.0

表53 下山田Ⅱ遺跡出土螺蓋製貝斧
一覧表9 採集品

報告書No.	取り上げNo.	出土区	レベル(m)	重さ(g)
101	9	-	-	84.0
102	-	-	-	76.0
103	-	-	-	112.0
104	35	-	-	101.0
105	-	-	-	112.0
106	-	-	-	110.0
107	-	-	-	146.0
108	4843	-	6.80	114.0
109	4704	-	-	114.0
110	-	-	-	115.0
111	-	-	-	199.0
112	-	-	-	180.0
113	-	-	-	133.0
114	-	-	-	152.0
115	2887	-	-	225.0

圖 版



アマンデーの丘(高岳)からの遠景



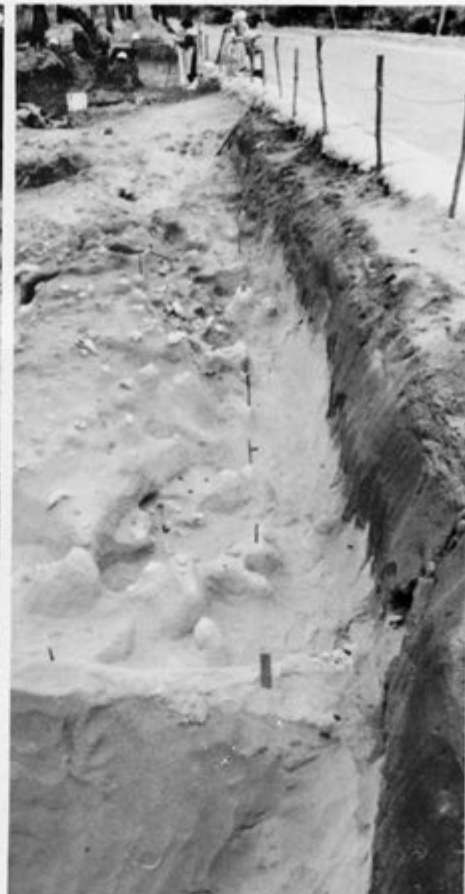
第1地点 8区~11区 調査風景



第1地点 (南側) 旧海岸線



第3地点26区～29区 (北側より)



26～29区 (南側より)



第3地点 南壁全体图



31区南壁部分图



25区北壁部分图



第3地点 遺構出土状況（西側より）



第3地点 遺構・遺物出土状況（東側より）



第1地点 遺物出土状況



第3地点 遺物出土状況



第3地点 7号集石遺構 (上面)



第3地点 7号集石遺構 (側面)



第3地点 12号集石遺構 (検出時)



第3地点 12号集石遺構 (最終面)



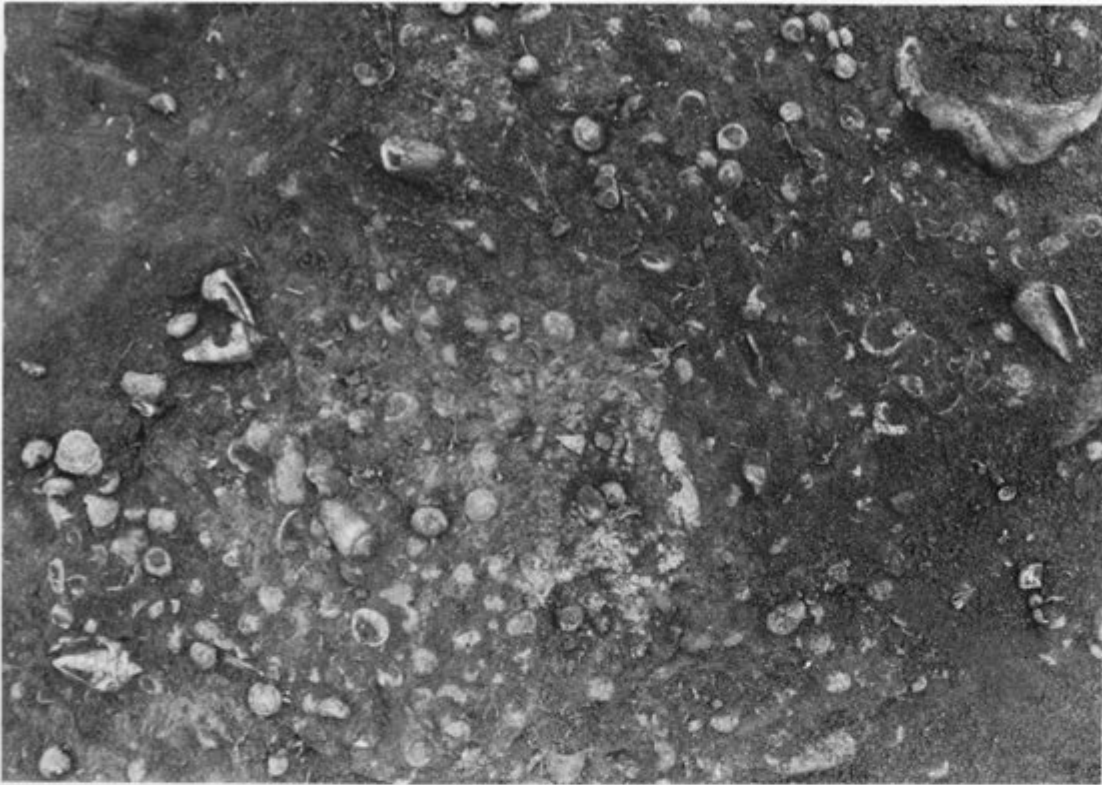
第3地点 3号集石遺構



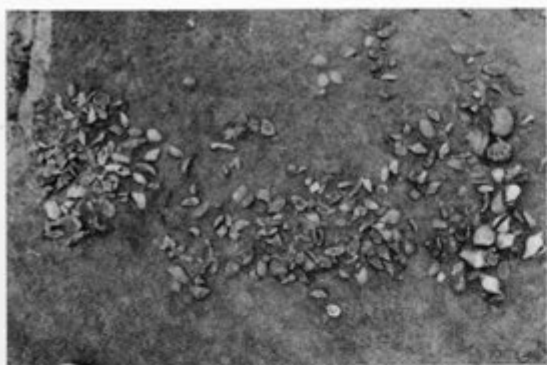
第3地点 3号集石遺構 (最終面)



第3地点 6号・7号 集石遺構状況



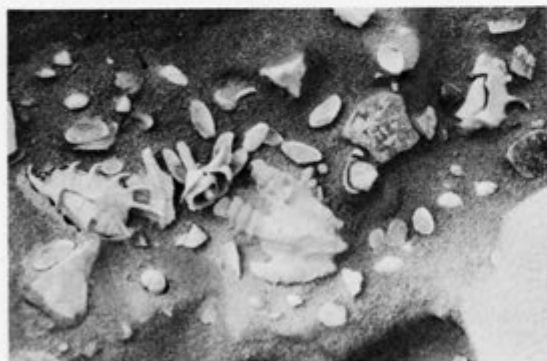
第3地点 貝溜出土状況



貝溜出土狀況



貝溜出土狀況



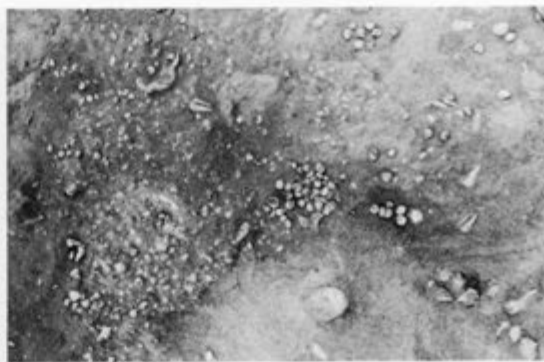
貝殼・土器片出土狀況



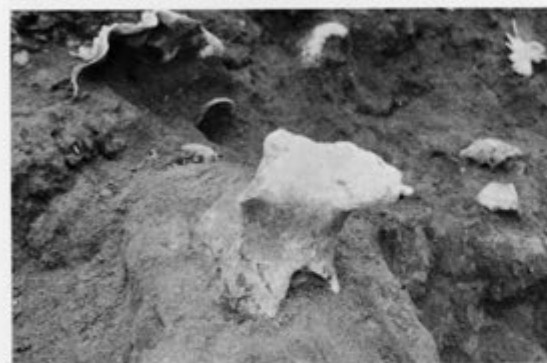
貝殼・獸骨出土狀況



西壁遺物出土狀況



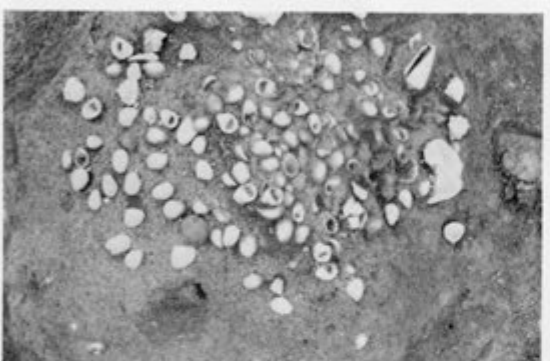
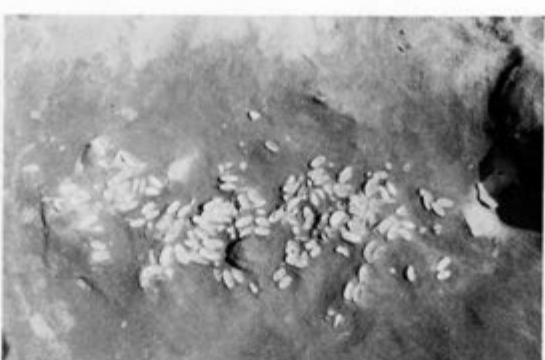
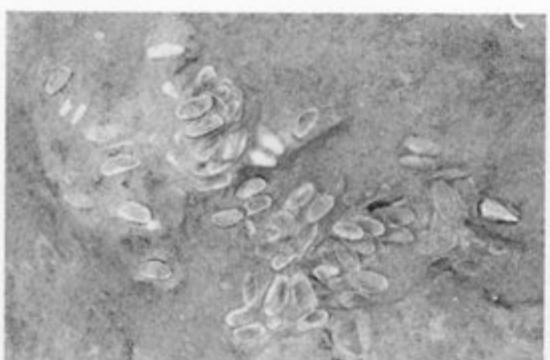
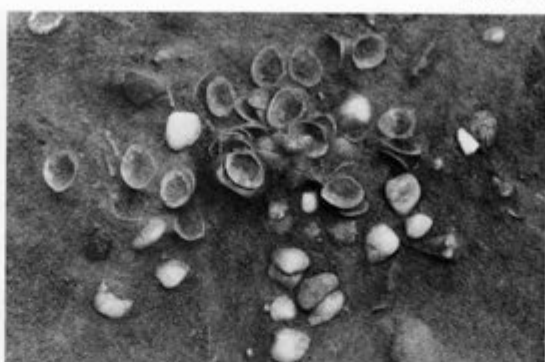
貝殼出土狀況



鯨骨出土狀況



豬骨出土狀況



貝溜出土状況



第3地点 7号集石遺構 (上面より)



第3地点 7号集石遺構 (東よりの側面)



第3地点 14号集石遺構の相伴土器



第3地点 14号集石遺構・土器取り上げ後



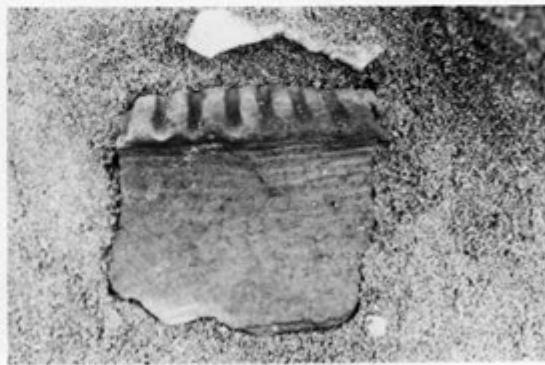
147 出土状况



145 出土状况



677 出土状况



234 出土状况



234 出土状况



249 出土状况



304 出土状况



329 出土状况



645 出土状况



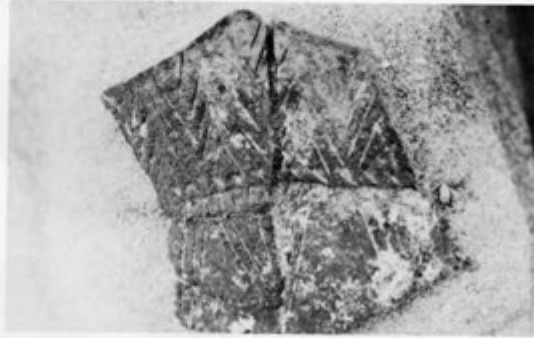
571 出土状况



429 出土状况



488 出土状况



108 出土状况



514 出土状况



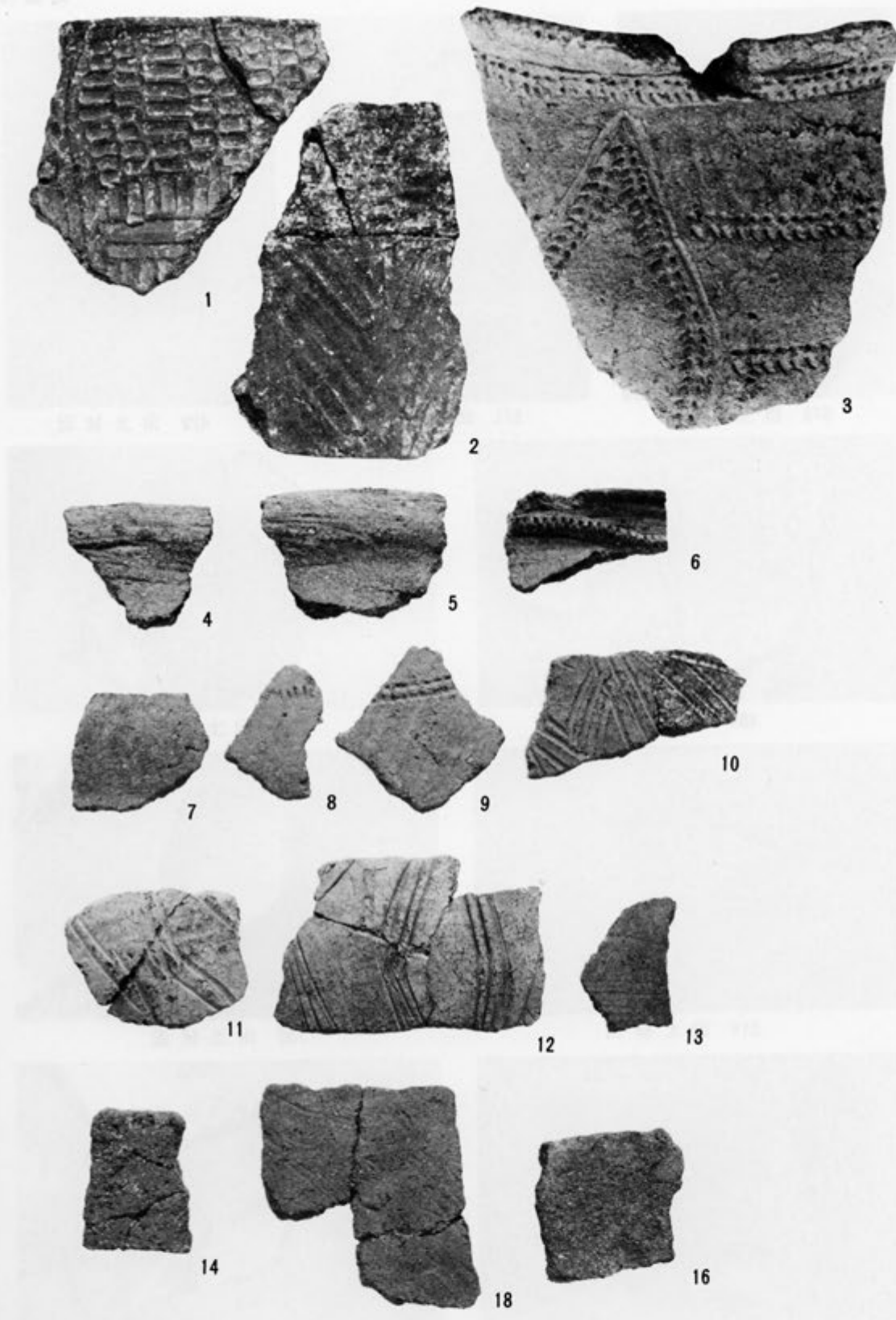
732 出土状况



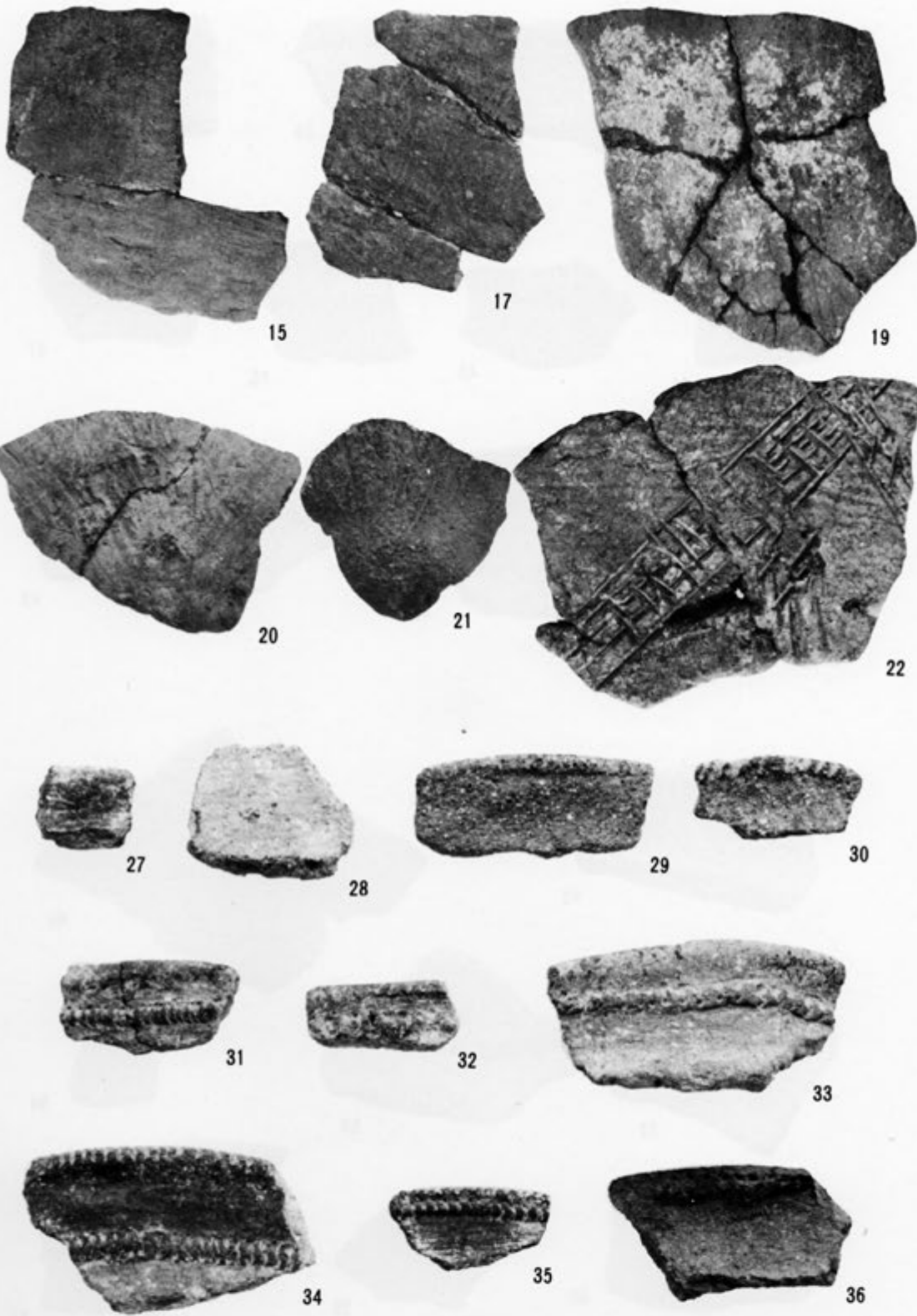
345 出土状况



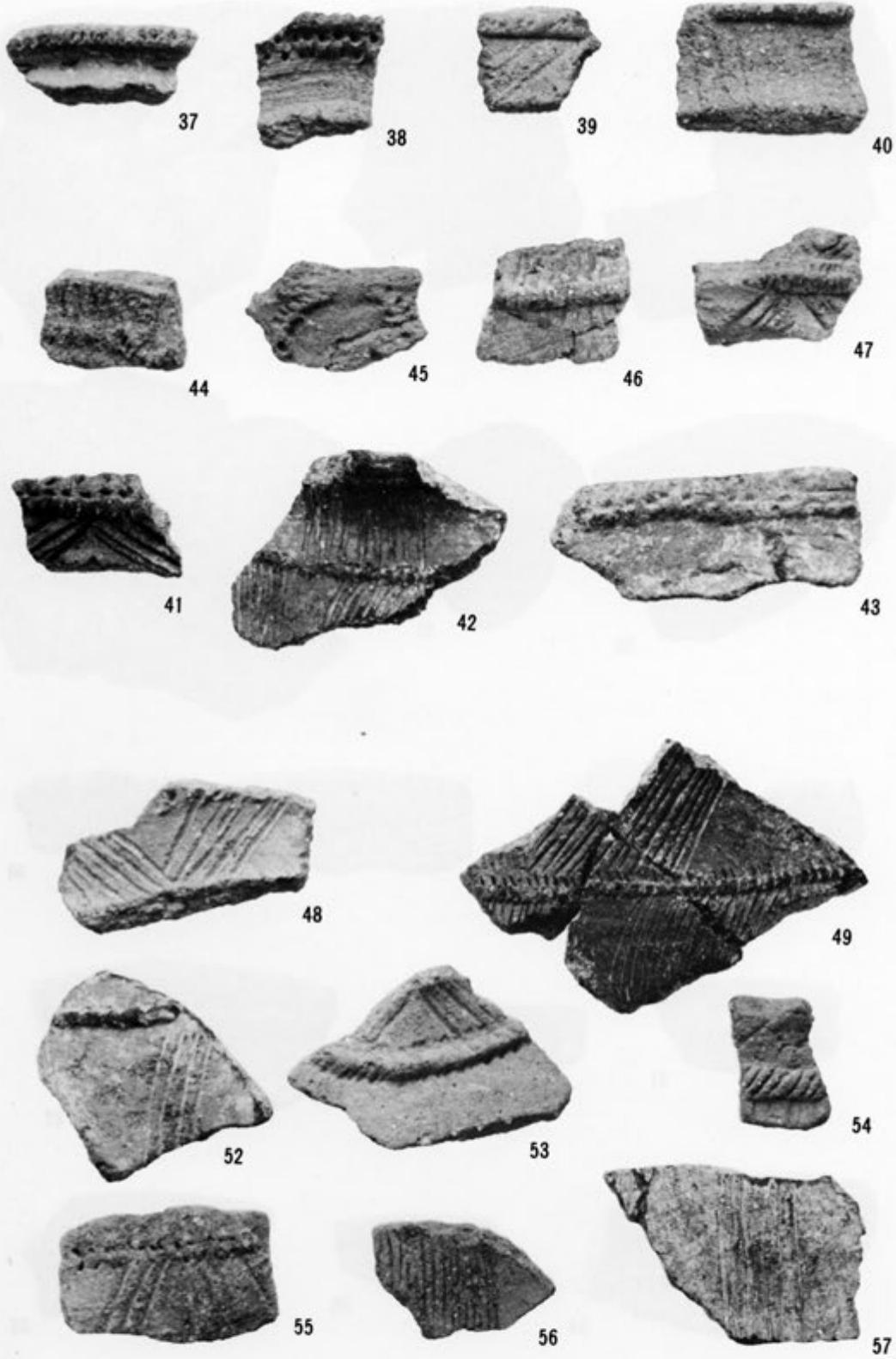
534 出土状况



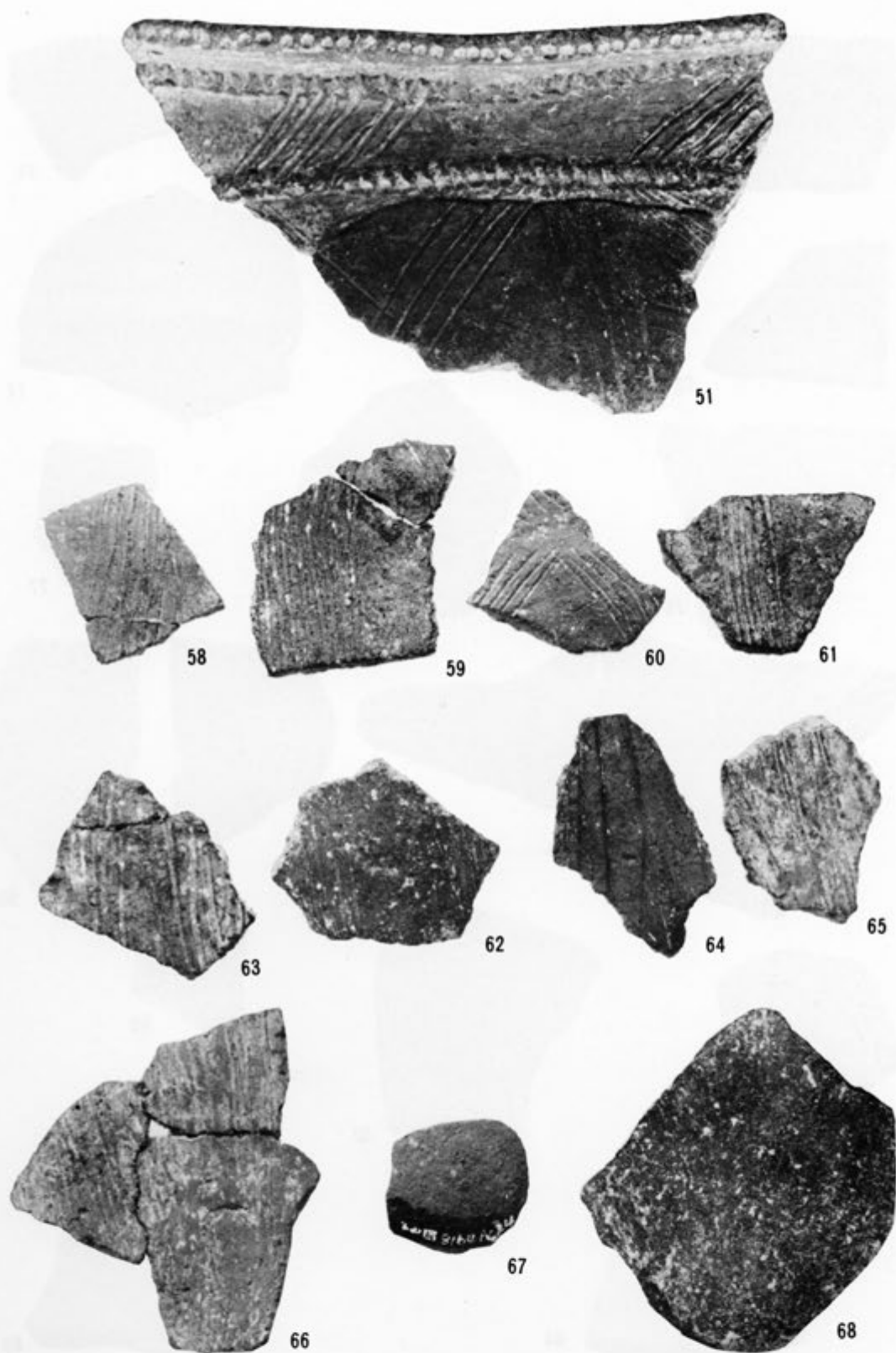
第1地点 出土遺物



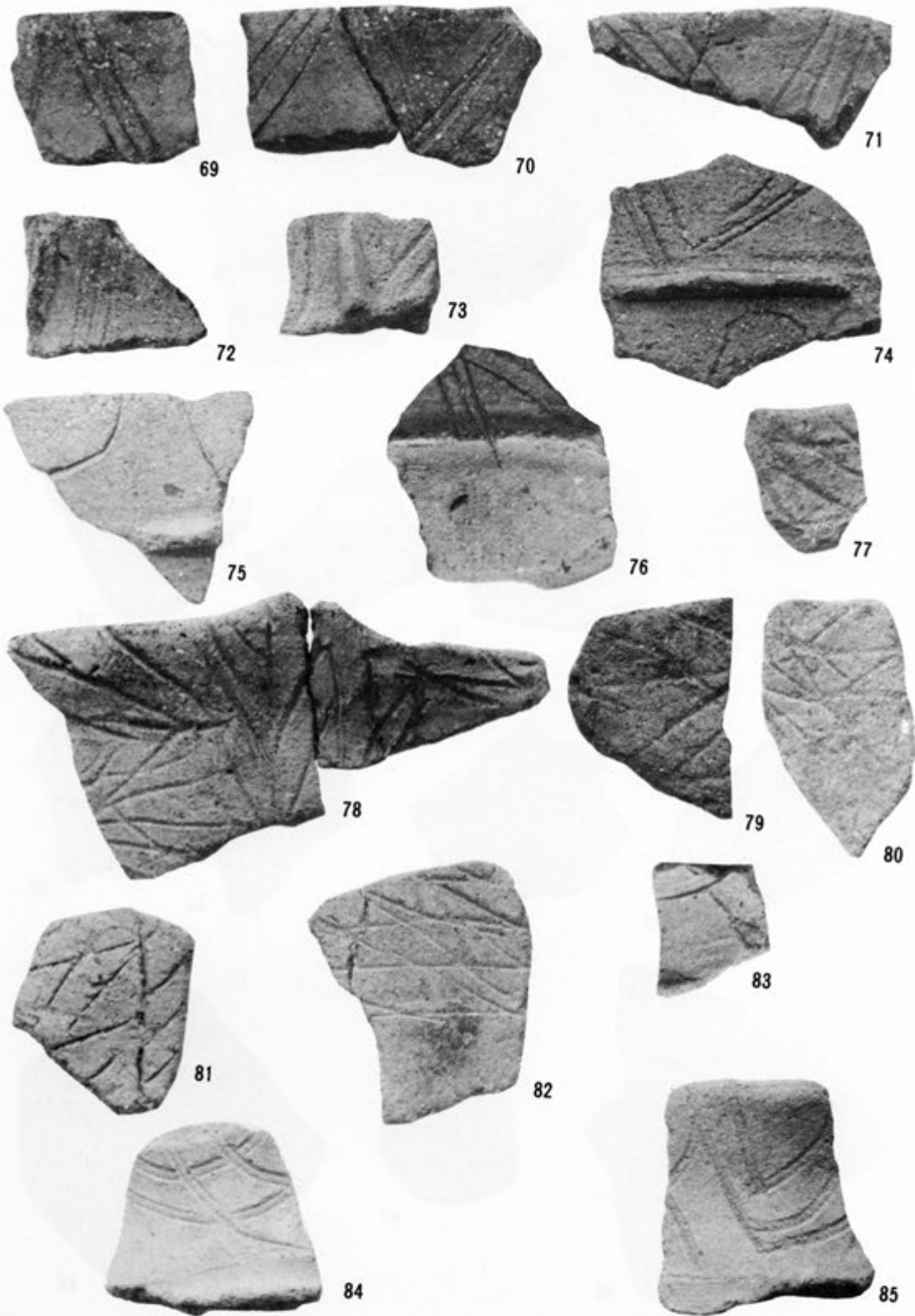
第1地点・2地点 出土遺物 (Ⅲ類土器)



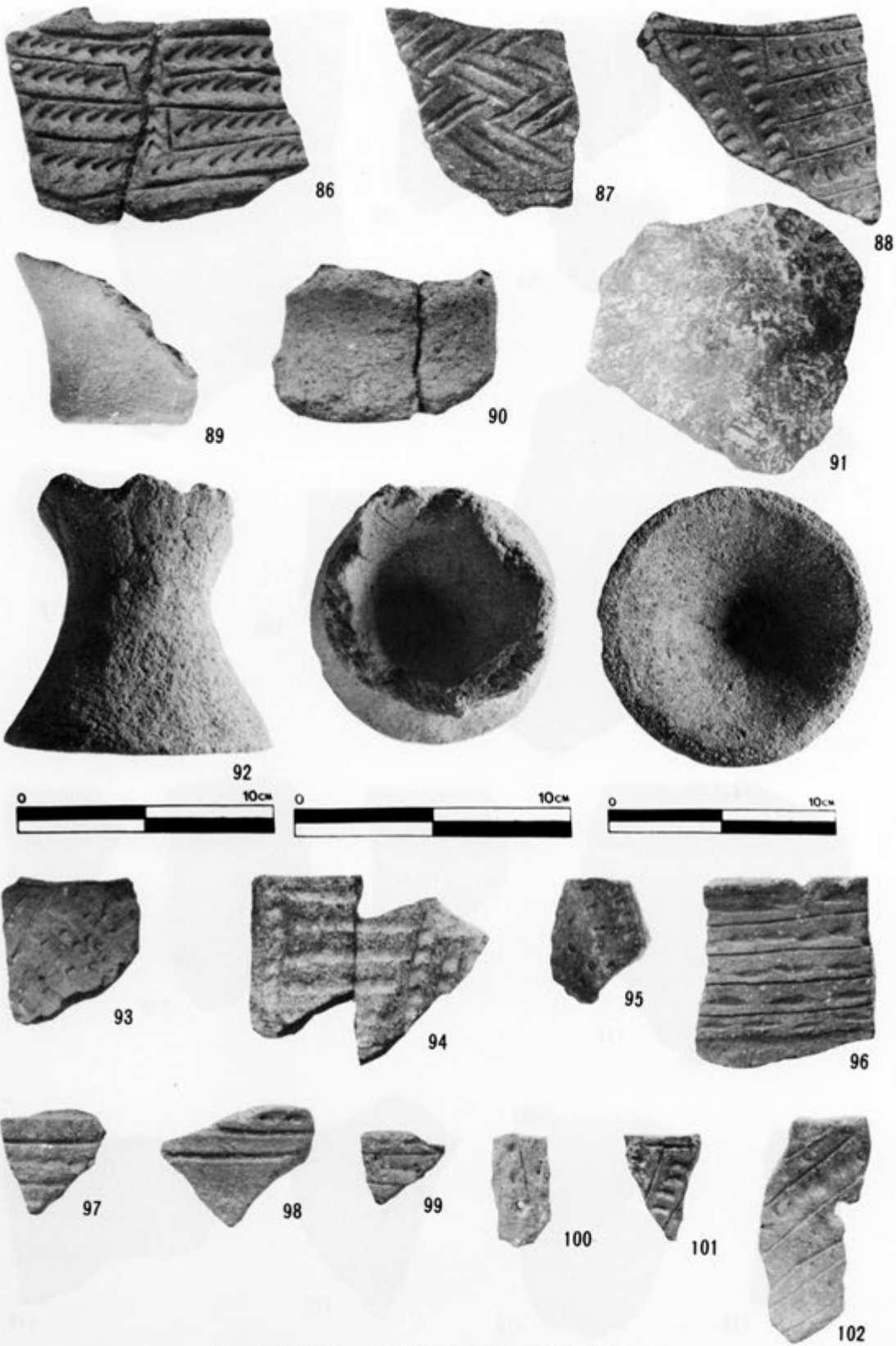
第2地点 出土遺物 (IV類土器)



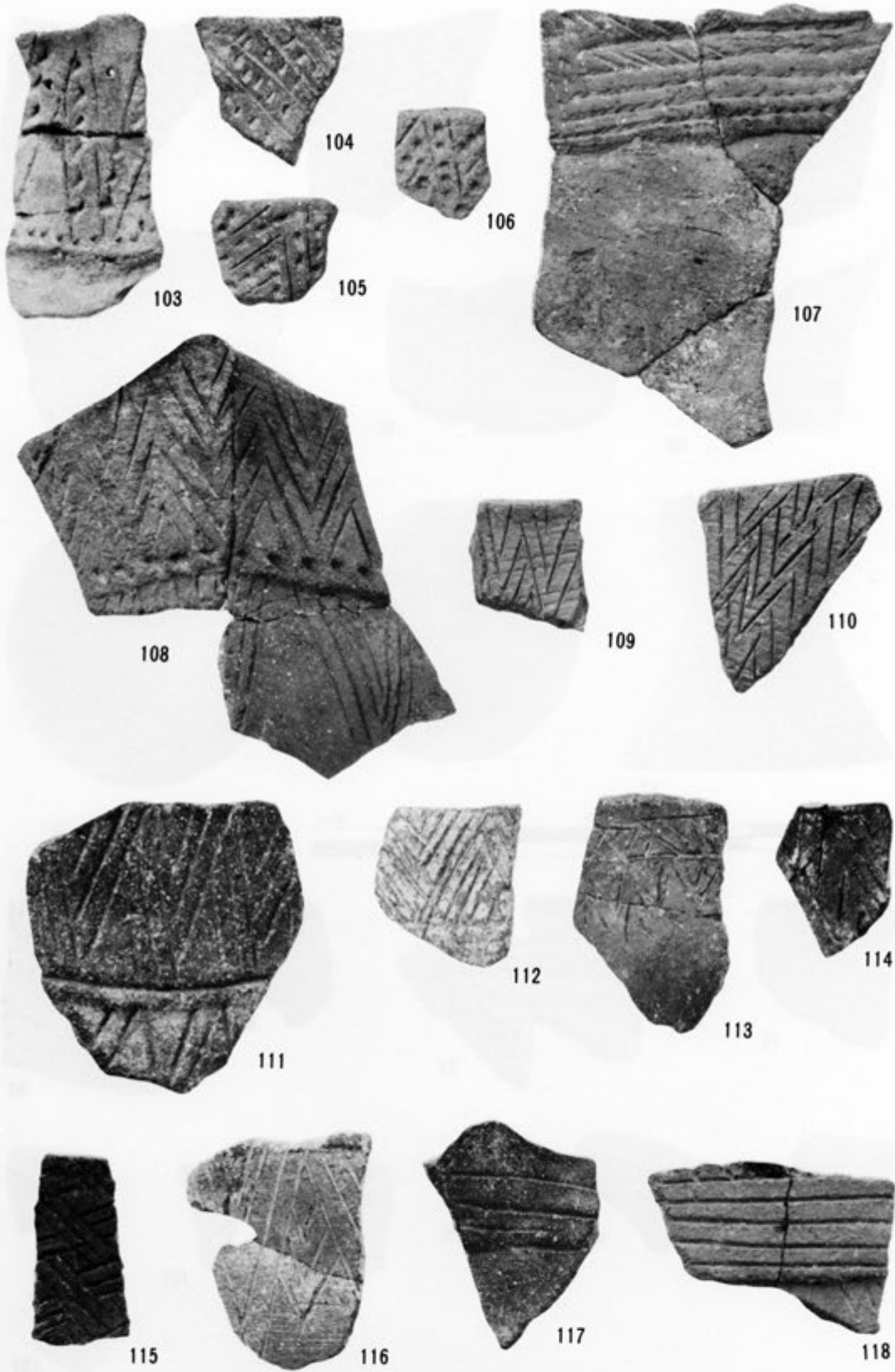
第2地点 出土遺物 (Ⅳ類土器)



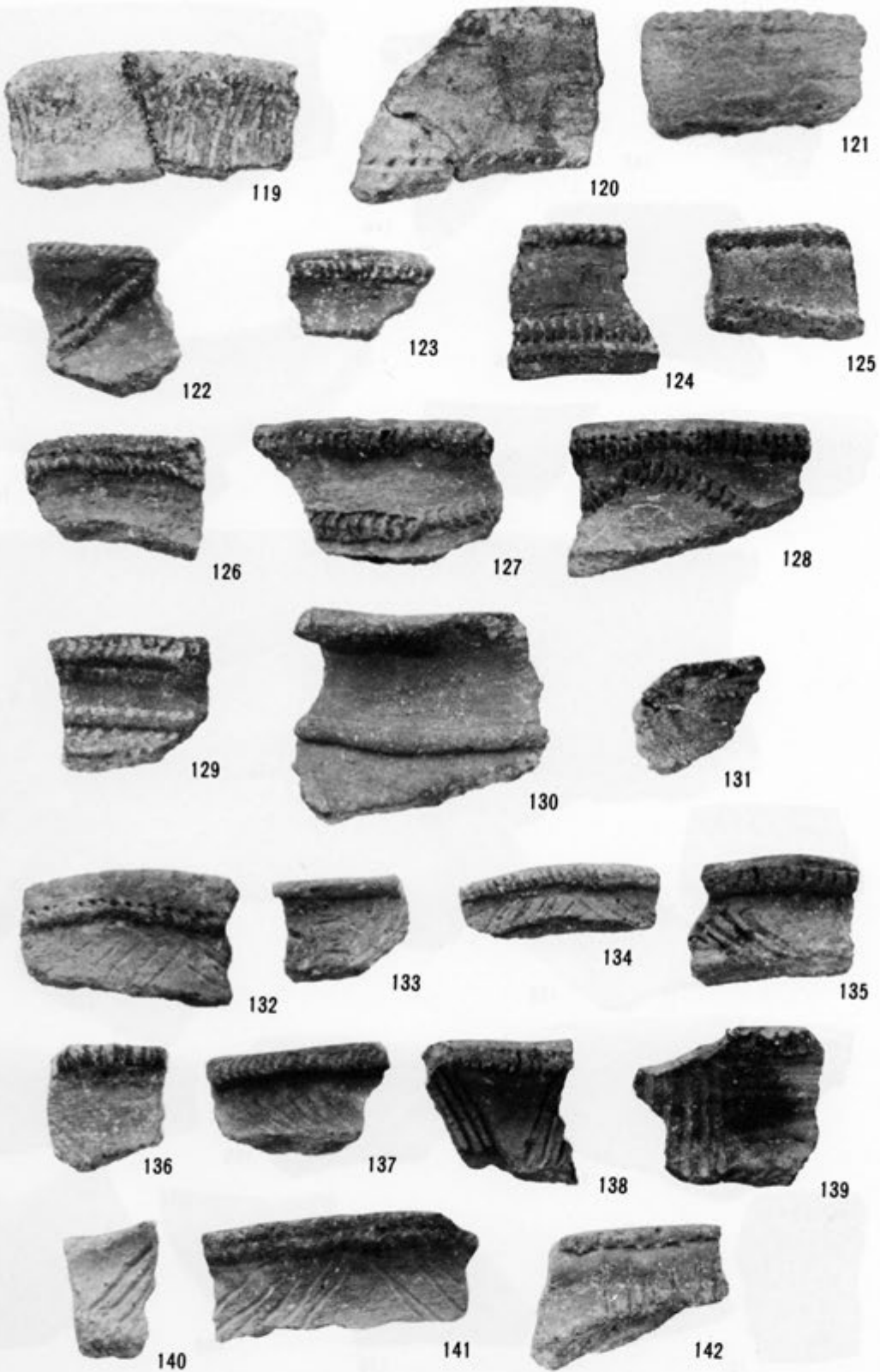
第2地点 出土遺物 (XV, XVI, XVII類土器)



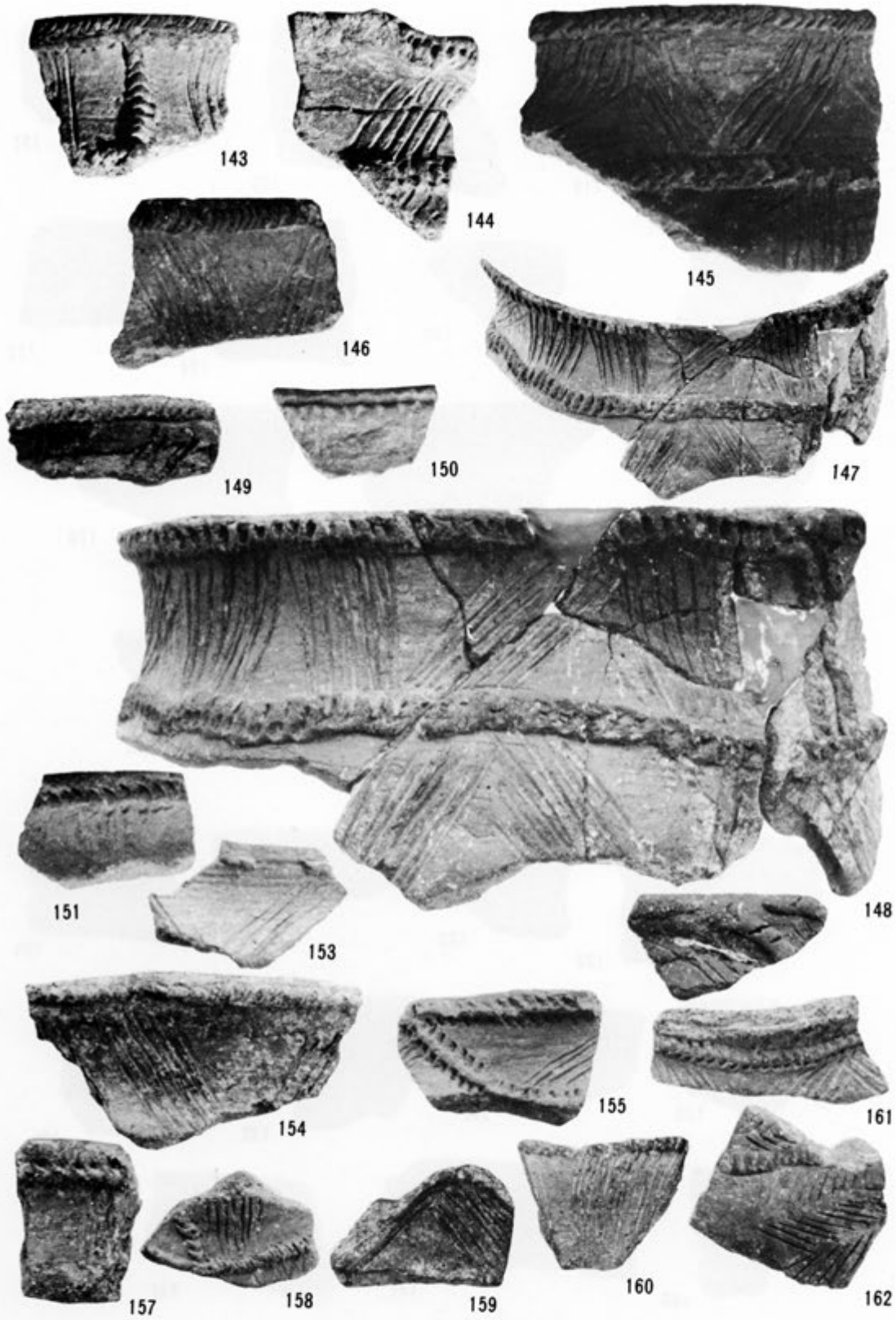
第2・3地点 出土遺物 (IX; XI; XVIII類土器)



第3地点 出土遺物 (IX; XI類土器)



第3地点 出土遺物 (Ⅲ・Ⅳ類土器)



第3地点 出土遺物 (IV類土器)



227



147

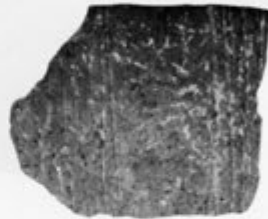
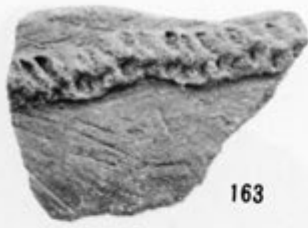


145

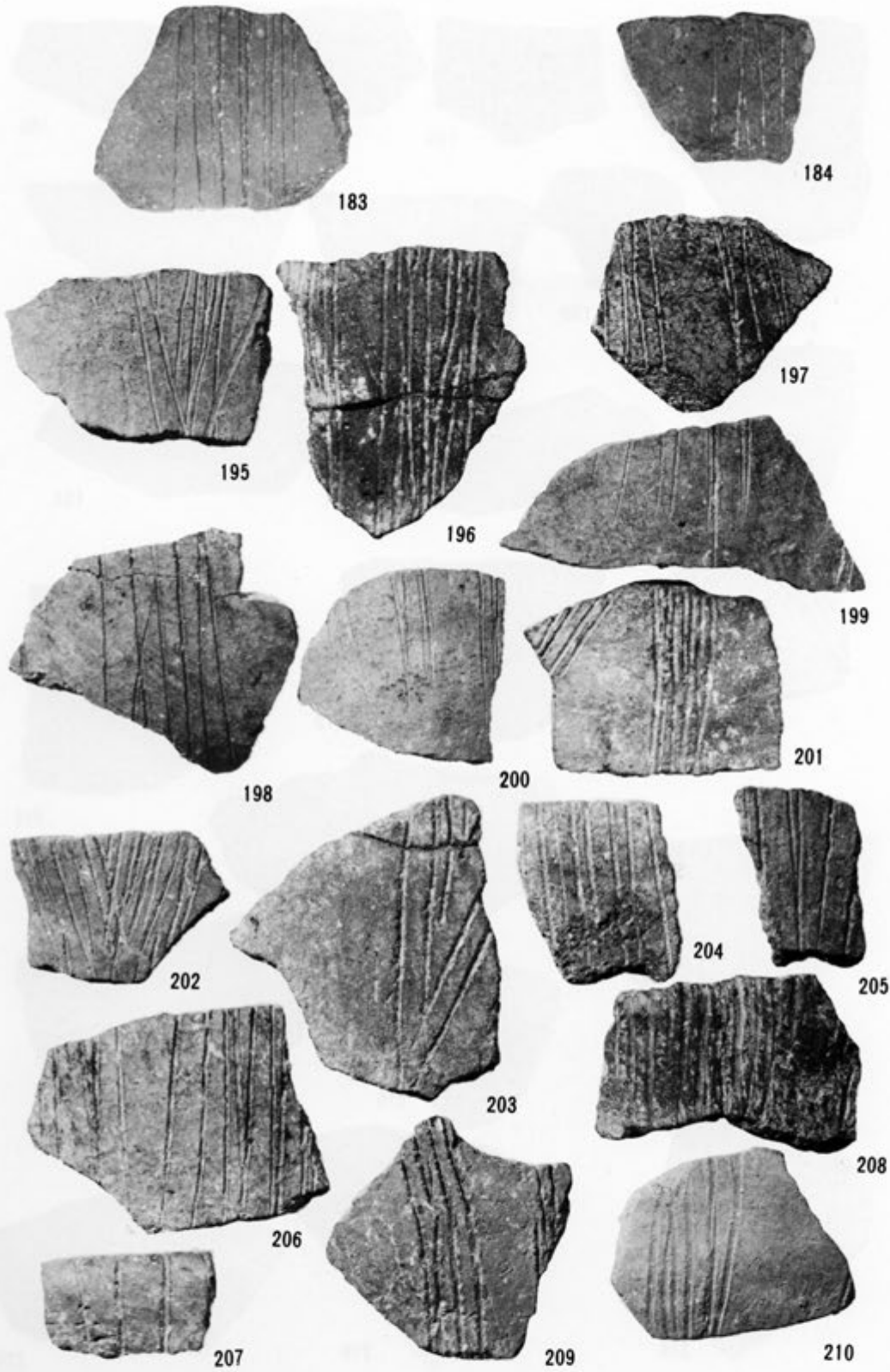


226

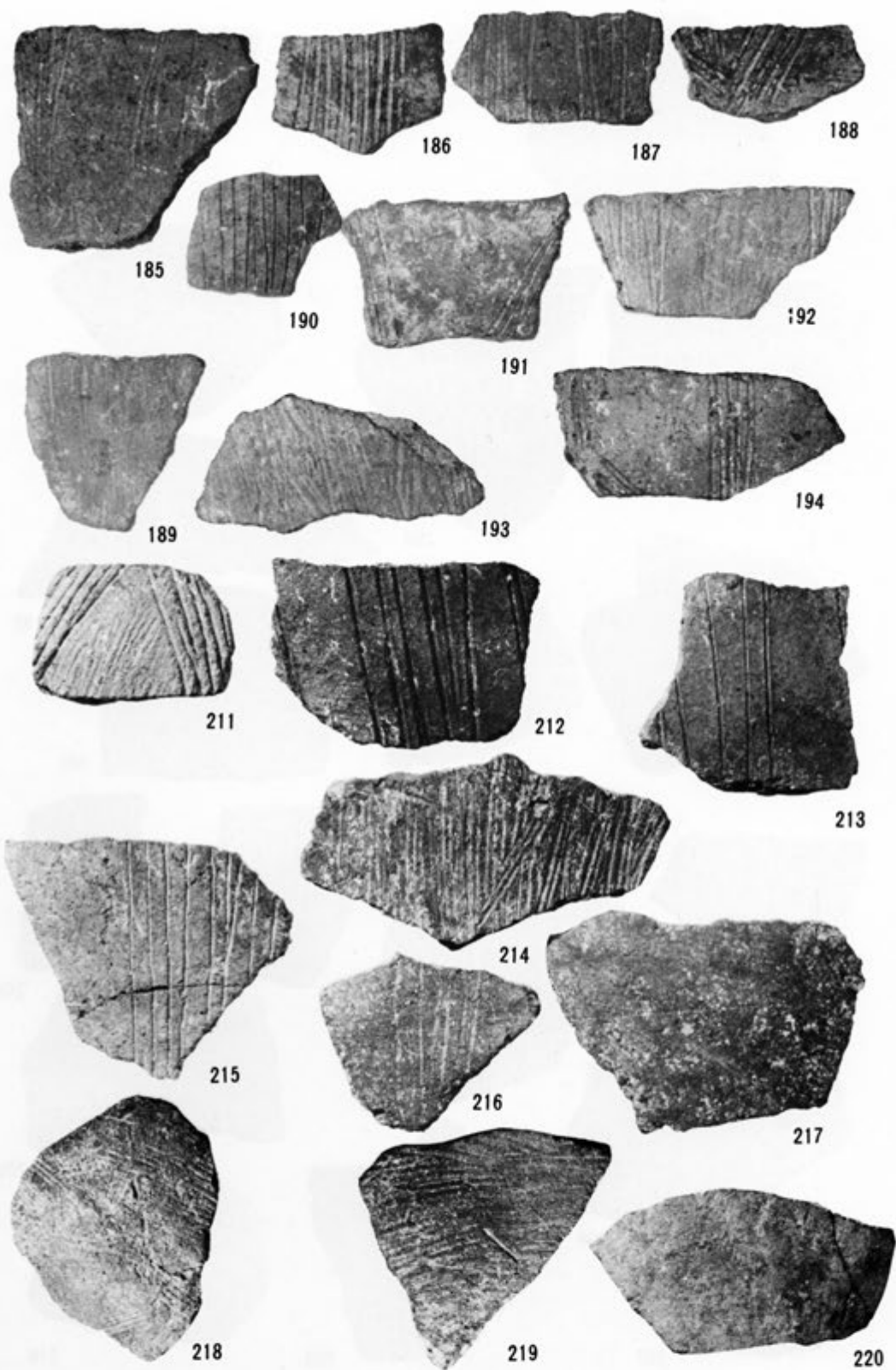
第3地点 出土遺物 (IV類土器)



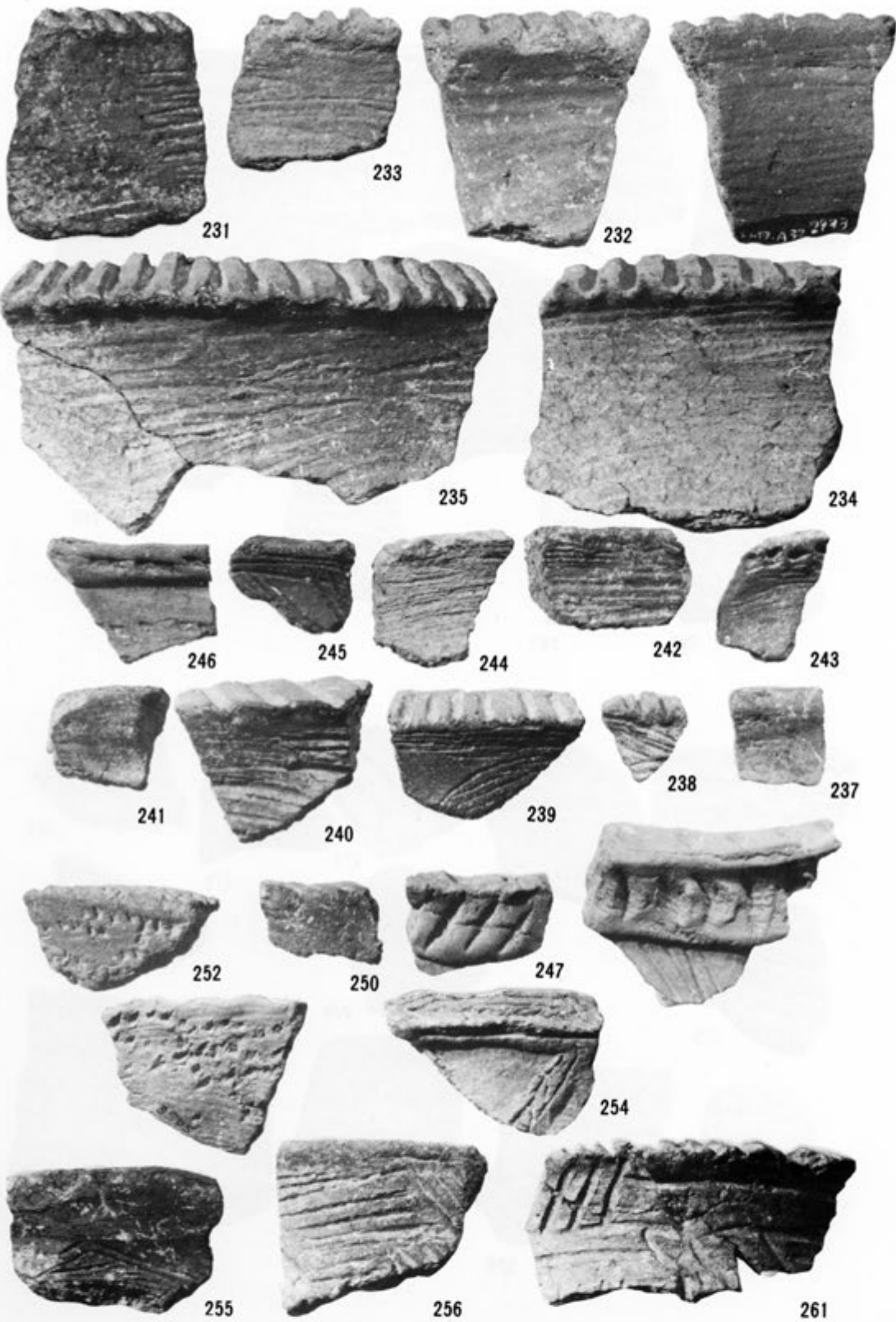
第3地点 出土遺物 (IV・V類土器)



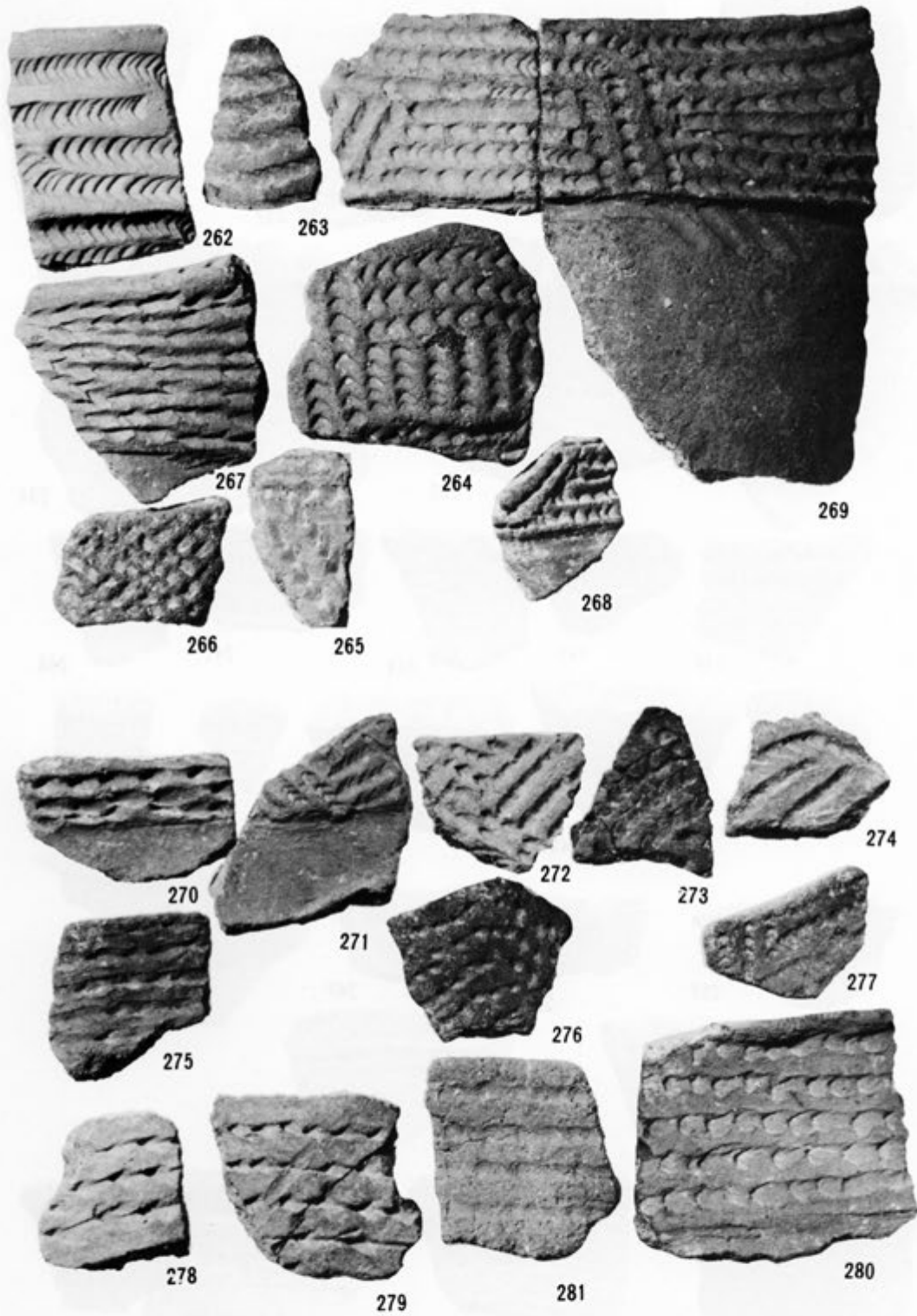
第3地点 出土遺物 (IV類土器)



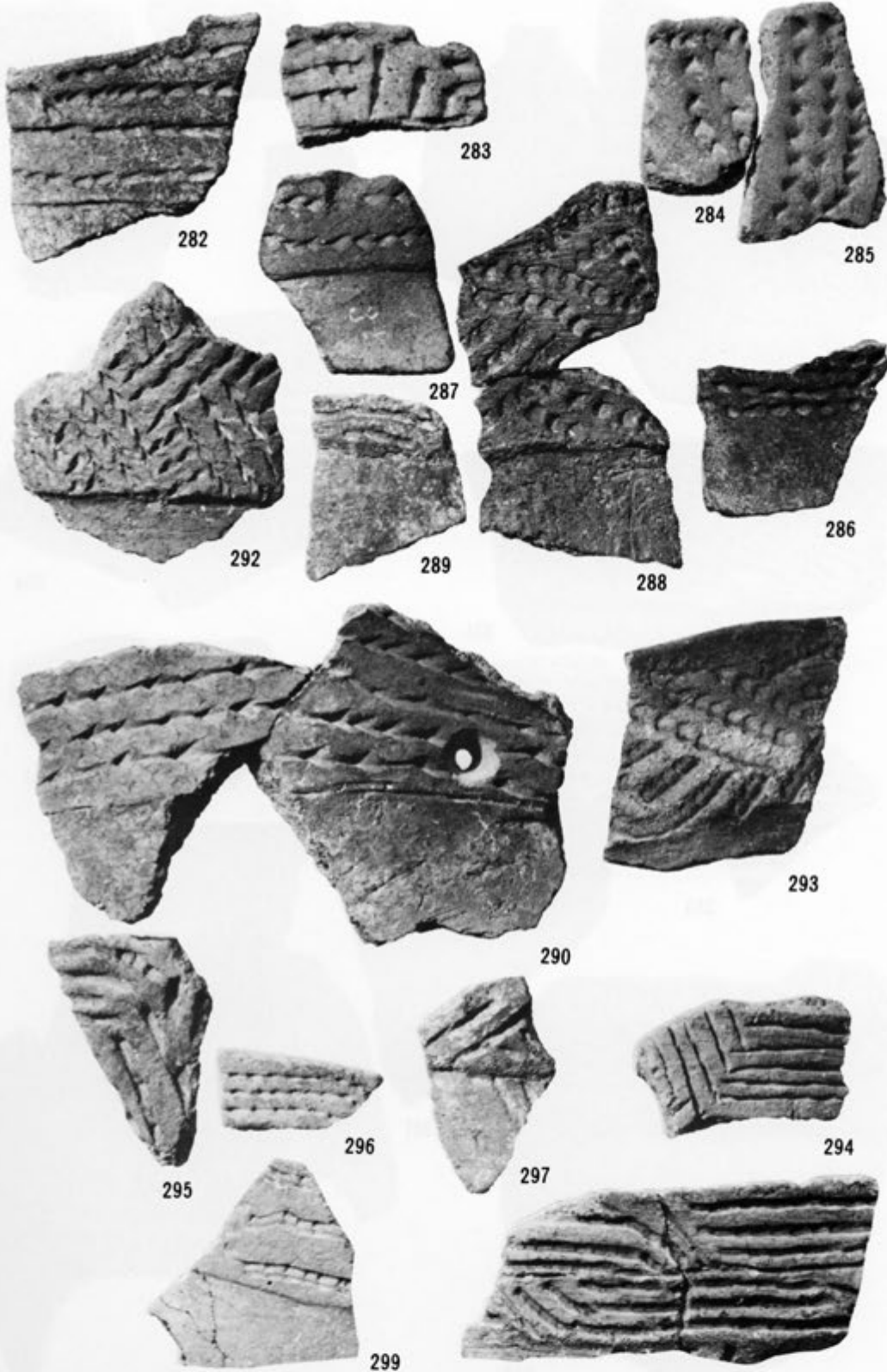
第3地点 出土遺物 (IV類土器)



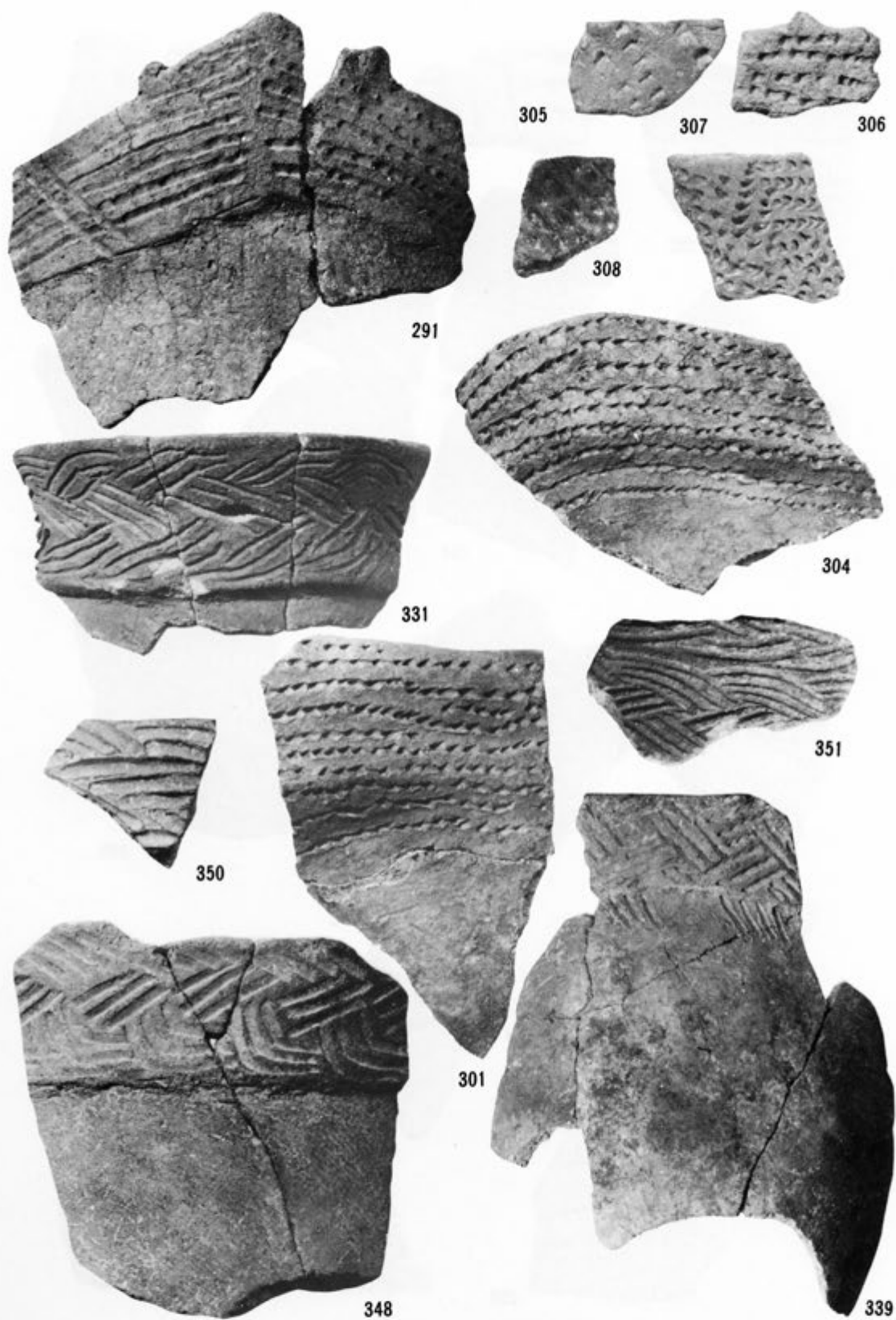
第3地点 出土遺物 (VI・VII類土器)



第3地点 出土遺物 (Ⅶ・Ⅺ類土器)



第3地点 出土遺物 (Ⅶ類土器)



第3地点 出土遺物 (Ⅶ類土器)



312



313



322



321



318



319



325



320



316



315



314



317



324



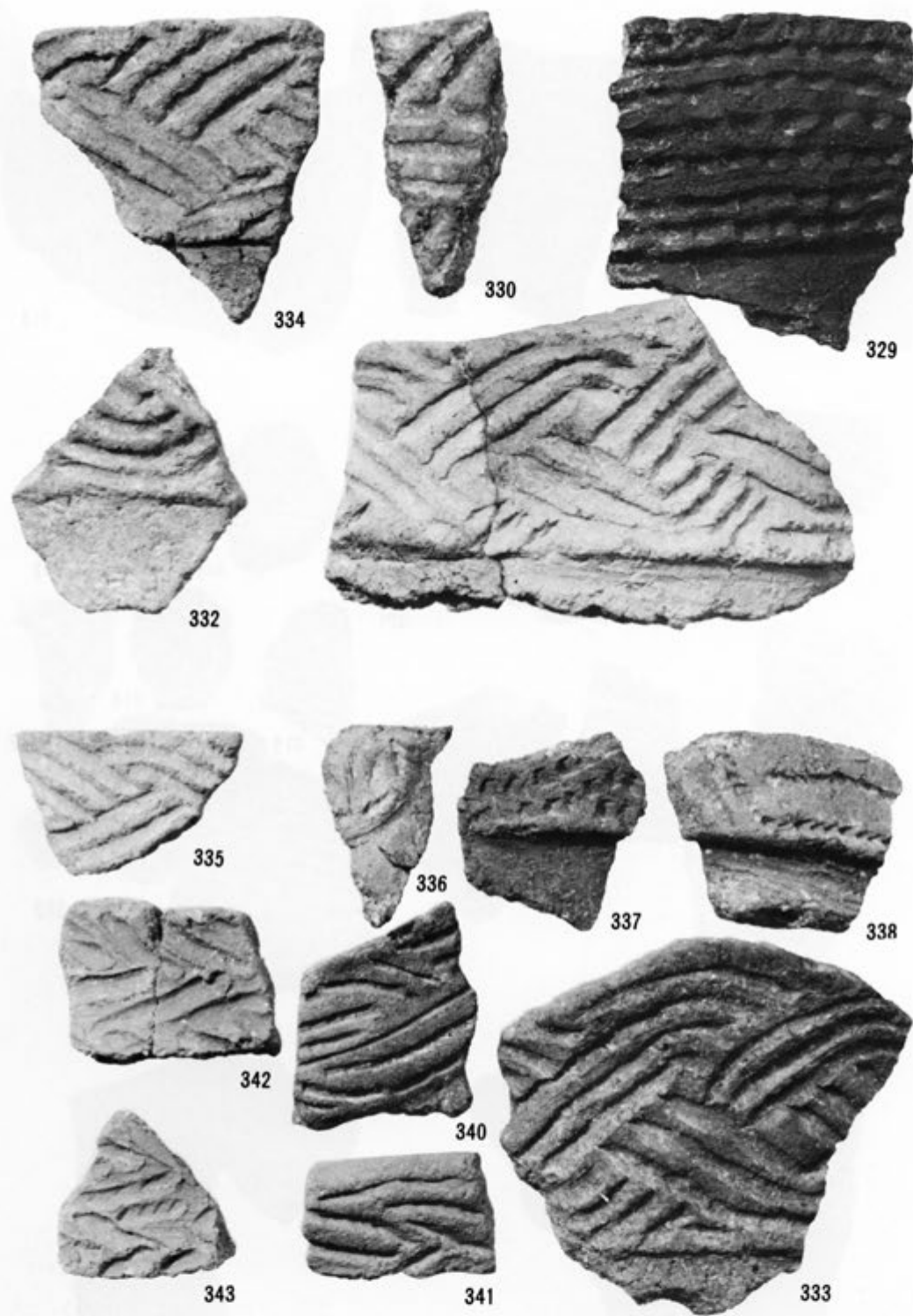
323



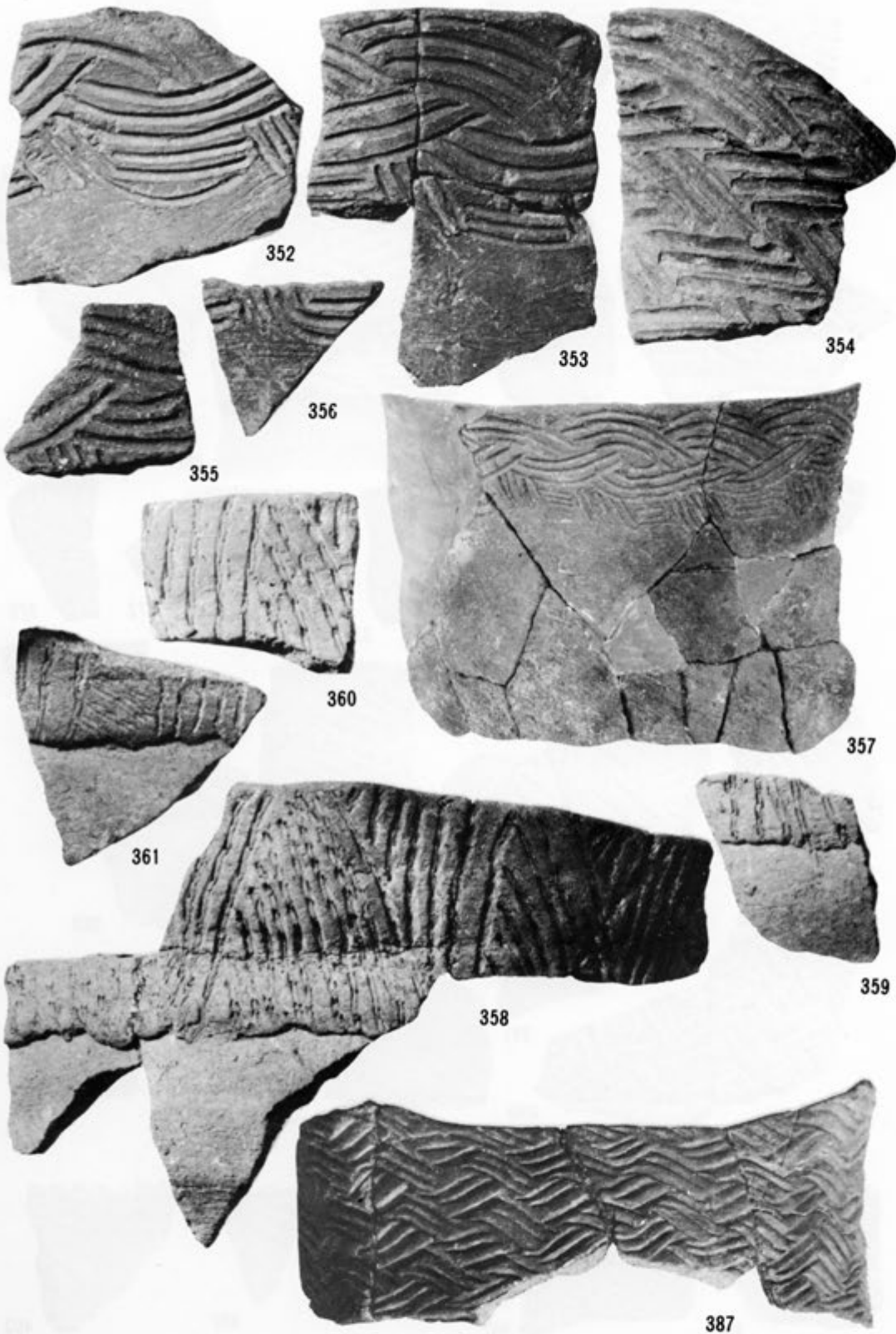
326



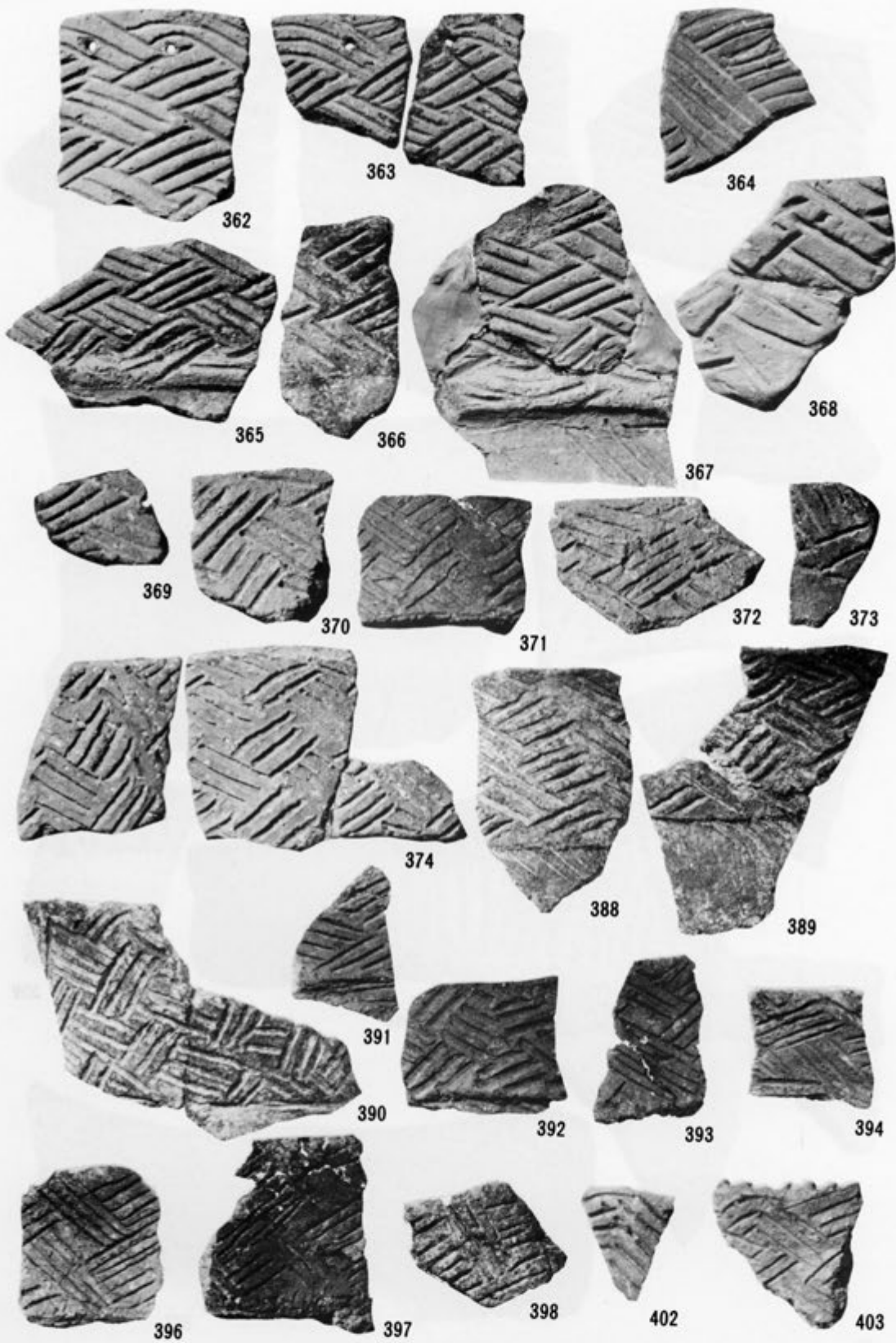
第3地点 出土遺物 (Ⅷ類土器)



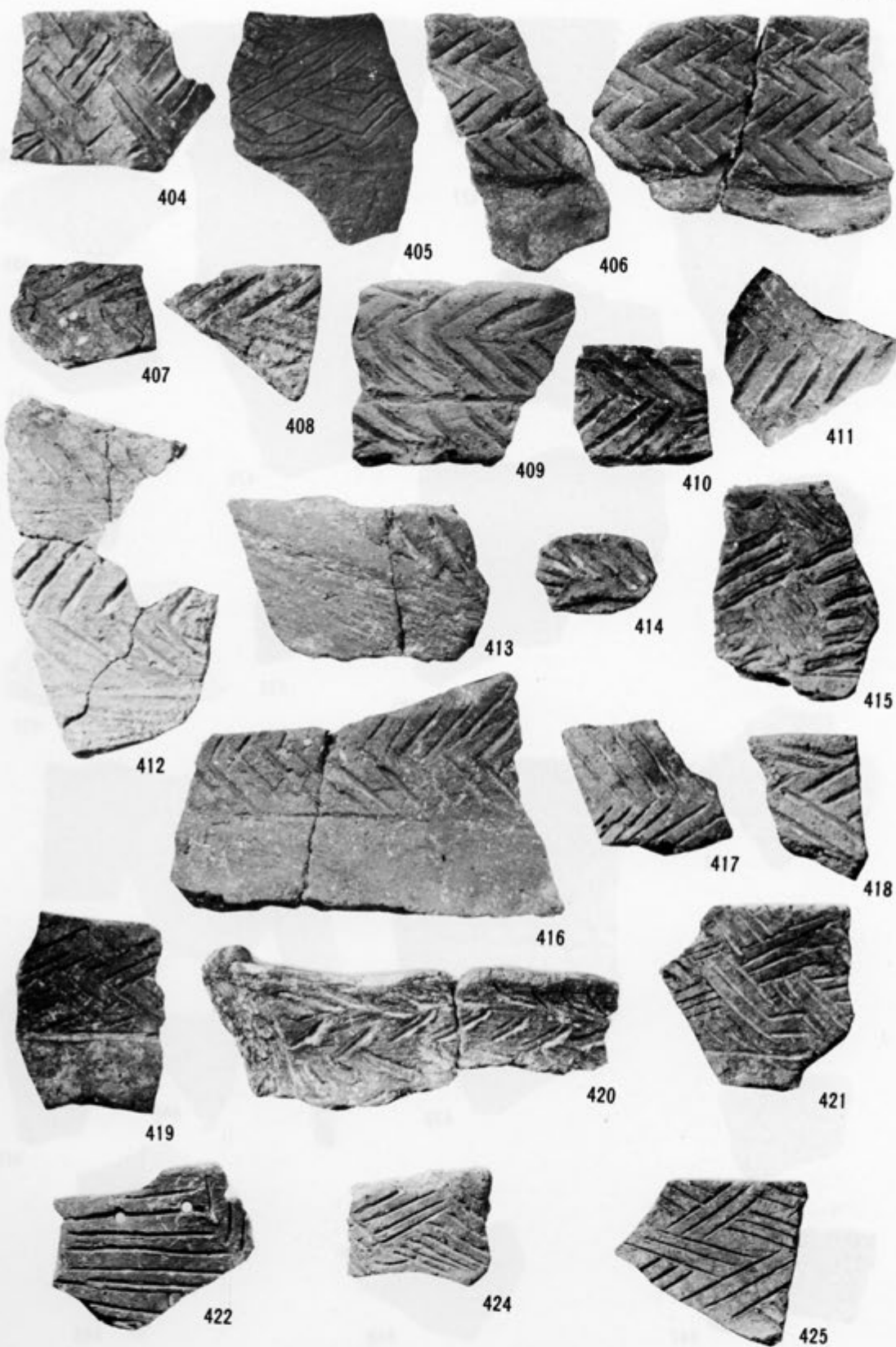
第3地点 出土遺物 (Ⅶ類土器)



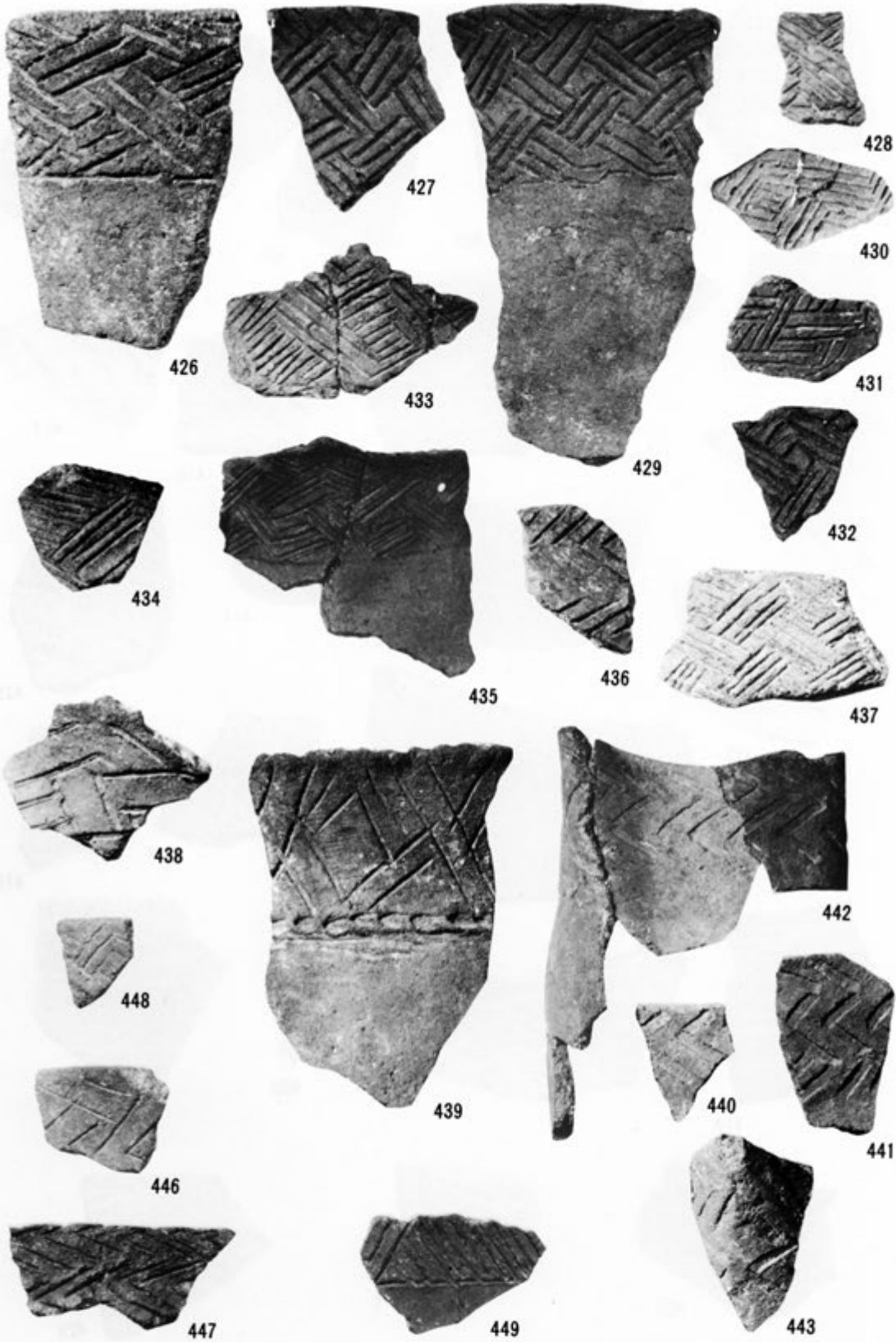
第3地点 出土遺物 (Ⅶ・Ⅹ類土器)



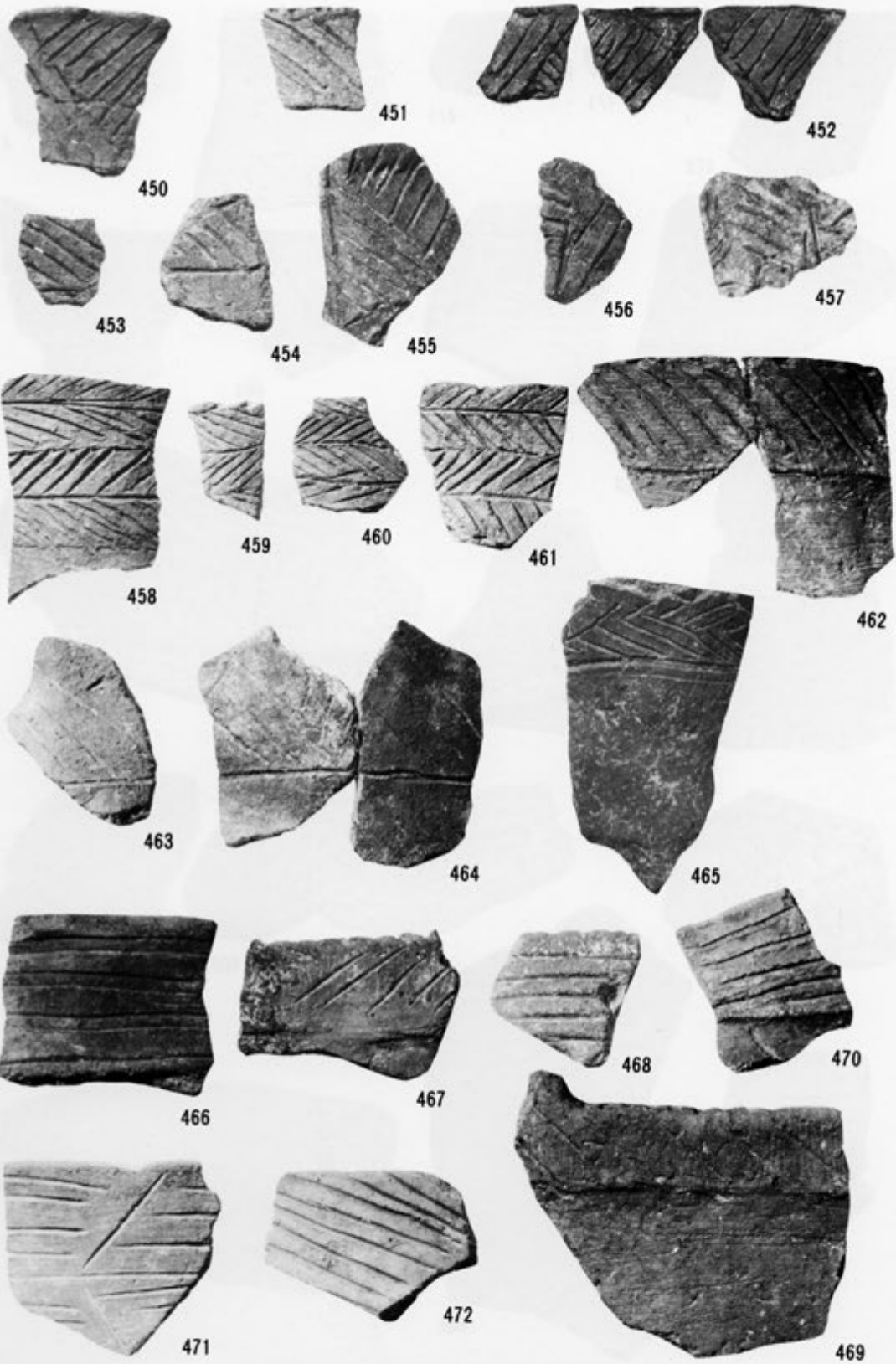
第3地点 出土遺物 (Ⅹ類土器)



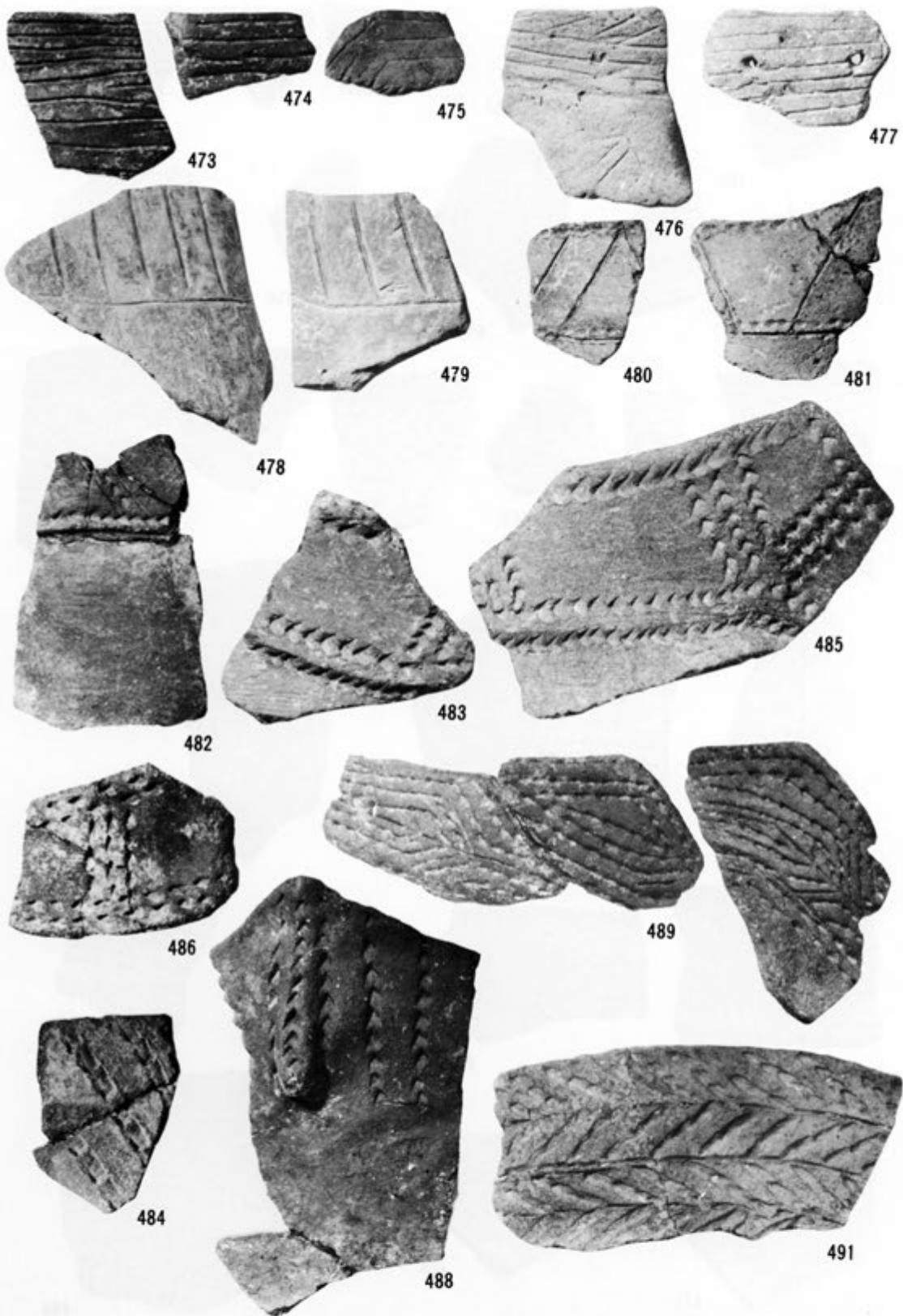
第3地点 出土遺物 (区類土器)



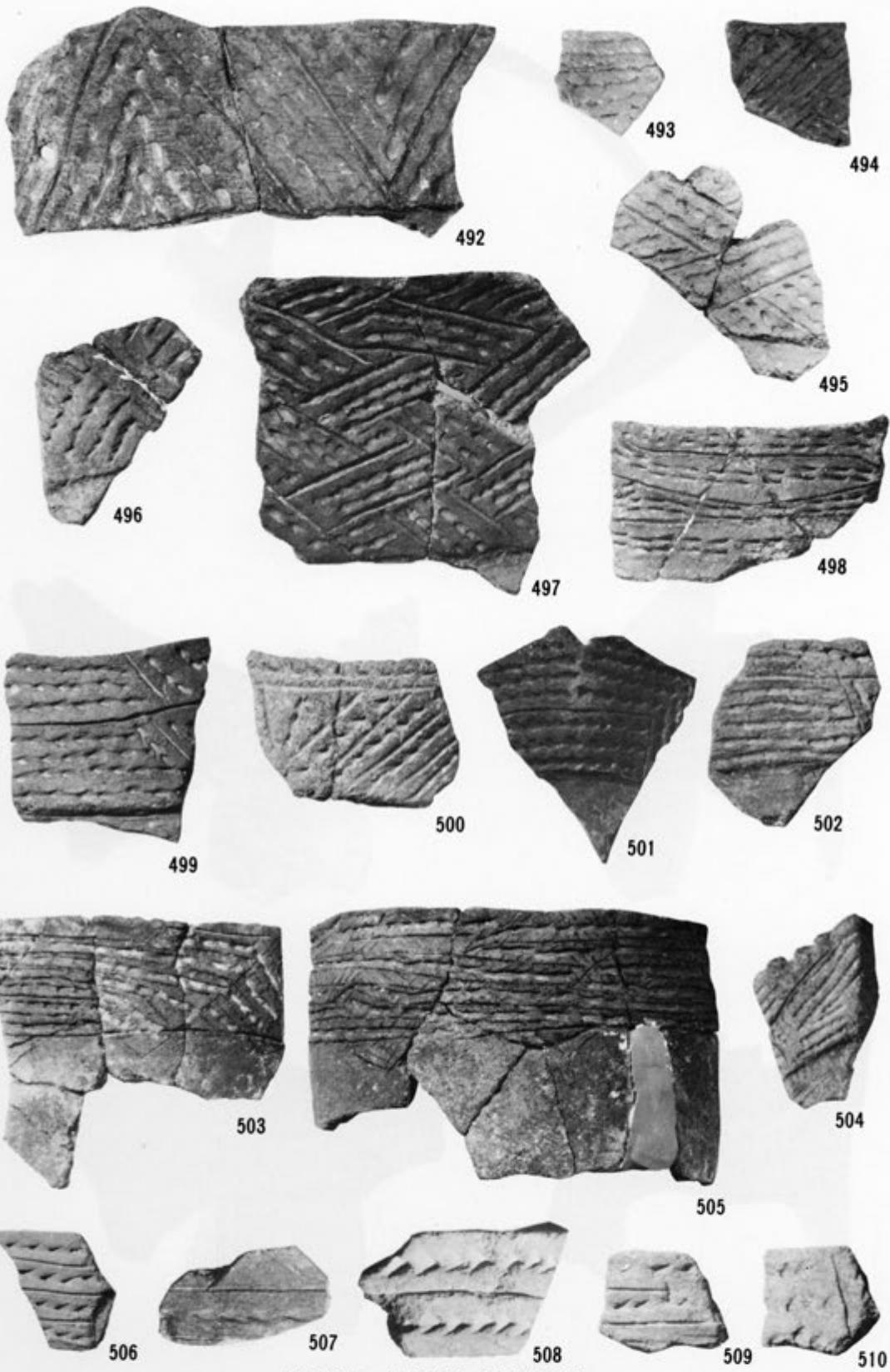
第3地点 出土遺物 (区類土器)



第3地点 出土遺物 (X・X類土器)



第3地点 出土遺物 (X·XI類土器)



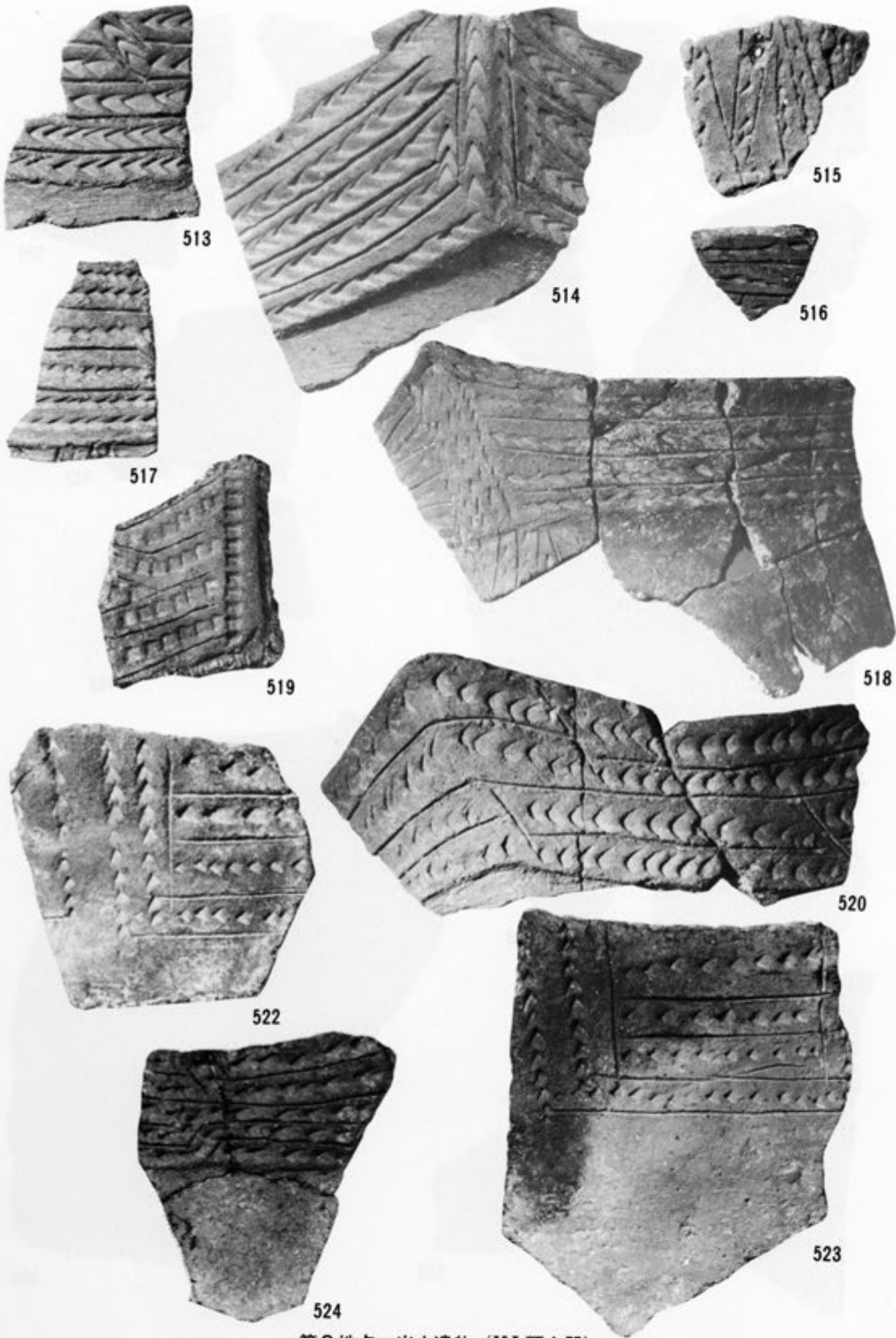
第3地点 出土遺物 (XI類土器)



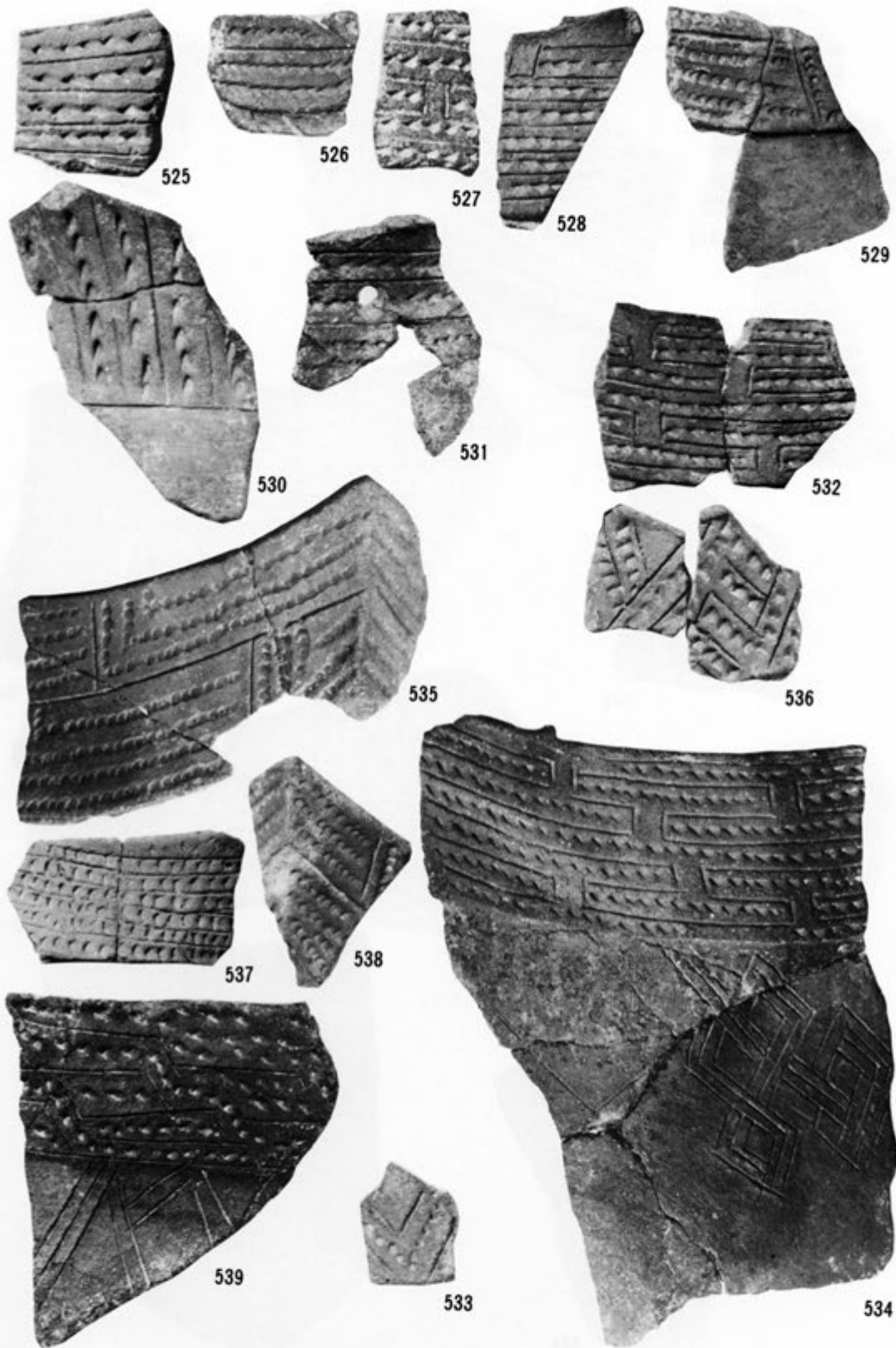
512



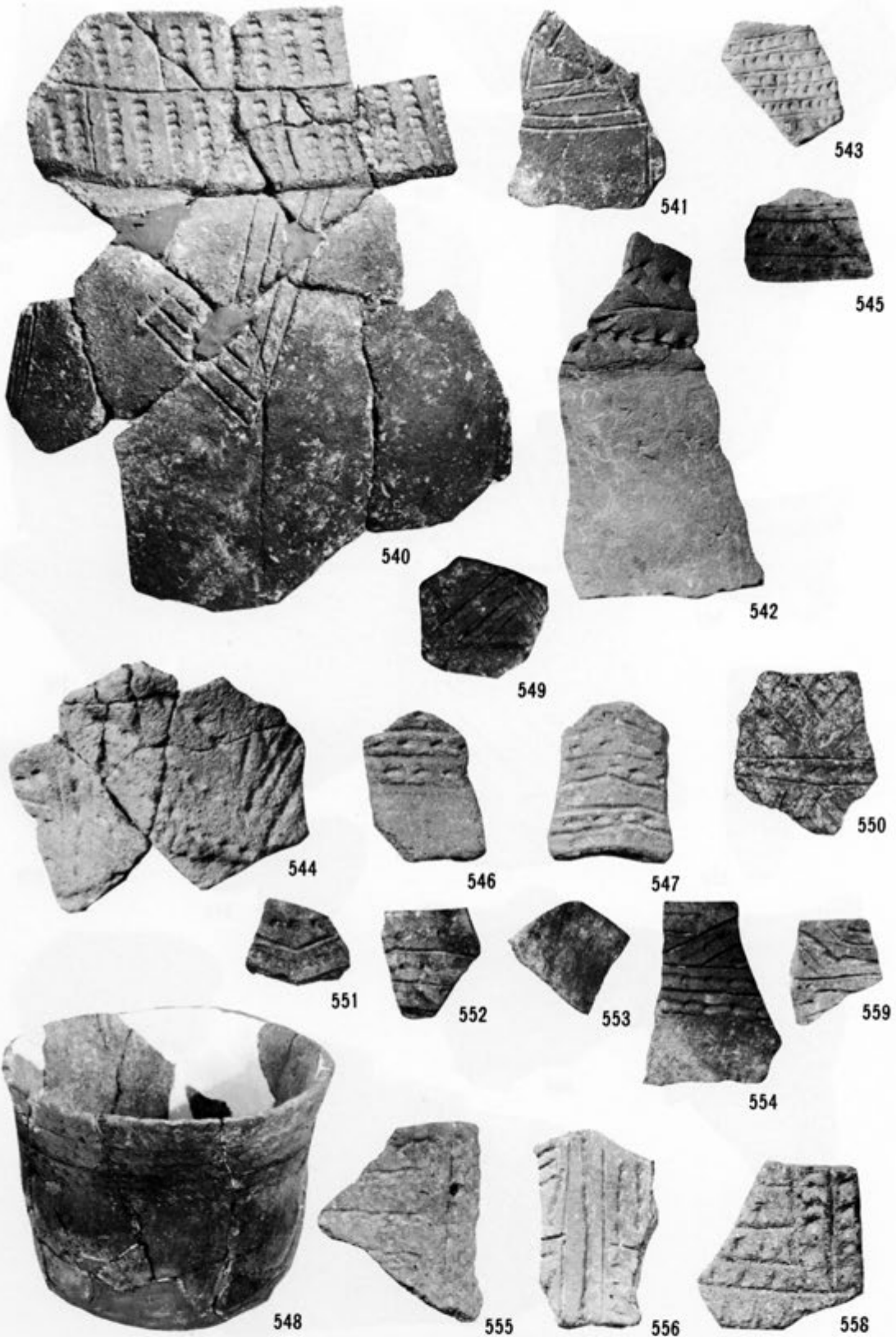
第3地点 出土遺物 (XI類土器)



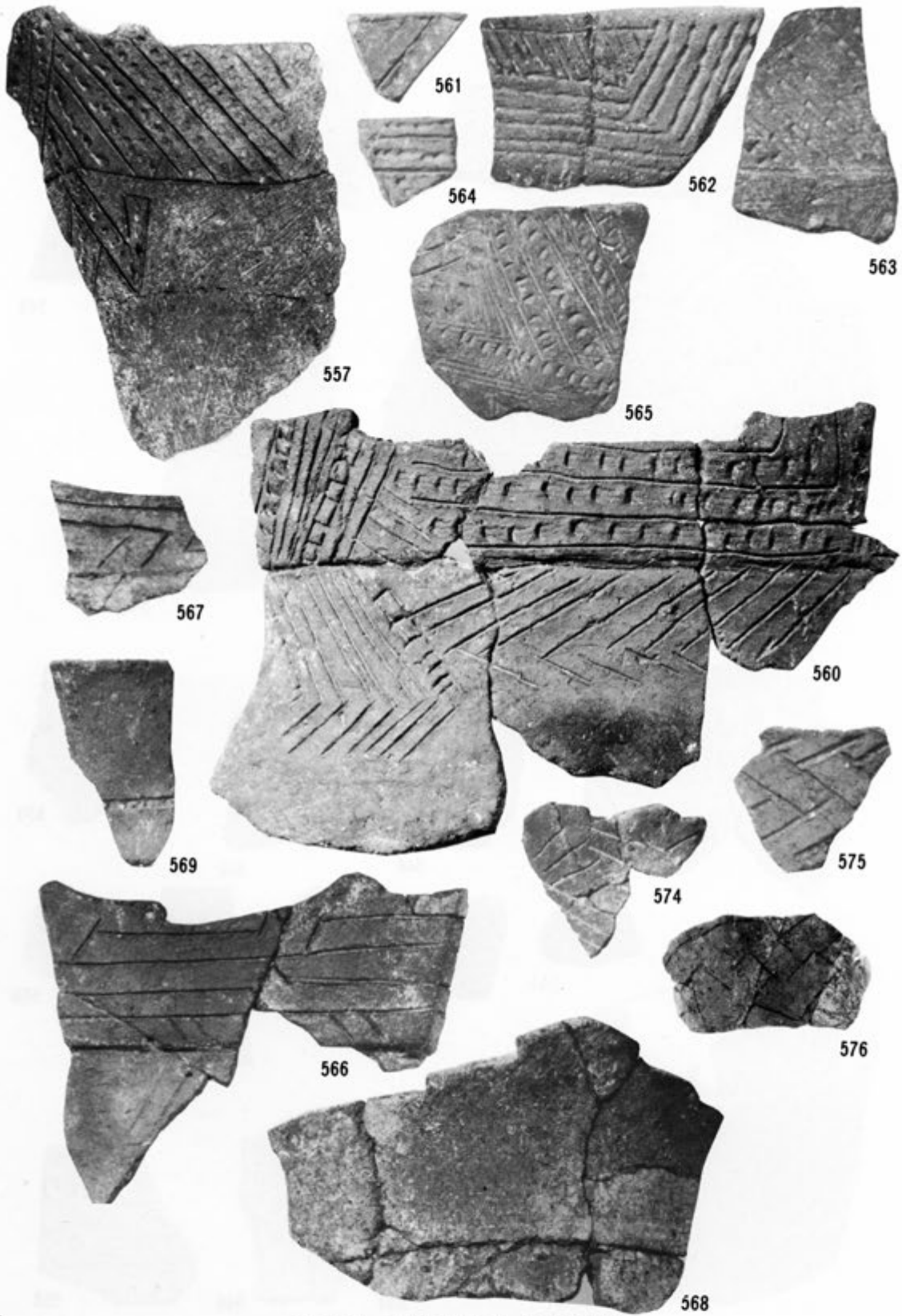
第3地点 出土遺物 (XI類土器)



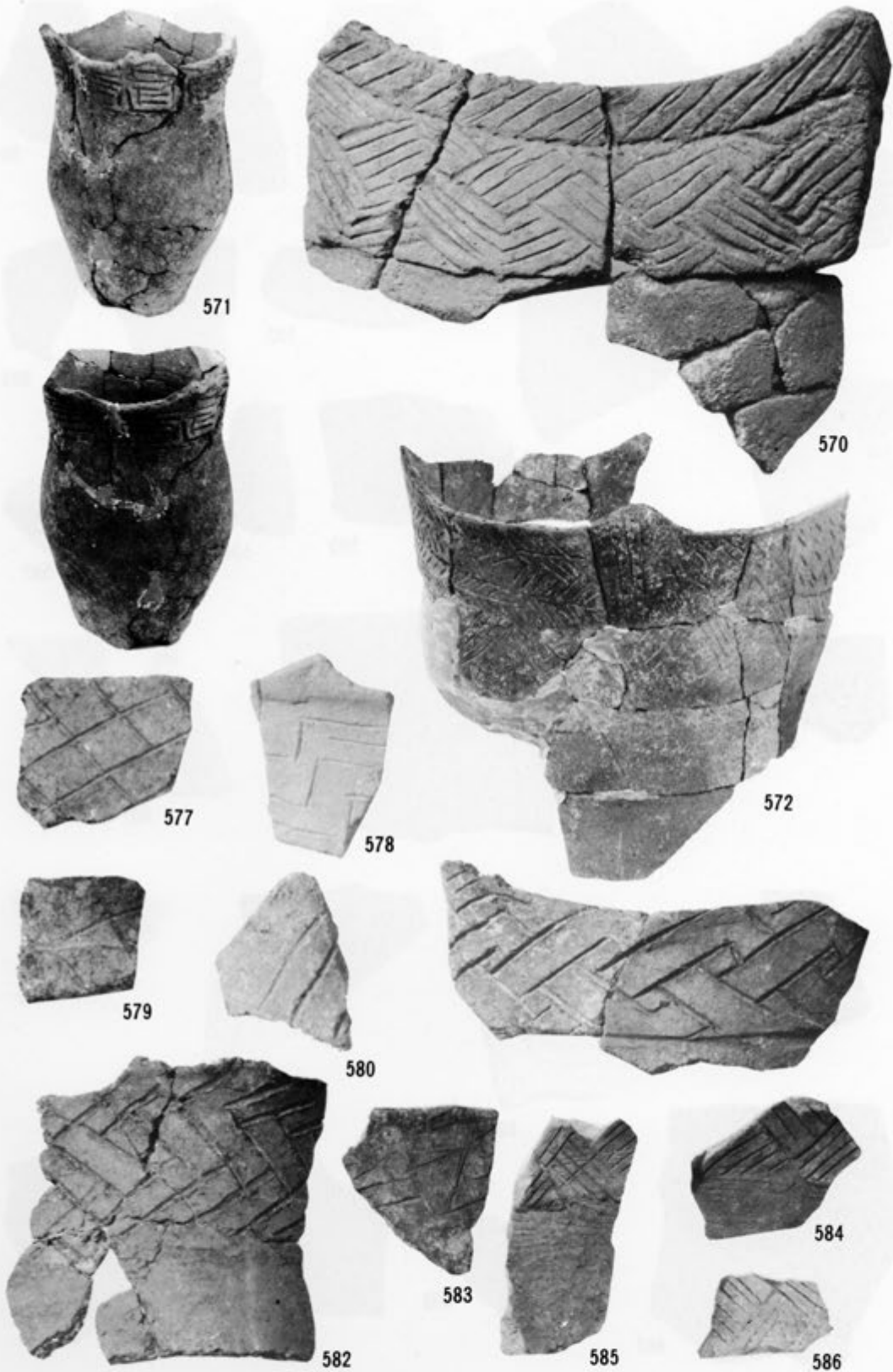
第3地点 出土遺物 (XI類土器)



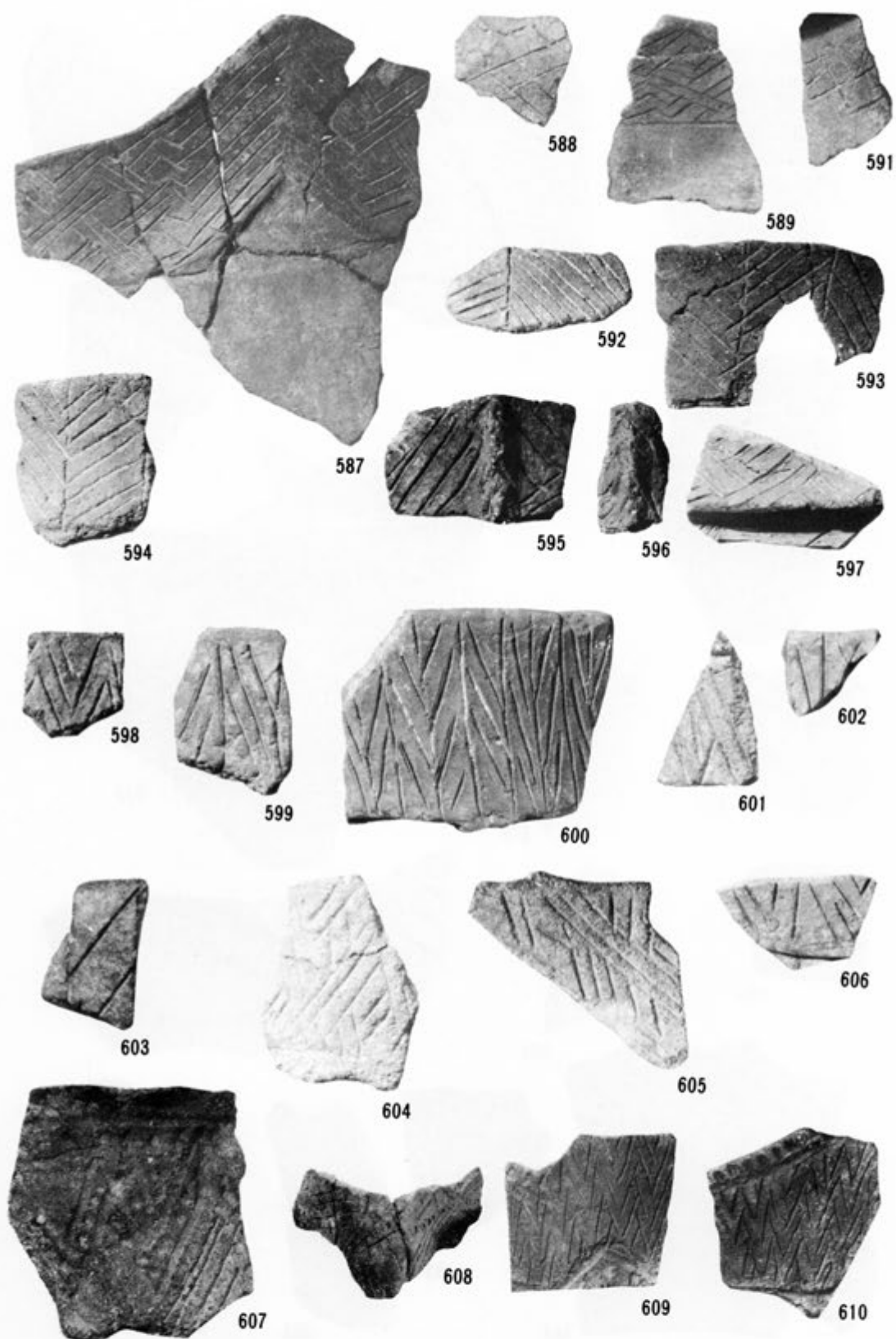
第3地点 出土遺物 (XI類土器)



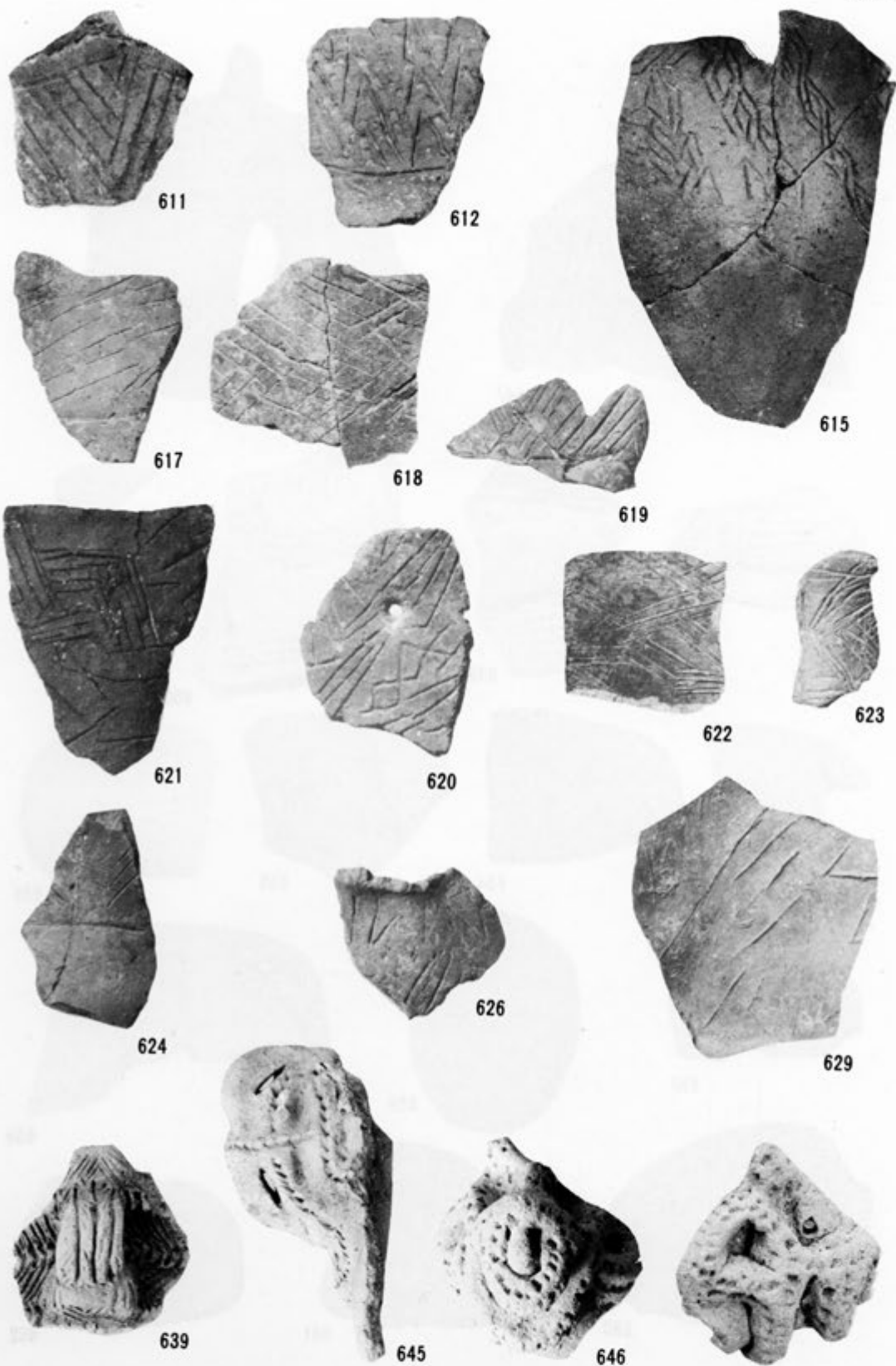
第3地点 出土遺物 (XI・XIV類土器)



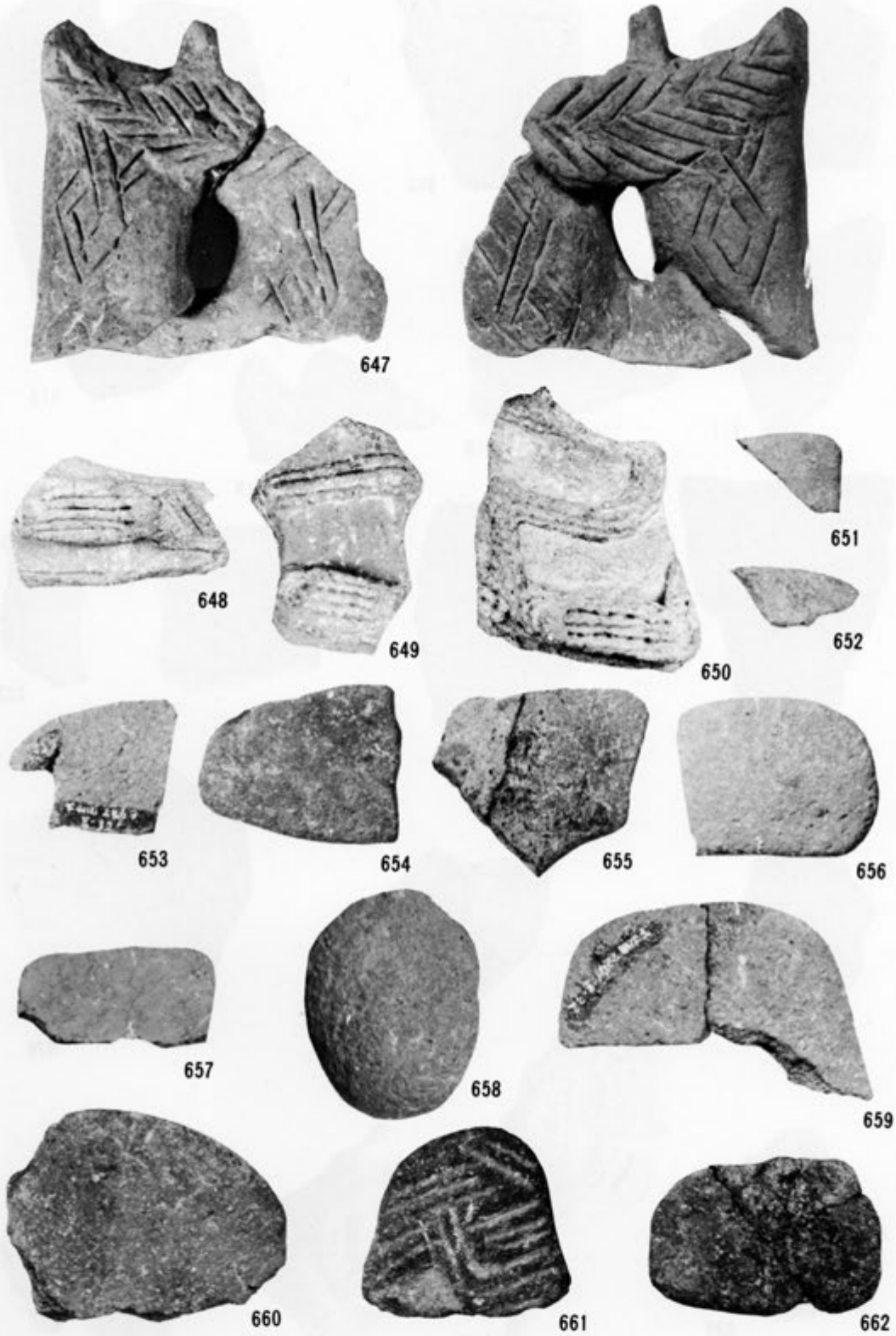
第3地点 出土遺物 (IX·X·XI·XIV類土器)



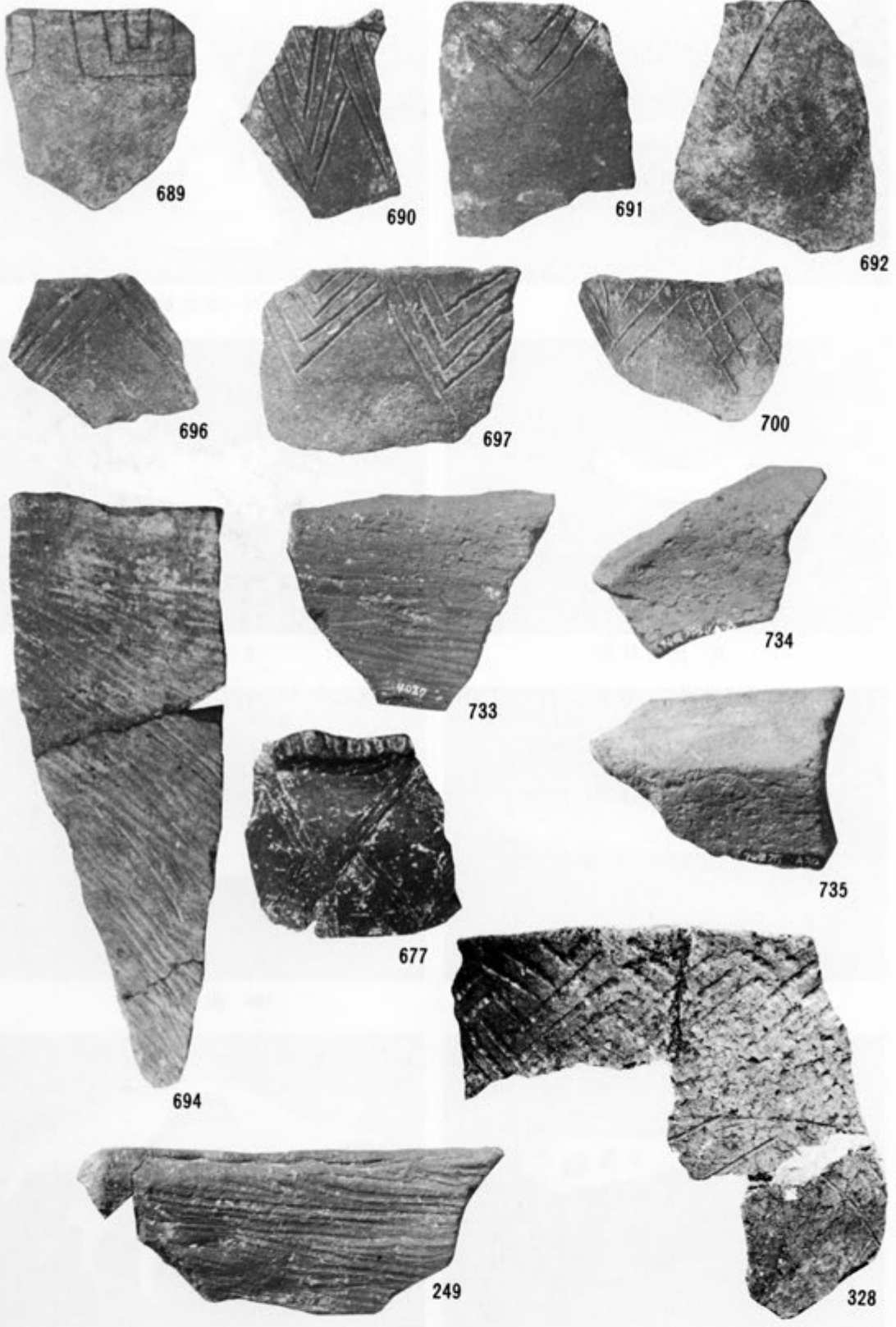
第3地点 出土遺物 (IX·XI類土器)



第3地点 出土遺物 (IX・Ⅷ類土器)



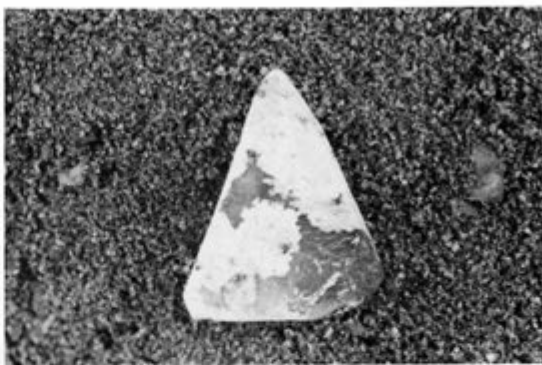
第3地点 出土遺物



第3地点 出土遺物 (Ⅱ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・ⅩⅨ類土器)



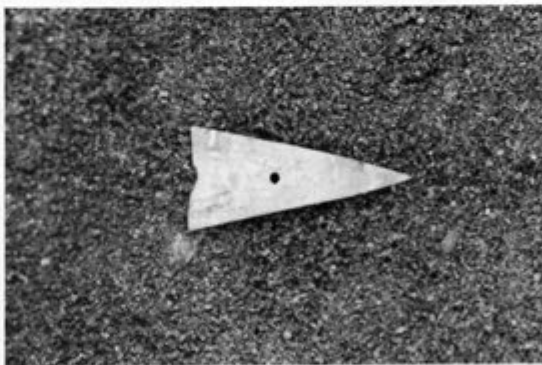
56 出土状況



10 出土状況



40 出土状況



9 出土状況



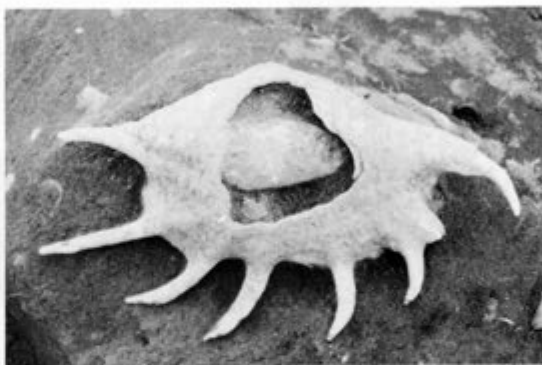
55 出土状況



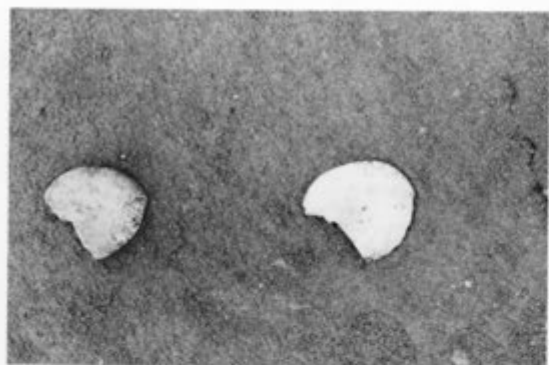
104 出土状況



16 出土状況



クモガイ出土状況



螺盖製貝斧出土状况



57 出土状况



4 出土状况



7 出土状况



72 出土状况



130 出土状况



82 出土状况



89 出土状况



66 出土状况



95 出土状况



獸骨出土状况



128 出土状况



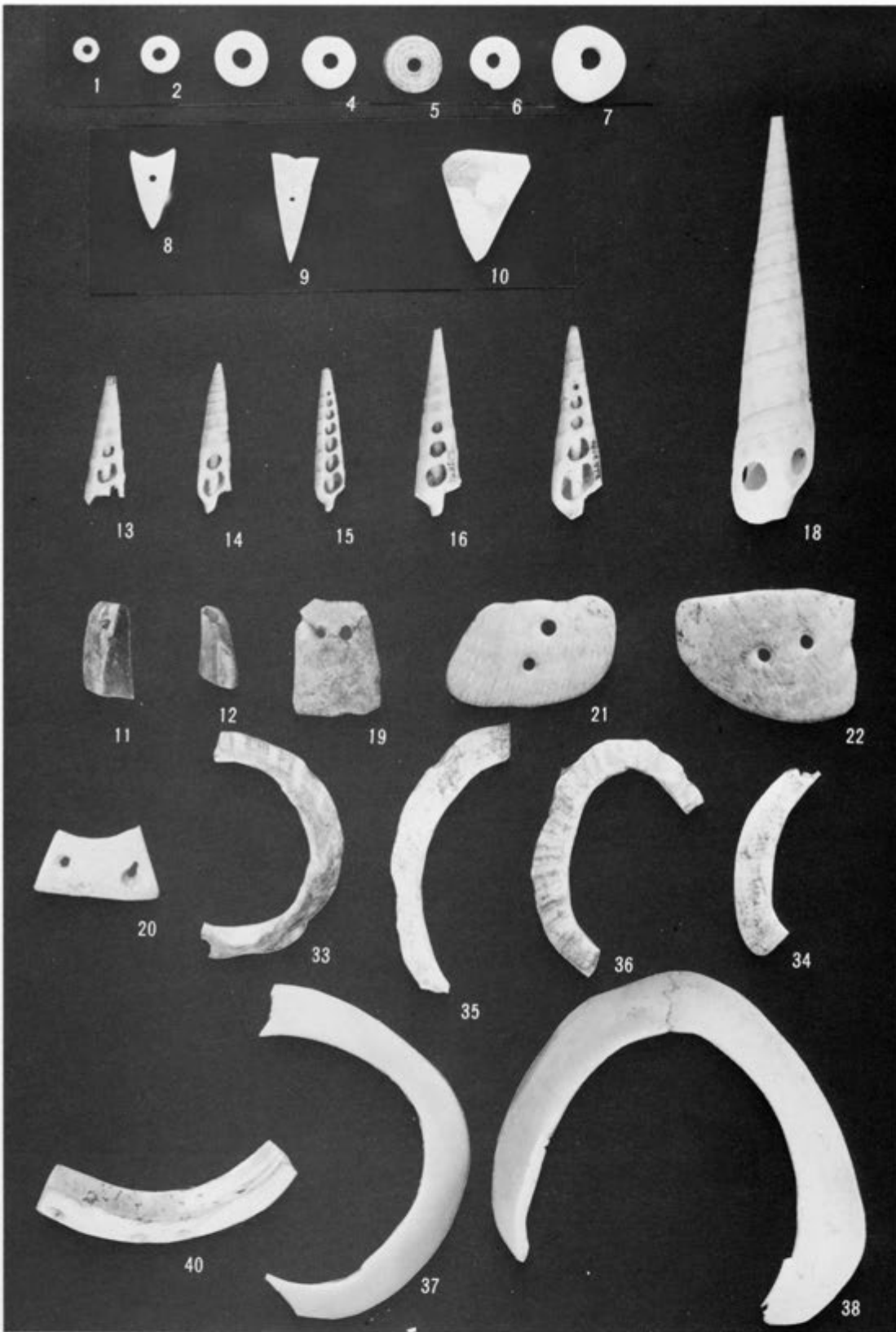
132 出土状况



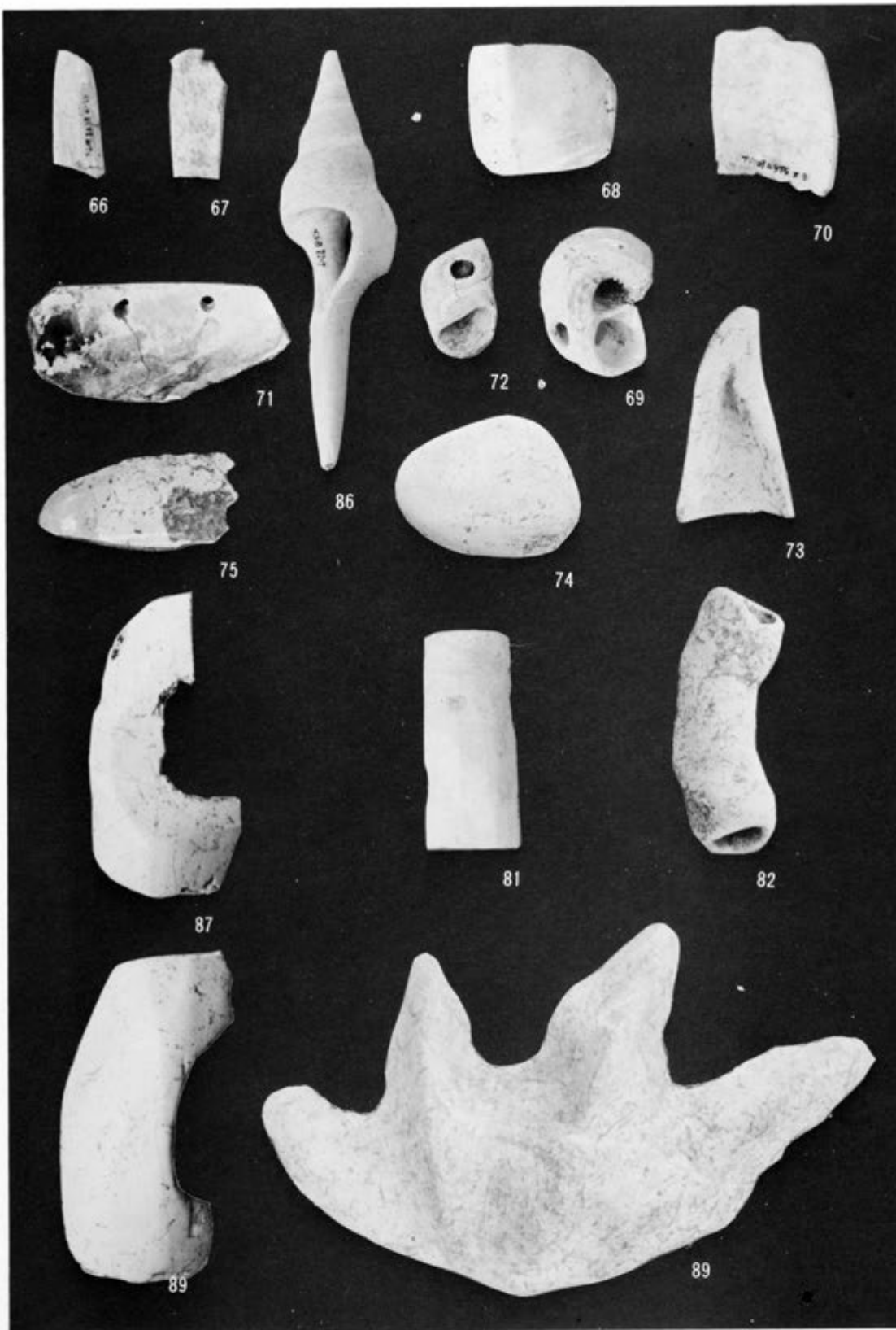
下顎骨出土状况



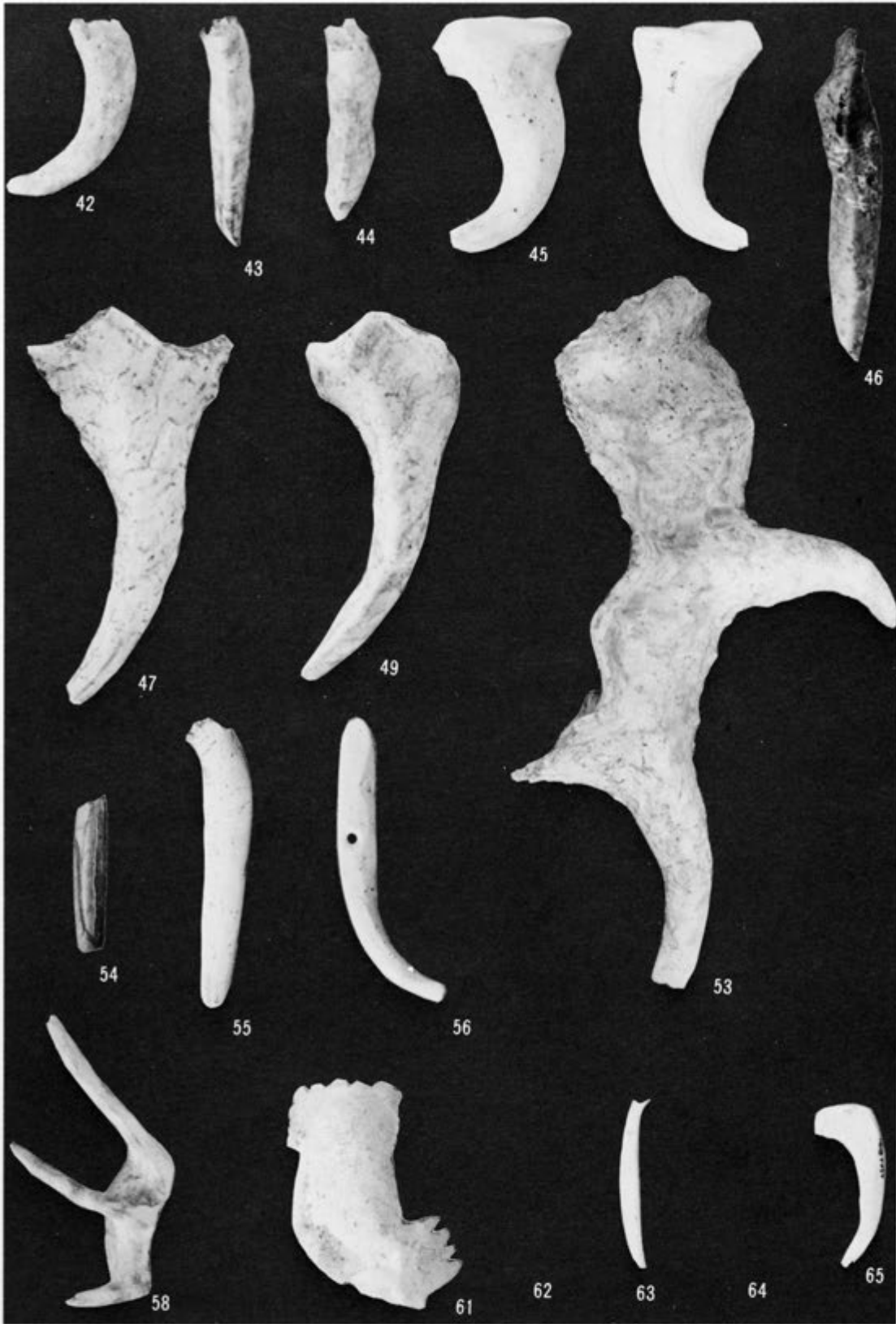
下顎骨出土状况



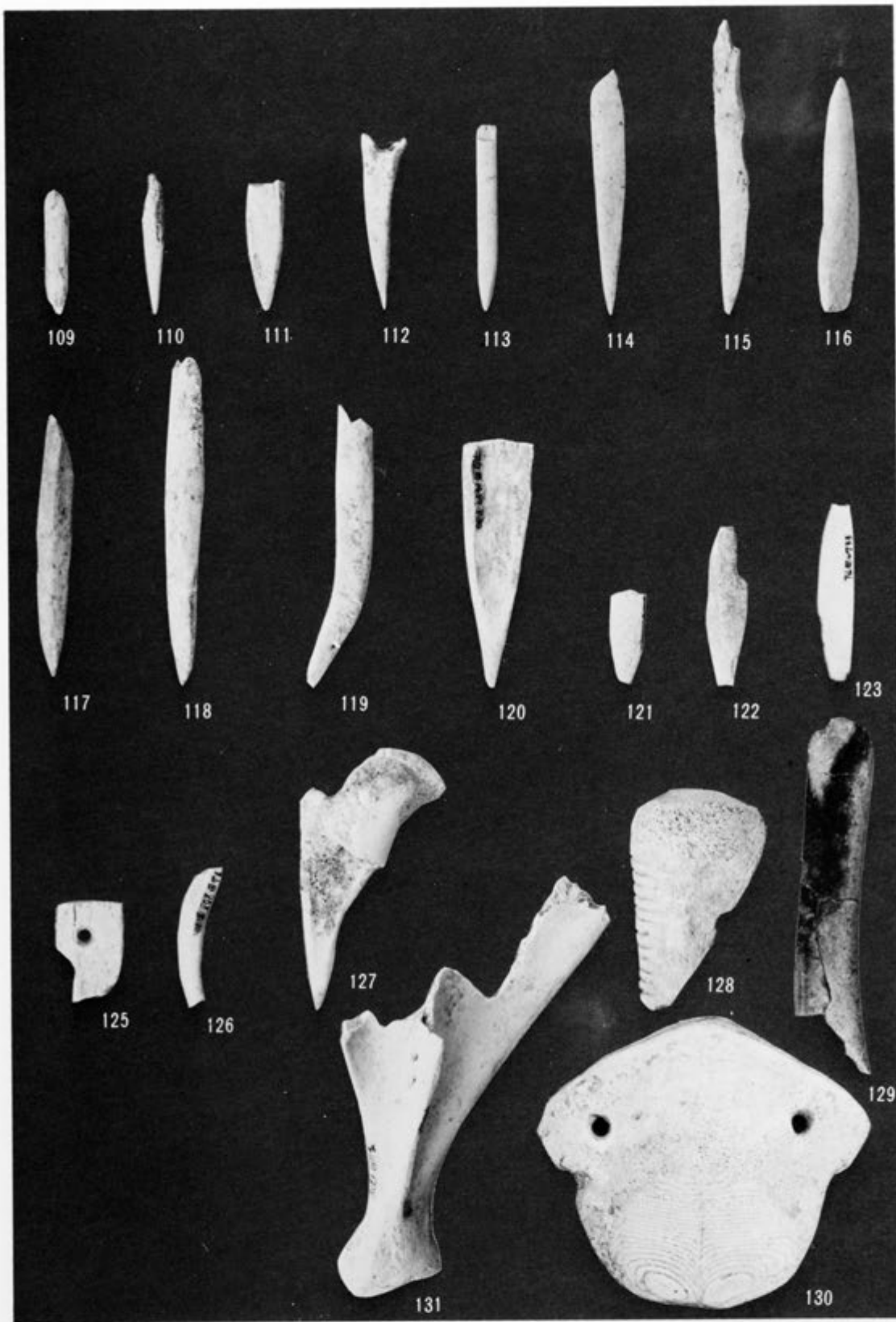
下山田丁遺跡出土貝製品



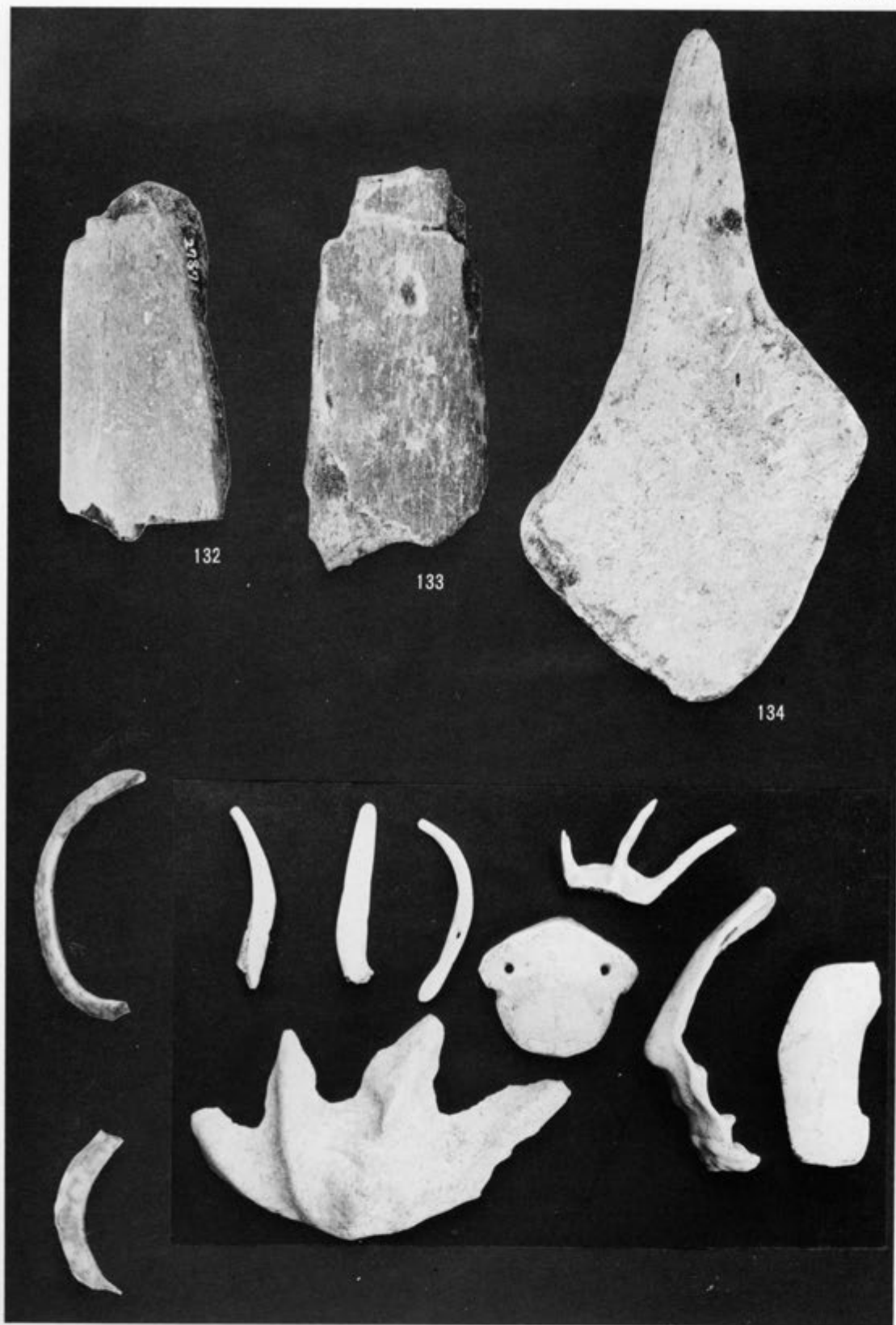
下山田Ⅱ遺跡出土貝製品



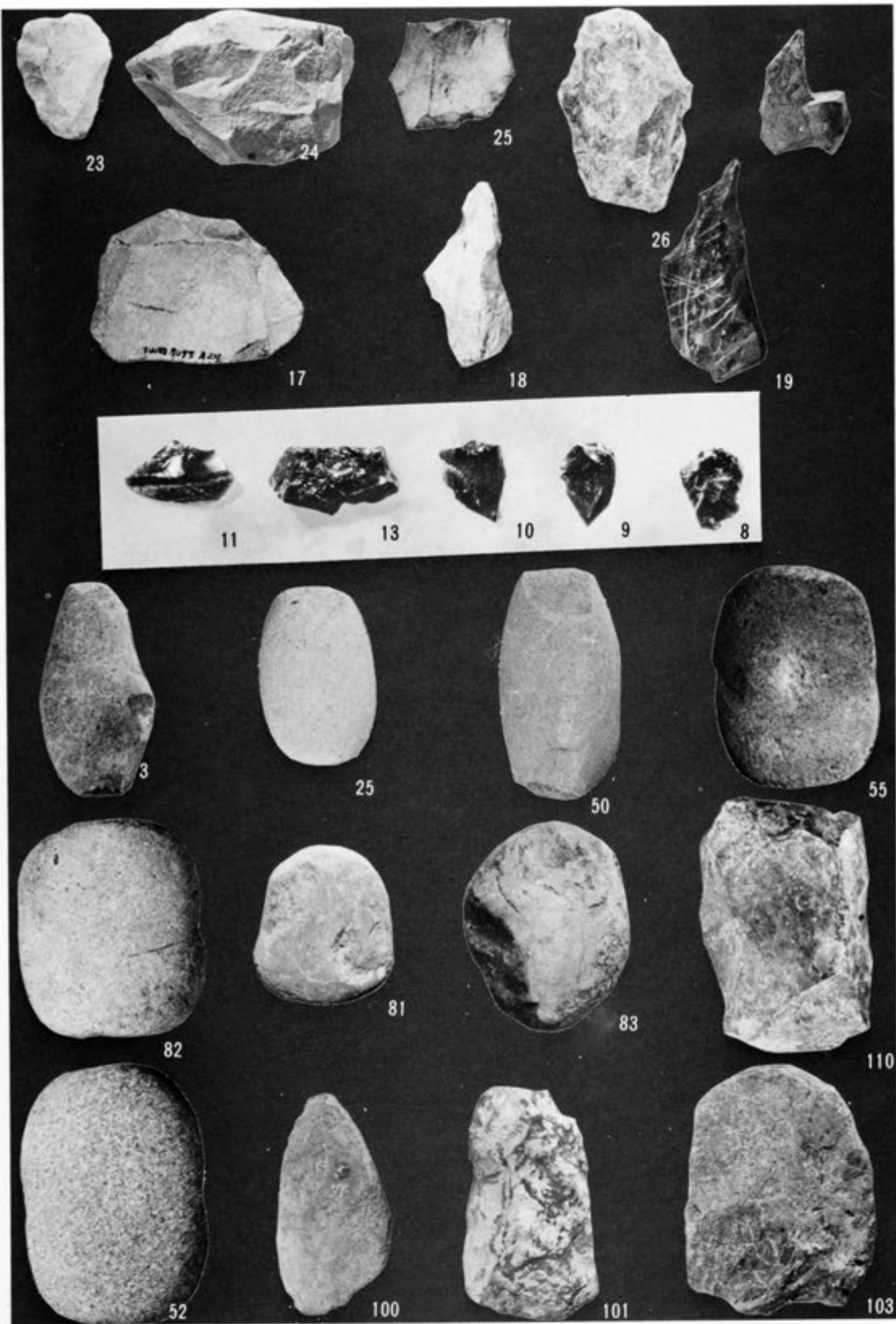
下山田Ⅱ遺跡出土貝製品・利器



下山田Ⅱ遺跡出土骨製品



下山田Ⅱ遺跡出土骨製品・貝製品



下山田Ⅱ遺跡出土石器



下山田Ⅱ遺跡調査風景



106



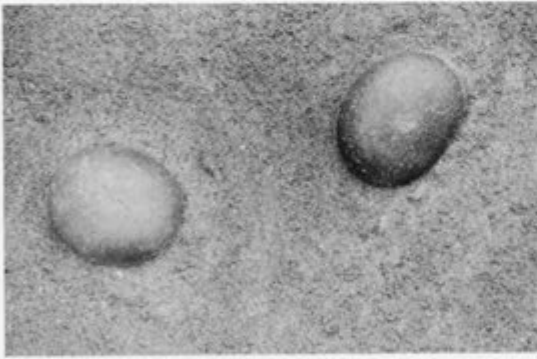
107



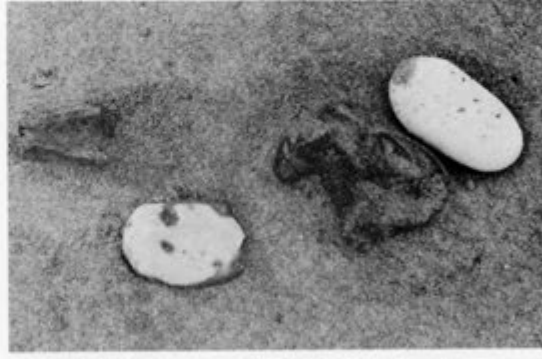
108



109



石器出土状況



石器出土状況



調査後の風景



調査後の風景



作業員一同



和野トフル墓出土品



和野トフル墓出土品

鹿児島県奄美大島和野トフル墓出土の人骨

小片丘彦・峰 和治・川路則友・山本美代子・岡元満子
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座)

鹿児島県奄美大島下山田Ⅱ遺跡出土の縄文時代人骨

小片丘彦・峰 和治・川路則友・山本美代子
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座)

挿 図 目 次

第130図 和野トフル墓の位置…………… 263	第133図 出土遺物- 2(和野トフル墓)…… 308
第131図 和野トフル墓内分布図…………… 306	第134図 出土遺物- 3(和野トフル墓)…… 309
第132図 出土遺物- 1(和野トフル墓)… 307	

表 目 次

表 1 部位別の残存数…………… 264	表 12 未成人骨資料…………… 283
表 2 成人骨資料…………… 264	表 13 未成人頭蓋計測値…………… 286
表 3 成人頭蓋計測値(男性) …… 266	表 14 未成人頭蓋の非計測的小変異… 287
表 4 成人下顎骨計測値(男性) …… 266	表 15 未成人体肢骨計測値…………… 288
表 5 成人頭蓋計測値(女性) …… 267	表 16 未成人体肢骨の骨体計測値…… 289
表 6 成人下顎骨計測値(女性) …… 267	表 17 化骨状態(1)…………… 290
表 7 成人頭蓋の非計測的小変異…… 268	表 18 化骨状態(2)…………… 290
表 8 和野トフル墓出土永久歯…………… 278	表 19 病的所見の観察資料数…………… 296
表 9 成人体肢骨計測値…………… 280	表 20 変形性関節症…………… 296
表 10 和野トフル墓人骨と与論島 島民の体肢骨計測値比較…………… 282	表 21 慢性炎症性変化…………… 296
表 11 右大腿骨最大長から算出した 推定身長…………… 282	表 22 嚢内人骨一覧…………… 301
	表 23 和野トフル墓出土品一覧 …… 310

鹿児島県奄美大島下山田Ⅱ遺跡出土の縄文時代人骨

表 1 出土人骨資料…………… 311	表 2 下顎骨計測値…………… 313
---------------------	---------------------

図 版 目 次

図版 1 1, 2号人骨頭蓋…………… 315	図版 8 19号人骨体肢骨, Ⅶ嚢納骨状況, Ⅹ嚢納骨状況…………… 322
図版 2 3, 4号人骨頭蓋…………… 316	図版 9 副鼻腔の炎症性変化, 他…………… 323
図版 3 14, 16号人骨頭蓋…………… 317	図版10 腰椎・仙骨体の骨棘形成, 他… 324
図版 4 19号人骨頭蓋 Ⅶ嚢納骨状況… 318	図版11 頸椎に見られた切創, 他…………… 325
図版 5 1, 2号人骨体肢骨…………… 319	図版12 1号人骨体肢骨の集積状況, 他 326
図版 6 3, 5号人骨体肢骨…………… 320	図版13 下山田Ⅱ遺跡出土人骨…………… 327
図版 7 14, 16号人骨体肢骨…………… 321	

鹿児島県奄美大島和野トフル墓出土の人骨

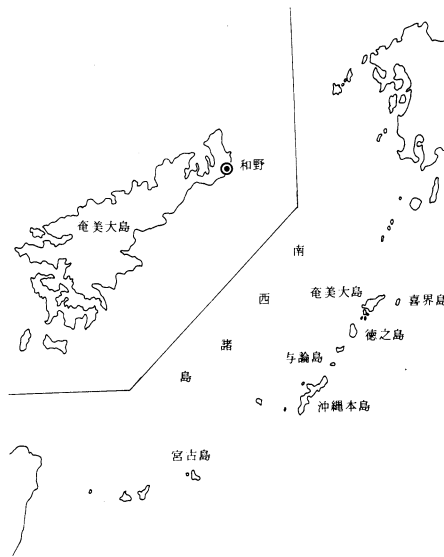
小片丘彦・峰 和治・川路則友・山本美代子・岡元満子
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座)

〈はじめに〉

奄美諸島には古くから複葬の風習があった。死者を風葬や土葬に付した後、一定期間を経て洗骨し、遺骨を定められた共同の墓所に安置するものであるが、このような墓所が今なお各地に残されている。その構造や呼称は島々によって異なるが、奄美大島本島の北部一帯では、固結砂丘に横穴を穿ち、遺骨を納めた墓所を「トフル」と呼んでいる。

1984年12月、新奄美空港建設に伴い、鹿児島県大島郡笠利町和野に所在するトフル墓1基の調査が実施され、多数の人骨が検出された(第130図)。遺骨の納められていた甕の型式や伴出した祭祀用品などから、この墓が機能していた時期は江戸時代中期以降とみられる。また、地元で伝わる話などから、明治初期には廃棄されたと推測される。

奄美諸島の人骨については、縄文・弥生時代の遺跡から出土した資料を除けば、大山(与論島, 1956), 中野(喜界島, 1958), 菊地(与路島, 1959), 岩井(徳之島, 1959), Tagaya & Ikeda(奄美各島, 1976)らの頭蓋骨のほか、平田(与論島, 1958), 広沢(与論島, 1959)の上・下肢骨に関する報告があるが、いずれも骨の形態研究や地域間の比較に主眼を置いたものである。また、末永・長沢(与論島, 1972), 小野ら(喜界島, 1973)によって、民俗学的立場からの風葬墓調査も行われているが、人骨に関する詳しい記載はなされていない。今回調査した和野トフル墓は、その機能を止めてから長期間放置され、納められた遺骨にまつわる事柄も、既に人びとの記憶から消えてしまっている。しかし、このトフル墓は、実際に用いられていた当時の状況を比較的好く残しているとみられることから、人骨の形質調査と並行して、人骨の納められた状況を検討し、形質人類学的観点から、不明な点が多い当時の葬法を明らかにするための足がかりを得たいと考えている。本トフル墓の人骨が、これまで報告の少なかった奄美大島本島人の形態特徴を地域的、時代的に検討していくための基礎資料を提供し、併せて葬制研究のうえでも、資料のひとつとなることを願っている。



第130図 和野トフル墓の位置

〈出土状況および人骨資料〉

納骨されていた横穴は固結砂丘を人工的に穿ったもので、入口幅約80cm、内部は奥壁幅約290cm、奥行き約230cm、高さ100～130cmほどの規模をもつ。横穴内の底面は入口より奥壁に向かって低くなっており、約50cmの厚さに土砂が流入していた。このため調査開始前は、甕の上部や少数の人骨、木片等が見られたにすぎなかったが、調査が進行するにつれ、土砂中に多量の人骨が埋没していることが明らかとなった。

人骨は甕内に納められていたものと、甕の外で集積または散乱状態にあったものに分けられる(第131図)。1個体分の骨格の配列が解剖学的に正常な、いわゆる風葬(1次葬)の原状態にある例は全く見いだされず、どの人骨も洗骨・改葬の操作や、後世の人為的ないし自然現象による攪乱を受けたものとみられる。人骨の整理作業は、原則として12個の甕(I～XII)および甕外に設定した14の任意区画ごとに行った。甕は、ほぼ原形を保ったものから、大破したまでのまであるが、複数個体分の人骨が納められていた甕が大半を占める。また、甕の破損によって外に流出したと思われる骨があり、数m離れた位置にあった骨片同士が接合する場合や、明らかに同一個体の骨が別の甕から検出される例も見られ、1個体の骨格が広範囲に分布していたことが、整理作業の段階で追確認された。多量の人骨がこのような散乱状態にあるうえ、破損も大きいため、個体識別や帰属判定の困難な例が全出土骨の相当部分を占める。従って、総個体数や性比、年齢構成などの確定は難しい。同一個体と思われる骨を、大きさや形状によって、同じ甕内にあるものから、甕の外にあっても比較的周辺に残存するものへと順次判定を行った。全身骨格のうち、同一部位が何個体分存在するかを調べた結果(表1)、最も多くの残存数が確認されたのは、下顎骨正中部の49個体であった。実際の被葬者はこれより多かったと考えられ、この横穴内に少なくとも50個体以上が納められていたと推測される。この中で、ほぼ全身の骨格残存を確認し得たのは9個体にとどまった。

以下、成人骨と未成人骨に分け、計測・観察所見や病変その他の特記所見を記載し、さらに本トフル墓の葬法、葬制についても若干の検討を加える。

表1 部位別の残存数

	成人	未成人	計
前頭骨	28	4	32
側頭骨(右)	38	6	44
側頭骨(左)	38	6	44
後頭骨	39	5	44
下顎骨	43	6	49
舌骨	11	0	11
環椎	29	5	34
軸椎	28	3	31
第5腰椎	27	2	29

体肢骨については表19参照

表2 成人骨資料

人骨番号	性別	年齢	備考
1号	男性	熟年	横穴入口付近に集積
2号	女性	壮年	頭蓋はX甕の横、体幹・体肢骨はXI甕内
3号	女性	壮年	横穴中央部に集積
4号	男性	壮年	頭蓋のみ残存
5号	男性	壮年	X甕内
6号	女性	熟年	頭蓋のみ残存
7号	女性	壮年	頭蓋のみ残存
8号	女性	壮年	頭蓋のみ残存
9号	男性	壮年	頭蓋はVII甕の奥、体幹・体肢骨はVII甕内
10号	女性	壮年	甕外集積
11号	女性	壮年	VI甕内
12号	男性	熟年	頭蓋のみ残存
13号	男性	老年	頭蓋のみ残存

〈人骨所見〉

A. 成人骨

頭蓋の保存状態が比較的良好で、性別・年齢の推定が可能であった1～13号人骨(表2)については、付随する体幹・体肢骨を含めた個別別の検討を行った。このほか、多数残存する所属不明の体幹・体肢骨に関しても、保存良好な資料は計測の対象とし、部位別に集計した。頭蓋・下顎骨計測値を表3～6に、頭蓋非計測的小変異の有無を表7に示す。

1号人骨(男性・熟年)

a. 頭蓋〈図版1〉

頭蓋底の一部と右下顎頭、右筋突起を欠損するほかは、ほぼ完全な頭蓋である。頭蓋冠と下顎骨の全面を石灰華が覆っている。頭蓋縫合は、主要3縫合の内板の閉鎖がおおむね完了しているが、外板での閉鎖はほとんど見られない。

脳頭蓋は全体に大きく、特に最大長が長い(193mm)。これに対して最大幅はやや狭く(137mm)、頭蓋長幅示数(71.0)は長頭型の低位に属している。バジオン・プレグマ高は120mmとさほど低くない。頭蓋水平周や正中矢状弧長はかなり大きな値をとる。上面観は楕円形、後面観は頭幅が狭いこともあって、比較的高い砲弾形を示す。後頭骨では、後頭隆起が発達し、塊状に後下方へ突出する。乳様突起は大きく、表面は粗雑である。眉間と眉弓は連続して丘状の高まりとなり、ゆるく前方へ突出する。そのため鼻根も軽度に陥凹する。鼻骨の水平弯曲は比較強い。

顔面頭蓋では、上顔高は中程度であるが、オトガイ高(39mm)の高さが目立ち、顔高はかなり大きい。Kollmann 顔示数(89.2)は中顔型に、上顔示数(49.6)は低上顔型に属している。また、眼窩示数(左, 76.7)は中眼窩型に、鼻示数(49.1)も中鼻型に属し、全般に低顔の要素は見いだせない。歯列は次の通りである。

r																					
	8	7	6	5	●	○	2	1		○	2	○	4	5	6	●	8				
	8	7	●	●	4	○	○			○	○	3	4	○	●	●	8				
			c														c				

- ：生前喪失, 歯槽閉鎖
- ：死後脱落, 歯槽開放
- c：齶蝕
- r：根尖部の病的骨欠損

咬耗は2,3がMartinの3度, 他の残存歯は1～2度である。全般的に辺縁性歯周炎によると思われる歯槽骨吸収が顕著で、特に大臼歯部では歯根の2/3が露出している。5は残根状態で、根尖部病変による骨欠損がある。7部の歯槽には、上顎洞と交通する径約2mmの穿孔が見られる。

頭蓋の非計測的小変異として、ラムダ縫合骨(左右)、インカ骨(Os epactale proprium)、頭頂切痕骨(左右)、眼窩上孔(右)、前頭孔(左右)が認められる。

b. 体幹骨

表3 成人頭蓋計測値 (男性)

Martin's No.		1号	4号	5号	9号
1	頭蓋最大長	193	—	175	—
8	頭蓋最大幅	137	132	120	(145)
17	バジオン・プレグマ高	—	135	129	—
8/1	頭蓋長幅示数	71.0	—	74.3	—
17/1	頭蓋長高示数	—	—	73.7	—
17/8	頭蓋幅高示数	—	102.3	99.2	—
20	耳プレグマ高	120	113	107	—
20/1	頭長耳高示数	62.2	—	61.1	—
20/8	頭幅耳高示数	87.6	85.6	82.3	—
45	頬骨弓幅	139	—	—	—
46	中顔幅	98	—	—	—
47	顔高	124	—	—	—
48	上顔高	69	—	57	—
47/45	Kollmann 顔示数	89.2	—	—	—
47/46	Virchow 顔示数	126.5	—	—	—
48/45	Kollmann 上顔示数	49.6	—	—	—
48/46	Virchow 上顔示数	70.4	—	—	—
51	眼窩幅 (左)	43	—	41	—
52	眼窩高 (左)	33	—	32	—
52/51	眼窩示数 (左)	76.7	—	78.0	—
54	鼻幅	26	—	24	—
55	鼻高	53	—	46	—
54/55	鼻示数	49.1	—	52	—

表4 成人下顎骨計測値 (男性)

Martin's No.		1号	4号	9号	WM-1	WM-2	WM-3	WM-4	WM-5
65	下顎頭間幅	—	116	—	—	—	—	110	—
65(1)	筋突起間幅	—	—	102	107	—	90	—	99
66	下顎角幅	99	—	—	—	—	90	107	—
67	前下顎幅	47	49	43	45	45	41	46	46
68(1)	下顎骨長	115	111	105	102	(106)	95	107	—
69	オトガイ高	39	30	—	32	—	26	34	31
69(1)	下顎体高	(32)	31	29	31	—	27	30	—
69(3)	下顎体厚	12	14	12	14	12	12	14	12
70a	下顎頭高	45	56	55	48	(51)	54	50	—
70(1)	前枝高	60	—	66	59	—	59	—	62
70(2)	最小下顎枝高	47	51	49	46	—	47	50	49
70(3)	下顎切痕高	18	—	17	15	14	13	—	—
71a	最小下顎枝幅	35	—	32	35	34	33	35	36
79	下顎枝角	136°	129° (128°)	130°	—	121°	124°	—	—

表5 成人頭蓋計測値 (女性)

Martin's No.		2号	3号	6号	7号	8号	10号	11号
1	頭蓋最大長	171	176	173	173	(178)	—	162
8	頭蓋最大幅	134	130	139	136	137	—	132
17	バジオン・プレグマ高	127	136	128	—	—	—	—
8/1	頭蓋長幅示数	78.4	73.9	80.3	78.6	(77.0)	—	81.5
17/1	頭蓋長高示数	74.3	77.3	74.0	—	—	—	—
17/8	頭蓋幅高示数	94.8	104.6	92.1	—	—	—	—
20	耳プレグマ高	109	115	109	104	117	—	113
20/1	頭長耳高示数	63.7	65.3	63.0	60.1	(65.7)	—	69.8
20/8	頭幅耳高示数	81.3	88.5	78.4	76.5	85.4	—	85.6
45	頬骨弓幅	125	125	—	128	—	—	—
46	中顔幅	95	104	—	97	—	98	—
47	顔高	106	105	—	—	—	—	—
48	上顔高	63	65	—	(58)	—	—	—
47/45	Kollmann顔示数	84.8	84.0	—	—	—	—	—
47/46	Virchow顔示数	111.6	101.0	—	—	—	—	—
48/45	Kollmann上顔示数	50.4	52.0	—	(45.3)	—	—	—
48/46	Virchow上顔示数	66.3	62.5	—	(59.8)	—	—	—
51	眼窩幅 (左)	38	39	40	40	—	—	—
52	眼窩高 (左)	32	32	34	34	—	—	—
52/51	眼窩示数 (左)	84.2	82.1	85.0	85.0	—	—	—
54	鼻幅	24	24	—	28	—	26	—
55	鼻高	47	50	—	45	—	—	—
54/55	鼻示数	51.1	48.0	—	62.2	—	—	—

表6 成人下顎骨計測値 (女性)

Martin's No.		2号	3号	WF-1	WF-2	WF-3	WF-4	WF-5	WF-6
65	下顎頭間幅	—	112	116	—	—	—	—	—
65(1)	下顎筋突起間幅	—	90	96	90	—	—	—	—
66	下顎角幅	—	92	96	95	—	90	—	—
67	前下顎幅	45	47	48	47	46	44	—	45
68(1)	下顎骨長	—	95	101	101	(94)	—	(99)	(99)
69	オトガイ高	30	27	(30)	—	28	29	27	31
69(1)	下顎体高	28	26	29	—	(25)	30	27	31
69(3)	下顎体厚	14	13	13	13	14	13	11	14
70 a	下顎頭高	—	63	45	48	44	—	57	59
70(1)	前枝高	—	60	57	51	—	—	62	—
70(2)	最小下顎枝高	—	53	44	40(右)	41	47	50	48
70(3)	下顎切痕高	—	9	13	13	—	—	12	—
71 a	最小下顎枝幅	31(右)	36	32	33	33	34	35	35
79	下顎枝角	—	103°	132°	134°	127°	—	115	117°

表7 成人頭蓋の非計測的小変異

	男性					女性						
	1号	4号	5号	9号	12号	2号	3号	6号	7号	8号	10号	11号
ラムダ小骨	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ラムダ縫合骨	++	++	+-	+-	//	-+	++	--	+-	++	++	--
横後頭縫合痕跡	++	--	+-	--	//	--	++	--	--	-+	--	--
アステリオン小骨	--	--	--	+-	//	+-	--	--	--	--	+-	++
後頭乳突縫合骨	--	-+	-+	--	//	--	-+	--	--	/+	--	--
頭頂切痕骨	++	--	+-	-/	//	--	--	--	--	--	+-	+/
翼上骨	--	+-	++	/	//	++	--	-/	+/	/-	//	//
前頭縫合残存	-	-	-	//	-	-	-	-	-	-	-	-
眼窩上神経溝	--	--	--	//	--	--	--	--	--	--	//	//
眼窩上縁孔	++	-/	--	//	//	--	-+	+-	--	-/	//	//
硬膜眼窩孔	+-	//	--	//	//	--	++	-/	/-	//	//	//
横頬骨縫合痕跡	--	//	//	//	//	+-	-+	//	//	//	/-	//
口蓋隆起	+	/	-	-	/	+	+	+	-	/	-	/
内側口蓋管	--	//	--	--	//	--	--	//	--	//	--	//
外側口蓋管	--	//	--	--	//	--	--	//	--	//	--	//
顆管欠如	//	--	--	--	//	--	--	-/	//	//	//	//
後頭顆前結節	//	--	-/	-+	//	--	--	//	//	//	//	//
第3後頭顆	/	-	-	-	/	-	-	-	-	/	/	/
後頭顆旁突起	//	--	--	-/	//	--	--	//	//	//	//	//
舌下神経管二分	//	--	--	--	//	+-	--	--	//	//	//	//
頸静脈孔二分	//	--	--	--	//	--	--	-/	//	//	//	//
外耳道骨瘤	--	--	--	--	//	--	--	--	--	--	--	--
フシケ孔	--	--	--	-+	//	--	--	--	--	--	++	--
ベサリウス孔	-+	/+	++	++	//	--	--	--	//	//	/+	//
卵円孔形成不全	--	-/	--	--	//	--	--	--	/-	//	/-	//
翼棘孔	--	//	--	--	//	--	--	--	/-	//	/-	//
床状突起間骨橋	//	//	//	--	//	--	-+	//	//	//	//	//
副オトガイ孔	--	--	--	--	//	--	--	//	//	//	//	//
下顎隆起	--	--	--	--	//	--	--	//	//	//	//	//
顎舌骨筋神経管	--	--	--	--	//	--	--	//	//	//	//	//

+: 有, -: 無, /: 観察不能. 記載は各個体, 各項目とも右, (正中), 左の順。

椎骨として頸椎3個(C1-3)、胸椎5個、腰椎3個(L3-5)および仙骨がある。そのほかに胸骨(柄および体)、肋骨片多数が残っている。腰椎の椎体縁に変形性脊椎症によると思われる強い骨棘形成がみられる。

c. 体肢骨〈図版5〉

1) 上肢骨

わずかに破損の見られる左右肩甲骨、ほぼ完全な形の左右の鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨、手根骨2個(左舟状骨、左有頭骨)、左第2中手骨、指骨6個がある。長管骨はいずれも骨体が長さの割にやや太く、骨頭や関節面が大きき、男性骨の特徴を備えている。筋付着部の発達は中等度である。

2) 下肢骨

ほぼ完全な右寛骨、恥骨および腸骨翼の一部を欠く左寛骨、ほぼ完全な左右の大腿骨、脛骨、左腓骨、骨頭を欠く右腓骨、左膝蓋骨、右腓骨、足根骨8個(右距骨、左右踵骨、左舟状骨、右内側楔状骨、左外側楔状骨、左右立方骨)、左右第1中足骨、指骨片1個が残っている。寛骨大坐骨切痕の角度は小さく、耳状面前溝は存在しない。坐骨棘下方の小坐骨切痕中央に隆起が認められる。長管骨は上肢骨同様、骨体は短くて太く、関節面は大きい。大腿骨骨体上部の殿筋粗面の発達はよく、転子下稜を呈し、粗線の発達も良好である。骨体上部は弱い扁平性を示し、ピラステルも見られる。脛骨では前脛骨筋起始部の陥凹はそれほど顕著には認められないが、ヒラメ筋線の発達はよい。

3) 推定身長

Pearson (1899) および藤井 (1960) の式を用いて、右大腿骨最大長から求めた推定身長はそれぞれ156.5cm、153.7cmとなり、当時の男性の中でも低身長であったといえる。

2号人骨(女性・壮年)

a. 頭蓋〈図版1〉

左右の下顎角から関節突起付近を欠損するほかは、ほぼ完全な頭蓋である。下顎骨はXI嚢内にあつたが、頭骨は嚢外の約40cm離れた所に流出していた。頭蓋縫合は、内・外板とも完全に離開している。

脳頭蓋の諸径は既報の奄美諸島人の平均値よりはやや小さい。主要3示数は中頭・中頭・中頭型(78.4, 74.3, 94.8)に属している。上面観は卵円形、後面観は家屋形で、外後頭隆起の突出はほとんどみられない(Brocaの1度)。眉間から鼻根にかけては平坦で、鼻骨の水平彎曲も極めて弱い。顔面部では高径が低く、Kollmann顔示数(84.8)、上顔示数(50.4)は小さい。歯列は次の通りである。

$\begin{array}{cccccccc cccccccc} \overset{c}{8} & \overset{c}{7} & 6 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ \hline 8 & 0 & 6 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ \underset{r}{r} & & & & & & & & & & & & & & & & & \underset{c}{c} \end{array}$

咬耗はおおむねMartinの1度である。 $\overline{7|7}$ の根尖部には病的骨吸収が認められる。また、ほとんどの残存歯に小窩状のエナメル質減形成がある。

頭蓋の非計測的小変異として、ラムダ縫合骨(左)、翼上骨(左右)、横頰骨縫合痕跡(右)、口蓋隆起、舌下神経管二分(右)が見られる。

b. 体幹骨

椎骨はすべて完全に残っている。変形性脊椎症などの病的所見は認められない。肋骨片は多数あるが、同一甕(XI甕)内の別個体(女性・壮年)のものとは区別できない。

c. 体肢骨(図版5)

1) 上肢骨

上角付近をとともに欠く左右肩甲骨、ほぼ完全な左右鎖骨、骨頭を欠く右上腕骨、ほぼ完全な左右橈・尺骨が残っている。同一甕内に2個体分の手根骨、中手骨および指骨があるが、どちらが本個体に属するか不明である。左鎖骨の胸骨端は未癒合で、右鎖骨では明瞭な骨端線が認められる。全体に細くきゃしゃな印象を受ける。筋付着部も粗雑ではない。

2) 下肢骨

ほぼ完全な左右寛骨、骨頭部を破損する左右脛骨、左右腓骨および左右膝蓋骨が残っている。足根骨、中足骨および指骨については同一甕内の別の女性人骨のそれとの区別が困難であるため含めていない。寛骨の大坐骨切痕の角度は広く、腸骨稜骨端はすでに癒合しているものの、恥骨結合面には極めて明瞭な平行隆線が横走り、その谷は深く、埴原(1952)による20歳前後の年齢と思われる。右寛骨に境界明瞭で深い耳状面前溝が認められるが、この溝は左側では比較的浅い。長管骨の骨体は細くきゃしゃで、筋付着部の発達もそれほど顕著ではない。

3) 推定身長

大腿骨を欠き、上腕骨と脛骨も破損しているため、右橈骨の最大長から推定すると145.7 cm (Pearson)、143.3cm(藤井)となる。

3号人骨(女性・壮年)

a. 頭蓋(図版2)

保存状態はほぼ完全である。頭蓋縫合の閉鎖は内・外板とも見られない。

脳頭蓋では、最大幅が狭く、バジオン・プレグマ高が高いため、主要3示数はそれぞれ長頭・高頭・尖頭型(73.9, 77.3, 104.6)に属している。上面観は楔形、後面観は家屋形である。後頭隆起がよく発達している。乳様突起の基部は比較的大きく、表面も粗雑であるが、下垂の度は小さい。側頭線の発達が著しい。眉間から鼻骨にかけては平坦で、なだらかな弧を描いて下降するが、鼻骨の先端は突出する。顔面部では、全体の径に比して中顔幅が大きい、頬骨弓幅はそれほどでもない。そのためVirchow顔示数、上顔示数は極めて小さい値をとる。下顎骨では、頑丈で直立した下顎枝が目立つ。歯列は次の通りである。

8 7 6 5 4 3 2 1	1 0 3 4 5 6 7 8
8 ● 6 0 4 3 0 0	1 2 3 4 5 6 ● ●
	c c c

咬合様式は鉗子状で、切歯部の咬耗がMartinの3度、他の残存歯は1～2度である。 $\overline{123}$ の隣接面に切縁から歯頸部に至る齲蝕がある。

頭蓋の非計測的小変異として、ラムダ縫合骨（左右）、横後頭縫合痕跡（左右）、眼窩上孔（左）、床状突起間骨橋（左, Ant.-med.-post. type）、硬膜眼窩孔（左右）、口蓋隆起が認められる。

b. 体幹骨

第6頸椎、第1、第4腰椎および尾骨を除く全椎骨が残っている。そのほかに多数の肋骨片がある。

c. 体肢骨〈図版6〉

1) 上肢骨

ほぼ完全な右肩甲骨、左右鎖骨、左上腕骨、左右橈骨、左尺骨および下端を欠く右尺骨が残っている。そのほかに手根骨1個（右月状骨）、中手骨3個（左第1、左右第3）および指骨2個がある。鎖骨は短くて太く、内側半は前後に扁平な形状を示す。上腕骨も短くて太く、大結節稜は比較的張り出し、三角筋粗面はよく発達する。左尺骨の橈骨切痕直下は陥凹し、回外筋稜は強く張り出して、そこから下方へ伸びる骨間縁の発達は著しい。また、橈骨回内筋粗面の発達がよいことや、尺骨下部の外側に稜が見られることから、前腕の回内・回外筋群の発達が良好であったことがうかがわれる。

2) 下肢骨

腸骨翼の一部を欠く右寛骨、腸骨翼後上半や恥骨などを欠損する左寛骨、完全な右大腿骨、左右脛骨、左腓骨、足根骨3個（右距骨、右踵骨、左舟状骨）、中足骨2個（右第1、左第3）および指骨2個が残っている。寛骨大坐骨切痕の角度は広く、耳状面下部には左右ともに境界明瞭で幅の広い耳状面前溝が認められる。恥骨結合面にはわずかながら平行隆線が残っている。大腿骨は比較的短くて細く、殿筋粗面が発達して転子下稜が認められる。粗線はそれほど粗雑ではないが、骨体中央部はわずかに柱状性を示している。脛骨および腓骨の筋付着部の発達は顕著ではない。

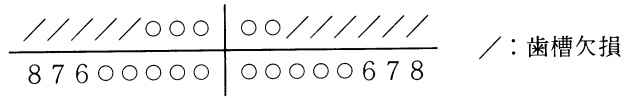
3) 推定身長

右大腿骨最大長から算出した推定身長は、146.0cm (Pearson)、145.3cm (藤井) である。

4号人骨（男性・壮年）

頭蓋だけが残存し、体幹・体肢骨は不明である。脳頭蓋および下顎骨の保存は比較的よいが、顔面上部の大半を欠損する。頭蓋縫合の閉鎖は内・外板とも始まっていない。

脳頭蓋では、眉間部欠損のため最大長の計測はできないが、183mm前後であったと推測され、上面からの観察によると、長頭型に属していたと思われる。また、幅高示数(102.3)は尖頭型に属している。この頭蓋は左右非対称で、左側の頭頂結節が右側より後方に位置し、また、後頭骨の左半が右半より後方へ突出している。外後頭隆起はBrocaの4度で、よく発達した両側の後頭隆起へと連続する。上顔部は鼻骨付近を残して大破している。歯列は次の通りである。



残存する下顎大臼歯の咬耗はMartinの1度である。

頭蓋の非計測的小変異として、ラムダ小骨、ラムダ縫合骨(左右)、後頭乳突縫合骨(左)、翼上骨(右, Os epiptericum proprium)が見られ、また右頸静脈孔には不完全ながら骨橋が存在する。

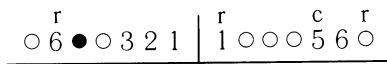
5号人骨(男性・壮年)

a. 頭蓋(図版2)

左頬骨部および下顎骨を欠損する。眉弓の発達や前頭骨の傾斜、乳様突起の大きさ、外後頭隆起の突出などから男性骨と判定されるが、男性としては小型の頭蓋である。

脳頭蓋の主要3示数はそれぞれ長頭・中頭・尖頭型(74.3, 73.7, 99.2)に属している。乳突上結節が左右側に発達している。外後頭隆起の突出はBrocaの3度である。眉弓がよく発達しているが、鼻根の陥凹は比較的浅く、鼻骨の水平弯曲はゆるやかである。

顔面部の諸径も小さい。上顔高は57mmと低く、幅径は計測できないが、観察では明らかに低上顔である。歯列は次の通りである。



残存歯の咬耗はMartinの1~2度である。6|17の根尖部および歯根周囲に骨吸収が見られる。

頭蓋の非計測的小変異として、ラムダ縫合骨(右)、横後頭縫合痕跡(右)、後頭乳突縫合骨(左)、頭頂切痕骨(右)、冠状縫合骨(左)、翼上骨(左右)など、縫合の変異が多く見られる。

b. 体幹骨

ほぼ完全な頸椎3個、胸椎5個、腰椎1個および仙骨が残っており、そのほかに多数の椎骨片がある。肋骨片も多数残っている。

c. 体肢骨(図版6)

1) 上肢骨

右肩甲骨肩甲棘、完全な左右上腕骨、右尺骨、左尺骨上半、手根骨8個(左右舟状骨、右月状骨、左右三角骨、右小菱形骨、左右有頭骨)、不完全ながらすべての中手骨および指骨16個が残っている。上腕骨骨体は短くて太く、三角筋粗面の発達是比较的良好である。尺骨回外筋稜ならびにそれから下へ続く骨間縁は比較的良好に張り出している。右尺骨下端にわずかながら骨端線の痕跡が認められ、まだ若い個体であることを示している。

2) 下肢骨

不完全な左右寛骨、ほぼ完全な左右大腿骨、上端をわずかに欠損する右脛骨、下端を欠く左脛骨、完全な左腓骨、左膝蓋骨、足根骨8個(右踵骨、左右舟状骨、右中間楔状骨、左右外側楔状骨、左右立方骨)、中足骨5個(右第2、第3、第5ほか)および指骨14個が残っている。寛骨の大坐骨切痕の角度は比較的小さく、耳状面前溝は認められない。大腿骨は短く、骨体上部は扁平性を示しているが、殿筋粗面や粗線など筋付着部の発達はあまり良好ではなく、骨体中央部の柱状性もほとんどみられない。脛骨のヒラメ筋線はやや発達する。栄養孔位での扁平性は認められず、厚脛である。

3) 推定身長

右大腿骨最大長から算出した推定身長は154.1cm (Pearson)、150.5cm (藤井)である。

6号人骨(女性・熟年)

頭蓋だけが残存し、体幹・体肢骨は不明である。右頬骨および眼窩より下の部位を欠損している。頭蓋縫合は、冠状縫合の下半で内・外板の閉鎖が始まっているだけである。

脳頭蓋では最大幅(139mm)の大きさが目立ち、主要3示数はそれぞれ短頭・中頭・中頭型(80.3、74.0、92.1)に属している。上面観は楔形で、特に前頭部が狭窄しており、横前頭頭頂示数は64.0と小さい。乳様突起は小さく、鋭く下垂する。後面観は家屋形で、外後頭隆起の突出は弱い(Brocaの1型)。前頭結節が非常に発達しており、眼窩上縁の内側半からほぼ垂直に立ち上がる。眉間付近はほとんど突出せず、鼻根部は平坦で鼻骨の水平弯曲もゆるやかである。

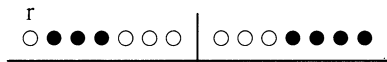
顎骨は、上顎前歯部の骨片だけが遊離して残存するが、歯はいずれも生前に喪失しており、歯槽は閉鎖している。

非計測的小変異として、眼窩上孔(右)、口蓋隆起が認められる。

7号人骨(女性・壮年)

頭蓋だけが残存し、体幹・体肢骨は不明である。頭蓋底および下顎骨を欠く。縫合の閉鎖が左冠状縫合の内・外板で始まっているが、他の部位には見られない。脳頭蓋では、長幅示数が78.6で中頭型に属している。上顔部の計測値を見ると、上顔高と鼻高が低く、鼻幅の広いことが特徴的で、Kollmann上顔示数(45.3)は広上顔型に、鼻示数(62.2)は過広鼻型に属している。これに対して眼窩示数(左、85.0)は中型と高型の境界にある。

上顎の歯列は次の通りである。



生前喪失または死後脱落のため、植立する残存歯はない。7]の歯槽根尖部には不整な骨吸収があり、瘻孔を介して炎症性の骨表面の粗雑化が上顎骨の側頭下面へと広がっている。

頭蓋の非計測的小変異として、ラムダ小骨、ラムダ縫合骨(右)、翼上骨(右、Os epiptericum proprium) が認められる。

8号人骨 (女性・壮年)

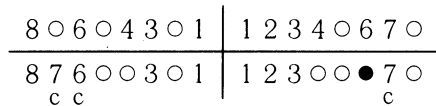
頭蓋冠だけが残存する。頭蓋縫合の閉鎖は始まっていない。頭蓋最大長(178mm)、最大幅137mmで、長幅示数(77.0)は中頭型に属している。上面観は楕円形、後面観は楔形である。乳突上結節が発達しているが、眉弓はさほど隆起していない。非計測的小変異として、ラムダ小骨、ラムダ縫合骨(左右)、横後頭縫合痕跡(左)、後頭乳突縫合骨(左)が見られる。

9号人骨 (男性・壮年)

a. 頭蓋

ラムダ点と眼窩下縁を通る平面より上方の脳・顔面頭蓋を欠損している。観察可能な縫合に閉鎖は見られない。

頭蓋最大幅(145mm)をはじめとして、全体に幅径が大きい。外後頭隆起の突出はBrocaの2度で、やや弱い後頭隆起が存在する。歯列は次の通りである。



歯石沈着が著しかったとみえ、臼歯咬合面にも残存している。

非計測的小変異として、ラムダ縫合骨(左右)、アステリオン小骨(左右)、副眼窩下孔(左右)、後頭顆前結節(左、Bromanのtype II)、ベサリウス孔(左右)がある。また両側アステリオン点のやや前方に骨隆起(Tuberculum supramastoideum posterior)があり、特に右側のものが顕著である。

b. 体幹骨

頸椎4個、胸椎11個、腰椎4個、仙骨、肋骨片多数および胸骨柄が残っている。変形性脊椎症などの病的所見は見られない。

c. 体肢骨

1) 上肢骨

不完全な左右肩甲骨、ほぼ完全な左右鎖骨、右上腕骨、下端をわずかに欠く左上腕骨、上下端にわずかな破損のある左右橈骨、左右尺骨、手根骨7個(左舟状骨、左豆状骨、左大菱形骨、左右有頭骨、左右有鈎骨)、中手骨8個(右第1と第2を除く)および指骨22個が残っている。上腕骨は比較的短いが細くはなく、筋付着部の発達は顕著でない。尺骨の回外筋稜はよく発達し、方形回内筋の付着部にも顕著な稜線が認められる。

2) 下肢骨

腸骨翼上部および恥骨を欠く右寛骨、一部を欠く左右大腿骨、ほぼ完全な左右脛骨、左腓骨下半、足根骨12個(右距骨、左右踵骨、右舟状骨、左右内側・中間・外側楔状骨、左右立方骨)、中足骨9個(左第2を除く)および指骨6個が残っている。寛骨大坐骨切痕の角度は比較的小さく、耳状面前溝は見られない。長管骨は一般に長い。大腿骨は殿筋粗面はやや粗雑であるが、粗線の発達は顕著でなく、柱状性も認められない。脛骨ヒラメ筋線の発達はよくない。また、骨体は扁平ではない。

3) 推定身長

右大腿骨最大長から算出した推定身長は161.2cm (Pearson), 159.9cm (藤井) である。

10号人骨 (女性・壮年)

a. 頭蓋

脳頭蓋と顔面頭蓋が分離して残存していた個体で、眉間および眼窩上縁付近、右側頭部、頭蓋底を欠いており、死後変形のため前頭骨は接合できない。下顎骨の保存状態はほぼ完全である。観察可能な頭蓋縫合に閉鎖は見られない。

頭蓋冠は厚く、冠状縫合の最厚部では11mmに達するが、乳様突起は小さく、外後頭隆起の突出も弱い (Brocaの1度)。頬骨の張り出しが強い。下顎骨では、下顎角の張り出しはほとんどない。歯列は次の通りである。

○ ○ 6 5 4 ○ ○ 1	1 ○ ○ 4 5 6 ○ 8 ^c
8 7 6 5 ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ 5 6 7 8

残存歯の咬耗は 1|1 がMartinの2度、他は1度である。

頭蓋の非計測的小変異として、ラムダ縫合骨(左右)、アステリオン小骨(右)、頭頂切痕骨(右)、フシケ孔(左右)、ベサリウス孔(左)が認められる。

b. 体幹骨

頸椎2個、胸椎2個および腰椎2個がほぼ完全に残っているほか、仙骨片も含めて多数の椎

骨片がある。また、胸骨体片、肋骨片もある。

c. 体肢骨

1) 上肢骨

左右肩甲骨片、胸骨・肩峰両端をわずかに欠く左右鎖骨、おもに上下両端を欠損する左右上腕骨、左右橈骨および左右尺骨がある。そのほか、手根骨11（右舟状骨、左右月状骨、左右豆状骨、左右大菱形骨、右小菱形骨、右有頭骨、左右有鈎骨）、中手骨5（左右第1、左右第2、左第4）および指骨13個が残っている。上腕骨は短い、それほど細くはなく、三角筋粗面は比較的良好に発達している。

2) 下肢骨

下1/3を欠く右大腿骨、上下両端を欠く左大腿骨、骨体部だけの左右脛骨および左右腓骨、ほぼ完全な左膝蓋骨および右膝蓋骨外側半がある。そのほかに足根骨10（右距骨、左右踵骨、左舟状骨、左右中間楔状骨、左右内側楔状骨、左右立方骨）、中足骨9（右第1を除く）および指骨8個がある。大腿骨骨体上部の殿筋粗面は比較的良好に発達するが、転子下稜を形成するには至らない。粗線が発達している。脛骨のヒラメ筋線は比較的良好に発達し、前脛骨筋起始部の陥凹も深い。脛骨に扁平性は認められない。

11号人骨（女性・壮年）

a. 頭蓋

頭蓋冠だけが残存する。縫合の閉鎖は全く見られない。全体に小型の頭蓋で、頭頂結節が発達しており、長幅示数(81.5)は短頭型に属している。軽度の後頭隆起が見られる。非計測的小変異として、アステリオン小骨（左右）が存在する。

b. 体肢骨

VI 嚢内には5体分の人骨が含まれるが、その中で女性骨と思われるものだけを11号人骨として認めた。

1) 上肢骨

ほぼ完全な左鎖骨、上下両端を欠く左右橈骨、下端を欠く右尺骨がある。骨体は短くて細く、筋付着部の発達もそれほど顕著ではない。

2) 下肢骨

上下端を欠く右脛骨骨体、骨体前縁部だけが残る左脛骨、ほぼ完全な右踵骨がある。脛骨のヒラメ筋線は比較的良好に発達し、前脛骨筋付着部も深く陥凹している。

12号人骨（男性・熟年）

頭蓋冠だけが残存する。主要3縫合の内板は閉鎖が完了しているほか、冠状縫合の側頭部と矢状縫合の一部の外板で閉鎖が始まっている。頭蓋最大幅141mmで、観察からは長幅示数は中頭型に属していたと思われる。

13号人骨（男性・老年）

頭蓋冠の後半部（頭頂骨，側頭骨，後頭骨）が残存するだけである。頭蓋縫合で観察できるのは矢状縫合とラムダ縫合であるが，ラムダ縫合外下部の外板以外は閉鎖が完了している。径は大きく，骨も厚く，また外後頭隆起がよく発達している（Brocaの4度）。

成人頭蓋計測小括

本トフル墓の成人頭蓋で計測の対象となり得たものは男性4例，女性6例である。このうち主だった項目の計測が行えたのは男性3例（1，4，5号），女性4例（2，3，6，7号）にすぎない。男性頭蓋では，脳頭蓋の3主径を測ることができたのは5号だけである。頭蓋最大長は，1号が193mmで奄美諸島人の変異域の最大値に近く，5号は175mmと小さく，4号は推定183mm前後である。最大長をはじめとして，脳頭蓋の全体の径は個体差が大きい。しかし，主要3示数と観察による推定とを総合すると，男性3頭蓋はいずれも長頭・中頭・中～尖頭型を示している。これは，相対的に頭長が大きく，頭幅が小さいことに起因している。顔面頭蓋は，1号が保存良好であるが，4号は上顔部を欠き，5号は下顎がない。1号はオトガイ高が大きく，顔面全体の径も比較的大きい。一方，5号の上顔部は，観察によると低・広上顔であったと推測される。

女性の脳頭蓋の径は，他の奄美諸島人の平均値と比較しても全体に小さい。示数値をみると，長幅示数は中頭型3例，長頭型1例で，この4例の平均値は77.4となり，中頭型の中位にある。長高示数は中頭型2例，高頭型1例，幅高示数は中頭型2例，尖頭型1例で，この中では，バジョン・ブレグマ高が高い3号（136mm）の示数値が大きい。顔面頭蓋では，顔高，上顔高ともに他の奄美諸島人の平均値を下回り，Kollmann顔示数，上顔示数からは低・広顔傾向がうかがえる。

永久歯の残存状況

和野トフル墓からは上顎歯327本，下顎歯400本および残根状態のため歯種不明の遊離歯12本，合計779本の永久歯が出土した。このうち歯槽に釘植したまま発見された歯はわずかで，ほとんどの歯は顎骨から遊離して地中や壟内に散在していた。これらの歯を元の歯槽に植立させる作業を行った後，内訳を調べた（表8）。遊離歯は鑑別を歯種までにとどめ，左右合算した数を示した。

まず注目されるのは，上顎歯よりも下顎歯が100本以上多いことである。一般に生前においては，下顎歯の方が齲蝕や歯周病によって失われやすいといわれるにもかかわらず，この残存歯数の差はやや不自然と考えられる。その原因は主として，上顎骨自体骨質が薄く，破損しやすいためと思われる。次に残存歯を歯種別に見ると，下顎の犬歯，小白歯，大白歯がそれぞれほぼ30個体分に相当する数が残っているのに対し，下顎切歯の残存数は約20個体分であり，歯根の形が単純で長さも短い下顎切歯が脱落しやすいことを示している。これに対して上顎歯の残

存数は、犬歯の25個体相当数を除いて切歯、小臼歯、大臼歯ともにほぼ20個体分で、下顎切歯の残存率と変わらない。歯根の形態からみて、歯の脱落する条件は上顎、下顎ともに同様であると仮定すると、下顎臼歯の残存率に比べて上顎臼歯の残存率は低く、ここでも上顎骨自体破損しやすいことが示唆されている。上顎骨の破損は、トフル墓に改葬する過程においても、トフル墓に納められた後においても起こったことであろう。ことにトフル墓内では頭蓋骨が甕の外に置かれた場合に破損の機会が生じやすかったと思われる。これは、甕内発見の歯が上顎歯113本、下顎歯131本であるのに対し、甕外では上顎歯214本、下顎歯309本であり、甕外で上下顎のアンバランスが著しいことから推測できる。また釘植歯が少なく遊離歯が多いことも、トフル墓内での顎骨の破損がかなり存在したことを裏付けているように思われる。

表8 和野トフル墓出土永久歯

上顎歯

	I 1		I 2		C		PM1		PM2		M1		M2		M3		計
釘植歯	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	
	8	8	5	6	6	6	8	8	4	9	13	12	6	6	5	3	113
遊離歯	50				39		53				72				214		
計	77				51		82				117				327		

下顎歯

	I 1		I 2		C		PM1		PM2		M1		M2		M3		計
釘植歯	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	
	5	4	6	8	8	12	9	10	11	12	23	22	17	19	14	11	191
遊離歯	59				41		81				68				249		
計	82				61		123				174				440		

体肢骨計測に関する結果および考察

保存良好な体肢骨について計測を行った結果を表9に示す。南西諸島における風葬人骨の体肢骨に関する報告は、これまでわずかに与論島島民の上肢骨（広沢，1959）および下肢骨（平田，1958）が知られているにすぎず、今回の計測結果は、部位によって資料数が僅少ではあるが、南西諸島人の当時の体格を知るうえで貴重なものといえる。そこで、与論島島民の体肢骨計測値のうち、各骨の最大長ならびに主要示数について和野トフル墓人骨のそれとを比較し、平均値の差の検定を行った（表10）。

上腕骨では、最大長で男女とも与論島島民が大きな値を示し、骨体断面示数および長厚示数で和野トフル墓男性の方が大きい。すなわち、和野トフル墓人骨の上腕骨は男女とも短く、男性はやや太い形態を示しているといえる。しかし、骨体断面示数の男性左側を除いては有意な差とはいえず、和野トフル墓人骨の顕著な特徴とはいいがたい。橈骨および尺骨は男女とも最大長で与論島の方が大きく、骨体断面示数は逆に和野トフル墓の方が大きい。しかしこれらも有意差は認められない。わずかに左尺骨の扁平示数で男女とも和野トフル墓が有意に大きい値が得られている。この結果から、和野トフル墓の橈骨および尺骨は短くて骨体中央部はそれほど扁平ではないが、尺骨上部に弱い扁平性が認められたことになる。大腿骨の最大長は男女とも与論島の方が大きい。長厚示数は男女とも両群でほぼ類似した値を示すが、中央断面示数は与論島の方が大きい値を示し、特に女性で有意に大きい。上骨体断面示数では有意差は認められない。すなわち、和野トフル墓の大腿骨は短くて太く、骨体中央部での柱状形成は認められず、骨体上部の扁平性も顕著ではない。脛骨では男女とも最大長で与論島がやや大きいことを除くと、示数値ではほとんど差は認められない。腓骨では、男性の最大長で与論島がかなり大きく、中央断面示数では逆に和野トフル墓が大きくなっているが、後者の資料数が少ないので有意差検定が不可能であり、特徴として認められない。

以上のことを総合すると、和野トフル墓人骨体肢骨は一般に短くて、それほど細くはなく、筋付着部の発達等によって顕著となる骨体の扁平性などはそれほど認められない、ということになる。

右大腿骨最大長から算出した推定身長を表11に示す。最大長を計測できたのは、男性で3例、女性で2例と非常に少ないが、平均では男性で157.3 cm (Pearson), 154.7cm (藤井), 女性で145.1 cm (Pearson), 144.3cm (藤井) と、いずれもかなりの低身長であったと思われる。

B. 未成人骨

和野トフル墓からは多くの未成人骨が散乱状態で出土したが、個体識別できたものは10個体で（表12）、そのうち14号と16号の2個体は極めて保存良好である。各人骨の年齢推定は、歯の形成時期や萌出時期（金田，1957；藤田，1965）によって行った。性別は14号人骨が男性と

表9 成人體肢骨計測值

Martin's No.	男性			女性				
	n	M	S.D.	n	M	S.D.		
鎖骨								
1	最大長	r	6	141.5	7.04	6	128.5	7.41
		l	5	143.4	8.94	5	123.6	7.14
4	中央垂直徑	r	7	11.1	1.27	6	8.7	1.11
		l	7	11.4	1.42	6	8.0	1.15
5	中央矢狀徑	r	7	13.1	0.42	6	10.7	0.99
		l	7	13.1	1.15	6	9.6	0.93
6	中央周	r	7	41.3	1.75	6	33.2	3.44
		l	7	42.6	4.44	6	30.7	3.64
6/1	長厚示數	r	6	29.7	2.06	6	25.8	2.25
		l	5	29.9	1.89	5	24.9	2.26
4/5	断面示數	r	7	84.7	9.04	6	81.0	3.56
		l	7	87.5	8.94	6	83.2	5.48
上腕骨								
1	最大長	r	6	286.7	10.42	2	263.5	
		l	4	281.0	7.25	3	265.0	15.25
2	全長	r	6	282.0	9.45	2	260.0	
		l	4	276.8	4.97	3	261.3	14.01
5	中央最大徑	r	15	22.0	1.59	12	17.9	1.26
		l	14	21.1	0.93	10	18.4	1.50
6	中央最小徑	r	15	16.9	1.36	12	13.8	0.99
		l	14	16.9	1.55	10	13.9	1.14
7	骨體最小周	r	13	61.8	3.59	12	51.0	3.27
		l	14	61.1	3.39	10	51.4	3.50
7a	中央周	r	15	65.9	4.27	12	54.6	3.12
		l	14	64.6	2.99	10	55.3	4.12
8	頭周	r	8	137.1	5.09	2	111.0	
		l	4	135.5	4.27	3	117.7	6.24
9	頭最大橫徑	r	7	41.4	1.18	3	35.7	2.62
		l	4	41.3	1.79	3	35.0	1.41
10	頭最大矢狀徑	r	8	44.1	1.81	2	34.8	
		l	4	43.0	1.73	3	37.0	0.82
6/5	骨體断面示數	r	15	76.7	4.55	12	77.3	4.13
		l	14	79.8	5.64	10	75.7	5.15
7/1	長厚示數	r	6	22.1	1.28	2	19.7	
		l	4	22.2	0.04	3	20.7	0.95
橈骨								
1	最大長	r	4	224.3	10.99	5	196.0	10.08
		l	5	222.8	9.00	4	194.0	2.92
4	骨體橫徑	r	9	16.6	1.17	7	14.1	1.46
		l	10	16.8	1.03	9	14.3	1.05
5	骨體矢狀徑	r	9	12.1	0.74	7	10.1	0.99
		l	10	11.9	0.54	9	10.1	0.74
5/4	骨體断面示數	r	9	73.3	4.61	7	72.3	8.86
		l	10	71.4	6.81	9	71.0	7.93
尺骨								
1	最大長	r	5	236.4	4.22	3	220.7	9.81
		l	5	236.6	9.56	2	205.5	
11	尺骨前後徑	r	10	13.8	0.98	8	11.6	0.86
		l	12	13.3	1.48	5	11.4	1.02
12	尺骨橫徑	r	10	16.5	1.02	8	14.0	0.87
		l	12	15.9	1.11	5	13.4	1.02
13	尺骨上橫徑	r	7	21.1	1.46	9	17.6	2.11
		l	9	20.4	1.42	6	17.0	1.53
14	尺骨上前後徑	r	7	25.3	1.28	9	20.7	2.05
		l	9	23.6	2.17	6	18.2	1.07
11/12	骨體断面示數	r	10	83.7	4.37	8	83.1	4.80
		l	12	83.3	7.55	5	85.3	7.14
13/14	扁平示數	r	7	83.7	5.57	9	85.2	9.02
		l	9	87.1	4.85	6	93.7	7.60

表9 (つづき)

Martin's No.	男性			女性			
		n	M	S.D.	n	M	S.D.
大腿骨							
1	最大長	r	3	404.0	15.77	2	371.5
		l	3	413.0	7.26	1	348.0
2	自然位全長	r	2	390.5		2	368.0
		l	3	411.0	7.87	1	345.0
6	骨体中央矢状径	r	9	27.1	1.91	13	22.3
		l	10	27.2	1.66	11	22.5
7	骨体中央横径	r	9	27.2	1.55	13	24.3
		l	10	27.4	2.06	11	24.1
8	骨体中央周	r	9	88.2	3.12	13	74.1
		l	10	87.3	2.72	11	75.0
9	骨体上横径	r	10	31.9	1.81	11	28.0
		l	9	31.6	1.89	10	28.8
10	骨体上矢状径	r	10	25.5	1.63	11	22.2
		l	9	26.0	2.00	10	23.3
21	上顆幅	r	3	79.0	2.16	3	70.7
		l	3	75.7	4.92	1	69.0
23	外顆最大長	r	2	61.5		3	54.3
		l	4	58.4	3.19		
24	内顆最大長	r	2	60.0		4	53.8
		l	2	56.5			1.92
8/2	長厚示数	r	2	21.7		2	20.7
		l	3	20.8	0.70	1	20.9
6/7	中央断面示数	r	9	100.1	10.78	13	92.5
		l	10	99.2	10.87	11	94.4
10/9	上骨体断面示数	r	9	79.7	6.06	11	79.4
		l	9	82.5	5.73	10	81.0
脛骨							
1	全長	r	3	322.3	12.66	2	288.5
		l	3	336.3	15.28	3	300.7
1a	最大長	r	4	327.0	12.19	2	294.0
		l	3	342.0	17.15	3	304.3
8	中央最大径	r	8	28.9	2.20	7	23.7
		l	7	28.6	1.05	9	24.4
8a	栄養孔位最大径	r	8	33.3	1.56	6	26.3
		l	8	32.8	1.30	8	27.1
9	中央横径	r	8	21.6	1.49	7	17.9
		l	7	21.3	1.58	9	18.3
9a	栄養孔位横径	r	8	23.3	1.71	6	19.3
		l	8	23.1	1.36	8	20.4
10	骨体周	r	8	80.8	5.33	7	68.0
		l	7	81.1	2.64	9	69.8
10a	栄養孔位周	r	8	90.3	4.60	6	74.5
		l	8	90.1	3.55	8	78.5
10b	骨体最小周	r	8	73.3	3.34	7	63.7
		l	6	73.7	2.21	9	65.0
9/8	中央断面示数	r	8	75.3	6.89	7	75.2
		l	7	74.7	7.04	9	75.3
9a/8a	脛示数	r	8	70.0	4.66	6	73.4
		l	8	70.7	4.16	8	75.8
10b/1	長厚示数	r	3	22.9	1.07	2	23.0
		l	3	21.6	1.62	3	22.3
腓骨							
1	最大長	r	1	305.0		2	291.5
		l	2	308.5		1	304.0
2	中央最大径	r	2	13.5		2	12.0
		l	2	13.5		2	13.0
3	中央最小径	r	2	10.0		2	10.0
		l	2	10.0		2	9.0
4	中央周	r	2	41.0		2	38.5
		l	2	41.5		2	38.5
3/2	中央断面示数	r	2	73.9		2	83.4
		l	2	74.2		2	69.2

表10 和野トフル墓人骨と与論島民の体肢骨計測値比較

		男性		女性	
		和野	与論	和野	与論
上腕骨					
最大長	r	286.7	295.0	263.5	272.4
	l	281.0	291.1	265.0	271.9
骨体断面示数	r	76.7	75.1	77.3	75.9
	l	79.8	75.7*	75.7	77.3
長厚示数	r	22.1	21.5	19.7	20.5
	l	22.2	21.9	20.7	20.1
橈骨					
最大長	r	224.3	226.8	196.0	206.9
	l	222.8	229.1	194.0	203.2
骨体断面示数	r	73.3	69.2	72.3	67.3
	l	71.4	68.2	71.0	66.6
尺骨					
最大長	r	236.4	240.0	220.7	224.9
	l	236.6	247.7	205.5	222.3
骨体断面示数	r	83.7	79.0	83.1	77.8
	l	83.3	75.6*	85.3	77.9
扁平示数	r	83.7	82.9	85.2	83.0
	l	87.1	79.2***	93.7	82.9*
大腿骨					
最大長	r	404.0	407.0	371.5	378.9
	l	413.0	406.4	348.0	379.9
長厚示数	r	21.7	21.0	20.7	20.5
	l	20.8	20.6	20.9	20.5
中央断面示数	r	100.1	104.2	92.5	103.2***
	l	99.2	104.0	94.4	102.2*
上骨体断面示数	r	79.7	82.7	79.4	82.6
	l	82.5	82.3	81.0	81.5
脛骨					
最大長	r	327.0	333.9	294.0	315.7
	l	342.0	334.5	304.3	315.0
中央断面示数	r	75.3	74.0	75.2	76.2
	l	74.7	73.7	75.3	77.1
脛示数	r	70.0	72.0	73.4	73.7
	l	70.7	71.8	75.8	74.8
長厚示数	r	22.9	21.7	23.0	21.6
	l	21.6	22.0	22.3	22.0
腓骨					
最大長	r	305.0	324.5	291.5	305.8
	l	308.5	325.1	304.0	306.3
中央断面示数	r	73.9	70.1	83.4	69.1
	l	74.2	70.6	69.2	69.0

* p<0.05 , *** p<0.01

表11 右大腿骨最大長から算出した推定身長 (cm)

	男 性		女 性	
	Pearson	藤井	Pearson	藤井
	156.5	153.7	146.0	145.3
	154.1	150.5	144.2	143.3
	161.2	159.9		
平均	157.3	154.7	145.1	144.3

推定される以外は不明である。頭蓋計測値を表13に、頭蓋非計測的小変異を表14に、体肢骨の計測値を表15, 16に、化骨状態を表17, 18に示す。

表12 未成人骨資料

人骨番号	性別	推定年齢
14号	男性	成年(16歳)
15号	不明	小児(14歳)
16号	不明	小児(12歳)
17号	不明	小児(12歳)
18号	不明	小児(8歳)
19号	不明	小児(7歳)
20号	不明	幼児(3歳)
21号	不明	幼児(2歳)
22号	不明	幼児(1.5歳)
23号	不明	乳児(0.5歳)

14号人骨 (男性・16歳) <図版3,7>

骨端部など少量の骨はⅡ 嚢の中に、多くの骨はⅡ 嚢近辺の地中に集骨された状態で残っていた。保存は極めて良好で、ほぼ全身の骨が残っている。頭蓋は完全である。眉弓はやや隆起している。乳様突起は太く、その表面は粗雑である。外後頭隆起の発達はよくない。冠状縫合骨(左)が見られる。下顎角はやや外反し、オトガイは突出している。頭蓋の諸径は成人とほぼ同じ域に達している。脳頭蓋の主要3示数は、中頭・高頭・尖頭型(77.6, 77.6, 100.0)に属している。顔面頭蓋は、広・過低顔および広・低上顔型(Kollmann顔示数81.8, 同上顔示数47.9, Virchow 顔示数103.1, 同上顔示数60.4)に属しており、強い広・低顔傾向を示している。また中眼窩型(左眼窩示数80.0)および広鼻型(鼻示数55.6)に属している。頭蓋の蝶後頭軟骨結合は未癒合である。歯槽側面角は63度で、強い歯槽性突顎を示している。歯列は次の通りである。

c	【8】7 6 ○ 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 【8】	c	【】：未萌出
c	○ 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 【8】	c	

咬耗はMartinの1～2度である。前歯部にエナメル質減形成が見られる。体幹・体肢骨は、ほとんどすべての骨がほぼ完全に残っている。長さも太さも成人骨よりひとまわり小さい。上腕骨の三角筋粗面や大結節稜は突出している。大腿骨の殿筋粗面や脛骨のヒラメ筋線は深く陥凹している。大腿骨に第3転子が認められ、それに続く殿筋粗面は深く陥凹している。大腿骨の粗線の発達は悪い。寛骨の大坐骨切痕が狭く、寛骨臼が大きいことなど骨盤の形状から、本人骨は男性と推定される。骨端部の癒合が完了しているのは、上位仙椎、肩甲骨烏口突起、上腕骨の滑車・小頭・外側上顆、尺骨近位端、寛骨臼、踵骨隆起、第1中足骨頭である。病的所見として、左橈骨の遠位端付近と左中手骨2個に、新生骨の形成が見られる。

15号人骨 (性別不明・14歳)

横穴中央部の地中に残っていた保存良好の少量人骨である。頭蓋では、不完全な頭蓋冠、左上顎骨片および遊離歯が残っている。歯列は次の通りである。

c	(7) (5) (3)(2)	1 ○ 3 4 5 6 (7)	c	()：遊離歯
c	(7) (4)(3)(2)(1)	(2)(3) (6)(7)	c c	

咬耗はおおむねMartinの1度である。前歯部にエナメル質減形成が見られる。体幹・体肢骨では、椎骨8、胸骨、肋骨片、右肩甲骨、右鎖骨、左上腕骨、左尺骨片、左右腸骨片、右腓骨片、左右膝蓋骨、手の骨および足の骨が残っている。手の骨は、手根骨4、中手骨7、基節骨9、中節骨1、末節骨2個が、足の骨は、足根骨9、中足骨6、基節骨8、末節骨2個が残っている。このほか上腕骨、大腿骨、脛骨などの骨端部20個が残っている。このように小さな骨や骨端部が数多く残っているにもかかわらず、長管骨がほとんど見られないことは、葬制を考えると興味深い。病的所見としては、Cribra orbitaliaが認められる。

16号人骨（性別不明・12歳）〈図版3,7〉

I 嚢とII 嚢の間の地中に集骨された状態で発見された。全身の骨格が残っている。頭蓋の保存は完全である。前頭結節および頭頂結節がよく発達している。眉弓の隆起は見られない。乳様突起は小さく、先端は内方を向いている。頬骨弓は細い。外後頭隆起の突出は見られない。全体的に丸く、弱々しい感じを受ける。前・後後頭内軟骨結合は癒合しているが、蝶後頭軟骨結合は未癒合である。頭蓋縫合の早期閉鎖が認められる。外板では矢状縫合の後半がBrocaの3度から4度の閉鎖を示している。縫合が閉鎖、消失している部分は周囲よりもややくぼんでいる。内板では矢状縫合だけではなく、ラムダ縫合も部分的にBrocaの3度から4度の閉鎖を示している。頭形の異常な変形は見られない。頭蓋骨内面の指圧痕は著明ではない。脳頭蓋の主要3示数は短頭・高頭・尖頭型(80.0, 80.0, 100.0)に属している。顔面頭蓋については、Kollmann 顔示数(86.1)および上顔示数(50.4)は中顔・中上顔型に、Virchow 顔示数(112.5)および上顔示数(65.9)は低顔・低上顔型に属している。また眼窩示数は86.1で高眼窩型を、鼻示数は57.1で広鼻型を示している。齒槽側面角は76度で突顎に属している。齒列は次の通りである。

c	【8】7 6 5 4 3 0 1	c	○ 2 3 4 5 6 7【8】
c c	【8】7 6 5 ○ ○ ○ ○	c c	○ ○ ○ 4 5 6 7【8】

咬耗はおおむねMartinの1度である。体幹・体肢骨では、頸椎1個と、左腸骨以外は骨端に至るまでほぼ完全に残っている。尺骨の方形回内筋の起始部、大腿骨の粗線や脛骨のヒラメ筋線など筋付着部がやや発達している。長骨の骨体はどれも細い。坐骨と恥骨間の癒合が完了し、第4、第5仙椎が外側部で癒合している。病的所見としてCribra orbitaliaが見られ、第2胸椎に脊椎披裂が認められる。

17号人骨（性別不明・12歳）

VIII 嚢内とその近辺の地中に散在していた。頭蓋底や顔面の一部を欠く不完全な頭蓋が残っている。頭頂結節がよく発達している。フシケ孔（左右）が見られる。蝶後頭軟骨結合は未癒

合である。後後頭内軟骨結合は癒合している。前後頭内軟骨結合は癒合していることが予想される年齢であるが、未癒合である。歯列は次の通りである。

^c	7	6	5	4	3	2	○		○	○	3	○	○	6	^c
_c	7	(6)	(5)	(4)	(1)		(1)		(4)	(5)	6	(7)	_c	6	7

咬耗はMartinの1～2度である。上顎犬歯にエナメル質減形成が認められる。体幹・体肢骨では、椎骨3個、左右鎖骨、左右上腕骨、右橈骨片、左尺骨、中手骨1個、左腸骨、右坐骨、右恥骨、左右大腿骨、左脛骨、左腓骨、左膝蓋骨および中足骨1個が残っている。大腿骨の殿筋粗面がやや陥凹しているが、筋付着部はそれほど発達していない。

18号人骨 (性別不明・8歳)

20号人骨とともにⅥ嚢内とその近辺の地中に散在していたもので、少量しか残っていない。頭蓋では、側頭骨片1個と遊離歯が残っている。遊離歯の内訳は次の通りである。

^c	6	E		^c	E	6
_c	6	E		_c	D	E 6

乳歯には歯根吸収が起こっている。咬耗は、乳歯がMartinの2度で、第1大臼歯が1度である。未萌出と思われる形成途中の永久歯が9本残っている。このうち下顎犬歯にエナメル質減形成が見られる。体幹・体肢骨では、椎骨3個、肋骨片、右鎖骨片、右上腕骨片、左右橈骨、右尺骨、中手骨1個、右坐骨、左右大腿骨、左右腓骨片、左右膝蓋骨、左右腓骨片、足の舟状骨1、中足骨3個および少数の骨端部が残っている。殿筋粗面や尺骨粗面がやや陥凹している。

19号人骨 (性別不明・7歳) <図版4, 8>

Ⅻ嚢内と近辺の地中に散在していたもので、ほぼ全身が残っている。頭蓋は、右側1/4ほどを欠いている。眉弓の隆起は見られず、乳様突起は小さい。前頭結節は膨隆している。頭蓋の計測値を表13に示す。観察では、頭型は中頭型、顔面は低顔傾向を示しているようである。眼窩示数は91.4で高眼窩型に、鼻示数は53.8で広鼻型に属している。鼻根部は扁平である。前頭縫合が鼻骨の上方に15mmほど残存している。ラムダ小骨、フシケ孔(左)と内側口蓋管骨橋(右)が認められる。前後頭内軟骨結合は未癒合で、後後頭内軟骨結合は癒合している。歯列は次の通りである。

^c	c	c	c	c		^c	c	c	c
6	E	D	C	○	1	○	○	○	D E 6
6	E	●	○	○	○	//	//	○	6
_c	c					_c			_c

表13 未成人頭蓋計測値

Martin's No.		14号 16歳	15号 12歳	19号 7歳
1	頭蓋最大長	174	165	—
8	頭蓋最大幅	135	132	—
17	バジオン・ブレグマ高	135	132	—
8/1	頭蓋長幅示数	77.6	80.0	—
17/1	頭蓋長高示数	77.6	80.0	—
17/8	頭蓋幅高示数	100.0	100.0	—
20	耳ブレグマ高	109	120	112
20/1	頭長耳高示数	62.6	72.7	—
20/8	頭幅耳高示数	80.7	90.9	—
5	頭蓋基底長	100	89	—
9	最小前頭幅	91	88	90
10	最大前頭幅	114	108	112
11	両耳幅	120	119	—
23	頭蓋水平周	499	480	—
24	横弧長	249	250	—
25	正中矢状弧長	358	355	—
26	正中矢状前頭弧長	124	130	114
27	正中矢状頭頂弧長	130	123	130
28	正中矢状後頭弧長	104	102	—
29	正中矢状前頭弦長	109	109	101
30	正中矢状頭頂弦長	114	108	114
31	正中矢状後頭弦長	90	88	—
40	顔長	99	83	—
43	上顔幅	99	92	92
44	両眼窩幅	95	86	85
45	頬骨弓幅	121	115	—
46	中顔幅	96	88	—
47	顔高	99	99	—
48	上顔高	58	58	49
47/45	Kollmann顔示数	81.8	86.1	—
47/46	Virchow顔面示数	103.1	112.5	—
48/45	Kollmann上顔示数	47.9	50.4	—
48/46	Virchow上顔示数	60.4	65.9	—
50	前眼窩間幅	21	18	19
51	眼窩幅 (左)	40	36	35
52	眼窩高 (左)	32	31	32
52/51	眼窩示数 (左)	80.0	86.1	91.4
54	鼻幅	25	24	21
55	鼻高	45	42	39
54/55	鼻示数	55.6	57.1	53.8
57	鼻骨最小幅	11	10	8
72	全側面角	78	88	—
74	齒槽側面角	63	76	—
65	下顎頭間幅	—	107	—
66	下顎角幅	93	78	88
68(1)	下顎骨長	(97)	81	(80)
69	オトガイ高	26	25	—
69(1)	下顎体高 (左)	24	25	20(右)
69(3)	下顎体厚 (左)	14	13	13
70 a	下顎頭高 (左)	45	35	42(右)

表14 未成人頭蓋の非計測的小変異

	14号 16歳	15号 14歳	16号 12歳	17号 12歳	19号 7歳	20号 3歳	21号 2歳	22号 1.5歳
ラムダ小骨	-	/	-	/	+	/	/	-
ラムダ縫合骨	++	//	--	//	/-	//	//	/+
横後頭縫合痕跡	--	//	--	/-	/-	//	/+	++
アステリオン小骨	++	//	--	//	/+	//	//	//
後頭乳突縫合骨	-+	//	--	//	/-	//	//	//
頭頂切痕骨	++	//	-+	//	/+	//	//	//
翼上骨	--	//	--	//	++	//	//	//
前頭縫合残存	-	-	-	/	-	/	/	-
眼窩上神経溝	--	//	--	//	--	//	//	-/
眼窩上縁孔	--	-/	--	//	--	//	//	--
硬膜眼窩孔	-+	//	+-	//	+-	//	//	//
横頬骨縫合痕跡	--	//	--	//	/-	//	//	//
口蓋隆起	-	/	-	/	-	/	/	/
内側口蓋管	-+	//	--	//	+-	//	//	//
外側口蓋管	+-	//	--	//	--	//	//	//
顎管欠如	--	//	--	/-	/+	/-	-/	//
後頭顆前結節	--	//	--	--	//	//	//	//
第3後頭顆	-	/	-	-	/	/	-	/
後頭顆旁突起	--	//	--	//	/-	//	//	//
舌下神経管二分	--	//	--	/-	-/	/-	-+	//
頸静脈孔二分	--	//	--	//	//	//	//	//
外耳道骨瘤	--	//	--	--	/-	//	--	--
フシケ孔	--	//	--	++	/+	//	++	++
ベサリウス孔	--	//	--	//	--	//	//	//
卵円孔形成不全	--	//	--	//	--	//	/-	/-
翼棘孔	--	//	--	//	--	//	//	//
床状突起間骨橋	--	//	--	//	//	//	//	//
副オトガイ孔	--	//	--	//	--	//	-/	/-
下顎隆起	--	//	--	//	--	//	-/	//
顎舌骨筋神経管	--	//	--	-/	--	//	--	//

+：有， -：無， /：観察不能， 記載は各個体，各項目とも右，（正中），左の順。

表15 未成人体肢骨計測値 (右側, 骨体に上下骨端を接合して計測)

Martin's No.	計測項目	14号 16歳	16号 12歳
上腕骨			
1	最大長	250	-
2	全長	249	226
5	中央最大径	20	17
6	中央最小径	14	12
7	骨体最小周	51	46
7a	中央周	56	49
6/5	骨体断面示数	70.0	70.6
7/1	長厚示数	20.4	-
橈骨			
1	最大長	198	168
3	骨体最小周	35	30
4	骨体横径	14.5	12
4a	骨体中央横径	13	11.5
5	骨体矢状径	10	9
5a	骨体中央矢状径	10	9
5(5)	骨体中央周	38	31
5/4	骨体断面示数	69.0	75.0
5a/4a	中央断面示数	76.9	78.3
大腿骨			
1	最大長	367	333
2	自然位全長	363	332
6	骨体中央矢状径	21.5	20
7	骨体中央横径	23.5	19
8	骨体中央周	71	61
9	骨体上横径	27	23
10	骨体上矢状径	22	21
8/2	長厚示数	19.6	18.4
6/7	中央断面示数	91.5	105.3
10/9	上骨体断面示数	81.5	91.3
脛骨			
1	全長	304	262
1a	最大長	311	267
8	中央最大径	23	19.5
8a	栄養孔位最大径	25.5	24
9	中央横径	19	17
9a	栄養孔位横径	21	18.5
10	骨体周	66	58
10a	栄養孔位周	73	68
10b	骨体最小周	64	55
9/8	中央断面示数	82.6	87.2
9a/8a	脛示数	82.4	77.1
10b/1	長厚示数	21.1	21.0

注. 14号の大腿骨と16号の橈骨は左側資料

表16 未成人の体肢骨骨体計測値 (右骨体だけをMartinの計測法に準じて計測)

Martin's No.	計測項目	14号 16歳	15号 14歳	16号 12歳	17号 12歳	18号 8歳	19号 7歳	20号 3歳	21号 2歳	22号 1.5歳	23号 0.5歳
鎖骨骨体											
1	最大長	112	105	99	—				69		
4	中央垂直径	9	8	9	8				5		
5	中央矢状径	10	13	7.5	7.5				6		
6	中央周	30	34	27	28				17		
6/1	長厚示数	26.8	32.5	27.3	—				24.6		
4/5	断面示数	90.0	61.5	120.0	106.7				83.3		
上腕骨骨体											
1	最大長	237		214	—		162			—	
5	中央最大径	19		17	16		14.5			10	
6	中央最小径	14		12	13		11			8	
7	骨体最小周	51		46	47		42			28	
7a	中央周	54		49	49		43			30	
6/5	骨体断面示数	73.7		70.6	81.3		75.9			80.0	
7/1	長厚示数	21.5		21.5	—		25.9			—	
橈骨骨体											
1	最大長	184		158	—						
3	骨体最小周	35		30	—						
4	骨体横径	14.5		12	—						
4a	骨体中央横径	14		11.5	—						
5	骨体矢状径	10		9	—						
5a	骨体中央矢状径	10		9	—						
5(5)	骨体中央周	38		31	—						
5/4	骨体断面示数	69.0		75.0	—						
5a/4a	中央断面示数	71.4		78.3	—						
尺骨骨体											
1	最大長	207		174	—		138				
3	骨体最小周	34		27	—		26				
11	尺骨前後径	12		10	9.5		8				
12	尺骨横径	12		12	11		11				
11/12	骨体断面示数	100.0		83.3	86.4		72.7				
大腿骨骨体											
1	最大長	334		303	315	—	230	—	—	—	—
6	骨体中央矢状径	21		20	20	15	15	11	11	10	8
7	骨体中央横径	24		19	22.5	16.5	15	12	13.5	12	9
8	骨体中央周	72		61	67	51	50	39	40	35	28
9	骨体上横径	27		23	26.5	22	21	—	—	16	—
10	骨体上矢状径	22		21	22	—	16	—	—	13	—
6/7	中央断面示数	87.5		105.3	88.9	90.9	100.0	91.7	81.5	83.3	88.9
10/9	上骨体断面示数	81.5		91.3	83.0	—	76.2	—	—	81.3	—
脛骨骨体											
1a	最大長	277		238	—		187	—	—	—	—
8	中央最大径	23		19.5	—		15.5	—	13	—	8
8a	栄養孔位最大径	25.5		24	—		17.5	—	14	—	9
9	中央横径	19		17	—		13.5	—	11	—	8
9a	栄養孔位横径	21		18.5	—		15	—	12	—	9
10	骨体周	66		58	—		47	—	39	—	32
10a	栄養孔位周	74		68	—		53	—	43	—	34
10b	骨体最小周	64		55	—		47	—	38	—	—
9/8	中央断面示数	82.6		87.2	—		87.1	—	84.6	—	100.0
9a/8a	脛示数	82.4		77.1	—		85.7	—	85.7	—	100.0
腓骨骨体											
1	最大長	—		232	—						
2	中央最大径	11		10	—						
3	中央最小径	9.5		8	—						
4	中央周	34		30	—						
3/2	中央断面示数	86.4		80.0	—						

注1. 14号の脛骨, 16号の橈骨, 17号の上腕骨・尺骨・大腿骨, 19号の上腕骨・大腿骨・脛骨, 21号と22号の大腿骨, 23号の脛骨は左側資料

注2. 14号の上腕骨では滑車・小頭が, 尺骨では近位端が癒合している

表17 化骨状態 (1)

		14号	15号	16号	17号	18号	19号	現代人*	
		16歳	14歳	12歳	12歳	8歳	7歳	男性	女性 (年)
頭蓋	蝶後頭軟骨結合	-	/	-	-	/	-		
	前後頭内軟骨結合	+	/	+	-	/	-		
	後後頭内軟骨結合	+	/	+	+	/	+		
椎骨	椎弓と椎体	+	+	+	+	+	+		
	仙骨	△	/	△	/	/	/		
鎖骨	胸骨端	-	-	-	/	/	-	24	23
肩甲骨	肩峰	-	-	-	/	/	/	17.5	16.25
	烏口突起	+	-	-	/	/	-	16.5	15
	内側縁	-	-	-	/	/	-		
上腕骨	骨頭	-	-	-	/	/	-	17.5	17
	内側上顆	-	/	-	/	/	/	17	15
	外側上顆	+	/	-	/	-	/	16	14.5
	滑車	+	-	-	/	/	/	16.5	14.5
	小頭	+	-	-	-	-	/	15	13
橈骨	近位端	-	/	-	-	-	/	16	14
	遠位端	-	-	-	/	/	-	18	17
尺骨	近位端	+	-	-	-	-	-	15.5	13.5
	遠位端	-	-	-	/	/	-	18	17
寛骨	腸骨稜	-	-	-	/	/	-	20	20
	寛骨臼	+	-	-	-	/	-	16	14
	恥骨と坐骨	+	/	+	/	/	-	8	7
	坐骨結節	-	/	-	/	/	-	20	20
大腿骨	骨頭	-	-	-	-	-	-	16	15
	大転子	-	-	-	-	-	-	17	16
	小転子	-	/	-	-	-	/	17	16
	遠位端	-	-	-	-	/	-	18	16.5
脛骨	近位端	-	-	-	/	/	-	16.5	16.5
	遠位端	△	-	-	-	/	-	16.5	15
腓骨	近位端	/	-	-	/	/	/	16.5	16.5
	遠位端	-	-	-	/	/	/	16.5	15
踵骨	踵骨隆起	+	-	-	/	/	/	14	13

+ : 癒合完了 △ : 癒合途中 - : 未癒合 / : 観察不能

* 鈴木 (1943)

表18 化骨状態 (2)

		20号	21号	22号	23号
		3歳	2歳	1.5歳	0.5歳
頭蓋	大泉門	/	/	-	/
	小泉門	/	/	+	/
	前後頭軟骨結合	-	-	/	/
	後後頭軟骨結合	-	-	-	/
椎骨	左右の椎弓	/	-	-	-
	環椎	/	+	-	/
	他の頸椎	+	+	+	/
	胸椎	+	+	+	/
	椎弓と椎体	-	-	/	/

+ : 癒合完了 - : 未癒合 / : 観察不能

咬耗は乳歯ではすべてMartinの2度、永久歯の第1大臼歯は1度、上顎中切歯は0度である。上顎中切歯にエナメル質減形成が見られる。体幹・体肢骨では、いくつかの椎骨、胸骨、右鎖骨、右橈骨、右恥骨、手の骨および足の骨以外すべて残っている。上腕骨の三角筋粗面、尺骨の骨間縁および大腿骨の粗線はやや張り出している。大腿骨骨体上部はやや扁平である(上骨体断面示数76.2)。椎骨の椎体と椎弓は癒合している。病的所見としてCribra orbitaliaが見られる。X線所見では大腿骨下端および脛骨上下端にハリス線が認められる。

20号人骨 (性別不明・3歳)

18号人骨とともにV壜内とその近辺の地中に散在していたもので、少量しか残っていない。頭蓋では、少しの頭蓋骨片と遊離歯がある。前・後後頭内軟骨結合は未癒合である。遊離歯の内訳は次の通りである。

	c					c	c
E	D	C	B			A	B
E	D		B	A		A	B
							E
							C

咬耗はすべてMartinの1度である。ほかに未萌出と思われる形成途中の永久歯が8本残っている。体幹・体肢骨では、椎骨、胸骨片、肋骨片、右鎖骨片、右上腕骨片、右橈骨片、左腸骨片、右坐骨、右恥骨、左右大腿骨および左右脛骨が残っている。椎骨の椎体と椎弓は未癒合であるが、左右の椎弓は胸椎において癒合を完了している。

21号人骨 (性別不明・2歳)

V壜内とその近辺の地中にあった。頭蓋では、多数の頭蓋骨片および下顎骨が残っている。得られた計測値は、オトガイ高19mm、下顎体高17mmおよび下顎体厚11mmである。フシケ孔(左右)および舌下神経管二分(左)が認められる。前・後後頭内軟骨結合は未癒合である。歯列は次の通りである。

(E)	(D)		(E)
	D		

咬耗はD、DがMartinの1度である。E、Eは0度で萌出途中と思われる。体幹・体肢骨では、椎骨、肋骨片、左右鎖骨、左右上腕骨片、右橈骨片、中手骨2個、左坐骨、左恥骨、左大腿骨、右脛骨および指骨1個が残っている。環椎の左右の椎弓は未癒合であるが、他の頸椎と胸椎では癒合している。

22号人骨（性別不明・1.5歳）

横穴中央付近の地中に残っていた。頭蓋では、不完全な頭蓋冠と上顎骨片および下顎骨片がある。計測可能な部位は、最小前頭幅75mm、上顔幅76mm、内眼窩間幅71mm、下顎体高15mm、下顎体厚10mm、最小枝幅22mmである。小泉門は閉鎖しているが、大泉門は閉鎖していない。ラムダ縫合骨（左）、フシケ孔（左右）が見られる。歯列は次の通りである。

【E】D○○A	(B)
	(B) D【E】

咬耗はMartinの0～1度である。体幹・体肢骨では、椎骨、肋骨片、右鎖骨、右上腕骨、右橈骨片および左右大腿骨が残っている。筋付着部の発達は弱い。椎骨の左右の椎弓は、胸椎では癒合しているが、頸椎では未癒合である。病的所見として、Cribra orbitaliaと、頭蓋骨の内面に骨膜反応性骨新生が認められる。

23号人骨（性別不明・0.5歳）

横穴中央部の地中に残っていた。頭蓋骨片多数、遊離歯3本（E、D、E）、椎骨、肋骨片、右上腕骨、右尺骨、左右不明橈骨片、左右大腿骨および左右脛骨が残っている。環椎の左右の椎弓は未癒合である。病的所見として、頭蓋骨内面に骨膜反応性骨新生が認められる。

未成人骨に関する考察

和野トフル墓から出土した人骨を約50個体と推定すると、そのうち未成人骨が10体含まれていることから、未成人骨の占める割合は約20%である。これを、同じ江戸時代に属する東京都一橋高校遺跡人骨(森本ら, 1985)における小児・乳幼児の占める割合58.4%と比較すると、本トフル墓のほうが著しく低いという結果になる。しかし別項のエナメル質減形成の観察では、本トフル墓の人びとは小児期にかなりのストレスに見舞われたことがうかがわれるので、この割合は低すぎるように思われる。死産児は産家の軒下に埋葬されることがあり、また幼児の場合、簡単に埋葬されて改葬されないことも多いというから(恵原, 1979; 笠利町教育委員会・跡見女子大民俗文化研編, 1983)、トフル墓に納められなかった未成人個体が存在することも考えられる。

頭蓋計測が可能であったのは14号、16号の2例である。脳頭蓋は14号(16歳)が中頭・高頭・尖頭型に、16号(12歳)が短頭・高頭・尖頭型に属している。顔面頭蓋はどちらも強い低・広顔傾向を示している。

体肢骨では、全般的に筋付着部が比較的良好に発達していることがやや特徴的である。

化石状態では、頭蓋の蝶後頭軟骨結合はいずれも未癒合である。前後頭内軟骨結合は、14号(16歳)と16号(12歳)で癒合しており、19号(7歳)では未癒合である。これは赤沢(1971)

による癒合年齢（8～10歳）に一致しているが、17号（12歳）で未癒合な例が見られ、興味深い。後後頭内軟骨結合は19号（7歳）以降の年齢のものは癒合しており、赤沢(1971)による癒合年齢（6～7歳）と合致している。椎骨の左右椎弓の癒合は、生後1年以内にまず腰椎から始まり、ついで胸椎、頸椎と順次進んでいく。また椎弓と椎体は3年から6年で癒合するという(Williams & Warwick, 1980)。19号（7歳）、20号（3歳）、21号（2歳）、22号(1.5歳)、23号（0.5歳）の所見はこれらに一致している。寛骨の恥骨坐骨間は16号（12歳）では癒合しており、19号（7歳）では未癒合である。これは現代人（鈴木、1943）の男8年、女7年という年齢に反していない。14号はいくつかの部位が癒合しているが、これは現代人の16歳の化骨状態とどの項目においても矛盾しない。以上のように和野トフル幕未成人骨における化骨状態は現代人と大差ないようである。病的所見については別項にゆずる。

C. 病的所見

1) 頭蓋

比較的保存のよかった成人頭蓋（1～13号）については、計測・観察所見の項の歯式に付記した歯に関連する疾患以外に、特に病的所見は認められない。このほか、多量に残存する頭蓋片のなかに、副鼻腔領域の広範な異常を示す1例が見いだされた。この変化が見られたのは、X 齶に納められていた熟年女性と推定される個体の頭蓋である。左右の側頭部から前頭骨を経て下顎骨に至る部位が保存されているが、上顔部が一部破損しているため、上顎洞、蝶形骨洞、前頭洞など副鼻腔内面の観察は比較的容易である。左右上顎洞の内壁は、全域にわたって著明な骨肥厚をきたし、表面は凹凸不平で多数の小孔が見られる（図版9）。骨壁の厚さは最厚部で約6mmに達している。右上顎体前面の眼窩下孔直下や頬骨突起基部には、上顎洞内と交通する瘻孔が開孔し、周辺部の骨表面は本来の平滑さを失って粗雑となっている。両側の上顎体側頭下面では歯槽孔が拡大し、その周囲は内壁とよく似た不平な表面性状を呈している。蝶形骨洞においても内壁の骨肥厚が進行しており、内腔は正常の状態に比してはるかに狭小となっている。左右前頭洞内面に軽度の肥厚が見られるほか、わずかに残存する篩骨片や鼻骨後面にも軽度の炎症性反応が表れている。以上の所見は、上顎洞と蝶形骨洞を中心に慢性的化膿性炎症が存在し、これが副鼻腔のほぼ全域に広がっていたことを示している。副鼻腔炎が粘膜にとどまらず、骨壁に及んで骨膜下の骨新生を促し、さらには瘻孔を介して洞外にも炎症が波及したとみられる。副鼻腔の粘膜は鼻腔、咽頭の炎症や歯疾患が原因となってしばしば炎症を起こす。最も発生頻度が高いのは上顎洞炎であるが、その原因が歯にあるものを特に歯性上顎洞炎という。本例は、下の歯式に示す通り生前喪失歯が多く、上顎歯槽部の骨吸収も著しい。

● ○ ○ ● / ● ●	// / ● 5 6 ●
● ● ● ● ○ ○ /	// / 3 ● ● ● 7

詳細な鑑別診断は稿を改めて行いたいですが、副鼻腔炎の発生頻度や歯列の状態を考慮すると、本例は、上顎歯を原因とした歯性上顎洞炎が、鼻道を介して蝶形骨洞その他の副鼻腔に拡散した可能性が高いと考えられる。

未成人頭蓋 (14~23号) については、鉄欠乏性貧血と関連があるとされる *Cribræ orbitalia* が、観察可能な5個体の眼窩のうち4個体の眼窩に見いだされた。16号 (12歳) では頭蓋縫合に部分的閉鎖が見られる。外板では矢状縫合の後半が Broca の3~4度の閉鎖を (図版3)、内板では矢状縫合とラムダ縫合が部分的に3~4度の閉鎖を示している。岡田 (1962) によると、矢状縫合は全縫合のうち閉鎖開始が最も早く、閉鎖の最低年齢は男19歳、女20歳であったという。矢状縫合が極めて早期に閉鎖すると頭蓋の幅の発育が妨げられ、代償として頭蓋は前後方向に長くなると考えられる。しかし16号の頭型は短頭であり、頭蓋にゆがみなど異常変形は見られない。また頭蓋骨内面の指圧痕も著明でない。16号の頭蓋縫合の閉鎖が病的なものであったのか、単に閉鎖が早期に起こった変異例であるのか、判断は困難である。22号 (1.5歳、図版9) と23号 (0.5歳) の脳頭蓋内面には骨膜反応性骨新生が見られ、髄膜炎など炎症が存在したことがうかがえる。

2) 歯

本トフル墓から検出された歯には、咬耗が高度なものや多量の歯石が付着しているものが多く見られた。また正確な頻度は算出できないが、齶蝕も極めて高い頻度で認められた。

このほか、歯に見られる小病変としてエナメル質減形成がある。人の永久歯は出生時から6~7年までの期間にわたって顎骨の中で形成される。この時期に栄養障害や重い疾患といったストレスに見舞われると、歯のエナメル質形成が一時的に阻害されることがある。ストレスから解放されるとエナメル質形成は再開するが、阻害された部分は、歯を帯状に取り巻く小窩や溝となって生涯残る。これがエナメル質減形成である (図版9)。エナメル質減形成を調べれば、その個体に当時作用していたストレスの程度が推定できる。また歯面における減形成の位置から、ストレスが作用したおおよその時期も推定可能である。

本トフル墓では34個体分の下顎犬歯が観察できたが、遊離歯が多く、性別・年齢はほとんど不明である。減形成はこの34個体中21個体に見られ、61.8%という高頻度を示した。また21個体のうち、12個体はストレスを1回受けたと思われる (減形成数が1) が、複数回のストレスに見舞われた個体もあり、7個体は2回、2個体は3回のストレスを経験したと推定される。下顎犬歯の歯冠形成は生後0.5年に始まり、6.5年に完成するという (Massler et al., 1941)。この歯冠形成時期を、3回のストレスを経験した18号人骨に当てはめると、この個体は生後3.5~4.0年に1回、4.0~4.5年に1回、4.5~5.0年に1回と、計3回ストレスに見舞われ、8歳で死亡したと推測される。減形成の発生時期、つまりストレスの作用時期は生後4~5年が最も多く、3年未満と6~6.5年に発生したものは見られなかった。また、減形成の程度は軽度の変化がほとんどで、変化の高度なものはなかった。生後3年未満に発生した減形成や、程度のひどい減形成が見られないのは、強いストレスや生後早い時期にストレスを受けた個体は、当時の

環境下では生存できなかったためと思われる。エナメル質減形成が高頻度で出現していることと合わせて考えると、当時の厳しい生活環境がうかがえる。

3) 体幹・体肢骨

体幹・体肢骨については、まずほぼ全身の骨格が残存している9個体（1、2、3、5、9号人骨およびⅣ、Ⅴ、Ⅸ（男・女）甕内人骨）に関して個体別観察を行った。このうち病的所見が認められたのは、次の6個体である。

1号人骨（男性・熟年）

変形性関節症が全身の各部に見られる。脊柱では正中環軸関節や下位胸椎～第5腰椎の椎間関節面に多孔化や辺縁の骨増殖が認められ、第3～5腰椎体辺縁には骨棘が形成されている。また、肩、肘、股など大関節の関節面辺縁に骨増殖が見られる。

9号人骨（男性・壮年）

第11胸椎に軽度の前方楔状化および椎体下面前縁部の不整化と小孔形成が見られる。また、椎体上面にはシュモール結節の痕跡がある。第5腰椎は仙椎化しており、両側横突起が完全に仙骨外側部と癒合して腰仙移行椎を形成している。この仙骨には披裂傾向が見られ、分離線を残して左右の椎弓が合する第2仙椎を除き、第1、第3～5仙椎は正中仙骨稜付近を先天性に欠損している。

Ⅳ甕内人骨（女性・壮年）

ほぼ全身の関節領域に変形性関節症が見られる。このうち最も著明な変化を示すのは膝関節部で、関節面辺縁の骨縁堤や、関節面の不整小隆起、摩耗面が見られる。特に右膝蓋骨関節面の内側半では数条の縦溝を伴った滑沢面が形成されている。また、残存する第5腰椎体は、関節突起基部で椎弓が離開しており、脊椎分離症と考えられる（図版9）。このほか、尺骨骨体上部の異常な肥大と、左踵骨体下面の特異な粗雑部が存在するが、原因は不明である。

Ⅴ甕内人骨（男性・熟年）

Ⅳ甕内人骨と同様に、全身的に変形性関節症が見られるが、その変化はさらに進行した状態にある。大腿骨下半および脛骨上半は欠損しているが、両側膝蓋骨関節面に形成された滑沢な摩耗面（図版9）から推して、膝関節症が重症であったことは確実である。また、肩、肘、股などの大関節だけでなく、手、足の小関節においても、関節面辺縁の骨増殖が著しい。右手の大菱形骨の手根中手関節面には滑沢面も形成されている。

Ⅸ甕内人骨（男性・壮年）

第1胸椎の棘突起中央部が限局的に肥大しており、治癒骨折の可能性がある。また、第5腰椎は仙椎化し、完全に仙骨と癒合している（図版9）。両側膝蓋骨の関節面内側半には長径6mmほどの不整な隆起が形成されており、左側では隆起の周囲に海綿質が露出している。変形性関節症の痕跡と考えられる。

Ⅸ甕内人骨（女性・壮年）

左右脛骨の内側縁上部を中心に、紡錘形をした著明な骨肥厚があり、この周囲に微細溝が発

達している。右脛骨では骨体下部にも肥厚が見られるが、左側は同部を欠損している。慢性の炎症反応による変化と考えられるが、腓骨、大腿骨は腐食や欠損のために、観察不能である。上肢には特に異常所見はない。

このほか、個体識別を行えなかった体幹・体肢骨について骨種ごとの観察を行った(表19)。体幹骨では、脊柱疾患として、椎体辺縁の骨棘形成と椎間関節の退行性変化を主体とする変形性脊椎症(図版10)が数多く見られたほか、腰椎の脊椎分離を示す椎体片3例と椎弓片3例、腰仙移行椎3例、仙骨披裂の傾向を示すもの2例、癒合椎1例(Th9-10, 図版10)が認められた。体肢骨に多く認められた骨病変としては、変形性関節症(表20)と慢性炎症性変化(表21)があげられる。変形性関節症は、関節面辺縁の骨増殖(骨縁堤)や、関節面の粗雑化・摩耗といった退行性および増殖性変化を特徴とする。その多くは、加齢的变化に長期にわたる力学的負担が加わって発症するといわれるが、比較的高齢とみられる個体の少ない本トフル墓において多くの症例が見いだされたことは、当時の労働条件の厳しさを反映したものと考えられる。また、下腿骨を中心に見られる微小孔・微細溝を伴う骨肥厚や、多棘性新生骨などの変化は、手・足の指骨先端に見られる萎縮と合わせて、全身性の慢性炎症によるものと思われる。なお、頭蓋にはこれに関連するような病変は見いだされていない。

表19 病的所見の観察資料数

	右	左
肩甲骨	5(12)	5(13)
鎖骨	11(25)	10(24)
上腕骨	8(26)	5(27)
橈骨	9(20)	13(25)
尺骨	7(16)	10(19)
寛骨	5(15)	1(12)
大腿骨	5(24)	5(20)
脛骨	6(21)	6(19)
腓骨	2(18)	4(22)
膝蓋骨	19(21)	17(22)

() なしは保存良好な資料

() 内は一部欠損のあるものも含めた資料数

表20 変形性関節症

		右	左
肩甲骨	関節窩	6	2
	肩峰関節面	3	1
鎖骨	胸骨端	3	2
	肩峰端	2	2
上腕骨	近位関節面(肩)	4	2
	遠位関節面(肘)	7	5
橈骨	近位関節面(肘)	2	3
	遠位関節面(手根)	2	2
尺骨	近位関節面(肘)	5	4
寛骨	寛骨臼(股)	7	4
大腿骨	近位関節面(股)	2	2
	遠位関節面(膝)	3	1
脛骨	近位関節面(膝)	1	1
	遠位関節面(距腿)	1	2
腓骨	遠位関節面(距腿)	1	1
膝蓋骨	膝関節面	6	7

表21 慢性炎症性変化

	右	左
上腕骨	0	0
橈骨	1	0
尺骨	1	1
大腿骨	4	5
脛骨	5	7
腓骨	5	2

未成人骨には次のような病変が見いだされた。14号（男性，16歳）の橈骨遠位端と中手骨には，本来の骨表面を薄く層状に覆う新生骨が形成されている。何らかの炎症によるものであろう。16号（12歳）の第2胸椎の棘突起に狭い斜めの切れ目状の欠損がある。これは脊椎披裂と呼ばれる椎弓の癒合不全であるが，欠損が小さいこと，他の椎骨や体肢骨はいずれも正常であることから，特別な症状は示していなかったと思われる。19号（7歳）の大腿骨と脛骨にハリス線が見られる。この人骨にはエナメル質減形成と Cribra orbitalia も見られ，これらはいずれも，この個体が重い疾病または栄養障害を経験したことを示している。

D. 特記所見

1) 切創

トフル墓内人骨の4例に利器によると思われる創痕が見いだされた。このうちⅨ壙内に納められていた女性壮年個体だけはほぼ全身の体幹・体肢骨がそろっているが，他の3例（下顎骨，上腕骨，大腿骨各1片）は壙外で検出されたため，所属個体は不明である。

Ⅸ壙内人骨の例では，第2～4頸椎の椎体前面を中心に，10数本の切創が横走する（図版11）。上下の頸椎にまたがる切創があることから，これらは脊椎が関節している状態の時に作られたものと推測される。このほか，第1，第10胸椎の椎体前面，右肩甲骨内側縁，右鎖骨骨体下面，左上腕骨頭上部，右寛骨臼上方にそれぞれ少数の創痕が見られる。肩甲骨内側縁を上下約3cmにわたって浅くそぎとる1例を除けば，いずれも短く浅い線状の切り込みである。これらの部位がいずれも関節近傍であることから，洗骨・改葬の際に，軟部組織の残存する関節をはずす操作が，刃物を用いて行われた可能性が考えられる。

このほか壮年男性の下顎骨左オトガイ結節部，壮年女性の右大腿骨体内側面（図版11），小児の右上腕骨体上半部にも創痕が見られる。その部位は必ずしも関節に関係していると思えず，また線状の細かな痕とは多少性状が異なるため，Ⅸ壙内人骨の傷と性格を異にするものか否か，明らかでない。改葬の際，まだ肉が腐食していない場合に，鎌を使ってそぎ落したり（長田，1978；名嘉真，1979），傷をつけて埋めもどす（長沢，1977；山田，1984）といったことも行われたようであるが，Ⅸ壙内人骨以外の創痕はこのような操作を示しているのかもしれない。

2) 椎体の連続破損

Ⅸ壙内に納められていた男性壮年個体の第2頸椎から第9胸椎にかけて，椎体の前方部が掻き取られたように破損している。この消失部分に対応する破片は，壙内に全く残存しない。全椎骨を関節させると，破損の断面は上下に連続しており，第10胸椎体の上面で急に終わる。従ってこの破損が生じた時点では，少なくとも第9胸椎までは上下の椎骨が正確に関節した状態にあったと考えられる。個々の椎体を観察すると，断面の辺縁は刃物で切断されたような直線的なものではなく，やや凹凸があり，断面自体が不平な曲面をなす椎体もある。このような破損の生じる要因として，第1に改葬時の掘り上げが想起される。露出した脊柱の前部を誤っ

て掻き取ってしまったという考え方だが、仰臥位では脊柱より先に胸骨や肋骨が露出することや、これらの骨に異常な破損が見られないことは、この想定を積極的に支持する材料とはならない。椎骨自体の骨質は丈夫であり、破損断面の性状からも自然の腐食とは考えにくく、何らかの人為的操作による可能性が高いと思われるが、詳細は不明である。

3) 歯の異常摩耗

永久歯の異常摩耗が2例見られた。第1例はX 嚢内に納められていた熟年女性の上顎左第1大臼歯で、歯冠遠心面の歯頸部から歯根の約3/4にわたる部分が、幅広く浅い凹面となっている(図版10)。その表面は滑沢であるが、頬側遠心根の辺縁は歯石で覆われ始めている。摩耗面の輪郭は、歯冠-歯根方向にはゆるやかな凹弧を描き、頬舌方向では直線的である。口蓋根遠心側の摩耗面に2次象牙質が形成されていることから、この面が作られるまでに長期間を要したことが分かる。咬合面の咬耗はMartinの1度である。歯槽骨の吸収が高度で、多量の歯石が根尖近くまで付着しており、生前歯根はほとんど露出していたものと推測される。隣接する上顎左第2大臼歯は生前に喪失している。なおこの個体は、前出の副鼻腔炎に罹患していたと思われる人骨である。

第2例はXI 嚢内に納められていた壮年女性の上顎右中切歯舌側面に見られた船底状の凹面である。遊離歯として検出されたため、釘植していた歯槽や隣接歯の状態は不明である。咬耗はMartinの2度である。凹面は、歯冠舌側面遠心辺縁隆線の中央から歯根上部にわたって形成されており、長軸が歯軸とほぼ平行な楕円形をしている。このため基底結節の大半は失われている。摩耗面の大きさは長径約6mm、短径約3mm、最深部の深さ約2mmで、表面は滑沢である。この歯の遠心隣接面歯頸部にはC3の齶蝕があり、舌側の摩耗面を一部切り取っている。この状態は、摩耗面が形成された後に、隣接面の齶蝕が舌側方向に拡大したことを示している。

以上の所見から、両例とも摩耗面が生前に形成されたことは確実である。しかし、摩耗面の主要面積を占めるのは歯根の部分であり、特に第1例のような上顎大臼歯遠心面は、摩耗の生じるような作用の及ぶにくい部位である。これらの摩耗面がどのような要因で形成されたかを推定することは、歯列の保存状態があまりよくないこの2例からは困難であり、今後の類例を待ちたい。

<嚢内人骨からみた葬制に関する考察>

本トフル墓内には嚢に納められた人骨のほか、嚢外の土中に散乱状態で埋没していたもの、嚢の破損により流出したと思われるもの、主だった骨を2次的に集積したものなど、さまざまな人骨の状態が混在していた。どの状態にもそれぞれの意味合いが込められており、当時の葬法を推測するうえで貴重な資料となるものである。以下、嚢内の人骨を中心に、それらの年齢構成、合葬の組み合わせなどを各嚢ごとに整理し、若干の考察を試みた。

1. I 甕

横穴の入口近くに位置していた甕である。上半部を破損していたが、ほぼ直立しており、その中には、頭蓋や長管骨の大半を欠くが1個体分の肩甲骨、鎖骨、胸骨などが含まれる。骨の形態的特徴から、壮年女性のものと思われる。

2. II 甕

I 甕の奥に位置する甕で、上部の大半を欠損するため、隣接地上へ人骨が流出した可能性が考えられる。頑丈な体肢骨2個体分と未癒合の長管骨骨端や遊離歯が出土した。未癒合の骨端は隣接した土中から出土した成年男性の体肢骨と接合した。このため、これらは成人男性2個体と成年男性1個体の合わせて3個体分と考えられる。

3. III 甕

横穴内左奥隅に位置する直立した甕で、破損もわずかであり、きゃしゃな壮年女性のものと思われる1個体分の体肢骨が出土したほか、橈骨上端、右第1中手骨、右中間楔状骨および左第4中足骨など、やや太く、男性のものと思われる骨片が混じる。後者は1個体分としては少なすぎるので、外部からの2次的流入も考えられるが、中手骨や中足骨が含まれることから、最も早く本甕に納められ、後に取り出された残りと考えerるほうが妥当であろう。そのほかにオトガイ部付近だけを残す下顎骨がある。性別は不明であるが、前歯は生前脱落し、歯槽が完全に閉鎖しているところから、高年齢のものと思われる。そのためこの下顎骨は壮年女性のものとは考えがたく、後者の男性のものかと思われるが、不明である。従って、基本的には成人男性1個体と壮年女性1個体の計2個体が入っていたことになる。

4. IV 甕

横穴内正面最奥部に位置する甕で、中に多数の骨が認められた。頭蓋は右側頭部が残っているにすぎないが、他の骨はほぼ1個体分がそろっている。骨の形態から女性骨と思われ、膝関節や椎骨に変形性関節症によると思われる骨増殖が見られるところから熟年と判断した。別人骨とみなされる人骨が含まれていないことから、本甕には熟年女性1個体が納められていたと考えられる。

5. V 甕

IV 甕とともに正面最奥部に位置し、わずかに前上半部を欠くだけで直立していた。わずかな頭蓋片と8本の遊離歯およびほぼ1個体分と思われる体幹・体肢骨から、熟年もしくは老年の男性が納められていたと考えられる。そのほかに、この個体のもとは異なる男性の踵骨が1個混入していたが、これだけによって本甕に2個体合葬されていたとは考えにくく、外部からの2次的混入の疑いが強い。

6. VI 甕

V 甕の前に位置し、その中には破損が激しいが、ほぼ1個体分の体幹・体肢骨がそろった熟年男性骨が認められた。また、骨質は類似するが、部位が重複する左大腿骨骨頭部や左右上腕骨骨体などがあり、別の熟年男性骨の存在が示唆される。そのほか、11号人骨頭蓋に付随する

と思われる壮年女性骨1個体、8歳児と思われる小児骨、3歳児と思われる幼児骨の計5個体分の人骨が本甕内から見いだされた。しかし、小児・幼児骨の大半は隣接した土中から出土した。

7. VII甕〈図版8〉

横穴内右側に並ぶ甕群の最奥に位置し、奥部へ向かってやや倒れてはいるが、甕はほぼ完形を保つ。1個体分の壮年男性のものと思われる体幹・体肢骨で占められる。下顎骨および甕内から出土した遊離歯が、隣接した地上にあった9号人骨頭蓋と合致したので、これらはすべて9号人骨（男性・壮年）のものと考えられる。そのほかに、第2頸椎1個、第3もしくは第4頸椎と思われるもの1個、右第1中手骨、上顎左犬歯および第2小白歯の遊離歯があり、それぞれこの個体のもとは異なることが判明した。従って、本甕には基本的に2個体分の人骨が含まれていると思われる。なお、後者はその形態から女性の可能性が強いが、正確には不明である。

8. VIII甕

VIII甕横に直立した甕で、破損も少ない。頭蓋片から男性3個体、女性2個体、小児1個体の計6個体分が含まれる。体幹・体肢骨はほぼ1個体分がそろった熟年男性骨と、同じく成人の男性骨と思われる鎖骨、橈骨、膝蓋骨および踵骨などがあるが、後者は隣接した土中に埋没していた散乱骨と合致し、当初甕内にあった骨が大半外へ流出したのと考えられた。そのほか、きゃしゃな女性骨と思われるものと、同じく女性骨と思われるがこれとは別の大腿骨、脛骨および距骨が入っていた。また甕内には12歳の小児骨と思われる頭蓋、鎖骨、大腿骨など多数の骨があり、これらも周囲の地中から出土した小児骨と合致したので、流出した可能性が高い。従って、本甕内には6個体分の骨が含まれていたと思われる。

9. IX甕

VIII甕の前面に位置し、ほぼ完形で直立している。頭蓋片は少なくとも2個体分が含まれる。体幹・体肢骨は、壮年と思われる女性骨と、熟年の男性骨と思われる計2個体分が残っていた。前者の胸椎から腰椎および仙骨にかけて、正確に関節した状態で出土したことから（図版12）、少なくとも椎骨を連結する靭帯がまだ残存しているうちに甕内に納めたと考えられる。

10. X甕〈図版8〉

IX甕横に位置し、直立して破損も比較的少ない。甕内から熟年女性、壮年男性（5号）および2歳の幼児の頭蓋と体幹・体肢骨が出土したことから、3個体合葬されていた可能性が高い。

11. XI甕

X甕前面に位置し、甕上部の破損は著しいが、直立した底部から多数の骨片が出土した。ほぼ完全な1個体分の体幹・体肢骨があり、形態的特徴から壮年初期の女性のものと同定された。同時に出土した遊離歯が、隣接する土中から出た2号人骨頭蓋に合致したため、これらの骨がすべて2号人骨のものと同定された。また、胸椎部が正確に関節した状態で出土したので、IX甕同様、納甕時には同部位にまだ軟部が付着していた可能性が強い。甕内にはそのほかに、

前述人骨と極めて形態の似た体肢骨があり、本甕には2個体の女性人骨が含まれるものと考えられる。

12. XII甕

XII甕横に位置し、直立してはいるが甕上部の破損は著しい。ほぼ1個体分の体幹・体肢骨がそろった壮年女性骨と、7歳児のものと思われる体肢骨および遊離歯が出土した。後者は隣接する地上に散乱していた体肢骨および19号頭蓋と年齢的に一致し、遊離歯も歯槽に合致したので、同一個体と判定した。従って本甕内には壮年女性1個体と小児1個体の合わせて2個体が合葬されていたことになる。

表22 甕内人骨一覧

甕番号	成人			計	未成人			総計
	男	女	不明		成年	小児	幼児	
I		1		1				1
II	2			2	1			3
III	1	1		2				2
IV		1		1				1
V	1			1				1
VI	2	1		3		1	1	5
VII	1		1	2				2
VIII	3	2		5		1		6
IX	1	1		2				2
X	1	1		2			1	3
XI		2		2				2
XII		1		1		1		2

甕内人骨の年齢、性別を各甕ごとに挙げたのが表22である。最も多いVIII甕で6個体、次いでVI甕の5個体、I、IVおよびV甕には1個体だけが納められており、平均すると1個の甕に2.7個体が納められていたことになる。すなわち1個の甕にただ1人だけ納めることの方が稀で、あらかじめ人骨の納められた甕に、新たに加えられるケースが多かったろうということが考えられる。甕の大きさと甕内の個体数との間に特に関係は認められない。甕に含まれる人骨には、恐らくそれぞれの納甕時期に差があったと考えられるが、これは、それぞれの人骨の保存状態に微妙な違いが認められることから推察できる。甕内には幼小児骨が含まれることも多いことから、家族単位で甕を利用していたことは十分考えられる。1個の甕内の成人の組み合わせをみると、男女1個体ずつの場合が最も多く、同性だけのものは少ない。これらの組み合わせが親子関係であるのか、婚姻のそれであるのかは不明である。ただ、XI甕内の女性骨2個体の

ように骨形態が互いに酷似し、本トフル墓内ではそれらに類似した骨が他に見当たらないというように、明らかに深い血縁関係をうかがわせるものもあることから、婚姻後の女性が生家、婚家のどちらに葬られていたかは興味のもたれるところである。今後、形質人類学的に検討すべき課題である。和野に近い宇宿、城間、万屋地区の民俗調査（笠利町教育委員会・跡見女子大民俗文化研編、1983）によれば、各集落の「テフル」には「ヒキ」と呼ばれる親族集団単位で納骨され、テフルの大きさによって、入っているヒキの数も異なるという。和野トフル墓をどれほどの規模の集団が利用していたのかという点も、人骨の形質を調べるうえで考慮すべき問題である。

このほか本トフル墓人骨には、葬法的一端を示すような興味深い所見がいくつか存在する。

1) 脊柱の一部が正しく関節した状態で甕に納められていた個体が見られる（図版12）ことから、洗骨・改葬の際に、まだ靭帯など軟部が付いたままの場合もあったことが示唆される。これを裏付けるものとして、体幹・体肢骨の関節付近に微小な創傷を認める個体（Ⅸ甕内女性人骨）があり、関節をはずす操作が行われたことが考えられる。

2) 甕内にはほぼ1個体分の完全な人骨のほかに、複数個体の部分的な骨片が残されている場合が多くあった。これは洗骨した遺骨を甕に納める際、すでに中に入っていた骨を、一部を残して外へ出したものと解釈される。甕の近くに集積された骨は、甕の中から取り出されたものであろう。1例として14号小児骨は、Ⅱ甕の中に体肢骨骨端部と歯だけが残っており、長管骨骨体は外に整然と重ねて置かれていた。

3) 甕内の頭蓋はかなり破壊されており、また頭蓋片をほとんど含まない甕も多かった。甕は、日常使用していたものを納骨に転用したものらしく、口縁部を打ち欠いて口径を広げたものもある。長管骨や短い骨片は、そろえて入れれば比較的容易に納めることができても、甕の形態や大きさによっては頭蓋をある程度破壊しなければ納めることが困難であったのではないかと考えられる。またⅦ甕（図版4、8）のように、甕内には長管骨が林立し、下顎骨はその中に含まれるものの、この下顎骨と一致する頭蓋は隣接した地上に安置されている例も見られた。

4) 体肢骨の中には、意識的に折られたと思われる長管骨が存在する。これが、甕に納めやすくするといった単なる実用目的によるものなのか、もしくは死者の霊の再帰を妨げるなど呪術的な意味をもつものなのか、明らかでない。

5) 1個体の全身骨格のうち、明らかに不足する部位があり、それがトフル墓内からは全く見いだせないという例もある。改葬時に持ち込まれなかったのか、後世意識的に墓外に持ち出されたのかは不明である。

6) 徳之島上面縄では33年忌の時に甕の中から骨を取り出して火葬し、再び甕に納めたという（国分、1976）が、本トフル墓内には火葬骨は存在しなかった。

トフル墓内人骨はすべて複葬の過程を経たものである。つまり、1次葬として死者を風葬あるいは土葬に付した後、肉体の腐敗を待って洗骨・改葬などの2次的操作が行われ、最終的に遺骨はトフル墓内に納められている。近年の奄美諸島では、土葬の後、3～7年または13年を経て洗骨・改葬するという様式が一般的といわれるが、古くは風葬が行われていたという。利野トフル墓に納められていた人骨の1次葬の方法が風葬であったか、土葬であったかは興味深い問題である。小片ら(1986)は、笠利町万屋にある城遺跡の近世土壙墓から、保存良好にもかかわらず数量が僅少な体幹・体肢骨が出土したことについて、そこで1次葬(土葬)が行われ、洗骨のための掘り上げの際、取り残されたものであろうと推察した。しかし、本トフル墓には、土中埋葬後の改葬では最も失われやすいと思われる手骨、足骨や骨端部のような微小な骨がかなり含まれていることから、地上に遺体を横たえて肉を腐らせ、骨を残らず甕に納めるという風葬の操作がこのトフル内で行われた可能性が考えられる。名越左源太が著した『南島雑話』(国分・恵良校注, 1984)の死葬の項には「始死者を穴蔵に入処、是をトホロと云。今笠利間切の宇宿村、又同間切手花部村にも有之。島中諸所にトホロあり。桶共に納め置く。三年忌に其骨を洗て、先祖の遺骨と一処にトホロの中に納め置く。トホロの奥の方南京焼の蓋ある壺、幾所にもなく并べ有之。又石櫃に納るもあり。むかしは島中なべて如此なりしを、今は大和の風にならいて土葬なり。今二、三ヶ村古法を伝へ、トホロに納るものあり。トホロ口は、戸を立て鑰を下し嚴重也。」と述べられている。名越左源太が奄美大島で配流の日を送っていたのは、嘉永3年(1850)から安政2年(1855)までの5年間であったといわれるから、幕末ころの奄美大島北部は風葬から土葬への移行期にあり、両者が混在していたことがうかがえる。

近年の沖永良部島では、横穴の前方にある広場に土中埋葬し、3年たって洗骨した後、頭蓋骨と四肢の長管骨だけを甕に納めるという(佐藤, 1957)。操垣勤編集の『沖永良部島沿革誌私稿』(永吉編「沖永良部島郷土史資料」, 1968)の明治10年の項には「・・・墓所の儀和泊、手々知名、西原は数百年前より埋葬其他は洞籠墓(岩岸を掘り或は石を築き石屋の如く木扉を造り戸口占む又墓屋とも云ふ)へ葬り来りしを夫では悪臭不潔の害あるに依りて総て埋葬すべき旨支庁長より命令ありて埋葬に改定」とある。この命令とはしばしば引用される明治10年9月21日付の鹿児島県が発令した諭達で、「死人葬式之儀は随意に任すといふとも先づ地葬、空葬の二つに有之、当島に於ては近年神葬祭に相改め候、爾来地葬すべきは当然に候処或ひは其棺を墓所に送り「喪屋(もや)」と唱ふる小屋内に備置き、親子兄弟相連れ「喪屋」に到り、其棺を開き見る数回終に数日を経、屍の腐敗するも臭氣を不厭趣に相聞右は人情の厚きに似たれども、其臭氣をかぐ者は甚く健康を害し候は勿論、近傍通行の者と雖も其臭氣に触るれば病を伝染し或は醸すものに有之衛生の甚く不宣事に付、自今右様之弊習は岐度相改め、死する者は速に埋葬に改云々諭達す」との内容のものである。沖永良部島ではこれ以降、土葬に転換していったようである(永吉, 1981)。しかし、実際に風葬の慣習が止むまでには、さらに長い歳月を要したようで、例えば与論島では明治35年ころまでジシと呼ばれる横穴墓が用いられた

らしく、それ以後土葬されるようになり、埋葬した遺体は3年後に洗骨してジシに安置されたという(末永・長沢, 1972)。今日、奄美諸島で一般に風葬墓と呼ばれているものは、奄美大島、徳之島および沖永良部島のトゥール、テフルまたはトフル墓、喜界島のモヤまたはムヤ、与論島のジシまたはギシなどと、各島によって呼称が異なるばかりでなく、その構造も崖下、岩蔭、洞穴などと多少の違いがみられる。かつてその墓域の内外で実際に風葬が行われたことは確かであろうが、風葬から土葬への移行過程について具体的に語る文書資料は乏しく、不明な点が多い。

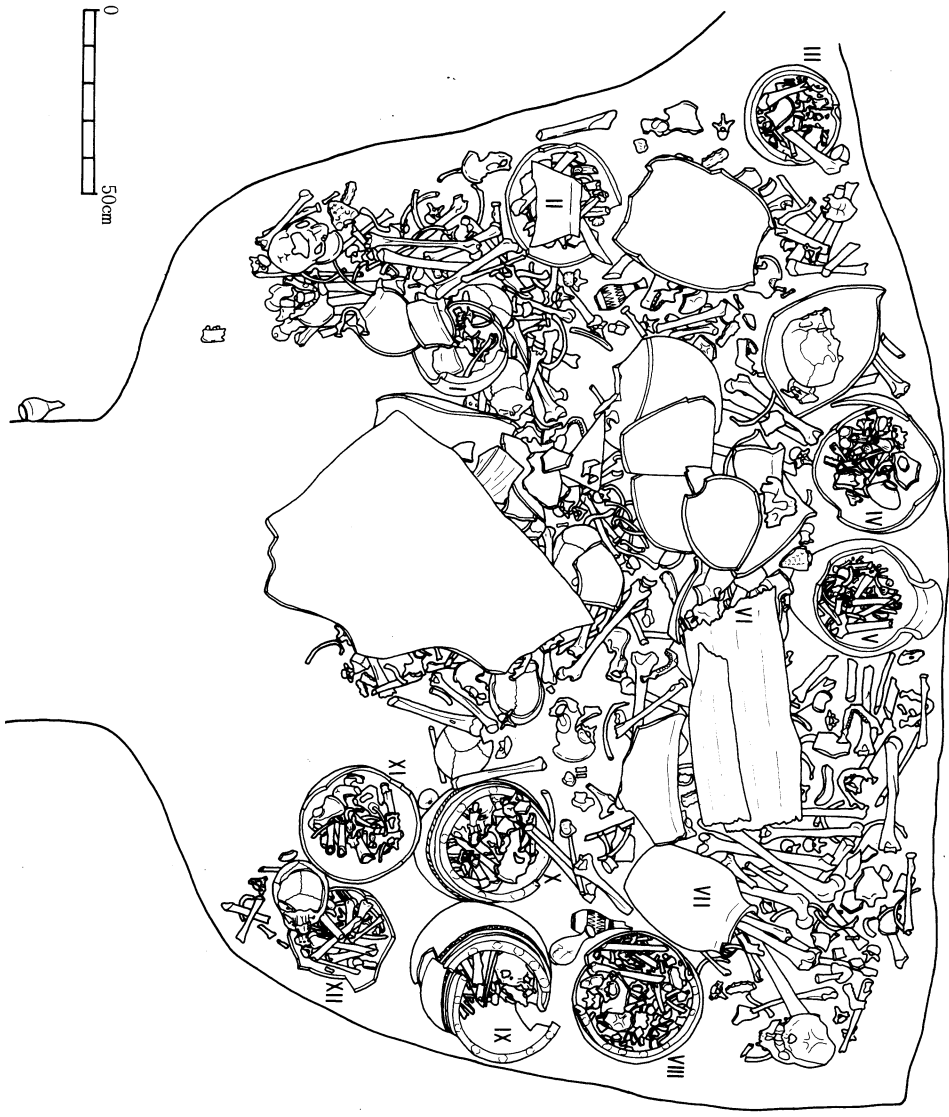
和野トフル墓では、抹梢の骨まで残存していたことから、トフル内で風葬が行われたことが示唆されたが、近年の改葬では指先の小さな骨まで残らず掘り上げる(恵原, 1973)というから、納められていた遺骨の中には土葬を経たものがある可能性も否定できない。骨の状態からは両法の区別はつけがたい。ただ上下顎の歯数のアンバランスや、Ⅸ襲内男性人骨に見られた脊柱の連続破損などは、土葬の過程を意味しているかもしれない。『南島雑話』の記述から、この横穴が開鑿された当初は実際に風葬が行われたが、やがて土葬・改葬後の納骨堂として機能するようになったとも考えられる。現段階では、このトフル墓に納められていた遺骨の1次葬として風葬と土葬のいずれが施されたのか、あるいは時代を経るにつれ両者が移行してきたのか、明らかでないが、今後多方面から検討すべき課題と考えられる。

<参考文献>

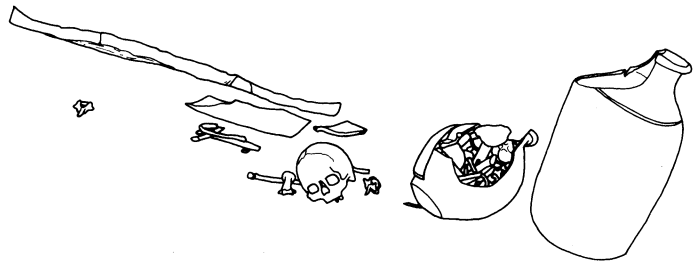
- 赤沢 調, 1971: 幼, 小児頭蓋底の解剖学的研究. 2. 頭蓋底の軟骨結合について. 歯科学報 71: 1371-1380.
- 恵原義盛, 1973: 奄美生活誌. 木耳社, 東京.
- 恵原義盛, 1979: 奄美の葬送・墓制. 名嘉真宜勝・恵原義盛著「沖縄・奄美の葬送・墓制」. 明玄書房, 東京. pp. 169-240.
- 藤井 明, 1960: 四肢長骨の長さとの関係に就いて. 順天堂大学体育学部紀要 3: 49-61.
- 藤田恒太郎, 1965: 歯の話. 岩波新書. 岩波書店, 東京.
- 埴原和郎, 1952: 日本人男性恥骨の年齢的变化. 人類学雑誌 62: 245-260.
- 岩井成功, 1959: 鹿児島県大島郡徳之島々民の頭蓋骨に関する人類学的研究. 第1編 鹿児島県大島郡徳之島々民頭骨の研究. 鹿児島大学医学雑誌 11: 1049-1089.
- 金田義夫, 1957: 日本人の永久歯に於ける歯根完成時期の研究. 歯科月報 30: 165-172.
- 笠利町教育委員会・跡見学園女子大学民俗文化研究調査会編, 1983: 笠利町文化財調査報告 No. 9 「宇宿・城間・万屋の民俗」.
- 菊地順正, 1959: 奄美大島与路島島民頭骨の人類学的研究. 人類学研究 6: 366-398.
- 国分直一, 1976: 環シナ海民族文化考. 慶友社, 東京.
- Martin, R. & K. Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer,

Stuttgart.

- Massler, M., I. Schour and H.G. Poncher, 1941: Developmental pattern of the child as reflected in the calcification pattern of the teeth. *Am. J. Dis. Child.* 62:33-67.
- 森本岩太郎・小片丘彦・平本嘉助・吉田俊爾, 1985: 人骨. 江戸一都立一橋高校地点発掘調査報告. pp.522-546.
- 長沢和俊, 1977: 奄美の洗骨葬. 南日本新聞開発センター編「かごしまの民俗探求」, 南日本新聞社, 鹿児島. pp.94-95.
- 永吉 毅編, 1968: 沖永良部島郷土史資料. 鹿児島県和泊町.
- 永吉 毅, 1981: えらぶの古習俗. 道の島社, 鹿児島.
- 名越左源太 (国分直一・恵良 宏校注), 1984: 南島雑話 2. 東洋文庫432. 平凡社, 東京.
- 名嘉真宜勝, 1979: 沖縄の洗骨儀礼. 「葬送墓制研究集成」第1巻 葬法. 名著出版, 東京. pp.214-238.
- 中野哲太郎, 1958: 鹿児島県大島郡喜界島島民頭骨の研究. *人類学研究* 5:188-219.
- 大山秀高, 1956: 鹿児島県大島郡与論島島民頭骨の研究. *人類学研究* 3:396-434.
- 小片丘彦・川路則友・佐熊正史・峰 和治・山本美代子・岡元満子, 1986: 鹿児島県奄美大島城遺跡出土の人骨. 鹿児島県大島郡笠利町文化財報告書 第8集. pp.83-91.
- 岡田幹夫, 1962: 関東地方日本人の頭蓋縫合の年齢的变化. 第1編 縫合癒着について. *東京慈恵会医大誌* 77: 112-167.
- 小野重朗・長沢和俊・増田勝機, 1973: 喜界島の風葬墓. *南日本文化* 6:25-54.
- 長田須磨, 1978: 奄美女性誌. 農山漁村文化協会, 東京.
- Pearson, K., 1899: *Mathematical contributions to the theory of evolution. V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races.* *Phil. Trans. Roy. Soc. London, Ser. A.* 192:169-244.
- 佐藤幹正, 1957: 奄美大島における風葬の遺跡について. 鹿児島大学南方産業科学研究所報告 2:81-106.
- 末永雅雄・長沢和俊, 1972: 風葬墓地調査報告書. 観光資源保護財団, 東京.
- 鈴木重一, 1943: 四肢化骨核発育に関するレ線学的研究. *千葉医学会誌* 21: 349-395, 397-417.
- Tagaya, A. and J. Ikeda, 1976: A multivariate analysis of the cranial measurements of the Ryukyu Islanders (Males). *J. Anthrop. Soc. Nippon* 84: 204-220.
- Williams, P.L. and R. Warwick (eds.), 1980: *Gray's Anatomy.* 36th edit. Churchill Livingstone, Edinburgh.
- 山田 実, 1984: 与論島の生活と伝承. 桜楓社, 東京.

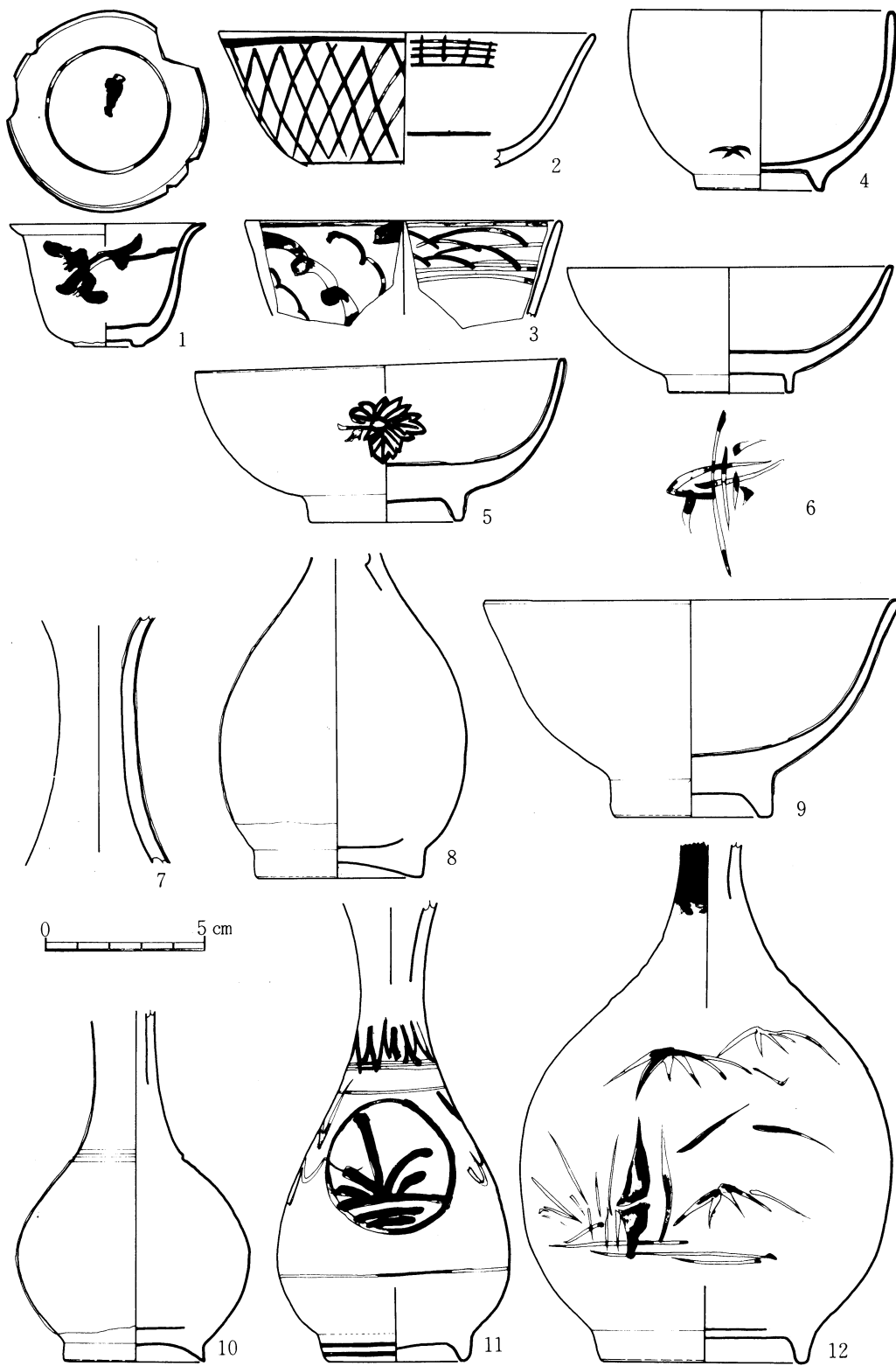


水系レベル —

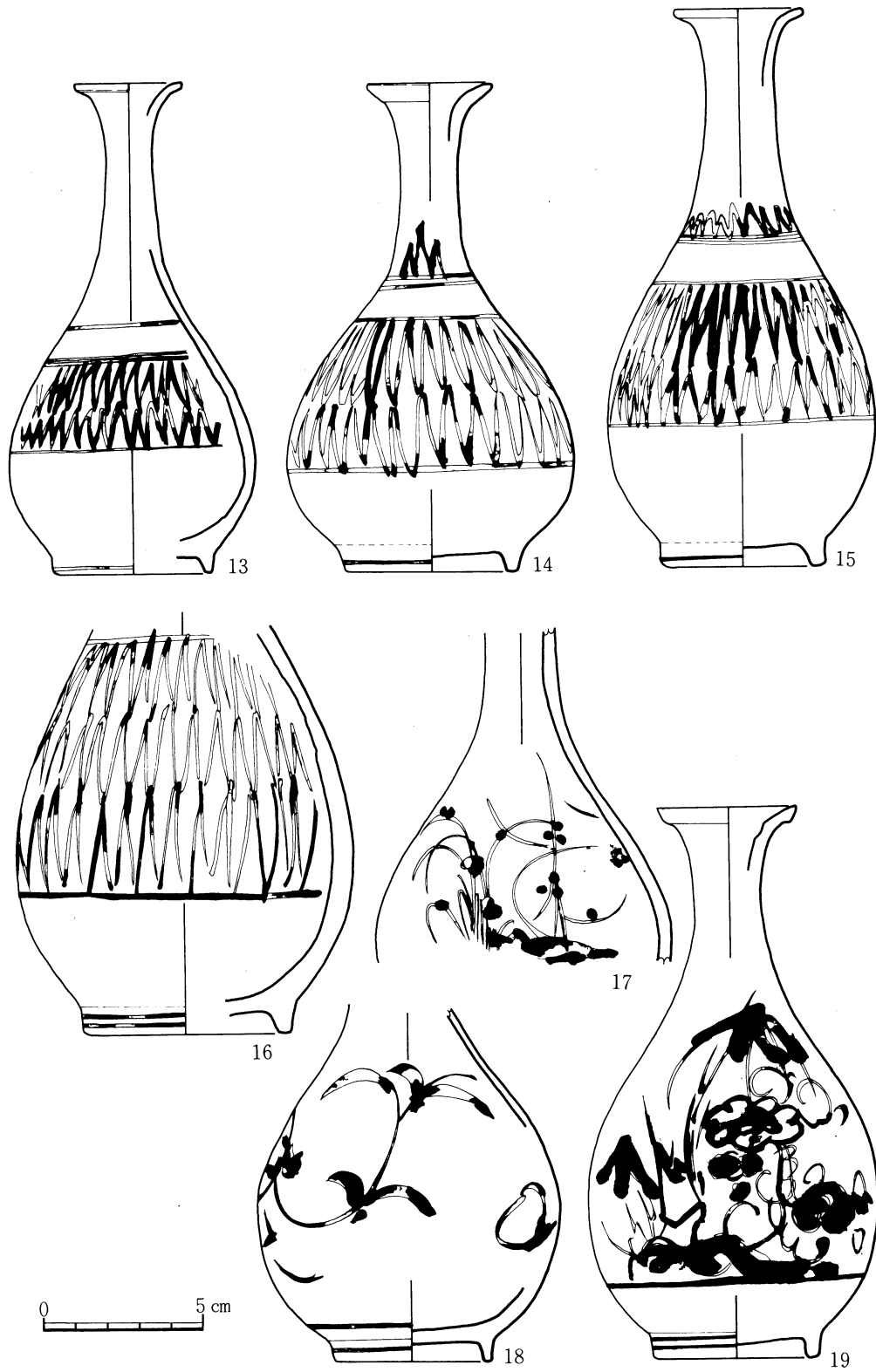


和野トフル墓出土品一覧

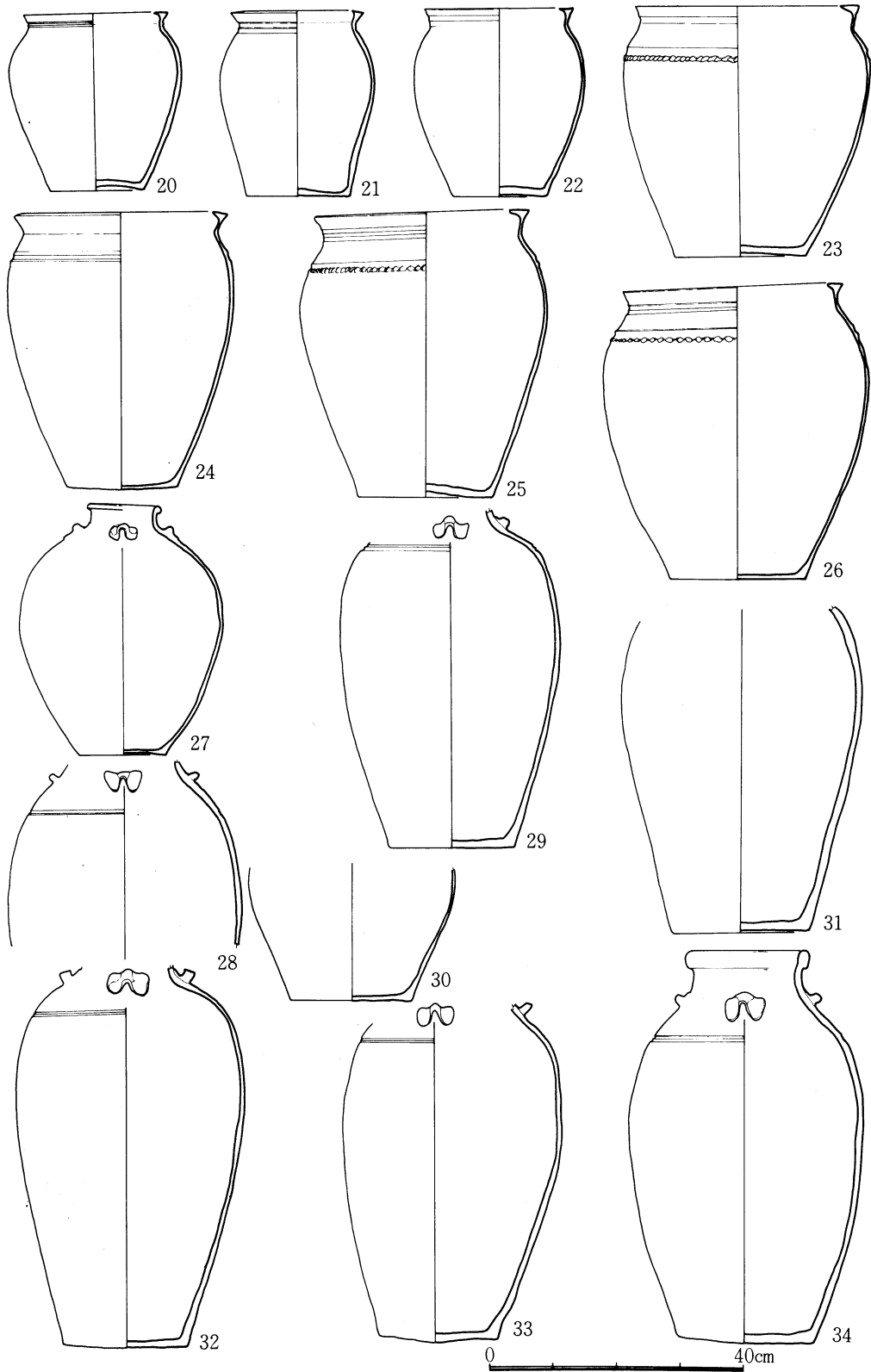
番号	名称	口径mm	器高mm	底径mm	
1	青華碗	61	39	22	口縁形は端反
2	青華碗	118	42+ α	—	
3	青華碗	99	30+ α	—	
4	碗	82	51	41	薩摩焼(白)、千鳥印、貫入多し(豎野系か)
5	碗	116	49	49	平形碗、陶器、菊花文
6	碗	102	40	40	平形碗、薩摩焼(白)、見込みに「寿」か(豎野系か)
7	徳利	—	77+ α	—	陶器、灰釉、二次焼成を受けている
8	徳利	—	100+ α	53	陶器、褐釉、高台は無釉、陶土(古我知系か)
9	碗	130	67	51	端反碗、高台内から畳付は無釉
10	緑釉徳利	—	109	40	高台は無釉、飴釉、陶土(龍門司系か)
11	青華徳利	—	142+ α	42	総釉(伊万里系か)
12	徳利	—	161+ α	66	褐釉で竹を描く、貫入多し、胎土は灰色(龍門司系か)
13	青華徳利	34	153	51	総釉(伊万里系か)
14	青華徳利	38	152	54	総釉、貫入(伊万里系か)
15	青華徳利	40	174	52	総釉、高台は貫入(伊万里系か)
16	青華徳利	—	127+ α	66	総釉、胴下半から高台は貫入(伊万里系か)
17	青華徳利	—	105	—	総釉(伊万里系か)
18	青華徳利	—	113+ α	50	総釉、胴下半から高台は貫入(伊万里系か)
19	青華徳利	42	171	52	玉縁状口縁、総釉、胴下半から高台は貫入、竹とツタ
20	甕	235	292	148	I 総釉、薩摩焼苗代川 (納骨)
21	甕	209	288	160	Ⅶ 総釉、薩摩焼苗代川 (納骨)
22	甕	224	277	144	Ⅲ 総釉、飴釉、薩摩焼苗代川 (納骨)
23	甕	343	459	210	Ⅸ 総釉、貝目、キザミ目、薩摩焼苗代川 (納骨)
24	甕	335	432	175	第2群2 総釉、キザミ目、薩摩焼苗代川 (納骨)
25	甕	335	437	212	Ⅷ 総釉 貝目、キザミ目、薩摩焼苗代川 (納骨)
26	甕	350	385	204	Ⅸ 総釉、貝目、薩摩焼苗代川 (納骨)
27	壺	115	392	136	Ⅵ 胴上半は褐釉、下半は灰釉、瀬戸焼系か 四耳壺 (納骨)
28	壺	—	285+ α	—	— 三耳壺 琉球系か (納骨)
29	壺	—	522+ α	194	第2群1 三耳壺 琉球系か (納骨)
30	壺	—	208+ α	188	Ⅻ 三耳壺 琉球系か (納骨)
31	壺	—	501+ α	215	Ⅺ 三耳壺 琉球系か (納骨)
32	壺	—	527+ α	187	Ⅳ 三耳壺 琉球系か (納骨)
33	壺	—	589+ α	200	Ⅱ 三耳壺 琉球系か (納骨)
34	壺	176	613	210	V 三耳壺 琉球系か (納骨)



第132図 出土遺物-1(和野トフル墓)



第133図 出土遺物-2(和野トフル墓)



第134図 出土遺物-3(和野トフル墓)

鹿児島県奄美大島下山田Ⅱ遺跡出土の縄文時代人骨

小片丘彦・峰 和治・川路則友・山本美代子

(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座)

はじめに

下山田Ⅱ遺跡は、鹿児島県大島郡笠利町万屋に所在し、海岸から内陸へ300mほど入った砂丘上に形成されている。新奄美空港建設に伴って実施された同遺跡の1984年度の調査に際し、人骨4点(表1)と遊離歯1本が出土した。これらの人骨は散在して出土したため、資料相互の所属関係などは不明であるが、嘉徳系土器を伴っていたことから、いずれも縄文時代後期に比定される。本遺跡の資料中に、下顎両側中切歯の風習抜歯を思わせる1例が見いだされたことは興味深い。

以下、各人骨片の計測・観察所見を記載した後、現在までに報告されている南西諸島の風習抜歯例と本遺跡の事例との関係について若干の検討を加えた。

人骨所見

1. 下顎骨A(女性・壮年)

左右下顎頭の内・外側端、左右筋突起の先端部および左右下顎角の一部を欠く以外はほぼ完全に保存されている。白砂層から検出されたため色調は白く、骨質は硬い。

オトガイ隆起はよく発達し、正中部の高まりとなって前方へ突出するが、オトガイ結節は明瞭ではない。外側面の斜線下方では Prominentia lateralis の膨隆が強い。オトガイ孔は第2小臼歯と第1大臼歯との間に位置する。下顎角は強く外反する。角前切痕が明瞭で、下顎体下縁は下方に凸のゆるやかな弧を描いてオトガイ切痕に至る。内面正中部のオトガイ舌筋棘は左右とも独立した小突起となっているが、オトガイ舌骨筋棘は左右が合して小結節状となっている。顎下腺窩の陥凹は深い。顎舌骨筋線は発達良好で、特に前端部での突出が際立っている。副オトガイ孔、下顎隆起、顎舌骨筋神経管などの非計測的小変異は認められない。

計測結果を表2に示す。岡山県津雲貝塚出土の縄文後・晩期人(清野・宮本, 1926)と比較すると、全体的な径はやや小さい。歯列は次の通りである。

7 6 ○ ○ ○ ● | ● ○ ○ ○ ○ 6 7

● : 生前喪失, 歯槽閉鎖

○ : 死後脱落, 歯槽開放

残存歯の咬耗はすべて Martin の2度。

表1 出土人骨資料

	性別	年齢	時代	備考
下顎骨A	女性	壮年	縄文後期	1 1 抜歯疑い
下顎骨B	男性	壮年	縄文後期	
上腕骨(左)	女性	成人	縄文後期	
大腿骨(右)	男性	成人	縄文後期	

歯石沈着は中等度である。 $\overline{8|8}$ は先天性欠如と思われる。両側中切歯部の歯槽は閉鎖しているが、歯根方向への骨吸収はほとんどなく、上縁は鈍円状である。隣在歯や上顎対合歯の状態は不明であるが、齶蝕や歯周症による骨吸収が見られないことや、閉鎖した歯槽の状態、部位などを考え合わせると風習抜歯の可能性が高い。

なお、遊離歯として発見された上顎右第1大臼歯は、咬耗 (Martin の2度) や歯石沈着、歯の大きさ、色調などから、この下顎骨Aと同一個体のものと考えられる。

2. 下顎骨B (男性・壮年)

両側下顎枝を欠損しており、下顎体だけが残存する。齶歯類の咬痕が下顎体下縁や左小臼歯部の歯槽に見られる。

オトガイ隆起は正中部での突出が強く、オトガイ結節はあまり発達していない。Prominentia lateralis の隆起が強い。オトガイ孔は第2小臼歯の下方に位置する。オトガイ棘の形態は下顎骨Aに同じ。顎下腺窩の陥凹は浅い。顎舌骨筋線は明瞭で、大臼歯後方部での発達が特に著しい。副オトガイ孔や下顎隆起は認められない。顎舌骨筋神経管は観察不能。計測結果を表2に示す。歯列は次の通りである。

$\overline{87600000} \mid 003456\bullet0$

$\overline{8|}$ は死後破折のため、近心根だけが歯槽内に残っている。咬耗は $\overline{6|346}$ がMartin の2度、 $\overline{7|5}$ が1度である。齶蝕は見られない。

3. 上腕骨 (女性・成人)

左上腕骨の遠位側約15cmが残存している。肘関節部は腐食が著しい。推定中央位で計測すると最大径17mm, 最小径13mm, 断面示数76.5であり、扁平性はみられない。全体にきゃしゃで、三角筋粗面も発達していない。

4. 大腿骨 (男性・成人)

右大腿骨の骨体上部約18cmの破片である。ピラステルがよく発達しており、骨体中央付近と推定される破片下端部での矢状径は27mm, 横径23mmで、断面示数は117.4となる。

風習抜歯について

南西諸島における先史時代の風習抜歯には、大きく分けて2つの系統が混在したことが指摘されている (渡辺, 1967)。すなわち、種子島広田遺跡 (永井, 1961) に代表される大陸系の抜歯と、九州本土の様式に通じる抜歯である。前者の系統は、広田遺跡のほか、同じ種子島の鳥ノ峯遺跡 (永井, 1972)、田之脇遺跡 (盛園, 1973) および同島の西方に位置する馬毛島の椎ノ

表2 下顎骨計測値

Martin's No		下顎骨A	下顎骨B	津雲縄文人	
				男	女
65	下顎頭間幅	(119)*	—	129.6	124.3
66	下顎角幅	(103)*	—	105.4	98.1
67	前下顎幅	49	49	50.3	47.3
68	下顎体長	67	—	75.0	73.4
68(1)	下顎骨長	101	—	—	—
69	オトガイ高	—	28	33.5	29.0
69(1)	下顎体高	(右)	(28)	32.0	28.8
		(左)	31	31.8	28.1
69(3)	下顎体厚	(右)	11	12.9	12.0
		(左)	12	12.7	12.0
70 a	下顎頭高	(右)	50	—	—
		(左)	47	—	—
70	下顎枝高	(右)	—	61.8	56.4
		(左)	57	—	62.3
71	下顎枝幅	(右)	33	34.0	33.0
		(左)	34	33.7	32.0
71/70	下顎枝示数	(右)	—	55.1	32.9
		(左)	59.6	54.0	58.3
71 a	最小下顎枝幅	(右)	33	—	—
		(左)	34	—	—
79	下顎枝角	(右)	125°	121.1°	122.7°
		(左)	128°	121.6°	121.7°

*：推定値

木遺跡(中橋・永井, 1980)から出土した人骨に集中して見られ、いずれも弥生時代中・後期に属している。偏側の上顎側切歯を中心として抜去するこれらの遺跡の様式が、台湾を経て中国南部につながることは、貝製品などの出土遺物からも支持されている。一方、後者の本土系抜歯としては、徳之島喜念原始墓(三宅, 1943)と沖永良部島西原墓地(金関, 1956)の例が知られている。喜念原始墓からは $\overline{1|1}, \overline{1}$, $\overline{1|2|3}$ 抜去の3例が報告されているが、いずれも下顎骨だけの断片的資料で、所属年代は三宅の記述から、一応弥生時代中期と推定されている(国分, 1972; 池畑, 1980)。西原資料は、砂丘上の廃墓から採集された頭骨で、上顎両側犬歯の抜去が見られるが、下顎骨を伴っていない。このように喜念、西原両例とも対顎を欠く資料で、時代についても確証に欠ける。近年、沖縄本島読谷村大当原遺跡、座間味島古座間味原遺跡および久米島大原遺跡から弥生時代併行期とみられる下顎中・側切歯の抜歯例が出土したというが(いずれも春成, 1983より引用)、子細な報告が待たれるところである。以上概観してきた通り、両系統とも資料の大半を弥生時代のものが占める。縄文時代併行期については、人骨資料そのものが僅少な南西諸島からは、これまで明確な風習抜歯例の報告はない。種子島長崎鼻遺跡人骨(縄文時代晩期, 金関, 1958)について、上顎左中切歯の歯槽閉鎖と、これに対応する下顎左中切歯の水平研歯が報告されているが、上顎歯の欠損については事故など他の要因を重視するむきもある。また、沖永良部島中甫洞穴出土の縄文時代女性人骨には抜歯の痕跡はない(松下, 1984)。

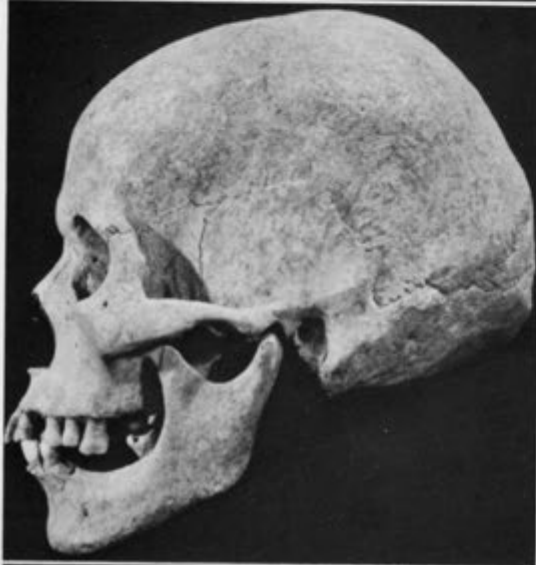
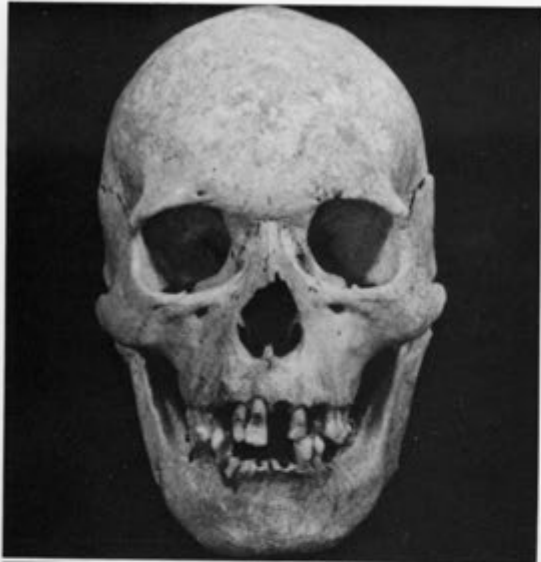
下山田Ⅱ遺跡から出土した下顎骨Aは、単独出土であるため、対合する上顎歯列の状態は知り得ない。しかし、大陸系の抜歯は下顎歯をほとんど抜去の対象としないことから、下山田の

抜歯例は本土系とみるのが妥当であろう。従来、縄文時代における風習抜歯の南限は、長崎鼻人骨を除外するとすれば、薩摩半島上焼田遺跡（縄文晩期）出土の熟年男性骨に見られた下顎の両側第1小臼歯間8歯の抜去例（内藤・坂田，1977）とされてきた。下山田Ⅱ遺跡の事例は、これよりさらに南方に下り、また、縄文後期にさかのぼるものであることから、風習抜歯の時代的、地域的展開を考えるうえで大きな問題を提起する資料となろう。前述した通り、南西諸島における本土系抜歯と推定される資料は、上下顎がそろい、かつ明確な時代設定がなされているものはない。そのため、抜去様式について本土との関係を具体的に検討する段階には至っていない。今後の当地域における人骨資料の増加が待たれる。

なお、沖縄本島具志頭村港川からは旧石器時代の抜歯例が報告されているが（Suzuki & Hanihara, 1982）、下山田例と同じ下顎両側中切歯の抜去であることは、大きな時代差を越えて興味深い。

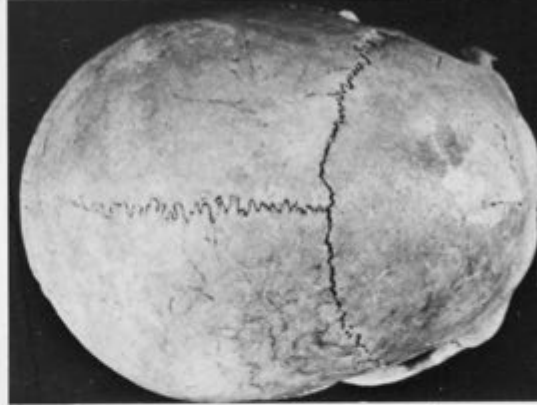
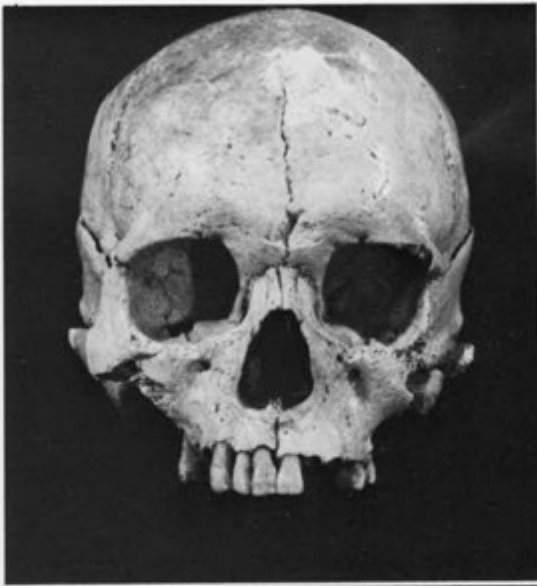
参考文献

- 春成秀爾，1983：抜歯．考古遺跡・遺物地名表．柏書房，東京．pp. 604-607.
- 池畑耕一，1980：鹿児島県における抜歯風習の特質．隼人文化8：16-25.
- 金関丈夫，1956：沖永良部西原墓地採集の抜歯人骨．民族学研究 21：230-232.
- 金関丈夫，1958：鹿児島県長崎鼻遺跡出土人骨に見られた下顎中切歯の水平研歯例．九州考古学 3・4：1-3.
- 清野謙次・宮本博人，1926：津雲貝塚人人骨の人類学的研究．第2部 頭蓋骨の研究．人類学雑誌 41：95-140,151-208.
- 国分直一，1972：南島先史時代の研究．慶友社，東京．
- 松下孝幸，1984：鹿児島県知名町（沖永良部島）中甫洞穴出土の人骨．鹿児島考古 18：33-59.
- 三宅宗悦，1943：大隅国徳之島喜念原始墓出土品及び出土人骨の抜歯に就て．考古学雑誌 33：461-470.
- 盛園尚孝，1973：本城・田之脇遺跡調査概報．西之表市教育委員会．pp.1-7.
- 永井昌文，1961：鹿児島県広田遺跡出土弥生式時代人の抜歯に就いて．第15回日本人類学会・日本民族学協会連合大会紀事．pp.61-64.
- 永井昌文，1972：鹿児島県鳥ノ峯遺跡出土弥生時代人骨の風習的抜歯（会）．解剖学雑誌 47：23.
- 内藤芳篤・坂田邦洋，1977：上焼田遺跡出土の人骨．鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（5）指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡．pp.74-78.
- 中橋孝博・永井昌文，1980：椎ノ木遺跡出土人骨について．馬毛島埋葬址一西之表市椎ノ木遺跡一．西之表市教育委員会．pp.24-34.
- Suzuki, H. & K. Hanihara eds., 1982: The Minatogawa Man. University of Tokyo Press, Tokyo.
- 渡辺 誠，1967：日本の抜歯風習と周辺地域との関係．考古学ジャーナル 10：17-21.



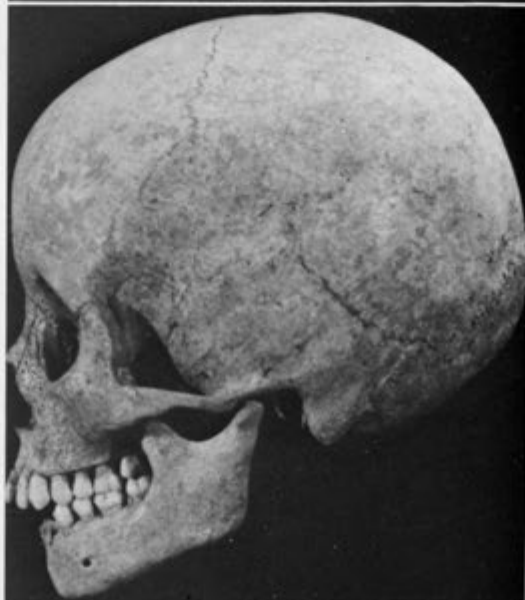
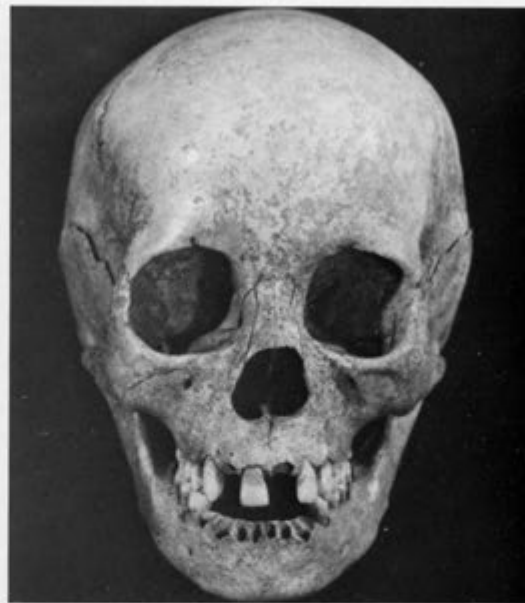
1号人骨頭蓋 (男性・熟年)

2号人骨頭蓋 (女性・壮年)



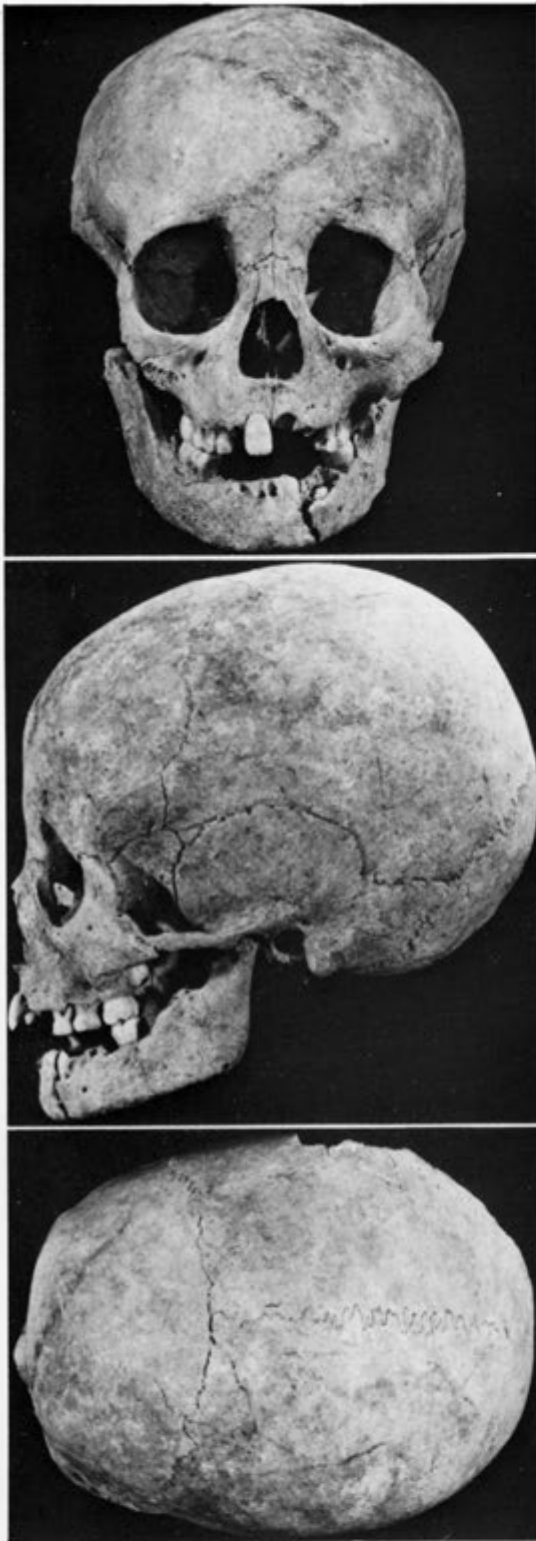
3号人骨頭蓋 (女性・壮年)

5号人骨頭蓋 (男性・壮年)

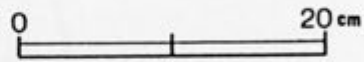
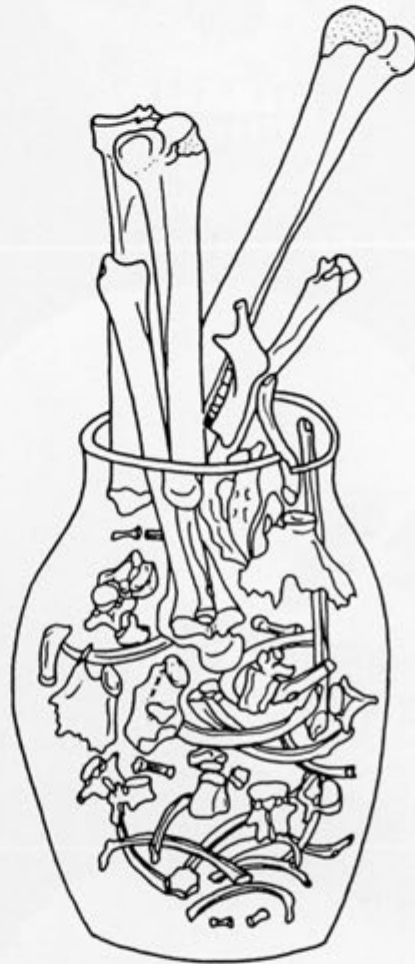


14号人骨頭蓋 (男性・成年)

16号人骨頭蓋 (小兒・12歳)



19号人骨頭蓋 (小児・7歳)



VII 壺納骨状況



1号人骨体肢骨 (男性·熟年)



2号人骨体肢骨 (女性·壮年)



3号人骨体肢骨 (女性·壮年)



5号人骨体肢骨 (男性·壮年)



14号人骨体肢骨 (男性·成年)



16号人骨体肢骨 (小兒·12歲)



19号人骨体肢骨 (小児・7歳)



Ⅶ 壱納骨状況



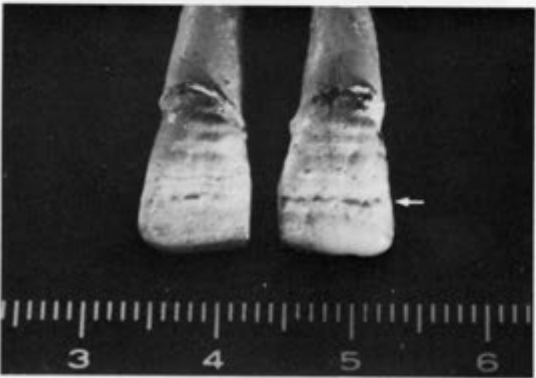
X 壱納骨状況



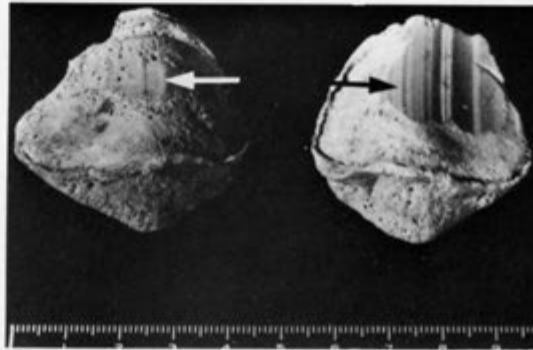
副鼻腔の炎症性変化 (X 壱内人骨),
上: 蝶形骨洞, 下: 左右上顎洞



脳頭蓋内面の骨膜反応性骨新生
(22号人骨・1.5歳)



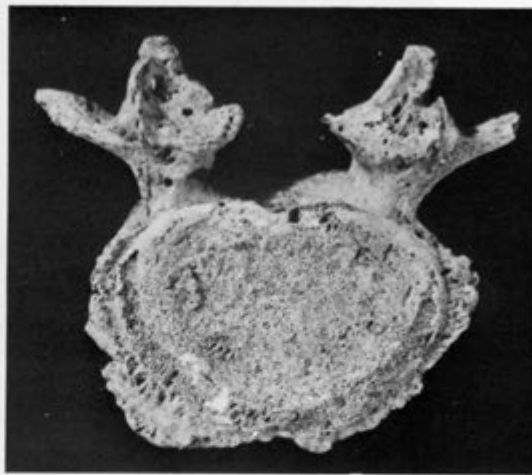
エナメル質減形成 (矢印)



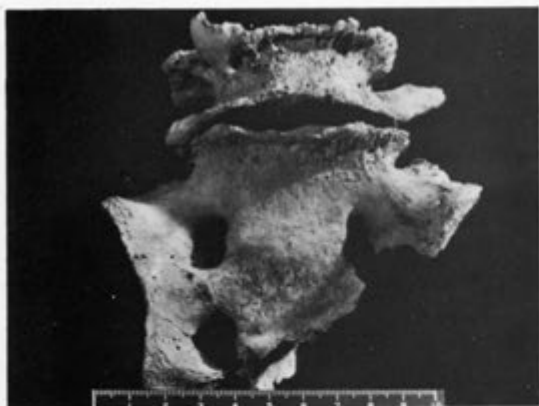
膝蓋骨関節面の磨耗
(V 壱内人骨)



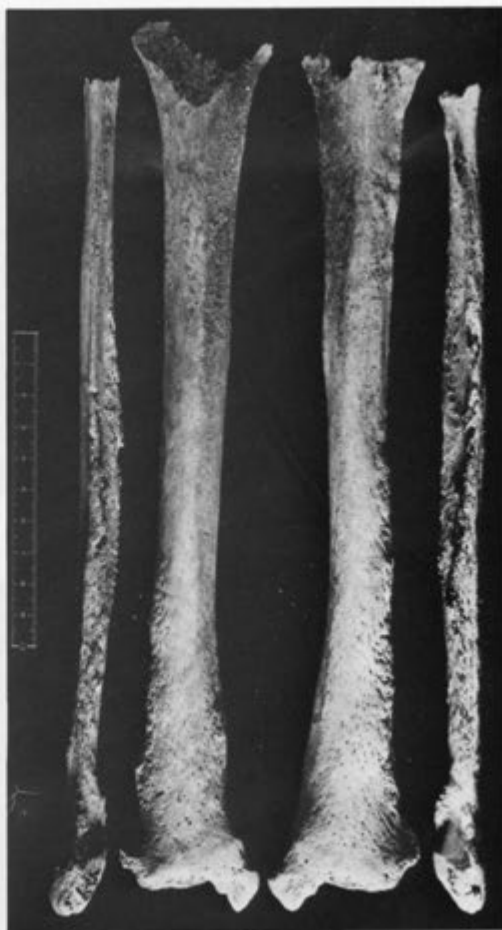
第5腰椎の仙椎化 (IX 壱内人骨)



第5腰椎の脊椎分離 (IV 壱内人骨)



腰椎・仙骨体の骨棘形成



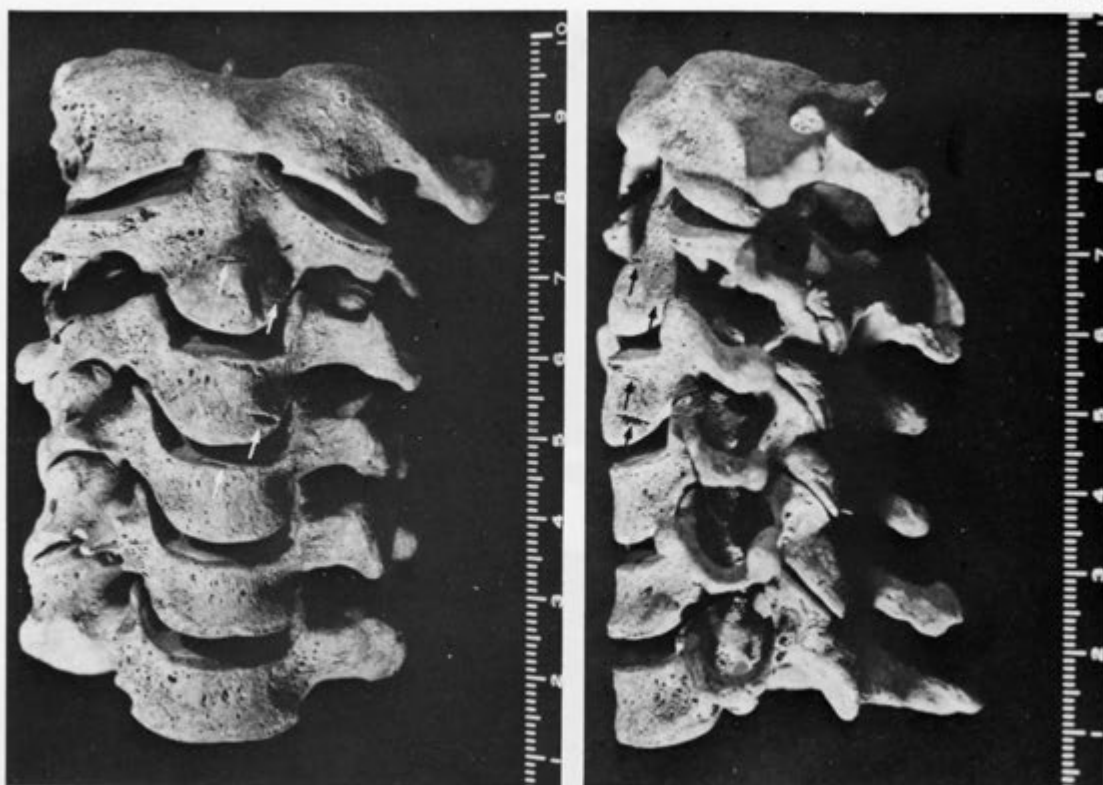
下腿骨の慢性炎症性変化



癒合椎 (第9・10胸椎)



上顎左第1大臼歯に見られた異常摩耗 (X 壺内人骨)
左：口蓋面観，右：遠心面観



頸椎に見られた切創 (X 壘内人骨)
左：前面観，右：左側面観



右大腿骨骨体内側面に見られた切創



1号人骨体肢骨の集積状況



3号人骨出土状況



関節した状態で出土した脊柱。左：Ⅷ壘内人骨，
右：Ⅺ壘内人骨

下山田Ⅱ遺跡出土人骨



下顎骨A上面観



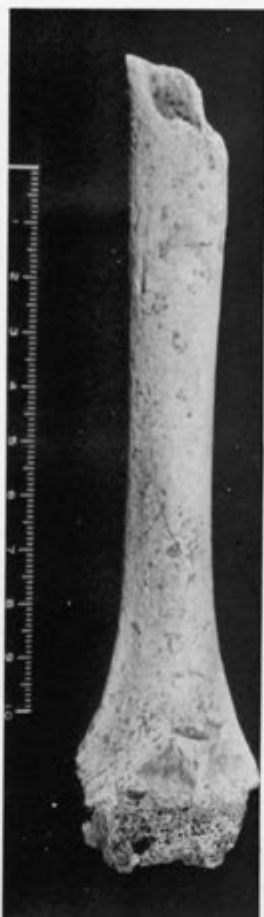
下顎骨B上面観



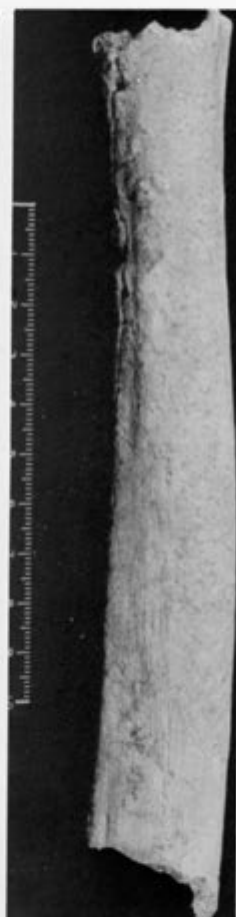
下顎骨A左側面観



下顎骨A両側中切歯の風習抜歯疑い



左上腕骨片 (女性・成人)



右大腿骨片 (男性・成人)

第6章 まとめ

第1地点は、旧期砂丘の末端部分で、ほぼ遺物包含可能な範囲の発掘調査は終了したと判断している。一方、第2地点から第3地点にかけては、旧期砂丘のほぼ中央部から末端の一部に相当している。そのため、遺物を包含する砂丘の頂部は西側の区域外に残され、末端部は今後改良工事の予定される現道の下に残されている。

第1地点の7～11区は、昭和60年度に笠利町が発掘調査を行った下山田遺跡^①の一部であることが明らかとなっており、出土遺物も同一あるいは類似している。今回は、Ⅲ-a・b類土器として取り扱っているが、近年、面縄前庭式土器の出目に関わる土器群として重要視されているものである。したがって、両調査の出土品を検討すると良好なセット関係も把握でき、貴重な資料と言える。

遺構について

確認した遺構は、集石遺構が中心で、第2地点6基、第3地点14基の総数20基である。

第2地点の6基の集石遺構は、この区域で最も多く出土したⅣ類土器に伴うものと思われる。

集石遺構は、いずれも明確な掘り込み等の土壌状の痕跡は認められず、また、用いた礫の数も少なく、その点では、九州本島内の縄文時代早期によく検出される集石遺構とは若干異質な様相が認められる。なお、1号集石遺構は、用いた礫の大小の差が大きく、小礫だけを取り除くと大型の礫が炉的構造に配置されており、地床炉的な可能性が高いと思われる。

第3地点の14基の集石遺構のうち、3号・4号集石遺構は、サンゴ塊を主体に集めたもので他に類例はなく特異なものである。3号遺構は、固結した砂層を土壌状に掘り込んだ後、土壌内にサンゴ塊を詰め込んでいる。サンゴ塊は、黒色に炭化した部分や赤く変色した部分も認められ、加熱の痕跡は明瞭である。4号遺構は、土壌状の痕跡は認められないが、加熱を受け黒色に変化し、バラバラの小破片に破碎していた。サンゴは、加熱すると破碎する特徴があり、本遺跡の同遺構の性格は興味深く、明らかにすべきと言える。10号集石遺構は、先述したように石床炉の様相が強く、その観点に立つと、11号集石遺構も同様な想定が可能である。また、8号・10号集石遺構には、1個体分の土器が共伴しており、遺構の構造は明確でないが、炉的遺構に備えられていた可能性も否定できない。また、逆に、10号集石遺構と共伴していた512の土器は、特殊な形状を持つものであることも考慮の必要がある。12号集石遺構は、土壌状に掘り込んだ中に、多数の礫と貝殻が混在しており、打製石斧も認められ、意図的に投棄した遺構の可能性が高いと思われる。

以上のように、第3地点における集石遺構の在り方も、ストーンボイル等を想定するこれまでの様相とはやや異なった状況が指摘でき、たとえば、炉的遺構のような定設的構造が主流であった可能性が強く感じられてくる。

土器について

Ⅰ類土器は、曾畑式・曾畑系土器で、南島で発見されるこの種の土器は、器肉が厚いのが一般的で、渡具知東原^②・高又^③・ケジⅠ遺跡^④等で多数出土し、曾畑式土器が流入した後、同地域で独自に展開し変容したものと解される。a類は、その特徴より、移入された可能性が高い。

Ⅱ類土器は、神野B式土器に類似したもので、宇宿貝塚^⑤でも類似したものが出土している。いずれの遺跡でも少量の出土であるが、南島土器編年上今後重要な位置を占める土器である。

Ⅲ類土器については先述したが、神野C式土器の範疇に含まれ、面縄前庭式土器と密接な関係を持つもので近年面縄前庭様式として捉えられている^⑥。屈曲部の蛇行した刻目突帯・半截竹管工具等による二又連点で構成した平行及び菱形の文様を描き、Ⅳ類土器の面縄前庭式土器に比べ、未だ文様構成等が規格化していない状況がうかがえる。また、無文も存在する。Ⅳ類土器は、第2地点の主流をなし、第3地点では他の土器群と分布を異に出土している。総じて器肉は薄く、尖底及び丸底に近い尖底を基本としている。Ⅴ類土器の出土量は少ないが、幅広で背の低い突帯を備え、施文も密で器肉も薄く、器形も頸部での屈曲が弱くなり広口の傾向がみられⅣ類土器とは差異が認められる。突帯上の刻目も沈線による斜位が一般的となる。古我地原貝塚^⑦で多数出土し、独立した形式（仮称古我地原式）として捉えられる可能性がある。Ⅵ・Ⅶ類土器は、ケジ遺跡^⑧や宇宿貝塚で出土し松山式土器と分類している。Ⅵa類は横位の条痕調整を行い、この点では松山式土器の特徴を備えているが、口唇部の施文は独自性が認められる。また、内面に施文したⅥb類やc類、貼り付け突帯に各種の施文を施しているⅦ類土器はその帰属が明らかでなく、今後の検討と資料の増加が必要である。

Ⅷa類は面縄東洞式土器で、b類は押し引きによるa類とは異なり、a類の特徴を残しながらも間のびした押し引きや連続刺突で描かれ、a類ほどの画一化した規則性は認められない。また、b類では、押し引きが間のびすることにより沈線文や凹線文風の文様構成に見えることで、Ⅸ類土器への移行の可能性を示唆している。Ⅸ類土器では、一部に押し引きの痕跡を残すa類、嘉徳Ⅱ式土器を含む沈線文b類、平行沈線によるシンプルなものX類土器としている。

Ⅹ類は嘉徳ⅠA式土器で、文様帯の肥厚化・区画文間に連続刺突を充填するという共通性がみられ、バラエティーに富む文様構成、口縁部の形状も個性に富んでいる。518・521・570の共伴は特に注目できる。XⅣ類土器は入念にナデた器面に区画文だけを描いたものでその特徴からⅪ類土器との近似がみられる。XⅡ類は神野D式土器、XⅢ類土器は瘤状突起を縦位に持つもので、神野貝塚や嘉徳遺跡^⑨で知られ、伊波式土器との接触が認められるものである。

その他少量であるが、口唇内面に貼り付け突帯を持つXⅤ類土器もある。一方、胴部に三角突帯を持つXⅥ類やXⅧ～XⅨ類等は兼久式土器との関係が知られている^⑩。また、XⅦ類土器と類似したものが具志堅貝塚^⑪、長浜金久第Ⅲ遺跡^⑫等で出土し、沖縄後期土器、弥生系土器との関係が知られている。

今回の調査では、Ⅴ類土器の抽出、Ⅷ類からⅨa類への移行、また、押し引き→間のび押し引き→連続刺突への可能性も指摘できそうである。また、Ⅸ・Ⅺ類土器等では各個体毎に文様が異なった可能性もあり、残された部分の調査を待つて再度検討する必要がある。

尖底及び丸底に近い尖底を主体とする面縄前庭様式と、平底を中心とする面縄東洞・嘉徳系土器、兼久式土器との関係が指摘される土器群が出土し、特に前二者が構成の中心であった。

最後に、本遺跡の大きな特徴として嘉徳ⅠB式が出土していないことが指摘できる。本遺跡と類似した構成は、嘉徳遺跡・宇宿・神野・古我地原貝塚でも認められ、一方、嘉徳ⅠB式土器を単純に出土した遺跡に長浜金久第Ⅱ遺跡があり、嘉徳ⅠB式土器が独立して存在した可能

性が高くなってきている。

石器について

今回出土した石器で注目されるのは、叩石・磨石・凹石の多いことである。

叩石は、長さ10～15cm程の円礫を素材に、上下端を作業面として用い、ハンマーとしての機能を果たしている。また、形態的にも類似性が認められ、正面形は長楕円形を呈している。磨石と凹石は独立した機能を持つものよりも、それらが組み合わせられたものが多く、中には叩石・磨石・凹石の3機能を全て備えたものもある。この全ての機能を持つものの中で、特に注目されるのは、石鱗状の正面形を持ち、表裏の平坦面が磨石面、その中央部が凹石、他の側縁部を叩石として使用したものの存在であり、これらでは、素材の持つ6面全てが使用され規格化された形態が認められる。このように、叩石・磨石・凹石が大量に出土した遺跡に宇宿貝塚（本遺跡とほぼ同時期）があり、同じように3機能を持つものが出土している。したがって、この時期の定形的な石器の可能性もある。

また、この時期の特徴としては、石斧を大量に使用していることが知られている（宇宿貝塚・嘉徳遺跡等）が、本遺跡まむしろ少ないと言える。

磨製石斧は、刃部を入念に研磨し、体部と側縁部の研磨も入念で、その角度も強く、明瞭な稜線が残されている。磨製及び局部磨製石斧の残存状況は悪い。破損率が高く完形品は無く、破損品だけの検出である。素材は主に輝緑岩である。

101の打製石斧は、12号集石遺構に多数の礫と共に検出したもので破棄されたと解される。

102は円盤状石器、104は剥片石器と捉えたものである。これに類似した石器を、嘉徳遺跡では“円形石斧”として捉え、螺蓋製貝斧との関連を前提に南島特有の石器であるとしている。一方、岸本義彦¹³⁾は、九州一円に分布する円盤形石器の系統で捉えられるとの見解を示している。その後、乗畑光博¹⁴⁾は、中町馬場遺跡出土の類例の石器を剥片石器A・Bとして取り扱い、特に片面に礫皮面を残す凸版状のもの（剥片石器A）に触れ、その使用痕等より剥離面（平坦面）を下位に用いたもので、スクレイパーの機能を想定した考え方を示している。この中町馬場遺跡出土と同様の形状を持つ石器が、ケジI遺跡の第2層（面縄前庭式土器）で出土し、ここでも剥離した平坦面を下位に用いている。転石の輝緑岩を用い、凸面の礫皮面はローリング作用により自然に磨耗され、剥離面には、剥脱した使用痕や磨耗痕が残されている。したがって、形状・使用痕の在り方等より極めて近似した石器と言える。今回出土した102は、その形態・作出方法よりいわゆる円盤形石器と認定し、104は円盤形石器及び円形石斧から乗畑の指摘するように分離して捉えることが適していると考えられる。また104の剥片石器との名称は、今後、よりの確な名称が与えられるものと思われる。なおこの剥片石器は、螺蓋製貝斧の形状に極めて類似していることが指摘される。

チャートや黒曜石を素材とした、石核や剥片及び剥片石器の存在も注目される。高又遺跡や朝仁天川遺跡¹⁵⁾等で、剥片や石核等が検出され、それらから剥片剥離技術の存在が予想されていた。その後、ケジI遺跡では、各種の不定形剥片を剥出する石核の存在が明らかとなり、尖頭器状石器・搔器・削器等の石器類も検出され、南島に於ける剥片石器の存在が明確なものとなってきた。今回の出土器は、それらをさらに裏付けるもので、石錐・搔器・楔形石器等の定形

石器の存在が認められ、また、13の石核に見られるように、一定の剥片剥離技術が認められるさらに、黒曜石の石核15と、おそらくこの種の石核から剥出したと思われる剥片8～11の資料は特に注目される。素材となった黒曜石が島外からの持ち込みであることは、南島に供給源がないことから明らかである。なお、剥片から観察すると、打面調整等は行われず、作業の進行に伴い、打点の転位を随時行う手法が存在していた可能性が高い。

貝・骨製品について

貝製品は、利器と垂飾品とに分けられる。

利器としては、スイジガイの突起部を用いたもの、ヤコウガイやアンボンクロザメガイ等を用いた各種の容器、螺蓋製貝斧等である。スイジガイ製利器では、ノミ状の加工は1番突起^⑩、刺突具状の鋭利な加工は主に2番突起の利用が多い傾向にある。螺蓋製貝斧^⑪については、先述した理解に立ち、同名称を踏襲している。なお、180点程のうち、67の1点だけに、腹面の左側に削痕状の線条痕が残されていた。その他、用途、名称を明らかにし得ないものもあった。74は、シャコガイを研磨したもので、シャコガイボールと呼ばれるものと同一と思われる。

垂飾品も多彩で、イモガイビード、三角形孔有垂飾品等のネックレス、貝輪等のブレスレット、イモガイ底部製垂飾品やその他の有孔製品が見られる。

骨製品は、いわゆる利器が多く、垂飾品は3点程である。骨鏃・骨製尖頭器の狩猟・漁撈具、骨針・ヘラ状製品等の工具等が見られる。132・133は海獣骨を素材としたもので、抉り痕や線刻が施された刀形骨製品で、草野貝塚でも類似品が出土しており、注目すべき資料と言える。130はハリセンボンの顎骨を利用したもので、石原貝塚からも全く同一の小型品が出土しているとのことで、その作業における共通性は使用方法を考える上でも興味深い。

「註」

- ① 中山清美・繁昌正幸他「下山田遺跡」『笠利町文化財報告書8』笠利町教育委員会1986
- ② 高宮廣衛他「渡具知東原遺跡」『読谷村文化財調査報告第3集』読谷村教育委員会1977
- ③ 中村愿他「笠利町高又遺跡」『笠利町文化財報告書2』笠利町教育委員会1978
- ④ 長野真一他「ケジⅠ・Ⅲ遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書38』鹿児島県教育委員会1986
- ⑤ 河口貞徳他「宇宿貝塚」『笠利町文化財報告書』笠利町教育委員会1979
- ⑥ 沖縄国際大学文学部考古学研究室「沖国大考古学8号・沖国大考古学9号」1686、1987
- ⑦ 島袋洋・島弘他「古我地原貝塚」『沖縄県文化財調査報告書84』沖縄県教育委員会1987
- ⑧ 白木原和美他「ケジ遺跡・コピロ遺跡・辺留窪遺跡」『笠利町文化財報告No.6』笠利町教育委員会1983
- ⑨ 河口貞徳他「嘉徳遺跡」『瀬戸内町文化財報告書』瀬戸内町教育委員会1975
- ⑩ a 弥栄久志他「長浜金久遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32』鹿児島県教育委員会1985
b 立神次郎他「泉川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書39』鹿児島県教育委員会1986
- ⑪ 岸本義彦他「具志堅貝塚」『本部町文化財調査報告書第3集』沖縄県本部町教育委員会1986
- ⑫ 旭慶男他「長浜金久遺跡(第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡)」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書42』鹿児島県教育委員会1987
- ⑬ 岸本義彦「九州における所謂円盤形石器について」『花綵創刊号』沖縄国際大学考古学研究会O・B会1979
- ⑭ 柴畑光博「中町馬場遺跡出土の石器について—第4層出土の石器にみる諸生業活動—」『鹿大考古—第3号』鹿児島大学法文学部考古学研究室1985
- ⑮ 宮田栄二他「朝仁天川遺跡」『名瀬市文化財調査報告』名瀬市教育委員会1984
- ⑯ 上原静「いわゆる南島出土の貝製利器について」『南島考古No.7』沖縄考古学会1981
- ⑰ 三島格「螺蓋製貝斧」『賀川光夫先生還暦記念論集』1982

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(45)

竜郷一新奄美空港線の改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

下山田Ⅱ遺跡
和野トフル墓

発行日 昭和63年3月
発行 鹿児島県教育委員会
鹿児島市山下町14-50
印刷 中央印刷株式会社
鹿児島市春日町12-16